

---

**【web版】ブチ切れ令嬢は報復を誓いました。～魔導  
書ので祖国を叩き潰します～**

---

はぐれメタボ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【Web版】ブチ切れ令嬢は報復を誓いました。〈魔導書の力で祖国を叩き潰します〉

### 【Nコード】

N6981GN

### 【作者名】

はぐれメタボ

### 【あらすじ】

【HJ小説大賞2021前期】受賞。  
h jノベルス様より発売中。またコミックファイアにて、おおのいも先生によるコミカライズも連載中です。

公爵令嬢、エリザベートは物心ついた時から未来の国母として努力して来た。

婚約者である王子のミスフォローし、父である公爵の仕事を手伝い、義父となる国王を陰から支えて来た。

そんなある日、父や国王が不在の折、何を思ったか王子はエリザベートに婚約破棄を告げた。

そして、ついにブチ切れたエリザベートはずっと隠していた本当の力【七つの魔導書】を手に祖国への報復を誓うのだった。

**婚約者（前書き）**

新連載始めました。

— ( — )

よろしく願います。

## 婚約者

東方にあると伝え聞く島国の言葉ならば『手前味噌を並べる』と評されるだろうことだが、私は大変優秀な人間である。

公爵家という王政国家における貴族制度のほぼ頂点の家柄に加えて、輝くような銀髪に大海を映し込んだような瞳、雪原に降り注ぐ陽光のような肌と、100人の内100人が美しいと認めるだろう容姿。

勉強、作法、武道、魔術に至るまで、神々の寵愛を一身に受けたと言われても『さもありなん』と納得するしかないほどの才覚を持つ才媛。

そんな私は物心つくよりも前から同い年の王太子殿下の婚約者として、将来の国母となることが決められていた。

そのことに不満は無い。

貴族である私は、その特権に浴するに足る者の責務として臣民の幸福と平穩の為に人生を捧げる覚悟があった。

この日まで。

「エリザベート。貴様の悪行の数々、もはや容認することは叶わない！」

王家お抱えの楽団が優美な楽曲を奏でる夜。

王宮の一角に位置するダンスホールに、怒りに震える男の音が楽器の音色を遮り、周囲に静寂を作り出していた。

静寂は次第に水面にできた波紋のように広がり、数秒後にはダンスホールに居る貴人の全ての視線が、男と私……エリザベート・レイストンへと注がれる。

私はその視線を不愉快に思いながらも、それを微塵も感じさせることなく、突然私を糾弾し始めた男……私の婚約者であるハルドリア王国の王太子、フリード殿下に諭すように話しかけた。

「フリード様、此処は他国からも多くのお客様をお招きしている場、そのようなお戯れはお控えください」

今日は建国の記念日である。

パーティには周辺諸国の高位貴族や高官などが数多く招待されている。

本来なら建国の記念日のパーティの主催者は当然国王陛下なのだが、国王陛下は数ヶ月前に発生したダンジョンスタンピードによる魔物災害に関する会合で国を空けている。

そんな中で主催者である国王陛下の代理である王太子が突如婚約者を糾弾し始めたのだ。

これはスキャンダルと言うのも生易しいほどの醜態だ。  
フリード殿下の真意の程はともかく、この場は穩便に収めなければならぬ。

「さあフリード様、冗談はその辺にして1曲踊って……」

凍りついた場を取り繕うため、笑顔を浮かべながらフリード殿下に差し出した私の手を取ったのは彼の側に控えていた騎士団長の息子ロベルト・アーティだった。

「何を……」

言いかけた時、ロベルトは私の腕を捻り上げその場に組み伏せた。

「……っ」

「エリザベート、貴様がシルビイに行なった悪行の数々は聞いていた。

今まではシルビイが庇っていたので大目に見ていたが、先日のごとは看過できない」

フリード殿下の言葉に私の視線は彼の背後で複数の貴族子息に守られるように立つ少女に向いた。

シルビア・ロックワイト嬢。

ロックワイト男爵家の令嬢である。

しかし、彼女はロックワイト男爵の庶子であり、最近になって男爵家に引き取られた少女だ。

年齢は私やフリード殿下の1つ下で、何かと殿方との距離が近く、貴族令嬢達からは煙たがられていたが、その齒に衣着せぬ言動が新鮮に映るのか多くの殿方達が彼女の虜となっていた。

フリード殿下やロベルトもその1人だ。

私としてはフリード殿下が誰を第2王妃に据えようと、愛人として困おうと構わなかった。

より多くの子を成すことも王族としての仕事なのだから。

だが、当然そこには秩序というものが必要だ。

次代の王位争いは国が割れる原因になるだろうし、王と関係を持つのならそれに相応しい作法や人格が必要だ。

私は過去に何度か彼女にそれを伝え、多数の殿方と親しくするのは弁えるべきだと諭したはずだが、どうやらそれは伝わらなかったようだ。

「……………先日のこと、とは何のことでしょうか？」

「このような仕打ちを受けるような覚えはありませんよ？」

私はあくまでも事を荒立てないように尋ねた。

しかし、フリード殿下はその言葉を聞いて激昂する。

「貴様！言つに事欠いてそのような戯言を！」

貴様が先日、醜い嫉妬に駆られシルビイを害そうと階段から突き落としたりしない！」

「……………落ち着いてくださいフリード様、私はそのようなことは

「黙れ！全てはシルビイから聞いている。

シルビイは優しいからな。

ずっとお前を庇っていた。

だが、もう我慢の限界だ！

衛兵！ この女を地下牢へ連れていけ！」

フリード殿下の言葉に衛兵達が近づいてくるが、その顔には戸惑いを浮かべている。



「どうした！さっさと連行しろ！」

「はっ……し、しかし……」

衛兵達は困った様な顔で私とフリード殿下を交互に見た。

当然だろう。

普段からロクに仕事もせずに遊び歩いている王太子と、国王陛下や父様の手伝いをしながらフリード殿下の起こした問題のフォローをしている私。

当然、衛兵である彼らとの付き合いだって私の方が深い。

しかし、これ以上この場を荒立てるのは得策ではないわね。

「構いませんわ」

「え？」

「貴方は衛兵、殿下の命令に背くことはできないでしょう。さあ、行きますわよ」

「は、はい、失礼致します」

衛兵は私の手をロベルトから受け取ると地下牢に向かって歩き始めた。

背後のパーティ会場から私との婚約を破棄して、新たにシルビア嬢と婚約すると高らかに宣言するフリード殿下の声が聞こえてくる。

全く、こんな大問題を起こしていったいどう後始末するつもりなのだけか。

## 婚約者（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 覚醒者

「こ、この様な場所に……誠に申し訳ありません、エリザベート様」「フリード様の命令なのですから貴方が気に病む必要は有りませんわ。」

それに国王陛下やお父様に連絡は行っているのでしょうか。

国王陛下がお帰りになればどうとでも出来ますわ」

私はひたすら恐縮する衛兵達を帰してジメジメとした地下牢の力ビ臭い部屋の椅子に腰を下ろした。

「はあ、よりもよってフリード様に意見出来る様な重鎮が全て国を出ている時にこの様な………いえ、だからこそ実行したのかしら?。」

真偽はともかく、1度噂が立つとそれは傷となるのが貴族の世界。私を排除するのなら確かにコレは好機と言えるかも知れない。

まあ、流石にこの話を聞いたら国王陛下やお父様達も直ぐに帰って来てくれるでしょう。

エリザベートの首には魔封じの枷が付けられている。

コレはこの国で開発された罪人につけられる魔法を封じる特殊な枷で、魔力の高いエリザベートを拘束する為に王太子の命令でつけられた物だ。

「やれやれ」

その首輪をコツコツと叩きながらエリザベートは深いため息を吐

き出したのだった。

「何だと!!!」

豪華な調度品で揃えられた1室、今回の会議でホストとなった国から王国にあてがわれている屋敷の一角だ。

「その話は真か!!!」

「は、はい」

深々と頭を下げる伝令兵にギリリと奥歯を噛み締めて憤怒の形相を見せるのはハルドリア王国国王、ブラート・ハルドリアである。ブラート王はかつて戦場で『雷神』と呼ばれ、恐れられた武人だった。

そんな男の怒気を受けて伝令兵はガチガチと歯を震わせていた。国王の隣の席に腰を下ろす壮年の男が見かねて声を掛ける。

「落ち着いて下さい陛下」

「む、そうだな。お主に怒った所でせんなき事、許せ。

ここまでご苦労だった。下がって休め」

「はっ!」

伝令兵が退室した後、国王は改めて頭を抱えた。

「全くあの馬鹿は次から次へと問題を起こしおって……」

「フリード殿下にも困ったものですね」

壮年の男……ハルドリア王国の宰相を務めるジーク・レイストン公爵も苦虫を噛み潰した様な顔を浮かべる。

彼らが国際会議への出席の為に国を留守にしていた間に、なんと王太子が婚約者を投獄して勝手に男爵家の娘と婚約を宣言してしまったと連絡が来たのだ。

本来なら国王か宰相、どちらかが国に残る予定であったのだが、様々な事情が重なり国王代理を王太子に任じなければならぬ事態となっていたのである。

「まあ、投獄されたと言ってもエリザベートですから」

「ふう、そうだな。お前の娘なら自力でなんとでも出来るだろう」

「ええ、あの子は優秀ですから」

「ああ、エリザベートに任せておけば問題無いだろう」

2人はエリザベートの心配などはする事なく、フリードの愚かな行いを愚痴りながらワインを傾けるのだった。

そんな2人が居る部屋のすぐ側に控えているメイドがいつの間にか姿を消した事に気付かぬまま。

そして、翌日以降もそのメイドの姿を見た者はいないが、何故かそれは誰の話題にもあがらなかった。

エリザベートが地下牢に幽閉されてから1ヶ月程が経とうとして

いた。

地下牢の粗末な机の上はエリザベートが持つて来させた税の書類や国の運営に関わる資料、参考用の書籍で山積みとなっていた。

あの日から今まで、フリード殿下がここに来ることは有りませんでしたね。

しかし、国の重要書類がこんな所で処理されているのに心配にないはしないのかしら？

エリザベートは手元の書類をヒラヒラさせながらフリードの無責任さに呆れていた。

「今までも決して優秀とは言い難いフリード殿下でしたが、まさか此処までとは……」

エリザベートが誰にもなく咳く声が意味の成さない音となって地下牢に小さく響くのだった。

「あら？」

数時間後、ふと首を傾げたエリザベートは辺りを見回して何か納得する様に頷いた後、こんな地下牢の囚人に相応しくない優雅な動きで立ち上がった。

「ちょっとよろしいかしら？」

「はい、如何なさいましたか？」

地下牢の見張り番の衛兵が恭しく傳き尋ねる。

彼としても私の様な者を閉じ込めるのは本意では無いのだろう。

しかし、王太子よりも上位の命令を出せる者がいない以上、従うしか無いのが臣下というものだ。

「ええ、ちょっとこっちに来て頂戴」

「は、はい？」

エリザベートの言葉通り、衛兵は牢のすぐ前までやって来る。

当然、何の警戒もない。

故に彼は反応する事も出来なかった。

パチン

牢の隙間から伸ばされた右手。

その指が音を鳴らすと同時に衛兵の目から意志の光が消え去り、トロンとした夢でも見ているかの様な表情へと変わる。

闇属性魔法の1つ【催眠】ヒュプソスである。

しかし、この魔法は人並みの魔力が有れば簡単に抵抗出来る程度の弱い魔法だ。

では何故、衛兵はこんなにも簡単に魔法にかかってしまったのか。それは彼があまりにも油断していたからに他ならない。

抵抗する様子もなく、寧ろ自分たち衛兵の立場を気遣う様な令嬢。その上魔力を封じる枷をかけられている。

そして決定的なのはエリザベート・レイストンの魔力は水属性、それも氷に特化していると言うのは有名な話だからだ。

この衛兵も実際に騎士達に混じり訓練でエリザベートが氷の魔法を自在に操るのを目にしたことがあった。

魔法は適性を持つ属性魔法と無属性魔法しか扱えない。

なのでエリザベートから闇属性魔法をかけられるなど考えの端にすら無かったのである。

「貴方は座っていないさい。そして今ここで見た事は全て忘れるのよ」  
「……はい……畏まりました」

衛兵はフラフラと歩き、椅子に腰を下ろすとポーッと虚空を見つめ始めた。

「さて、もう良いわよ」

私がそう声を掛けると、牢の前の空間が不自然に歪み、メイド服に身を包んだ私と同年代の女性が姿を現した。

「お手数お掛けしました、お嬢様」  
「気にする事はないわ、ミレイ」

ミレイは私の腹心だ。

今回の件で国王陛下とお父様がどう動くのか確かめる為、伝令兵の後を追う様に出立していたはずだ。

「それで、どうなったのかしら？」  
「それが……」

「何ですって……」

ミレイの話聞いて私は珍しく激怒していた。



彼らは王太子がこれ程の問題を起こした事を知りながら、全ての問題を私に丸投げしようとしているのだ。

思えば最近はそのような事が多い。

フリード殿下が問題を起こす度に呆れながら『エリザベート、始末を頼む』の一言で済ませていた。

お父様もそうだ。

国の面倒事が持ち上がる度に『エリザベートの意見を聞かせてくれ』と言って私の仕事を増やして行く。

苛立つ私を気遣う様にミレイが話を続ける。

「更に私が戻った後、市井を調査したのですが、お嬢様の名誉を落とす様な噂が広まっています」

「噂？」

「はい、『嫉妬に狂って男爵令嬢を暗殺しようとした』とか『王子を差し置いて政に口を出し、国を乗っ取ろうとしている』などの根も葉もない話が出回っています」

「……………出所は？」

「手の者を使って調べた所、いくつかの商人と貴族に行き着きました。」

「いずれもあのクズ……………失礼、王太子殿下との繋がりの有る者たちです」

「……………そう。どの程度広がっているの？」

「残念ながら最早完全に消し去るのは不可能でしょう。」

無論、お嬢様と関わりのある商人や貴族には鼻で笑い飛ばされる様な話ですが、民の中には信じている者も少なくない様です」

「そう」

「それと、お嬢様の商会の件なのですが……………」

私は商会長として商会も経営している。

貧民救済の為に国王陛下に幾つかの政策を上申した際、予算の問題に躓いた事を切っ掛けに、私個人で動かせる資金を得る為に商會を立ち上げたのが12になって直ぐくらいの時分だ。

今では王国経済界の中でも上位に喰い込む程の規模となり、雇用の創出や慈善事業を通じて王国の貧富の差を狭める一助となっている。

ミレイが言う商會とはその事だろう。

「お嬢様は国家反逆を企てた罪人で有るとして王太子殿下は商會の強制捜査、また自分の息のかかった商人や貴族を幹部に据える様に圧力を掛けています」

「馬鹿な！私の商會は商會長こそ私だけれど、出資金を複数に分散させている共同出資商會よ！

たとえ私が罪人として裁かれたとしても商會は私を追放して終わりのはず。

そこに経営などにまで国が口を出す法的根拠なんて有るの？」

「いえ、法的根拠は有りません。

ですが王太子殿下は権力をチラつかせて強行しようとしている様です。

商會の幹部の方々は抵抗している様ですが、あまり良い状態では有りません」

ギリ

私の奥歯が後を立てる。

ミレイは表情に影を作り、怒りを押し殺した声色で少し躊躇いがちに私に問い掛けた。

「……僭越ながら……お嬢様は何故そこまで国に尽くされるのでしょうか？」

「……何故って、私は貴族だから……」

「これ程の仕打ちを受けても……ですか？」

ミレイは悔しさに奥歯を噛み締めながら絞り出す様に私を諭す。

「お嬢様……私は……家が没落し、後は奴隷か物乞いか、と言う状況であった私を救って頂き、恐れ多くも腹心と呼んで下さるお嬢様を敬愛しております」

「……ミレイ？」

「私は……」

「」

突然叫んだミレイに驚いた私は慌てて地下牢全体に【遮音】サイレントの魔法を掛ける。

「お嬢様を蔑ろにしておきながら都合の良い時に便利な道具の様に扱き使う貴族共が憎い！」

常に民草の為に身を粉にして働いて来たお嬢様を、下らない噂一つで裏切った民衆が憎い！

お嬢様に散々頼っておきながら！こんな状況を！心配すらない国王が！公爵が！

……そして何より！あのクズが許せない！！！」

ミレイの慟哭が地下牢の冷え切った空気を震わせる。

普段、寡黙で影の様に寄り添ってくれる従者の感情の爆発に呆気に取られていた私だったが、地下牢に反響する怒りの残滓が薄くなつて行くにつれて、ミレイの言葉が染み込む様に胸の中へと吸い込

まれ、私の中に封じ込められ、自身ですら気付いていなかったマグマの様に煮えたぎる感情の存在を自覚させた。

「……………そう……………よね」

ミレイの怒りに共鳴する様に湧き上がった感情は、手足が痺れる様な震えと、頭の先がチリチリする様な熱を持って私の全身に広がって行った。

さっきまでの怒りなど、ただの感情の細波に過ぎなかったと自覚する。

「……………何で……………何で私はっ!!」

私の拳が地下牢の石壁に叩き付けられ、轟音と共に大きな亀裂を作る。

それによって半ば暴走気味の魔力が漏れ出している事に気が付いた私は深呼吸を繰り返して溢れ返る魔力を鎮める。

「ふう〜……………ありがとうミレイ。」

私、目が覚めたわ」

「お嬢様……………」

「国を出ましよう」

「……………国を出て……………どうされるのですか？」

私は口角を上げて心からの笑みを浮かべる。

自覚したばかりの怒りを静かに精錬しながらミレイに告げる。

世界に宣言する様に。

自らに誓う様に。

言葉を紡ぐ。

「報復よ」

## 覚醒者（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 脱走者

祖国に報復する。」

そう決めたからには直ぐさま行動に移すべきだろう。

私は国を捨てる為にミレイにいくつかの指示を出して準備をお願いする。

「以上の件の根回しをお願い」

「畏まりました。」

それと、商会の件は如何いたしますか？」

「そうね……」

フリード殿下……あんな奴はフリードで十分ね。

フリードは私の商会の幹部を自分の息のかかった者と入れ替えて行き、最終的には商会の実権を取ろうとしているのでしょう。

なら………。

「構わないわ。」

幹部の交代を受け入れる様に指示して頂戴。

私を支持する幹部は解雇されたり左遷されるでしょうから随時ルートに分けて他国に出国させて、時間を置いてから集結して貰うわ。

主要な経営メンバーと有能な技術者は優先して引き抜いて。

外で私の基盤が整ったらまた働いて貰いましょう」

「畏まりました、その様に指示を出します」

「それと、商会に残る者に手の者を紛れさせて置いてね」

「はい、その手の事に長けた者を数名選定致します」

「決行は5日後、頼んだわよミレイ」

「お任せ下さい。お嬢様の新たな門出に女神の祝福があらん事を」  
ミレイは先程の激昂が嘘の様に淡々と指示を了解し、深々と頭を下げた。

「……………」

「どうしたの、ミレイ？」

「はい、僭越ながら申し上げますと……………そちらの壁をどうにかされた方がよろしいかと」

「……………ああ」

そうでした。

どうやら私も自らの決断に思っていたよりも興奮している様だ。

準備が整うまでの数日、何事もなく過ごすべきなのだ。

先程、魔力を込めた拳で砕いた壁を誤魔化さなければ不味い。

「仕方ないわ。直しておきましょう」

私は体内の魔力を全力で活性化させ、その魔力を左手に集める。

この世界に生きる全ての生物は体内に魔力を持ち、その魔力を理性と理論で以て制御する方法を人は魔法と名付けた。

そして、魔力を操る者が最後に行き着く到達点、それが『神器』の生成である。

自らに宿る魔力を物質化し、様々な能力を持つ道具を具現化するのである。



神器の形は人によって変わる。生成者の趣味嗜好、人格、経験などによって発現する能力や形状が違うのだが、殆どの場合それは武器や防具の形を取る。

それは、神器の生成に至る程までに魔力を鍛える人間は、騎士や冒険者など戦いを生業とする者が殆どだからである。

それ以外では一部のネジが飛んだ研究者や幼い頃から鍛錬を積んだ才能ある貴族くらいなものだろう。

つまり、神器とは一般的に戦力に分類される能力なのである。

だが、当然例外は存在する。

基本的に戦力である神器だが、稀に戦闘とは関係ない能力が発現する者も存在する。

私の神器【英知の魔導書】グリモア・ウイズドムもその例外の1つだ。

本の形をしたこの神器の能力は、私が手にした書籍や書類、見聞きした情報を記録すると言う能力である……………と、思われている。

24

私は神器を習得してから誰にも本当の能力を教えた事が無いのだ。情報の記録など本当の神器の能力のほんの一部でしかない。

それぞれ強力な効果を持つ7冊の魔導書【七つの魔導書】グリモア・セブンスこそが私の本当の神器なのである。

自分の切り札を隠すなんて事は貴族社会を生き抜く基本中の基本なのだ。

肉親である父…………いや、これからは公爵と呼ぼうか。あんな奴はもう他人だ。

肉親である公爵にすら私は本当の神器を隠し、最も信頼するミレイにすら7つの能力の内4つまでしか教えてはいない。

ふむ、改めて考えると私は無意識の内にこの国の人間を信用していなかったのかも知れないわね。

「神器【暴食の魔導書】」

私の左手に集められた魔力が赤い魔導書へと変わる。

【七つの魔導書】の1つ、【暴食の魔導書】である。

この魔導書の能力は『魔法の記録』。

他人の魔法を記録する事で、適性のない魔法を扱う事が出来る強力な神器だ。

「【石壁】」

魔導書の能力によって地属性魔法を発動した私は破壊された地下牢の石壁を修復していった。

「ふう、まあこんなものでしょう」

破壊の跡を隠蔽した私はミレイが地下牢を出たのを確認し、見張りの衛兵の【催眠】を解除した。

「？」

曖昧な記憶にポカンとしながら首を傾げる衛兵を横目に、私はこの国を叩きのめすプランを考えるのだった。

「ふう、ようやく帰って来れたな」

「そうですね。まあ、政務の方はエリザベートがいたので特に問題はないでしょうが……」

「はっはっは、余が執政するよりもスムーズに事が進んで文官共が喜んでいるのではないか？」

武人肌のブライト王は自虐を口にしてガハハと豪快に笑った。

「それで、フリードはどうしたのだ？」

どうせまたエリザベートに説教でもされて腐っているのだろう？」

ブライト王の間に留守を預かっていた文官の1人は止め処なく吹き出る汗を拭いながら報告する。

「そ、それが……フリード殿下はロックイート男爵令嬢と共に……その……直轄領のし、視察へと出ております」

直轄領の視察とはこの文官なりのオブライトに包んだ表現である。その実情はただの旅行だ。

「なに 我々が今日帰城する事は伝えていたはずであろう！エリザベートは何をしている！」

フリードのスケジュール管理はあやつの仕事であろう！」

「そ、それがエリザベート様はフリード様の命で地下牢に……」

「な、何だと まだ地下牢から出ていないのか！」

コレには宰相であるジークも驚きの声を上げた。

それは娘が地下牢で1ヶ月以上も幽閉された事への憤りではなく、1ヶ月以上もの時間がありながらエリザベートが地下牢から脱していなかった事に対する驚きだった。

「エリザベートの所へ案内せよ！」

ブラート王はジークを引き連れて慌ただしく地下牢へと向かった。

地下牢には戸惑いを浮かべた衛兵が1人、萎縮しつつもブラート王を迎えた。

ブラート王とて、この衛兵に責任が無い事くらいは理解しており、不機嫌そうにしながらも咎めたりはしない。

「それで、エリザベートは何処だ」

「は、はい、あちらの牢にいらっしゃるのですが……………」  
「どうした？」

齒切れの悪い衛兵の言葉にジークが尋ねる。

ジークは宰相であり、またエリザベートの父、衛兵は実に申し訳なさそうに現状を報告した。

「そ、それが…………… エリザベート様は3日前から椅子に座られたきり、動かれないのです。

エリザベート様のご指示でお持ちしている書類にも目を通される事なく、お食事すら手をつけられていないのです」

「なに」

ブラート王達がエリザベートの牢の前に行くと、こちらに背を向けたエリザベートが椅子に腰を下ろしている。

ブラート王とジークが声を掛けるがエリザベートは何の反応も返さない。

もう3日も食事をしていないと聞いたが、ここから見る限り肌色などは健康そのものに見える。

「エリザベート、返事をせんか！」

おい、牢を開ける」

「も、申し訳ありません。エリザベート様の牢の鍵はフリード様が持ち出されておりまして……………」

「ちっ！」

ブライト王は苛立ち気に舌打ちすると、右手を掲げた。

空気を震わせる程の魔力が渦を巻き、ブライト王の手に凝縮されるとバチバチと帯電した肉厚な大剣となる。

「神器【グラザイミエーチ雷神の剣】」

ふん、とブライト王が大剣を振るうと稲妻の様な轟音が鳴り響き女性の腕程の太い鉄格子が熱したナイフでバターを切る様に軽く斬り裂かれた。

神器を魔力へと戻したブライト王とジークはこんな騒ぎにも微動だにしないエリザベートに近づいた。

「エリザベート」

ジークが娘の肩に手を置く。

「ん、冷たい？」

その瞬間、肩に置かれたジークの掌を中心にエリザベートの身体に罅が走る。

そして、パリンと言う軽い音を残してエリザベートは粉々に砕け散ってしまった。

「な、なんだと」

「コレは【氷人形】アイスドール」

ジークはエリザベートだった氷のかけらを拾い上げて改める。

「エリザベートの魔力が残っていますね。

食事を取らなくなったのが3日前、それからは【氷人形】アイスドールと入れ替わっていた……」

「では、本物のエリザベートは何処に？」

「……………」

「……………」

その疑問にジークと衛兵は答える術を持たなかった。

ブライト王はその儼つい顔を真っ青に変えた。

当然だ。

行政から軍事までこの国の政に深く関わっている彼女が消えたとなると執政の混乱は必至。

その上、エリザベートの神器【英知の魔導書】グリモア・ウィズダムには地図や軍備などの軍事機密や城の禁書庫に眠る秘術書、古代文明の技術が記された古文書などが全て記録されている。

「さ、探せ！直ぐにエリザベートを探すのだ！！！」

## 脱走者（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 訪問者

逃走当日、私は結構住み慣れてきた地下牢で身支度を整えていた。衛兵には既に催眠を掛けている。

「アイストール  
【氷人形】」

魔法を使い椅子に私の姿を模した氷の人形を作り出す。

それなりの魔力を込めたので触れられなければ10日は持つだろう。

3日後、国王や公爵達が帰城するまではバレる事はないだろう。

「あ、コレを忘れる所でしたわ」

私は首に嵌められている魔力封じの枷を外しアイストール【氷人形】に着けておく。

フリードが私の魔法を封じるつもりで着けられた物だけけれど、残念ながら私には効かない。

そもそもこの魔力封じの枷を作ったのは私なのだ。

この城の地下にある禁書庫に納められた古文書を解析して復元した古代の魔法具である。

当然、自分がつけられる可能性も想定して私の魔力を込めれば機能が停止する様に設計段階で細工をしている。

「さて、行きましょう。ミレイ」

「はい」



私はミレイと連れ立って地下牢を抜け出した。

【催眠】<sup>ヒュプノシス</sup>で衛兵から聞き出した話によると、私の牢の鍵はフリードが持ち去ったらしいが、魔法さえ使えば氷で合鍵を作るなんて簡単だ。

牢に鍵をかけ直し、地下牢を後にする。

衛兵の【催眠】<sup>ヒュプノシス</sup>は少しすれば解ける。

地下牢を出た私とミレイは地上に向かう階段を上り廊下へと続く扉の前までやって来た。

此処まで来るのも1ヶ月ぶりか。

胸中にフリードに対する怒りがゾワゾワと蠢くのを感じる。

あの一件以来、私は自分の感情を自覚しやすくなった気がする。

ミレイに言わせれば、感情が豊かになった様に見えるらしい。

「ミレイ」

「はい【幻影】<sup>ミラーージュ</sup>」

ミレイは光属性の魔法適性を持っている。

【幻影】<sup>ミラーージュ</sup>は光を操り姿を偽ったり、消したり出来る光属性魔法だ。

「行きましょう」

姿を消した私達は悠々と王城を通り抜け、簡単に城外へと脱出するのだった。

ルーカス・レブリックは本国へ提出する報告書を書き上げ、ペンを置くと目頭を押さえてギョツと強く目を閉じた。

そうやって疲労感を誤魔化しながら紅茶で喉を潤した。

「はあ、コレでようやく帝国に帰れるな」

ルーカスは現在、子爵家の当主として隣国であるハルドリア王国へ大使として派遣されていた。

ルーカスの祖国であるユーティア帝国は、まだ建国から100年程と言う若い国ではあるが、周辺諸国を属国として傘下に収めながら瞬く間に勢力を拡大して行った強国である。

正面からまともに戦える程の国力を有する国などこの大陸ではハルドリア王国くらいなものだろう。

その王国とも5年前の大きな戦争が痛み分けに終わり、現在では（少なくとも表向きは）友好国として交流している。

ルーカスは前当主である父が事故で急逝した事で、16と言う若さで領地を持たない法衣男爵家を継ぐ事になった経緯を持つ男である。

そして20歳を少し過ぎた頃、突然皇帝に呼び出され、『日頃の働きに対する褒美』と言う取ってつけた様な理由で、子爵への陞爵と王国との国境近くに子爵としては例外的に大きな領地を与えられた。

こう聞けば若き貴族の栄達話に聞こえなくも無いが、その実情は

緊張感の続く王国に対する壁役として、若く大した後ろ盾も無い自分が据え置かれただけに過ぎない事はルーカスにも理解出来ていた。

今回の仕事は帝国大使としてハルドリア王国の建国記念パーティーに出席する事だった。

緩衝地帯の荒野を馬車の揺れで尻を痛め付けながら通り抜け、6日をかけて王都に到着したルーカスは、パーティーの一角でいけ好かない王国貴族と和かに談笑を交わす。

間に飛び交うのは知的で学術的且つ、美しく芸術的に装飾された貴族言葉であるが、内容は子供の喧嘩と変わらない様な悪口と嫌味の応酬である。

父の様な誇りある貴族になる、そんな理想を抱いていた事もある。しかし、貴族家の当主となった今、やっている事と言えばご機嫌伺いや口喧嘩である。

ルーカスがつまらない仕事に溜息をそつと吐き出した時、パーティー会場の中心から騒ぎが起こった。

なんと、王国の王太子が婚約者である公爵家の令嬢を糾弾し、何処の馬の骨とも知れない男爵令嬢と婚約すると言い出したのだ。

(おいおい、バカなのかあの王子は？)

こんな公の場であんな醜態を晒すなんて)

ルーカスの目に映るだけでも王国貴族以外の招待客が王子に嘲笑や軽視の視線を向けているのがよく分かる。

その後も公爵令嬢が王子をフォローしようとするが、聞く耳を持

たない王子は衛兵に婚約者を連行させた後、なんとその場で男爵令嬢との婚約を宣言した。

その一切悪怖れる事もない堂々とした態度に、王国の貴族達は苦虫を噛み締めた様な者、頭を抱える者など様々。

他国からの招待客は王子のスキヤンダルに呆れていたり、笑いを堪えたりしている。

俺もまさかこんな事が起こるとは思っていなかった。

大体、あの令嬢は噂の才媛だろう。

近年の王国の躍進の陰にはいつもあの令嬢の姿があった。

先の戦争でも僅か10歳の彼女の采配で我が帝国にどれ程の被害が出た事が。

そんな鬼札を自ら捨て去るとは、帝国人としては笑いが止まらないな。

そのままお開きになったパーティから、王国に当てがわれている大使館に戻ったルーカスはパーティでの騒動の報告を急いで書き上げる事になるのだった。

それから1ヶ月と少し、ようやく王国での仕事が終わり、明日にも帰国の途に着こうと言う時分。

「ル、ルーカス様」

「ん、どうしたこんな時間に？」

随伴員として連れてきた使用人が慌てて俺の執務室へとやって来た。

「そ、その……お客様が……」

「客だと？そんな約束は無かった筈だが。」

何者だ？」

「そ、それが……」

俺は使用人から来客の名前を聞くと跳び上がる様に立ち上がり、急いで応接室へと向かう。

扉の前で息を整えると扉を開けた。

「お待ちせいたしました、ブライト陛下」

俺が応接室に入ると椅子に座って待っていたハルドリア王国国王ブライト陛下が俺に視線を向けた。

ブライト陛下は護衛も連れず、侍女1人を背後に据えて俺を待っていた。

しかし妙だ。

現在ブライト陛下は近隣で発生した魔物災害についての緊急会合に出席する為、国を空けている筈だ。

確かにそろそろ帰国される予定ではあるが、まだ帰国したとの報告は受けていない。

「な  
」

俺がブライト陛下の意図を読もうと考えを巡らせながら腰を下ろすと、なんとブライト陛下は立ち上がり頭を下げたのだ。

同等の国力を持つ帝国の大使とは言え……いや、同等の国力を持つ帝国の大使だからこそ、決して弱味を見せる訳にはいかない筈なのに、だ。

「先ずはこの様な時間に、この様な方法で面会を求めた事を謝罪いたしますわ」

厳つい武人然としたブライト陛下の口から溢れたのは、まるで鈴を転がしたかの様な可憐な声音だった。

「は？」

「ミレイ」

ブライト陛下がその不気味な程の違和感を感じる声で背後の侍女の名を呼ぶと、侍女は深く一礼し、パンツ軽く手を叩いた。

魔法を使ったか、逆に解除したのか。

別に手を叩く必要などないのだろうが、俺に魔法の事を気付かせる為に敢えて行ったのだろう。

つまり、その魔法がこちらを害する意図で使う物ではない、と言外に示している。

「」

そう考察し、侍女に向けていた視線をブライト陛下に戻すと、俺は再び驚きの声を飲み込むこととなった。

そこにいた筈のブライト陛下の姿は消え、美しく可憐な少女へと変わっていたのだ。

「エ、エリザベート嬢……」

その少女はエリザベート・レイストン。

王国繁栄の裏に居たであろう令嬢。

そして、今は幽閉されている筈の王太子の元婚約者である。

## 訪問者（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## 協力者

私は目の前で口をあんぐりと開けているユーティア帝国大使ルーカス・レブリック子爵に深々と頭を下げて非礼を詫びた。

姿を偽り、身分を偽り、約束も無く隣国の要人に会いに来たのだ。場合によっては正体を表した瞬間、斬りかかれても文句は言えない。

なので、彼の頭が正常に働き始める前に話の主導権を確保する。

「お久しぶりですわ、ルーカス様。

レイストン公爵家のエリザベートですわ」

「え、あ、ああ、お久しぶりです、エリザベート嬢」

「姿を偽って面会を求めた無礼、重ねて謝罪致します。どうかお許しくださいませ」

もう一度しっかりと謝罪しておく。

貴族社会では非を認める事は弱味を見せる事と同義。

もしコレが外交の場であったなら帝国からどんな譲歩を迫られるか分かりません。

なので彼が混乱している内に許しを願う。

そうすれば貴公子として育てられた若い貴族。

申し訳なさそうに気を落とす令嬢に掛ける言葉は決まっている。

「あ、ああ、その……エリザベート嬢の複雑な事情は少しでは有るが察する事が出来ます。お気になさらずに」

「ルーカス様の寛大なお言葉に感謝致しますわ」

コレで彼は私を『許した』。

何も譲歩を引き出す事なく。

もし彼が老獪な貴族であったなら返答を曖昧に、私の謝罪を横に置き、用件から探りを入れようとしてくるでしょうね。

その点で言えばルーカス様はまだ若く、そして甘い。

一度許した以上、今後『この件』を引き合いに出すのは、貴族的に『みつともない事』になるだろう。

私の頭を下げるだけでマイナスがゼロになるなら安いものだ。

コレから先は国を背負うプライドなど必要ないのだから。

「それで、エリザベート嬢。この様な夜更けにどう言ったご用件でしょうか？」

いえ、そもそも貴女は幽閉されている筈では？」

少し落ち着きを取り戻して来たルーカス様。

しかし、自分が私に対するカードを一枚無駄に捨てた事にはまだ気付いていませんね。

私は内心を隠しつつ、僅かな微笑みを浮かべて言った。

「はい、実は私を帝国に亡命させて頂きたいのです」

ルーカス様の動きがピタリと止まる。

当然でしょう。

私は公爵家の令嬢、末端の兵士や下級貴族とは訳が違います。

それも私は国政の中核に深く関わっている。

勿論、公にはされていませんが帝国ならその程度は掴んでいるで

しょう。

「……………そ、それは……………ほ、本気で仰っているのですか？」

「勿論本気ですわ」

「た、確かにあのパーティの場での王太子殿下の行動は……………失礼ながら、少々目に余る物でありましょうが、もう直ぐ国王陛下や貴女のお父様である宰相様もお戻りになられる。

そうすれば問題など無いのでは？」

「はい、確かに国王陛下が戻られれば殿下と件の令嬢との婚約など直ぐ様白紙になり、私との婚約を元に戻すでしょう。」

しかし、私はその無責任さが許せないのです。

もう我慢の限界です。

私は国を出て、そしてこの国に報復する事にしたのです」

「報復」

「はい。ルーカス様は今城下で私の噂が流されている事はご存知でしょうか？」

「それは……………まあ」

「そんな事までされて、すべて水に流して働け、とは随分と虫の良い話だとは思いませんか？」

「……………」

「ですから私は報復するのです。

具体的には……………この国を潰します」

「な」

ルーカス様は今日何度目かも分からない驚きの声を上げる。

「しかし、そんな事をすれば当然民にも大きな影響を与えますよ。貴女は今まで民の為に手を尽くして来た。

本当によろしいのですか？」

「はい。直接の恨みを向けるのは殿下や陛下、後は父や大臣達、そ

れとロベルト辺りでしょうか。

確かに民にも大きな影響を与えるでしょう。

もしかしたら取り返しのつかない被害が出るかも知れません」

「……………」

「ですが……………それが何か問題でしょうか？」

「」

「確かに私は貴族として生まれた義務として民の為に働いて来ました。

しかし、私は裏切られた。

そして、もう貴族ではなくなる私に無条件で民を守る義務など有りません。

勿論、積極的に民を傷付けるつもりは有りませんが守るつもりも有りません」

「そう……………ですか」

少し引き気味のルーカス様にもう一度問いかける。

「それで、私の亡命を認めて頂けるのでしょうか？」

「それは……………」

ルーカス様は顎に手を当て考え込む。

「別に帝国の重鎮として迎えて欲しいと言う訳では有りません。

ルーカス様の領地、レブリック子爵領に匿って頂ければそれで良いのです」

「……………なぜ。なぜ帝国なのですか？」

現在は表面上友好的な帝国と王国ですが水面下では牽制し合っている仮想敵国同士。

どうせなら他の属国やそれこそ海の向こうの別大陸の国へ渡った方が動き易いのでは有りませんか？」

「確かに私が帝国で自由に動くのは難しいでしょうね。ですが、私の目的は逃げる事ではなく、王国に報復する事です」

そこで言葉を切った私は紅茶で喉を潤して続ける。

「ハルドリア王国は強国です。

国王は脳筋ですが、こと戦に関しては天才です。

兵の練度も高く、大臣達をはじめ、上層部は優秀な人間ばかりです。

いくら私でも正面から戦いを挑めば手も足も出ません」

「……………つまり、エリザベート嬢は帝国の戦力を求めていると?」

ルーカス様の目が細められ、その身に纏う魔力が鋭いトゲの様に変わる。

「

私は咄嗟に戦闘態勢を取ろうとするミレイを片手で制してルーカス様に微笑み掛ける。

「確かに私は帝国を利用しようと考えていますわ。

ですが、それは帝国を道具の様に使い捨てようと言う訳では有りません。

私は王国を潰す。

その過程で手に入る利益『戦果』はすべて帝国に献上致します。

言わばギブ&テイク、私は報復を、帝国は栄光を。

そんなお互いの利になる関係が私の望みです」

「……………随分と聞こえの良い話ですね」

「ええ、ですが事実です。」

それに何も帝国兵を動かして王国に戦争を仕掛けようと言つ訳では有りませんよ。

私は王国と渡り合う為の力を付けたいのです。

その為には王国と拮抗する程の国力を持つ帝国が最善なのです」

「そうですね」

「それに、私は貴方様に多大な利益をもたらしますわ」

私はルーカス様に満面の笑みを浮かべて見せる。

ルーカス様は魔力を収めると息を吐き出した。

「はあ、分かりました。

エリザベート嬢の亡命をお手伝いしましょう。

ただし、いきなり帝都へお連れする訳には行きません。

取り敢えずは私の領地にお越し頂きます。

それに暫くは行動範囲に制限を設けさせて頂きますし、監視も付けさせて貰います。

それでよろしいでしょうか？」

「はい、勿論ですわ」

王国の中心人物だった私が帝国で好き勝手に動くのは流石に無理でしょう。

先ずはルーカス様の信用を得る事と力を蓄える事に注力するべきですね。

「よろしくお願い致しますわ。ルーカス様」

## 協力者（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 亡命者

王都の北門に一台の馬車が姿を見せていた。

華美では無いがよく見れば高級な素材を使用している上等な馬車であり、それを牽く馬も一級品である。

「止まれ！」

北門を守る兵士達が馬車を止める。

本来なら簡単な検閲が行われるのだが、御者が取り出した書状を兵士達に手渡すと兵士達が慌てて居住まいを正した。

「ユ、ユーティア帝国大使レブリック子爵様で有りましたか 失礼致しました！」

その後御者と2、3言葉を交わした兵士達は直ぐ様門を開けて馬車を送り出した。

馬車の窓に掛けられたカーテンの隙間から小さくなる王都を見ていた私は、静かに座るミレイに身を寄せて正面のルーカス様に向き直った。

「流石、帝国大使ですわね。

私1人ではこつも簡単に王都を出る事など出来ませんわ」

「ふふ、ご冗談を。

エリザベート嬢はこつして見事王都を脱して見せたでは有りませんか。

……我々を利用して」



ルーカス様は苦笑いを浮かべてそう言った。  
うん、皮肉ですね。

「それにしても少々護衛の方が少ないのでは？」

あからさまな話題の逸らし方だがルーカス様は乗っってくれる。

「仕方ないですよ。」

当家は子爵家としては大きな方ですが、そこまで強い力を持っていないのです。

数を揃えようと思えば質が伴わず、質を上げようとするれば数が揃わない。

頭の痛い話ですよ」

「つまり彼らは数を犠牲にして集めた腕利きという訳ですか」

ルーカス様の護衛はたったの5人。

全員が騎馬で馬車と並走している。

一国の代表の護衛としては明らかに少ない。

「その通りです。」

戦力的にも弱い者を20人連れるより強者が5人居る方が頼もしいですからね……………維持費も安く済みますし」

「はあ……………しかし帝国の使者として国命で来ているのですから護衛くらい帝国軍や騎士団から出して貰えないのですか？」

「それが出して貰えないのですよ」

ルーカス様は深い溜息を吐き出しながら頭痛を堪える様に頭を押さえた。

「私は元々領地を持たない法衣貴族で、最近になって突然陞爵して領地を与えられたのです」

そこまで聞けば簡単な話だ。

「つまり若く御し易いルーカス様を王国に対する盾として配置され、ついでに面倒な王国の相手を丸投げされたと言う事ですか」

「ははは、ハッキリと言いますね。」

まあ、その通りなのですが」

私の齒に衣着せぬ物言いを咎める事もなくルーカス様は苦笑いを浮かべる。

「確かに面倒で危険な役割ではありませんが、上手くやれば上の評価を得られるポジションでもあります。」

私の代では難しいですが子供の代になれば伯爵も夢ではありませんよ」

ルーカス様は僅かに微笑んだ。

それから数日掛けて緩衝地帯の荒野を抜け、帝国の最南端に位置するレブリック子爵領の領都へ到着した。

道中に出た魔物は5人の護衛達によって速やかに討伐された。

ルーカス様が言う様に彼らは中々の実力者の様だ。

領都の門を抜けた馬車は大通りを真っ直ぐに進み、街の中心に有る子爵邸へと向かって行く。

騎馬に先導され大通りを行く馬車に向けられる民の視線には、敬意や感謝の意が感じられる。

「随分と人気がありますわね」

「これでも善政を敷いている自信がありますからね」

ルーカス様はどこか誇らしげに微笑む。

今の私からすると眩し過ぎる光景ね。

「それにとっても活気のある街ですね」

活力に満ちた人々を見てミレイも感心の声を上げる。

「それに異種族の方も多いですわね」

街の人々の半分程は人間種だが、もう半分はエルフやドワーフ、獣人や小人などの亜人種の方々だ。

王都では住人の殆どが人間種であり、異種族は住民権を持たない冒険者や傭兵ばかりだった。

「ユーティア帝国は多民族国家ですからね。

多くの国や民族を傘下に収める過程で他の種族の文化を尊重する土台が出来たのですよ。

それに我が子爵領は帝国では辺境に当たりますからね。

小さいですが近くにダンジョンもありますし冒険者も多く居ます」  
なるほど。

一応王国も亜人種の人権を認めてる多民族国家ではありますが、元々は人族至上主義の国家だった為、人々の心の奥には亜人種への差別意識もまだまだ残っている。

多くの種族の文化を内包する帝国と長い歴史の中で文化が固定されて来た王国。

そう言った面を見れば帝国は王国よりも発展の伸び代があるのでしよう。

そんな事を話していると子爵邸に到着し、部屋に案内される。

「取り敢えずこの部屋を使って下さい」

「ありがとうございます。ルーカス様」

久しぶりに上等なベッドで休んだ翌日、私とルーカス様は机を挟んで座っていた。

「さて、それでエリザベート嬢。これからどうするおつもりなのですか？」

「そうですね。まずは地盤を固めます。

その為にルーカス様をお願いしたい事が幾つか」

「お聞きしましょう」

ルーカス様は執事に紅茶のお代わりを頼み、私もお茶菓子として出されたクッキーを口にする。

「まずはこの街で商いをする許可を頂きたいですわ。

帝国での地盤を固める為にも、力を蓄える為にもお金を稼がなければなりません」

「ああ、エリザベート嬢が王国で商会を経営していた事は知っています。

有力な商会が領内にあるのは経済的にも好ましいですから許可は構いませんよ」

「ありがとうございます」

私はルーカス様に頭を下げる。

「次にお願ひしたいのはお金ですわ。何をするにも先立つ物が必要です。」

金貨100枚、お貸し頂きたく思います」

「ふむ、金貨ですか」

ルーカス様は顎に手を当て視線を彷徨わせる。考え事をする時の彼の癖の様だ。

金貨100枚は決して安い金額ではない。平民なら数年は慎ましく暮らせる金額だ。

しかしこの街の規模から推測される税収や子爵家の調度品などから考えると、出しても問題ない額だろう。

要は私の様な小娘にそんな大金を預ける価値があるのか、とルーカス様は考えているのだろう。

「こちらを」

私は1枚の書類を差し出す。

「これは魔法契約書……それもかなり高ランクの物ですね」  
ギアススクロール

魔法契約書は契約魔法を利用した契約書だ。

書面に記した契約を魂に刻み込み強制的に遵守させる。

その強制力は魔法契約書のランクに依存しており、《粗悪級》コモン《低級》アンコモン程度ならば契約に反した時、何となく不快な気分にするのが限界だが、今回私が用意したのは《最高級》ハイエンドの魔法契約書。

これ程のランクの魔法契約書ならば違反の罰則として命を奪う事も可能な代物だ。

「この条件……正気ですか？」

「勿論」

私がルーカス様に渡した魔法契約書の内容は、ルーカス様からお借りしたお金を1年以内に倍以上の金額にして返す。

もし返せなかった場合、私自身を奴隷として売却し、その売却金もしくは奴隷としての私の所有権をルーカス様に渡すと言う物。

ルーカス様は狂人を見る様な目で私を見つめる。

いや、彼の目には正しく私が狂っている様に見えるのでしょうか。

「何の問題もありませんわ。」

1年後、このテーブルに溢れる程の金貨を積み上げて見せましよう  
「う」

「あの日、自らの命運を質に入れてなお、揺るぎない自信を持って笑う彼女に私は恐怖を覚えた」

“まるで親と逸れた幼子の様に”

“まるで深く濃い闇を見つけた少年の様に”

“まるでドラゴンの巣穴を覗き込む冒険者の様に”

“まだ成人したばかりの年端も行かない少女が、自分とは全く別の生き物で有るかの様で”

“私は恐怖したのだ”

“しかし私はその恐怖の中にほんの僅かな興奮が眠っている事に気付いていた”

“中央の老獪な貴族達に良い様に使われるだけだった私が、燦然と輝く星々の様な栄光を掴めるのだと”

“理由など無い”

“ただ彼女には、そう感じさせるだけの何かがあったのだ”

『ハルドリア公国大公』

ルーカス・レブリック・ハルドリアの手記より抜粋

## 亡命者（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## 新設の商会

カビと埃の臭いが充満する古びた家屋の戸板を力任せに開く。

メキッ！

……………開こうとした。

「ボロボロですね、お嬢様」

「そうね。流石土地家屋付きで金貨2枚の格安物件だわ」

私は戸板だった物をポイツと投げ捨てる。

此処はレブリック子爵領の領都の端、ルーカス様の紹介で商業ギルドに登録した時に購入した廃墟だ。

日当たりは悪く、中心街や門からは離れており、井戸は枯れ葉で汚れて庭は雑草が我が物顔で伸び放題。

「とてもお嬢様に相応しい屋敷では有りません」

ミレイは隙間風が入る壁の亀裂を忌々しげに睨みながらボヤク。

「仕方ないわ。ルーカス様からお借りしている金貨はたった1000枚。

無駄遣いは出来ないでしょ？

営業許可はルーカス様の口利きでなんとかあったけど、商会を立ち上げるには商館として登録する為の建物が必要だったんだから」

私はミレイに雑巾を手渡して自らは箒を手取る。

「お、お嬢様、掃除なら私が……」

「良いのよ。今は人手が足りないんだから。」

それと、その『お嬢様』も止めて頂戴」

「し、しかし……」

「私達は亡命して来たのよ。」

力をつけるまでは目立つのは控えるべきよ。

そうね…… エリー・レイスとでも名乗りましょうか。ミレイも私の事はエリーと呼んで頂戴」

「は、はい。で、では、エリー……様」

「ふむ、まあ良いわ。」

さあ、掃除を始めるわよ。

此処が私達の新しい拠点、王国への反撃の砦になるのだから」

勇しく宣言してみたけれど、やる事はただの掃除だ。

埃を払い、草を刈り壁の隙間を埋める。

都合3日を掛けて廃墟をボロ屋と言い張れるくらいには綺麗に出来た。  
来た。

そして表に新しい私の商会の名前『トレートル商会』と書かれた  
簡単な作りの看板を掲げる。

これも直ぐに立派な看板に作り替えるつもりだ。

これで商会としての体裁は整った。

「それでエリー様、トレートル商会でも以前のように化粧品を中心に  
に商売を始めるのですか？」

私は以前の商会で化粧品を中心として商売をしていた。  
王宮に保管されていた古文書を、周囲には【英知の魔導書】グリモア・ウイズドムと説明していた神器【傲慢の魔導書】グリモア・ルシフェルによって解読して作り出した化粧品は、従来之物に比べて頭1つ抜けた効能だったのだ。  
そのレシピはハルドリア王国で人気になった商品から未発表の物まで全て【傲慢の魔導書】グリモア・ルシフェルに記録されている。

だが、私は首を左右に振って見せる。

「確かに貴族女性をターゲットに化粧品を売るのは儲けが多いけど、それをするには今の私達には設備も人員も足りてないわ」

「では……」

「これ売るわ」

私はミレイにこの街の商会や有力者について情報を集めて貰っている間に作成しておいた商材をポケットから取り出してミレイに見せる。

「これは……石鹼ですか？」

「ええ」

「確かにこの国で使われている石鹼に比べれば格段に質は良いですが……」

「ふふ、勿論この石鹼はあくまでも足掛かりよ。いずれ帝国の財界を我がトレードル商会が牛耳るためのね。」

その為は何人かの人に会わないといけないわ」

私はミレイが集めてくれた資料の山からある人物の情報が記された書類を手に取り、ミレイに差し出す。

「先ずはこの男に接触して頂戴」

「きゃー！」

夕刻、お使いに出ていたのだけれど少し帰りが遅くなってしまったので、オレンジ色に染まる街中を小走りで屋敷へと向かっていたら角から歩いて来た人に出会い頭にぶつかってしまいました。

「す、すみません！」

ぶつかってしまった女性が尻餅をついてしまった私に手を差し伸べてくれた。

その女性は私より少し年上くらいの美人だった。  
黒髪に切れ長の目が少し怖そうだが、柔和な微笑みがそれを打ち消している。

「怪我はないかしら？本当にごめんなさい。」

商業ギルドを探していて、よそ見をしていました」

「わ、私こそごめんなさい」

私は立ち上がりスカートの埃を払った。

「え、えっと、商業ギルドですよ？

あそこに見える時計塔がある広場に行けばすぐに分かりますよ」

「ありがとうございます。この街に来たばかりで困っていたんです」

女性は笑顔でそう言った。

「あ、そうだ。コレ、お詫びとお礼に受け取ってください」  
「え？」

女性は手にしていた籠から手の平で包める位の包みを手渡してくれた。

「コレは？」

「石鹸ですよ」

「石鹸ですか？」

「はい。私はトレートル商会のミレイと申します。

この石鹸は私共の商会で扱う事になる商品なんです。

私の故郷の特別な製法で作った自信作ですので、是非お試し下さい」

つまり宣伝を兼ねてって事ね。

ならありがたく貰っておこうかな？

「ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ。」

では、私はコレで。トレートル商会をよろしくお願いします」

茶目つ気を見せながら笑うミレイさんと別れた私は、お仕えしている男爵様のお屋敷に帰って来た。

男爵様はこの街の領主様であるレブリック子爵様の下で働いている法衣貴族様で、とてもお優しい方だ。

奥様も気さくな方で、私達の様なメイドにもよく話しかけてくれる。

この街の貴族の奥様方の中でも中心的な人物だ。

その奥様が今、目の前で仁王立ちしている。

「あ、あの、奥様……」

「もう一度聞いわ、メリア。その石鹸をくれた女性はトレートル商会と名乗ったのね？」

「は、はい」

夜、貰った石鹸を使って体を洗った後、奥様に石鹸について質問された。

「今流通している石鹸よりも明らかに上質な物ね」

「は、はい。泡立ちも凄く良くて、それに香りも素敵です」

「そのトレートル商会のミレイと言う女性は最近この街に来たのね？」

「はい、商業ギルドの場所を探していましたから、他国から来て商會を立ち上げたばかりだと思います」

「そう。この石鹸は素晴らしいわ。」

是非、そのトレートル商会に接触しなければならぬわね」

## 新設の商会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 敬虔な商会

太陽が中天を過ぎた頃、私はミレイを伴って子爵領の中央広場を歩いていた。

広場には大きな噴水があり、街の人々の憩いの場となっている。

中央広場から少し高くなっている場所には質素だが掃除の行き届いた大きな建物がある。

この大陸で広く信仰されているイブリス教の神殿だ。

私とミレイは大きく開かれた神殿の扉をくぐり礼拝堂へと入った。礼拝堂には数人の街人が正面に祀られた女神像へと祈りを捧げていた。

「こんにちは」

修道服を着たシスターが優しげに声を掛けて来た。私とミレイも軽く頭を下げる。

「こんにちは、私はエリーと申します。こちらはミレイ。

最近、この街に移って来て商会を立ち上げたので、商売の成功と安全を女神様に願おうと思ひまして。

少し祈らせて貰ってもよろしいかしら？」

「はい、勿論です」

シスターに一言断り、礼拝堂の長椅子に座った私達は女神像に祈りを捧げる。



どれ程の時間が経っただろうか。

祈りを終えた私達は席を立てて出入り口へと向かう。

出入り口の辺りでは先程のシスターと聖職者の服装をした男性が話し込んでいた。

男性の首から提げられた聖印から、彼はこの神殿をまとめる司教様だと思われる。

「あら、お帰りですか？」

私達に気付いたシスターと司教様は会話を切り上げ微笑む。

「はい、ありがとうございます」

「いえいえ、貴女方の今後に女神様の祝福があります様に」

司教様も私達の為に祈ってくれた。

その時、神殿の外から子供達のはしゃぐ声が聞こえて来る。

「あら、子供の声かしら？」

「ああ、神殿の隣には孤児院があるんですよ。午前中は街の雑用や衛兵の兵舎の草引きなどをしておりまして、今帰って来た所の様ですね」

「そうなのですか」

「はい、領主様は色々と支援して下さっているのですが、孤児院は此処だけではありませんから。」

私達が不甲斐ないばかりに子供達に苦勞を掛けてしまつて、情け無い限りです。」

「いいえ、司教様方の気持ちはきっと子供達に伝わっていますわ」

「ふふ、ありがとうございます」

私は布袋から硬貨を数枚取り出して司教様に差し出した。

「では……こちらを寄付させて頂けますか？」

「どうもありがとうございます……え」

司教様は驚き固まった。

私が差し出したのは金貨10枚。

かなりの大金だ。

間違つても一般人がポンと寄付する様な金額では無い。

「さ、流石にこんな大金を受け取る訳には……」

「良いですよ。」

私達、商人にとって顧客となる人々は何にも代えられない物です。そして子供達は未来の顧客となる財産。

その子供達を育む孤児院の方々を支援するのは商人として当然の事ですわ」

私の言葉に司教様は目頭を拭いながら感謝の言葉を述べた。

司教様とシスターに見送られながら私とミレイは神殿を後にする。

日が傾きかけた街中を歩きながらミレイと話す。

「では粗方の用意は整ったと言う事ね？」

「はい、昨日の男爵家のメイドで接触を予定していた人物は全てです」

「そう、石鹼の反響の方はどうかしら？」

「既に何件かの問い合わせを受けております」

トレートル商会で扱う石鹸は、既にミレイの手によって何人かの貴族や有力者など、影響力の高い人々の目に触れる様にさり気なくばら撒かれている。

その結果、美容に敏感な女性達からいくつもの連絡を受けていた。

「予定通り、明日から販売を開始するわ。」

値段は既存の石鹸より少し高く、販売数を抑えて、売る相手は慎重に選んで頂戴」

「はい。しかし、よろしいのですか？」

あの石鹸ならもつと高額にしても売れるでしょうし、私達2人でももう少し数を増やせますが？」

「良いのよ。先ずは販売相手や個数を限定する事でトレートル商会のブランド化を狙うわ」

石鹸と言えばトレートル商会、と言う認識を人々に植え付ける事で、今後の商会の展開を有利に進める為の布石となる。

「さあ、儲けると致しましょうか」

**敬虔な商会（後書き）**

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 新興の商会

「エリー様、今月の収支報告書です」  
「ありがとうございます」

私はミレイから受け取った書類にサツと目を通す。  
トレートル商会を立ち上げてから3ヶ月、売上は順調だった。

「選定した顧客からは設定した注文枠一杯まで予約が入っております。」

また、噂を聞いた方からも購入を希望する声が出ています」  
「順調ね。新規の顧客には身边を調べて問題がなければ少数だけ販売するわ」

私はミレイに指示を出し、更にもう一枚の書類を取り出してサインを入れる。

「それとコレをお願いね」  
「畏まりました」

その書類は商会の利益からの神殿の孤児院を始めとした福祉施設への寄付を行う指示書だ。

私は商会の利益から毎月、少くない額を寄付している。  
おかげで司祭様やシスターとも随分と仲良くなった物だ。

「さてミレイ、そろそろ行きましょうか」  
「はい、エリー様」

最近、私達は偶に夕食を外に食べに行く事がある。  
石鹸作りが忙しく、用意する暇が無いと言うのも有るが、雑多な人々が集う食堂と言うのは偶に面白い話を聞けたりもするのだ。  
それに貴族育ちの私としては下町の食堂の雰囲気も珍しく結構気に入っていた。

「あら、いらっしやい。エリーちゃん、ミレイちゃん」

「こんばんは」

「こんばんは、お世話になります」

私達は最近行きつけの食堂である火蜥蜴亭のおかみさんに挨拶して、ほぼ指定席に成りつつ有る席に腰を落ち着けた。

「日替わりを2人分、それとワインの水割りも2つお願いします」  
「相変わらずあんた達はちゃんとしてるねえ。ほら野郎共も少しは見習いな。」

偶には『お願いします』や『ありがとうございます』とか言ってみたらどうだい？」

「えゝ酷いなあ、おかみさん。俺達は十分礼儀正しい紳士だぜ」

「あんたらが紳士ならアタシはご令嬢だよ！」

「……はっはっは」「」

おかみさんは常連の冒険者らしき中年達に声を掛けながら注文の品を運んで来てくれた。

今日も賑やかな店だ。

今日の日替わりは腸詰肉とマッシュポテト、パンにボイル野菜とスープだ。

コレだけのポリウムが有りながらワインの水割りと合わせても銅貨2枚と鉄貨3枚。

格安である。

「競合している商会の方はどうなの？」

私はジューシーな腸詰肉をパリッと頬張りながら商会での話の続きをミレイに振った。

「今の所、動きは有りません」

「そう、引き続き警戒だけはしておいてね。」

今の私達にとってあの石鹼は生命線だから」

そこで私は少し声を落とす。

「特に製法の流出は命取りよ」

「心得ております。石鹼の製法は商会の金庫で厳重に保管しておりますのでご安心ください」

「そう。私達トレートル商会もそれなりに名が知れてきた頃だし、そろそろ大きく儲けるべきかしら？」

「そうですね。ルーカス様との契約の件も有りますし、あまり時間を掛けるべきでは無いかと……」

その後、私とミレイは商会の話や街の話、流行りの服や物語など、多くの事柄を話した。

貴族としての責務に取り憑かれていた頃の私では到底考えられない様な楽しい時間を過ごすのだった。

「クソッ！」

まだ中身の入ったワイングラスが壁に叩きつけられ粉々に砕ける。中に入っていたワインも、砕けたワイングラスも購入には金貨を用意する必要がある程の逸品だ。

それらを投げつけてもまだ怒りが収まらない様子の男は、レブリック子爵領を拠点として化粧品の販売で頭角を表していたガザル商会の商会長、ガザル・ジャックマンであった。

ガザルはその脂肪が入って丸まった腕を乱雑に机に叩きつける。

3ヶ月ほど前から少しずつ売り上げが落ち始め、特に高級石鹸の販売数は以前の10分の1以下にまで落ち込んでいた。

勿論、手広くやっているガザル商会が石鹸一つで傾く訳もないのだが、それでも売上は目に見えて落ちており、何より新参の商会が自分達の顧客を掻っ攫って行った事がガザルの心中を余計に荒立てていた。

その上、トレートル商会が顧客を選んでいると言う事もガザルの怒りを煽っている。

トレートル商会は石鹸の生産数を理由に販売を断っているらしい。だがトレートル商会が意図的に顧客を選んでいる事は、同じ商人であるガザルには容易に想像がついた。

トレートル商会が締め出した者達の多くが非常に面倒な客ばかりなのだ。



現にトレートル商会とは無関係であるガザル商会に対してトレートル商会製の石鹸を入手する様に命令して来たり、今まで喜んで使っていた石鹸に文句を言つて来たりとやりたい放題だ。

文句ならトレートル商会に言えと言いたい所だが、トレートル商会の顧客にはこの子爵領の社交界でかなりの発言力を持つ男爵家の奥方を始めとした有力者が多い。

顧客が少ない分、付き合いが深い為、トレートル商会には直接的な手を出しにくい状態なのだ。

「クソツ！クソツ！あの小娘共が！」

ガザルが苛立ちを机にぶつけていると、ノックの音が鳴る。

「なんだ！」

「し、失礼します」

部屋に入ってきた男の顔を見てガザルは更に苛立たしげに舌打ちをする。

「なんだグランツ、また金の無心か？」

大した仕事もせずによく顔を出せた物だな」

グランツはガザル商会で經理の仕事をしている男だが、先日から何かと金が要ると言い、給料の前借りをしたり、突然仕事を休んだりと面倒な男だ。

「それが……その……」

「なんだ！用があるならハッキリと言え！」

「は、はい……その、ガザル様のお耳に入りたい事が有りまして……」

グランツは媚びるようなヘラヘラとした笑いを張り付けてガザルに近づいて来た。

その態度に苛立ちながらガザルはグランツの話を聞く。

「じ、実は小耳に挟んだんですが……例のトレートル商会の石鹸の製法、商会があるボロ小屋の金庫にしまつてあるつて話でして……」  
「なに？」

ガザルはグランツの言葉にピクリと反応する。

「お前、その話は何処で聞いたんだ」  
「はい、昨日下町の食堂でトレートル商会の女共が話してたんです。俺、たまたまあいつらの背後の席に座っていて、声を潜めていましたが確かに聞きました」

ガザルはグランツの言葉を吟味する。  
つまり、その製法を手に入ればトレートル商会の石鹸と同等の物が作れる。

いや、今やトレートル商会は1つのブランドとして認知され始めています。  
なら、トレートル商会の石鹸だと言って売った方が利益は大きい。裏のルートで手に入れたと言えば、奴らが売っている数倍の値段にまで吊り上げる事も不可能ではない。

ガザルは机の引き出しから無造作に金貨を1枚取り出してグランツに放る。

「お前はこの件を忘れる、良いな」  
「は、はい」

グランツは床に落ちた金貨を拾いへこへこと頭を下げ、部屋を出て行った。

ガザルはグランツが立ち去った後、盗みや金庫破りを得意とする非法な仕事を請け負う配下を呼び出す為にベルを手取るのだった。

## 新興の商会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 疑惑の商会

帝国に亡命して既に5ヶ月、トレートル商会は順調に知名度を上げていた。

下町で借りている借家で目を覚ました私は手早く身だしなみを整えて、既に目を覚まし朝食を用意していたミレイと共に簡単な食事を済ませて家を出る準備をする。

その時、窓から小鳥が部屋に飛び込んで来た。

「エリー様、王国の手の者からの定時報告です」

「そう、何か変わった事は？」

「はい、どうやらあのクソアマ……失礼しました。あのロックイート男爵令嬢が正式に王太子の婚約者として認められた様です。

また、エリー様は国家反逆を企てたとして指名手配されているようです。

公爵家は率先してエリー様を追求する事で免罪されているようです」

ミレイは怒りに震えながら連絡の手紙を読み上げる。

「なるほど、フリードの戯言を正式に認める事で王家の威信を守ったって所ね。

あの脳筋の考えとは思えないから多分公爵の献策でしょうね」

「そんな！娘であるエリー様を逆賊に仕立て上げたと言つのですか

「公爵ならやるわ。」

彼が大事なのは王国よ。

私が見つからない以上、王太子の名誉を守る為、この程度はやってのけるでしょう」

あまりの怒りに涙を流すミレイの肩を摩りながら私は連絡の手紙を蠟燭の火で燃やし煤を灰入れに捨てる。

当然、私だつてこの報告に怒りを覚えている。

だが、既に私は奴らに報復する事を誓い、その為に行動を開始している。

私の怒りは時が来れば奴らを蹂躪する事になるだろう。

「さあ、ミレイ。商会に行きましょう」

「……………はい、エリー様」

この日もいつも通りボロ屋に出勤した私達はせつせと石鹼を作り続ける。

普段なら昼頃に顧客に石鹼を届けて夕方頃まで石鹼を作り続ける。

だが、今日はボロ屋の扉をノックする者が居た。

半分腐りかけなのだからあまり強く叩かないで欲しい。

「はい」

ミレイが扉を開けると鎧を着込んだ数人の男達が扉を掴み大きく開くとズカズカと中へと押し入って来た。

「な、なんですか貴方達は」

ミレイが声を上げるが男達は何も答えない。

男達は私とミレイを取り囲む様に立つと腰の剣に手を掛ける。

「妙な動きはしないで下さい」

その声は男達の背後から聞こえて来た。

剣に手を掛けている男達の背後から現れたのはピシツとした格好をしたメガネを掛けた女性だった。

「貴女は？」

私が尋ねると、メガネの女性は伶俐な声音で身分を表すギルドカードを取り出した。

「私はアルテ・ヒルガディエと申します。

商業ギルドの法務部所属の一等捜査官です」

商業ギルドの法務部はギルド所属の商会の犯罪などを取り締まる捜査機関だ。

「トレートル商会は毒性のある石鹼を販売しているとの訴えが出ております」

「毒性のある石鹼？」

「はい、トレートル商会の石鹼を使用した方から、肌の酷い爛れや薬品による火傷などの症状が出たとの証言が有ります」

アルテは懐から商業ギルドのギルドマスターのサインが入った書状を取り出した。

「これは商会ギルドからの強制捜査令状です。

此れよりトレートル商会の商館の強制捜査を開始します。

商会長エリー・レイス、商会員ミレイ・カタリアの身柄は商業ギルドが拘束します。

商業ギルドで事情聴取を行いますので我々にご同行をお願い致します」

アルテは無言を云わさぬ口調で告げる。

「エリー様……」

「……分かりました、我々トレートル商会は何一つとして、やましい事は有りません。

捜査にご協力致しますわ」

「ご協力に感謝します。では、表に馬車を用意しておりますので」

私達はアルテと兵士に促され、馬車に乗り込み商業ギルドへと向かって出発した。



## 疑惑の商会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 対面の商会

「なるほど、確かにあなた方の石鹼の製法には危険性は認められませんがね」

場所を商業ギルドの1室に移した私達はアルテから事情聴取を受けていた。

その過程で石鹼の製法に付いて商業ギルド所属の錬金術師に詳しく説明する事で石鹼の製法自体には問題が無い事が認められた。

更に被害を訴えている人達は私達の商会が石鹼を販売した事のない人物で有り、私達が取引している人々からは一件も被害の報告がない事、そして私達が販売した石鹼の量、商会に残っている材料の在庫と、卸業者から購入した材料の記録から、商業ギルドは私達が事件に関与している可能性が低いと判断してくれた。

「それで、コレが問題の石鹼ですか」

そして被害者が所持していたトレートル商会製の石鹼とやらを見せて貰った。

「コレは……随分と半端な出来ですね」

「半端……ですか？」

「はい……コレは……もしかして！」

「何か思い当たる事でも？」

「はい、コレは多分、商会の金庫に入れていた石鹼の製法を何者かが盗み見て作った物かも知れません」

アルテは首を傾げる。

「どう言う事ですか？」

「この石鹼の製法は我がトレートル商会の生命線、なので石鹼の製法を記したレシピは2つに分けていて、片方を商会の金庫に、もう1つは私が肌身離さず持っています。

この石鹼は金庫に入れているレシピのみで作られた物、本来なら私が持つレシピで無毒化しないと使い物にならない物ですわ」

私の説明にアルテは頷きを返す。

「つまり何者かがトレートル商会の金庫からレシピを盗み石鹼を作り、トレートル商会の名を騙り販売していたという事ですか」

アルテは頷き、部屋に待機していた部下に指示を出す。

「被害者から石鹼の入手ルートを洗いなさい。おそらく犯人はトレートル商会との仲介役や裏ルートを名乗り石鹼を販売しているのでしょう。」

石鹼の材料の流れも調べて下さい  
「はっ！」

部下を見送ったアルテは私達に深々と頭を下げる。

「まだ確定では有りませんが、トレートル商会は今回の件とは無関係。いや、むしろ被害者と言えるでしょう。」

この度はご迷惑をお掛けしました」

「いえ、状況を考えれば仕方の無い事です。」

悪いのはこの様な粗悪品を作り出した犯人ですから」

「そう言っ て頂けると……もし、犯人が見つかったのならあなた方にもご連絡すると約束致しましょう」

その後、アルテの手配でトレートル商会の商館へと馬車で送って貰った私達は散らかっている商会を手早く片付けると、その日は早々に借家へと帰って行った。

「どうしてこうなった!!」

ガザルは商会の執務室で頭を抱えていた。

「クソツ！不味い！不味い！石鹸を売った客から辿ればすぐにウチの商会に辿り着く。

クソツ！どうなっているんだ！まさかあいつら偽物のレシピを掴まされたのか

クソツ！クソツ！クソツ！」

ガザルがレシピを盗んだ者達を八つ当たり気味に罵っていると、廊下が騒がしくなった。

「お、お待ち下さい！会長はただいま不在で……」

「ガザル会長が居る事は確認済みです。

此方には令状があります。

これ以上、捜査を妨害すると貴方も罪に問われる可能性が有りますよ」

「……………」

その声からいくばくもなく、部屋の扉が開かれて武装した男達が雪崩れ込む。

「ガザル商会会長、ガザル・ジャックマン。毒性石鹼の件とトレートル商会への不法侵入と窃盗に関してお話を聞きたいので商業ギルドへのご同行願います」

商業ギルドから偽石鹼の犯人が捕まったとの連絡を受けた私達は商業ギルドへと足を運んでいた。

犯人は元々この街で商売をしていたガザル商会。

商業ギルドの調査で、商会長のガザルと言う男が部下に命令してレシビを盗ませた事が分かったと言う。

商業ギルドとしてはガザルのギルドからの除名と犯罪奴隷として売却と言う処分になるそうだ。

しかし、今回、私の商会は多大な被害を受けた。

特にブランドイメージが付き始めたトレートル商会の名前を傷付けた事は大きい。

その被害に対する賠償を求める為、今日私達は商業ギルドを訪れていた。

商業ギルドの職員に案内されて部屋に入ると、ガマガエルの様に膨れた男が手に縄をかけられて椅子に座らせられていた。

コイツが私達の商会に手を出したガザルと言つ男か。

## 対面の商会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 制裁の商会

私達が部屋に入るとガザルは此方を睨みつけて来た。

「貴方が私共の商会の名を傷付けた事に対して慰謝料を請求致しますわ」

私が告げるとガザルは小馬鹿にした様に鼻で笑う。

「確かにワシの罪は認めよう。

だが、貴様の様な小娘に金を払うつもりは無い。小娘は知らないかも知れないから教えてやるが、商業ギルドは商会の犯罪に対して強制力を持つが民事的な権限は持っていない。

それらは法と正義を司るイブリス教の領分だ。  
ワシに金を払わせたかったらイブリス教の審問官でも連れてくるんだな」

ガツハツハ、と笑うガザルを無視して椅子に腰掛けた私とミレイは溜息を吐き出した。

「では、そうさせて頂きます。

どうぞ。お入り下さい」

私が声を掛けると正装した司教様が部屋に入ってきた。

「な、ル、ルイス司教……様……ば、馬鹿な、なんでこんな小娘に……」

「口を慎みなさい、罪人よ。」



エリー殿は真に敬虔な女神の僕、その名誉を不当に傷付けるなど、この様な不誠を女神様がお許しになる事は有りません」

何なのだ！この小娘は！

司教だぞ！

この街で唯一審問官の資格を持つルイス司教は非常に多忙な人間だ。

こんな些細な事件にわざわざ足を運ぶなんてあり得ない！

トレートル商会に関わってからあり得ない事ばかりだ。

商業ギルドに連行されてから強制捜査されたワシの商会からは処分したはずのトレートル商会への盗みの指示の証拠や隠していた筈の脱税の証拠などが次々に見つかった。

少しでも意趣返しをと思いい賠償の支払いをごねようとしたら多忙の筈の審問官が現れる。

審問官に女神の名によって命じられれば資産の強制接收も可能になる。

クソッ！クソッ！

トレートル商会などに関わったばかりに……。

ワシは己の命運が尽きたのを感じ頂垂れるのだった。

ルイス司教の命令により、今回の被害に対する賠償として、ガザルの資産であるガザル商会の経営権やガザルの個人資産、犯罪奴隷としての売却金の一部などが私の物となった。

ガザル商会は今回の不祥事により、倒産。  
商会員や施設、資材など、丸ごと私のトレードル商会に吸収される事になった。

偽石鹸の被害者も治癒魔法による治療で回復し、私もお見舞いとして本物のトレードル商会の石鹸を送り、今後の取引を約束して矛を納めて貰った。

数日後、それらの手続きを終え、商業ギルドを出ようとすると私達をアルテが呼び止めた。

「この度はご迷惑をお掛けしました。

改めてお詫び申し上げます」

「いえ、商業ギルドのせいでは有りませんから。それにアルテさん達のお陰で迅速に解決して被害も最小限に留まったのですから、こちらこそ感謝いたしますわ」

アルテは僅かに微笑むと手を差し出した来た。

「ありがとうございます。エリー会長」

「こちらこそ、アルテさん」

私はアルテと握手を交わす。

すると、アルテは少し声を潜めて言う。

「実はガザルを尋問している時に判明したのですが、ガザルにトレートル商会の石鹼の製法を盗む様に唆した男が居るそうです。」

グランツ・カールストンと言う男なのですが、商業ギルドとしては商会長であるガザルの責任が大きい上、グランツが明確に盗みを唆した証拠が有りませんので処分する事は出来ませんでした」

「そうですか。」

教えていただき有り難うございます。

そのグランツと言う男もトレートル商会がガザル商会を吸収した現在は、私の商会の商会員。

混乱が大きい今、大々的に処分するのは私の商会にも負担が大きいですし、そのグランツと言う男の処遇は私に一任して頂きたいですわ」

アルテは頷きを返した。

「分かりました。それではお気を付けて」

アルテと別れた私とミレイは元ガザル商会の商館へと向かった。既にガザル商会の看板は撤去され、現在はトレートル商会と書かれた真新しい看板が掲げられてらいる。

「戻りましたわ」

「お帰りなさいませ、エリー会長。ミレイさん」

私達が商会に入ると忙しなく働いていた商会員達が一斉に頭を下げる。

彼らは商業ギルドの調査により犯罪への関与は無いとしてそのままトレートル商会に雇用された者達だ。

彼らに軽く手を上げて答えた私は商会長室に入り上等な椅子に腰を下ろす。

この部屋にあった下品な調度品なども既に処分され、ミレイによって品良く整えられている。

「ミレイ」

「はい、既にグランツは此処に呼び出しております」

私の意図を読んだミレイは戻って早々、グランツを呼び出していた様だ。

流石、長い付き合いなだけはある。

数分後、会長室に控えめなノックが響く。

「し、失礼します」

そして、何処か落ち着かない様子の男が私達の前に姿を現した。

## 制裁の商会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 暗躍の商会

「お、お呼びでしょうか、エリー会長」

グランツは緊張からか視線を彷徨わせ、生唾を飲む。  
当然か。

現在の彼の命運は私が握っている。

もし商会をクビになれば彼は明日から無職、更にクビになった経緯から再就職もままならない。

罪人にならずとも、ロクな未来は訪れる事はない。

「グランツ」

私は机の引き出しに用意してあった小袋を取り出してグランツの目の前に置いた。

「ご苦労様でした。約束の報酬です」

小袋の中身は金貨。

グランツは僅かに緊張を緩めながら小袋を受け取った。

「それと、事前の取り決め通り貴方をトレートル商会の幹部として重用します。

しばらくは一般職員として働いて貰いますが、熱りが冷めたら昇進させましょう。

商業ギルドには深く反省している為、不問にすると伝えておきます」

「あ、ありがとうございます」

グランツはそこでようやく緊張を解いて息を吐いた。

彼は、この街に来て始めに私がミレイに指示して接触させた者。その1人目であり、今回の計画で最も重要な役割をこなす人物として、私はグランツを選んだ。

グランツは私と取引した。

ガザルをハメる為に。

不完全な石鹼の製法を盗む様に唆し、ガザルが連行された後、確保していた盗みを指示する証拠や、隠されていた脱税の証拠を目につきやすい場所に忍ばせたりと危ない橋を渡ってくれた。

ガザルは元々悪どい商売を行っていた。

しかし、グランツがやった事も限りなく黒に近いグレーだ。

此処で私が裏切れば彼は全てを失う。

その危険を全て飲み込んで彼は取引に応じたのだ。それならば私も応えなければならぬだろう。

「そ、それでエリー会長……」

「分かっているわ。」

「もう一つの約束の件でしょ？」

「は、はい、本当に……」

「勿論、約束は守るわ。」

「今すぐに向かいますよ。」

「ミレイ、馬車を回して頂戴」

「畏まりました」

ミレイとグランツを連れて馬車を走らせた私は一軒の家の前で馬車を止めさせた。

あまり上等ではない家だ。

まあ、現在は倉庫にしている旧トレートル商会商館とは比べ物にならないほどマシだが。

グランツはその家の鍵を開けると扉を開いた。

「帰ったぞ」

「あなた！もう何日も帰らないで！」

「す、すまない」

「あなたの商会が大変な事は分かってるけど……でも、でも、ルノアがこんなに苦しんでいる時に！」

家に居た女性が目に涙を浮かべてグランツに掴みかかる。

彼女はグランツの妻、確か名前はメアリだったか。

グランツは最近、ガザルを確実に潰す為に動いて貰っていた。

「奥様、申し訳ありません。」

グランツさんは商会の為に寝る間を惜しんで働いてくれたのですわ

「……えつと、貴女は？」

「申し遅れました。私はトレートル商会の商会長、エリー・レイスと申します」

「え」

「グランツさんの娘さんの事も聞いておりますわ。」

ですが、グランツさんは商会の為に、延いてはご家族の為に働いていたのです。

「どうかご理解下さい」



「は、はい……」

メアリはまだ納得しきれない様だが、取り敢えず私達を家に上げてくれる。

グランツの娘は数ヶ月前、事故で大怪我を負ってしまったらしい。魔法による治療には多額の費用が掛かる。

とてもではないがグランツが用立てる事が出来る金額ではない。それでもグランツは少しでも娘の苦痛を和らげる為、ガザルに頭を下げてお金を集めて治療ポーションを買い与えていた。

「それで、本日はどういったご用件でしょうか？」

「はい、私は治癒魔法を扱えます。」

グランツさんの娘さんの治療をさせて頂きたいと思ひましてお邪魔させて頂きました」

「ほ、本当ですか」

メアリは驚いて目を見開くが、少し不安そうな表情に変わる。

「しかし、ウチに治癒魔法を受ける様な余裕は……」

「ご心配無く。」

グランツさんは現在混乱の中にある我が商会で懸命に働いて下さいました。

そのお礼としての治療です。

報酬は頂きませんわ」

私は肩から掛けた鞆から本を取り出した。

「それは？」

「魔力を貯める事のできるマジックアイテムですわ。」

「コレに貯め込んだ魔力を使えば【治癒<sup>ヒール</sup>】でもかなりの傷を治療できますわ」

勿論、嘘である。

「コレは事前に発動しておいた神器【暴食の魔導書<sup>グリモア・ベルゼブブ</sup>】だ。」

水属性の魔力適性を持つ私は強力な治癒魔法は使う事が出来ない。だが、【暴食の魔導書】には強力な治癒魔法が記録されている。

その後グランツに案内され、部屋の奥のベッドに、寝かされていた少女、ルノアの様子を診る。

両目には深い傷が走り、目は見えていないだろう。腕や脚も傷だらけで熱も有る。

意識は虚ろで、現在はポーシオンで何とか持っている状態のようだ。

私はルノアに手を向けて詠唱を始める。

「慈悲深き女神に希い願う」

本来なら私の【暴食の魔導書<sup>グリモア・ベルゼブブ</sup>】で発動する魔法に詠唱は必要ない。

この神器に記録されている魔法は他人の発動式をコピーした物、魔力は私持ちだが、制御や威力などはオリジナルの術者に依存する。

まあ、この詠唱はパフォーマンスだ。

理論によって構成される魔法式と違い、魔法の詠唱はイメージを呼び覚ます為の物。

その為、人によって詠唱は変わる。

私は適当な詠唱を終え、魔法を発動させた。

「【治癒<sup>ヒール</sup>】」

光がルノアを包み数秒、光が収まると傷が消えて穏やかな寝息を上げる少女の姿があった。

「治癒魔法は患者の体力を大きく消費しますわ。しばらくは目を覚まさないでしょうが、ご心配なさらずに。

目が覚めたら栄養のある物を食べさせてあげて下さい」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます、エリー会長」

2人は私の治癒魔法の効果に驚いているようだ。  
当然か。

今のは【治癒<sup>ヒール</sup>】ではなく【上級治癒<sup>エクスヒール</sup>】だ。  
それも王都の神殿の大司教の【上級治癒】、並の使い手とは格が違う魔法だ。

グランツ達には時間を掛けてかけて貯めた魔力を使って魔法を強化したと伝え、一応口止めもしておく。

これでガザルの一件の後始末も終わり。

こうして、私はそれなりに大きな商会と、既に確立された販路、顧客、忠誠心高めの部下を手に入れたのだ。

## 暗躍の商会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 躍進の商会

私の目の前には頬を引きつらせたルーカス様が頭痛を堪える様な顔をしている。

「まだ半年と少しくらいしか経っていないはずなのだが……」

私とルーカス様の間にはローテーブル

しかし、現在はそのローテーブルの上には金色に輝く金貨がこぼれ落ちるほど山積みになされていた。

「ええ、ですが既にこうして約束の金貨を用立てる事が出来ましたので」

「何をどうすればたった半年程で金貨100枚をこれだけの大金に変えられるのか……」

「ふふふ、言ったではないですか。」

私は貴方様に多大な利益を齎す、と」

ルーカス様は1度溜息を吐き出すと、少し真剣な表情になる。

「エリザベート嬢……いや、今はエリー会長と呼ぶべきだな。」

今後は帝都を始め、帝国内なら自由に行動して良い」

コレが素なのだろう。

最近少し砕けてきた言葉でルーカス様は諦めたように言った。

「あら、よろしいのですか?」

「ああ、王国での指名手配の話は聞いている。」

今更、君の亡命が王国の策略だとは思わないさ」  
「ご理解頂き嬉しく思いますわ」

私は疲れた顔をするルーカス様に優雅に頭を下げるのだった。

ルーカス様の所を辞した後、商会に帰ってきた私は商会長室で幾つかの決算書にサインを書き込んで行く。

「エリー様、お茶が入りました」

「ありがとうございます、ミレイ」

ティーカップを受け取り、口を付けながらついさっきサインを入れた書類をミレイに手渡した。

「神殿への寄付ですか」

「ええ、これは私やミレイが直接やった方が良いわ」

神殿への寄付も多忙な審問官を引つ張り出す事が目的ではあった事だけど、何かと影響力の強い神殿にはこれからも味方でいて貰う方が都合がいい。

聖職者として人間、生きる為にはお金が必要だ。子供を育てるなら尚更。

お金で動く訳ではないだろうが、私に非がない限り神殿は私を守ってくれるだろう。

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

ノックの後に入ってきたのは10歳程の少女。

「エリー会長、帝都の資料をお持ちしました」

「ご苦労様、ルノア」

彼女はグランツの娘のルノアだ。

目を覚ましたルノアは、私の魔力を浴びた影響か、属性魔法や無属性魔法とは違う『固有魔法』と呼ばれる特殊な魔法を使える様になった。

珍しい事だが、強い魔力や精神的な衝撃により眠っていた素質が目覚めたりする例は確認されている。

ルノアが目覚めた固有魔法は【アイテム・アナライズ物品鑑定】。

商人として非常に有用な魔法だ。

そこでルノアをトレートル商会の見習いとして手元に置きつつ、私が直接魔法を教える事にしたのだ。

ルノアから書類を受け取って彼女を送り出す。

「帝都……ですか」

「ええ、せっかくルーカス様から移動の許可を貰ったのだから活用させて貰いましょう」

私は左手に魔力を集める。

「神器【グリモア・ベルフェゴール怠惰の魔導書】」

魔力は次第に形を持ち、青い魔導書へと変わる。

【怠惰の魔導書】を捲り、目的のページを開いた私は、銀貨の入ったトレイを手に席を立ち部屋の中央に立ち、ミレイは静かに壁際まで下がった。

「母なる女神に問う 遙かなる蒼穹を駆ける翼とは如何なる者が風と旅の女神の使徒よ

我、契約に従い銀貨30枚を供物として捧げる

【召喚：セイントバード】」

私の手に持ったトレイから銀貨が光の粉となって溶ける様に虚空に消える。

代わりに光り輝く魔法陣が描かれ、そこから真っ白で尾の長い美しい鳥が15羽現れた。

【怠惰の魔導書】は契約を記録する魔導書。

天界や冥界など、この世界とは違う世界の存在と契約し、対価を支払う事で力を借りる事が出来る魔導書だ。

私は用意していた手紙をセイントバードの脚に括り付ける。

「さあ、みんな。よろしくね」

セイントバードはミレイが開いた窓から一斉に飛び立って行った。

帝都に進出するなら有能な人材が多く必要だ。

その為に散らばっているかつての商会のメンバーを集めるのだ。



飛び立ったセントバードが見えなくなった後、私はミレイに顔を向ける。

「準備が整い次第、帝都に乗り込むわ」

「ああ、魔女様。私の命をお救い下さった恩人にして師よ。

貴女の栄光の旅路にどうか私をお連れ下さい」

「この旅の先に栄光が有るのかは分からない。苦難の先に無為に屍を転がすだけかも知れないわ。

ルノア、それでも貴女は私と共に歩むつもりなの？」  
「当然です。

もしも貴女の歩む先に闇が待ち受けるなら、この私が光に変えて見せましょう」

「分かったわ。共に行きましょう。

私達の旅へ。

この国に光を灯す旅へ」

ビルク・シエール作

戯曲『荒野の商人ルノア・カールストン物語』

第一幕『ルノアと黄昏の魔女の出会い』冒頭より

## 躍進の商会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 帝都への旅立ち

私が帝国に身を置いてからもうすぐ1年が過ぎようとしていた。

ガザル商会を吸収したトレートル商会は一気に規模を拡大し、石鹸だけでなく、洗髪剤や整髪剤、化粧水や乳液、口紅などの販売へと手を広げており、さらにはレブリック子爵領を拠点とする化粧品を扱っていた中小商会がトレートル商会の商品の質に押されて経営が傾いた辺りで買収し、次々に傘下に収めていった。

そんな現在上り調子のトレートル商会の会議室に数人の商会員達が集められていた。

ガザル商会から雇用した者や他の吸収合併した商会の中から選んだ有能な者達、現在のトレートル商会の幹部達だ。

その中には数人だが王国の商会で私の部下として働いてくれた者の顔もある。

召喚したセントバードが運んだメッセージを見て、すぐ様駆けつけてくれた者達だ。

残りのメンバーもこちらに向かう旅の途中の者や、いずれトレートル商会が他国に進出する為の下地を築いてくれている者などそれぞれ動いて貰っている。

「待たせてしまつてごめんなさい」

そんな幹部達を集めた部屋にミレイを伴って足を踏み入れた私に、

彼らは立ち上がり頭を下げる。

「みんな、座って頂戴。

忙しい中集まって貰って悪いわね。

今日は我がトレートル商会の今後の展望に関して重大な報告があるの」

僅かに緊張した幹部達の顔を1人ずつ見渡してから、ゆっくりと口を開いた。

「我がトレートル商会は帝都に進出するわ」

私の言葉を聞いた幹部達は、息を飲む者、鋭い目で頷く者、不敵な笑みを浮かべる者など様々。

「手始めに私が帝都に行きます。その間、この街の商いは貴方達に任せる事になるわ」

ミレイが入れてくれたお茶を一口。

「グランツ」

「はい」

「私が居ない間、商会長代理を任せます」

「お、俺がですか」

「ええ、勿論サポートを付けます。だけど、今後は貴方に私の代理をして貰う事も増えるわ。しっかり頼むわよ」

「は、はい！」

続いてグランツの隣の席に座る小柄な女性の名前を呼ぶ。

「ステイア」

「はい」

「貴女はグランツ付きの秘書として彼の補助をお願い」

「畏まりました」

ステイアは王国の商会で経営メンバーとして働いていた。

まだ経験が足りないグランツをしっかりと補佐してくれるだろう。

「ではみんな、私が留守の間、頼むわよ」

その後、いくつかの事案を話し合い、幹部を集めた会議は終わった。

会長室に戻って来た私とミレイは応接テーブルに向かい合う様に座る。

「帝都に向かうのは私達だけでよろしいでしょうか？」

「そうね……ルノアも連れて行きましょう。」

あの子にもいい経験になるわ」

「畏まりました。」

移動の方は如何致しますか？」

「小さめの馬車で良いわ」

「宣伝用の商材などを持ち込むのでは？」

「ええ、でも荷物の運搬には【強欲の魔導書】グリモア・メモを使うから」

「よろしいのですか？」

「良いのよ、一応まだ隠してはいるけど信用のできる人間なら私  
の本当の神器の事を話しても構わないわ。」

それくらいしないと王国を潰すなんて出来ないでしょう」

【強欲の魔導書】は所有物を記録する魔導書。

自身の所有する物を魔導書の中に収納する事が出来る神器だ。

王国を出る前に資産を収納しておけばルーカス様から金貨を借りる事も無かったのだけれど、当時は本当の神器を隠していた為、収納していたのは非常食や僅かな金銭、医薬品程度。大半の資産は商会の金庫や実家である公爵邸に保管していた。  
流石にそれらを持ち出す余裕は無かったのだ。

ちなみに現在はかなり資金や物資を収納している。

「旅は私とミレイ、ルノアの3人で良いわ。

何人か先行させて帝都に送り出して置いて。

商館に適した物件や帝都の化粧品の現在の相場を調査させておいて頂戴。

私達は社交シーズンに合わせて帝都へ向かうわよ

「畏まりました」

もうすぐ貴族の社交シーズンが始まる。

この時期になると貴族達は社交会を開き、親睦を深めたり、牽制しあったり、婚約者を探したりする。

帝都にいる法衣貴族は勿論、ほとんどの地方の領地貴族や法衣貴族も2、3年に1度は帝都の社交の場に顔を出す。

レブリック子爵領の領主、ルーカス様も既に帝都入りしている筈だ。

そして貴族の社交会には少数ではあるが、有力な商人や高位冒険者なども招待される事がある。

商会の宣伝には持ってこいの場所なのだ。

## 帝都への旅立ち（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ



## 帝都への道中

準備が整い、私とミレイ、ルノアの3人は帝都を目指してレブリック子爵領を出発していた。

馬車は小さく簡易的な屋根がついただけの物だけれど、馬は名馬とは言えないがそれなりの健馬。

その上、長旅とは思えない程、荷物が少ないので軽快に街道を進んでいた。

荷物について、ルノアには簡単に説明してある。

ここ数ヶ月見ていたが、この子ならそうそう言いふらしたりはしないだろう。

そもそも、この子自身は私の神器について知らなかったのだから、そういう物として認識してくれた。

【強欲の魔導書<sup>ケリモア・マゼン</sup>】に収納せずに馬車に積んでいるのはミレイとルノアの着替えなどの私物、非常時の為の水や食料くらいだ。

【強欲の魔導書】は非常に便利な神器だが、勿論何でも収納出来る訳ではない。

収納出来るのは私の『所有物』に限られる。

宣伝用の商材は商会自体が私の所有物なので収納出来るが、ミレイやルノアの私物は収納する事が出来ない。

また、生物も収納する事は出来ず、川の水や空気などは入れ物に入れて『個』として認識しなければ収納出来ないなど、色々と制限が存在する。

身軽故、軽快に街道を移動していたのだが、レブリック子爵領から2つ程別の貴族の領地を抜けた所、明らかに街道の質が悪くなった。

「わっわっ！急に揺れ始めましたね？」

「そうね。確か帝国では街道の整備は領有する貴族の仕事だった筈。この領主はあまり街道を整備していなかったのでしょうね」

「へえ、そうなんですか。私、レブリック子爵領を出るのは初めてで」

「普通の町人ならそんな物よ。」

領を超えて移動するなんて商人が冒険者、後は巡礼者くらいでしょ  
「よう」

私はルノアにそういうと、手綱を握るミレイに顔を向けた。

「ミレイ、気を付けてね」

「はい、心得ております」

そこに不思議そうなルノアの声が掛かる。

「何を気をつけるのですか？」

「街道を整備すれば物流が良くなり領内の経済が活発になる。これは分かるわね？」

「はい。物流が良くなれば領内での物の移動がスムーズになり、市民の生活水準も上がりますし、購買意欲もあがる。

他所から商人や冒険者を呼び込む事にもなる。

その結果、税収も増えて領が潤う。

だから領主様は街道の整備や保守に力を入れる。……ですよね」  
「そうよ」

以前教えた事を誦じて見せたルノアの頭を撫でながら続きを話す。

「じゃあもし街道が荒れていたらどうなると思う？」

「えっと……」

ルノアは少し考え込んでからゆっくりと自分の考えを口にした。

「……領内の物流が滞ります。

その為……え〜と、農村部や僻地にある村に十分な物資が行き届かなくなる？」

「そうね、他には？」

「え〜、農村部で作られた作物や僻地で採れる薬草などを街まで運ぶコストも上がります。

だから……そうか！食料や薬などの生活必需品が高騰するんですね」

「正解よ。

特にこの辺りは海から離れた内陸の領地だから塩は他領から運ぶか岩塩を取るしかない。

その為、とくに輸送費が高くなる街などでは必需品である塩を始め、物価が高騰。

民衆はそれらを購入する為、財布の紐が硬くなり、嗜好品などの需要が下がるわ。

すると当然景気は落ち込んで行く」

私はうんうん、と頷くルノアに講義をする教師のように指をピンと立てる。

「そして塩や生活必需品は農村部や僻地でも高騰し、食い詰めた農民なんか野盗になり街道の危険性が上がると、当然護衛を雇った

りする為に更に輸送費があがり、ますます物価は高騰する。悪循環ね」

「はへえ、じゃあ何で領主様は街道を整備しないのでしょうか？」

「まあ、バカなんでしょうね、多分。」

領地の経営に興味が無いか、もしくは目先のお金しか見てなくて街道の整備費をケチっているのでしょうか」

上に立つ者が愚かだと民は不幸になる。

王国のブラート王は脳筋だが、暗君という訳ではない。

それにあいつは自らが名君ではないと自覚している。

だから周囲の者達の意見によく耳を傾けるので、周りが有能である限りは無難な治世を続けるだろう。

しかし、息子のフリードは違う。

あのバカはまさしく暗君、いやむしろ暴君と言えるかも知れない。あんな奴が王になれば国民は不幸になるでしょうね。

まあ、大半の国民はどうなっても良いのだけれど、私に良くしてくれた商人達には無事でいて欲しいわね。

………うん、大丈夫ね。

王都に潜ませて居る者達の報告によれば私が親しくしていた商人達の多くは私が国を出て少しした辺りから、何かと理由を付けて拠点を他国に移したり、何時でも移動出来る様に私財を整理したりしているらしい。

商人とは遅い生き物だ。

「あれ？じゃあさっきの『気を付けて』って言うのは……………」

何か気が付いた様なルノアの声と共に、何か風を切る音が入る。

サツと身を翻し、飛んで来た矢を躲した私は、ルノアの肩を狙った矢を突き刺さる直前で掴み取った。

「え ひゃあ！」

ひっくり返りそうになるルノアを支えながらミレイを見れば、彼女も短剣で矢を斬り払っていた。

馬が嘶き足を止めると、周囲の茂みから剣や弓を手にした男達が馬車を取り囲む様に現れた。

「こう言った荒れた街道が有る場所は領兵の巡回などもほとんどないから、こんな感じの野盗が出たりするのよ。」

だから『気を付けて』なの」

## 帝都への道中（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 帝都への障害

「へっへっへ、おいおいお嬢ちゃん達、危ないなあ。こんな所を護衛も付けずに移動するなんてなあ。」

おじさん達みたいな奴らが出るからよお」

男の言葉に周囲の野盗達から下品な笑いが上がる。

「エ、エリー会長……」

「大丈夫よ」

私は震えるルノアの頭を撫でてから馬車の荷台から軽やかに飛び降りた。

「ミレイ、ルノアを守ってて」

「畏まりました」

ミレイはルノアを抱きかかえて馬車から降りると、馬車を背にする様にルノアを庇って短剣を構えた。

「あん？なんだいお嬢ちゃん。」

まさかお嬢ちゃん1人で俺たちを相手にするつもりか？」

「ええ、ご不満かしら？」

「はっはっは、いやいやお嬢ちゃんみてえな上玉はなかなか居ねえよ。」

まあ、心配しなくても3人とも可愛がってやるぜ」

再び下品な笑いを上げる野盗達。

「あらそう」

そんな奴らに私は軽く指を振る。

その動きに呼応する様に地面から鋭く尖った氷の刺が突き出し、弓を手にした野盗4人を貫いた。

水属性に分類される【氷棘<sup>アイス・ニードル</sup>】だ。

「な」

「うわあ！」

「ま、魔法だ！しかも無詠唱、上級魔道士だぞ！」

「くそ！困め！魔法を使わせるな！」

頭目らしき男の指示で野盗達は剣を振り上げて迫って来る。

「悪くない判断ね。判断だけは」

私は腰に帯びた剣を抜き放つ。

耐久性を捨てて斬れ味を追求した細剣は、迫っていた3人の野盗を革鎧や剣ごと、なんの抵抗もなく両断する。

この細剣は城の宝物庫に納められていた宝剣。

叙事詩級の魔法武器、銘は「翼<sup>フリューゲル</sup>を持つ者」

数年前の戦争で私が立案した作戦で帝国軍を退けた時に、ブラー<sup>筋</sup>ト王から下賜された物だ。

武器や道具の品質にはいくつかの段階があり、下から《粗悪級<sup>クモシ</sup>》《低級<sup>アンノモン</sup>》《中級<sup>ノイマル</sup>》《高級<sup>レプ</sup>》《最高級<sup>ハイエンド</sup>》と続き、此処までが一般的な



店などで普通に出回る品。

そして遺跡やダンジョンから稀に見つかる古代の遺産《アンティーク遺物級

数々の逸話が残る名品《フォークロア民話級》《フェアブル寓話級》《エピック叙事詩級》

誰もが知る様な奇跡の逸品《レジェンド伝説級》

そして女神の手によって作られたと言われる《ミソロジー神話級

この翼フリューゲルを持つ者は叙事詩級の名剣。

まさに国宝と言える品なのだ。

正直、野盗なんぞに使うのは勿体ないが、まあ良いか。

「な、なんだよ！くそ！」

「ひい！」

一瞬で仲間を殺された野盗が浮き足立つ。

「あら、随分と余裕なのね」

足下に魔力を込めて、肉眼で捉えられない程の高速で移動する歩法【縮地】を使い呑気に悪態を吐いている野盗のすぐ横に踏み込む。

「え？」

間抜けな顔をした野盗の首を刎ねる。

これで残りは1人。

「ひっ！ま、まって、まってくれ！こ、降参だ！降参する！」

「降参？」

「ああ！お、俺はただの農民だったんだ！でも税を払ったら生活出来なくて、仕方なくて……」

「別に言い訳は要らないわ。」

「どんな理由があろうと貴方は野盗、私は商人として野盗を許す気は無いわ」

「ま、まてよ！もうこんな事はしない！約束する！だからでゆー！」

戯言を繰り返す野盗の喉を貫く。

「う、ぐう、ばあ……」

野盗は血の泡を吹き悶え苦しみながら死んだ。

ミレイの方を見ると足元に2人の野盗が倒れているが、ミレイとルノアに怪我は無い様だ。

「お、終わっただんですか？」

「ええ、怪我は無いわね」

「はい。あの……ここ、殺したんですよね？」

「殺したわよ。」

……ルノア。野盗はゴブリンやオークと同じよ。

奴らは商人が懸命に稼いだお金を奪うの。時には命ごとね。

情けを掛けて逃せば別の人が襲われる。

だから野盗は見つけ次第確実に殺すのが鉄則よ。

貴女にもいずれ戦い方を教えてあげるわ。

最低限、身を守るくらいには強くなって貰うから、いざと言う時には躊躇ってはダメよ」

「は、はい……」

野盗の死体を手早く始末した私達は再び馬車を走らせ始めた。

そして野盗を撃退した翌日、順調に街道を進んでいた私達だが、昼を少し過ぎた頃だ。

「エリー様」

暇な移動時間を利用してルノアに勉強を教えていた私に御者台のミレイが声を掛けた。

「どうしたの？」

「あれを」

ミレイの視線の先を見ると、こちらに手を振る人影が有った。

「ふむ、ヒッチハイカー便乗者か」

馬車の時間が合わなかったり、予算の都合がつかなかったり、何かしらの事情で徒歩で移動している旅人が、多少の金銭を払い通りすがりの馬車に乗せて貰う事は偶に有る事だ。

それが冒険者や傭兵なら道中の護衛をする代わりに乗せて貰う事もある。

だが野盗や、犯罪者の可能性もあるので無視する者も多い。

「……停めて頂戴」

私は少し考えた後、ミレイに馬車を停車させた。

いくら私とミレイが腕に自信があるとは言え、こちらは女3人旅。

それに戦えないルノアも居る。

これが怪しい風体の者や男の冒険者などなら無視したが、その便ヒツ乗者チハイカーは若い女性。

それも修道服アミュレットを身に纏い、聖職者の証であるイブリス教の紋章が入った魔除けアミュレットを身に着けたシスターだったのだ。

流石に無視するのは外聞が悪いわよね。

## 帝都への障害（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 帝都への同行者

「いや、助かったツスよ。」

あのまま帝都まで歩き続けると考えると心が折れそうだったツス」

ガタガタと揺れる馬車の新たな乗客はそう言って肩口で切り揃えた金系の様な髪を乱雑に掻いた。

「それはちょうど良かったですね。」

私達も帝都に向かう所でしたので」

「ほんと感謝ツス。この出会いも、きっと女神様のお導きツスね」

ティーダと名乗ったシスターは聖職者にしては砕けた口調の明るい人物だった。

女性と言うよりは少女と言った方がしっくりくる見た目だが、成人はしているらしく、聞けば私と同じ歳だと言う。

「あ、それと私、今あんま持ち合わせが無くて、大したお礼は出れないんツスけど……」

「いえいえ、この程度で聖職者からお金を頂くとは思いませんわ。ティーダ様は歩き神官なのですよね？」

「ええまあ、そんなとこツス。」

田舎の方をフラフラしながら村々を回ってたんツスけど、そろそろ別の地方に移動しようと思ったんツスよ」

歩き神官とは聖職者が修行の一環として各地を旅して回り、田舎の村々で治癒魔法を施す者の事だ。

治癒魔法が使える魔法使いどころか、まともな医者や薬師も居な

い様な田舎の村では、老人が経験則で調合する薬程度しか無い事も多い。

そんな村にとって、偶に訪れ無償で治癒魔法を施す歩き神官はとても有り難い存在だ。

シスター  
女性聖職者が行う事は珍しいが、無いことでは無い。

「私と同じ歳でとても立派ですわ」

「いやいや、エリーさんこそ、まだ若いのに商会長なんて凄いじゃないッスか。」

ああ、それと私なんかに敬称は付けなくていいッスよ」

「そうですか？ではシスターティーダと呼ばせて頂きますわ」

旅の一員にティーダを加えた私達は2つ程の村を經由して隣の領地に差し掛かる手前で再び野盗に囲まれてしまっていた。

「本当に野盗が多いですわね。領主の怠慢ですわ」

私は少し不機嫌になりながら馬車から降りる。

「ミレイ、ルノアとシスターティーダをお願いします」

「畏まりました」

「いやいや、私も前が出るッスよ」

一瞬、大丈夫か？とも思ったが、今まで1人で旅をして来たのだからある程度身を守る術を心得ているのだろうと思いき直してティーダに頷きを返した。

「ふっ！」

【縮地】で踏み込んだ私は野盗の鳩尾に鞘に収めたままの剣を叩き込んで意識を奪う。

「このアマー！」

剣を振り下ろす野盗の腕を取り、その力を利用して投げ飛ばし気絶させる。

手間が掛かり面倒では有るが、聖職者の目の前で殺しは躊躇われる。

勿論、こちらの身が危なければ躊躇なく殺すし、聖職者だからと言って、護身の為の殺害すら認めないと言う訳ではないだろうが、イブリス教の聖典の中には『汝、殺す事なかれ』と言う教えがある。その為、聖職者の前では可能な限り不殺である方が好ましい。

更に追加で1人、気絶させて私がチラリとティーダの方を見ると……。

「死ぬクス共！神威ツス！女神様の名において汝らに神罰を下すツス！」

ティーダは手にしていた鉄杖を野盗の脳天に叩き付けていた。

周囲の野盗を無力化した私はミレイとルノアの所に戻るとミレイに囁く様に問い掛ける。

「……………アレ、殺してるわよね？」

「殺してますね」

ティーダの鉄杖を受けた野盗は頭蓋が陥没し、ピクピクと痙攣し



ている。

中には脳漿を飛び散らしている者も居る。  
どう見ても即死だ。

多分、魔力で身体強化をして筋力を上げているのだろう。  
その細腕からは想像出来ないが、振るわれる鉄杖は野盗の体を枯  
れ枝の様に打ち砕いて行く。

「ふう、こっちは終わったツスよ」

「え、ええ、お疲れ様ですわ」

「あれ？エリーさん殺して無いんツスね？

意外と博愛主義ツスカ？」

「いえ、そう言う訳では……」

「ああ、私聖職者の前だから配慮してくれた訳ツスカ。すみませんツ  
ス」

ティータは苦笑いを浮かべて私が気絶させた野盗の方に向かう。

「野盗は生きてても他人に迷惑を掛けるだけツスから、始末しても  
気にしないツスよ、私は。」

「アイツらも始末して良いツスよね？」

「え、ええ」

ティータは軽くそう言うのと倒れている野盗の頭に鉄杖を振り下ろ  
して行く。

「う……ぐう……」

残りの野盗が1人となった時、気絶から目を覚ました。  
少し当てが弱かったか。

「おや、目を覚ましたツスカ？」  
「ひっ！」

野盗は周囲の状況を見回して悲鳴を上げる。

「まって下さい！シスター様！私は心を入れ替えます。今後は世の為人の為に働きます！ですからどうか命だけは！私にやり直すチャンスを下さい！」

「ダメツス」

頭を地につけて懇願する野盗にティーダは無慈悲に言い放つ。

「そんな！イブリス教では罪人にもやり直す機会が与えられるべきだと教えられていると聞きました！どうか、どうか、お慈悲を！」  
「はぁ……………女神様は慈悲深く、人は罪を犯す生き物。反省して心を入れ替えるならば、女神様は慈悲を与えられるツス」

「な、なら！」

「しかし！野盗は女神様の慈悲の対象外ツス」

「ひっ、ひっ」

ティーダはゆらりと鉄杖を振り上げた。

「神威ツス！」

鉄杖が野盗の頭を叩き割り、戦闘は終了した。  
ティーダは強く、そして一切容赦が無かった。

戦いの後始末として野盗の死体を集めて有用な物を回収しておく。

同じ様にしている筈のティードを見ると、野盗の死体の前に屈み込んで何やらゴソゴソとやっている。

「っん、もうちよい……ッス！」

どうやら死体から何かを引っこ抜いた様だ。

「あの……シスターティード、一体何をしているのですか？」  
「え？ああ、ほら、コレツスよ」

ティードは手の平に乗せた血塗れの小さなかけらを見せて来た。

「コレは……金歯……ですか」  
「そうツス。野盗のクセに成金趣味ツスよね。コイツら結構現金持ってるし、武器の質も良いツス。当たりの野盗ツスね」  
「それは当たりなのかしら？」

笑顔で血塗れの金歯を見せるティードに、私は少し引きながら、  
手と金歯を洗える様に魔法で【水球】ウォーターボールを創り出すのだった。

## 帝都への同行者（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 帝都への道程

「お姉さん！エール、お代わりツス！」  
「はい」

ティードが声を掛けると犬人族の給仕が明るく返事をする。

あの荒れた領地を抜けて隣の領地に入ると街道もキッチンと整備され、野盗も現れなくなった。

そしてようやくそれなりに大きな街に辿り着いた私達は宿屋兼酒場で少し早めの夕食を食べている。

「いや、生き返るツスねえ。村の食堂ではこうは行かないツスよ」

ティードは先程から、とても聖職者とは思えない様な呑みっぷりでエールをその小柄な体に流し込んでいる。

別にイブリス教の聖職者が飲酒を禁じられている訳では無いが、普通はあまり人前でガブガブと呑んだりするのは控える物なのだが……。

「でも助かったツス。

あの野盗共のお陰で随分と懐が暖まったツスよ」

「あら、もう換金されたのですか？」

「そりゃもう。街に着いて直ぐ。」

エリーさん達が宿をとってくれている間に換金しておいたツス。

なかなかの金額になったツスよ。

ああ、勿論お金は山分けにするツス」

「いえ、換金したお金はシスターティータが受け取って貰って構いませんわ」

「ええ！良いんツスカ」

「はい、お布施という事でお納め下さい」

「エ、エリーさぁん！！」

「ちょ、は、離れて下さい！鼻水が付きますわぁ！」

私の服に顔を埋めようとするティータを引き剥がす横で、ミレイとルノアも久しぶりのまともな食事に舌鼓を打っていた。

「エリー会長、なんだか楽しそうですね」

「そうですね。エリー様には今まで同年代の気心知れた友人と言うものが居ませんでしたから……昔はいつも張り詰めた様な顔をしていました。ですが最近は日々、楽しそうに笑う事も増えましたね。

ルノアさん、コレも食べて見てください」

「あ、これ美味しいです」

「シロネと腸詰肉を煮込んだスープですね。

隠し味に、この街の特産品のミーカの実の果汁が入っている様ですよ」

「ミーカの実ですか。水分が多く傷みやすいので産地以外ではあまり出回らない果実ですね」

「はい。香りが良いので新しい化粧品に使えるかも知れません。

後でいくつか買っておきましょう」

騒がしい夕食は思いの外長く続くのだった。

「殿下！この様な事は不可能です、お考え直し下さい！」

壮年の文官が企画書を手に執務室にズカズカと入って来た。

その文官を疎ましげに睨みながらフリードは城下でも有名な菓子屋の高級クッキーを口に放り込む。

「騒がしいな、なんの話だ」

「殿下が提出されたこの企画案です！」

文官が企画書をフリードの目の前に差し出した。

「ん？……貧民区の炊き出しの案か？」

「コレのどこに問題があると云うのだ。」

「定期的にやっている事だろう」

「殿下………予算報告書にお目を通して頂いているのでしょうか。」

「この様な無計画な炊き出しを続けては直ぐに国庫が干上がってしまいます」

「何を馬鹿な！あの女は毎週、貧民共に施しをしていただろうが」

「エリザベート様は炊き出しや施しをされる時は、全て自らの私財から予算を捻出されておりました。」

「国王陛下への献策以外で国庫に手を付けた事はございません。」

「それに加えてエリザベート様は貧困層の者達に仕事を斡旋して生活が安定する様に補助されておりました。」

「貧困層の救済とは、ただ何も考えずに食事を与えれば良いと言う物ではないのです」

「ちっ！なら炊き出しなど止めてしまえば良いだろう！！」

「で、殿下！お待ち下さい！」  
「煩い！」

怒鳴りつけて執務室を出て行くフリードを文官が深いため息と共に見送った。



## 帝都への道程（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 帝国への到着

カラカラと回る馬車の車輪は正面に見える大きな門に向かって真っ直ぐに進んでいた。

堅牢な防壁に囲まれた帝都は小高い丘から見ても全容が分からない程に大きい。

御者台で馬車の操車を教わっていたルノアは、生まれて初めて見た大都市に目を丸くしていた。

帝都の門に近づくと、身分確認を待つ旅人や冒険者が列を成して並んでいる。

人が多くなるので、まだ操車に慣れていないルノアからミレイが手綱を受け取り、ルノアは荷台の私やティードのところに移動した。

帝都の門での身分確認は、多くの衛兵によってサクサクと進み、そう時間を置く事なく私達の番になる。

「次の者」

「はい」

衛兵に呼ばれてミレイが馬車を進める。

「我々はレブリック子爵領から来た商人です」

「そうか、ギルドカードを確認させてくれ」

ギルドカードとはギルドに所属している人間に発行される身分証

だ。  
私達3人は商業ギルドに所属しているのでそれを取り出して衛兵に見せる。

「あ、私は途中で乗せてもらったシスターツスよ」

ティードはイブリス教の聖職者の証である紋章が刻まれた魔除アミュレットけを見せている。

本来、街に入る場合、その街の住民以外は入街税を支払う必要がある。

だが、ギルドに所属している者は、ギルドに納めている会員費から一定額が税として国に支払われており、それによって各街を自由に行き来する事が可能となる。

また、聖職者も一部の税が免除される。  
入街税もまた然りだ。

帝都に入って直ぐの広場。

そこでティードがヒョイっと馬車から飛び降りた。

「では私はこの辺で。」

エリーさん、ミレイさん、ルノアちゃんお世話になったツス」

「こちらこそ、賑やかで楽しい旅でしたわ」

「ティードさん、また会いましょう」

「お元気で」

ブンブンと手を振るティードと別れた私達は中央区に近い上等な宿にチェックインする。

3人部屋に身を移した私達は今後の予定について話し合う事にした。

部屋のソファに腰を下ろし、ルノアに紅茶を入れて貰い一息つく。

「わ、私までこんな良いお部屋に……本当に良いんでしょうか？」

「慣れなさい。私達はこれからこの帝都で商売を始めるのよ。」

何処に誰の耳目が有るのか分からないわ。

下手に安宿に泊まっていると舐められるかも知れないでしょ？」

「は、はい」

「これから直ぐに動きますか？」

「いいえ、今日はこのままゆっくりと休みましょう。」

明日は先行させた者達と連絡を取るとして……あと、ルーカス様にもコンタクトを取りましょう。」

彼も今は帝都の子爵邸に居るはずですし」

「畏まりました」

この日、私達は宿でゆっくりと旅の疲れを癒す。

そして翌日、ルーカス様に面会を求める使者を送った私は、先行して帝都に入っていた商会員と合流し、彼らが選定していた物件を見て回っていた。

この帝都でのトレートル商会の顔となるのだ。

しっかりと吟味する必要がある。

今回、購入する予定なのはトレートル商会の帝都支部となる物件、そしてトレートル商会の商館となる物件の2つだ。

前者は主に事務手続きや会議、大きな商談などを行う拠点。

私が帝都に滞在する私邸も兼ねる予定だ。

顧客や同業者に対する見栄えなども考えると、それなりの建物でなければならぬ。

後者は実際にお客様が足を運んで商品を購入する販売店。当然、見栄えは大事だが、こちらは更に立地も重要になってくる。

「ここはなかなか良いわね」

選定を行った商会員を伴って不動産屋の案内でいくつかの物件を見て回り、目に止まったのが目の前の屋敷である。

帝都に住む法衣貴族の屋敷や地方の大物貴族の別邸がある貴族街に近い高級住宅地。

その中心とは言えないが、それなりに利便性の良い場所に建てられた大きな屋敷だ。

元は何処かの男爵家が見栄で建てた別邸だったらしいが、維持費を捻出出来ずに手放したらしい。

多少手を入れる必要は有るが、なかなかの掘り出し物だ。

予算的には少しオーバーするが、これ程の物件、一度逃すと次の機会は得られないだろう。

一通り中を検めた私はその場で不動産屋と契約を結ぶ。

まだ小娘とすら言える私の即決振りに少し驚いた様な顔を浮かべるが、直ぐに笑顔で対応する不動産屋。

私の私邸を兼ねた拠点が決まったので、彼が操る馬車は商館候補の物件に向かって進み始めるのだった。

## 帝国への到着（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 帝都の人材

私の商会の主力商品である化粧品のマインターゲットは貴族女性だ。

いずれは一般庶民でも購入出来る安価な商品も開発したいと思っているが、現状は客単価が高く、購買力のある貴族や一部の富裕層に狙いを絞っている。

その為、商館は貴族街に近い高級店の立ち並ぶ通りの一角に立つ大きな物件に決まった。

かなり値は張るが立地を考えれば仕方がない。

以前は商館ではなく、高級宿だった物件だ。

その為、馬車を停めるスペースが広く取られており、多くの個室がある。

貴族の買物物は、庶民の様に陳列された沢山の商品の間を練り歩き、購入する物を吟味したりはしない。

大抵は個室に案内されて、接待を受けながら、希望の商品やおすすめの商品を丁寧に紹介されるのだ。

その為、貴族を歓待出来る個室が複数ある物件は都合が良い。

早々に契約を交わした私達は、不動産屋の仲介で改装業者を紹介して貰った後、逗留している宿に戻って来た。

すると、ルーカス様の所に送った者が戻って来ていた。

ルーカス様は明日には時間を作ってくれるらしい。

「となると今日の午後は特にする事はないわね」

先行していた商会員達はとても頑張ってくれて、早いうちに物件の購入が終わったので今日の予定が空いたのだ。

「エリー様、それならば人材を探したいのですが」

「人材？帝都で活動する商会員を集めるのはまだ早いわよ」

「いえ、商会員ではなく使用人を増やしたいのです」

「使用人？」

「はい、帝都の屋敷を維持する者が必要ですし、エリー様付きの従者も必要になります。

私が出来れば良いのですが、流石にこれ以上事業を拡大した場合、手が足りなくなります。

ですので、私の部下として使える人材を雇いたいです」

「そうね……………うん、確かにその必要があるわね」

ミレイは優秀だ。

私の従者としては勿論、商会員としても動いて貰う必要がある。

その為、四六時中私に付いている事が出来ない。

ミレイは以前からそれを気に掛けていた。

「そうになると、商業ギルドで募集しましょうか？」

「いえ、屋敷の使用人はそれで良いと思いますが、エリー様付きの従者を普通に雇うのは少々不安があります」

「そうね」

「ですので、私は奴隷を購入するのが良いと考えます」

奴隷とは労働力として金銭で売買される人間だ。

基本的に奴隷には契約魔法の一種がかけられる為、まず裏切られる事はない。



「奴隷か……」

奴隷には大きく分けて2つの種類がある。

犯罪を犯した者が懲罰としてなる犯罪奴隷。

鉦山などで一定の期間、強制労働させられる軽犯罪奴隷と、人権が剥奪されて、死ぬまで薬の実験や危険地帯での作業などをさせられる重犯罪奴隷がある。

借金奴隷はお金で親に売られた者や借金が返せずに自らを奴隷商に売った者。

犯罪奴隷とは違い、借金奴隷の人権は保護されており、意図的に死亡させた場合は殺人の罪に問われるし、所有者には奴隷の生命を保護する義務がある………表向きには。

一応、法で保護されてはいるが、実際にはあからさまに虐殺でもしない限り、大きな問題になる事はない。

まあ、私はそんな事をするつもりは無い。

ならば契約魔法で縛られる奴隷は悪くない選択肢か。

「分かったわ、今日の午後は奴隷商に行きましょう」

宿では昼食を済ませた私達は帝都の一角、奴隷を扱う商館が集まる場所に向かった。

スラムに近いその場所は少々治安が良くない様で、ルノアはミレイとしっかりと手を繋いでいる。

奴隷を扱う商館の一つに入った私達は店主の案内で牢に入れられた人々を見て回る。

あまり衛生的ではない牢の中に数人が詰め込まれており、食事も最低限しか与えられていないのか、あまり体調も良くない様に見えた。

私やミレイはコレもこの世の理として理解しているが、ルノアは奴隷の扱われ方にシヨックを受けたのかミレイの背後に隠れて目を逸らしている。

「ありがとう、少し検討させて貰うわ」

店主にそう伝えて店を出る。

「あまり良い人材は居ませんでしたね」

「ええ、奴隷になるのは親に売られた子供や事業に失敗した商人が多いから、そこまで優秀な者は少ないのでしょうかね」

「そうですね。稀に何らかの事情で才能ある者が売られている事も有るのですが……」

「次の商館に行きましようか。……………ルノア、大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

私はルノアの頭を撫でながら次の商館に向かって歩き出すのだった。

## 帝都の人材（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 帝都の大商人

いくつかの奴隷を扱う商館を回ったが、ピンと来る者は居なかった。

そして陽も傾き始めた頃、私達は一軒の商館の前に立っていた。

その商館は今まで立ち寄った商館とは違い、商館の周囲まで綺麗に掃除され、騎士服を模した上等な衣服を身に着けた用心棒が2人、商館の入り口に立っている。

その首元には奴隷に施される契約魔法特有の文様が刻まれている。

彼らは奴隷の様だ。

しかし、今までの商館で見た奴隷とは違い、血色も良く、しっかりと鍛えられた体をしている。

「いらつしゃいませ。此処は奴隷を扱っておりますセドリック商会でございます。

当商会にご用でしょうか？」

用心棒の奴隷はそのゴツイ見た目とは裏腹に丁寧で礼儀正しく用件を尋ねて来た。

「ええ、奴隷を見せて貰っても良いかしら？」

「畏まりました。直ぐに案内の者と呼んでまいりますので少々お待ち下さい」

私は人を呼びに行く用心棒の背を見送りながら、彼が言ったセドリック商会の名前を反芻していた。

なるほど、此処が《教育者》セドリック・ルーインスの商会だったのか。

セドリック・ルーインスは帝国商業ギルド評議会の議員の1人だ。

帝国商業ギルド評議会は帝国の財界を支配する大商人によって構成される組織で、国政にすら影響力を持つ。

その議員である大商人は下手な貴族などよりも遥かに強い権力を有する大物だ。

評議会の議長を務める帝国商業ギルドのグランドマスター、《先見伯》アルバート・グイード伯爵。

帝国一の鍛冶師、《神工》ガイエン・ドラファン。

各地に数多くの支店を持つ宿屋、《千里眼》ロットン・フライウオーク。

貴族すら恐れる金融屋、《頭目》ダルク・ノーチエス。

宮廷薬師をも凌ぐ天才薬師、《漆黑》ユウカ・クスノキ。

娼婦から歓楽街の支配者にまで成り上がった女傑、《銀蝶》ヒルデ・カレード。

そして、宮廷にまで人材を提供している奴隷商人《教育者》セドリック・ルーインス。

この7人が帝国の財界を支配していると言っても過言ではない。

「お待ちせいたしました。ご案内致します」

用心棒に連れられてやって来たメイド服姿の女性は洗練された動作で丁寧に頭を下げると、私達を商館の中へと導いていった。彼女の首元にも隷属の紋様が見える。

女性に連れて行かれたのは上等な調度品が品良く配された応接室だった。

そこでソファに座った私達は彼女が入れてくれた紅茶を頂く。上等な茶葉だ。腕も良い。

しばらく待っていると、ドアがノックされ、女性がドアを開け穏やかな顔の男が部屋に入ってきた。

「お待ち致しました。」

私は当商会の商会長、セドリック・ルーンズと申します」

男の自己紹介に私は僅かに目を見開く。

まさか、《教育者》セドリック・ルーンズ本人が直々に現れるとは思わなかった。

私が名乗ろうと口を開く前に、セドリックは笑みを浮かべて言う。

「お初にお目に掛かります。」

トレートル商会会長、エリー・レイス様。

ミレイ・カタリア様とルノア・カールストン様も。

お会いできて光栄でございます」

私は、笑みを浮かべ感情を読ませないセドリックに油断ならない  
気配を感じていた。

## 帝都の大商人（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



帝都の奴隷商（前書き）

誤字報告、めりがとひいれごます。

三（一）三

## 帝都の奴隷商

「何故……私共の名前を？」

私の問いにセドリックは笑みを崩さずに答える。

「設立から一年程の短期間でレブリック子爵領でもトップクラスの商会になったトレートル商会ですからね。」

その噂はその気が無くとも耳に入りますよ」

「セドリック会長程の大商人に名を知って頂いているとは光栄ですわ」

「私も此処でエリー会長と知己を得ることが出来て嬉しく思います」

私達は笑顔で握手を交わす。

お互いの本心を隠して笑顔で友好を口にするこの感じ、なんだか久しぶりね。

ああは言っているが、たかが子爵領の一商会の話だ。

帝都の大商人が注目する程の話かと言えば疑問を呈さざるを得ない。

では何故、彼程の商人が私を気に掛けていたのか。

おそらく私の出自を知っているのだろう。

だが、そんな事は一切匂わせる事なくセドリックは商売の話を持ち出した。

「それで、本日はどのような奴隷をお求めで？」

「ほう、では身の回りの世話が出来る者をお探しですか？」

「はい、エリー会長に付いて頂くので性別は女性で、種族は問いません。」

領を跨いでの移動も多くあると思われるので、旅について来れる者が好ましいです」

「承知致しました。ご用意致しますので暫くお待ち下さい」

綺麗な礼を残してセドリックは部屋を後にした。

そしてしばしの間、お茶とお菓子を相手に時間を潰していると、セドリックが部屋に戻って来た。

「ご用意が出来ましたので、お手数では有りますがご足労願えますか？」

「ええ、分かりました」

セドリックについて部屋を出て、その背を追って歩き始めた。

商会の廊下は清潔で品の良い絵画や彫刻が飾られている。

廊下はいくつかの広い部屋が面しているが、その部屋には扉がなく廊下から部屋の中を窺う事が出来た。

ある部屋の中では子供の奴隷が机に座り、前方の初老の奴隷から

算術を習っていた。

別の部屋では若い女性奴隷が年嵩の奴隷から裁縫を教わっている。廊下の窓から見える中庭では体格の良い男達が剣の素振りをしていた。

彼らが身に着けている衣服は質素ではあるが、清潔で髪や髭も綺麗に整えられている。

「他の奴隷商会とは随分と違いますね」

「ええ、他の商会ではいかに奴隷に掛かるコストを減らすか、と言う方法で利益を上げようとされていますね。」

ですが、私の商会では奴隷に教育を施して付加価値を上げております。

読み書き算術が出来る奴隷の方が価値があるのは自明の事です。

何も出来ない者より、何かの技能を持つ方が価値があります。

ですから私は奴隷達の適性に合わせて能力を伸ばしているのですよ。

それに奴隷は商品で有りますが、命ある人間でも有ります。

健康で清潔にしている方が血色も良くなる。

その分、値段も上がるのですが、価値を理解してくれる方は多く居ますよ」

セドリックの考え方は今までに無い物だった。

最下層の労働者と言う奴隷のイメージから逸脱する物だ。

だが、それは非常に合理的でもある。

彼の商会の扱う奴隷は非常に高い能力を持っていると知れ渡り、それはブランドとなっている。

他の商会も、それを真似る事も考えただろうが、教育には非常にお金が掛かる物だ。

資金力で劣る上、すでにブランドとして確立されているセドリック商会に勝てずにいるのだろう。

「さあ、どうぞ」

セドリックに促されて部屋に入ると、調度品は僅かで、机と椅子が有るだけのシンプルな部屋だった。

私達が椅子に座り待っていると、セドリックに連れられて妙齡の女性が入ってくる。

その女性が候補の奴隷の様だ。

その後も数人、候補の奴隷をセドリックが紹介する。

その誰もが接客用なのだろう、上等な衣服に身を包み、礼儀正しく面談を受ける。

その技能もマナーも奴隷とは思えない程洗練されていた。

「次の者で最後です」

最後に通されたのはルノアとそう変わらない10歳程の少女だった。

緊張しているのか、少し動きは硬いが丁寧に頭を下げる。

その頭の上では猫の耳がピクピクと震え、尻尾が所在なさに揺れている。

猫人族だ。

「ミ、ミーシャ・テイルと申しまひゆ」

言葉尻を囁んだミーシャは頬を染めてプルプルと震える。

「失礼しました。このミーシャは購入希望のお客様との面談は初めてなので少々緊張している様でして」

すかさずセドリックのフォローが入る。

「ミーシャは見た通りまだ幼いので、現時点での技能は先程ご紹介した者達に劣りますが、訓練の成績は優秀です。」

獣人族ですので魔力は低く、魔法は弱い【身体強化】しか使えませんが、元の身体能力が高いので長旅にも十分付いて行けるでしょう。

それと、護衛とまではいきませんが、自衛程度には戦えます」

「あら、戦闘経験が？」

「ええ、奴隷になる前は両親と行商をしていたそう、父親から短剣術を習っていたそうです。」

当商館でも簡単な訓練は付けて有ります。

教官によると、実力は初級冒険者として及第点くらいだと」

ミーシャは行商の途中で野盗に襲われ、父親を亡くし、母親もその時の傷が原因で亡くなったそうだ。

まだ幼い彼女は、野盗に財産を奪われた上、母親の治療の為の借金も有り、1人で生きて行く事も出来ず、死ぬよりかは、と自らセドリックの所に訪れたらしい。

うん、自衛が出来ると言うのは大きいわね。

これからの成長次第ではかなり化けるかも知れないわ。

私は視線をミレイに移すと、彼女も僅かに頷いた。

「ではセドリック会長、このミーシャを買い取りますわ」

## 帝都の奴隷商（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 帝都での予定

私は指先を針で刺し、プクリと滲んだ赤い血をミーシャの首元の文様に触れさせる。

そこにセドリックが固有魔法の【隷属】を使う事でミーシャの主人が私へと変更される。

「これで契約は完了です」

「ええ、ありがとうございます」

「ミーシャ、しっかりとエリー会長にお伝えしなさい」

「は、はい、セドリック様。今までお世話になりました」

ミーシャはペコリと頭を下げる。

その言葉は本心らしく、セドリックに向けられる瞳には、他の商会で見た奴隷が商会主に向ける負の感情は読み取れなかった。

セドリックは奴隷達と友好的な関係を築いていると言ったことか。

セドリックに見送られ、商館を後にした私達が宿に戻って来たときには、すっかり日も暮れてしまっていた。

「今日はもう各自好きにして良いわよ。」

ミーシャはミレイに預けるわ

「畏まりました」

「は、はい！よろしく願います、ミレイ様」

「はい。本格的な指導は屋敷の用意が整ってからになります。」

しばらくはトレートル商会の業務や従者として必要な知識等を座学中心に教えて行きます」



「はい！」

ミーシャの教育はミレイに任せておけば良いわね。

あと決めないといけないのは賃金……別に奴隷なので必要ではないけれど、お小遣いくらいはあった方が良いでしょう。

いくら奴隷だからと言って休みや報酬も無く働かせては効率は落ちる物だ。

それにミーシャが真面目に働いてくれるなら、いずれは奴隷身分から解放して正式に従者として雇っても良い。

私は今後に備えて決めなければいけない事柄を整理しながら、その日は眠りにつくのだった。

ギンッ！

硬い金属同士がぶつかり合う高い音が鳴り響き、騎士の手から刃を潰した訓練用の模擬剣が宙へと弾き上げられた。

「ま、参りました」

喉元に穂先を潰した槍を突き付けられた騎士が降参の意を口にする。

騎士の言葉に槍を下ろしてフリードは小馬鹿にした様に言う。

「ふん！訓練が足りないんじゃないのか？」

我が国の騎士としての自覚を持って」

「も、申し訳ありません殿下。ご指導ありがとうございます」

「しっかりと訓練しておけ！」

フリードは頭を下げる騎士に満足げに頷くとそう吐き捨てて訓練場を後にした。

騎士に訓練をつけてやり、上機嫌なフリードが汗を流した後、もう一度騎士に言葉を掛けてやろうと、訓練場に向かった時だ。

訓練場横の更衣室から声が漏れていた。

「しかし殿下にも困った物だな」

「全くだ。わざと負けるのも結構神経を使うと言つのに」

「だが勝ってしまうとコニーの様に辺境の砦に飛ばされるかも知れん。」

ならわざと負けて、煽てておく方が賢いだろう」

「殿下もお父上である陛下の血を引いておられる。筋は悪くないのだがな」

「いくら才能があつたとしても努力も無く強くはなれんだろう。」

せめてエリザベート様の半分でも努力して頂ければ少しはマシになるのだろうがな」

「全くだ」

「はっはっは」

ギリッ！

フリードが奥歯を噛み締める。

今すぐ部屋に乗り込んで不敬な騎士共を叩き斬りたいが、流石に

そんな事をすれば王太子とは言え、国王の怒りを買うだろう。

フリードは怒りの籠った瞳に暗い炎を燻らせながらその場を後にした。

## 帝都での予定（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 帝都の主

「久しぶりだな、エリー会長」

「お久しぶりですわ、ルーカス様」

翌日、私は帝都のレブリック子爵邸でルーカス様と面会していた。

「失礼致します」

メイドが私とルーカス様の前にカップと焼き菓子を置く。

「あら？」

私はカップに手をつけると、そこに満たされた物が紅茶ではない事に気付いた。

「珈琲ですか。珍しいですわね」

「ああ、南大陸からの輸入品だ」

珈琲は珈琲豆を焙煎した南大陸でよく飲まれているお茶だ。

このあたりの国の気候では栽培出来ないので珍しい物だ。

「苦手なら紅茶を用意させるが？」

「ありがとうございます。ですが大丈夫ですわ。私、結構好きなんです」

芳ばしい香りを楽しみながら湯気を立てる黒い液体を喉に流し込む。

強い苦味と僅かな酸味、その奥に隠れるフルーツの様な風味を楽しむ。

珈琲を飲みながら、時節の挨拶やらお互いの近況などを軽く話した後、ルーカス様は本題を切り出した。

「昨日、皇帝陛下に謁見して来た」

「そうですか、アレを献上して頂けましたか？」

「ああ」

ルーカス様には皇帝陛下に献上する為の特製化粧品セットを預けてあった。

帝室の女性、皇妃様や皇女様、全員分だ。

皇帝陛下にも整髪剤やコロンなどを用意した。

「エリー会長の事は事前に手紙で報告はしてあったが、今回は直接説明を求められてな……」

「お手数お掛け致しますわ」

「まあ、仕方ないさ。」

亡命に手を貸すと決めた時にこの程度は覚悟していたからな」

「それで……皇帝陛下は私の事を何と仰っていたのですか？」

「取り敢えずは静観だ。」

動向の報告の必要は有るが、今のところエリー会長の行動は帝国に利益を齎す物だとして国は干渉するつもりは無いらしい」

「そうですか。少し心配でしたが、それなら問題は有りませんわね。

私の報復は帝国に利益を齎しますからね」

「……………そうだな」

「ふう」

深夜と言つには少し早いぐらいの時間か。

手にしていた羽ペンを置き、軽く肩を解してユーティア帝国の頂点に座す男、ダドリー・ユーティアは1日の執務を終えた。

「お疲れ様でした、陛下」

「うむ」

書き上げた書類を秘書に手渡したダドリーは護衛の近衛兵を伴つて皇族の居住区に向かつて城の中を歩いて行く。

廊下ですれ違つメイドや兵士が頭を下げるのを片手を上げて労い、居住区の入り口までやって来た。

「此処までで良い。ご苦労だった」

「はっ！お休みなさいませ、陛下！」

ピシツ！と敬礼する近衛兵と別れ、皇族の居住区の中でも主に家族が寛ぐリビングに入ると妻と娘が少し興奮した様子で何やら楽しみに話していた。

「あ、お父様」

「お疲れ様でした、ダドリー様」

「ああ、今日はとても疲れたよ。何を話していたんだい？」

「はい、今日、ルーカス子爵が献上してくれた洗髪剤や整髪剤、香油を使つてみたんです」

「今までの物とはまるで違いますわ」

嬉しそうに新しい化粧品について語る2人に、昼間に謁見した若い貴族との会話を思い出す。

一年程前、隣国の公爵家の姫が亡命して来たと言う話だ。

それもただの少女では無い。

王太子の元婚約者であり、王国の政治に深く関わる要人である。

王国では現在指名手配されている様だが、裏では血眼になって探しているらしい。

隣国の要と言える要人が手元に居る。

それも彼女は王国を恨んでいるらしく、力を貯めて復讐しようとしている。

その復讐は最終的には帝国の利益となるだろう。  
それを考えると……。

「うう……」

胃が痛い。

「お父様、大丈夫ですか？」

「あ、ああ、何時もの薬はあるかい？」

「はい、直ぐに持って来させます」

ダドリーは決断力と統率力を持つ偉大な皇帝。

臣民達からはそう思われているのだが、実際は気が小さく繊細な性格だった。

たった1代で帝国の版図を広げて来た野心家などと言われている



が、そんな物はその場の流れでそうなったただけだ。

ダドリーは父から受け継いだ帝国を可もなく不可もなく統治する凡百な皇帝であるつもりだった。

だが、攻め込んできた他国を撃退したり、魔物に襲われ国に見捨てられた田舎の村を保護したりしている内に、いつの間にかこんな大帝国になっていたのだ。

「お父様、薬です」

「ああ、ありがとう」

薬を受け取り水で流し込む。

東方の島国からやって来た天才薬師、ユウカ・クスノキに頼み込んで作って貰っている特製の胃薬だ。

最近はこの薬が手放せない。

「うう、エリザベート嬢が活躍すれば帝国の利益になる。

だが、同時にルーカスも力をつけて行く事になるよなあ」

「父上、まだ彼を辺境に置いた事を悩んでおられるのですか？」

リビングに新たな人物が入って来た。

ダドリーの息子、皇太子である。

「それはそうだろう。あんな配置、王国に対する盾になれと言っている様な物だ。

ルーカスは私を恨んでいるに違いない」

「父上はネガティブに考えすぎです。

確かにそう言った側面も有りますが、彼の功績は正当に評価しています。

ルーカスだってわかってきていますよ」

「そうだろうか？」

「ええ、王国のエリザベート・レイストンを引き入れたのだから、彼のお手柄じゃないですか。」

聞けばレブリック子爵領の税収は彼女が来てから跳ね上がったそうですよ」

「それはそうだが……」

「彼の統治は優れていますし、近く何か目立つ功績を上げれば陞爵して良いのでは有りませんか？」

「そうか……そうだな」

この日、気を取り直したダドリーは息子と共に、妻と娘の化粧品談義を聞かされながら夜を過ごすのだった。

## 帝都の主(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 帝都の社交界

煌びやかな衣装に身を包んだ貴人達が溢れるパーティ会場で、私はワインを片手に人を観察していた。

久しぶりの社交界だが、以前の様な国を背負うプレッシャーなどは皆無なので気楽な物だ。

「エリーさん、ご紹介したい方々がいらっしやるのだけれどよろしいかしら？」

「勿論ですメラニー夫人」

この時期、帝都でいくつも開かれている社交パーティーの一つ。私はその場にメラニー夫人の紹介で参加していた。

メラニー夫人はレブリック子爵領の社交界の中心的人物で、帝都でも顔が広い人物だ。

彼女はトレートル商会設立直後からの顧客で、私も何度かお茶会に誘われて交流していた。

今回の社交シーズンにメラニー男爵が参加すると聞いた私は、メラニー夫人に帝都で貴族令嬢やご婦人方に紹介して欲しいと頼んだのだ。

私の頼みを快諾した彼女の紹介で、帝都の貴族達にトレートル商会の宣伝をしているのだ。

「エリー会長のお話はメラニー夫人からお聞きしておりますわ」

「久しぶりにお会いしたメラニー夫人が以前にも増してお美しくなられていて驚きました」

「是非、エリー会長の商会の化粧品を購入させて頂きたいですわ」

自己紹介もそこそこに、メラニー夫人に紹介された方々が化粧品の話を始めた。

元々、その美しさと人当たりの良さで社交界の華と謳われたメラニー夫人がその美しさに磨きを掛けて来たのだ。

その秘密を知り、あわよくば自らも手に入れたいと思うのは当然の事だろう。

「私の商会は現在、帝都での営業に向けて準備しておりますわ。生産力の都合で販売は会員制にするつもりです。」

ああ、皆さまはメラニー夫人のご紹介ですから、優先的に会員権を差し上げますわ」

「まあ！本当ですか」

「ありがとうございます、エリー会長、メラニー夫人」

「営業開始を楽しみにしておりますわ」

正直に言えば、現在の規模になったトレートル商会の生産力はかなりの物だ。

だが、会員制にするのは希少価値を上げて客単価の上昇を狙うのと同時に、トレートル商会の会員権を持つことが貴族女性の一種のステータスになる事を狙っている。

更にはインフルエンサーであるメラニー夫人に対するサービスと  
言う側面もある。

彼女に紹介して貰ったお陰で会員権を手にした人々はメラニー夫人に借りを作ることになる。

つまり、私の商会の宣伝をしてくれるメラニー夫人への報酬と言  
うわけだ。

「もし宜しければ皆様に我が商会の化粧品を試供品セットをお送り  
させて頂きますわ」

メラニー夫人が紹介してくれた未来の顧客の心をがっしりと掴む  
為、私は笑顔でセールストークを続けるのだった。

パーティの帰り、馬車で送ってくれると言うメラニー夫人の誘い  
を丁寧固辞した私は、酒で少し火照った体を覚ます様に夜風を浴  
びながら帝都を歩いてきた。

「この時間になりますと随分と静かになりますね」

「そうね。昼間は騒がしいのにまるで別の場所みたいね」

少し遠回りをして昼間は賑わっている市場の辺りを散歩しながら  
ミレイと2人、歩いている。

「てめえ！待ちやがれ！このアマ！」

すると、直ぐそばの路地の奥から男の怒鳴り声が聞こえた。

「喧嘩かしら？」

「帝都とは言え、裏通りは治安が悪い場所も多い様ですね」

「追われているのは女性みたいだし、少し覗いておきましょうか。」

もし、何か有れば寝覚めが悪いし」

「……………私としてはあまり賛同致しかねますが……………」

「まあまあ、街のチンピラ程度が私達をどうにかするなんて不可能でしょ」

「はあ」

私は渋るミレイを連れて路地裏へと向かっていった。

## 帝都の社交界（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## 帝都の夜

路地の奥には広場の様に少し広くなつた場所があつた。  
そこで柄の悪い男達が1人の少女を取り囲んでいた。

「もう逃げられねえぞ、コラッ！」

「てめえ、あんな舐めた真似しておいてタダで済むと思つてんのか、  
ああ！」

「娼館に売り飛ばしてやるから覚悟しとけよ！」

男達が少女に凄む。

私とミレイは少女を助けるべく踏み出して……………止めた。

「さつきから鬱陶しいツスね！」

「私が何をしたつて言うんツスか！」

「ああん？てめえがイカサマしたつつう事は分かつてんだぞ」

「痛い目に遭いたくなければ大人しく金を返しな」

「はん！私がイカサマしたつて証拠でもあるんツスか？」

「んだとコラ！」

男が拳を振り上げるが、少女は男の拳よりも早く懐に飛び込み足を払い男を空中でクルリと回して石畳に叩きつけた。

「いっふっ」

「てめえ！」

もう1人の男が殴り掛かって来るが、少女はその拳を正面から受け止める。

「なに」

男が驚愕の声を上げるが、私やミレイには少女が手に魔力を纏っているのが分かる。

「ふん！」

少女の蹴りが男の水月に撃ち込まれ意識を奪う。

「ちっ！」

最後の1人が懐からナイフを取り出した。

「アイス・バレット【氷弾】」

「え」

私が打ち出した小さな氷の礫がナイフを弾き飛ばす。その隙に少女の拳が男の顎を捉えた。

「怪我はないみたいね、シスターティード」

倒れ伏す男達を無視して私は少女……私服姿のティードに声を掛けた。

「エリーさん！ミレイさん！いやぁ助かったツスよ。」

助太刀、ありがとございますツス」

「別に私が助けなくても貴女なら大丈夫だったでしょうけどね。」

それで、なんで追われてたの？」

「ああ、コイツらが私がカードでイカサマしたって言い掛かりを…

……………」

ティードはそこで言葉を止める。

「…………… ああ、その、そう！酒場で女神様の愛を説いていた私に絡んで来たんツスよ！」

随分と苦しい言い訳だ。

「成る程、ギャンブルですか」

ミレイの冷たい視線がティードを射抜く。

「ちっ、違うツス！私が女神様の愛によりカードの絵柄を揃えて見せたら、彼らがお布施としてお金をくれたんツスよ」

「ギャンブルじゃない」

「ギャンブルですね」

「…………… し、神殿には内緒にして欲しいツス」

ティードは必死に視線を逸らしていた。

その後、宿に戻るティードと共に夜の街を進む。

「へえ、じゃあ帝都で商売を始めるのも直ぐって事ツスか？」

「ええ、今は商館の改装待ちの間に貴族のパーティで宣伝中って所ね」

「貴族様のパーティーツスか！きつと凄い料理とか、いいお酒とか出るんツスよね？」

「まあ、そうね。より美味しい物、より珍しい物を出すと言うのはホスト側の経済力を示す示威行為だから貴族は張り切っているわね」  
「良いツスねえ、貴族様は。私らみたいなパンピーとは大違いツス」

「そうでも無いわよ。中央の大物貴族なんかは別として、領地も持たない中、下級の法衣貴族なんかは社交シーズンのパーティーの為に普段は必死に節約したりしているのよ。」

貴族としての見栄は大事だから、外から見ると分には毎日贅沢な生活をしている様に見えるけど、裏では裕福な平民以下の暮らしだったりする事もあるわ」

「そうなんツスか？私はてっきり貴族様はみんなお金持ちだと思っていたツス」

「まあ、人によるかしら？」

法衣貴族でも副業で儲けている人もいるしね」

「でもってそんな貴族様からお金を搾り取るのがエリーさんって訳ツスね」

ティーダの言葉に私はクスリと笑う。

「ええ、その通りよ」

話をしている内にティーダの宿に到着した。

「じゃあ私は此処で」

「ええ、あ、そうだ！

私、そろそろ帝都を発つ事にしたんツスよ」

「あら、そうなの？」

「ええ、カードで……げぶん、げぶん。善意の寄進で路銀も貯まっ

たので迷える仔羊達を救いに旅立つつもりッス」

「そうなの、目的地は何処に？」

「しばらくは帝都を拠点にしつつ、近くの小さな村々を廻るつもりッス。」

ちよくちよく帝都に帰って来るッスから、エリーさんのお店が開店したら会いに行くッスよ」

「そう、楽しみにしているわ」

こうして私は、新しく出来た少々素行のよろしくない友人と暫しの別れを交わしたのだった。

奥歯を噛み締めてズカズカと貴公子としては有り得ない粗暴な態度で上等な絨毯の上を進むのはハルドリア王国の王太子、フリード・ハルドリアだった。

「どいつもこいつも、エリザベート、エリザベートと、この国の王太子はこの俺だぞ！」

彼はつい先程、王城に勤めるメイド達がエリザベートが居なくなつた事を嘆いているのを聞いたのだ。

騎士も下女も文官も、口を開けば『エリザベート様が居れば……』だとか『エリザベート様なら……』と言つ。

「奴は指名手配犯だぞ！国への反逆者だ！」

なのに何でこの俺を差し置いて……」

フリードは苛立ちながら私的なエリアの扉を開いた。

「お帰りなさいませ、フリード様」

扉を開く音を聞いたのか、フリードの私室から続く応接室からシルビアが顔を出した。

「ああ、シルビィ。ただいま。

君は今日も美しいね」

「まあ、ありがとうございます。フリード様」

シルビア・ロックイートは正式にフリードと婚約してからと言う物、こうしてフリードの所に入り浸っていた。

初めは王妃としての教育を受けさせようと文官達が手配していたのだが、数日で音を上げたシルビアはフリードに泣き付いたのだ。その結果、フリードが手を回した為、王妃教育は当初の予定の10分の1程の速度でしか進んでいない。

「そうですね、フリード様もこちらへ」

シルビアがフリードを応接室へと誘う。

フリードが応接室に入ると、ソファに座っていた女が立ち上がりフリードに頭を下げた。

「お久しぶりです、フリード様」

「ああ、クリスカ」

クリスはシルビアの実家であるロックイート男爵家から紹介された行商人だ。

彼女が持ち込む異国の品々はフリードとシルビアも気に入っており、こうしてフリードの私的なエリアに立ち入りを許す程に重用していた。

シルビアにねだられ、いくつかの商品を購入した後、話題は雑談へと移っていった。

「成る程、城内の者がフリード様を蔑ろにされているのですか」

クリスは王家に紹介されるだけあり、話し上手でついフリードは最近の苛立ちの種について話してしまっていた。

「フリード様を差し置いて国政に口を出すエリザベートとか言う者を擁護するとは、国に仕える者なのに嘆かわしい事ですね」

「ああ、正にその通りだ」

「うーん、やはり、此処はフリード様が今一度、王太子としての威厳を示されるべきではありませんか？」

「威厳か……しかし、どうすれば良いのだ？」

「そうですね。フリード様の威厳を誰にでも分かる様に示す良い方法はないかしら？」

首を捻るフリードとシルビアにクリスは少し考えてから答える。

「上に立つ者が分かりやすく威厳を示すにはやはり武勲ですね」

「武勲か」

「はい。民とは自分達を守ってくれる強い為政者を求める物です。」

兵を率いて戦で手柄を立てれば誰もフリード様を蔑ろに出来なくなるでしょう」

「戦か……」

「ええ、しかし王国の周囲で敵対しているのは帝国くらいですよ。その帝国と王国は今不戦協定を結んでいますから、属国ならともかく、王国が直接軍を出して帝国に攻め込むのは現実的では無いですね。」

「此処は多少効果は低いですが、魔物の討伐などで少しずつ功績を上げるべきではないでしょうか？」

「ふむ、魔物の討伐か……」

フリードはクリスの提案を思案するのだった。

クリスが帰った後、フリードは押ししている仕事を終わらせる為、執務室へとやって来た。

「ちっ！」

少し目を離していた間に、フリードの机に積まれた書類がまた増えていく。

ドカリと椅子に座り、書類を手に取る。

属国への支援に関する書類だ。

「おい、何だこの書類は！」

「はい？何か不備がございましたか？」

「何故、俺が一から支援内容を決めなければならないのだ！草案くらいお前らで決めておけ！」

「も、申し訳有りません……しかし、コレは王家の方が決める



物ですので……」

「言い訳は要らん！」

フリードは書類を文官に投げ付ける。

これは言うまでもなくフリードの仕事なのだが、今まではエリザベートが各部署や被支援国と折衝を行って支援内容を決めていた為、フリードは最後に書類にサインを入れるだけの仕事しかしていなかった。

「たく、無能共が！大体属国などいちいち支援してやる必要無いだろう」

だが、悪態を吐くフリードの脳裏に先程のクリスとの会話が過ぎった。

「支援か……そうだな、属国への支援の決定権は俺に有るのだったな」

「え？」

「何でもない、お前はさっさと仕事をしろ！」

フリードの呟きは側にいた文官にも届かない程の小さな物だった。

な

帝 援

の 為 の で ならば を 供 す

る。

もし、貴国が ならば 事も 厭わない。

貴国が賢明な 断をす 事を願。

ハル ア王国、王太子 フリー ・ハルド

ハルドリア公国、歴史編纂局所蔵  
『焼け焦げた文書』より

帝都の夜（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

辺境からの急報（前書き）

誤字報告あらいがういじぶらま。

三（一）三

## 辺境からの急報

商会の支部を兼ねる帝都の私邸で次々に書類を仕上げている私は、キリの良い所でグツと伸びをした。

「エリー様、珈琲をお持ちしました」

「ありがとうございます、ミーシャ」

機嫌よさそうに尻尾を揺らしながらミーシャが珈琲を淹れてくれた。

「ルノアとミレイも休憩にしましょう。」

「ミーシャも休むと良いわ」

私はそれぞれ書類と格闘していた2人と追加の珈琲を用意していたミーシャに声を掛けた。

「帝都での商いも順調ですね」

「そうね。事前にパーティーで影響力のある人達に宣伝出来たから、随分と楽が出来たわ」

新興であるトレートル商会の弱点である生産力に関してもある程度解決の目処が立っている。

それとなく生産力の不足を口にしていた事で、複数の貴族から資金提供の話が来たのだ。

これは正直助かる。

帝都に出てきて大きな買い物が続き、かなり資金が減っていたが、この資金提供のお陰で更に事業を展開することが出来た。

レブリック子爵領の東側の田舎にトレートル商会の生産の拠点となる場所を作る事が出来たのだ。

狩猟と僅かな農耕で暮らしていた小さな村をまるまる雇い入れて、化粧品材料となる植物の栽培、加工を一手に行う生産拠点を作っている。

これが完成すれば生産コストを抑えて庶民用に安価な化粧品を作り出す事も可能だ。

「ふう、さてミーシャ、この後の予定はどうだったかしら？」

「は、はい、この後はブレン商会のブレン会長と会談、その後は商館の視察、夜にはナツバ子爵様との会食の予定です」

ミルクと砂糖をたっぷり入れた珈琲をふーふーと冷まして飲んでいたミーシャが慌てて手帳を取り出して答えた。

「ブレン商会ですか。そろそろ保たなくなってきたのでしょうか？」

ルノアが小首を傾げて聞く。

ミーシャと同じ歳である少女だが、意外にも彼女はブラック派らしく、ミルクも砂糖を入れずに美味しそうに珈琲を飲んでいる。

「そうね。ブレン商会は主に口紅を作っている商会だけどそこまで大きくは無いわ。」

私達と競合して売り上げが激減している筈よ」

「では後は何時もの様に？」

「ええ、恭順するのなら傘下に加えましょう」

帝都に来てからそれなりの暗闘があった。

早々に白旗を揚げて傘下に加えて欲しいと言ってきた商会や自身の商品の品質向上やサービスの強化に努めた商会は正統派だ。

中にはトレートル商会の商館改装を妨害しようとしたり、商品にクレームをつけたりして来る者、酷い物だと私の暗殺を企てていた者も居た。

前者は別として、非合法な手段でトレートル商会に攻撃して来た商会には消えて貰う事になったが、その販路やまともな従業員はしっかりと回収、それによってトレートル商会が更に大きくなった結果、努力によって対抗しようとしていた商会もトレートル商会の傘下に加わったり、拠点を帝都から別の地方へ移したりと言った対応をせざるを得ない状況となっていた。

今日のブレン商会もおそらく降参宣言だろう。

「ナツバ子爵との会食は私とルノアの2人でいくわ。

ミレイ、手土産の用意をお願いね」

「はい」

「畏まりました」

最近では地方に領地を持つ貴族から自領にも支店を置いて欲しいと言われる事が増えた。

受ければ税や商館にする土地なども優遇してくれると言う話も多い。

今は帝都の足場を固める為、断って居るが、将来的には大きな貴族領には支店を置いておきたいと思っているので、貴族との付き合

いも保っておかなければならない。

「あの……本当に私が一緒に行つて良いのでしょうか？」

「ええ、ルノアは将来はトレートル商会の幹部として活躍してもらつつもりだから、今の内に貴族への対応に慣れておきなさい」

私は残りの珈琲を喉へと流し込む。

「さあ、残りの仕事を終わらせましょうか」

こうして、帝都で順調に勢力を増していた私達だったのだが、その知らせは唐突にやつて来た。

「エリー様！」

執務室の扉を慌てた様子のミレイが飛び込んで来た。その様子にルノアとミーシャも目を丸くする。

「ミレイ？何かあったの？」

ミレイが息を切らせてノックも無しに入室するなんて、余程の事が有つたに違いない。

「さ、先程の急報が入りました。

サージャス王国が帝国に宣戦布告、軍を率いてレブリック子爵領へ侵攻を始めました！」



## 辺境からの急報（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境の紛争

「サージャス王国が？」

私は戸惑いを浮かべる。

サージャス王国は、ハルドリア王国の属国であり、王国と名乗ってはいるがその実は王都と街が3つ、いくつかの村がある程度であり、王国や帝国の伯爵領程の規模の小国だ。

土地はあまり豊かとは言えず、鉱床などの資源にも乏しい。

主な産業は、美しい湖や手入れの行き届いた森林などを使った観光業。

周辺の小国だけでなく、王国の王侯貴族も別荘を持っている観光地だ。

その為、外貨はそれなりに得ているが、その殆どは食料の輸入などに使われているので、あまり軍事力は充実していない。

そんな国が強大な軍事力を持つ帝国に攻め込んで来るなど、自殺行為に他ならない。

本来なら『馬鹿な事をする物だ』は鼻で笑う様な愚行だ。

しかし、今の私にとっては場所とタイミングが非常に良くない。

「ミーシャ、地図を出して」

「はい」

ミーシャが部屋の棚から取り出した地図を机に広げる。

「不味いわね」

サージャス王国は帝国と王国の間にある荒野に隣接する形で東側に位置している。

そこから帝国に攻め入るにはブロッケン溪谷を通るしかない。

それ以外のルートでは深い森林や大きな山脈に阻まれ軍を進める事は出来ない。

そしてブロッケン溪谷を抜けた先には私が多額の資金を投資しているトレートル商会の生産拠点となる予定の村が存在している。

溪谷を抜けた先でサージャス王国軍が生産拠点の村に向かわない可能性も有るが、街道や河などの地形から考えると大規模な軍を進めるなら生産拠点の村が被害を受ける可能性は高い。

「ミレイ、ブロッケン溪谷には砦が有ったわね」

「はい、ブロッケン砦ですね」

「砦の常駐兵力は？」

「軍事機密なので、運び込まれる兵站の量、周囲の町からの情報による推測になりますが、およそ500〜600程かと」

「サージャス王国軍の規模は？」

「こちら推測になりますが1200、多くても1500が限界でしょう」

「砦に籠城して防衛に徹すれば数日は問題なく戦えそうね」

3倍近い勢力差があると防衛戦でもキツくなるが、ブロッケン砦は溪谷を塞ぐ形で築城された堅城だ。

そう簡単には落とされないだろう。

「領主であるルーカス様はどう動いているの？」

「何かしらの動きは有る筈ですが、詳しくはまだ……」

ミレイの言葉を遮る様に窓がコツコツと小さく叩かれる。

見れば鮮やかな緑の翼を持つ鳥が嘴でガラスを叩いている。

私が目配せをするとミーシャが駆け寄り窓を開けた。  
すると鳥が部屋に飛び込み、ミレイの腕に止まる。

「レブリック子爵領のスティアからの文です」

ミレイが鳥の脚に付けられた器具から手紙を取り出して差出人を検めると、レブリック子爵領のトレートル商会本店を預けているグランツの秘書を任せていたスティアからの連絡だった。

「ちょうどこの紛争の件ですね……子爵様はサージャス王国侵攻の一報を受けて、直ぐに軍を率いて迎撃に出発された様です。  
軍の規模は1800、その内、騎兵50を含む150を先遣として先行させているそうです」

「1800……迎撃には十分な戦力ね」

迎え討つ防衛戦、練度も小国であるサージャス王国よりも多く、さらに数まで上回るならまず敗北は無い。

ブロッケン砦で常駐兵と先遣隊が時間を稼いでいる間に本隊が合流すればサージャス王国軍は、なす術もなく追い返されるだろう。

「如何なされますか？」

「……取り敢えずは静観しましょう。」

順当に行けばルーカス様が追い払って終わりでしょうけど、念の

為に情報は小まめに集めておいて。

何か異変が有れば細かい事でも私に報告を」  
「承知いたしました」

普通に考えてサージャス王国軍の戦力ではブロッケン砦を突破してレブリック子爵領軍を打ち倒す事など出来る筈はない。

しかし、私は何処か背中がザワザワする様な嫌な予感を拭い切れなかった。

## 辺境の紛争（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境からの知らせ（前書き）

お知らせ

フリードとシルビアが懇意にしている行商人の名前を『ジーナ』から『クリス』に変更しました。

三（一）三

## 辺境からの知らせ

「ジークよ、エリザベートはまだ見つからんのか？」

「陛下、日に3度も尋ねられても答えは変わりませぬ」

「むむ……」

次の謁見の者を待つ短い間、ブラート王は宰相であるジークに尋ね、ため息と共に答えを返されていた。

「国内でエリザベートと親しかった貴族や商人の元は探し尽くしたのですが、影も形も見つかりませんね」

「うむ。しかし、本当に良かったのか？」

「エリザベートを国家叛逆罪で指名手配などしてしまつて？」

「仕方のない事です。」

「ああでもしないとフリード殿下の瑕疵となつてしまいます。」

王家を脅かす国賊とする事で、エリザベートを排除したフリード殿下の非を無くすのです」

「その程度で欺ける物か？」

「無理でしょうね。」

しかし、国に必要な物は体裁です。

体裁さえ整つていれば、ある程度はどうにかなる物です。

それに指名手配はエリザベートの行方を探すのにも都合が良い。エリザベートが懇意にしていた貴族や商人の屋敷を強制的に調べ理由にも使えますし、目撃情報を集めやすい。

生捕限定で賞金も掛けて有りますから上級冒険者なら捕まえられるかも知れません」

「容赦がないな、お前の娘だろう？」

「娘だからこそです。」



貴族として国に尽くせ、と教えて来た筈なのに、己の責務を投げ出して逃げ出すとは嘆かわしい」

「だが、他国の間に拐われた可能性もあるのではないか？」

「いいえ、地下牢に残されていた【氷人形】にはエリザベートの魔力が残っていました。」

それにエリザベートと共に従者のミレイも姿を消しています。

エリザベートが自らの意思で失踪したのは確実でしょう」

「うむ……」

ジークの説明に黙り込むブラート王はもう一つ心配事があると言う。

「それともし、エリザベートを連れ戻せたとしてどうするのだ？」

フリードは既にシルビア嬢との婚約を発表してしまっている上、

エリザベートは国家反逆の罪に問われている。

今更王妃に据える事は出来ぬぞ？」

「仕方の無い事です。」

表向きは処刑した事にして別の名を与えれば良いでしょう。

体の弱い第二王妃とでもしておけば、社交界に出ることも少ない。

エリザベートが身籠れば、シルビア嬢の子供と言う事にして育てれば次代も問題ない」

「ロックイート男爵が納得するか？」

「子が産まれた辺りで陞爵させれば口を噤むでしょう。」

アレは権力が欲しいだけの小者です。

国を奪ろうなどと言う気概は有りませんよ」

「そうか」

そこで謁見の間の扉が開かれる。

次の謁見希望者が来たのかと思っただが、それならば扉を開く前に伺いを立てる筈だ。

少々不審に思いながら扉を見ると、息を切らせた伝令兵が毛足の長い絨毯を駆け、ブラート王とジークの前に跪いた。

「失礼致します！陛下と宰相閣下に火急の報が御座います！」

「うむ、申せ」

「はっ！先程、国境の砦より報告が届きました。」

「サージャス王国が帝国に攻め入ったとの事で御座います」

「な、何だと」

「一体何故」

「はっ！宣戦布告の内容によりますと、『過去、帝国により奪われた領土を取り戻す為』との事です」

「領土だと？」

首を捻るブラート王にジークが説明する。

「サージャス王国は20年程前、領土の一部を帝国に切り取られております。」

しかし、アレは魔物の大発生から守り切れなかった田舎の村を帝国が保護した結果、一部の領土が帝国に併合された、と言う経緯だった筈です」

「何だそれは？」

自分達が守り切れなかった民を守って貰っておきながら、20年も経って返せと言っているのか？」

「厚顔無恥も甚だしいですな。」

しかし、サージャス王は温厚な御仁、何故このような事を？」

ハルドリア王国の東、帝国との緩衝地帯となっている荒野の手前で揃いの鎧兜で武装した者達が屯所していた。

「殿下、まだ訓練を始めなくてよろしいのですか？」

新人近衛騎士のロベルト・アーティは自らが仕える王太子、フリードに伺いを立てた。

軍は騎士団とは別の組織だが、今回はフリードの腹心である近衛騎士ロベルトが実質的な指揮官となる。

この軍事訓練はフリードが企画し、自ら率いてやって来た物だ。だがフリードはこの地に到着してから3日、休息を命じただけで一向に訓練を開始していなかった。

「ああ、皆まだ行軍の疲れがあるだろう。」

「疲弊した状態で訓練を行うのは危険だからな」

「……畏まりました」

ロベルトは多少不審に思ったが、フリードの言葉も間違っていない。

「実戦ならまだしも、訓練で怪我をして除隊など笑い話にもならない。」

「殿下は兵を慈しむ方だからな」そう納得する。

「失礼致します！」

「どうした」

フリードの天幕に駆け込んできた兵士が緊張を顔に浮かべながら報告する。

「急報です！サージャス王国が帝国に攻め入りました！」  
「何だと」

予想外の出来事にロベルトは驚きフリードの方を振り返った。  
しかし、フリードは落ち着いた様子で顎に手を当てて思案している。

「フリード殿下？」

「うむ、サージャス王国は我が国の属国、大切な朋友の危機に座している訳にはいくまい。」

幸い此処はサージャス王国との国境の近く、われらはハルドリア王国の先遣として、このままサージャス王国の救援に向かう」

「よ、よろしいのですか？」

「ああ、ロベルト。軍を指揮して見事、戦功を上げて見せよ！」

「……御意！」

突然の知らせに驚いたロベルトだったが、フリードは慌てる事なく友好国の救援を決めた。

自らが剣を捧げた王太子の決断力と冷静さに、ロベルトは誇らしい気持ちと、初陣の緊張と興奮で身体の震えを感じるのだった。

## 辺境からの知らせ（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境への対応

辺境の紛争を注視すると決めた翌日、昼食を終えて午後の仕事を始めようかと言う時だった。

浮かない顔をしたミレイが私の執務室を訪れたのだ。

「ミレイ、辺境で何か有ったの？」

「はい、先程届いた知らせなのですが………ブロッケン砦が落とされました」

ミレイの報告にルノアとミーシャが息を呑むが、私は瞑目して深く息を吐く。

嫌な予感はしていた。

確信は無かったが、サージヤス王国が何の勝算も無く仕掛けて来た事に違和感が有ったのだ。

「詳細は入って来てる？」

「詳しくはまだ………ただサージヤス王国軍に飛び抜けて練度の高い一団が居たとか」

「練度の高い一団………正規兵ではないのね？」

「はい、装備からサージヤス王国軍ではないとの事とです」

「冒険者パーティ………いえ、傭兵団かしら？」

「おそらくですが。ただ、報告を聞いた限りでは周辺で活動している有名な傭兵団とは一致しませんでした」

「遠方から来たのか、実力のある新設の傭兵つてところかしら」

私は顎に手を当てて考え込む。

この状況でどう動くべきか……。

「砦を落としたサージヤス王国軍とルーカス様はどうしてるの？」

「サージヤス王国軍は砦を占拠して橋頭堡を築いている様です。」

子爵様の方の状況は不明ですが、進軍速度から考えるとまだ接敵していない筈です。

先行していた部隊は敗走したのでしょうか」

サージヤス王国軍が体勢を整えるのに数日、その後は砦までの領土の切り取りを宣言して防衛線を構築するか、もしくは砦を拠点に更に深く食い込んでくるのか。

いずれにしても生産拠点の計画の障害になるのは間違いない。

「……………決めたわ」

「エ、エリー様？」

「戦場に行くわよ！ミレイ、食料やポーションなどの物資を集めて頂戴」

「エリー様、本気ですか？」

「勿論よ。冒険者や傭兵を雇って私が率いるわ。」

たった1日で堅牢なブロッケン砦を落とせるレベルの戦力が相手では数が勝るレブリック子爵領軍でも敗れかねないわ。

そうなれば辺境の混乱は止められない。

折角築き上げた私の商会もタダでは済まないでしょう」

私は引き出しから紙を取り出すとサラサラと書き付けて封をする。そして2通書いたその手紙と、念の為にルーカス様に貰っておいた紹介状をルノアに差し出した。

「ルノア、この手紙を冒険者ギルドと傭兵ギルドのギルドマスターに届けて。」

この紹介状を見せればギルドマスターに会える筈だから」

「は、はい！」

「ミーシャもルノアと一緒に行って頂戴」

「畏まりました！」

2人を送り出した私は普段着から正装に着替える為に私室へと移動した。

これから宮廷に向かうつもりだ。

私が私的に集めた兵力を引き連れて戦地に向かうより、帝国の許可を取って、義勇軍としての体裁を整えた方が動きやすい。

「エリー様、本当によろしいのですか？」

「もう決めた事よ」

「ですが、我々が戦地に向かえばエリー様の居所も王国の知るところとなるでしょう」

「ええ、本当はもう少し影響力を高めて、戦力を整えてから表に出るつもりだったんだけどね。」

でも仕方ないわ。

あの村の人々はもう私の商会の一員、身内を見捨てては今後の商会の展開の障害になる。

それに今回の紛争は何かおかしいと思うの。

サージャス王はこんな無茶をする人では無かった筈よ」

「ではエリー様はこの紛争には何か裏が有ると？」

「ええ、それを確かめる為に私が戦地に向かう必要があるわ」

「ちっ！」



部下からの報告が纏められた書類を流し見て舌打ちをする。  
先日、辺境の地で勃発した紛争に関する報告書だ。

攻め込んできたのは大した兵力も持たない筈の小国、それなのに  
ブロッケン砦はたった1日で陥落してしまっただらしい。

「どうにもきな臭い感じがするな……」

無意識のうちに頬の大きな傷跡を撫でる。

俺がまだ現役の冒険者だった頃からの癖だ。

顰めっ面で書類を睨んでいるとノックの音が飛び込んできた。

「入れ」

「失礼します、ギルドマスター。」

ギルドマスターにお客様がお見えです」

入って来たのは受付のサラサだった。

狐人族の若い娘で独り身の冒険者共に人気がある。

「客？そんな予定は無かった筈だが……」

「はい、トレートル商会の商会長の使いの方だそうです。」

こちらの紹介状をお持ちになられました」

サラサから紹介状を受け取り封蝋を改める。

「ちっ、貴族の紹介状か」

封蝋に押されている紋章には翼が描かれている。

この帝国に於いて、翼を紋章に入れて良いのは貴族のみだ。

「おい、こいつは何処の貴族の家紋だ？」

俺は隣の机で我関せずと仕事をしていた冒険者ギルドのサブマスター、アイリスに手紙を突きつけた。

「開いて中を読めば良いだろ。」

「だいたい少しは貴族関係の事柄も覚えろ」

アイリスは文句を言いながらも紹介状の紋章に目を向けた。

「これは……レブリック子爵家の家紋だな」

「レブリック子爵ってえと今、何処その小国とやり合っている所だな」

「サージャス王国だ。」

まあそうだな。トレートル商会はレブリック子爵領に本拠地があるからその縁だろう。

おそらく今回の紛争の件だと思っぞ」

「何だ、お前は商会の事にも詳しいのか？」

「私も女だからな。化粧に興味くらいはある」

「はっはっは、面白い冗談だ……ごふっ！」

腹を押さえて痛みを堪えるギルドマスターに代わり、アイリスがサラサに言う。

「詳しい話を聞こう。使いの者を通してくれ」

「はい！アイリスさん」

サラサはアイリスに一礼して去っていった。

「……………サラサ、ギルドマスターは俺だぞ？」

その哀れな呟きに答える声は存在しなかった。

## 辺境への対応（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

辺境へ向かう者達（前書き）

とうとうストックが尽きたで御座る。

「：、（、（：

## 辺境へ向かう者達

トレートル商会の使いだと言う少女達を帰した後、私……冒険者ギルドのサブマスター、アイリス・ナイラはギルドマスターであるセルジオと机を挟んで向かい合っていた。

「アイリス、どう思う？」

セルジオが言葉少なく私に問う。

「申し分ない条件だろう」

私は少女達が持って来た手紙に視線を落とす。

トレートル商会の商会長が提示した条件が書かれている。

「依頼内容はトレートル商会会長の指揮下に入り、サージャス王国軍を撃退する事。

要するに紛争に参加しろって依頼だ。

報酬は相場の倍以上、上級冒険者を指定しているけど、この額なら手を上げる者もいるだろう」

「それくらいは分かっている。

俺が言いたいのは何だったただの商人がそんな事をしようとするのかって事だ。

確かに功績を挙げれば名誉爵位くらいは貰えるかも知れないが、トレートル商会ってのは今売り出し中の商会なんだろう？

それが商会長自らが戦場に向かうなんて危険すぎる。そんなリスクを負わなくたって十分稼いでいるだろ。愛国心か？」

「いや、確かトレートル商会の商会長は外国人だった筈だ。

だがトレートル商会の本部はレブリック子爵領だし、紛争地になつている東には何やら商会の施設を作ろうと、かなり投資しているらしい」

「じゃあ本音はその施設とやらを守りたいって事か」

「おそろくな。だが問題ないだろう。」

その結果、サージャス王国軍を追い払ってくれると言つなら有り難い話じゃないか」

「それはそうか。」

上級冒険者の指定つて事は少数精鋭で行くつて事だな」

「ああ、ブロッケン砦を1日で陥落させる様な強者が居るなら数を揃えてもあまり意味が無いからな」

「そうだな。」

よし、今帝都に居る上級冒険者パーティに声を掛けてやるか」

Aランクパーティ《鋭き切先》の見習いマルティはパーティリーダーのエルザに頼まれたお使いを済ませてパーティで借りている借家に帰つて来た。

「ただいま帰りました」

マルティが玄関を開けて家に入ると、丁度エルザと冒険者ギルドの受付嬢であるサラサが玄関へと向かっていた。

「帰つたかマルティ」

「はい、エルザさん。」

「こんにちはサラサさん」

「こんにちは、マルティちゃん」

サラサはマルティの頭を撫でる。

「もうサラサさん。」

ボクはもう16ですよ。子供扱いは止めてください」

「あらあら、ごめんなさいね」

ギルドに登録した10歳の時からの付き合いであるサラサは、自分と同じ狐人族のマルティを妹の様に可愛がっていた。

「もう」

「ごめんといいながらもサラサはマルティのピンと立った狐耳の間を行き来する手を止める様子はない。

マルティとしても別に本気で嫌がっている訳ではないので振り払う様な事はしない。

やがて満足したのかサラサはマルティの頭から手を離してエルザに向き直る。

「それではエルザさん、ご検討をお願いします」

「ああ、仲間と相談した上で返事をする」

「はい、期限が短いのでお返事は今日中をお願いします」  
「了解した」

そのやり取りの後サラサはギルドへ帰っていった。

「エルザさん、サラサさんは何の用事だったんですか？」



「指名依頼だ」

「指名依頼？でもいつもなら依頼はエルザさんが決めているじゃないですか？」

「何故今回は皆に相談するんですか？」

「今回の依頼は東の紛争への参加だ。」

「魔物の討伐や野党退治ではなく国同士の戦争だからな」

「戦争……ですか」

マルティもAランクパーティーである《鋭き切先》では見習い扱いだが、冒険者ランクは上級冒険者と呼ばれるCランクであり、期待の若手と呼ばれている。

当然、野盗退治などで人を殺した事も1度や2度では無い。

だが紛争や抗争など、いわゆる戦争と呼ばれる人間同士の争いに参加した事は無かった。

「そう緊張する事はない。」

「取り敢えず皆に相談しよう」

エルザは優しげに微笑むとマルティを連れて仲間が待つ部屋に向かった。

結論として、マルティ達は紛争に参加する事にした。

報酬も十分な額で有ったし、依頼中の食費は依頼人持ち、功績によつてボーナスまであると言う。

更に決定的だったのが仲間の1人、治癒魔法師であるリサが紛争地近くの村の出身だったのだ。

このまま戦火が広がればリサの故郷にも被害が出るかも知れない。それを聞いた仲間達は2つ返事で参加を決めた。

参加を決めた2日後、マルティ達は帝都を出発の為、南門を出て少し進んだ見晴らしの良い草原に集まっていた。

《鋭き切先》の構成メンバーは、パーティリーダーで剣士のエルザ、盾士のサリナ、軽戦士兼弓士のシシリ、治癒魔法師のリサ、そして斥候のマルティの5人、全員女性。

冒険者ランクもエルザとサリナ、シシリがAランク、リサがBランク、見習いのマルティですらCランクと全員が上級冒険者であり、特にエルザは『異名持ち』である。

今回、合同で依頼を受けた冒険者の中でもトップクラスのパーティだ。

その為、マルティ達のパーティは依頼人のトレートル商会の商会長だと言う女性と共に行動する事になっていた。

「ようー！」

「あ、ブレンさん」

パーティリーダーのエルザが打ち合わせに行っている間に武器や荷物の点検を終えたマルティ達に冒険者の男が声を掛けて来た。

Aランクパーティ《灼熱の鉄拳》のメンバーの1人、Aランク冒険者のブレンだった。

マルティはまだソロだった頃、ブレン達に何度か世話になった事があり、《鋭き切先》を紹介してくれたのもブレンだった。

「お前達も依頼を受けたんだな」

「ええ、報酬も良かったし、何よりウチのリサの故郷が紛争地の近くだったからね」

「そうなのか、それは心配だな」

ブレンはシシリーと軽く情報を交換する。

「しかし、本当に大丈夫なんですかね？」

そんな2人の側で、マルティは集まった冒険者や傭兵の代表達に指示を出すエリーと名乗った商会長と彼女の従者だと言う黒髪の女性を視界に納めて言った。

「黒髪の従者さんは結構戦えそうですねですけど商会長さんの方はどう見ても良い所のお嬢さんに見えますけど？」

マルティがそう言うとシシリーがとても弓士には見えない綺麗な手のひらでマルティの頭をポンポンと叩いた。

「マルティは斥候なんだからもう少し洞察力を磨かないとな」

「え？」

「くつくつく、エリーとか言ったか？あの嬢ちゃん。よく見てみな、上手く隠しているが体捌きに隙が無いだろ？アレは相当な使い手だぞ」

「え」

ブレンに言われてよくよく観察すると、自然な振る舞いに見えて確かに隙がない。

「それに彼女は魔法もかなりの腕だと思っわ」

リサも話に入ってきて来る。  
見れば無口なサリナもコクコクと頷いている。

「でもさっき挨拶した時には会長さんからは魔力なんて、全く感じませんでしたよ?」

マルティの問いにシシリーが答えてくれる。

「全く感じなかったからだよ。」

私やエルザみたいな魔法が使えない人でも魔力自体は持っているし、魔法として使えなくても無意識の内に身体能力や五感を強化していたり、武器や技に魔力を乗せて強化したり、特殊な効果を発揮したりする【スキル】も使える。

つまり、強くなれば自然と魔力も増えてくる物だ。

体捌きからエリーさんはかなり鍛えている事が分かる。でも彼女からは全く魔力を感じない」

「あ!」

シシリーの説明をリサが引き継ぐ。

「分かった?彼女は意図的に魔力を抑えているの。無意識の内に溢れる魔力を常に制御するのは凄く難しいわ。」

宮廷魔導師並みの魔力制御力よ。

もしかしたら神器も使えるかも知れないレベルね」

「確実に私より強い。」

私達の中で対抗出来るのはエルザくらいだろう」

マルティはシシリー達の評価を聞いて改めて依頼人を見て呟いた。

「……………敵じゃ無くて良かった」

## 辺境へ向かう者達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 辺境への進発

帝都の門の外、草原に集まった武装集団を前に、私は立っていた。

「思っていたより集まってくれたわね」

「はい。冒険者と傭兵合わせて74名です」

「有難い話だわ。代表者を集めて頂戴」

「畏まりました」

冒険者パーティと傭兵団のリーダー達に集まって貰う。

《鋭き切先》のリーダー、Aランク冒険者エルザ。

《灼熱の拳》のリーダー、Aランク冒険者トーマス。

《牙竜の鱗》のリーダー、Bランク冒険者リック。

《走竜傭兵団》の団長、ユリウス。

《ガンドル傭兵団》の団長、ガンドル。

以上の5人がこの集団の中核となるメンバーだ。

「皆さん、今回は私の依頼を受けて頂き感謝しますわ。

改めまして、私はトレートル商会の商会長エリー・レイスと申します」

個別には顔を合わせているがこのタイミングでもう一度自己紹介をしておく。

「依頼の内容を再確認します。

私の指揮でレブリック子爵領の東、ブロッケン砦を乗っ取り、帝

国領内へ侵攻中のサージヤス王国軍を撃退する事です。よろしいですか？」

5人が頷くのを確認して話を続ける。

「事前に説明した通り、今回、私達は帝国義勇軍としてレブリック子爵領へ向かいます」

私は宮廷で貰ってきた行軍許可証と義勇軍の指揮官への任命書を取り出す。

「食料や水などの物資はこちらで用意して有ります。

— 先ず皆さんにはそれぞれ2日分の食料と水を配給します。

後続の馬車で追って物資を輸送する予定です。何か質問はありますか？」

「良いだろうか？」

私が尋ねると、《鋭き切先》のリーダー、エルザが軽く手を挙げる。

エルザは女性にしては背が高く、腰のあたりまで伸ばした赤い髪を一つに纏めた美人だ。

今回集めた冒険者の中で唯一、異名持ちと呼ばれる字名を付けられた実力者だ。

おそらくは冒険者達の中で1番の手練れ。

彼女のパーティは全員が女性だと言うこともあり、私やミレイと共に行動して貰う予定になっている。

「どうぞ、エルザさん」

「速度を出す為に手持ちの食料と水を減らすと言うのは理解できる。だが、2日分と言うのは少な過ぎないだろうか？」

「ご安心下さい。皆さんに渡す2日分や後続の馬車で運ぶ物資はあくまでも予備です」

「予備？」

「はい、殆どの物資は私が運んで行きます」

「どう言う事だ？」

私は魔力を集める。

「神器【強欲の魔導書】グリモア・マモン」

私の左手に具現化した魔導書を5人が驚く。

「それは……神器か？」

「こいつは驚いた。なかなかの実力者だとは思っていたが、まさか神器まで使えるとはな」

「私の神器は物資を亜空間に保管する事が出来ます。現在、この神器には100人が数ヶ月は生きて行けるだけの物資が保管されています。」

皆さんに渡す物資や後続の物資は万が一、私と離れた場合の為に保険です」

「コイツは驚いたな。大量の荷物を収納出来るなんて、とんでもない能力だぞ」

「緊急時ですのでご説明しましたが、私の神器については可能な限り内密にお願いします」

最早本当の神器【七つの魔導書】グリモア・セレンスを隠す事は出来ないだろう。

少し調べれば私の神器の能力が複数ある事に気付くだろう。

だが一応口止めはしておく。

「他に何か有りますか？」



その後も、いくつかの質問に答え、レブリック子爵領の東を目指して出発した。

私達は50名を超える武装集団、当然、道中の領境などに有る関所で止められるが、行軍許可証や義勇軍の指揮官である事を示す書類を提示する事で問題なく通り抜ける事ができた。

そして数日、レブリック子爵領に入った私達は見晴らしの良い地形を選び野営地を設営する。

もうすぐ敵軍の勢力圏に入る。

避難しようと街道を進む村人なども幾度かすれ違い、状況などを聞き取っている。

《鋭き切先》のメンバーの1人、治癒魔法師のリサの故郷だと言う村を通り過ぎてすぐの場所だ。

此処から先はいつ敵と遭遇してもおかしくはない。

私は本部として設営した大きな天幕に中核メンバーを集める。

「此処を本部として行動を開始します。

先ずは周辺の探索、それと此処より森を挟んで南に展開していると思われるレブリック子爵軍と連絡を取ります」

「分かった。俺達のパーティから斥候を出そう」

「ウチのにも行かせる」

「子爵様への連絡は俺達に任せてくれ、走竜なら森の中でも馬並みの速度で走れる」

私は頷くと具体的に指示を出してゆく。

斥候達には数人ずつで近くの森や村に様子を伺いに向かわせ、竜傭兵団の中でも足の速い騎兵にルーカス様への手紙を持たせて送り出した。

## 辺境への進発（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境の村

「【石壁】」

私の魔法により、地面から石の壁が現れる。

高さは低めで1メートルと少し程、視界を確保する為、胸くらいの高さにしておく。

更に地属性魔法を使える冒険者や傭兵達が堀を作っている。

これで敵軍の騎兵突撃をある程度牽制できるだろう。

「エリー様、周囲の探索に出ていた斥候達が戻りました」

「報告を聞きましょう」

場所を司令本部の天幕へ移した。

戻って来たのは南の森と北の山岳地帯を調査していた者達だ。

「では報告をお願いします」

「ああ、北の山岳地帯は特に異変は無かった。多少魔物が多いと感じたくらいだ」

「東から軍が近づいているからでしょうね。」

「ゴブリンなんかの多少知恵の回る魔物なら東から逃げて来てもおかしくないわ」

「そうだな、南の森でも魔物の影が濃く感じられた。それと、遠目にだがサージャス王国軍だと思われる斥候の姿を確認した」

「もう森にまで入っていたのね」

「だが本格的な進行と言う感じでは無かったな。森の浅い場所を軽く下見している程度だ」

2組の報告を受けている時、天幕に村がある東側の偵察に出ている冒険者達が戻って来た。

「た、大変だ！東の村は武装集団に占拠されていたんだ！」

エルザのパーティーメンバーである狐人族の斥候が慌てて報告する。

「占拠？」

妙な話だ。

情報によると、東にある村はあまり大きくない農村だったはずだ。そこを占拠する事にどんな意味があると言うのか。

農村が戦争で受ける被害と言えば食料などの強制接収が筆頭だろうが、わざわざ占拠までする必要はない。

「詳しく話して」

「それが丘の上から村の中を窺ったんだけど、村のあちこちに武器を持った男達が居て、村人の姿はほとんど見えなかった」

もう1人、彼女と共に偵察に出ていた《灼熱の拳》の斥候の男もそれを肯定する様に頷く。

「それに家から逃げ出そうとした女を男達が引きずって家に連れ帰って行くのを見た。

それに水で流した跡が有ったが村の所々に赤黒いシミのような物が見えた。多分血痕だと思う」

「村が襲われたって事？抵抗した村人が殺されて、女性が囚われていると？」

「多分な」

私の周囲から騒めきが起る。

民間人の生命に危害を加えたり強姦や強奪は戦時国際法違反だ。そんな事をすれば、我関せずと静観している周辺国にまで非難される上、地元の住人全てが敵となりなりふり構わず抵抗する様になる下策中の下策だ。

食料の強制接收だとしても最低限の金品を渡すのが暗黙の了解と  
言うものだ。

そもそも、今回のサージヤス王国の目的は領土の奪還だと聞いているが、奪い返すつもりは住人を弾圧するなど馬鹿としか言えない。

「一部の部隊の暴走かしら？」

「それが一番有り得そうだな」

「村を占拠している敵軍の規模はどう？」

「大体10人くらいだったよ」

私は顎に手を当てて考える。

囚われている村人を助けるべきか、様子を見るべきか……。

「村を助けましょう。敵兵を捕らえて尋問すれば少しはマシな情報が入るかも知れないわ」

「よし！ いったちよ暴れてやるか！」

《灼熱の拳》のリーダー、トーマスが拳を打ち鳴らす、私は彼を肩を叩いて宥める。

「貴方は留守番よ。」

まだ陣地の設営が終わってないわ。

此処の守りを疎かには出来ないわ」

「じゃあ、誰が行くんのだ？」

私は集まっている者達を見回して決める。

「私とエルザさんのパーティで行くわ。」

陣地設営の指揮はミレイ、防衛の指揮はトーマスさんをお願いするわ」

「おいおい、なら俺達が攻め込んでエルザ達が防衛でも良いじゃないか」

「女性が囚われているのでしょうか？」

なら敵つい男達が助けに行くより女性パーティの方が良いわ」

「む……そうだな」

「貴方達には後々暴れてもらうから今回は此処を守って頂戴」

「……分かった、今回は譲ろう」

「ありがとう。そう言うことだからエルザさん、10分後に村に向かうわ」

「分かった。直ぐに準備しよう」

## 辺境の村（後書き）

読み切りの短編を投稿しました。

タイトルは『魔王（童貞）』ですが、様式美として勇者

（かわいい）に「我の物になれ」と言ったら「わかった」と言われ  
ました……どうしたら良いですか？』

お暇でした此方もご覧下さい。

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ



## 辺境の村解放戦

小高い丘の上から小さな村を観察すると、所々に明らかに村人では無い武装した男達が我が物顔で屯していた。

「アイツらがサージャス王国の兵ね」  
「多分正規兵では無いと思う」

狐人族の斥候、マルティが頷き答える。

「女性が連れ込まれた家って言うのはどれ？」  
「あの1番大きな家だよ」

マルティが指さしたのは村の入り口から見て真正面に有る家だ。  
おそらく村長の家だろう。

この手の農村では村長の家が宿屋や集会所を兼ねることが多く、その為村長の家は他の村人の家の2倍程広く作られている。

「マルティが確認した敵兵は10人だったわね？」  
「うん、30分程見張って、外に出た武装した男達は10人だった」  
私は目を凝らして男達を観察する。

「装備はそこそこの物を使っているけど、動きは素人ね。  
多分、募兵に応じた農民辺りを簡単に訓練したって感じかしら？」  
「そうだな、奴らの動きは戦う為に鍛えた者のそれじゃない。  
だが、体付きは悪くない。」

日頃から体を動かす仕事をしているのだろう」

エルザが私の予想を肯定してくれる。

「彼らが軍人なら分隊規模、多くても12人くらいだと思っわ」

「うむ、指揮官は流石に正規兵だろうな」

「まあ、こんな無法者達を率いている指揮官が優秀とは思えないけどね」

「違うない」

私とエルザはお互いに顔を見合わせてクスリと笑う。

彼女はサツパリとした性格で話していて気持ちの良い人だ。思えば私の周りに居る人間は皆、癖が強すぎる気がするわ。

「それで、どうする？我々なら正面から戦っても苦戦はしないだろうが……」

エルザが彼我の戦力差を考えて言う。

確かにそれが1番簡単な方法だ。

だが、そうする訳には行かない。

それはエルザもわかってしている事だろう。

「正面からは無しね。」

村人達を人質に取られると厄介だし、敵の正確な人数も不明だから

「そうだな。ならやはり闇に紛れるか」

「ええ、村に入ったら二手に分かれて各個撃破で」

「了解した。二手に分かれるならメンバーは私とマルティ、エリー

殿とシシリーだな。

「リサは待機、サリナはリサの護衛だ」

エルザが手早く役割を振る。

治癒魔法師であるリサは襲撃後、村人の治療などをしてもらう必要があるし、盾士のサリナは大楯と金属鎧を装備している為、隠密行動には向かない。

此処で待っていて貰うべきだろう。

エルザ達は素早く武器を確認する。

私も腰の剣と、革製のホルスターに入れて反対側に吊るした魔導書を確認し、エルザ達と共に丘を駆け降りて行った。

村の近くの背の高い茂みに身を隠した私達は、息を潜めて機会を窺っていた。

すると、武器をもった男が1人、茂みの近くの岩に腰掛けて煙草を吸い始めた。

嗜好品である煙草は田舎の農村などではあまり出回らない物だが、軍に属しているなら配給される可能性もある。

やはり、コイツらは軍属の徴募兵か。

私はエルザ達に『私が行く』と身振りで伝え、雲の影が重なる瞬間を狙い茂みから飛び出すと、男の口を塞ぎエルザ達の待つ茂みに引き込んだ。

「ん〜!〜!〜!」

男は抵抗しようとするが、直ぐにエルザとシシリーに両腕を押さえられる。

「サイレント【遮音】」

私は、内側の音を漏らさない様に魔法を唱えると、男の喉元に短剣を突きつけた。

「魔法であなたの声は仲間が届かない。

今から口を押さえている手を離すけど、騒いだり抵抗しようとするれば即殺す。

理解したらゆっくりと一回瞬きしなさい」

少し殺気を滲ませながら脅すと、男は涙目になりながらゆっくりと瞬きをした。

さて、コレで少しは敵方の情報が分かれば良いのだけれど。

辺境の村解放戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 辺境の村解放戦

私は薄皮一枚を切る程度に刃を男の首に押し付ける。

「ひっ！」

僅かに血が滲み、男が短い悲鳴を上げた。

「貴方達は何者？正規兵じゃないわね。サージヤス王国の徴募兵？」

「お、俺達は、ハ、ハルドリア王国の者だ」

「ハルドリア王国？」

王国が属国であるサージヤス王国に援軍を出したってこと？

でもあの脳筋がこんな大義も無い戦いに軍を出すから？

奴はバカだが愚かではない。

サージヤス王国の言い分が、街のチンピラの言い掛かりと変わらないと気付かないわけがない。

「お、王子様が村に来て……従軍すれば金が貰えるって……」

「王子ですって？」

「あ、ああ。戦争が起こった時、軍事訓練でたまたま王子様が国境の近くに居て、俺達みたいな奴らを集めて援軍に来たんだ」

「……………ほう」

あのフリードが軍事訓練？

今までそんなことをしたことは無かったはずだ。

アイツは脳筋の息子らしく、才能はあるが、努力嫌い故、技量は下級騎士程度。

神器を使えばもう少し戦えるだろうけど、それでも一流には届かない。

そのフリードが軍事訓練に参加している。それも状況を考えると軍を率いている。

更にたまたまサージャス王国との国境近くに居たと言っ。

こんな偶然があるのか？

「そうか……この紛争、何かがおかしいと思っていたけど、あのバカが噛んでいたのか」

サージャス王国は資源が乏しい観光立国。

食料自給率が低く、特に塩はハルドリア王国からの支援に頼っている。

そして、その支援は王太子であるフリードの仕事だ。

今までは私が書類を作り、フリードはサインするだけだったが、私が国を出た今、支援の内容を決めるのはフリードのはずだ。

塩を絞めると言えばサージャス王国はフリードの指示を聞くしかない。

脳筋に訴え出ようとしたとしても、属国との窓口は王太子の仕事、全て握りつぶされるだろう。

動機は単純だ。

私との婚約破棄の一件と、仕事をフォローする者が居なくなったことで国民や臣下からの支持が下がったので、安直に武功を挙げようと考えたのだろう。

大人しく魔物でも狩っていれば良いものを。

私は苛立ちを抑えながら尋問を続ける。

「それで、貴方達はこの村の住人に何をしたの？」

「そ、それは……」

私は無言で言い淀む男の首に当てた短剣に力を込める。

「ま、まて！言う！言うから！」

「さつさと答えて」

「む、村の男連中は……その、て、抵抗したから……」

「殺したのね」

「……」

「女子供は？」

「……お、女子供は家に閉じ込めて……その、い、いろいろと世話を……」

「そう、もう良いわ」

私は言葉を濁す男に自分達が何をしたのかを教えてやる。

「貴方達のやったことは戦時国際法違反、重罪よ。通常、この手の紛争はお互いの軍がぶつかり合い、ある程度の所で和平交渉をして手打ちになるもの。」

でも貴方達が村人に手を出したことで落とし所が無くなった。

最低でも受けた被害と釣り合うだけの報復をしないと帝国の面子が立たない。

貴方達の身勝手な行いで大勢の人間が死ぬでしょうね。

それは赤の他人かも知れないし、貴方の大切な人かも知れない」

「そ、そんな！俺達はただ命令されて……。」

村を襲ったのだから、王子様が……」

「え」



男の言葉に私だけでなく、黙って話を聞いていたエルザ達も驚きの声を上げる。

彼女達は上級冒険者、紛争に参加する可能性もある為、Dランク以上に上がる試験には国際法などの知識も求められる。

戦時国際法における民間人の保護は、多少なりと戦いに身を置く者にとっては常識なのだ。

「ハルドリアの王子は何を考えているんだ！」

「サージャス王国を滅ぼしたいのか！」

エルザとシシリーはフリードの異常な命令に怒りと驚きをあらわにし、マルティは事の大きさに動揺している。

そんな彼女達の反応を見て、男はようやく自分達のものでかした事の重大さを自覚したのか、顔面蒼白で震え出した。

「少しでも被害を小さくしたいと思うなら知っている事を全て話さない」

それから私は男から、村にいる男達の装備や配置、指揮官などの情報を聞き出した。

「聞きたい事は以上よ」

そう言って男の首に当てていた短剣を下ろす。

「……………な、なあ」

「なに？」

「あんた達と一緒に俺も連れて行ってくれないか？」

「え？」

「俺、償いたいたいんだ！あんた達と一緒に戦って、傷つけてしまった村人達に償いをしたい！」

「貴方……………何を言っているの？」

「へ？」

私が素早く短剣を振るうと、頭の中にお花畑でも咲いているとしか思えない事を言い出した男の喉から血飛沫が上がる。

重要な血管を傷付けて即死しない様に、されど自力での治癒が不可能な深さで。

「少しでも償いたいと言うのなら、可能な限り長く、出来る限り苦しんで……………死になさい」

もがき苦しむ音は魔法により掻き消え、静寂の中、のたうち回るだけの男を残して、私とエルザさん達は村人の救出へと向かうのだった。

## 辺境の村解放戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

( ・ ・ ) ノシ

## 辺境の村解放戦

私とシシリー、エルザとマルティの2組は村の東と西に分かれ、野生動物を避けるための簡易的な木柵を飛び越えて村の中に侵入した。

村は一見静かだが、よくよく耳を澄ませてみると、くぐもった呻き声や短い悲鳴が聞こえてくる。

シシリーと手振りで合図し、近くの民家の扉をそつと開き、スルリと影のように滑り込む。

民家の中には煙草の煙が充満しており、男達が4人、カードを手に机を囲んでいた。

男達の背後には2人、酒瓶を抱えた親子らしき女性と少女が立っている。

音もなく現れた私達に初めに気が付いたのはその親子だった。

母親の目が見開かれ、少女が驚きの声を上げようと口を開いた。

しかしその声が発されるより早く、シシリーが投擲したナイフが親子の目の前、私達と向き合う形で座っていた男の喉に突き刺さった。

「あがつ  
」

仲間の喉に飛び込んだナイフに驚いた3人だが、叫び声を上げる前に処理させてもらう。

私達に背を向けていた男の首をすれ違い様に斬り落とし、私が向

かって右側、シシリーが左側の男の口を塞ぎ喉を掻き切った。

勿論、即死はさせない。

口を塞がれ、叫びを上げられない男は暫くもがいた後、動かなくなつた。

見ればシシリーも同様に加減して斬っている。

結果的に見れば首を刎ねた男が一番幸運だったのだろう。

彼は何が起こったのか理解することもなく、首を失った自らの体を視界に収めた後、意識を手放したのだから。

「い。うばえあー！」

見れば喉からナイフを生やした男がフラフラと立ち上がっていた。意外としぶといわね。

私がトドメを刺そうと一歩を踏み出すが、それよりも早く男の後頭部に酒瓶が叩きつけられた。

「あー！」

倒れ込んだ男を母親が砕けた酒瓶で、娘が喉に刺さっていたナイフを握り、涙を流しながら滅多刺しにしていく。

私とシシリーはしばらく彼女達の好きにさせ、男の悲鳴とも呻きとも取れない反応が消え失せた後、その肩に手を置いて彼女達を止めた。

「もう死んでいるわ」

「う、うう」

「こいつが！こいつがお父さんを！」

怒りと憎悪で涙を流す2人を宥め、しばらく床下の貯蔵庫に隠れているように伝えた私とシシリーは次の民家へ向かった。

その民家では裸の男が少女に覆い被さり腰を振っていた。少女の裸体には至る所に痣が見られ、頬は赤黒く腫れ上がっている。

「おら、雌ガキ！もつと絞めろ！」

怒鳴りながら男は拳を握り腕を振り上げる。そしてその拳をグツタリとして反応を返さない少女の顔に振り下ろした。

しかしその腕が少女の頬を打つことはなかった。男の腕は肘から先が消失していたのだ。

「へ？」

シシリーが間拔けな声を上げる男を蹴り飛ばし、少女から遠ざける。

「ぐあー！」

「ほら、落とし物よ」

私は、痛みに呻く男に肘から斬り落とした腕を投げ渡してやる。

「へ？え？」

キョトンとした顔の男は、反射的に腕を受け取ろうと手を伸ばす。

残っていた左手で自分の右腕を受け止めた男だったが、その衝撃で受け止めたはずの左腕が右腕と同様に、肘から先が握った右腕と共に床に落ちる。

「え？」

「あらあら、ダメじゃない。ちゃんと受け止めないと」

私のフリユージェルは斬れ味に特化した魔法武器。

斬られた魔物がそれに気付かず数日を過ごした後、首が落ちたなどという逸話が残っている名剣だ。

「あ、あ……」

一拍を置いて男の腕から血が噴き出す。

自らの体から流れ出る大量の血を見て叫ぼうとした男だが、それよりも早くシシリーの短剣が男の喉に突き込まれる。

ビクン、ビクンと痙攣し、血の泡を吹きながら、ゆっくりと死へと向かってゆく男を無視して、私達は少女の状態を確認する。

傷は多いけどすぐ命に関わるものではないわね。

私が治しても良いが、今は村の制圧を優先させたい。

此処は治癒魔法師のリサに任せるべきね。

「酷いわね」

「ええ、後は村長の家に居る指揮官を押さえるだけだから、シシリーはリサ達を呼んできて頂戴」

シシリーにリサとサリナを呼びに行ってもらい、私は別の場所を制圧してきたエルザ達と合流、共に指揮官を捕縛するべく村長の家

へと向かうのだった。



## 辺境の村解放戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

( ・ ・ ) ノシ

## 辺境の村解放戦

情報によると村長の家に居る人間は5人、指揮官と徴募兵が2人、村長の老婆と村長の娘。

「これでこの村に居る兵士は全部ね」

「ああ、私達の方に居た兵士を殺す前に尋問したから間違い無い。救出した者達は一塊になって隠れているように言っておいた」

「そう、何人くらい生き残っていたの？」

「女性が18人と男性が9人、子供が16人だ」

「結構多いわね。私達の方は3人だったわ」

「村人達を閉じ込めている場所だったみたいだな。男性も少し居たが老人や怪我人ばかりだ。」

「ほとんどは兵士と戦って死んだらしい」

エルザ達と簡単に情報を交換した後、村長の家の扉に身を寄せて中の気配を探る。

「扉の側には気配は無いわ」

そつと隙間を開けると、集会などで使われる奥の広間に鎧を身に纏った男達が机を囲んでいるのが見えた。

部屋の隅には椅子に座った老婆、そして竈門で湯を沸かしている女性が1人。

「私とエルザさんで兵士を捕らえるわ。マルティは村長さんと娘さんを保護して」

「わかった」

「了解した。生かして捕らえるのか？」

「ええ、色々と聞きたいことがあるわ。あの兵士は所詮下っ端。同じ下っ端でも指揮官なら一応正規兵でしょうし、知っていることも多いでしょう。」

でも無理そうなら殺して良いわ」

「うむ」

エルザとマルティが頷くのを確認して、私は扉を開け放ち村長の家へ飛び込んだ。

全ての視線が私達に向かうが、気にすることはなく兵士達に肉薄する。

幸いにも村長の娘は竈門の前に居たため、男達からの距離は離れている。

マルティは村長の老婆の前まで駆けて男達と村長の間へ立ち、短剣を構えた。

私とエルザは【縮地】を使い一足で間合いを詰めると、ほぼ同時に兵士の意識を奪う。

「な、なん……」

指揮官が腰の剣に手を掛けるが、私はフリーゲルを抜き放つと、その剣を指揮官の手首ごと斬り落とし体を蹴り飛ばす。

「いっはあー」

勢い良く壁に叩き付けられた指揮官は意識を失った。

「起きなさい」

私は魔法で創り出した冷水を指揮官に浴びせる。

生捕にした兵士達は皆縛り上げて側に転がし、指揮官の手首はリサに止血程度に治癒してもらった。

「ひっ！」

「大人しくしなさい。既に此処にいる3人以外の兵は始末したわ。抵抗は無意味よ」

「た、助けてくれ」

「それは貴方の態度次第よ。少しでも助かる確率を上げたいなら死ぬ気で囁きなさい」

「は、話す、なんでも話すから、い、命だけは！」

「まずはサージヤス王国に協力しているハルドリア王国軍の数と指揮官からよ」

「は、話したら本当に助けてくれるのか？」

私は指揮官がそう言った瞬間、短剣を翻し隣に転がしていた兵士の腕を深く斬り裂いた。

「ぐあああ!!」

その短剣を手の中でクルクルと回して指揮官の太腿に突き立てる。

「ぐう！」

「余計なことを話せば傷が増えるわよ？貴方は私に聞かれたことだ

けを話せば良いの。

でもまあ、有益な情報を話せば私は許してあげましょう」

指揮官の太腿に突き立つ短剣の柄をグリグリといじる。

「わ、わかった！わかったから！軍の規模は……………」

それから指揮官から知りうる限りの情報を聞き出した。

その結果はあの兵士から聞き出した話を裏付けする程度の情報だったが、現在のサージャス王国軍とハルドリア王国軍の動きがある程度分かったことは収穫か。

「はあ、はあ、はあ」

あれからいくつか傷を増やした指揮官は荒い息を吐いて痛みを堪えている。

「エリー殿、準備できたぞ」

「分かったわ」

エルザに頼んでいた用意が整ったようなので私は指揮官の襟首を掴みながら立ち上がり、そのまま引きずっていく。

エルザと共にやってきたシシリーとサリナもそれぞれ兵士を掴みついてくる。

「な、なんだ！俺は全部話したぞ！ゆ、許してくれる約束だろ」

「ひっ」

「は、放せ！放せよお！」

指揮官と兵士たちが騒ぎ出す。

「ええ、私は約束は守るわ。

私は貴方達を許す。でも……………」

私は指揮官達を尋問していた村の外れの倉庫の扉を開けて外に出ると指揮官を放り捨て、シシリーとサリナもそれに倣う。

「あがつ」

「ぐあ！」

「いてえ」

「約束通り、私は貴方達を許す。でも皆は貴方達を許すのかしら？」

縛り上げられて身動きが取れず、地面に転がされた指揮官達を取り囲むように、生き残った村人達が集まっている。

その手に持っているのは鋤や鍬、包丁、鎌など。

私が尋問している間に、エルザ達に希望者を集めてもらったのだ。

これから行われるのは私刑だ。

法的には決して褒められる行いではないが、そもそも祖国に復讐しようとしている私に、村人達を止める権利など無い。

エルザ達も否と言うことは無かった。

「ま、まって…………た、助けて…………あ、ああ！！！！！」

指揮官達の悲鳴と村人の怒号を背に、私とエルザ達は、この後の行動を相談するのだった。

## 辺境の村解放戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

( ・ ・ ) ノシ

## 辺境の軍政官

村人達によつて殺された兵士共の死体を始末した私達は、村のこ  
とを村長達に任せて野営地へと戻つてきていた。

本部である天幕に主要メンバーを集めた私は、手早く今後の指示  
を出す。

「取り敢えず、村の警備に3人送るわ。」

防衛は考えなくて良いから、もし襲撃されたら村人の命を守りな  
がら遅滞戦闘を心がけて、空に魔法を打ち上げたらすぐに救援に向  
かうから」

「わかった。俺達の傭兵団から人を出そう」

「お願いね。その他の人員は交代で休息、レブリック子爵との連絡  
が取れ次第次の行動に移るわ」

そして見張りの順番や周囲の哨戒などを決めると今日は解散とな  
った。

そして2日、周囲を警戒しつつ、3回ほどサージャス王国軍の斥  
候部隊を壊滅させた頃だ。

レブリック子爵領軍が居ると思われる方に送り出した走竜傭兵団  
の斥候達が帰ってきた。

レブリック子爵家の家紋が入った軽鎧を身に着けた男を一緒に連  
れている。

「エリーの姉御、ただいま戻りましたぜ」



「レブリック子爵領軍との接触に成功しました。こちらはレブリック子爵領軍のイグル氏です」

走竜傭兵団の2人がレブリック子爵家の家紋が入った男を紹介する。

「イグルと申します。

エリー殿、義勇軍を率いてのこの度の援軍、レブリック領領主ルーカス・レブリックになり代わり、感謝を申し上げます」

そう言つてイグルは洗練された動作で頭を下げた。

その所作は武人のような雰囲気は無い。

多分、事務畑の人間。

レブリック子爵領軍の軍政官辺りだろうか？

私はイグルを天幕に案内すると、早速彼と情報を交換した。

ルーカス様率いるレブリック子爵領軍は予想通り南の草原に簡易陣地を設営し、周囲の村に屯する敵兵を排除しながら少しずつ東へと進んでいたらしい。

ルーカス様の方でも、今回の紛争の裏にフリードのアホが糸を引いていることに気付いたそうだ。

「一応、外交ルートを通じてハルドリア王国に抗議するための人を送つてはいるのですが、対ハルドリア王国の筆頭外交官であるルーカス様ご本人が辺境から動けない上、下級兵士の証言のみで、フリードがサージャス王国に帝国侵略の指示を出した文章などの物的証拠はありません。

それに時間的な問題もありますし、領民に被害が出ている以上、外交力による解決は難しいと思われれます」

「そうですね。」

それに、おそらくハルドリア王国は関与を否定するでしょうね。もし認めてしまえば周辺の属国以外の国々からの経済制裁は免れない。

フリードは考え無しの無能ですが、国の上層部にはそれなりに優秀な人材が揃っていますわ。

決定的な証拠、それも言い逃れできないほどの物でも無ければ逃げられるでしょうね。」

一応、大国の王太子であるフリードに対して散々な言い草だが、イグルは私の素性をルーカス様から聞いているそうだ。

まあ、あんなに堂々とレブリック子爵家に世話になっていたのだから知っている人間がいるのも当然だ。

勿論、ルーカス様が信用している人間にしか伝わってはいないはずだが。

イグルも今回の義勇軍を率いているのが私だと聞いてルーカス様が情報共有のために派遣してくれたというわけだ。

「ではルーカス様の今後の行動は？」

「はい。我々はサージャス王国軍に実効支配されている村々を解放しながら東へと進み、ブロッケン砦を奪還する予定です。」

「なるほど。我々に対しては何と？」

「義勇軍の方々もレブリック子爵領軍と足並みを揃え、村々を解放しながら東へ向かっていただきたいとのことですよ。」

「わかりましたわ。」

ですが我々は移動速度を重視した少数精鋭の構成、村々の解放は問題ありませんが、その後の防衛や村人の保護に人を割くのは難しいですわね。」

「では此方から防衛の人員を向かわせましょう。」

「お願いしますわ」

話が纏まると、レブリック子爵領軍の簡易拠点へ帰陣するイグル。彼はレブリック子爵領軍から2名の護衛を連れてきたが、一応此方からも走竜傭兵団から4人、護衛に着いてもらった。

「イグル殿、ルーカス様によろしくお伝えくださいませ」

「畏まりました。」

ではエリー殿、また東で。ブロッケン砦手前の草原でお会いしましょう」

イグルを送り出した私は東へ進軍するため、ミレイに皆を集めてもらうのだった。

## 辺境の軍政官（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境での軍議

イグルと別れた後、私達は東に向かって進軍を始めた。

途中にはいくつかの村があり、サージャス王国軍やハルドリア王国軍に占領されていた村は兵士を殲滅し解放する。

初めの村のように、村人が惨殺されていたりする村は少なかったが、それでも多少の被害は出ている。

だがアフターケアまでは手が回らないので、そこはルーカス様が送ってくれる兵士達に任せることにした。

森に沿って走っている街道を東に向かって進んでいる道中、太陽が中天を過ぎた頃に一旦休息を取っていると、ミレイが報告を持ってきた。

「エリー様、進行方向に向かった斥候からの報告です。」

“草原に武装集団を発見、紋章からレブリック子爵領軍だと思われる”とのことでした。

「そう、では合流しましょう。」

走竜傭兵団から使者を出してもらって頂戴  
「畏まりました」

そのまま無造作に近づいてはレブリック子爵領軍に警戒されかねない。

そのため、向こうと面識のある走竜傭兵団の斥候2人に白旗とトレートル商会の商会旗を掲げてアポイントを取りに行ってもらおうのだ。

数時間後、私はレブリック子爵領軍の簡易拠点の中央にある本部として使われている大きな天幕でルーカス様と面会していた。

「お久しぶりですわ、ルーカス様」

「ああ、この度はエリー会長が引き連れてきてくれた義勇軍のお陰でかなり助かっている」

「お役に立てたようで幸いですわ」

「エリー会長が投資していた村はどうだ？」

被害は受けていたのか？」

私がトレートル商会の生産拠点としてお金を掛けて開発していた村もこの近くだ。

つい先日、サージャス王国軍を排除して取り返している。

「人的な被害は抵抗した村人が負傷した程度ですわ。しかし、運び込んでいた物資の多くが徴発されてしまったようです」

「そうか。死者が出なかったことを喜ぶべきか」

「そうですね」

盗られた物資は代価を支払っていただきますわ」

私が怒りを滲ませながら微笑むとルーカス様は苦笑いで応えた。

それから私達はお互いの今後の行動をすり合わせ、その結果ブロッケン砦を取り戻すまでは共に行動することになった。

義勇軍の指揮権は引き続き私、その私の上にルーカス様が付くことになったが、私にはある程度の自由裁量を保証してもらった。

そしてレブリック子爵領軍と共に東へ向かって軍を進めること2日。

斥候が前方にブロッケン砦を視認し、私達は再び簡易拠点を設営し、主要メンバーで作戦会議を行う。

レブリック子爵領軍からはルーカス様とイグル、レブリック子爵軍の団長と指揮官が数名、義勇軍からは私とミレイ、そしてエルザと走竜傭兵団の団長であるユリウスが参加していた。

「では夕刻、少数精鋭で一気に制圧するということによろしいですか？」

「ああ、それしか無いだろうな」

「裏側からとは言え、砦攻めですからね。」

大軍で囲めば勝てるでしょうが時間がかかる上、それなりの被害が出るでしょう」

「ブロッケン砦は堅城。」

正面からではなく、背面からの攻め込みだが、城壁と据え置きバリスタや投石器などがある防衛側が圧倒的に有利である。

その上、向こうにはブロッケン砦を1日で落としたほどの傭兵団と思われる戦力まである。

正面から普通の兵士をぶつけても無駄に死者を増やすだけの結果になるだろう。

なので此方は神器を使える強者のみ、少数でブロッケン砦の敵戦力を叩くことになった。

具体的には私とルーカス様、エルザ、そしてレブリック子爵領軍の軍団長であるドレッジの4人が攻め込み、レブリック子爵領軍の

精鋭と私が連れてきた義勇軍が外側から包囲する。

敵陣にたった4人で攻め入ると聞けば、無茶無謀の類いに聞こえるが、今回の場合はそれに当て嵌まることはない。

それだけ神器を使える者の戦闘能力は特出しているということだ。

「敵方には神器を使える者は居ないのか？」

「今のところは確認されていません」

おっと、ここは情報を出しておくべきね。

「サージヤス王国の宗主国であるハルドリア王国が援軍に来ていますわ？」

どうやら王太子が勝手に軍を率いてきたようなだけけれど、フリード王太子と近衛騎士のロベルト・アーティは神器を使えるはずですよわ」

「うむ、フリード王太子か。余計なことをしてくれたものだ」

「だが王太子とその護衛なら無理に残って戦ったりはしないだろう。戦況が此方に傾けば、生存を第一に考え撤退するはずだ」

ドレッジの予想は正しいでしょうね。

あのフリードが見下している属国のために命を懸けて戦うとは思えない。

此方が攻め始めればすぐに逃げ出す……いや、もしかしたら既に逃げているかも知れない。と言うか、その可能性はかなり高い。

「ドレッジ軍団長の予想は正しいと思いますわ。自国の危機でもないので、王太子が危険を冒すとは思えません」

「然り、サージヤス王国軍に神器使いが居なければ問題は無かるう」

「情報ではサージヤス王国に所属している者で神器が使えるのは近



衛騎士団長のみ、かの御仁は国王の側を離れることはありませんでしょうから、ブロッケン砦には居ませんわ」

「可能性があるとすれば件の傭兵団か」

「ええ、ですので総大将であるルーカス様、実質の軍の総指揮官であるドレッジ軍団長は砦の南側から攻め込んで頂きたいと思えますわ」

「な」

「エリー嬢、どういうことでしょうか？」

道中、捕らえた捕虜から聞き出した情報によると、ブロッケン砦内の南側に正規兵、北側に雇われの冒険者や傭兵が駐屯しているらしい。

凄腕の傭兵が居る可能性が高いのは北側だ。

「私は魔法による広範囲攻撃が得意ですし、エルザは凄腕の冒険者、いざとなれば逃げ切る程度のことは可能でしょう」

「むう……」

ドレッジは私の素性を知っているので、即答は避け、決定をルーカス様に委ねる。

「……………わかった。だが無理はするな。」

サージャス王国軍の抵抗が強いならば長期戦に持ち込んでも構わない。

自らの命を優先しろ」

「ええ、勿論」

決行は半日後、捕虜からの情報によりサージャス王国軍は夕刻頃に見張りなどの交代を行う。

明るい日中を若い兵が、暗くなり見通しが悪くなる夜をベテラン

が担当する。

そのため、経験の浅い若い兵が最も疲弊している交代の直前に襲撃する予定だ。

こうしてブロッケン砦の奪還作戦が決定した。

## 辺境での軍議（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境の皆奪還戦

レブリック子爵領軍との合同の主要メンバーでの軍議が終了し解散となった後、冒険者パーティ《鋭き切先》のリーダー、エルザは自分達に充てがわれた天幕へと帰ってきた。

「あ、エルザさん」

「おお、帰ったか」

「ただいま」

そこで待っていた仲間たちに軍議で決まった作戦を伝える。

「4人だけで襲撃か」

「き、危険じゃないんですか？」

少し考え込むシシリーとエルザを心配するマルティ。

エルザはマルティを安心させるように肩を叩いた。

「大丈夫だ。他の3人、レブリック子爵とドレッジ軍団長、それにエリー殿も皆、神器使いだ。その上、敵軍の戦力はそこまで高くない」

「そうね。それに万が一劣勢になってもエルザの神器なら撤退することは難しくはないでしょ？」

「ああ、敵の戦力が想定以上だった場合は撤退して良いと言われたしな」

「そうですね……それなら……」

マルティも納得したように頷く。

エルザの神器は窮地を脱する場合や、ギリギリの状況を打開することに適した能力を持っている。

仲間達の納得はその力を信用してのものだろう。

「それにしても会長さんまで襲撃に加わるなんて意外ですね」

「そうね。確かに剣も魔法も達人級の腕前だけど、神器はあの物資を収納する本なのよね？」

とても戦闘向きの神器だとは思えないわ」

「レブリック子爵様やレブリック子爵領軍の上層部の人も、何処か会長さんに気を使っているみたいでしたし、何かあるんですかね？」

マルティとリサが襲撃にエリーが参加すると聞いて不思議そうにしていた。

確かにエルザもあのエリーという商会長には何かあるとは思っている。

ハルドリア王国の王太子や近衛騎士の話やサージャス王国の神器使いの話など、妙に詳しくかった。

情報通の商人と言えば、そう思えなくはないが、王太子や近衛騎士の話をしている時はごく僅かではあるが殺気が漏れていた。

何か個人的な関係があるのかも知れない。

確かに気にはなるが、エルザはそれを口にすることは無かった。  
何故なら……………。

「2人とも、その辺にしておけ」

普段は無口なサリナが、エリーの素性を予想していたマルティとリサを嗜める。

「あまり詮索するな」

「……………そうね」

「すみません、つい」

マルティとリサは軽率な詮索を反省する。

「サリナの言う通りだな。

余計なことを知れば巻き込まれる。

長く冒険者を続けたければ鈍感になることだ」

「好奇心とは死神の名前である””ってことですよ。気を付けます」

「玉言よね。反省するわ」

マルティとリサは冒険者の間で語られる格言を口にする。

この世の中には知らない方が良いことも多いのだ。

私は自分の天幕で装備を確認していた。

防刃と対魔力を付与したローブに左腕に小手、腰にはフリーユージュルを帯び、ローブの内側にナイフと短剣を複数仕込んでおく。

今回は隠密行動ではなく、派手に攻め込み殲滅する予定なので身軽さや隠密性ではなく、火力と防御力を優先した装備だ。

「行ってくるわ」

「御武運をお祈りしております」

「ミレイもね」

私が襲撃を掛ける間、レブリック子爵領軍と共に義勇軍はブロッ

ケン砦を包囲する予定だ。

その時、義勇軍の指揮はミレイに任せている。

私はミレイに軽く手を挙げてから天幕を出た。

既に陽は傾き始めており、後1時間もすれば襲撃予定の時間になる。

私はエルザと合流してブロッケン砦の北側へと移動した。

近場の岩に身を隠して時間が来るのを待つ。

「もうすぐ時間ね」

「ああ、私があのお見塔の辺り、エリー殿が駐屯地の辺りだったな」

エルザがブロッケン砦を見て最終確認をする。

「ええ、潜入した後は派手に暴れて、可能な限り敵戦力をすり潰すわ」

「うむ。捕虜などは必要ないのだな？」

「要らないわ。もし偉そうな奴が居たら可能であれば生捕にしても良いけど、無理なら殺して構わない。」

それと、非戦闘員はなるべく殺さないで」

「わかっている。」

もしかしたら拐われた村人が雑用をさせられているかも知れないしな」

サージャス王国軍に襲われた村人の中には拐われた者も居た。

そう言った者達が雑用や慰安婦として囚われているかも知れない。実情は奴隷と変わらない扱いをされているが、一応賃金は出ており、形としては戦地での雇用となる。

戦時国際法の抜け道ね。

「時間だ」

「行きましよう」

私とエルザは自分達の担当の場所を目指して駆け出したのだった。



## 辺境の皆奪選戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 辺境の砦奪還戦

エルザと別れた私はブロッケン砦の城壁へと駆けてゆく。  
軍隊ならまだしも、陽が傾き始めた黄昏時に人間1人を発見する  
というのは難しい。

懐から取り出した複数のナイフを城壁に向かって魔力を込めて投  
擲すると、刃の中程まで深々と突き刺さる。

そのナイフの柄を足場に城壁を跳ねるように駆け上がると、私の  
目の前に見張りらしき2人の兵士の姿が現れる。

「えー」

2人で談笑でもしていたのだろう。

突如城壁の外から飛び上がってきた私の姿を見て目を丸くしてい  
る。

そのような隙を見逃すはずもなく、剣を一閃。見張りの首を斬り  
落とした。

身を伏せた私は、2人分の体が崩れ落ちた音で別の兵士が現れな  
いことを確認してから、傭兵や冒険者が駐屯している広場をそつと  
窺い見た。

中庭には沢山の天幕が張られており、武装した者達が食後の休息  
を取っていた。

威力の高い広範囲魔法を使えば一撃で半壊するほどのダメージを  
与えられるが、魔力に敏感な者には気付かれてしまうかも知れない。

それに捕まっている村人も居るかも知れない。  
此処は威力は低くても広範囲で発動速度が速い魔法を使うべきね。

「アイス・レイン【氷雨】」

魔法で創られた小さな氷の粒が広範囲に渡って降り注ぐ。

一撃で命を奪う程の威力は無いが、突如、氷の塊に打ち据えられた傭兵や冒険者達はパニックを起こす。

氷の塊は小石程の大きさから人の頭程の大きさまで様々。

腕や足に当たれば骨に罅くらいは入る上、当たりどころが悪い者は意識を失っている。

混乱が続く中庭に降り立った私は近場に居た冒険者パーティらしき集団から斬り殺していく。

下働きの下男や下女は村人かも知れないので手は出さず、武装している者は片っ端から斬り捨てた。

氷の雨が止んだ頃になって、ようやく敵襲を知らせる鐘が鳴り始め、多少の冷静さを取り戻した傭兵や冒険者が魔法を撃ち込まれただけでなく、襲撃者の存在に気付き始めた。

「敵襲だ！敵が居るぞ！！」

「女だ！フレッドがやられた！！」

「ちくしょう、ちく………があ」

「アンデイ！！」

浮き足立つ敵軍の間を駆け抜けながら、次々と剣を一閃しては命を奪っていく。

彼ら彼女らはあくまでも傭兵や冒険者。

野盗や国の兵士ではない。

しかし依頼を受けて戦場に立ったなら、相応の覚悟をしているはずだ。

私はできている。

私の邪魔をする者は誰であろうと排除する覚悟がある。

「居たぞ！あの女だ！」

「固まれ！盾持ちは前に出る！」

多少は動きの良い奴らも居るわね。

その場に居た者達が一塊になり、盾を持った大柄な者達が前衛を固め、その後ろに槍持ちや弓持ちが構える。

基本的に忠実な布陣だ。

「多分傭兵ね。でも例の奴らではなさそう」

そこそこの練度だけれど、この程度でブロッケン砦をあっさりと陥落させることは無理でしょうね。

「凍てつく突風 輝く吐息 我が名は氷狼【白銀の息吹】」

フィンリル  
ブリザード・プレス

一塊になっていた奴らを、纏めて氷漬けにする。

短文詠唱とは言え、無詠唱の魔法とは比べ物にならない高威力魔法を受けた者達は一瞬で身体中の血液まで凍ってしまふ。

彼らの中に魔法使いが居れば多少はレジストできたのかも知れないが、残念ながらそれは叶わない。

「あの女、魔法も使うぞ！」

「さっきの氷の雨もあいつの仕業か！！」

「ひっ！ま、魔女だ……………あがっ！」

魔女って……まあ間違っではないけど。

その後も私は目に付く端から敵兵を切り捨てていった。

「あちらは随分と派手にやっているみたいだな」

エルザは悲鳴や破壊音が聞こえてくる方をチラリと窺った。

「余所見とは余裕だな!!」

ガタイの良い冒険者が肉厚な大剣をエルザの頭上目掛けて振り下ろす。

しかしエルザは手にしていた剣を大剣にそつと当てて斬撃の軌道を僅かに逸らす。

「まあな」

そのまま大剣に引かれて重心を崩した冒険者の首を刎ねる。

こちら側に居た数は少なめで、広範囲への攻撃手段に乏しいエルザでも余裕を持って対処できていた。

「  
」

背後から矢羽が風を切る音を感じ、振り向きざまに矢を切り払う。

「はっ！」

その瞬間、突き出された槍がエルザを襲うが、紙一重で躲し距離を取る。

すると、揃いの革鎧を身に着けた集団がエルザを半円に取り囲むように広がっていた。

「ふっ！」

その内の1人、端に居た男に斬りかかるが、すぐ隣に居た盾持ちの男がエルザの剣を弾く。

その隙にエルザが狙った男が剣を突き出し、背後から矢が射掛けられる。

「ちっ！」

エルザは身を投げ出すように跳び退くと、その集団から距離を取った。

先程までの烏合の衆とはまるで違う練度、エルザはその集団が軍隊でも話題に挙げられていた傭兵団だとすぐに思い至った。

「随分と腕が良いな。あんたらが噂の傭兵団かい？」

「噂とやらは知らないが、あんたほどの実力者に褒められるのは悪い気はしねえな」

探るようなエルザの問いに集団の中から現れた男が答えた。

くすんだ金髪を短く刈り込んだ男の顔には左右に大きな傷が走っている。

その男は他の者達と揃いの革鎧を装備しているが、多少質が良い物を使っている。

おそらく奴がリーダーか。

エルザの予想通り、男は仲間たちへと指示を飛ばす。

「かなりの実力者だ！深追いはするな、囲んで少しずつ削れ！互いをフォロワーしろ！」

その指示を聞いたエルザを取り囲む傭兵たちは、警戒を深くしつつ、油断なく武器を構えるのだった。

## 辺境の皆奪選戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ



## 辺境の皆奪還戦

「くっ！」

傭兵達は想定以上の手練れだった。

1人1人の技量はエルザと比べるべくもないが、互いが互いをフオローし合うことでエルザの攻撃を防ぎ、追撃をさせないように立ち回っていた。

エルザがわざと隙を作って攻撃を誘ってもリーダーの男がすかさず指示を飛ばして踏み込まないようにしている。

傭兵達の攻撃はエルザにかすり傷程度しか与えられていないが、それでも10、20と重なれば体は重くなり、集中力は欠けてくる。

「ふう、ふう」

「最後まで焦るな！間合いをとって確実に攻撃しろ！」

指示を出す男も自ら剣を握りエルザに斬りかかってくる。

リーダーらしく、他の傭兵達よりも頭1つ腕が立つ。

リーダーを相手しているうちに射られた矢でまたかすり傷が増えた。

「……………このままでは不味いか」

「そつだろ？投降するかい？」

「面白い冗談だ」

「ならどうする？」

「こうするのさ……………神器【不屈の大剣】  
レントゥスゲラニアイウス

エルザは手にしていた剣を傭兵のリーダーに投げつけ、その手に

神器を生成する。

魔力が凝縮され物質化したその神器は長身のエルザが手にしても大きく見える大剣であった。

「ちっ！神器だ！退がれ！」

リーダーが鋭く叫ぶが、エルザが踏み込む方が早い。

盾を構えた傭兵が前に出て腰を落として構えるが、エルザは構わず大剣で薙ぎ払う。

「ぐあ！！！」

「ぎい！」

盾を構えた傭兵ごと数人の傭兵が弾き飛ばされる。

それは先程まで問題無く受け止めていた剣を奮っていた者と同じ人物の攻撃とは思えないほどの一撃。

「くそ！身体能力を上げるタイプか！」

基本的に神器を生成した者は体内の魔力が活性化し、身体能力が上昇する。

しかしエルザの神器【不屈の大剣】レントゥスグラディウスの能力上昇率はそれを遥かに超えていた。

通常時の【不屈の大剣】レントゥスグラディウスは多少身体能力が上昇するだけの剣に過ぎない。

その為、エルザも普段の戦闘ではわざわざ神器を使うことはしなかった。

だが【不屈の大剣】レントゥスグラディウスには1つ、特殊な能力があった。

それはエルザが傷つき窮地に陥るほど、身体能力を上昇させ、刀

身は鋭く強靱になるという単純であるが、強大な能力だった。

この能力により、数々の死線を潜り抜け生還したエルザは、いつしか『不死鳥のエルザ』と呼ばれるA級冒険者となっていた。

「ひい、た、助けぐがつ」

剣を捨てて両手を上げた男の命乞いを無視して斬り捨てた私は、『ふう』と息を吐き出し周囲を見回した。

私の周りはまさに血の海と化しており、所々に凍り付いた冒険者や傭兵が鎮座していた。

「こちらはハズレだったみたいね」

例の傭兵らしき手練れは居なかった。

それとも気付かずに殺してしまったのだろうか？

その時、少し離れた場所でエルザの魔力が膨れ上がり、すぐに凝縮されるのを感じた。

「今のは……」

この独特な魔力の動きは神器を生成する時の物だ。

「エルザが神器を使った？」

エルザの神器は窮地に陥った状況でなければ本来の能力を発揮できない物らしい。

私が自分の神器を明かしたからと、先程エルザ自身がそう教えてくれた。

「つまり、向こうが当たりだったってわけね」

件の傭兵は何か引っ掛かる。

此処で確実に始末しておいた方がいい。

そう判断した私はエルザが居る方へと駆け出していった。

## 辺境の皆奪選戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

( ・ ・ ) ノシ

## 辺境の砦奪還戦

エルザが居る辺りを目指して走る私の視界の端に大きな火柱が見えた。

多分ルーカス様の魔法だろう。

ルーカス様は父であった前レブリック男爵が急死したため、若くして家督を継承することになったが、それまでは帝国の魔法騎士団に所属していたと聞いたことがある。

火属性の魔法適性を持つ実力者だ。

歴戦の戦士であるドレッジも付いているので心配は無い。

「な、なんだお前は！止まれがばあ」

私を見咎め制止しようとした兵士をすれ違い様に斬り、砦を回り込み開けた場所に出た。

そこではエルザが30人ほどの傭兵に囲まれていた。戦況は拮抗、いやエルザが少し押しているか。

「神器【暴食の魔導書】」  
グリモア・ヘルゼブラ

私が【暴食の魔導書】を生成すると、その魔力を察したのか、こちらに近い傭兵が私に気付き『新手だ！』と声を上げる。

「【風刃】 【岩棘】 【炎弾】」  
エア・カッター ロック・ニードルフレイム・バレット

【暴食の魔導書】の能力を使い3つの魔法を同時に発動させる。

エルザに気を取られていた傭兵達は、私の魔法に対する反応が一

瞬遅れた。

風の刃は盾で受け止められたが、人の頭ほどもある炎が数人の傭兵を3メートル以上吹き飛ばし、地面から突き出た岩の棘が1人の傭兵を革鎧ごと貫く。

「複数の属性魔法を同時に」

「どうなっている!」

「神器の能力か?」

「くそ! 新手も神器使いだ!」

傭兵達に動揺が広がる。

この隙に殲滅しましょう。

「フレイム・ランス【炎槍】」

「狼狽えるな!!!」

浮き足立つ傭兵に燃え盛る炎でできた槍を放つが、飛び出してきた顔に大きな傷が走る傭兵がフレイム・ランス【炎槍】を剣で打ち払った。

「慌てるな、状況D!

撤退する! ガトー隊は俺と殿だ!」

リーダーらしき男が叫ぶと、傭兵達は直ぐに冷静さを取り戻し、まるで1つの生き物のように滑らかに陣形を変えた。

サージャス王国軍よりも遙かに練度が高いわね。

「エルザさん!」

「わかつている!」

私はリーダーの相手をエルザに任せ、背後に跳び魔法を放とうと【暴食の魔導書】に魔力を込める。

しかし、傭兵のリーダーは共に殿として残った傭兵の援護を受けてエルザを抜け、私に迫っていた。

「む……」

「ふん！」

リーダーが突き出した剣を躲した私はフリーユゲルを振るいリーダーの胸を薙ぐ。

しかしリーダーは鎧で受けたり盾で防ごうとはせず、剣で打ち払おうとする。

「」

私はフリーユゲルをピタリと止め、右足を軸に半回転。

リーダーの剣を左腕の小手で受け止めた。

「その反応、やはりその剣は叙事詩級の魔法武器『翼を持つ者』か！何処ぞの国の宝物庫に納められていると噂で聞いていたのだが……まさかこんな所でお目にかかれるとはな！」

そう言いながらもリーダーは休む事なく剣を振るい、私はそれを左腕の小手で受け続けている。

確かにこれはフリーユゲルへの対処としては正しい。  
最適解と言える。

伝承によれば、フリーユゲルはスカイドラゴンの牙を極限まで研ぎ上げて作られたと言われている。



透けるほど薄く研ぎ上げられた刃はミスリルすら抵抗なく両断できる斬れ味を持つ反面、その耐久性は皆無と言って良い。

衝撃を受けるところか、無理な軌道で振るっただけで、その刃は碎け散る。

刃と同様にスカイドラゴンの素材で作られた鞘に納めておけば、碎けた刃は再生するが、それなりの時間が掛かる。

つまり、この剣は敵の攻撃を受け止めることはおろか。受け流すことすらできないのだ。

傭兵のリーダーはその伝承を知っていたらしく、執拗に刀身を狙ってくる。

エルザの方をみれば、殿になった傭兵達を数名倒しているが、その捨て身も辞さない攻撃に足止めされてしまっている。

「お前さんほどの冒険者が、噂すら聞いたことが無いってのはいったいどういうわけだ？」

「私は冒険者ではなく商人ですわ」

嵐のような剣戟を休み無く繰り返しながら問うリーダーに律儀に返答を返してやりながら、私は魔法を使う隙を狙う。

しかし、それよりも早く笛の音が聞こえてきた。

「ようやくか……」

リーダーが呟くと小さな球を取り出して、投げ捨てながら背後に跳んだ。

瞬間、小さな球が眩い閃光を放ち私の視界を潰した。

使い捨ての目眩しのマジックアイテムか！

咄嗟に退がり攻撃に備えるが、リーダーからの追撃は無かった。

まだチカチカと閃光の余韻が残る視界に、一目散に逃げるリーダーと生き残った殿の傭兵の姿があった。

どうやらエルザも同じマジックアイテムを使われたみたいね。

離れたところで集まっていた傭兵達は、彼らとは違う上等な鎧を装備した青年と、その護衛らしき者達と共にリーダーと殿として残った仲間を待っていた。

「アイツは！」

私はその青年に見覚えがあった。

サージャス王国の王子グリント・サージャスだ。

「エルザさん！」

「ああ！」

私とエルザは傭兵達へ向かって駆け出した。

犠牲を出してまで時間を稼いだのに逃げずにリーダーを待っていた。

それも大将だと思われる王子を連れて。

つまり、此処から一気に逃げる用意があるに違いない。

リーダーが懐から複雑な魔法陣が描かれた羊皮紙を取り出し広げる。

魔法が封印された古代の遺物、マジックスクロールだ。

「リリース解放【ゲート転移】」

リーダーが叫ぶと傭兵や王子達の姿は一瞬で掻き消え、その場には20人以上の人数が消失した静寂だけが残されていた。

## 辺境の皆奪選戦 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 辺境での今後

大将首には逃げられてしまったが、サージャス王国軍の排除は順調に進み、程なくしてブロッケン砦の奪還は成功した。

私はルーカス様を始めとする主要メンバーと共にブロッケン砦の一室、軍議などに使われる作戦室の1つに集まり今後について話し合っていた。

「ひとまずはサージャス王国軍を追い返すことができたが、問題はこれからだな」

ルーカス様が深い溜息を吐きながら言った。

ハルドリア王国の一部の貴族などは平民など替えの利く労働力程度にしか考えていないアホも少なくないが、帝国の平民への認識はかなり違う。

帝国臣民はあまねく皇帝陛下の財産である。帝国法にはそう明記されているのだ。

そのため、たとえ田舎の村人であろうと、他国から不当に害されるとなれば、それは皇帝陛下の財産に手を出した、と認識される。

ルーカス様がこのまま、なあなあに済ませてしまうと、帝国の他の貴族から、皇帝陛下の財産に傷をつけられて報復もしない腰抜けと言われ、酷くなれば国家への反逆と言い出す者も居る。

つまり、この紛争はまだ終わらないというわけだ。

手段は2つ、外交ルートを通じて謝罪と賠償を求める方法。

もう1つはこのまま逆侵攻して直接代償を払わせに行く方法。

消耗を考えるならば1つ目の外交ルートでの交渉だけれど、帝国はサージャス王国との国交が無い。

その上、裏で暗躍していたフリード、ひいてはハルドリア王国の国際的な責任を追及したいところだが、外交で時間を掛ければ決定的な証拠を処分されてしまう可能性が高い。

あの頭のとっぺんから爪先まで筋肉でできたアホなら、筋を通すとか言い出しても不思議ではないが、宰相を務めるクソ親父は絶対に証拠を隠滅しようとする。

脳筋も政治に関しては公爵の献策に従うだろう。

ならば此処で取るべき選択は1つ。

ルーカス様もその答えに行き着いたのか、覚悟を決めた顔で言った。

「これより……サージャス王国へ侵攻する」

サージャス王国の王城の一室でソファにふんぞりかえり、不機嫌そうにワイングラスを傾けるハルドリア王国の王太子、フリードとその正面に腰掛けた憔悴頻った表情のサージャス王国の王子グリントの姿を視界に収めながら、フリードの近衛騎士ロベルト・アーティは複雑な気持ちを押し殺して壁際に立っていた。

「まったく！たかだか田舎貴族から皆1つ満足に奪うこともできないのか？」

これだから無能な下級国は嫌になる」

「……………」

フリードの罵声を浴びるグリントだが、何も言い返すことはない。そんなことをすれば主国であるハルドリアからの支援を止められ、国民に多大な被害が出てしまう。

そのため、グリントは喉から出掛かる恨言を必死で飲み込んでいた。

その光景を見てロベルトは考える。

自分のしていることは本当に正しいのだろうか。

帝国の村人からの略奪を許可すると言うフリードに、ロベルトは考え直すように何度も進言した。

そんなことをすれば国際社会からの非難は避けられない、と。

しかしフリードはそんなロベルトの忠言に耳を貸すことなく命令を発した。

兵の士気の維持や褒賞の節約などの理由はあるのだろうが、一番の理由は帝国への嫌がらせだとロベルトは考えている。

確かに戦時国際法では禁じられていることだが、それをしたからと言って帝国がわざわざ攻め込んでくるとは考えにくい。

ただの田舎の村人のために、多大なコストを掛けて戦争をするなんて非効率的な行いだと言うフリードの予想にも頷ける。

ロベルトは、王太子の婚約者となっているシルビア・ロックウィー  
トに恋をしていた。

しかし、彼女の心を射止めたのは目の前の王太子。

ロベルトの身分ではライバルとなることすらできない相手だ。

ならばと、ロベルトは友人でもあるフリードと最愛の女性、シルビアのために剣を捧げようと考えたのだ。

だが、その選択が正しかったのか、今になって疑問に思ってしまった。

優秀で気さくだった友人は、日々苛立ちを募らせて臣下に当たり散らすようになってしまい、ロベルトの言葉も届かなくなってしまった。

思えばフリードの前婚約者であるエリザベートを排した頃から状況が変わり始めた。

ブライト王と共に国を空けていた、父である近衛騎士団長は、シルビアのためにフリードと共にエリザベートを捕らえたことで、烈火の如く怒り、ロベルトは骨を数本折るほどの折檻を受けた。

父曰く、エリザベートが裏からフォローしていたお陰でフリードは『優秀な王太子』でいられたのだ、と言う。

ロベルトが『何を馬鹿な』『シルビアを害そうとするような悪女を放置すれば国がダメになる』と反論すると、折られた骨はもう一本増えた。

当時は恋焦がれる少女を傷つけたエリザベートを擁護する父や母に反感を覚えたものだが、今になって思うと、エリザベートがシルビアを狙ったという証拠などは無かった。

エリザベートを悪だと断じた理由は、フリードとシルビアの言葉でしか無かったのだ。

だが、2人の言葉を疑うなんて……………。

「おい、ロベルト！聞いているのか！」

「は、はい！」

ループしそうになっていたロベルトの思考を不機嫌そうなフリー



ドの声が遮った。

「このオメオメと逃げ帰った無能の軍が壊滅したせいで、大した武功が得られなかった。

なのでお前が直々に軍を率いて侵攻してくるであろう野蛮な帝国兵共を殲滅してやれ！」

「……………御意」

さまざまな言葉を飲み込んで、ロベルトはそう答えるしか無かった。

## 辺境での今後（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境の決着

サージャス王国へ進軍した私達は、小さな砦や街の防衛戦力を物ともせず、快進撃を続け、王都の手前にある街へとやってきていた。

ここまで来ると街を任されている代官なども抵抗が無駄だと判断し、特に抵抗することなく白旗を掲げて私達を街へ招き入れていた。ルーカス様が、これまで制圧してきた街や村でも無体なことは一切許さなかったことと、帝国に併合した後、恭順を示した者の立場を保証したことも大きい。

そして、私達は臨時の軍事本部と定めた代官の屋敷の一室で顔を突き合わせていた。

「後は王都を制圧するだけですわね」

「ああ、此処まで進軍するのにも大した犠牲も出ていない。

サージャス王国王都の防衛戦力が情報通りなら、最早戦いにもならないだろう」

サージャス王国の国土を此処まで進むまでに、此方には殆ど被害は出ていない。

いくら戦力の低い小国とは言え、此処までの快勝を続けられたのには当然ながら理由がある。

「まあ、コレに関しては貴方のお陰ですわね。感謝していますわ、ロベルト様」

私は隣に座るロベルトに声を掛けた。

私達が大した被害も出さずに此処まで来られたのは、ロベルトがサージヤス王国の軍備などの情報を提供してくれたからに他ならない。

彼はフリードの命令を受けて私達を迎撃するために軍を率いて国境へと向かっていったそうだ。

そして戦場で対峙した際、軍の中に私の姿を見つけた彼は話し合いを申し出てきたのだ。

そこで私達は話し合い、彼はフリードの下を離れて私達と共に来ることを選んだ。

私は未だに迷いを滲ませるロベルトに優しく微笑み掛けた。

「……………自分は……………」

「貴方の気持ちは理解できませんわ。」

一度剣を捧げた主君を裏切る形になるのですから……………ですが、間違っているのはフリード殿下の方なのは明らかですわ。

時に汚名を被ってでも主君の間違いを正すのが忠臣、そして友と  
いうものでしょう?」

「エリザベート嬢……………そう……………ですわね！」

今のフリード殿下はやはりおかしい。

殿下に目を覚ましていただかなければ!

そのためなら自分は裏切りの汚名を着せられても構いません」

「ロベルト殿の身の安全と立場については私ができる限り配慮しよう。」

ハルドリア王国との交渉次第ではあるが、王国に帰順できる可能性も有るだろう」

「ご配慮、痛み入ります。ルーカス卿」

表情から少しだけ影が晴れたロベルトはルーカス様に感謝を述べ

た。

「エリザベート嬢」

会議が終わり、充てがわれた部屋に戻るうとした時だ。  
私はロベルトに呼び止められた。

「あら、ロベルト様。どうかされましたか？」

ロベルトは私の側まで歩み寄ると深々と頭を下げる。

「申し訳無かった！」

「ロベルト様？」

「1年前、自分は貴女に対して許されないことをしました。  
フリード殿下とシルビア嬢の話を鵜呑みにして、自らの目で確か  
めることもなく貴女を断じた。

その結果、貴女は国を追われることになってしまい……………」

私はロベルトの肩に手を置いて言葉を遮った。

「もう済んだ話ですわ。」

それに私は商人としての生活を楽しんでいるのですのよ？」

「しかし……………」

「全てはフリード殿下と友好的な関係を築けなかった私の責任です  
わ。」

「貴方が気にすることはありません」

私はロベルトの腕を取り、両手でその手首を掴んだ。

「ロベルト様はこうしてご自身の立場を捨ててまで正義を成そうとされているではありませんか。」

貴方の決断が……貴方の剣が、多くの人々の命を守るのです。

ですから……自信を持ってください」

「エリザベート嬢……………」

「それと、今の私はエリー。」

エリー・レイスですわ」

僅かに頬を染めたロベルトに、私は別れ際に悪戯っぽく言って、自分の部屋へと戻るのだった。

サージヤス王国の王城を中心として広がる王都は、普段の活気が嘘のように静まり返っていた。

王都の民は皆、家に籠り鎧戸を閉めて息を潜めている。

その理由というのは、王都の防壁の外に展開している帝国の軍勢であった。

帝国との間で発生した紛争で、援軍に來たハルドリア王国の兵が帝国の民を虐殺したことで、帝国は報復としてサージヤス王国に進軍してきたのだという話は、既に王都の人々の知るところとなっていた。

もつとも、それはエリーが人を使って広めさせた話だ。

更に言うと帝国軍は規律正しく、抵抗さえしなければ決して民間人に手を出すことは無いという話も広がっている。

そのため、王都の人々はこの嵐が過ぎ去るのを身を小さくして堪えようとしていた。

そしてサージヤス王国の王城、王座の間でも深刻な顔をした人々が重い雰囲気の中、顔を突き合わせていた。

「もはやこれまで……か」

「抵抗は無意味でしょうな」

「フリード殿下はどうした？」

「あの腰抜け王子なら数日前にハルドリア王国の騎士団が連れ戻しに来ましたよ」

「おい！口を慎め！フリード殿下に対して無礼だぞ！」

「構うものか！ハルドリア王国は我らを見捨てたのだぞ？」

王子を連れ戻しに来た騎士団が持ってきた書状を見ただろう。

“この紛争はサージヤス王国が起こしたことなのだから自分達で解決しろ、ハルドリア王国を巻き込むな。

迷惑を掛ければ武力行使も辞さない”だぞ？

今更、あの国に何を義理立てする必要がある」

サージヤス王国の重臣達は何処か投げやりになりながらこの事態を収めるための方策を探っていた。

「静まれ」

「……」

言い争いになりそうだった重臣達を諫めたのは、王座に腰を下ろす男だった。

疲れ切った様子の方は、それでも威厳を纏った声音で告げる。

サージヤス王国の国王、ザントラ・サージヤスである。

「帝国に降るしかあるまい。

此度の戦の顛末を帝国に話し許しを乞う。

報告によれば帝国軍は民に無体を働くことは無いとのことだ。

どうにか民の生活だけは守れるように交渉するしかない」

「しかし、陛下！

ハルドリアの兵の仕業とは言え、帝国は村人を虐殺されておりま  
す。

帝国に恭順を示したところで帝国軍が大人しく引くとは思えませ  
ん」

「それに関しては私に考えがある。

お前達は帝国に政権を移譲するための用意をしておきなさい」

「しかし……」

「これは王命だ」

「……………御意」

ザントラは重臣達を仕事に送り出した王座の間で、腹心達と共に  
残った息子に声を掛けた。

「グリントよ、メリアとサーシャはどうしておる？」

「母上達は既に王都を脱出して避難しております」

グリントが母と妹を少しでも安全な場所へ逃したことを聞いたザ  
ントラは、その疲れた顔に僅かに安堵を浮かべた。

「そうか」

「はい」

「ワシは愚かな王であつたな」

「……………そのようなことは……………」

「よい」



否定しようとした近衛騎士団長の言葉を遮りザントラは自嘲する。

「自分で分かっている。」

これ程の混乱を国に齎しておいて自らが賢王であったなど、口が裂けても言えん」

「陛下……」

「さて、グリント。分かっているな」

「……はい陛下……父上」

「うむ。お前にこのような苦を押し付けてしまう父を許せ」

王座の間には重苦しい空気が充満する。

ザントラはそんな空気の中、何処か解放されたような穏やかな表情で懐から短剣を取り出した。

「これが愚かなワシにできる最後の仕事だ」

誰にともなく呟くとザントラはその短剣を自らの胸へと突き立てた。

一歩前に出ようとする近衛騎士団長を片手で制したグリントは、まだ僅かに息のある父に歩み寄ると、腰の剣を抜き放ち、涙を流しながらその首を斬り落とした。

「グリント殿下……いえ、グリント国王陛下。御命令を」

「………王城に白旗を掲げよ。」

これより帝国と和平交渉を行う」

グリントの言葉に、近衛騎士団長を筆頭に、その場にいた腹心達は一斉に跪いて答えた。

「」「御意」「」

## 辺境の決着（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境の顛末

サージャス王国の王都の正面門を目の前に見る位置に布陣してレブリック子爵領軍と私達義勇軍、そしてロベルトが率いるハルドリア王国の離反軍。

その中央に設営した大きな天幕で軍議を開いていた時だった。その天幕に伝令兵が知らせを持ってきたのだ。

「ご報告します！サージャス王国の王城に白旗が揚がりました！」

また、サージャス王国のグリント王子が和平交渉の使者として来られております！」

「わかった、丁重にご案内しろ」

「は！」

伝令兵はルーカス様の指示を受けグリントを案内するために戻っていった。

「思ったより早かったですわね」

「そうだな。後はどのような交渉になるかだが……………エリー殿はこのまま交渉に参加して良いのか？」

「ええ、私も義勇軍を率いる者として参加させていただきますわ」

「うむ、ロベルト殿はどうする？」

「自分も参加させていただきたい」

「わかった」

それからしばらくすると、ブロッケン砦で見かけたサージャス王国のグリント王子が護衛を1人伴って姿を現した。

護衛の男はサージャス王国に所属する唯一の神器使いである近衛騎士団長ね。

ハルドリア王国でのパーティで見覚えがあるわ。

グリント王子は私達の中にロベルトの姿を見つけて苦笑を浮かべ、ロベルトはばつが悪そうに視線を逸らした。

そしてその横に居る私を少し見つめて大きく目を見開いた。

「エリザベート殿……」

「お久しぶりですわ、グリント殿下」

「……なるほど、貴女が彼らが言っていた非常に腕の立つ女商人でしたか」

グリント王子が言う彼らとはあの傭兵達のことだろう。

ブロッケン砦で私はグリント王子を見かけたが、彼は私には気付いていなかったようね。

グリント王子は気を取り直したようにルーカス様に向き直った。

「我々サージャス王国はユーティア帝国に対して全面的に降伏する」

「……ユーティア帝国には貴国の降伏を受け入れる用意がありません。

しかし貴国との紛争により我が帝国の臣民に少なくない被害が出ている。

それに関してはどう考えているのでしょうか？」

「……………」

グリント王子は近衛騎士団長に目配せすると、近衛騎士団長は手にしていたはこを机の上に置いた。

ルーカス様の護衛が警戒するが、ルーカス様は片手でそれらを制

した。

「それは？」

「今回の紛争で被害を受けた帝国臣民に対する我々サーギヤス王国の謝罪だ」

グリント王子が箱を開ける。

そこに入っていたのは壮年の男の生首だった。

「……………エリー殿」

「はい、サーギヤス王国国王、ザントラ陛下で間違いありませんわ」

私はルーカス様の問いに頷く。

「サーギヤス王国第9代国王ザントラは此度の戦の責任を取り自害した。

現在は私が第10代国王として戴冠している。

父王の首で足りぬのなら、私の首も差し出そう。

その代わり、どうか民に関してだけは帝国の慈悲を願いたい」

グリント王子……………いや、グリント陛下はそう言ったルーカス様に深々と頭をさげる。

「ふむ、民に関しては了解した。

帝国としても罪なき者の虐殺は望んでいない。

グリント陛下の処遇に関しては私の領分を超える事柄故、帝国政府に預けることになるだろう。

帝国から人員を入れた後、我々と共に帝国へ来ていただきたい」

「承知した。ルーカス卿の配慮に感謝する」

細かい条件などはこれから時間をかけて調整することになるでしょうけど、取り敢えずコレで今回の紛争は終結した。

サージャス王国は今日でその歴史を終えて、帝国に併合されることになるでしょう。

「ああ、それと今回の紛争はハルドリア王国のフリード殿下の差し金なのでしょ？」

その証拠があれば確保したいのだが？」

ルーカス様が問うと、グリント陛下も頷く。

「ああ、ハルドリア王国からは処分するように言われたが、確保して城に保管している。」

全て帝国に引き渡そう」

グリント陛下の言葉にルーカス様も少し肩の力を抜いた。

この件を大々的に公表すればハルドリア王国の国際的な立場はかなり悪くなる。

私個人としては、今回の紛争は赤字だったが、王国に嫌がらせをできると考えると悪くない結果だ。

一旦城に戻るグリント陛下を見送るため、私達も天幕を出ようとする、慌てた様子の兵士が天幕に飛び込んできた。

警戒する一同の前で跪いた兵士が報告する。

「ほ、報告致します！サージャス王国王城より爆発を確認！王城より黒煙が上がっております！」

「なんだと」

私達が急いで天幕を出ると、目の前に見える王都の中心、王城から複数の黒煙が上がっていた。

「ど、どうなっているんだ」

「陛下！今は急ぎ消火を！」

「あ、ああ、王都の水魔法を使える者を回して……」

グリント陛下が外で待つていた配下に指示を出そうとした時、更に複数の爆発音が響いてきた。

見れば王城だけではなく市街地からも新たな黒煙が上がっている。

「な、何が起こっているんだ！」

「ぐっ！とにかく消火を急げ！王城は後回しで良い！民の避難を優先するんだ！」

「……御意」「」

部下を急がせるグリント陛下にルーカス様も声を掛ける。

「我々も民の救出と消火に手を貸そう」

「……手間をお掛けする」

流石に他国の軍が大人数で王都に向かえば王都の住民がパニックになる可能性が高い。

その為、水魔法使いを中心に少数で王都へ向かうことになった。

残りの者達はこの場で怪我人の収容などの用意をする。

私も水魔法が使えるので消火のために王都へ向かって出発するのだった。

サージャス王国の前でレブリック子爵領軍が布陣している反対側、  
王城の背が見える薄暗い林の中、黒い外套を羽織った者達が集まっ  
ていた。

その集団の中心にいた顔に大きな傷を持つ男、あの傭兵団のリー  
ダーの男が誰にともなく呟く。

「そろそろか」

すると見計らったように爆音が鳴り響き、サージャス王国の王城  
から火の手が上がる。

「これでハルドリアのバカ王子がやらかした証拠は燃え尽きるだろ  
う、多分」

「しかし、良いのですか？ 確実に処分しなくて？

もしかしたら燃えずに残るかも知れませんか？」

「良いんだよ。上からは可能なら処分しろとしか言われてねえんだ  
からよ。」

無理してまでやることじゃない」

「そうですね」

リーダーは立ち上る黒煙を見ながら吸っていたタバコを消して立  
ち上がる。

「さてお前ら、傭兵ごっこは終わりだ！

これより本国へ帰還する。コナー少尉」



「はっ！」

「部隊を分けて行動を開始しろ。」

「追跡には十分に警戒する様に」

「はっ！これより分散し本国へ帰還致します！」

「よし、気を付けて帰れよ」

「はっ！グレアム大佐殿もお気を付けて」

「おう、本国で会おう」

男達は数人のグループに分かれると速やかにその場を後にした。

## 辺境の顛末（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境の惨劇

謎の爆発騒ぎがあった日から半月、私達はサージャス王国の王都を占領していた。

調査の結果、あの爆発は何者かによる破壊工作であったと分かり、更に例の傭兵団が1人残らず姿を消したことから、彼らが事件に関わっているというのが私達の見解だ。

一般にはハルドリア王国が国際法違反の証拠を処分するために行なった可能性が高いと発表した。

真実は定かではないが、グリント陛下が保管していたフリードからの書状がピンポイントで燃やされていて、燃え残った物では少々証拠としては弱いので、せめてもの嫌がらせだ。

あの傭兵達は何者なのかはわからないが、ハルドリア王国に利するよう動いていたと考えられる。

しかし、ハルドリア王国にはあのような部隊は無かったはずだ。

私が王国を去ってから設立したにしては練度が高い。

故にサージャス王国、ハルドリア王国とは違う第3の勢力の工作員ではないかと予想している。

現在の執政はグリント陛下とルーカス様が行っており、私は一切手を出していない。

そして先日、帝国政府から執政官などの役人が到着したので政務の引き継ぎをした後、グリント陛下はルーカス様と帝都へ向かうこ

とになるそうだ。

そして帝国の人員が到着したため、私達義勇軍はもう必要ない。なので私達は一足早く帝都へと帰還することになった。

サージャス王国の王都の外に集まった義勇軍とロベルト達ハルドリア王国離反軍を前に私は主要メンバーを集めていた。

「集まったわね。」

では此処からは義勇軍とロベルト様達とで別ルートで帝都へ向かうわ」

「え？」

ロベルトが不思議そうに声を上げる。

「エリー嬢、何故別行動を？」

「ロベルト様……此処からは帝都に戻る通常ルートは今回の紛争で被害を受けた村々を通りますわ。」

離反したとは言え、ハルドリア王国軍であるロベルト様達が無事に滞在できるとお思いですか？」

「そ、それは……………」

「ですから、ロベルト様達にそれらの村々を避け、帝都に向かってもらいます。」

多少、険しい道乗りになりますが皆さん正規の兵士ですし問題無いでしょう。」

私も同行致しますのでご安心ください」

「……………わかった。世話をおかけする」

「そういうことでミレイ、義勇軍の方は頼んだわよ」

「はい、お任せください。エリー様もお気を付けて」

こうして義勇軍と分かれて帝国を目指して進む私達は、渓谷のよ  
うな場所を通っていた。

既に数日、道なき道を進んでいて兵の消耗はかなりのものになっ  
てきている。

「エリー嬢。

済まないが少々休息を取らせてもらえないだろうか？

兵が限界に近い」

「そうですね。」

この渓谷を越えれば帝都はすぐそこですから、此処で大休止を致  
しましょうか」

私達は近くにあつた広めな空間に移動して、兵達に休息を言い渡  
した。

この場所なら周囲を高い崖に囲まれているため、私達が入ってき  
た方だけを警戒すれば負担も少ないと提案した。

「ふう、帝都まではもう一息ってところですか？」

「そうですね。」

此処からなら明日にでも到着致しますわ」

「そうですね………エリー嬢。

改めて謝罪と感謝を。

貴女にあのような仕打ちをした自分を許し、受け入れていただい  
たこの御恩は必ずお返しする。

騎士としての誇りに懸けてお約束する」

私は、騎士としての礼を取りながら、何処か清々しい表情で言う  
ロベルトに不思議そうな表情で小首を傾げてみせる。

「あら？何を言っているのかしら？」

私は貴方を『許す』なんて一言も言っていないはずですよ」「  
え？」

「何を勘違いされているのか分かりませんが、私は貴方を殺したい  
ほど憎んでいますわ」

「で、ですが……もう……済んだことだと……」

「ええ、もう済んだことですわ。ですから今更どうしたって私が貴  
方を許すことはありませんわ」

「エ、エリー嬢……」

「ふむ、丁度良い地形ですし、此処で始めましょうか」

「……始める……とは？」

「……ロベルト様は私の神器についてご存知ですか？」

「……【叡智の魔導書】……ですか」

「いいえ、それは嘘です。」

私の本当の神器は【七つの魔導書】。

七種類の魔導書を作り出す能力ですわ。

これがその一つ、神器【暴食の魔導書】」

私は【暴食の魔導書】を使い、渓谷の入り口を石壁で塞いで離反  
軍を閉じ込めてみせた。

「な、何を」

「神器【怠惰の魔導書】」

更に別の魔導書を手にしながらロベルトの鳩尾に拳を叩き込み、  
ヨロめいたロベルトの襟首を掴むと魔力で強化した身体能力で崖を  
駆け上がる。

「うはっ！」

苦しげなロベルトを無造作に投げ捨てながら、突然現れた壁に戸惑う離反軍を見下ろす。

「ごほ、げほ、な、何をするつもりだ」

私はロベルトを無視して懐から取り出した大きな魔石を離反軍の上へと投げた。

魔石とは魔物の体内で生成される、魔力が結晶化した物で、マジックアイテムの動力源や魔法の触媒などに使われる消耗品だ。

「冥府を彷徨う闇の眷属よ 姿を持たぬ無眸の悪鬼 地に満ちし魔粘の祖よ

我、契約に従い魔石を贄として捧げる

【召喚：ウーズ・オリジン】」

私が投げた魔石が砕け散り、中空に黒い光が走り魔法陣を作り出す。

その魔法陣から現れた粘液が、驚き魔法陣を見上げていた兵士達の頭上へと降り注いだ。

「ぎあああ！！！」

「うあああ！！」

「痛い！いだあ！！！」

「溶ける！どげえぶう」

兵士達の上に落ちたその粘液は、意思を持つように蠢き、近くに  
いる兵士へ粘液を触手のように伸ばして捕まえると、ゆっくりと溶

かしながら捕食し始める。

「な、なんだ……アレは……」

次々に兵士が悲鳴を上げながら溶かされていく光景を唾然としながら見つめてロベルトが呟く。

「あれはウーズ・オリジン。

冥界に生息するスライムの原種ですわ」

「……………エリー嬢……………な、何故こんなことを……………」

「決まっていますわ。これは報復です」

「なら！それなら自分だけを殺せば良いだろう！！何故、罪の無い兵士達まで！！」

「理由なんてありませんわ」

「な」

「単に貴方と共に居たから殺しました。

彼らは貴方と共に居たから死ぬのです。

貴方さえ居なければ彼らは苦しみながら溶かされることなく、愛する家族の許に帰ることができた。

でも、貴方が居たから今日此処で死ぬのです」

「……………自分が……………僕が……………」

「そうですね。これが貴方の罪。

身勝手に自己満足な貴方の騎士ごっこに巻き込まれた哀れな犠牲者ですわ」

「……………騎士……………ごっこ？」

ロベルトは膝から崩れ落ちながら眼下の光景を見つめている。

「ええ、貴方のやっていることはただの騎士ごっこ。誇りなんて力ケラも無い。



主の暴走も止められず、挙げ句の果てに裏切りまでした自分が、本当に騎士を名乗れる人間だと思っていたのですか？

随分と都合の良い騎士道ですわね」

「ち、ちが……」

「違いますん。」

貴方は裏切った。貴方は仲間を守れない。貴方は誇りが無い。

貴方は………ただのグズですわ」

「あ、ああ……」

剣を抜くことすらせずに、ただ地獄のような光景を見ながら涙を流すロベルトを前に私は新たな魔導書を手にする。

「さて、仕上げですわ。神器【色欲グリモア・アスモデウスの魔導書】」

## 辺境の惨劇（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 辺境からの帰還者

私が帝都に帰り着いた時には、既にミレイ達義勇軍は帰り着いていた。

「お帰りなさいませ、エリー様」

「ただいま、ミーシャ。ミレイは？」

「ミレイ様は執務室でご不在中の報告書を検めています」

「そう、ありがとう」

ミーシャに軽く左手を振ってミレイが居るといふ執務室へ向かった。

「ミレイ」

「エリー様！お戻りになられたのですね」

「ええ、そちらは問題無かった？」

「はい、特に何事も無く……エリー様！その腕は」

一応隠してはいたのだけれど、やはりミレイには一目で見抜かれてしまったわね。

ミレイは私の右腕を取ると袖を捲り上げた。

「じ、コレは」

私の右腕は手首から肘に掛けてドス黒い痣ができていた。

「大丈夫よ、怪我や病気ではないわ」

「ではいつたい……………」

「これは神器【色欲グリモア・アスモデウスの魔導書】を使った代償よ」

「【色欲の魔導書】…………私の知らない3つの内の1つですね」

「ええ……………そうね、ミレイには話しておきましょうか」

別にもう隠す必要はないので、私は残りの3つの魔導書のことをミレイに説明した。

「なるほど……………それで……………」

「ええ、あの騎士モドキに使うには少々勿体ないかとも思ったけど……………これは狼煙になると思ってね」

「狼煙ですか？」

「ええ、そう遠くないうちに王国は私が帝国に居ることに気付くでしょう。」

そうなれば本格的にぶつかることになるわ。

初めは裏で静かに、次第に表立って盛大に。

あの騎士モドキには、その始まりの鐘を鳴らす役目をあげたのよ

「……………承知しました。」

取り敢えず腕を隠せるよう、包帯を用意しましょう」

「そうね、結構痛みもあるから無理はできないわね」

ハルドリア王国とユーティア帝国の間に存在する荒野、両国の緩衝地帯となっているこの場を、王国の領土に沿うように走る一台の行商人の馬車があった。

荒野で採取される幾つかの魔物素材を仕入れたこの行商人は、この後王都に戻り懇意にしている商会に素材を卸す予定だった。

「」

馬車の御者台に座り、手綱を持っていた行商人の男が慌てて馬を停めた。

岩場の側を通りかかった時、岩陰から人影が飛び出してきたのだ。

「おい、どうした」

馬車の幌から仲間の行商人が何事かと顔を出す。

男達は2人とも元冒険者であり、腕にも自信がある。

そのため、護衛は雇っていないかった。

もし、野盗の類なら自分達で戦わなければならない。

「い、いや、そいつが急に飛び出してきて……」

御者台の男に言われて前を見れば、ボロボロの鎧を身に着けた青年が街道に倒れ伏していた。

「野盗……ってわけではなさそうだな」

青年は血と泥で汚れてはいるが、野盗にしては身綺麗で、装備も傷付いてはいるが上等な物だ。

「行き倒れか？」

「わからん……おい、にいちゃん！大丈夫か？」

男達が駆け寄って様子を見てみると、青年は気を失っているが、一応息はあった。

「どうする？」

「どうするってまあ……ん？こいつは王都の騎士団の紋章じゃないか？」

「本当だ！ってことはこいつは王都の騎士か？」

「そういえば属国のサージャス王国が帝国とやり合って潰されたって話だったよな？」

「つまり敗残兵か……」

「仕方ない、王都に運ぶか」

「そうだな。この若さで騎士ってことは良いとこの坊ちゃんだろう。国の騎士を助けたなら礼金くらい出るだろうしな」

こうして2人の行商人は行き倒れの騎士を王都へ運ぶことにしたのだった。

「うう……こゝ、此処は？」

全身の痛みを目を覚ましたロベルトは、重たい瞼を上げて周囲を見回した。

目に入ったのは壁に飾られた剣と、心配そうな女の顔だった。

「ロベルト様！気が付かれたのですね！」

「君……は……」

ロベルトの顔を心配そうに覗き込んだのは見覚えのある顔だった。  
ロベルトの生家であるアーティ伯爵家に仕えるメイドの1人で、  
ロベルトにとって姉のような存在だ。

「うう……」

「直ぐにお医者様をお呼びしますので、そのままお待ちください」

メイドはそう言うと、慌てて部屋を出ていった。

「はい、特に問題はありませんな。」

怪我の方は治癒魔法と魔法薬で粗方塞がっておりますので、数日  
安静にして体力を回復させてください」

「……はい、わかりました」

ベッドに腰掛けたロベルトは初老の医者にそう返してはだけてい  
た服を戻す。

部屋を後にする医者と入れ違いに、2人の女性が部屋に入ってきた。  
た。

「お兄様！」

その内の1人、少女がロベルトに抱き付いた。

「ロワ」

ロベルトの妹であるロワリーゼである。

先日9歳になったばかりの妹は数ヶ月振りに兄に会えたことが嬉  
しくて仕方ないようだ。

「ロワ、ロベルトはまだ疲れているのだからはしゃいではいけませんよ」

「母上」

もう1人はロベルトの母であった。

「ロベルト、いったい何があったのですか？

貴方は1人、荒野に倒れていたそうですよ」

「荒野に？」

ロベルトは記憶を辿ろうとするが、頭の中にモヤが掛かったように思い出せない。

だが何かを忘れている気がしてならない。

「僕は……いつたい……」

「入るぞ」

考え込むロベルトの思考を遮ったのは、低い男の声と扉を開く音だった。

入室してきたのは鍛え抜かれたがっしりとした体格の男だ。

「目が覚めたのだな、ロベルト」

ハルドリア王国で近衛騎士団長を務めている父、アーネストだった。

アーネストは若い時から国王であるブラートと共に戦場を渡り歩いた猛者である。



「父上」

「この大馬鹿者が!!!」

アーネストはロベルトの前まで来ると、歴戦の傷が残る拳を握り、反応すらできない速度でロベルトの頬を殴り付けた。

妹の悲鳴を聞きながら、ロベルトはベッドから吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

「国王陛下の許可も無く勝手に軍を動かした上、無辜の民に対して略奪に暴行を行うなど言語道断！」

あまつさえ、兵を失い、指揮官のみがオメオメと生き延びるなど！恥を知れ！」

「ぼ、僕……自分は……」

「黙れ！我が伯爵家の恥晒しが！」

もはや貴様に騎士を名乗る資格など無い、今日付けで貴様を騎士団から除名し、軍の下級兵として編入した！

一兵卒からその根性を叩き直せ！」

それだけ伝えると、アーネストは踵を返して部屋で出ていこうとする。

ドアノブを握ったアーネストは、振り返ることなく告げる。

「ロベルト、騎士として私は貴様のことを恥じている。

だが、父としてコレだけは言っておく。

……………よく生きて帰った」

そう言つとアーネストはロベルトの方を振り返ることなく去っていった。

それから数日、ロベルトはベッドの上で安静に過ごした。

そしてようやく動いても良いと医者に言われ、部屋の中で軽く体をほぐしていた。

ここ数日、曖昧な記憶を思い出そうとしていたのだが、どうしても思い出せない。

自分は何故、荒野で倒れていたのか、兵達はどうなったのか、何か思い出さなければならぬはずなのにどうしても思い出せなかった。

ロベルトは壁に飾られた剣を手取る。

此処しばらくの間、剣を手にしていなかったからか、とても重く感じる。

「お兄様！」

すると背後から声が掛かった。

「どうした、ロワ？」

ロベルトはゆっくり振り返る。

ロワリーゼは嬉しそうにロベルトへ駆け寄ってくる。

ロベルトも可愛い妹を抱き止めようとして……………抜き放った剣で妹の胸を貫いた。

「あがぁー！」

「え？」

何が起ったのか分からず、キョトンとするロベルトの顔に、温かい妹の返り血がピシヤリと跳ねる。

「え？」

「に、にい……さ、ま……」

「え？口、口ワ？え？」

「な、んで……？」

ロベルトは妹を見る。

足元に血溜まりを作る妹の小さな体からは無骨な剣が生えており、その柄は確かにロベルトの腕が握っている。

「あ、あ、ああああ！！！！」

これが惨劇の幕開けだった。

辺境からの帰還者 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 辺境からの帰還者

「ロベルト様、今何か……きゃああああ……！」

部屋に顔をのぞかせたメイドが妹を突き殺したロベルトを見て悲鳴を上げる。

「ち、ちがつ！僕は……」

戸惑うロベルトの声とは裏腹に、その体は滑るように地を駆けメイドに迫ると一閃。

ロベルトが姉のように思っていたメイドの首が宙を舞い、赤い鮮血を撒き散らした。

「うあああ……！！！」

妹とメイドを手に掛けたロベルトはそのまま部屋を出て走る。もはや自分の体を御することなどできなかつた。すれ違つ使用人達を次々と斬り殺しながらロベルトは走る。

「なんで……どうして……違つ……僕じゃない……」

幼少の頃から知っている使用人達を自らの手で斬りながらブツブツと呟くロベルトの前に新たな人物が現れる。

「何の騒ぎですか？」

「母上えええ……！！！」

「え　　ロベルどおあ！」

母の右肩から入った刃が左の脇腹へと抜ける光景がスローモーシヨンのように映りロベルトの網膜に刻まれる。

「ああ……あああ！……なんだよ！なんだよ　　コレはああ……！」

尚もロベルトの足は止まらない。

屋敷の門を出ると血塗れの剣を引き摺りながら歩き出す。

アーティ伯爵家は代々近衛騎士を輩出する高位貴族である。

しかしその家柄故、屋敷は貴族街ではなく、王都の端、外周にある騎士団の訓練施設に近い場所にあった。

つまり、少し歩くだけで多くの市民で賑わう市場に着いてしまう。

「ふうはっはっは！……この国は私が頂いた！」

「きゃあく、フリードさま」

「魔女エリザベート！お前の好きにはさせないぞ！このフリード王子の剣を受けてみよ！」

布切れをマントのように羽織った少年が棒切れを持って少女を背に庇うと、エリザベート役の少年と対峙していた。

「あらあら、なあにアレ？」

「あら奥さんは最近まで実家に帰っていたから知らないのね。

最近子供達の間で流行っているよ。

なんでも国を乗っ取るうとしていた魔女をフリード殿下とシルビ

ア様が協力して追い払ったのですって」

「そうなの？」

エリザベート様ってあの公爵家のお嬢様よね。

確か私達平民のために色々としてくれていた貴族様じゃないの？」

「それが裏では酷いことをやっていたらしいわよ。次期王妃様の立場を使って揉み消していたのだけれど、シルビア様が気付いて糾弾したんですって」

「まあ！」

「そうしたら今度はシルビア様のお命を狙ってきたらしいけどね」

「酷いわね」

「でもフリード殿下がシルビア様を守り、2人で魔女に打ち勝ったそうよ」

「素敵ねえ」

チャンバラが佳境に入った子供たちを見ながら噂話に花を咲かせる主婦。

いつも通りの光景であり、この後は子供を連れ帰り、旦那が仕事から帰るまでに夕飯の準備をするはずだった。

しかし、その日常は一瞬にして赤く染まる。

3人で遊んでいた子供達から、目を離したのはほんの瞬きの間。

その僅かな間に子供達は胴体から上を斬り飛ばされた。

「「え？」」

目を丸くする2人の主婦。

気付くと目の前に涙を流しながら笑う不気味な男が剣を振り上げていた。

「あ………」

男が剣を振り下ろすと主婦は何の抵抗もできずに血飛沫を上げながら倒れる。

「ひっ！い、いや……」

もう1人の主婦はあまりの恐怖に尻餅をつき這いずるように退がる。

「……………違う……………ひっひっ、僕じゃない……………あは、そつだよ……………僕がこんなことを……………するはずがない……………あは……………あははははは！……………」

男は狂ったように笑いながら後ずさる主婦の腹に剣を突き立てた。

「いやあああ……………」

「あっはっはっは……………」

昼間の市場、多くの市民でごった返す中に狂ったように泣き笑うロベルトが飛び込み、手当たり次第に人々を斬り殺し始め、駆けつけてきた騎士団に取り押さえられる頃には市場は戦場もかくや、と言っほどの血の海と化していた。

「随分な騒ぎになったな」



ハルドリア王国の王城にある会議室の1つに疲労感を多分に含んだ溜息が漏れる。

「下手人はアーネスト卿の御子息だったか」

「奥方や御令嬢も被害に遭ったとか」

「不憫には思うがコレほどの惨事となるとな」

声を落としているがその言葉は静かな室内によく響いていた。

そして部屋の端に1人立つアーネストは、血が滲むほど強く拳を握り、顔を蒼白にさせながら俯いていた。

「静粛に！」

宰相を務めるレイストーン公爵が言うと、部屋はすぐさま静まり返る。

そして最も上位の席に座っていたブラート王が重い口を開いた。

「ジークよ、最終的な被害はどれくらいだ？」

「はい、死者はアーネスト卿のご家族と使用人が数名、市井の民が105名、兵士が21名、騎士が2名。

その他重軽傷者が多数出ております」

「なまじ騎士としての英才教育が仇となったか」

「はい、アーネスト卿の御子息は武芸に秀でておりました。エリザベートが居なければ50年に1人の天才剣士として謳われていたでしょう」

「うむ……原因は分かったのか？」

「いえ……聴取によると『自分じゃない』『こんなことをするはずがない』と呟いているそうです。

話を聞こうにも支離滅裂でして……医者の話によりますと、事件

の前から記憶の欠落が見えており、戦場帰り故の精神障害ではないか、とのことです」

「そうか……まだ若い彼奴には戦場は過酷であったか」

ブライト王は瞑目すると、大きく溜息を吐き出した後、鋭い視線をアーネストに向けた。

「アーネストよ。お前は若い頃から戦場を共にした親友だ。これまで上げた数々の戦功もある。

できることなら恩情を与えたいが……」

「難しいですね。

民にも多くの被害が出ております。

コレを断じなければ王家への不信に繋がりがねません」

「……そういうわけだ。済まぬ、アーネスト」

「いえ、陛下のご配慮、この身に余る光栄にございます。此度のことは、我が愚息がしかしたことです。

その責は愚息と、この私にあります。

何とぞ、厳正な処罰を願います」

「……うむ、では決を下す！ロベルト・アーティはA級殺人の罪により死罪とする！

また、A級殺人は王国法により連座制が適用されることになるが、アーネスト卿の長年の忠義、戦功を考慮し、近衛騎士団長の職の解任、男爵への降爵の上、ルミア砦への異動を命じる」

「陛下！」

その判決にアーネストが食い下がろうとするが、ブライト王は静かに首をふる。

「お前が責任を感じていることはよく分かっている。

だが、お前ほどの忠臣を今失うことは避けたいのだ」

「しかし！」

アーネストは一步踏み出そうとするがよろけて膝をついてしまった。

「アーネスト、ろくに眠っていないのだろう。退がって休め」

「……………陛下」

「誰ぞ！アーネストを医務室へ連れていけ」

侍女達に連れられてアーネストが退室した後、ブラート王は宰相に指示を出す。

「ジーク、アーネストに誰か付けておけ。あのままでは自害でもしかねん」

「畏まりました」

辺境からの帰還者 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 辺境からの帰還者

「時間だ、出る」

王城の側に建てられた軍の施設の一室、手を枷で拘束され、魔力を封じる首輪をつけられたロベルトは全身鎧で身を固めた衛兵に手枷の鎖を引かれて連れ出された。

外へ向かう通路を歩くロベルトの前にハルドリア王国の王太子であるフリードと、その婚約者シルビアが姿を現した。

手枷を引く衛兵は立ち止まり臣下の礼をとる。

「……………殿下」

目の下に大きな隈を作り虚ろな目をしたロベルトがフリードの姿を認めて僅かに反応を返す。

「やってくれたなロベルト。」

貴様がやらかしてくれたお陰で、貴様を重用していた俺にまで非難の声が届いている」

「……………僕は……………僕は……………」

「黙れ！このクズが！貴様の様な極悪人を騎士になど取り立てた俺が間違っていた」

「……………騎士……………違つ、僕は……………騎士として……………騎士の誇りを……………」

「ふん、イカれている。連れていけ！」

「はっ！」

ロベルトが再び鎖を引かれて歩き出すと、フリードの陰に隠れていたシルビアの姿が視界に入った。

「……シルビア…… そうだ、シルビア！

僕は君の為に！君の幸せの為に騎士に！」

「こ、こら！大人しくしろ！」

シルビアに近づこうとするロベルトを衛兵が無理やり押さえ付ける。

「シルビア！」

「……ふざけないで」

「シルビア？」

「馴れ馴れしく呼ばないで！この人殺し！」

「」

シルビアに睨まれてロベルトは動きを止めた。

「シルビア…… 違う…… 違うんだ…… 僕は……」

「いい加減にしろ！！」

フリードは衛兵に組み伏せられたまま喋り続け様とするロベルトを鞘に収めたままの剣で打ち据えた。

「もう良い、行こうシルビィ。さっさと連れていけ！最後に謝罪の一つでも聞けるかと思えば戯言ばかり…… お前には失望した。

さらばだ、ロベルト」

そう言い残してフリードとシルビアは去っていた。

そしてロベルトは衛兵に連れられて王都の通りを歩かされる。

「この人殺し！」

「死ね！」

「私の息子を返して！！」

「殺してやる！殺してやる！」

道に集まった王都の住民からは罵声と共に石を投げつけられる。

衛兵が全身鎧を身に着けていたのはこのためである。

道にはロープが引かれ、ロベルトには近づけないようにされているが、所々に石の入った籠が用意され、少しでも民の溜飲が下げられるようにされていた。

鎖を引く衛兵は一切立ち止まらず、石に打ち据えられたロベルトが倒れようとも、無理やり立たせ、時には引きずって進んだ。

そして到着したのは王都の中心にある広場に設けられた処刑台。その上に立たされたロベルトの前には、広場を埋め尽くすほどの人が集まっており、口々にロベルトへの罵声を吐き出していた。

雷の様な大きなドラが鳴らされ、一瞬は人々の罵声が止んだ隙を突くように、兜で顔を隠した処刑人が声を張り上げる。

「これより大罪人ロベルト・アーティの死刑を執行する！」

処刑人が合図を送ると、ロベルトを連れてきた衛兵がロベルトの体を押さえつける。

処刑人が槍を振り上げ、一拍タメを作ると、その背を一息に貫い

た。

「がはあ！」

ロベルトは自分の胸から突き出た槍の穂先と、その先に見える怨嗟に満ちた民の顔を視界に収めた。

これでやっと終われる。

可愛い妹を、愛する母を、家族の様な使用人達を、守るべき民を自らの手で殺した。

皆を斬った感触が頭から離れなかった。

誇り高い騎士を夢見ていたはずなのに……だが、これでようやく終わりに……その瞬間、ふっと霧が晴れるように思い出した。

あの日、部下が苦しみなながら溶かされていく地獄の光景を。

自らが騎士にあるまじき者だと糾弾する声を。

絶望に涙を流す自分を満足げに見下ろす美女の姿を。

「あ……あ……」

そつだ。

伝えなければ。

騎士失格の自分だが、せめてこの国に迫る危機を伝えなければ。

ロベルトは徐々に体温を失って行く体を必死な動かして近くにいる処刑人に訴える。

エリザベートがこの国に報復しようとしているということ。

しかし、ロベルトが最後の力を振り絞って口にした言葉は民の罵声に掻き消され、誰にも届くことは無かった。



『騎士ごっこの貴方には何もできない』

『誇りなんてない』

『無意味に死んでいくのがお似合いね』

激痛と共に薄れゆく意識の中、彼女の声が聞こえた気がした。

帝都の屋敷で書類に目を通していたエリーは常に痛みを発していた右手の痛みが引いていくのを感じた。

「あら？」

「エリー様？」

エリーが右手の包帯を解くと、そこには傷一つない腕があるのみだった。

「腕が」

「どうやら騎士モドキが死んだみたいね」

思ったより時間が掛かったわね。

さて、王国ではどんな騒ぎになっていることやら。

グリモア・アスモデウス  
【色欲の魔導書】の効果は改変の記録。

条件を満たした相手の記憶の改竄、強力な催眠暗示などを与える

魔導書だ。

ただし、あまり多用はできない。

効果を使えるのは1人のみであり、1度使うと対象者が死ぬか、エリーが直接対象者と接触しなければ解除できない。

その上、効果の強さに比例して自らの体に呪いを受けることになる。

正直使い辛い能力だった。

「私はエリー様の腕が元に戻り安心致しました」

「ふふ、心配かけたわね。」

では、どれほどの成果が出たのか、報告を楽しみに待ちましようか」

私は自由になった右手でカップを取ると香ばしい薫りを楽しみながらコーヒーを飲み干した。

「え、つまりこの出来事がハルドリア王国の滅亡の始まりになるわけですね。」

この時、処刑されたロベルト・アーティの父親である元近衛騎士団長アーネスト・アーティも同日に自害しています。

ロベルトの愚かな行いでアーティ家は滅亡したわけですね。

この一件でのロベルトの動機には幾つかの説があります。どなたか、分かる人は？」

初老の教師が教卓に立ち生徒たちに向かって話していた。

「はい！」

「はい、リアム君」

「はい、戦争による精神障害説、シルビア王太子妃への恋慕説、フリード王太子への私怨説です」

「正解です。私の見解ですが、精神障害説が有力でしょうな。」

当時の医者記録なども残っていますからね。

ああ、あと『黄昏の魔女エリー・レイス』の呪い説などもありますが、流石に眉唾物ですね」

戯けてみせた老教師に生徒達はクスクスと笑いを溢す。

そこでチャイムの鐘が鳴った。

「おや、では今日は此処までにしましょう。」

次回は同時期に帝国で頭角を現してくる『黄昏の魔女エリー・レイス』の話を楽しみましょうか。

皆さん、教科書を読んで予習をしておくように」

国立アデル学院 3回生 2時限目

《大陸史》 担当教員 フレイド・ロツテ

辺境からの帰還者 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 騒動の黒幕達

「……と、いうわけで王国は現在、ロベルトが引き起こした事件の後始末と元騎士団長の死の隠蔽などで大忙しらしい。

その上、サージャス王国の件で他の属国との間も険悪になり、その調整にも追われているようだ」

「そうですね。」

随分と踏み込んだ情報ですわ。流石、帝国の諜報員ですわね」

「……よく言うものだ。」

君が提供した機密情報のお陰で随分と情報の精度が上がっているだけだとわかつているだろ？」

「ふふ」

私は呆れ顔のルーカス様に微笑みを返した。

「全く……サージャス王国から帝都に帰ってみればロベルトの姿が消えていたんだからな」

「事後報告になって申し訳ありませんわ」

「ふう、俺にくらいは話しておいてほしかったぞ。」

最初からああするつもりだったんだろ？」

「ええ、あの騎士モドキに使った神器には色々と制約がありまして、その条件をクリアするために手元に置く必要がありましたの」

「君だけは敵に回したくないよ」

「ご安心ください。お約束したじゃないですか、私は貴方に利益を齎します、と。」

私は約束を守りますよ、ルーカス伯爵様」

サージャス王国はユーティア帝国領のサージャス地方となり、領

土の半分は帝国の直轄領、もう半分がルーカス様の領地となった。それに伴い子爵から伯爵へと陞爵したのだ。

ちなみにサージヤス王国の王子だったグリント王子はレブリック伯爵領サージヤス地方の執政官としてルーカス様の下で働くことになった。

とは言ってもコレは所謂お飾りというやつだ。

帝国でよく使われる統治法だが、新たに編入された領地の統治者として、元々その土地の有力者だった者を登用することで、住民の反発を抑えるというものだ。

当然、実権など殆どなく、実際に領地を回すのは帝国の文官である。

それと、グリントの妹は留学生（という名の人質）として帝都の学校に通っている。

グリントはこれからの人生をルーカス様の人形として過ごすことになるのだろう。

まあ、命があるだけマシな方か。

「……取り敢えず話を戻すが、今日君を呼んだのはコレを渡すためなんだ」

苦笑いを浮かべたルーカス様が傍に逸れていた話を戻して書状を私に差し出した。

「コレは？」

「今回の一件での君への報酬のような物だよ」

「それで、何の書状なのですか？」

帝都のレブリック伯爵邸を出た私はミレイと共に馬車で屋敷に戻るところだった。

「簡単に言うと呼び出しね」

「呼び出し……ですか？」

「ええ、次の帝国商業ギルド評議会にね」

高級ではあるが、華美ではない落ち着いた内装、ランプに照らされた薄暗い部屋で、男が椅子にゆったりと腰掛けてグラスを傾けている。

その男の前には顔に大きな傷が走る大柄な男が傳いて頭を垂れていた。

「なるほど、君と対等に戦える女商人か」

「……いいえ、あのまま戦っていれば負けたのは私だったでしょう」  
「ほう」

男はその報告を聞き、楽しそうに笑みを深めた。

「ご苦労だったな、グレアム。退がって良い」

「はっ！失礼致します、殿下」

「鳥」

男はグラムが退室した後に虚空に向かって声を掛けた。

「はい」

するとその声に返事を返す者が居た。

男の背後、まるで初めからそこに居たかのように女が立っている。闇に溶けるような黒いドレスに顔を隠す黒いベールを着けていて、印象が薄い女だ。

「さっきの話、どう思う？」

「グラム大佐があれほどまで言うのなら、ただの商人ではないでしょう」

「そうだな………少しつついてみるか」

男はしばし思索するように瞑目し、再び口を開く。

「蠍はまだハルドリアか？」

「はい」

「そうか。蠍に帝国に向かうように伝えてくれ。グラムが言っていた商人の情報を集めて揺さぶって見てくれ。方法は任せる」

「お任せ下さい、殿下」



「では私はこの辺で失礼致します」

「ええ、また来て頂戴ね」

「うむ、また来るが良い」

「はい、フリード殿下、シルビア様」

クリスは2人に頭を下げて退室する。

その後、メイドに城外まで送られたクリスは、案内してくれたメイドにも丁寧な礼を述べて逗留している宿へと戻って来た。

「！」

借りている部屋に入ると机の上に見覚えの無い手紙が置いてあった。

素早く周囲に視線を走らせるが、特に変わった所は無い。

一拍、間を置いたクリスは手紙を検める。

差出人の名前は無いが、手紙に烏の羽が1つ添えられていた。

クリスは手紙を取り中身を一読すると、部屋の隅の火鉢に放り込み魔法で火をつけ、跡形も無く燃やし尽くす。

「次は帝国ですか……」

誰にともなく呟くと、クリスは旅の支度を始めるのだった。

## 騒動の黒幕達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 経済界の怪物達

「帝国商業ギルド評議会ですか？」

「ええ、帝国の経済界を牛耳る7人の大商人が数年に一度集まり、様々な話し合いをする会合よ。今度開かれる評議会に呼ばれたの」

「それは……何故なのでしょう？」

「この前のサージャス王国との紛争で、私は義勇軍を率いて参加したでしょう？」

私が私の都合で参加した紛争だけど、国の許可を得て義勇軍を編成した以上、帝国は結果を残した私に報酬を出さないわけにはいかない。

でも王国からの亡命したばかりである私に爵位や勲章を渡すのは憚られる。

そこで、多分ルーカス様辺りが色々と苦慮してくれたのだと思うのだけれど、褒美として帝国から特別認可商人への推薦が貰えることになったのよ」

「特別認可商人ですか」

ミレイが驚きの声を上げる。

特別認可商人とは、税金や土地の購入、所持制限品の制限緩和、帝国からの資金融資など、商売に関する様々な事柄で優遇を受けられる、帝国でも20人と居ない特別な存在だ。

特別認可商人になれば単純に利益が跳ね上がるだけでなく、上手くやれば3倍、4倍も夢ではない。

弱小貴族など目ではないほどの発言力を得られるのだ。

だが、特別認可商人は帝国からの許可だけでは得ることはできない。

帝国ができるのはあくまでも推薦。

特別認可商人になるには帝国商業ギルド評議会で審査を受け、議員の過半数の支持を得なければならないのだ。

「それで評議会に……」

「ええ、戻ったら早速準備しましょうか」

「お久しぶりです、エリー会長」

そう言つて柔らかな笑みを浮かべて手を差し出してきたのはセドリック・ルーインズ。

《教育者》とあだ名される奴隷商人であり、帝国商業ギルド評議会の評議員の1人だ。

書状に書かれていた時間の少し前、商業ギルドを訪れた私は、商業ギルドの一室で待たされていた。

そして時間が来たのか、私を迎えに来たのがセドリックだったのだ。

「お久しぶりですわ、セドリック会長。

まさかセドリック会長自ら迎えに来てくださるとは夢にも思いませんでしたわ」

「はっはっは、私はエリー会長と面識がありましたからね。

貴女をエスコートする役目を勝ち取ることができたのですよ」

「ふふ、ではよろしくお願い致しますわ」

お互いに表面上はとても穏やかに再会を喜び合う。が、彼の目的は多分、私を直接観察することだろう。

私は商売での功績でこの場にいるわけではない。紛争に参加した報酬という力業で特別認可商人の候補となったのだから警戒して当然か。

「エリー会長のご活躍は聞いていますよ。

義勇軍を率いて自らも剣を振るい戦ったとか」

「全ては帝国の平穩の為、そして私の商売の為ですわ」

「はは、確かエリー会長の商会の生産拠点が近くにあったのでしたね」

「ええ、幸い被害は軽微で済みましたわ」

「それはそれは」

「しかし今回の件で痛感しましたわ。

村人を雇うだけでなく、警備や管理などにはしっかりと教育を受けた人材を配置しなければいけませんわね。」

そうしていれば被害を避けることもできたはずですわ」

「なるほど、幸運を喜ぶだけでなく、そこから更に教訓を得るとは、エリー会長は勤勉でいらっしゃる」

「そのようなことはありませんわ。」

私のような若輩者では手の届かないことばかりです。

セドリック会長を始めとする先駆者の方々からは学ばせていただくことばかりですわ」

商業ギルドの廊下を歩きながらセドリックと会話を交わす。

向こうからの探りを躲しつつ、こちらからは敵意が無く利益を齎すことをアピールする。

そんな攻防はそう長くは続かなかった。

商業ギルドの奥、芸術的な装飾を施された扉の前に到着したのだ。

「おや、楽しいひと時とは矢のように過ぎ去るものですね。では、どうぞ」

セドリックが扉を開き私を室内へと招き入れてくれる。

部屋の中には円卓とそこに居並ぶ6人の人物。

セドリックも合わせたこの7人が帝国の経済界に君臨する怪物達だ。

経済界の怪物達 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 経済界の怪物達

「お初にお目に掛かります。

トレートル商会会長エリー・レイスと申しますわ」

私が頭を下げると、円卓に座る1人から声を掛けられた。

「うむ、座りたまえ」

「失礼致します」

私は空いていた入り口から一番近い席に座り、その右隣にセドリツクが座る。

円卓であるが故、上座は存在しない。

だけれど部屋の入り口から見て正面、一番奥に座るその男からは明らかに最上位者の風格を感じる。

縦に長い瞳と手甲のような鱗、折り畳まれた翼が見えることから種族はドラゴニユートね。

となるとあの壮年の男性が帝国商業ギルドのグランドマスター、  
《先見伯》アルバート・グイード伯爵か。

様々な種族が集まって建国されたユーティア帝国では貴族にも亜人が多く居る。

グイード伯爵領には大きな港があり、先物取引や他国との貿易で途轍もない利益を生み出している人物だ。



「さて、レイス商会長。

話は聞いていると思うが、帝国から特別認可商人への推薦があった。

今回の評議会でその可否を決定する」

「よろしくお願い致します」

「うむ、では先ずルーインズ」

「はい、私はエリー会長の特別認可商人への認定を支持致します。彼女の商会は帝国に多大な利益を齎すと考えます」

セドリックはいつもの笑みでそう答えた。

彼は帝国への利益と言っているが、まあ建前でしょうね。

その実は、自らの利益か。

「では、カレード」

アルバートはセドリックの意見に頷くと、次に私の左隣に座る女性に視線を向ける。

薄いナイトドレスを着た妖艶な魔族だ。

側頭部から生えた角がティアラのように伸びている。

娼婦から歓楽街の支配者にまで上り詰めた女傑、《銀蝶》ヒルデ・カレードね。

「わたくしも彼女を推しますわ。

トレートル商会の化粧品の質は従来のを遙かに上回る物です。

このまま規模を拡大してもらうのが良いですわ」

ヒルデもセドリック同様に私を特別認可商人へ推してくれる。

「待つていただきたい」

そこに不機嫌そうな声が上がった。  
視線を向けると、腕を組んだ人族の男が私を睨んでいた。

《頭目》ダルク・ノーチエス。

表向きは貴族や大商会を相手にする金融屋だが、裏では賭博場の経営や、盗品、規制品などのグレーな品物を扱うブラックマーケットなどを支配する裏社会の大物だという話だ。

社会的には悪人だが、彼が睨みを利かせているため、他国に比べて帝都では麻薬や人身売買などが遥かに少ない。

その辺りのバランス感覚が優れている故、彼の存在は必要悪として黙認されている。

「俺は反対だ。」

その女は王国貴族の出だろ。信用できないな」

その言葉に誰も驚きはしない。

やはり私の出自は筒ぬけか。

「僕も反対します」

ダルクに追従したのはエルフの男《千里眼》ロットン・フライウ  
オーク。

帝国だけでなく他国にも系列の宿屋を持ち、傘下の店を含めれば千を超える、宿屋の頂点に立つ男だ。

その情報網は広く、役人の不正から隣国の王の朝食のメニューまであらゆる情報が彼の下に集まってくるらしい。

「現在のハルドリア王国の状況から、彼女がスパイの類いではないとは思いますが、懐に入れるのは時期尚早だと感じますね」

「ふむ、ノーチェスとフライウオークの意見も尤もだ。

クスノキはどうだ？」

アルバートが話を振ったのは暇そうにしている黒髪の少女だ。

彼女が《漆黑》ユウカ・クスノキね。

帝国最高の薬師。

小柄で小人族のようにも見えるけど、人族だ。

彼女は東にある島国の出身である。

かの島国の人々は皆小柄で南大陸の人々と同様に黒い髪と黒い瞳を持つ者が多い。

また、ユウカは冒険者としても有名な人物であり、普段は店を弟子に任せて冒険に出ていることも多いと聞く。

「わたしはパスです。

この手の決め事には関わらないって約束で評議員になりましたからね」

ユウカが言うと、彼女の隣に座るドワーフの男も頷く。

「ワシも降りるぞ。理由は黒の嬢ちゃんと同じじゃ。面倒事はお主らでさっさと決めろ」

彼は《神工》ガイエン・ドラファンか。

帝国一の鍛冶職人であり、彼の打った剣は一本で屋敷が建つほどの値段が付く。

性格は見た目通りの職人肌で、細かいことを嫌うようだ。

「レイス商会長は今回の件をどう考えている？」

アルバートは私にも話を振ってきた。

「私は皆様から見ればまだまだ若輩者ではあるかと思えますわ。

ですが、私の商会は多くの方々に幸福をお届けできると確信しております。

また、私の出自をご心配されるのは当然のことかと思いますが、それは無用な心配というものですわ。

私は最早、あの国に見切りをつけましたの。

これからは未来ある帝国で商人として生きていくつもりですわ  
「……………なるほど」

アルバートは私の言葉の真偽を確かめるように目を細めた。

経済界の怪物達 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 経済界の怪物達

アルバートは一拍の間を置いて口を開いた。

「私はレイス商会長の特別認可商人への認定を支持しよう。彼女のこれまでの功績と帝国への貢献はその資格を得るのに十分なものだ」と判断する。

また、出自による懸念は現在の王国での彼女の扱いに鑑みると、帝国を裏切つてまで王国に与する動機は薄いと考える」

アルバートはゆっくりと頷くとその場に居る評議員を見回してから宣言する。

「賛成3 反対2 棄権2 だな。」

よつて帝国商業ギルド評議会はトレートル商会会長エリー・レイスを特別認可商人として認めるものとする。

良いな、ノーチェス、フライウオーク」

「勿論です。私は少々早いとは思いますが、彼女の实力は認めておりますよ」

「俺も議会の決定には従おう。」

だが、全幅の信頼を置くのは危険だという考えは変わらない」

「うむ、ノーチェスの意見も尤もだ。」

トレートル商会への監査は通常の特別認可商人への監査よりも密としよう」

アルバートがダルクに頷く。

まあ、妥当な落とし所ね。

私の出自は帝国と敵対している国の公爵家。

無条件で認可が承認されるとは思っていなかったけど、監査が厳しくなる程度は許容範囲内ね。

……と言つかこの展開……おそらく予め予定されていたものものよ  
うな気がするわ。

一見、議会として決を取っているように見せているけど、既に事前に話し合われていたのだろう。

これは特別認可商人として認めても、私を完全に信用している者だけではない、というのを私に伝えるための茶番……いや警告か。

「レイス商会長には後日、帝国商業ギルドから正式に特別認可商人としての認定書を発行する。以上だ」

「はい、感謝致します。」

今後も帝国経済の発展に寄与できるよう努力していくことをお約束しますわ」

「うむ、期待しているぞ」

一礼して部屋を出た私は、ミレイの待つ馬車へと戻ってきた。

「お疲れ様です、エリー様」

「ええ、待たせたわね」

「いえ、結果の程はいかがでしたか？」

「無事、認可が下りたわ。」

ただ、監査は厳しくなるみたいね」

「そうですね………まあ、我々の素性を考えると当然ですね」  
「そうですね」

簡単に結果を伝えた後、馬車を走らせる。

今日はこれから帝都に近い港町へ向かう予定だ。

南大陸からの交易船が来ており、私が注文していた荷物を運んできているはずなのだ。

帝都の門を出て街道を走ること数時間、交易の中心地として発展している港町へと入った。

宿に馬車を預けた後、私とミレイは港へと向かった。

町の至る所で魚や貝などの網焼きや串焼きの屋台が美味しそうな香りを放っている。

「丁度いいから何か食べていきましようか」

「そうですね。偶には屋台も良いですね」

「外で食べ歩きなんて昔では考えられないわね」

私とミレイは貝の串焼きを買い、港まで歩きながら食べる。

「香ばしくて美味しいわね」

「なんでも東の島国から輸入したソースを使っているそうです」

「どつりで珍しい味だと思ったわ」

「その分、少し高かったですけどね」

その他にも外国の珍しい果物やこの辺りで飲まれている物とは違うお茶などを楽しみながら港へと到着した。

「あれね」

私の目的である大きな交易船。

その船名を確認した私は、荷下ろしをしている船員に話しかけた。



「失礼、私はトレートル商会の者ですが、船長殿はいらっしゃるかしら？」

「ん？トレートル商会？……ああ、あの鳥を飛ばして依頼してきたっていう商会か？」

「ええ」

彼らへの依頼はセントバードを飛ばしてお願いした。

そのため、直接会うのは初めてだ。

「ちょっと待ってくれ……おい！頭は何処だ？」

船員の男は近くに居た仲間に話しかけて船長の居場所を聞き出してきた。

「こつちだ、ついてきな」

男に連れられて、私とミレイは大きな交易船へと乗り込んでいった。

経済界の怪物達 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 異国の船員達

船室の1つに案内された私とミレイはそこで1人の男と面会していた。

日に焼けた筋肉質の男だ。

その髪と瞳は、数時間前に会ったユウカ・クスノキと同じ黒。

だが、彼は東の島国の出身ではなく、南大陸にあるレキ帝国の人間だ。

「お初にお目にかかりますわ、グエン船長」

「ああ、トレートル商会の……エリー会長だったか？」

「ええ」

「まあ、俺はあまりまどろっこしいことは苦手だな。早速商談と行こう。」

おい、例の荷を持ってこい！」

グエンはあまり商人的な駆け引きは得意ではないのか、挨拶を早々に切り上げて部下に指示を出した。

少しして数人の男達が嚴重に密閉された上、魔法的な処理がされた木箱を5つ持ってやってきた。

「こいつが注文の品だ。確認してくれ」

「失礼しますわ」

私が木箱の封印魔法を解き中を検めると、そこには水と共に真珠の様な粒が沢山はいつていた。

私はそれを数粒手に取り状態を確認すると、直ぐに箱に戻して封印魔法をかけ直した。

この封印魔法は木箱に刻印されており、一種のマジックアイテムとなっている。

それから残りの4箱の中も検めて、問題がないことを確認した。

「問題ありません」

「ではこのまま引き渡そう」

「外に馬車を用意してありますからそこをお願い致しますわ」  
「わかった」

グエンは部下に言い付けて木箱を運び出し始めた。

「それにしてもあんな物何に使うんだ？」

「新しい商売のタネですわ。成功するかは分かりませんが」

「ほう、商人つてのは色々と考えるんだな」

グエンが不思議そうな顔をするのを私は軽く受け流しながら、少し気になっていたことを聞いてみた。

「それにしてもグエン船長の船の船員達は皆元気ですわね？」

「ああ？まあ、海の男だからな。陸のモヤシ共とは違うさ」

「いいえ、そうではありませんわ。」

グエン船長の船は南大陸を出発して西大陸経由でこの中央大陸へやってきたのでしょうか？それだけの遠洋航行を行えば船乗り病に罹る者も多いのでは？

船乗り病とは長く陸地から離れる遠洋航行を行う船乗りが罹る奇病だ。

口内の粘膜などから出血したり歯が抜けたりし、傷が治らなくなる恐ろしい病だ。

「ああ、そのことか。」

確かに今までは船乗り病で何人も脱落者を出したこともあったがな。

「コイツのお陰で今回は1人も発症していない」

そう言っただけでゲエンが部屋の棚から取り出したのは葉野菜を刻み酢漬けにした物だった。

「これは……ザワークラウトですか？」

「そうだ。コイツを普段から食ってれば船乗り病に罹らねえんだぜ」

「ほ、本当ですか」

「ああ、俺は学がねえからなんでそうなるのかは知らねえけどよ。俺の国に色んな相談に乗ってくれる大層頭の良い嬢ちゃんが居るな。」

「冗談のつもりで相談してみたんだ。」

「そしたらこの『ざわーくらくと』つつつのを教えてくれてな。」

なんでも北大陸の偉い学者先生の研究だと、陸にいる時からコイツを食べ続ければ船乗り病に罹らないって教えてくれたのさ」

「そんなことが……これは大発見ではないですか」

「ああ、南大陸では結構広がっているからな。この大陸の海運ギルドにも報告が行っているはずだからそのうち広がるだろうな」

レキ帝国にはそんな最新の研究結果を理解できる知恵者が居るってことか。

私は別の大陸に居る識者に少し興味を惹かれながらゲエンに代金を手渡した。

「それとコレは頼まれていた品ですわ」

「すまねえな。この大陸にはあまりツテが無かったもんでな」

「いえいえ、代金はこちらから支払う分から引いてありますわ」

私を手渡したのは彼から頼まれていた本だ。

内容は多岐にわたる。

様々な分野の最新の専門書や研究論文などだ。

「もしかして例の『頭の良い嬢ちゃん』からの依頼品ですか？」

「まあな。とにかく知識が欲しいらしい。」

俺なんか5ページも読めばよく寝られるってのによ」

グエンはがっはは、と豪快に笑った。

その後、船を降りた私とミレイは荷運び用に手配した馬車を帝都の商会に向けて送り出した後、馬車を預けている宿屋へと戻るのだった。

## 異国の船員達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ） ノ シ

## 語り合う商人達

帝都の屋敷に戻ってきた私達は、食堂に集まり夕食を食べていた。この場に居るのは4人。

私とミレイ、ルノアとミーシャだ。

「レキ帝国と言うと南大陸の半分以上を支配している大帝国ですよ  
ね？」

「ええ、この国とはかなり違う文化を持っているわね。私も行った  
ことはないけど」

「そんなに凄いことなんですか？」

その病気の予防法を発見したのは北大陸の研究者なんですよね？」  
「それがそうでもないのよ」

ミーシャが疑問を口にする。

確かにレキ帝国に居ると言う少女は単に研究者が発見した事柄を  
伝えただけにも思える。

しかし、事はそんな単純なことではない。

「その研究者の論文って私も読んだのよ」

グエンの話に何処か引つかかっていた私は、かつて

【傲慢グリモア・ルシフェルの魔導書】に件の論文を記録してあったことを思い出し、帰  
りの馬車の中で目を通したのだ。

「確かにその研究者は船乗り病の原因について食生活に問題がある  
と考えていたわ。」



でも、その論文では詳しい原因や解決法にまでは言及されていなかったのよ」

「では、その少女が自ら発見したということですか？」

ミレイが驚きを隠せずに聞く。

「そこまでは分からないわ。ただグエン船長の話だと、その少女は研究者の類ではなさそうだから、他の研究者の論文などを読み合わせて導き出した物じゃないかしら？」

「ふぁ凄いですね！」

その後、私達は4人で、まだ見ぬ南の知患者について予想を述べ合い、やがて話題はグエンから聞いた話から、今回仕入れた商材の話に移る。

「では次の目的地はサージャス王国……サージャス地方ですか？」

「そうよ。あの生産拠点を置いた村、確かガナ村だったわね。あの村からサージャス地方に入った所の湖の側に小さな村があるわ。

そこに向かうわよ」

「では明日、出発しますか？」

「ええ、こちらの仕事もあるからミレイとルノアは留守番をお願いね」

「はい！」

「お任せください」

翌日、早朝から私とミーシャは木箱を積んだ馬車を操り帝都を出た。

午前中は私が御者を務める。  
踏み固められた道を、積み荷に配慮してゆつくり進んだ。

「エリー様、この木箱は何故エリー様の神器で収納して運ばないのですか？」

「私の【強欲の魔導書<sup>グリモア・マモン</sup>】には生物を入れることはできないからね」

「え コレ、生き物が入っているのですか」

「卵だけだね。それはアクアクローラーの卵なのよ」

「アクアクローラー？」

「西大陸に生息する水棲の芋虫みたいな魔物よ」

「い、芋虫……ですか……」

ミーシャが木箱からそつと離れ、私はその様子に苦笑を浮かべた。

「西大陸では湖で栽培されている薬草を食べ尽くす害虫として扱われているわ。

でも、特定の条件を満たすことでアクアクローラーは上質な糸を作るのよ。

その糸で織った布はアクアシルクと呼ばれているわ」

「アクアシルクですか」

あれは生産方法が不明な幻の布のほです！

ごく稀にダンジョンで手に入る物だとお父さんが言っていました  
！」

「そのアクアシルクよ。」

アクアクローラーが糸を吐く条件が難しいのよ。私は古い文献からその条件を解読したの」

「ほ、本当ですか」

これはハルドリア王国の地下書庫に収められていた文献に書かれていた物だ。

王国に居た時に、次の商売として目をつけて研究していたのだ。

私はアクアシルクを生産する条件について説明しながら、視界の先に最初の目的地である村を見つけてきたのだ。

## 語り合う商人達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 噂する者達

「エリーさん、お久しぶりです」

「お久しぶりですわ、村長様」

私とミーシャはガナ村に到着した後、村長と面会していた。

あの紛争の始末がようやく終わり、つい先日から少しずつ化粧品  
の生産が始まっていた。

「何か困ったことなどはありませんか？」

「いえいえ、トレートル商会のおかげで皆、安定した収入を得るこ  
とができるようになりますし、村の防衛にも人を送ってください  
感謝しております」

紛争の後、私はセドリック商会で戦闘能力のある奴隷を数人購入  
し、この村に送り込んでおり、村の周囲の魔物の間引きと防衛に当  
たってもらっている。

待遇はミーシャと同じく、トレートル商会の商会員に準じており、  
数年、真面目に働いてくれれば奴隷身分から解放して商会員として  
雇用するつもりだ。

実力はほどほどでも性格的に協調性がある者を購入したので、村  
人とも問題なく打ち解けているみたいね。

村長と生産の監督として派遣した商会員から報告を受け、作業場  
の視察をすると、陽も落ちたので、今日は村長の屋敷に泊めてもら  
うことになった。

「さあどうぞ。田舎料理で恐縮ですが、この辺りの郷土料理です」

「頂きますわ」

「頂きます」

村長の奥さんと娘さんが用意してくれたのは、キノコや山菜などの山の幸をふんだんに使った鍋だった。

「あら、キノコから良いお出汁が出ていますわね」  
「美味しいです」

決して高級とは言えないが、滋味あふれる優しい旨味と沢山の食材による深い味わいが美味な逸品ね。

猫舌のミーシャもハフハフと美味しそうに食べていた。

翌日、昨日は遅くまで見回りに出ていた警備の責任者と面談し、不足している物資などを確認した私は、昼前にガナ村を出発するのだった。

再び馬車を走らせ数日、ブロッケン砦に到着した。

現在この砦はサージヤス地方への関所を兼ねているらしい。

「止まれ！行商か？現在此処は通行するのに許可が必要だぞ？」

「商人ですが行商ではありませんわ。」

「許可証は此処に」

私はルーカス様のサインの入った通行許可証と商業ギルドの会員である証明となるギルドカードを提示した。

特別認可商人になると、この手の検問などもかなり簡略化されるらしいのだけれど、私はまだ特別認可商人としての証明書を貰っていないので、それなりに面倒な手続きを踏まなければならない。

「許可証は確認した。積み荷はなんだ？」

「アクアクローラーという魔物の卵ですわ」

「魔物の卵だと？」

「ええ、ミーシャ」

「はい」

砦の兵士が怪訝な顔をするが、私は先んじてミーシャに預けてあった書類を受け取り、兵士へ差し出した。

「コレがアクアクローラーの卵の所持許可証、こちらはサージヤス地方への持ち込みの許可証ですわ」

「う、うむ」

兵士は書類を確認した後、アクアクローラーの卵が入った木箱の封印などをしっかりとチェックして通行を許可してくれた。

「随分と嚴重でしたね」

「まあ、ついこの間まで紛争中だったし、まだ併合したばかりの土地だからね。

テロリストや反帝国ゲリラなんかも居るかもしれないからしばらくは出入りが嚴重になるのよ。

兵士達も皆気を張っていたでしょ？」

「はい、随分と緊張感がありました」

「少々気を張り過ぎだとも思っけどね」

手綱を握るミーシャにそう返した私は、目的の村までの地図を確認するのだった。

「ふう、行ったか」

ブロッケン砦で通行する者のチェックを担当していた兵士は遠ざかる馬車を見ながら隣の相棒と共に肩の力を抜いた。

「今のがトレートル商会の『黄昏の魔女』なのか？」

「ああ、俺は此処に配属される前に領軍に居たんだ。その時に直接見たから間違いない」

その日、ブロッケン砦にやってきたのは女2人、それもまだ少女と言えるような若い2人組だった。

一瞬、その不用心さに心配になった兵士だったが、通行許可証を受け取る時に、そのうちの1人が、あの紛争で活躍した義勇軍を率いていた女商人だと気づいたのだ。

「そんなに凄かったのか？」

「凄いなんてもんじゃないさ。」

どんな手を使っているのか知らないが、多属性の大魔法が次々と放たれるんだぞ。

俺は砦の外から包囲していたのだが、それでも防壁越しに竜巻や石柱が敵兵を薙ぎ倒すのが見えたぞ」

「マジかよ」



「それで陽が暮れ始めてから、沈むまでも掛からないほどの時間で敵兵は皆殺しさ」

「それで『黄昏の魔女』か……」

「ああ、ルーカス伯爵閣下とも懇意にしているらしいし、絶対に怒らせるなよ。」

「首が飛ぶぞ、色々な意味で」

「わ、わかった」

軽い雑談を終えて、2人の兵士は持ち場へと戻っていくのだった。

## 噂する者達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 窮地の村人達

整備された街道から踏み固められただけの道に入り、木々の間を進むことしばらく。

前方に木で作られた粗末な柵に囲まれた村が見えてきた。

「彼処が目的の村ですか？」

「ええ、ミリスタ村よ」

ミリスタ村は小さな湖の側に寄り添うように作られた村で、主な産業などは無く、村人は僅かな農耕と森での狩猟、湖での漁で細々と暮らしている。

アクアクローラーの生息環境に合致する村を探して見つけた場所で、セイントバードを使って手紙を運び、何度かやり取りをした結果、トレートル商会の傘下としてアクアシルクの生産を請け負ってもらえることになったのだ。

村に向けて馬車を進めると、なんだか違和感を覚えた。

「何かおかしいわね？」

「おかしい、ですか？」

「ええ、なんだかピリピリした感じと言うか……」

「」

村の門に差し掛かったところで、門の陰から5人の男達が飛び出してきた。

手には木を削って作られた粗末な槍を持っている。

私は御者台のミーシャを飛び越えるように幌から飛び出すと、腰の剣に手を掛けながら馬車の前に立った。

「これは何の真似かしら？」

「女」

男達が少し驚いた顔をする。

「お、お前達は盗賊団じゃないのか？」

「盗賊？私は商人よ。トレートル商会、ミリスタ村の村長に近々伺うと言っていたはずだけど」

「トレートル商会！おい、お前ら！武器を降ろせ！彼女達は盗賊じゃない、村長が言っていた客人だ！」

男達のリーダーらしい脚を引き摺っている男が仲間にも武器を降ろさせた。

「すまねえ、あんたのことは聞いている。

村長の所に案内するからついてきてくれ」

馬車を停めた私とミーシャは男に付いて村長の屋敷に向かって歩いていく。

村の中には手に槍を持った男達しか見えず、皆悲壮な顔をしている。

「何かあったのかしら？さっき盗賊とか言っていたけど？」

「ああ、ちよっと問題が起こっていな。

詳しくは村長に聞いてくれ」

そう言っつて男は村長の屋敷の扉を開いた。

「じつ様、前に言っつていた商人が来たぞ」

「失礼しますわ」

「失礼します」

男に続いて屋敷に入ると、村長と年嵩の村人が数人、難しい顔をして机を囲んでいた。

「商人？ああ、トレートル商会の方ですな。」

わざわざ来ていただいたて申し訳ないのじゃが、今は非常に不味い状況での。

「お主らも早々に村を立ち去ってもらいたい」

「いったい何があつたのですか？もし何かお困りなら力になりますわ」

「しかし……お嬢さんではのう」

「村長、話だけでも聞いてもらえば良いんじゃないか？」

「そうだな、旅慣れた商人殿なら町の冒険者ギルドまで行ってもらえるかも知れない」

「それに今村を出るのも危ないぞい」

「うむ……」

村長と村人は何やら話し合った後、説明してくれた。

それによると、昨日の昼間、突然盗賊が村を襲つたそうだ。

その盗賊は村の門番を殺し、酒と食料を奪つていったらしい。

そして去り際に明日……つまり今日、また酒と食料、そして若い娘を用意しておくように言つたとのことだ。

多分、昨日は村の戦力などを確認するための威力偵察のようなもので、今日、本格的な略奪を行うつもりだと思われる。

この村は立地的に町に向かうための道が限られているので、多分

そこに見張りを置いているのだろう。

「エリー様、野盗と盗賊はどう違うのでしょうか？」

「明確な定義はないけど、一般的に街の外で人を襲ってお金や荷物、時には命を奪うのが野盗よ。大体4〜5人、多くても20人くらいで行動しているわね。」

盗賊っていうのは、更に多くの野盗が徒党を組んだ奴らのことで、略奪を行う他に、殺人を請け負ったり、人を攫って違法奴隷にしたりする犯罪集団よ。多くの場合は大きな街の犯罪組織や悪徳貴族と繋がりを持っているわ。」

人数が多くて大きな盗賊団になると、構成員は数百人になることもあるのよ。」

総じて盗賊の方がタチが悪い。

村長は私の説明に頷く。

「奴らは装備もよく、ただの野盗とは違うように見えましてのう。」

村の門番は歳で引退した元冒険者じゃった。

彼奴が殺されたのではワシらではとても勝てぬ。

そこでお嬢さんに町の冒険者ギルドへ救援依頼を出しに行ってもらいたいのじゃ。」

森を行けば奴らに見つからずに町まで行けるかも知れん」

「ですが、それでは時間がかかり過ぎますわ。道を外れて進めば町まで数日は掛かりますし、依頼を出しても直ぐに受けてくれる冒険者が現れるとは限りません」

「しかし、このままこの村に留まれば、お主らも危険なのじゃ」

「大丈夫ですわ」

私は安心させるようにゆっくりと頷いた。

「その盗賊団、私が叩き潰して差し上げましょう」

窮地の村人達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ



## 待ち受ける村人達

「た、叩き潰す……い、いや、そうは言っても……」

私は唾然としながら止めようとする村長を制して指をパチンと鳴らす。

それを合図に私を囲むように鋭い氷の棘が突き上がる。

「うあ！」

「な、なんだ」

「ひゃあ！」

私はもう一度指を鳴らして氷を消した。

勿論、別に指を鳴らす必要などはないわ。ただの演出よ。

「お、お嬢さんは魔法使いなのかい？」

「それに今、詠唱していなかったぞ」

ざわめき出す村人が少し落ち着くまで待ち、声を上げる。

「見ての通り、私は人並み以上に戦えるという自信がありますわ。

此処までこの子と2人で旅してこられる実力がありません。ですのでお任せいただけますか？」

私が問うと、顔を見合わせた村人達だが、最終的には頷いてくれた。

村長に戦える村人を集めてもらい、村の各所に配置していく。彼らには警戒を頼んでいる。私が持っていた物と、村中からかき集めた笛を持たせている。もし私が居る場所以外から盗賊が現れた場合は、笛で合図を送る手筈になっている。

村の西側は湖で、北側と南側に森があり、村の門があるのが東側だ。

そこで私は村人を3組に分けた。私が居る以外の2方を警戒する者達と、女子供が避難している村の中心に位置する共同倉庫を守る者達だ。

昨日、盗賊は昼過ぎ頃に現れたそうだ。同時刻に現れると考えるとあまり時間も無い。

私はバタバタと走り回る村人達を横目にミーシャを呼ぶ。

「ミーシャは中央の共同倉庫を守って頂戴」

「はい！」

「あと、もし盗賊が二手に分かれて襲撃してきた場合は笛が鳴った方に救援に向かってあげて」

「わかりました」

ミーシャが若干の緊張を滲ませながら答えた。

まだ幼いとすら言えるミーシャだが、彼女は私の下に来てからも鍛錬が続いている。

ミレイからも手解きを受けており、いくつか【スキル】も身に付けたらしい。

野良ゴブリンを追い払ったことがある程度の村人よりも戦闘能力は高いはずだ。

「村人を守ってほしいけど、最優先は自分の命よ。明らかに実力が違うと感じたら迷わず逃げなさい、コレは命令よ」

「は、はい」

「危険だけど、お願いね。今回の盗賊は確実に始末する必要があるのよ」

「そうなのですか？」

「ええ」

私は少し声を落として説明する。

「この村を襲った盗賊はサージヤス王国の脱走兵だと思うわ」

「ええ」

「時期や場所から考えて確率はかなり高いのよ」

「でもサージヤス王国の将兵は罪には問われないはずでは？」

「確かに帝国はサージヤス王国との紛争は国王の自決と統治権の譲を以て終結としたのだけれど、それとは別に一般人への略奪や暴行を行なった将兵は調べられて処罰されているのよ。」

つまり、その脱走兵は色々と心当たりがあったということでしょうね。

もし、この事が村人に伝われば紛争相手である帝国人である私達への心証が悪化する恐れがあるわ」

「でも、あの紛争はサージヤス王国から仕掛けてきたのですよ？」

「そうね。でもそんなことは村人には関係ないわ。自国と帝国が争った結果、盗賊に村が襲われた。その事実が全てよ」

「……そう……ですか」

私は耳と尻尾をシユンと折るミーシャの頭を優しく撫でる。

「だから此処で私達が盗賊団を潰しておかなければならないのよ。今なら村人は帝国に対して隔意は持っていないはずだから」

言い方は悪いが、このミリスタ村は田舎だ。

王都などなら別だが、この様な田舎の村人は上に立つ者が誰に変わろうが、重税を課せられたりしない限り、たいして興味は無いものだ。

その上、帝国はその手のノウハウに長けており、何かと適当な理由を付けて新たに併合したサージャス地方への税を1年間免除することになった。

見え透いた懐柔策だが、恩恵を受ける者達は皆喜んでいる。

この流れを遮るわけにはいかないのだ。

「そういうわけだから、お願いね。ミーシャ」

「はい！お任せください！」

ミーシャを中央倉庫に向かわせた私は村の入り口に陣取り盗賊団を待つ。

女性を攫ったり、大規模な略奪を行うなら馬車なり荷車なりが必要だ。

来るならこちら側が本隊だろう。

「嬢ちゃん、本当に大丈夫なのか？」

私の隣に居るのはあの脚を引き摺った男だ。

「問題無いわよ」

「そうかい……俺は怪我で引退したが、これでも元Dランク冒険者

だ。いざとなったら嬢ちゃんが逃げる時間ぐらいは稼いでやるよ」「あら、頼もしいわね」

男の言葉に微笑みを返した時だ。

道の先に荷車を引いた集団の姿を捉えたのだ。

「お客様が来たようね」

## 待ち受ける村人達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 「迎撃される襲撃者達」

「おい、村人共！用意はできているんだろつな」

ニヤニヤと笑みを浮かべた盗賊達が荷車から先行して此方へとやってきた。

「それと今朝、商人の馬車が来ただろう？

その商人の積み荷も馬車ごと寄越しな」

脚を引き摺った男……アルドと名乗った男が奥歯を噛み締めながら盗賊を睨みつける。

そんなアルドを横目に見ながら私は前に出る。

「お！良い女じゃねえか。なんでこんな田舎にお前みたいなべつぴんが……」

ニヤけながら私の肩に手を置こうとした盗賊だったが、その手は空を切る。

「へ？」

それが盗賊の最後の言葉だった。

「……な」「……」

盗賊の仲間達が驚愕する。

目の前の女に近づいた仲間が一瞬でバラバラに斬り刻まれたのだ。私は【縮地】を使い硬直した盗賊達の中に踏み込んだ。

初めに手前の2人を斬り殺し、慌てて剣を構えようとする盗賊を剣ごと斬り捨てる。

「このアマあ！」

振り下ろされる剣の腹に左手の甲を添えて僅かにズラし、空振りした剣を踏み付けながら首を刎ねる。

瞬く間に4人を殺した私を見て、荷車の周りに居た盗賊達が急いで弓を取り出し矢をつがえるが遅すぎる。

地面を踏み砕く勢いで接近する私に、鏃を向ける隙すらなくこの世を去る盗賊。

更に氷の棘で数人の盗賊を貫く。

「ひいー!!」

「ば、化け物」

誰が化け物だ。

私を化け物扱いした盗賊を氷漬けにして蹴り砕いた後、腰を抜かしている盗賊の頭に氷塊を叩きつけ気絶させる。

その他にも数人、生かしたまま気絶させ捕らえた後、要らない奴らは全滅させておく。

「まあ、こんなものかしら？」

「……………マジかよ」



アルドが夢でも見ているかのような表情で盗賊の死体の中を歩み寄ってきた。

「アルドさん。捕虜にした盗賊の捕縛を手伝ってもらえますか？

アジトの場所や別行動の仲間などの情報を喋らせる必要があるわ」「わ、わかった」

攫ったり女性を縛るつもりだったのだろう。

盗賊の荷車には布やロープが積んであったので、アルドと手分けして盗賊を縛り上げていく。

半数くらいを縛った頃、甲高い笛の音が聞こえてきた。

「笛の音だ！」

「盗賊の別働隊がいた様ね。

アルドさん、この場をお願いします。

もし、抵抗する盗賊がいたら殺して構わないわ」

「俺も……いや、わかった。村の奴らを頼む」

一瞬、自分も行くと言いそうになったアルドだが、直ぐに言葉を飲み込んだ。

そんなアルドに頷いて私は笛の音が聞こえた方に向かって駆け出しました。

エリー様の指示で中央倉庫で村人達と共に非戦闘員である女性や

子供、お年寄りなどを守っていた私は、村の入り口付近から聞こえてくる戦闘音に緊張感を高まらせていた。

いくら元兵士だからとは言え、あのエリー様が負けるとは思えない。

エリー様の奴隷となり、トレートル商会に身を置いてからというもの、ミレイ様に戦闘訓練を付けてもらっているが、私はミレイ様に手も足も出ない。

そして、そのミレイ様よりもエリー様の方が遥かに強いらしい。

なのでエリー様が負けて盗賊が此処まで来る可能性は限りなく低いです。

そして入り口付近が少し静かになった頃、森に面した方角から笛の音が聞こえてきた。

別方向からの襲撃だ！

「行ってきます！皆さんはこの場をお願いします」

「お、おい！嬢ちゃん！」

「危険だ！」

私は、止めようとする村人達を無視して笛の音が聞こえた方へ走り出したのだった。

## 迎撃される襲撃者達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 修練する者達

私が笛の音がする場所に駆けつけると5人の村の男性が3人の盗賊と対峙していた。

村人は木を削った即席の槍を恐々と構え、盗賊はそれを見てニヤニヤと笑みを浮かべている。

まだ私に気付いていない！それなら！

私は身を低くすると、身体強化に使っている魔力を脚に集中させた。

以前は体全体への強化しかできなかったけど、ミレイ様に訓練を付けてもらおうちに細かい魔力の扱いができるようになった。

これによって更に速度を増した私は、村の建物の陰から、放たれた矢のように村人に対峙する盗賊達へと迫った。

狙いは弓持ちの盗賊の首！

エリー様に買い与えられた短剣を逆手に構えて残りの数メートルを跳躍する。

しかし、そこで盗賊も私の接近に気が付き、目を見開いた。普通の野盗なら何もできずに喉を掻き斬られていたと思う。

だがこの盗賊はエリー様の予想通りなら戦闘の訓練を受けた元兵士だ。

故に盗賊は反射的に弓を上げ、私の短剣を受け止めたのだ。

「くっ！」

空中で身体を捻った私は、盗賊に背を見せないように片手を突いて地を滑る。

「なんだ！」

「獣人のガキだぜ」

盗賊達が態勢を立て直す前に、と思い飛び掛かる。

「ふううー！」

短剣を突き出すが、盗賊は冷静に身を屈めて拳を振るう。

「がはっ！」

「へへ、威勢の良いガキじゃねえか」

込み上げてくる吐き気を堪えてゆっくりと立ち上がる。

「ふうん、ちと貧相だが器量は悪くねえな」

「なんだよお前、あんなガキが好みなのか？」

「悪いかよ？久しぶりに楽しみたいからな。コイツは俺が貰って良いよな？」

「好きにしるよ、変態」

「……はっはっは」

フラつく足元が頼りなく、近づいてくる盗賊に恐怖が込み上げて

くる。

慌てちゃ駄目だ……冷静に……落ち着け……思い出せ……。

「いいですか、ミーシャ。」

獣人の方々の多くは魔法が苦手です。

しかし、魔力を扱えないわけではありません。

ミーシャも魔力で身体強化を使えるでしょう？」

「はい。ですが私自身もどうやって身体強化を使っているのか分からないんです」

「そうですね。そもそも私やエリー様の使う身体強化と、ミーシャが使う身体強化は厳密に言えば別の物なのです」

「え」

「私やエリー様の身体強化は魔法ですが、獣人の方々が本能的に使う身体強化は【スキル】なんです」

「魔法と【スキル】は違うのですか？」

「ええ、魔法とは魔法式とイメージによって理論的に組み立てられるものです。」

対して【スキル】とは魔力を使う事は同じですが、魔法式を介さず直接魔力を感覚的に操作する技術です」

「つまり魔法式が苦手な獣人でも【スキル】なら使えるってことですか？」

「そうですね。一つお見せしましょうか」

ミレイ様は私に石を手渡し、少し離れた場所へ移動した。

「その石を私に当ててください」

「は、はい……」

私は一瞬戸惑った後、腕を振りかぶりミレイ様に石を投げつけた。

『え』

ミレイ様に向かって飛来した礫だったが、石はミレイ様に当たることなく、その身体を透過して背後に落ちた。

するとミレイの姿が溶けるように消えて、すぐ側から滲み出るように姿を現した。

『これは【ミラージュ・ステップ】という【スキル】です』

『凄いです！私にもその【スキル】が使えるのですか？』

『そうですね……【ミラージュ・ステップ】を習得するには光属性の魔法適性が必要です。ミーシャの適性を調べてみましょう』

するとミレイ様は小さな水晶を取り出した。

『これで確認できます。触れて魔力を流してください。マジックアイテムの明かりを灯すのと同じ感覚です』

『はい』

私は水晶を受け取り魔力を込める。  
すると水晶は僅かに茶色く光った。

『ミーシャの魔力適性は土属性ですね』

『では【ミラージュ・ステップ】は使えないのですか……』

ミレイ様は少し気落ちする私の頭を撫でてくれる。

『そう気を落とさない。土属性にも強力な【スキル】はありますし、どの属性でも使える【スキル】もありますよ。』

まずは手始めに【ミラーージュ・ステップ】に似た【スキル】を教  
えてあげましょう』

「へへへ、おいガキ。大人しくこっちに来な」

盗賊が私の腕を掴もうと手を伸ばし……その手が空を切る。

「あれ？」

盗賊が掴もうとしたのは私の腕の側。

盗賊は再び私を捕らえようとするが、私の体に触れることはでき  
ないでいる。

フラフラと動く私は魔力を纏っていて、不規則な動きと感覚を狂  
わせる魔力により盗賊の目算をズラしている。

ミレイ様から教わった【フェイク・ステップ】だ。

さっきまでとは違う。

今は冷静に盗賊の動きに集中する。

此処から反撃だ！



## 修練する者達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 尋問される盗賊達

「こいつ」

盗賊は苛立ちながら拳を振り抜くが、目算を誤った拳をスルリと躲した私は、盗賊の股下を潜り抜ける。

「ぐあー！」

すれ違い様に内腿を撫でるように斬りつけたのだ。

内腿には大きな血管があり、ダメージが大きい上、機動力を奪うことができるので積極的に狙うべきだとミレイ様から教わった。

「てめえ！」

顔を真っ赤にした盗賊が剣を振り上げる。

反射的に後ろに退がろうとする脚を臍の下辺りに力を込めて堪え、私の頭を目掛けて振り下ろされる剣を両目で見据えた。

ぐつと息を止めて短剣の柄頭で盗賊の剣の腹を叩き、斬撃を逸らす。

「【剛閃】！！」

繰り出すのは斬撃を強化するだけの単純な【スキル】だ。魔力を纏った短剣を思いつきり振り薙いだ私は、円を描くように

体を回転させる。

慣性によつて遅れて回る尻尾が元の位置に戻った時に、盗賊の腹部から臓物が溢れ落ちた。

「うはあ！あ……が……」

ビシヤリと血が滝のように流れ出し、その上に盗賊が倒れた。

「や、やった！」

「このガキ……！」

その声に振り向くと盗賊の仲間の剣が私に迫っていた。

「しまっ……！」

「ああああ……！」

不意打ちを受けそうになった私を助けてくれたのは、粗末な槍を  
持った村人だった。

彼らは盗賊に向かってガムシヤラに槍を突き出す。

「ちっ！クソが！」

「うおお……！」

「わああ……！」

手傷を負ってはいるが、やはり専門の訓練を受けた元兵士である  
盗賊は、ただの村人とは武力が違いすぎる。

その上、盗賊の方が人数が多いのだ。

「うわっ……！」

「ひい……！」

「ちっ！クソ共が！」  
「死ね！オラ！」

私は飛び出そうとするが、間に合わない。

盗賊が村人を斬ろうとした時、突風のような衝撃が盗賊達の中を駆け抜けた。

そして全ての盗賊の首が落ちる。

「え」

「うわあ」

「な、なんだ」

村人達が慌てるが、私は立ち上がり盗賊の死体の中心に立つ人に駆け寄る。

「エリー様！」

「ミーシャ、よく頑張ったわね」

エリー様は私の頭を撫でてくれながら、私が殺した盗賊に視線を向けた。

「さて、後はアジトの場所を聞き出さないとね」

この場の見張りを村人達に頼んで、私とエリー様は捕虜をとっているらしい村の入り口へ向かった。

ミーシャと村人が時間を稼いでくれていた場所の盗賊を全て斬った私は、ミーシャと共に村の入り口へと戻ってきた。

「アルドさん」

「おお、戻ったか！」

「ええ、向こうはもう大丈夫よ。」

村人も怪我はしているけど無事よ」

「そうか」

アルドは安心したかのように肩から力を抜いた。

「後はアジトと仲間について聞き出さないとね」

私が捕虜に近づくと、何人かはすでに目覚めていたのかビクリと反応した。

懐から短剣を抜いた私は、手近にいた盗賊の髪を掴み上げて片目にその刃を突き立てた。

「うあああ!!!!!!」

目を潰され悲鳴を上げる盗賊をもう1人の盗賊の前に連れていく。

「アルドさん、そっちの盗賊の顔を私の方に向けてください」

「……わ、分かった」

「……こば！」

目を逸らそうとする盗賊の腹に蹴りを入れる。

「次に目を逸らしたらコイツの代わりは貴方よ」

そう言って片目を潰した盗賊をもつ1人の盗賊の目の前で何度も何度も痛め付ける。

短剣を突き立てグリグリと傷口を抉り、耳を斬り落とし、爪を剥ぐ。

その間、片目の盗賊は悲鳴を上げながら必死にアジトや仲間の情報を話すが、私は一切答えることなく指を切り落とし、次第に悲鳴を上げなくなってきた盗賊の首を掻き切った。

その血飛沫を浴びた顔面蒼白な盗賊の髪を掴み上げ顔を上げさせると、短剣を右目に突き立てた。

「あがぁ!!」

「さぁ、知っていることを全て話しなさい」

「は、話す!話しますから!」

それから私は素直になった盗賊からアジトや仲間の情報、その他、知っていることを全て聞き出した。

その後、数人の盗賊に同じことを繰り返して情報の裏を取った私は、アジトに居る盗賊を狩るためにミーシャを連れて森へ入っていくのだった。

## 尋問される盗賊達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 襲撃される盗賊達

森に入りミーシャと共に走る。

盗賊から聞き出した情報によると、この森の奥に洞窟があり、そこをアジトにしているらしい。

残りの盗賊は15人。

囚われている人は居ない……………今は。

私が無言でスツと手を上げると、ミーシャは立ち止まり素早く木陰に身を隠した。

「ミーシャは此処で待機、村の方から笛の音が聞こえないか注意していて」

「はい」

私が身を隠していた木の裏から顔を覗かせると、洞窟の前に2人の盗賊が暇そうに見張りをしていた。

1人は座り込み、もう1人は岩にもたれ掛かり雑談に興じている。

彼らは見張りの意味を知っているのかしら？

「アイス・アロー【氷矢】」

瞬時に作り出した氷の矢は岩にもたれている盗賊の頭を射抜く。

「え」

「まずは2人」



仲間の死に啞然と口を開ける間抜けに肉薄すると、フリーユゲルを一閃し、首を斬り落とした。

「……………」

少し様子を窺うが、異変を察知して様子を見に来る者はいない。私はそれを確認して洞窟の中へと踏み入った。

見たところ、入り口付近は自然の洞窟のように見えるが、少し進むと明らかに人の手が入っていることがわかった。

だがこの盗賊団が此処に居座ってからそんなに時間は経っていない。

せいぜい洞窟に扉をつけたり燭台を置いてある程度か。

足音を立てないようにそっと進むと、前方の曲がり角から人の気配が近づいてきていた。

洞窟の端に屈んで息を殺す私の前を、盗賊が2人入り口に向かって歩いていく。

慌てた様子などはないので見張りを殺したことに気付かれたわけではないわね。

多分、見張りの交代か。

「かひっ」

「へ？」

片方の盗賊の口を背後から塞ぎ、ナイフで首の頸動脈を斬り、目を丸くするもう1人の顎から短剣を突き上げた。

「4人」

2人を殺し更に進むと壁につけられた粗末な扉があった。そつと開くと5人の盗賊が卓を囲んで酒を飲みながらカードに興じていた。

「だああー！また俺の負けかよ」

「はっはっは、悪いな」

「へへ、今出ている奴らが女を連れて戻ったらお前は見張りだぜ」

「ぐひひ、久しぶりの女だからな。楽しませてもらうぜ」

「……………なあ、なんか寒くねえか？」

「ん？そう言えば……………」

「寒ー！なんだ？どうなってるんだ？」

「と、とにかく外へ……………」

ベリー！！

卓を囲んでいた盗賊の1人が立ち上がるが、その両腕は机に残したままだった。

「うわああああー！！！」

「な、なん……………何が……………」

「ひっ！あ……………」

ガシャンー！！

悲鳴を上げる盗賊の1人が脚をもつれさせて倒れ、粉々に碎け散った。

「ひっ、あ、あ……………」

「う、き……………」

「……………」

残りの盗賊も部屋ごと凍り付き、次第に動かなくなった。

「これで9人」

扉から離れ、アジトを探索すると、今度は稚拙な牢を見つけた。情報通り囚われている人は居ない。

人は居ないが、20歳くらいの女性の遺体が放置されていた。

「少し腐敗が始まっているわね。死後10日ほどって感じが」

遺体を調べていると牢につながる扉が開き、4人の盗賊が入ってきた。

手には板を持っていることから女性の遺体を始末しに来たのだろう。

「な、なんだお前は！」

「侵入者だあば」

「うわあ！」

「このアマー！」

叫ぼうとした盗賊の喉にナイフを投擲し喉を潰し、驚く1人と剣を抜こうとする1人を斬る。

「クソ！ぐえっ！」

残った1人の喉を掴み壁に叩きつける。

盗賊はなんとか首を絞めている手を外そうとするが、魔力で強化した私の手を外すことはできず、そのまま喉を握りつぶした。

「……13人」

盗賊達が出てきた扉を開けるともう1つの扉があった。隙間から中を覗くと男が2人。

1人は酒を飲み、もう1人はハンモックで眠っている。

扉を蹴破った私は、酒で満たされた盃を持ったまま啞然とする盗賊に剣を振る。

「【空閃】」

相手との距離は5メートルほどか。

それ程の距離を【スキル】によって作られた魔力の刃が走ると、盃を持った盗賊と眠っている盗賊を纏めて両断した。

「15……これで最後ね」

## 襲撃される盗賊達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 立ち去る者達

盗賊団を壊滅させた後、私は数日掛けて村の周囲に魔法で防壁と見張り台を作った。

その後は湖の水がアクアクローラーの卵の育成条件に合うか調査し、村長を始めとした村の有力者と契約の確認をしたりと忙しく過ごした。

そして村に着いて数週間、諸々の用事を済ませた私とミーシャは馬車に乗り込み、帰路に就こうとしていた。

「村長殿、お世話になりましたわ」

「こちらこそですよ」

エリーさん達が来てくれなければ今頃は村は盗賊共に蹂躪されておったじやろう」

「村の窮地に間に合って良かったですわ」

帝都に戻りましたら部下と防衛用の戦力を送りますのでよろしく願います。

また、お会いしましょう」

「はい、また」

私は村長と握手をした後、ミーシャに声を掛けて馬車を走らせ始めたのだった。

「いい加減にせんか！！！」

ブラート王の怒声が執務室に響き、文官達が身をすくませて息を殺していた。

怒りを向けられたフリードは不貞腐れた様子を隠すことができていない。

「お前の案は政策とは言わん！ただの絵空事だ！」

「父上は文官共の言いなりではありませんか！私に任せてくだされば税収も上がります！」

「その結果、民心が離れると何故分からん！」

もつ良い！お前は部屋に戻れ！」

フリードはギリリと奥歯を噛み締めて執務室を出ていった。

その夜、ブラート王は自室で酒を呷りながら溜息を吐き出した。対面には宰相であるジークが同じく盃を手にしている。

「全く、あやつは何故あも傲慢なのだ」

「フリード殿下の案は確かに数字の上では有用に見えますが、下の者の感情を計算に入れておりません」

「先の紛争の罰として謹慎させていたが全く反省している様子もない。」

早々にエリザベートを連れ戻したいが……」

「エリザベートの居場所についてはいくつか予想が立っています。しかし、今は人を送る余裕すらありませんからね」

ハルドリア王国は現在属国との関係の修復に加えて、戦帰りの口ベルトが引き起こした事件による治安の悪化への対処で、非常に逼迫しておりエリザベートの搜索は後回しにされていた。

「陛下……フリード殿下のことなのですが……………」

「どうした、お前が言い淀むとは珍しい。

構わないから言ってみろ」

「……いえ、コレは宰相として口にすることはできません。

なので……友の言葉として聞いてほしい」

「……わかった」

「では……ブラート、フリード殿下はこのままではダメだ。殿下にこの国を任せれば、そう遠くないうちに取り返しの付かないことをやらかさだろっ」

「……………」

「お前が王家の雷の魔力を色濃く継いでいるフリードに期待しているのは知っている。

だがお前には王として、この国の為に正しい判断をする義務があるはずだ」

「……………そうか」

「ああ」

「決断せねばならない……………か」

「……………ああ」

王城の一室で王と宰相である2人は、友人として盃を交わすのだった。



立派な門を抜けるとザワザワと賑わう大通りが目に入った。  
先日立ち寄った領都にも負けぬほどの賑わいだ。

「やあ、兄さん。冒険者かい？」

「ああ、公国に来たのは初めてなんだが随分と活気があるな」

「まあな、でもこの街も昔は寂れた田舎の漁村だったらしいぜ」

「そうなのか？」

「今じゃあアクアシルクの一大生産地として有名だがな」

「アクアシルク？」

「おうよ。まるで水のような肌触りの高級生地さ。兄さんもどうだい、お土産に？」

故郷の恋人にプレゼントすれば喜ぶぞ？」

「ほう？でも高いんだろ？」

「いやいや、このハンカチくらいなら平民でも手が届くさ」

こうして今日も商売熱心な店主はアクアシルク製のハンカチを熱心にアピールするのだった。

ハルドリア公国 サージャス地方  
ミリスタの街の昼下がりの一コマ

## 立ち去る者達（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 動揺と焦り

馬車の御者をミーシャと交代した私は、幌の中で休んでいた。

ガナの村を経由し訪れたミリスタの村で、アクアシルク生産の準備を整え、ようやく帝都に戻ってきた。

実に数ヶ月もの旅だったが、帝都で少し雑務を片付けた後には、レブリック伯爵領の領都にも顔を出さなければならぬ。

事業が拡大し、影響力や収入も格段に上がっているが、その分私の仕事も倍増している状況だ。

そろそろ実務を任せられる人間を増やさないと……。

そう考えていた時、御者台のミーシャが戸惑うように声を掛けてきた。

「あの……エリー様、少し良いでしょうか？」

「ん？どうしたの？」

「はい……その、帝都の様子が少しおかしい気がするのですが……」

「帝都が？」

幌をから出てミーシャの隣に座ると、遠くに見える帝都の門を視界に捉えた。

「……………変ね」

帝都は当然この帝国の最大の都市だ。

本来なら帝都の門には出入りの順番を待つ商人や冒険者などが列を作っている光景が目映るはずだ。

しかし、帝都の前には数台の馬車があるだけで、その上、昼間はいつも開いているはずの大きな門は閉じられている。

見ていると、門の前で衛兵が馬車の者達と何かを話すと、一台の馬車を残して他の馬車は進路を変えて帝都から離れていった。残った馬車は僅かに開かれた門から帝都へ入っていく。

「何かあったんでしょうか？」

「それは間違いないわね。」

ミーシャ、少し急がせて頂戴」

「はい！」

ミーシャが馬に鞭を入れ帝都への僅かな距離を駆けていった。

「止まれ！」

帝都の前まで来ると、衛兵が私達の馬車を止めた。

「何かあったのですか？」

ミーシャが問うと衛兵は深刻な顔で頷いた。

「君達は帝都の住人か？」

「私達はトレートル商会の商人ですわ」

私は商業ギルドのギルドカードを見せる。

「そうか……現在、帝都では原因不明の病が流行している。

疫病の可能性があるため、帝都への出入りが制限されている状況だ。

帝都に拠点がある商人ならば入ることはできるが、しばらくは帝都から出ることはできなくなる」

「疫病」

「あくまで、その可能性があるという段階だが、既にかなりの被害が出ているのが現状だ。どうする？帝都に入るか？」

「ええ、入るわ。ミーシャは……」

「私も行きます」

「……そう」

私はミーシャの頭を撫でながら衛兵が差し出した確認書類にサインして帝都へ入っていった。

帝都の中は静まりかえっていて、普段の活気が嘘のようだ。

貴族街に近いトレートル商会の拠点でもある私の屋敷に到着すると、私達は急いで状況を確認するためにミレイを探した。

初めに会ったのは最近雇ったメイドだった。

彼女は水の入った桶を抱えて小走りで廊下を歩いていた。

「あ！エリー様！お帰りになられたのですね」

「ええ、ミレイは何処かしら？」

「それが……」

「ミレイ」

私がノックも忘れて部屋に飛び込むと、ベッドの上でミレイが苦しそうに荒い呼吸を繰り返していた。

隣のベッドには同じく眠るルノアの姿が有る。

「ミレイー！ミレイー！」

私はベッドに駆け寄りミレイに声を掛けるが、反応は返ってこない。

「エリー様、落ち着いてください」

「でもミーシャ！」

「エリー様！此処ではミレイ様とルノア様のお体に障ります！」

「……………そ、そうね。ええ、ありがとう、ミーシャ」

私とミーシャは部屋を移して不在の間の報告を受けた。

あの部屋に居たミレイとルノア以外にも病で倒れている商会員やその家族も多いらしい。

「それで帝国の対応は？」

「はい、帝都全域に外出を控えるようにお達しが出ています。」

また、特に病人が多いこの辺りの地区は原則外出禁止。

そして、帝国から配給される食べ物と水以外を口しないようにとのことですよ。

「食べ物と水ですか？」

「疫病の中には食べ物や水を触媒に感染する物があると考えられているのよ。」

その他には動物や悪い空気が原因とする説もあるわね」

「なるほど、動物と空気は直ぐにはどうにもできませんからね」

「実際、帝国から食べ物や水が配給され始めてからは感染者は減っているようです」

「そう、ご苦労様。仕事に戻って頂戴」

「はい、失礼します」

報告を受けた後、私は溜まっていた執務を処理しながら打開策を考えていた。

しかし、焦りからか、何も思いつかない。

帝都では既に死者も多く出ているらしい。

このままではミレイヤルノアも……。

「くっ！」

手にしていた万年筆に罅が入り、私は自分の動揺に気が付いた。

「ダメね」

ゆっくりと息を吐き出して心を落ち着け、新しい万年筆を取り出そうとした時、執務室にノックの音が飛び込み、入室を許可するとミーシャが顔を覗かせた。

「エリー様、お客様が来られております」

「お客？」

「こんな時に？」

「はい、商業ギルドの使いの方です」

## 動揺と焦り（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## 招集と要人

「商業ギルドから？」

「はい」

まず間違いなくこの病の関係か……。

「通して頂戴」

それから幾許もしないうちにミーシャが商業ギルドの制服を着た男を連れてきた。

「失礼します、レイス会長。」

商業ギルドグラントマスター、アルバート・グイードより書状を預かって参りました」

「拝見するわ」

私は使いの職員から封書を受け取った。

封蝋には商業ギルドの印が押されており、コレが正式な書状であることを示していた。

机からペーパーナイフを取り開封し、書状を読む。

「コレは……緊急招集命令ね」

基本的にギルドに所属していても、そのギルドから何かを一方的に命令されることはない。

ギルドはあくまで互助組織であり、所属するギルドメンバーと運

嘗メンバーは対等であることが前提とされている。

しかし、そこにはいくつかの例外が存在する。

災害などの国家の非常事態にはいくつかの条件をクリアすることで、ギルドは所属するメンバーへの指揮権限を得ることが可能なのだ。

正当な理由なく、この命令を拒否すれば、罰金や除名などの罰則もある。

グランドマスターからの書状にはその条件が全て満たされている。流石に無視はできないわね。

「ミーシャ、呼び出しを受けたから出るわよ」

「は、はい！」

「表に馬車を用意しております」

私はミーシャを伴ってギルド職員が用意してくれた馬車に乗り込んだ。

「いったい何の用事でしょうか？」

「多分、この病についてでしょうね。」

私は水魔法が使えるから、その関係での招集かも知れないわ」

「なるほど……あれ？商業ギルドを通り過ぎましたよ？」

「本当ね？この先は………臣民議会かしら？」

臣民議会は平民のみで構成される議員が国に対する嘆願などを話し合い申す組織だ。

その議場はギルドなどが集まる区域の中心にある。

馬車は予想通り臣民議会の議場で停まり、私達は1番奥の会議室へ案内された。

「此処からはレイス会長のみご入室をお願いします」

「分かったわ。ミーシャは待っていて」

「はい」

私は扉を開き中へと踏み込んだ。

「  
」

部屋の中にいたのは錚々たる面々だった。

私を呼び出した商業ギルドのグランドマスター、グイード伯爵、

冒険者ギルドのギルドマスターなどの各ギルドの代表や臣民議会の議長、更に帝国の官僚クラスの貴族。

末席にはAランク冒険者、エルザの姿もある。

そして入室した私の正面、最上位者の席に座る方を私は知っていた。

ユーティア帝国の皇太子、オーキスト・ユーティア殿下だ。

オーキスト殿下とは数回、夜会で挨拶したことがある。

向こうも私を認識しているはずだ。

勿論、相手は既に成人して政治に関わる皇族だ。亡命した私のことは知っているだろうが、どういう対応をされるのか……。

「よく来てくれた。トレートル商会の商会長、エリー・レイスだな。

私はユーティア帝国皇太子、オーキスト・ユーティアだ」

なるほど、私達はお互いに自己紹介をする間柄という感じで通すつもりか……。

「お初に御目に掛かります、殿下。」

トレートル商会の商会長を務めております、エリー・レイスと申します」

「うむ、不躰に呼び出して済まないな。」

「取り敢えず座りたまえ」

「失礼致します」

空いていたエルザの隣に腰を下ろすと、オーキスト殿下が仕切り、話を始めた。

「さて、レイス会長。」

今日、君に来てもらった理由なのだが……うむ、状況も状況なので単刀直入に話そう。

君の神器は大量の物資を収納できると聞いたが、本当か？」

「はい、相違ありません」

【強欲の魔導書】のことね。

まあ、紛争であれだけおおっぴらに使えば情報も伝わるか。

私の答えにゆっくりと頷くと、オーキスト殿下は事情を話し始めた。

## 招集と要人（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 依頼と巨影（前書き）

前話でエルザの信用に関してご指摘を頂き、思案の結果、エリーの神器の情報元を修正させた頂きました。

### 修正箇所

『神器の情報をエルザが話した』

『先の紛争でおおっぴらに使った為、情報が流れた』

ご迷惑をお掛け致します。

m ( ) m

## 依頼と巨影

「今、帝都を襲っている緊急事態については知っているな？」

「はい、疫病の可能性がある病だと」

「うむ、だが真実は違う」

「え」

オーキスト殿下は他言無用だ、と前置きする。

「この病の原因は地下上水道に出現したキングポイズンスライムの変異種だ」

「キングポイズンスライム……それも変異種ですか」

スライムは何処にでもいる弱い魔物だ。

しかし、冥界に生息する原種であるウーズ・オリジンがそうであるように、決して油断して良い魔物ではない。

環境への適応力が非常に高く、あらゆる場所でその場に適した形に進化する魔物なのだ。

更に多くの個体が集まると合体し、ビッグスライムやキングスライムと呼ばれるようになる。

ポイズンスライムは毒に適応したスライムで、自ら猛毒を生成することができるようになった上位種だ。

更にキングともなれば人を死に至らしめるに十分な毒を持っているだろう。

「キングポイズンスライム自体は既に上級冒険者によって討伐されているのだが、かなりの数の分体に分裂していてな。」

現在は信頼できる冒険者に討伐を任せていると共に、光属性や水属性持ちの魔法使いを総動員して水の浄化を行なっているところだ。スライムとは言え、上位種が帝都の中に現れたと知ればパニックになる。

幸い、病の広がりには抑えられているので分体の討伐が済むまで他言はしないでくれ」

そこで一旦言葉を切ったオーキスト殿下は紅茶で口を湿らせて本題に入る。

「それで君に来てもらった理由なのだが……君にはダンジョンへ行つてもらいたい」

「……詳しくお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「勿論だ。」

ダンジョンに行く目的は解毒薬に必要な触媒となる鉱石を入手するためだ。

ただのキングポイズンスライムなら珍しくない故、解毒薬は十分な備蓄があるのだが、調査の結果、変異種の毒にはエマヤ鉱石を触媒にして魔力を込めた魔力水が必要らしいのだ」

「エマヤ鉱石……鍛冶で多少使われる鉱石ですね。ですが……」

「ああ、より安価で効果の高い鉱石があるため、備蓄などは僅かしかない。

この辺りで大量に入手するには帝都から数日の距離にあるダンジョンくらいしかない。

だが、上級冒険者はポイズンスライムの分体の処理に掛かりきりで、危険なダンジョンで下層まで降りて鉱石を採取して戻るには人手が足りない。

そこで議論の際、君の名が挙がった。

高い戦闘力があり、大量の鉱石を運搬できる人材だとな」

「つまりダンジョンに行つてエマヤ鉱石を採取してくるといふ依頼



ですか？」

「そうだ。成功の暁には褒賞を約束する。

勿論、ダンジョンは危険で命の保証は無い。

君がこの依頼を拒否しても罰則などは無いと明言しよう」

私は瞑目して情報を整理する。

「状況は理解しました。

その依頼を受けるに当たり、2つ条件がございます」

「聞こう」

「1つ目は完成した解毒薬を私の商会の関係者に優先的に回していただきたい」

「うむ、構わない。そこに居るエルザも同様の条件で依頼を受けてもらったからな」

私がエルザに視線を向けると、彼女はマルティとサリナが寝込んでいるんだ、と言った。

「それで2つ目の条件とは？」

「はい、採取したエマヤ鉱石の所有権は全て私にある、と魔法契約ギアススクロ書を使い明記していただきたいのです」

「レイス会長」

グイード伯爵が鋭い視線を向けてくるが、オーキスト殿下がそれを片手を上げて遮る。

「理由を聞こう」

「理由は私の神器の制限による物です。

多くの物資を収納することのできる私の神器

ケリモア・マモン

【強欲の魔導書】に収納できるのは、私に所有権がある物だけなの

です。

その条件をクリアするために採取したエマヤ鉱石の所有権を明確にしておく必要があるのです。勿論、採取したエマヤ鉱石は無償で帝国へ寄付致します」

「なるほど、理解した。直ぐに用意させよう」

「ありがとうございます」

グイード伯爵が用意してくれた魔法契約書で契約を交わした私は、早速準備のため、ミーシャを連れて屋敷へと戻った。

「ダンジョンですか……私はよく知らないのですが、危険なのではありませんか？」

「危険でしょうね。」

でも、ダンジョンでエマヤ鉱石を手に入れないとミレイヤルノアが危ないのよ。行くしか無いわ」

「そうですね……」

ミーシャは何処か納得のいかないような顔をしていた。

「オーキスト殿下のやり方に納得がいかないのね？」

「……はい、拒否できるとは言っても、コレではまるでミレイ様やルノア様の命を盾にエリー様を危険なダンジョンに向かわせているようではありませんか？」

「そうですね。当然そういう計算の上で私に依頼したのでしょう」

「そんなっ!」

私は興奮して毛が逆立つミーシャの耳を優しく撫でた。

「為政者とはそういうものよ。」

聖人君子の為政者はただの無能、国を守るためならあらゆるモノ

を利用する者が名君と呼ばれるわ。

それに徴用権を使われれば、この国の臣民である私は従わなければならぬ。

拒否権を与えられていただけ配慮されているわ」

まあ、もし拒否したら別の手を使ったのでしょうけどね。

それこそ徴用権を行使して従わなければ罪人として捕らえると脅すこともできるわけだし。

ならば此処は協力して恩を売っておくべきだ。

そもそも、ミレイ達を助けるために解毒薬は必要だしね。

「ミーシャは此処に残ってミレイ達をお願いね」

「ですが……」

「ダンジョンは本当に危険なのよ。」

いくら私でもミーシャを守りながらでは生還できないかも知れない。

大丈夫よ。一流冒険者であるエルザさんも一緒だからね」

「はい……」

心配そうにするミーシャを宥めながら手早く準備を済ませた私は、帝都の門へと向かった。

今回の移動に関しては既に手配されているらしい。

私はダンジョン内で必要な消耗品などを商会の倉庫から引っ張り出してきた。

これに関しては後に経費として帝国に請求することになっている。

「エリー殿」

「エルザさん」

門の近くで馬車を降りた私は、そこでエルザと合流した。

エルザと軽く話し、今後は仲間となるのでお互いに敬称などは無しで、などと話しているうちに門へと到着した。

既に話を通っているようで、私とエルザは速やかに外へと通される。

そこにはオーキスト殿下やグイード伯爵など、あの場に居た人達が何人か集まっていた。

「移動手段は用意されていると聞いたんだがな？」

エルザがそう言いながら辺りを見回すが、荷運び用の馬車くらいしか無く、長距離移動ができるような幌馬車などは見当たらない。

「エルザ、わからないなら聞いてみましょう」

「そうだな」

私達は近くに居たグイード伯爵と冒険者ギルドのギルドマスター、セルジオへと声を掛けた。

「グイード卿、セルジオ殿、移動手段というのはどれなのでしょうか？」

「それと私達以外にも冒険者を雇っていると聞いたのだが？」

「ああ、そうだったな。お前達以外にも1人、冒険者を用意している」

「1人、ですか？」

「そうだ。1人だけだが、安心しろ。」

いずれSランクにも届くと言われている一流だ」

まるで、とっておきのプレゼントを取り出すようにセルジオはニヤリと笑った。

Sランクとは一流と言われるAランク冒険者すら凌駕する超一流、英雄の領域に到達した者達だ。

現在Sランク冒険者は7人しか存在していない。

その誰もが1人で一国の命運すら左右するほどの実力を持つ。

そんな存在に至る片鱗を持つ冒険者となれば、流石に不足とは言えないか。

「それで、その人は何処に？」

「ああ、来たようだが」

セルジオがそう言うが、辺りにそれらしい人影はない。

私とエルザが首を傾げていると、突然辺りが暗くなった。

いや、私達の頭上に巨大な影が差したのだ。

「な！」

「あれは」

そして私達に叩きつけられる突風は、その影の主が巻き起こした羽ばたきによるものだった。

「サンダーバード」

人間の数倍はある巨体を持つ大怪鳥、雷雲を呼び、単体ならワイバーンすら近寄らないほどの強力な魔物であるサンダーバードが帝都の門の側に舞い降りたのだ。

そのサンダーバードの足にはタイマーが従魔に付ける従魔の証がつけられており、更にその足には大きな木箱が驚掴みにされている。

サンダーバードは、その木箱を地面に下ろすと私達の近くに着陸した。

そしてその背中から飛び降りた小さな人影が1つ。

「お待ちせしました。帝都近辺の街に備蓄されていたエマヤ鉱石を掻き集めてきましたよ。

多少の足しにはなるでしょう」

彼女の背丈は私の胸辺りまでしかなく、腰まである長い髪と、活かに満ちた瞳は夜空のような黒。

小さな身体に不釣り合いな巨大な戦斧を背負った少女は、数ヶ月前、商業ギルドで会った帝国商業ギルド評議会の評議委員の1人だった。

セルジオが少女の背を押し私達の正面に連れてくる。

「紹介しよう。彼女が今回、君達と共にダンジョンに向かってもらうAランク冒険者《漆黒》ユウカ・クスノキだ」

セルジオに紹介された少女は友好的な笑みを浮かべて私とエルザに握手を求めて手を差し出してきた。

「ユウカ・クスノキです。この国の人には違和感のある名前ですから、ユウとでも呼んでください。よろしく願います」

## 依頼と巨影（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 飛翔と絶景

《漆黑》 ユウカ・クスノキ。

数年前、ふらりと帝国に訪れた東方の島国出身の薬師であり、冒険者だ。

冒険者となり数年で瞬く間に功績を積み上げ、Aランクとなる。また薬師としての腕も優れており、皇帝陛下からも直接依頼を受けることもあるらしい。

数ヶ月前、帝国商業ギルド評議会で初めて顔を見た時にも思ったが、改めて目の前で見てもそれほどの実力者には見えない。

いや、確かにその立ち居振る舞いから、そこいらの酒場で見かける自称英雄などは比べ物にならない強さを持つことは分かるが、見た目はどう見ても12歳前後の少女にしか見えないのだ。

東方の島国や南大陸の人々は、他の大陸に住む人達よりも小柄で顔立ちも彫りが浅い。

それを加味してもユウは小柄だった。

私とエルザはユウと握手を交わし、早速今後の打ち合わせを行う。

「食料などの物資はエリーさんが用意してくれているのですよね？  
なら、今日はダンジョンの近くの町へ移動して、明日の朝からダンジョンに潜るのが良いと思います」

「そうね。でもダンジョンまで数日掛かると聞いたけど？」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。」

オリオンに運んでもらいますから、陽が暮れる前には到着します

「よ」



ユウはそう言って傍の大怪鳥の翼を撫でた。

「そのサンダーバードはユウの従魔なのか？」

「はい、わたしが卵から孵して育てたんです。名前はオリオンですよ」

それからいくつか確認した後、ユウが運んできた木箱をオーキスト殿下へ引き渡し、ダンジョンがあるという町へと出発することになった。

ユウに続いてオリオンの背に乗った。

馬よりもずっと視線が高く、背中の毛はフサフサで意外と乗り心地は悪くない。

毛足の長い高級絨毯のようだ。

私とエルザがどうにか身を落ち着けたのを見計らい、手綱を握るユウが振り返った。

「エリーさん、エルザさん、コレを身に着けてください」

ユウが差し出したのはクリップのような物だった。

そのクリップからは紐が伸びていて、ユウが握る手綱へと繋がっている。

「この手綱は空間魔法が付与されたマジックアイテムなんです。

この手綱を握るか、そのピンを身につけると、今居る位置で空間を固定することができます。詳しい理屈はわかりませんが、そうしておけば空中で投げ出されたりはしないので安全のため、着けてください」

「分かったわ」

私達はユウから受け取ったクリップ型のピンを服の端にしっかりと留めた。

「では行きますよ」

ユウが手綱で合図を送ると、オリオンがその巨大な翼を広げ羽ばたき始める。

周囲に突風が吹き荒れるが、背中の子達の周りは静かなものだ。多分、オリオンが風属性魔法で干渉しているのだろう。

サンダーバードが雷雲を呼び、雷を纏うのは風属性魔法の一種だという論文を読んだことがある。

やがてフワリとした浮遊感を覚え、オリオンは帝都の前で旋回しながらグングンと高度を上げていった。

十分に高度が上がったところで一度、大きく羽ばたくと、ダンジョンがある町を目指して飛び始めた。

初めは普通に生きていてまず、経験することの無い高さで顔を引き攣らせていた私とエルザだったが、慣れてくるにつれ周囲の景色を見る余裕が生まれてきた。

雲に近い高さから見る大地は、遮る物など無く、遙か遠くまでを見渡すことができた。

ずっと遠くに見えるのはレブリック伯爵領の領都だ。

その更に先に微かに見えるのはハルドリア王国の王城。

森からはオリオンの羽ばたきに驚いた鳥達が群を成して飛び立ち、

明後日の方へ逃げていく。

中天を過ぎた日の光が河の水に反射して光の帯となり、その中をケルピーの群れが悠々と泳いでいる。

「これは……凄いな……」

「……ええ」

私とエルザは帝都の逼迫した状況をしばし忘れて、その美しく雄大で、神秘的な光景に目を奪われた。

巨鳥の背に乗り空を征く、そんな御伽噺か英雄叙事詩の一節のような時間が暫く、天の光が翳りを見せ始めた頃、眼下に小さく町が見えてきた。

オリオンはその町を目指して高度を下げっていく。

ゆっくりと旋回しながら数時間振りに地に降り立ったのだが……

……私達を乗せたオリオンは武器を構えた町の衛兵達に包囲されていた。

「ユウ……これは……」

「あゝ、ま、まあ、初めて訪れる場所ではよくあることですよ。私はコレで4回目です」

「……そう」

どうやら他に3つ、迷惑を被った町があるらしい。

私は諦めたように溜息を吐き出し、エルザは苦笑いを浮かべながら『説明してくる』と言って、決死の形相でサンダーバードと対峙

する衛兵隊の下へ向かうのだった。

## 飛翔と絶景（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 定番と鎮圧

エルザの取りなしにより、無事ダンジョンに1番近いドルドの町に入ることができた。

するとオリオンは何処かに飛び立ってしまった。

ユウに聞くと、大き過ぎて他の従魔のように牧場で預かってもらうなどにはできないらしい。

「帝都なら特別に契約している牧場で預かってもらえるのですが、他所ではそうもいきませんからね。」

森の奥でなるべく目立たないように隠れて、呼び出す時はこの笛を使って来てもらうようにしているんです」

そう言ってユウは手の平に収まるほどの小さな笛を見せてくれた。どうやらマジックアイテムらしい。

「従魔の証を着けていますから大丈夫でしょうけど、一応、冒険者ギルドに話を通しておく必要がありますね」

「そうだな。こんな町の近くでサンダーバードが見つかったら騒ぎになるだろう。」

それにダンジョンの情報も買わないと」「ダンジョンの情報?」

私が疑問を口にすると、エルザが説明してくれる。

「私もあまりダンジョン探索の経験はないが、確かダンジョンの情報は冒険者ギルドで扱っているはずだ。」

珍しい鉱石の鉱脈や希少な薬草の群生地などの情報は高く売れる。まあ、大抵は独占するために情報をギルドに売ったりはしないものだから主に売られているのは上層部の地図や出現する魔物、安全地帯などの情報だな」

「そうですね。でもエマヤ鉱石はあまり需要が無い鉱石ですから鉱脈の情報があるかも知れません」

「へえ、そういうものなのね」

ここは本業である2人のプランに従うのが吉よね。

町の門から真っ直ぐ延びる大通りから見える冒険者ギルドの建物に入った。

木造2階建ての建物だ。

ギルドの中は入り口から見て正面に受付があり、右側の壁にはいくつもの依頼が書かれた紙が貼り付けられたクエストボード、左側は酒場になっており、依頼を終えた冒険者や依頼を受けずに休日とした冒険者がガヤガヤと騒がしく酒を飲んでいる。

物珍しげにギルドの中を見ながら前を歩く2人について受付に行こうとすると、酒で顔を赤く染めた2人の男達が私達の前を塞いだ。熊系の獣人の男と人族の男だ。

「ヒック、なんだあ？此処は冒険者ギルドだぜ。お嬢ちゃん達が来るような場所じゃねえよ」

「ヒヒヒ、なあ俺たちの相手をしてくれよ。

楽しませてやるからよお」

「本当にこんな冒険者がいるのね」

私は感心していた。

前にルノアが読んでいた冒険小説でも似たようなシーンがあったのだ。

ルノアによると、絡んできた不良冒険者を主人公が叩きのめすのが定番らしい。

私達の先頭にいたユウが酔っ払いをあしらうように手を振りながら、ぞんざいに追い払おうとする。

「はいはい、わたし達は急いでいますから。

わたしが魅力的だとは言えナンパは……」

「あん？なんだチビ。ガキはさっさと帰って寝ろ」

「ほら退け。あと10年したら出直してこい」

酔っ払い2人はユウを無視して私とエルザの方に寄ってくる。

ユウはピシッと固まり動かなくなっている。

「ねえ、エルザ。この場合、冒険者的にはどういつ対応をするべきなの？」

ちなみに貴族の世界なら波風立てぬようにあしらい、後日それを弱味にひたすら突き、あらゆる意味で吸い上げる。

「冒険者的には叩き潰して構わないな。この状況で穩便に済ませようとするとは舐められる」

「なるほど。小説と同じね」

なら冒険者流で対応してみようかしら？

「なあ、姉えちゃんよお、依頼なら俺たちが受けてやるぜ？」



俺たちの宿に来てくれるなら依頼料もサービスしてやるからよ」「  
「まともに依頼しようとする和高いぜ、俺達」

私は絡んできた酔っ払い冒険者が身に着けている防具や武器の品質、傷、手入れの具合などを軽く見て、蠅でも追い払うようにヒラヒラと手を振った。

「悪いけど貴方達では力不足よ。

雇ってほしいならもつと鍛えて出直しなさい」

「なっ！なんだと、このアマあ！！」

熊獣人の男が赤い顔を更に赤くして拳を振り上げる。

様子を窺っていた冒険者や、騒動に気付いた受付嬢に呼び出され、仲裁しようとして出てきた男性職員が慌てて駆け寄ろうとするが、それよりも早く私の拳が熊獣人の胸鎧に叩き込まれた。

身軽に動くため、そんなに厚みはない胸鎧だが、それでも鉄製だ。それが私の拳で砕け、2メートルを超える巨漢が数メートル宙を飛び、いくつかのテーブルを薙ぎ倒して止まった。

勿論、地の腕力などではなく、瞬間的に魔法で身体強化を掛けた結果だが、無詠唱かつ、体の一部のみの瞬間的な身体強化は高等技術だ。

私が殴られると思っていた周囲の人々は皆、啞然と黙り込む。

なるほど、確かにルノアが言っていた通り、なかなか爽快な気分だ。

無事、解毒できたらルノアに教えてあげよう。

「て、てめえ！！！」

仲間の人族の男が腰の剣を手にする。

だが、その剣は鞘に納められたままだ。

もし抜剣していれば、殺されても罪に問えない状況だが、流石に酔っ払っていてもギリギリのラインを越えることはなかったようだ。

男は剣を大きく後ろに構えるが、その剣がピタリと動かなくなる。

「あ？」

男が振り返ると満面の笑みを浮かべたユウが、鞘に納められた男の剣を掴んでいた。

バキッ！

丈夫な革で作られた鞘ごと、鋼のショートソードを小枝を折るように握り折ったユウは、男の胸ぐらを掴むと、力任せに床へと叩きつけた。

木製の床は砕け、男の上半身は床下へと消える。

「……………わたしの身長は故郷では平均値です！」

そう言ってプリプリ怒るユウだが、私が過去に会ったことがある東方の島国の出身者から察するに、彼女は故郷でもかなり小柄な方だろう。

勿論、そんなことを口に出すつもりは無い。

## 定番と鎮圧（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 情報と驚愕

「い、いらつしゃいませ、本日はどのようなご用でしょうか？」

額から小さな角が生えた魔族の受付嬢が頬を引き攣らせながら尋ねた。

「依頼でダンジョンに潜りたい。

ダンジョンの情報を用意してくれ」

エルザは先程の騒動などまるで無かったかのように落ち着いてギルドカードを差し出した。

「お願いします」

怒っていたユウも機嫌を直し同じくギルドカードを出す。

「」

2人のギルドカードを見た受付嬢が目を見開き、息を呑む。

「どうした？」

「い、いえ！失礼しました！」

慌てて居住まいを正した受付嬢が、チラチラとこちらを見てくる。  
ん、私か？

「私は冒険者じゃないわ、ただの商人よ」

「そ、そうでしたか、すみません」

「あ、依頼人から手紙も預かっています」

ユウが懐から手紙を取り出して、引き攣った笑みを浮かべる受付嬢に手渡した。

「っ  
」

手紙を手に固まる受付嬢。

当然か。

チラリと見えたけど、あの手紙の封蝋は帝室の紋章だ。

普通なら懐から取り出してポンと手渡したりするような物ではない。

「も、申し訳ありませんが、わ、私では対応できませんので、応接室でお待ちください。」

直ぐに上の者に取り次ぎ致します」

受付嬢に案内された応接室は冒険者ギルドのイメージには合わない上等な家具や調度品で整えられていた。

「こんな部屋あつたんだな」

「帝都の冒険者ギルドにもありますよ」

「そうなのか？」

「貴族の依頼人なんかの対応をするための部屋でしょうね」

「ああ、なるほどな」

少しの間の後、ノックと共に初老の男が部屋に入ってきた。

既に全盛期を終えたことは明らかだが、それでもその体が十全に鍛え上げられていることは一目で理解できる。

「待たせたな。ドルドの町の冒険者ギルド、ギルドマスターのブレンだ。」

オーキスト殿下からの手紙は読ませてもらった。

コレがダンジョンの資料だ」

貴族のような迂遠な挨拶などは抜きに単刀直入に本題に入る。その辺りも冒険者流なのだろう。

エルザがブレンから受け取った資料を机に広げながら尋ねる。

「それで、エマヤ鉱石の鉱床の情報はあるのか？」

「ああ、あの鉱石は大した需要はないからな。それにダンジョンで採れる鉱石はミスリルやオリハルコンなどの希少金属以外はあまり人気がないからな」

「人気がない？」

「薬草や魔物素材に比べたら鉱石は重いからな。単価の高い一部の金属以外はあまり採取されないんだ」

「そういうものなのね」

確かに持ち帰れる素材の量には限界がある。

わざわざ重い鉱石を採取する冒険者は少ないのだろう。

「魔物はそう変わった奴は出ないみたいですね」

「そうだな。少々、アンデッドが多いくらいか」

「そうだな。だが最近アンデッド系の魔物が増えているようだ」  
「ほう？」

その後も冒険者の2人を中心に、ギルドマスターからダンジョンの情報を聞き出すのだった。

今日もいつもと同じ1日になるはずだった。

朝の忙しい時間を無難にやり過ごし、午後の仕事を終えた冒険者達の手続きもなんとかこなした頃、早上がりの先輩を送り出した私は、1人で受付の対応を任されていた。

とは言え、これくらいの時間ならそこまで忙しくはない。

そもそも。ここドルドの町はダンジョンのすぐ側にある町なので、依頼も採取依頼や護衛依頼が殆どだ。

今日も日帰りの冒険者は既に戻っており、精算を済ませてギルドに併設された酒場で打ち上げと称して騒いでいる。

いつもと同じ1日だ。

ギイ、と扉を軋ませ、新たな人物が冒険者ギルドへ入ってきた。

珍しい黒髪に黒目の12歳ほどの少女、如何にも冒険者風の赤髪の若い女性、所作の端々に育ちの良さが垣間見える銀髪の女性。

こんな田舎には似つかわしくない華やかな3人組だ。

依頼人かとも思ったが、黒髪の少女と赤髪の女性は慣れた様子で受付へと向かってくる。

もう1人の銀髪の女性は物珍しそうにギルド内を見回していた。

銀髪の女性が依頼人で赤髪の女性が護衛の冒険者、黒髪の少女は冒険者見習いってところか……。

私がそう考えていた時、酒場の方から酔った冒険者が2人、3人組へ絡みだした。

不味い。

あの2人はこの町ではトップクラスのBランク冒険者だ。

腕は良いのだけれど、酒癖と女癖が悪いのでギルドの女性職員や女性冒険者に嫌われている。

他所から来た冒険者や如何にも良いとこのお嬢さんな感じの女性と揉め事を起こされるのは良くない。

私は急いで裏に回ると、元冒険者の男性職員を呼んで表へ戻った。

男性職員が仲裁に入ろうとした時、女性達に絡んでいた熊獣人の冒険者が突然拳を振り上げた。

「……っ！」

私は悲鳴を上げそうになるが、それよりも早く、目の前の大柄な熊獣人の冒険者が銀髪の女性の華奢な拳で吹き飛ばされていった。

「え？」

私が目を丸くしていると、今度は黒髪の少女がもう1人の冒険者を床に叩き付けた。

床は碎け、男の上半身は床下に消える。



「……………うそ」

このギルドの建物はダンジョンの2階層で採れるトレントの木材を魔法で強化した素材で建てられている。

そこいらの石材より余程丈夫なはずだ。

少なくとも少女の腕力でどうこうなる物ではない。

3人組は啞然とする周囲を無視して受付へ……………私の方へとやってくる。

当然か。

今は受付には私しか居ないのだから。

「い、いらつしやいませ、本日はどのようなご用でしょうか？」

「依頼でダンジョンに潜りたい。

ダンジョンの情報を用意してくれ」

赤髪の女性がそう言いながらギルドカードを差し出す。

冒険者としてはごく普通の行動だ。

「お願いしまゝす」

次いで黒髪の少女も同じくギルドカードを受付台に置いた。

「」

私は2人のギルドカードを見て息が止まりそうになった。

そのギルドカードに記されたギルドランクはA。

赤髪の女性だけではなく、黒髪の少女も同じくAランクだった。

それだけではない。

2人の名前の欄には非常に有名な名前が刻まれていた。

『ユウカ・クスノキ』

『エルザ・アーチフィールド』

2人とも異名持ちの冒険者だ。

「どうした？」

「い、いえ！失礼しました！」

ダンジョンが近いとは言え、このドルドの町は田舎だ。

ダンジョンも30階層しかない小さな物。

迷宮都市のように幾つものダンジョンや200階層を超える大迷宮があるわけではない。

つまり、この町にAランクという高ランク冒険者など滅多に現れない。

緊張するなと言うのは無理な話だ。

私はもう1人の銀髪の女性に視線を向ける。

彼女も高ランク冒険者なのだろうか？

それならばあの熊獣人を軽々とあしらったのにも納得が行く。

「私は冒険者じゃないわ、ただの商人よ」

「そ、そうでしたか、すみません」

商人？嘘でしょ？

「あ、依頼人から手紙も預かっています」

オロオロとする私に黒髪の少女……漆黒のユウカが手紙を差し出してきた。

反射的に受け取った私は再び驚愕する。

手紙の封蝋に刻まれた紋章が目に入ったからだ。

これは帝室の紋章。

どう考えても大事だ。

「も、申し訳ありませんが、わ、私では対応できませんので、応接室でお待ちください。」

直ぐに上の者に取り次ぎ致します」

私は3人を応接室（貴族に対応するための一番良い部屋だ）に案内した後、大急ぎでギルドマスターの執務室へ向かうのだった。

## 情報と驚愕（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 忠告と再会

「マスター！ギルドマスター！」

執務室のドアをドンドンと叩くと、ギルドマスターのブレンさんが迷惑そうな顔で扉を開いた。

もう少しで初老に差し掛かる歳だが、体は筋肉に包まれており、老いを感じさせない覇気を感じさせる。

「うるさいぞ、ティナ！」

「た、大変なんですよ！こ、これ……」

私が手紙を差し出すとブレンさんが眉根を寄せる。

「少し落ち着け！それでこいつは……誰が持ってきた？」

「Aランク冒険者の《漆黑》ユウカ氏と《不屈》エルザ氏です。あ、それとやたらと強い女商人さんも一緒でした」

「商人？」

ブレンさんが首を捻りながら手紙を開き、中を読む。

すると、みるみるうちに険しい顔に変わった。

「その3人は何処だ？」

「応接室に通っています」

「わかった。俺が行くからお前は受付に戻れ。あと、馬鹿共が奴らにちよっかいを掛けないように釘を刺しておけ」

「は、はい！」

どうやら余程重大なことが書かれていたようだ。  
基本的にギルドは冒険者同士の揉め事に干渉しない。  
勿論、国の法に触れる様な場合は別だが、喧嘩や因縁くらいなら  
介入はしない。

先程、騒動を止めようとしたのも、彼女達が冒険者だと確証が持  
てなかったからだ。

「厄介事よね……コレ……」

私はなるべく巻き込まれたくないな、と思いながら受付に戻る。  
此処は気合を入れて乗り越えなければ、皇族が関係している何事  
かで問題が起こればギルドの責任問題になるかも知れない。

「皆さん!!」

私は受付のカウンターを『ダン!』と叩きながら、ギルドホール  
や酒場に居る全ての冒険者に聞こえるように声を張る。

両掌がヒリヒリと痛い。

全ての冒険者の視線が私に集まったのを確認して、限界までドス  
を利かせた(つもり)の声で告げる。

「先程の騒動を見ていましたね!彼女達は特別な依頼でこの地を訪  
れたAランク冒険者です!今後、彼女達の行動を妨害することは許  
しません!

問題が起きた場合、冒険者ギルドは一切擁護しません!良いです  
ね!!」

私がそう宣言すると、冒険者達はザワザワと騒ぎ始めた。

「Aランク？嘘だろ？」

「でもBランクがやられたんだぞ」

「あいつらが酔ってただけだろ」

「いや待て……………そうだ！あの赤髪の女！何処かで見た顔だと思っ  
っていたが、あいつ不屈のエルザだ！」

「な マジかよ！」

「じゃあ。一緒に居たのも……………」

「銀髪の方は知らねえけど、黒髪黒目のAランク冒険者って言った  
ら《漆黒》じゃねえか？」

「銀髪の方はさつき商人だと言っていたぞ？」

私はもう一度机を叩き、精一杯怖い（つもり）声で冒険者達に  
言い付ける。

「と・に・か・く！彼女達には手を出さない！数日は大人しく！お  
行儀よく！分かりましたね！！」

「……わ、わかった……………」

ギルドマスターのブレンから情報を聞き出した私達は、今日のと  
ころは宿に泊まり、体を休めることになった。

本音を言えば今すぐダンジョンに向かいたいところだが、目的の  
エマヤ鉱石の鉱床があるのはダンジョンの16階層の奥らしい。

途中の探索などを行わず、真っ直ぐ最短ルートを進んだとしても数日は掛かる道程だ。

疲れたまま無理をするよりは万全の体調で向かうべきだと言うコウとエルザに同意するしか無い。

仲間が倒れているエルザは私と同じ立場であるはずだが、冒険者として培った経験から、そして仲間に対する信頼から、努めて冷静な判断をしようとしていた。

この辺りは見習わなければいけないわね。

「大通りの『黄金色の小麦亭』に行くといい。俺の名前を出せば常時ギルドで確保している部屋を空けてくれるはずだ」

「ありがとう」

「ありがとうございます」

「助かるわ」

私達は口々にギルドマスターにお礼を言って冒険者ギルドを後にした。

黄金色の小麦亭は冒険者ギルドのすぐ近くにあった。

既に辺りは暗くなり、町の所々に篝火が掲げられている時間だが、黄金色の小麦亭では酒や夕食を食べに来た客や泊り客の声で賑やかだった。

「なかなか良さそうな宿だな」

「そうですね。美味しそうな匂いがしますし」

「そうね。ギルドマスターには感謝しなきゃ」

カラン

「いらっしゃい」



私達が扉を開けて宿の中に入ると、受付に居た恰幅の良い中年女性  
性が朗らかに声を上げた。

「冒険者ギルド、ギルドマスターのブレンから紹介を受けたのだが  
……」

「ああ、聞いているよ。さっき使いの人が来たからね。夕食はどう  
する？」

「頂きますわ」

「あいよ。奥の食堂に旦那が居るから好きなもの注文しておくれ」

女将さんに促され、私達は賑やかな声の聞こえる食堂へ足を踏み  
入れた。

食堂では冒険者風の若者や仕事終わりの男達が思い思いに食事と  
酒を楽しんでいた。

カウンターの席に座ろうとすると、食堂の一角から男達の野太い  
歓声が上がった。

「何の騒ぎかしら？」

「飲み比べだろ、よくあることだ」

「でもやけに盛り上がってますね」

私達は騒がしい一角に視線を向ける。

「すげーぞ！4人抜きだ！」

「おい、誰か挑戦しろよ」

「無理だって、勝てねーよ」

どうやらかなりのウワバミがいるようね。

「あっはっはっは！だらしな奴らッスね！  
私はまだまだ行けるッスよ！」

何処かで聞いたことのある声ね。

そう思った瞬間、人垣の間から肩口で切り揃えられた金糸のよう  
な髪を持つ少女と目が合った。

「あれ？エリーさんじゃないッスか！  
お久しぶりッスね。仕事ッスか？」

修道服を着た少女が破顔して此方に手を振った後、酒瓶を片手に  
機嫌良さそうにスキップで駆け寄ってきた。

「……………久しぶりね、シスター・ティード」

## 忠告と再会（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 勧誘と薬酒

私はシスター・ティーダを2人に紹介し、彼女に帝都の現状とこの町に来た目的を簡単に説明した。

「た、大変じゃないツスカ!」

「ええ、だから私達は明日、朝一でダンジョンに向かうわ」

「そうツスカ……私にできることは無いツスけど、応援してるツス」

ありがとう、と伝えようとした私を遮ってユウが話に加わる。

「ティーダさんは歩き神官なんですよね？」

では治癒系の魔法が使えるのですか？」

「え？ええ、光属性の治癒魔法なら使えるツスよ？」

治癒系と呼ばれる魔法は、各属性に存在しており、水属性なら解毒に優れ、土属性なら継続治癒、風属性なら広域治癒に優れるなど、それぞれの属性により特色がある。

その中でも光属性の治癒魔法は特に強力だ。

「それならティーダさん、私達と一緒にダンジョンに来てもらえませんか？」

「ええ」

「おい、ユウ」

ユウはエルザの言葉を手を上げて止める。

「見たところティーダさんはかなり強いですよ。ギルドで聞いた

情報によると、最近ダンジョンにアンデッドが増えているらしいんですよ」

「そうね、アンデッドには光属性の魔法が有効よね」

私もユウの提案に賛成する。

ゾンビやスケルトンなど実体のあるアンデッドなら問題ないが、レイスやゴーストなど実体の無いアンデッドは厄介だ。

光属性魔法が使える者が居れば非常に助かる。

私も【暴食の魔導書】グリモア・ヘルゼブラ・マモンを使えば光属性魔法も使えるが、【強欲の魔導書】グリモアを使ってエマヤ鉱石を運搬することを考えると、魔力を温存するに越したことはない。

なので私もティーダをダンジョン探索メンバーに勧誘する。

「ええ マジで言ってるんツスか？」

ダンジョンツスよ！そんな危な……皆さんの足手纏いになるツス  
「よ」

本音を隠しそこねながら両手をブンブン振るティーダだが、彼女の実力を考えれば足手纏いなどと言うことはないだろう。

「謙遜することは無い。見たところかなり鍛えているだろ？」

エルザの追撃にティーダは視線を彷徨わせる。

ふむ、ティーダをこちらに引き入れるにはやはりアレか……。

チャリン。

私は懐から金貨が入った小袋を机の上に置き、口を緩めて中を覗

かせる。

「当然、一緒に来てくれたら報酬を出すわ」

「ふう……き、金貨……い、いや！命あつての金貨ツス！」

あ、いや、私には女神様の威光を広めるといふ崇高な使命が……」

ティーダは金貨に伸び掛けた右手を左手で押さえつけ、決死の表情で視線を逸らす。

ダメか……。

するとユウが先ほどからティーダが握りしめたままの酒瓶に視線をやる。

「ところでティーダさんはお酒、好きなんですか？」

「へ？ええ、まあ……ああ、いや、その……お酒は女神様が人々に与えられた物ツスからね。うん」  
「なるほど」

何かに納得したユウは、肩から下げていた小さなバッグから1本の瓶を取り出した。

明らかに瓶の方がバッグより大きい。

「おお！『マジックバッグ』ツスカ！初めて見たツス」

マジックバッグとは見た目以上の物を収納できるマジックアイテムだ。

非常に希少な物で、作成できる職人はほぼ国か、大貴族に召し抱えられている。

そんな職人が希少で高価な素材と長い年月を費やして作成する物なので、買おうとすると、とてつもない金額が必要となる。

馬車1台分程度の容量ですら、今の私でも躊躇するほどの金額だ。

「コレですか？前に遺跡で手に入れたんですよ。容量も大きめで重宝しています」

「凄いつスね、売ったら一生遊んで暮らせるツスよ」

「ふふ、こんな便利な物手放さないですよ」

そう笑いながらユウは宿の主人から小さなショットグラスを人数分貰う。

ユウが取り出した瓶は透明な液体で満たされており、中には幾つもの葉や木の根、木の実などが詰められている。

ユウが栓を抜くと、独特の薬臭さが漂ってきた。

「どうぞ」

ショットグラスに半分ほど。

少量だけ注ぎ込み、ティーダを含めた私達の前に差し出した。

「コレは？」

ティーダはユウから差し出されたグラスの匂いを嗅いで顔を顰める。

私も匂いを嗅いでみると、青臭い匂いと共に酒精の香りがした。

「お酒かしら？やけに薬臭いけど……」

「飲んで大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。まあ飲んでみてください」

ユウに促され、私達は恐る恐るグラスに口を付けた。

「」「」

「こ、コレは……」

「凄いわね。複雑な苦味やコクが絡み合っていて、それでいて飲みやすい」

「そうだな。なんて言うか……そうだな、深いって感じた」

私達の驚きの声を聞いてユウは満足そうに、そのささやかな胸を張る。

「わたしが作った薬酒です。なかなかの出来でしょう?」

「美味しいツスね。とんでもなく。」

「ベースになっている透明なお酒も飲んだことの無い物ツス」

「わたしの故郷のお酒ですよ。米という穀物から作られる清酒です」  
自慢げに説明するユウは更にもう1瓶同じ薬酒を取り出すと、栓を閉めた先程の瓶や私が出した金貨と一緒にティーダの方に押しやる。

「わたし達に協力してくれば差し上げます」

「うう……」

ティーダの視線は薬酒と金貨の間をうろつくと彷徨う。

「……………も、もう1瓶……………」

ユウは3本目の薬酒を取り出した。

「や、病で苦しむ無辜の人々を見捨てるわけにはいかないツスよね。」



今日、此処で皆さんに出会ったのはきつと女神様のお導きツス。  
ええ、間違いないツス！」

ティーダは嬉しそうに金貨の小袋を懐にしまい、薬酒の瓶を抱きしめた。

「……………私、貴女のそういう所、嫌いじゃないわ」

あと、帝都に帰ったら私もユウに薬酒を売ってもらおう。

## 勧誘と薬酒（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 点検と突入

早朝、宿で果物とミルクという簡単な朝食を食べた後、私達はダ  
ンジョンに向かうべく、宿を出た。

「ねえ、ティーダ」

昨日、『エリーさん、私のことはティーダって呼んでほしいツス  
!』と言われたのでこれからはそう呼ぶことにした。

「本当にその修道服で良かったの？」

ティーダの格好はいつもと同じ修道服だ。

町の防具屋で革鎧でも用意した方が良いのでは、と聞いたのだが、  
ティーダはこのままで良いと固辞したのだ。

「はいツス！この修道服は特別製ツスからね。魔法耐性は勿論、耐  
刃、耐熱、耐寒も付与された優れ物ツスよ」

「なんで修道服にそんな付与が付いているのよ」

「付与職人さんがカードのかたにただで……あ、いえ……えっと、  
女神様の僕たる私の身を安じた職人さんが付与してくれたんツスよ、  
あはは」

まあ、それなら下手な鎧より防御力は高いか。

そんな話をしながら町をでて少し進むと、頑丈な扉に囲まれた岩  
が見えてきた。

あの岩にできた亀裂がダンジョンの入り口らしい。

近づくと、防壁の正面に鋼鉄製の扉があり、その前には武装した衛兵が立っている。

彼らはダンジョンに入る人間を警戒しているわけではない。彼らの役割はダンジョンから魔物が溢れ出さないように監視することだ。

1年と少し前にもハルドリア王国の属国にあるダンジョンから魔物が溢れ出しかかりの被害が出ている。

ダンジョンは様々な資源や素材といった恩恵をもたらす反面、魔物災害のリスクもあるのだ。

衛兵には既に話を通っているようで、特に悶着も無く、通された。鋼鉄製の扉を抜けると、すぐ目の前にある岩に大きな裂け目があり、坂道が下へと続いている。

「よし、ダンジョンに入るぞ。皆、もう一度装備を確認してくれ」  
エルザの指示で私達は武器や防具を点検する。

今回の行動ではエルザがリーダーを務めることになっている。

私やティータは冒険者ではなく、ダンジョン探索の経験も無い。必然的にリーダーは冒険者の2人のどちらかに、となった。

より強いユウがリーダーになるべきだと、エルザは言ったが、純粹に冒険者としての経験はエルザの方が上だと言うユウの意見により、エルザがリーダーに決まったのだ。

私は左手の手甲を点検し、腰の剣を鞘から抜いて刃を確認する。  
今回のダンジョン探索ではフリーユージェルではなく、帝都の武器屋  
で購入した最高級の鋼製の細剣を用意した。  
ハイエンド

ダンジョンでは視界が悪い場所も多いだろう。

そんな場所で死角から魔物の不意打ちを受けた場合、剣で防御で  
きる方が対応の幅が広がると考えたのだ。

そのため、ダンジョンではこの剣をメインで使うつもりだ。

エルザは前に使っていた大剣ではなく、取り回しの良いショート  
ソードを手に入れている。

防具は所々鋼で補強された革鎧だ。

ユウは背中に身の丈以上の戦斧を背負い、腰の左右に、白い柄と  
赤い柄を持つ斧を提げている。更に手の中で刃を確かめているのは  
大振りな鉞だ。

服は袴と呼ばれる東方の島国独特の戦装束の上に、漆黒のローブ  
を羽織っている。

ティータは自称特別製の修道服に、いつもの鉄杖だ。

ユウから受け取った薬酒は宿に預けてきたらしい。

全員の用意が整った事を確認したエルザは、ギルドで手に入れた  
地図を広げる。

「今回の目的は地下16階層、最南端にあるエマヤ鉱石の鉱床だ。  
道中の魔物は可能な限り無視して最短ルートを進む。  
今日は7階層に入って直ぐの安全地帯を目指す予定だ」

エルザは地図をなぞり、ルートや目的地、道中の危険地帯や注意すべき魔物を確認する。

私達が頷くのを確認し、エルザは地図をしまった。

「よい、行くぞ」

こうして私達はダンジョンへ足を踏み入れたのだ。

## 点検と突入（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 迷宮と洞窟

ダンジョンの中は普通の洞窟と同じようにしか見えなかった。しかしやはり此処はダンジョン、光源が無いはずなのに薄暗くはあるが視界が闇に覆われることは無い。

通常ならゆっくり慎重に進むべきなのだが、私達は地図を頼りに最短ルートを駆け抜ける。

時折現れるゴブリンやジャイアントバットは無視し、道を塞ぐ魔物だけを手短かに処理しながら進んだ。

現在は地下3層。

此処まで来るのに4時間ほど掛かっている。

初めはただの洞窟のようだったダンジョンは2層、3層と進むにつれて道幅は広く、天井は高くなっていった。

見通しの良い開けた場所で10分ほどの小休止を取る。

私は水筒から水を飲み、一息吐くと頭上の遙か上にある天井を見上げる。

「明らかに降った高さより天井が高いと思うんだけど？」

「不思議ツスね。ダンジョンってヤツはみんなこうなんツスカね？」

「いや、一括りにダンジョンと言っても幾つか種類がある。」

ただの洞窟に魔物が住み着いた物や、古代文明の遺跡、ダンジョンコアと呼ばれる巨大な魔石を持つダンジョン・ミミックという魔物などだな」



「このダンジョンは明らかに内部の空間が異常ですからダンジョン・ミミックですね。」

つまり、わたし達は今、魔物のお腹の中に居るといっわけです」

「ええ そうなんツスカ」

「ダンジョン・ミミックの特徴は内部の構造が異常なこと、トレジャーパーボックスと呼ばれる宝箱が偶に見つかったり、魔物や冒険者の死体が消滅したりすることですね」

「魔物や冒険者の死体が消えるのは分かるわ。」

このダンジョン自体が巨大な魔物だというなら消化しているのでしょうか。」

でも、宝箱にアイテムが入っているのはどうしてなの？」

「仮説だが、宝箱を餌に人間、つまり冒険者を誘い込んでいるって説があるな」

「へえ」

「不思議ツスね」

「さて、小休止は終わりだ。先に進もう。」

少し先に4階層に降りる階段があるようだ。

4階層からは環境がガラリと変わるらしい」

「わかったわ、行きましよう」

私達が動き出そうとした時、周囲を囲むように気配が膨らむ。

「ん 囲まれているわね」

「こいつらは……コボルトだな」

「ど、ど、ど、どうするんツスカ」

「勿論、突破ですよね」

ユウが腰の2本の斧を構えた。

私達も武器を手にする。

「全滅させる必要は無い！最低限の敵を倒して突破する！行くぞ！」

エルザの号令で私達は走り出す。

「グルアボー！」

ボロボロの剣を振り下ろしてくるコボルトの喉を貫き、引き抜きざまに隣のコボルトの足を断つ。

「ひっ！こ、この！女神様の僕たる私を狙うとは……天誅ッス！！」

ティードの鉄杖がコボルトの頭蓋を叩き割る。

「やるなティード、それだけの実力があれば安心して背後を任せられる」

「いやいや、私は一般人なんツスよ！Aランク冒険者のお2人と一緒にしないでほしいツス！」

「でもティードさんもエリーさんも強いですよ。どうですか？冒険者になるなら推薦状を書きますよ」

「私は遠慮しておくわ。商人の方が性に合ってるのよ」

「私もお断りツス！命がいくらあっても足りないツスよ」

「いや、私達のペースについてきている時点で十分な実力だと思っ  
がな」

会話をしながらも邪魔なコボルトを倒して包囲を抜けた私達は、下に降る階段を発見し駆け降りた。

不思議なことにダンジョン・ミミックの中の魔物はあまり階段には近づかないらしい。

これは例外もあるので油断はできないが、階段の周囲は比較的安  
全だということだ。

背後から追ってきていたコボルトの群れも居なくなっている。

呼吸を整えながら階段を降りていると、光が溢れる出口を発見し  
た。

ダンジョン内なのに外のように明るい光だ。

周囲を警戒しながら私達は4階層へ到達した。

「コレは……」

「どうなってんツスカね？」

初めてダンジョンに入った私とティードは目の前の不思議な光景  
に目を丸くする。

洞窟の中を地下に向かって進んでいた筈の私達の目の前には、広  
大な森が広がっていたのだ。

話には聞いていたが、やはりこの目で見ると驚きを隠せない。

## 迷宮と洞窟（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 迷宮と森林

上を見上げれば空高くに雲が流れ、太陽が光を降らせている。とても洞窟の中とは思えない光景だ。

「あの太陽、本物じゃないツスよね？」

「そうだな。学者先生の話だと此処はダンジョン・ミミックが創り出した異空間らしい。」

迷宮都市にある大迷宮の中には砂漠や凍土、火山に古代都市まであるらしいぞ」

「凄いつスね」

「そうね、まるで御伽噺の中の話だわ」

私達はダンジョンの不思議な現象に首を捻るのもそこそこに、次の階層を目指して歩き始めた。

この階層は私が手を広げて抱え込むことができないほどの大きな木が乱立する森林が広がっていた。

周囲を木々に囲まれて視界が悪いため、魔物の不意打ちを警戒し、私達の歩みは自然と遅くなる。

「情報ではこの階層は魔物の種類が多いらしいですね。」

ゴブリン、コボルト、グレイウルフ、コンバットモンキーなど群を作る魔物が多いようですね」

「囲まれたら厄介ね」

「怖いこと言わないでほしいツスよ〜」

「私達は薬草採取や魔物狩りが目的ではないからな。早々に下に降

りぞ。

幸いこの階層の下り階段はそんなに遠くない」

それから30分ほど、警戒しながら階下への階段に到着した。

道中ではゴブリンの群れに遭遇したが、このメンバーでは苦戦などするはずもなく、鎧袖一触に終わる。

階段を降りると、再び森林の中にある岩の裂け目から出てきた。

岩は3メートルほど地面から飛び出した形で上は何もない。

それなのに中を覗くと上に向かう階段がある。

不思議だ。

5階層は4階層と同じような場所だ。

此処も同じく慎重に階段を目指して進む。

「止まれ！」

先頭を進んでいたエルザが小声で鋭く告げる。

身振りで前方の茂みの先を示すエルザ。

私達がそつと先を窺うと、そこには2メートルを超える巨大で肉厚な体、そして豚のような頭部を持つ魔物、オークの群れが屯していた。

「オークね」

「ああ、アイツらは鼻が良い。

此処は風下だからまだバレていないが、先に進もうとすると必ず見つかる。

オークはしつこいからな、一度見つかるはずと追ってくるぞ」「回り込むことはできないかしら?」

「かなり遠回りになるな」

「此処は押し通りましょう。まだ気付かれていませんから奇襲できます」

「た、戦うんツスカ？」

「この階層は階段までまだ距離がある。」

オークに追われる状況は避けたい」

「ではやりましょう」

私達は茂みに身を隠しながら風向きに気を付けながらオークとの距離を詰める。

視線でタイミングを合わせて茂みから飛び出す。

「ブオ」

「フゴオ！」

「はっ！」

驚くオークの右目を細剣で貫く。

その切先は脳へと達して即死させる。

「グボオオ！！」

オークが振り下ろす棍棒をバックステップで躲し、鋭く一閃。

フリーユージェルではなく鋼鉄製の細剣のため、オークの肉厚な腕は斬り落とせない。

しかし、棍棒を握る親指を斬り落とすことくらいは問題無い。

「フゴオ！！」

棍棒を取り落としタタラを踏むオークの懐に踏み込み、顎下から

剣を突き上げ脳を破壊する。

オークの頑丈な頭蓋骨を縫うように貫き、致命傷を与える。

周囲ではユウの戦斧が分厚い頭蓋骨や鎧のような肉をモノともせず、オークを真つ二つに両断し、エルザの剣が的確に手傷を与えて膝を突いたところを首を刎ねる。

ティーダもぎゃあ、きゃあと叫びながら魔力で強化した腕力で頭蓋を粉碎している。

結果、ユウとエルザが3体、私が2体、ティーダが1体を仕留めた。

「ふう、怪我は無い？」

「大丈夫よ」

「問題ありません」

「なんとか無事ッス」

「よし、血の臭いに惹かれて他の魔物が寄ってくる前に移動するぞ」

オークを始末した私達は6階層へ向かう階段に向かって歩みを再開した。



**迷宮と森林 (後書き)**

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 迷宮と森林

6階層も同じような森林だった。

代わり映えしない光景に、まるで同じ場所をグルグルと回っているような錯覚を覚える。

「なんかさつきから同じような景色ツスね？」

ティーダも私と同じ感想を抱いたようだ。

「進んだ感じがしなくて疲労倍増ツスよ」

「この次の7階層には魔物が入りにくい安全地帯がある。今日はそこで休む予定だ。」

それまで辛抱してくれ」

エルザが苦笑を浮かべてティーダを宥める。

なんだかんだと文句を言いながらも、ティーダは問題なく私達についてきている。

戦力としては十分だし、アンデッドが出てくるようになれば、ティーダの光魔法は強力な武器となるだろう。

森の中を進む途中、ユウは目にした木の実や花を少しずつ採取している。

何か有用な物なのだろうか？

「あ！良い物がありました」

ユウが嬉しそうに手の平より大きな果実を採取する。  
急いでいるため、立ち止まって採取まではしないが、目に付いた物はほとんど収穫している。

「ユウ、それは何の木の实だ？」

「見たことない木の实ツスね。食べられるんツスカ？」

「コレは力カオという木の实ですよ。この大陸の気候では育たない南の果実です。」

食べても甘酸っぱくて美味しいですが、種を醗酵させて乾燥すると薬の材料になるんです」

「力カオ……」

聞いたことがあるわね。

南大陸では果実や薬として重宝されているとか……でも、それ以外にも何処かで……確か、ハルドリア王国の古文書だったかしら？  
戻ったら調べてみましょうか。

なんだか大きなビジネスの予感がするわ。

それから小休止を挟みながら、偶にユウに植物の説明を受け、そして魔物を撃退しながら進んでいるとエルザが急に立ち止まる。

「伏せる！」

エルザの叫びで反射的に身を屈める。

すると、頭上を風を切る音と木々を薙ぎ倒す轟音が抜ける。

「な、なんツスカ」

「ば、馬鹿な！こいつは……」

「コレは大物ですね」

「こんな情報は無かったわよね」

私達の目の前に現れたのは5メートルを超える巨体で岩の塊のよ  
うな棍棒を手にした人型の魔物だ。

「ギガンテスだな」

「こんな上層にいるような魔物じゃないですよ」

「下への階段は奴の後ろね」

「仕方ない、倒すぞ」

振り下ろされる巨大な岩塊を左右に跳んで躲した私達は直ぐに戦  
闘態勢をとる。

「マジついてきたことを後悔してるツス！

迷える我らをお導きください【閃光】<sup>フラッシュ</sup>」

ティードが掲げた鉄杖の先から強烈な光が走り、ギガンテスの目  
を眩ませる。

「はっ！」

エルザが足を斬り付けるが薄皮を切る程度の傷しか与えられない。

「浅いな」

「エルザ、退がって！」

私の声を聞いてエルザが後ろに跳ぶ。

それと入れ替わる様に出た私を、ギガンテスは拳を握り、殴  
り飛ばす。

「な、エリー」

攻撃を避けることなく受けた私にエルザが目を見開く。  
しかし、拳を受けた私の体は一瞬で粉々になる。

「あれは……氷」

【氷人形<sup>アイス・ドール</sup>】を身代わりにギガンテスの腕を駆け上り顔を斬り付ける。

「グブウウウ……！」

「やるな！【剛閃】」

エルザが隙を晒したギガンテスの足に再び斬りかかる。  
【スキル】を使い威力を上げた斬撃は足を深く傷付ける。

「グウ！」

ギガンテスがエルザの方を睨みつける。  
しかし、そこに光属性魔法の【光矢<sup>ライト・アロー</sup>】がギガンテスの顔に撃ち込まれる。

意識が分散したギガンテスの背後に小さな黒い影が猛スピードで迫る。

「【剛断】」

ユウの【スキル】は振り下ろされる戦斧の威力を格段に上げるものようだ。

その一撃でギガンテスの背中は大きく斬り裂かれる。

「グブウウウ……！」

怒りを露に棍棒を薙ぎ払う。

「か弱き我が身に御加護を【光壁】」  
ライト・ウォール

ティードの魔法で作られた光の壁に阻まれた棍棒が止まり、その隙に私は再びギガンテスの体を登り、その大きな口に生える牙の付け根に刃を走らせる。

「はあ！」

あまりの痛みに棍棒を手放し両手で口元を押さえたギガンテスの胸にエルザの剣が突き刺さる。

ギガンテスの巨体が倒れ、土煙と共に地面が揺れる。

「た、倒したツスか？」

「まあ、いくらギガンテスでも、Aランク2人に私とティードが相手じゃこんなものでしょうね」

「そうですね。でも思ったより時間を取られてしまいました」

「ああ、しかし、なんだってこんな所にギガンテスが居たんだ？」

「そもそも、情報ではこのダンジョンでギガンテスが目撃されたって話は無いはずよね」

「ん〜なんだか嫌な予感がしますね」

私達は言い知れぬ不安を感じながら次の階層に進むのだった。

迷宮と森林 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 迷宮と遭遇

ギガンテスを討伐した私達は、7階層に到達した。

この7階層もまた森林地帯となっている。

しかし、7階層に降りてすぐの岩場の奥に魔物が入り込みにくい地形があり、そこには魔物避けの結界が張られ比較的安全に休息できる場所になっている。

「アレは……」

「先客か」

その安全地帯には既に1組の冒険者パーティが居た。

この場合、冒険者同士のマナーに関しては私やティータは明るくないのでユウやエルザに任せるつもりだ。

私達が安全地帯の結界内に入ると、先客である冒険者パーティから2人、剣士風の男と魔導士風の女が此方に向かって歩いてきた。

「おそらく男の方はパーティリーダーだろう。私達が女だけのパーティと見てパーティメンバーの女性を連れてきた、というところか」

私がエルザに視線を向けると小声で説明してくれた。

男達は私達から少し間合いを空けて止まる。

「俺たちはCランクパーティ《光の道》だ。

お前達は下層から来たのか？」

「いや、上層からだ」



男達は驚き顔を見合わせる。

「ギ、ギガンテスはどうした？このすぐ上の階層の階段前をずっと陣取っていたはずだろ？」

「ギガンテスなら先程、我々が討伐した」

「討伐」

男達が再び驚きの声を上げ、更に背後にいた《光の道》のメンバー達も慌ててこちらに駆けてきた。

私は咄嗟に剣に手を伸ばすが、《光の道》のメンバーはリーダーの男に押し留められる。

「お前ら！落ち着け！………済まない。

こちらに敵意はない。

俺たちは数日ダンジョンに籠って狩りをしていたんだが、いざ帰ろうとするとアイツが階段前に居座っていて立ち往生していたんだ」「そうか、階段前の1体は討伐したが、他の個体が居る可能性はある。帰るなら気を付けろ」

「ああ………その………悪い、疑うわけではないんだが、本当に討伐したのか？」

「本当だ。ユウ」

「はい」

ユウがマジックバッグにしまっていたギガンテスの討伐証明の右耳を取り出した。

「おお！ギガンテスの耳だ！」

「本当か！」

「か、帰れるのか……」

「ありがとう……ありがとう……」

《光の道》のメンバーに口々にお礼を言われる。

Cランクパーティーである彼らでは命を賭けてもギガンテスを倒せるか、難しいところだ。

幸い食料などはダンジョンで狩りができるため、問題無かったが、精神的な限界が近かったらしい。

「ありがとう、あんた達は命の恩人だ。

ところで名前を聞いてもいいか？」

ギガンテスを討伐できるほどの実力のあるパーティーは町に居なかったはずだから、あんた達は外から来た冒険者だろうか？」

「私はエルザ、Aランク冒険者だ。臨時で組んでいるからパーティー名は無い」

「私はユウカです。同じくAランク冒険者ですよ」

「エリーよ。私は冒険者じゃなく商人よ」

「ティーダと言うツス、お礼なら言葉ではなく現金で……あだつ！」

ティーダの頭にチョップを落としておく。

「卑しいわよ」

「酷いツスよ、この場合、謝礼を請求するのは正当な権利ツスよ！」

「……………そうなの？」

まあ確かに行商人が街道などで襲われているところを通りすがりの冒険者に助けられたら謝礼を払うのが常識だ。

払い渋れば義を欠く恥知らずとして後ろ指を差されることになる。

この場合もそれに近い状況と言えるのかも知れない。

《光の道》のリーダーもティータの言葉に頷く。

「当然だな。今は大した手持ちは無いんだが……素材でも良いか？もし現金が良いならギルド経由での支払いにしてみたい」

「いや、それには及ばない」

そう提案する《光の道》のリーダーだが、エルザはそれを拒否した。

「アレは私達の目的のために討伐しただけだ。」

礼の必要は無い。ティータも良いだろう？ギガンテスの討伐報酬も入るのだからな」

「まあ、そうツスね」

エルザはそう言って謝礼を断った。

「私はよく分からないけど、良いの？」

「うーん、助けたのが商人さんとかなら、ちゃんと報酬を貰うのがお互いの為なんですけど、冒険者同士ですからね。」

同格なら気にせず報酬を要求するものですが、私達は高ランク冒険者です。横暴な相手なら別ですが、下手に出ている下位の冒険者相手に小銭をせびるのは、少々みっともないと思う人も少なくないですよ。

勿論、下位冒険者を無条件で助けなければいけないというわけではありません。

気まぐれ、ボランティアの類いですね」

そういうものらしい。

「というわけだ。礼の必要は無い」

「いや、そういうわけにはいかない」

「……………ふむ、そうまで言うなら1つ頼みたい。私達は急いでいてな。」

ギガンテスを解体する暇が無いんだ。

このまま放置すれば明日の夜にもダンジョンに吸収されるだろう。そこで、君達が解体してギルドまで運んでほしい。今回の謝礼と解体と運搬の手間賃を差し引きして売却額の1割は君達にやろう」

「え　い、いや、それは貰いすぎだろ……………」

「構わない、どうせ放置すれば消える金だ。」

お前達もランクが上がれば下の者に支援してやれ。皆はそれで良いか？私は売却金は要らないぞ」

「わたしも要りませんよ。あ、でもギガンテスの眼球は欲しいです。後で容器を渡すのでお願いしても良いですか？」

「あ、ああ勿論だ」

「私もそれで良いわ、売却金は急遽来てもらったティーダへの追加報酬ってことでいいんじゃない？」

「ほ、本当ツスカ　ギガンテスの売却金の9割ツスよ？」

「まあ、それなりの額にはなるだろうな。」

当初の予想よりダンジョンのレベルが高いし、それくらいの上乗せは構わないだろ」

「そうですね。わたしも賛成です」

「おお！皆さんについてきて良かったツス！

さあさあ、《光の道》の皆さん！怪我とかしている人は居ないツスカ？魔法で治すツスよ？元気になって沢山素材を持ち帰ってくださいツス！」

ティーダは嬉しそうに《光の道》の怪我人を治療し始めた。

実に現金な奴だ。

## 迷宮と遭遇（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 迷宮と現状

翌日、ギガンテスの解体に向かう《光の道》と別れた私達は下層を目指して森林の中を進んでいた。

既に数回、魔物の襲撃を退けた後、周囲を警戒しながら昨日、《光の道》のメンバーから聞いた情報について話していた。

「やはり妙だな」

「そうね。やはり何か原因があるのかしら？」

《光の道》が言うには、ここ数日、このダンジョンは異様に魔物の影が濃いらしい。

それに加えて今まで存在が確認されていなかったはずのギガンテスのような強力な魔物が出現している。

これらには何か関係があるのだろうか？

「現状では判断できませんね」

「あ　敵襲ツス！」

「敵、アーミーモンキー！ 囲まれてるぞ！」

「此処は木々が多い、開けた場所まで一気に抜けるぞ！ 前方はユウとティーダ！ 殿は私がやる！ エリーは遊撃！」

周囲の木々から現れたのは群れを成し集団で連携して獲物を襲う魔物だ。

1匹、1匹は大して強くはないが、その連携はまるで熟練の軍人のようであり、時にはベテランの冒険者ですら餌食にされることもある。

エルザの指示が飛び私達は素早く陣形を整えて駆け出した。

「邪魔ですよ！」

「退くツス！」

ユウの手にする鉈が迫り来るアーミーモンキーを切り裂き、ティ  
ーダの鉄杖が華奢な骨を砕く。

「アイス・ハンマー【氷鎚】」

私の魔法で作り出した氷塊がティーダの死角に入ろうとしていた  
2匹を纏めて押し潰す。

「もう少しだ！」

前方に見える開けた場所を目指して走る私達に、背後のアーミー  
モンキーを斬り払いながらエルザが続く。

広場に躍り出た私達はお互いを背に周囲を囲む魔物の群れに対峙  
する。

「かなり大きな群れね」

「普通のアーミーモンキーの群れは多くても15匹前後のはずなの  
ですが……」

「既に倒したのも入れると30匹は居るツスよ」

「幸いこの広場なら木の上からの攻撃や立体的な動きも制限される。  
直ぐに片付けて先を急ごう」

この様に私達は次第に多くなる魔物の襲撃を蹴散らしていくのだ

った。

「【治癒<sup>ヒール</sup>】」

今日も、早朝から屋敷を訪れた宮廷治癒魔導士様がミレイ様やルノア様に治癒魔法を掛けてくれていた。

エリー様達がキングポイズンスライムの変異種の毒の解毒薬の調合に必要な素材を採取に向かった日から、皇太子殿下の指示を受けたという宮廷治癒魔導士様が日に1度、屋敷で療養されている方々に治癒魔法を掛けてくれていた。

治癒魔法をかけられたミレイ様達は、少しだけ楽になっているようで、荒れていた呼吸もかなり落ち着いていた。

「終わったよ、では私はこれで。」

体力は回復したけど、毒が抜けたわけではないから目を離さないようにね」

「はい、ありがとうございます」

皇太子殿下の計らいでミレイ様達の症状が悪化しないように、定期的に治療魔法をかけてもらっているが、それでも目を覚ましている時間は短く、あまり食事も摂れていない。

このままでは長くは持たないことは私にも理解できた。

しかし、今私にできることはあまり無い。



私程度の実力ではダンジョンでは足手纏いになることは明白だ。

私は、自分の無力さを悔やみながら、エルザさんの仲間の方達の方へ向かう宮廷治癒魔導士様を見送るのだった。

「それで、ソール王国の件はどうなった？」

ハルドリア王国、国王ブラートは執務室で書類を捌きながら宰相であるジークに問いかける。

「はい、既に暴動は鎮圧されたそうです」

「そうか、今回は属国の小さな地域のことだったが、このまま関係が拗れると不味いな」

「ええ、既にいくつかの国では武器や食料を集めようとする動きが見えています」

「なに？」

「反乱……というわけではなく、我が国と属国の間で争いが起こった時に自国を守るための備えのようですが、あまり好ましい状況ではありませんね」

「うむ、アーネストを欠いたのは痛いな」

「そうですね。しばらく辺境に置いた後、呼び戻すつもりだったのですが、監視の目を抜けて自刃するとは……」

ブラート王は深い溜息を吐き出した。

「エリザベートの捜索の方はどうなっている？」

「そちらも難航しております。」

何分、属国との関係回復に注力しているため、遅々として進んでいないのが現状です」

「そうか……」

「陛下……いや、ブラート」

ジークは臣下としてではなく、友人として砕けた言葉でブラート王に進言する。

「やはり、フリード殿下は政務から遠ざけるべきだ」

「うむ……」

「お前が雷の魔力を継ぐフリード殿下を寵愛しているのは分かる。国の秩序を守るためにもフリード殿下を王太子として立てることは大切なことだ。」

だが、フリード殿下はあまりにも………」

「わ、分かっている」

「エリザベートのように完璧なフォローができる者が居れば良いが、このままでは国が崩壊する。私も優秀な補佐官を探してはいるが……」

……」

「ああ、理解している。俺も手は打っている」

「では……」

ブラートは悲しげに頷く。

「うむ、先日の忠言のことだろう。」

既に知らせを走らせている」

その言葉を聞き、ジークは臣下として王の判断を飲み込んだ。

「そう……………ですか。ご英断です」

この日も王城の空気は重いままだった。

## 迷宮と現状（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 迷宮と亡霊

天井から滲み出た水が滴となり小さな音を立てて落ちる。

私達はジメジメとした湿度の高い石造りの通路を歩いていた。

このダンジョンは洞窟から森林、地底湖、草原と変化してきた。そして地下13階層からは様相がガラリと変わり、石造りの通路が続いている。

ダンジョンに入ってから既に4日目となる。

深層に進むにつれて魔物の襲撃頻度はどんどん増えていった。

どう考えても異常な事態だが、私達4人は問題無く予定通りの行程でダンジョンを攻略していた。

「ん？」

ふと、前方から足音が響いてくることに気が付いた。

私達は視線を交わし合い、お互いに動けるように距離を離して様子を探った。

すると、奥の暗がりから冒険者らしき男達が現れ、声をかけてきた。

「ん、同業者か……お前達下に向かうのか？」

「ああ、16階層を目指している」

「そうか、だが今日は戻った方が良い。」

この下の階層からはアンデッドが出現するんだが、滅多に出ないはずのレイスやデュラハンみたいな高位アンデッドが何体も出たんだ。

俺たちも探索を中断して撤退しているところだ。

お前達も今日は諦めた方が良い」

「そうか、だが我々も急がなくてはならない理由があるんだ」

「急ぎ？16階層にか？そりゃあいつたい………あ、いや、すまん。詮索するつもりはないんだ。忘れてくれ」

「気にするな。忠告には感謝する」

軽く手をあげてすれ違った冒険者達を見送り、再び歩き始める。

「次の階層からはとうとうアンデッドが出るんツスカ」

「らしいわね。リビングデッドやスケルトンなんかは私達が対処するけど、レイスやゴーストは頼んだわよ」

「任せてくださいツス！この私は女神様の御加護がバリバリツスカら、悪霊の類いならチョコチョコイのちよいツスよ。」

私の魔法を前に必死で赦しを乞うレイスが目に浮かぶようツスね  
「！」

そう言っただけはケラケラと笑った。

「ひゃあああー！、ゆ、ゆ、赦してほしいツス……！」

涙目のティータの叫びが薄暗い通路に木霊する。

「お、おい！ティータ！浄化だ！【浄化】ピュリファイケーションを使い！」

「わ、わ、わ！また増えてますよ！」

「急いでティータ！追いつかれるわ！」

通路を走る私達の後を追う様にレイスの群れが怨嗟の声を響かせながら通路いっぱいに広がって迫っていた。

レイスとはこの世に怨みを残して死んだ魂が魔力によって魔物化した存在だ。

霊体であるが故に物理攻撃は効果が無く、此方の体に触れられるだけで生命力を吸収される厄介な魔物だ。

対策は魔法、特に光属性魔法が効果が高い。

更にティータが使える【浄化】ピュリファイケーションはアンデッドの中でもレイスなどの肉体を持たない霊体系と呼ばれる魔物を一撃で消滅させられる高等魔法だ。

「め、め、女神様！この世に縛られし哀しき魂に御慈悲をお与えくださいッス！【浄化】ピュリファイケーション！」

ティータが放った光を浴びたレイスは溶けるように霧散し消える。しかし、直ぐに別のレイスがその穴を埋めるように追ってくる。

「ど、どうなっているんでしょうか？いくらなんでも数が多すぎませんか？」

「いくら私達でも、あの数のレイスとまともに戦うのは流石に不味いわ」

「とにかく走れ！ティータは【浄化】ピュリファイケーションだ！」

「前！デユラハンです！」

「止まるな！進むぞ」

首の無い馬に乗った首無し騎士に速度を落とさず攻撃を叩き込み、  
レイスに追いつかれないように必死に走るのだった。



## 迷宮と亡霊 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

( ・ ・ ) ノシ

## 迷宮と亡霊

レイスの群れを引き連れてダンジョン内を疾走する私達は、前方に現れるアンデッドを蹴散らしながら、なんとか距離を保っていた。

しかし角を曲がった所で状況は一変する。

「不味い！行き止まりだ！」

「後ろ！レイス来てますよ！」

「戦うしかないわね……」

「くっ！仕方ないッス！皆さん、30秒稼いでほしいッス！」

そう言って退がったティーダを庇うように私達は前に出る。

30秒で何をするのかは分からないが、今は任せるしかない。

私は細剣に魔力を纏わせてレイスを斬り払う。

魔力を帯びた武器でならば、レイスにも多少の効果はある。

しかし、数が違い過ぎる。

ユウやエルザも同じく魔力を使ってレイスに対抗しているが、あまりの数に押され気味だ。

ティーダはと言うと、懐から取り出した聖水を振り撒きながら鉄杖で地面にガリガリと魔法陣を描いている。

「邪悪を退け我らを御守りください【聖域】」

サンクチュアリ

ティーダが魔法陣を描き上げて詠唱を完成させると、光の輪が広がってレイスの侵入を退けた。

「これは……結界か？」

「助かりました」

「なんとか一息つけるわね」

私達は息を整えつつ結界の中心に集まった。

ティーダが張った結界は魔法陣を中心に半径5メートルほどの物だ。

どうやら範囲内へのアンデッドの侵入を防ぐ効果があるみたいね。

「これ……どうするッスか？」

ティーダは結界の外に群がる大量のレイスやスケルトンなどを見やり溜息混じりに吐き出した。

「どうしたものかしらね。ティーダ、この結界ってどれくらい持つのか？」

「普通なら30分くらいッスね。でも今現在進行形でガリガリ削られてるッスから15分ってとこッス」

「エルザさん、15階層への階段は何処ですか？」

「ちよっと待ってくれ」

エルザは地図を取り出すと14階層から降りてきた階段から道を行なぞり出した。

「此処が現在地だ。15階層への階段はこのルートを通って……こつちの広間を抜けた先……此処だ」

「割と近いですね」

「この距離ならアンデッドを殲滅するより強引に突破して階段を目

指す方が良いわ」

「そうツスね。時間を掛ければそれなりに強力な魔法でこの辺りに集まった奴らは消し飛ばせるツス。その隙に走り抜けるツスよ」

作戦が決まり、アンデッドに取り囲まれながら、落ち着かないまま簡単に携行食を水で流し込んだ私達は、武器の手入れをして備える。

その間、ティーダは結界の中心で膝立ちになり、胸の前で手を組んで一心に祈っていた。

「む、結界に罅が入ったぞ」

「女神様の慈悲により……」

「そろそろですね」

「……迷える魂を御導きください」

「結界が砕けるわ！」

「この非情なる世界に幸いあれ、悲しみに暮れる者に幸いあれ、女神様の使徒に幸いあれ、光あれ……【浄滅】ハニッシュ」

結界が砕けると同時にティーダを中心に閃光が走る。

目を焼くような眩い輝きだが、不思議と目が眩むことはなく、周囲が暖かく静謐な空気で満たされる。

その光が消えた時、その場に居たアンデッドは一切の痕跡も残さず消え去っていた。

「よっしゃあ！成功ツス！流石は私ツス！『さすわた』ツス！」

「走るぞ！」

大技の成功にテンションが上がったティーダを引きずるように走り出す。

すると直ぐに何処からともなくレイスが現れる。

「また来たツス！」

「構うな、もうすぐ階段だ！」

「広間が見えたわ」

私達は勢いもそのままに広間に飛び込む。

そこは今までの狭い通路とは全く別で、所々に天井まで続く柱がある広い空間だった。

しかし、此処にも大量のアンデッドが私達を待ち構えていた。

中には首無しの馬に騎乗するデュラハンも居る。

「不味い、追いつかれるぞ！」

「仕方ないツスね！」

突然ティーダが立ち止まり、私達を追うアンデッドの群れに立ちはだかった。

「ティーダ」

「皆さん、此処は私に任せて先に行くツス！」

「わかったわ」

「ありがとうございます」

「任せたぞ」

「え、あれ？此処は『お前にだけ格好いい真似はさせられない』とか言ってみんなで戦うパターンじゃないんツスカ」

大量のアンデッドの群れをティーダに任せた私達は『薄情者』と言うティーダの叫びに背中を押されながら階段に続く通路を走り抜ける。

「任せた、とは言ったがティーダは大丈夫か？」

途中、迫り来るリビングデッドを斬り払いながらエルザが口にする。

「大丈夫でしょう。ティーダさんはまだ余力を残していたみたいですよし」

「いや、そうじゃなく……」

「わかってはいるわよ。ティーダだって気付いている。その上で任せるって言ったんだから大丈夫でしょ」

「……そうだな。ティーダの力を信じよう。」

む、階段だ！」

階段を飛び降りるように駆け降りた私達は15階層へ到達した。

「……」

「……」

15階層に飛び込んだ途端、背筋にザワリとした感覚が走った。

「神器【トモエ終結の戦斧】」

グリモア・ヘルセブ

「神器【暴食の魔導書】」

レントウス・ケラニウス

「神器【不屈の大剣】」

3人同時に神器を発動させる。

次の瞬間、暗がりから飛び掛かってきた魔物をユウが手にした神器で受け止める。

ユウの神器は、黒地に金、銀、赤の線が走る柄、全ての光を吸い込むような漆黒の刃の戦斧。

その戦斧の柄で受け止めているのは青みがかつた光沢を持つ大きな鎌、体長2メートルを超える昆虫型の魔物、グレートマンティスだった。

「コイツはたかが30階層しかない浅いダンジョンに出るような魔物じゃないぞ！」

そもそも、ギルドで得た情報ではこの階層も出現する魔物はアンデッドのみだったはずだ。

こんな魔物が現れるはずがない。

更に、15階層に居たのはグレートマンティスだけではなかった。

ジャイアントワーム、サンドバージャー、デススコルピオ、などなど。

どれも強力な魔物だ。

「ふっ！」

ユウが【トリスオト終結の戦斧】を振ると、グレートマンティスは薄い翅を羽ばたかせて間合いを空けた。

「後からティータも追ってくるんだ、このままじゃわけにはいかないな」

「ええ、やりましょう」

「わたしはレイスなんかよりもこういつ分かりやすい敵の方が好きですね」

私達は両手の鎌を振り上げて威嚇するグレートマンティスと、その背後の魔物の群れを殲滅するべく武器を構えるのだった。

## 迷宮と亡霊 (後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ



## 迷宮と大鎌

「薄情者〜!!」

ティードの叫びが薄暗い通路に木霊した。

その声を背中に受けながらエリー達の姿は15階層への階段がある通路の先へと消えていった。

「はあく、本当に置いていかれたツスね」

やれやれと、深く息を吐き出す。

そこに殺到するレイスの群れ。

高位アンデッドであるレイスによる生命力の吸収は屈強な大男ですら枯れ木のように変えてしまうほどの恐ろしい攻撃だ。

それを繰り返すレイスの手が津波のようにティードに迫る。

「……………  
【浄滅】」

小さな眩き。

詠唱すらなく発動した強力な光属性魔法による聖なる光が広間を満たすと、怨嗟の声を振り撒き、生者を仲間へと引き込もうとするレイスや怨念に取り憑かれたリビンググアーマー、不浄なるリビンググデッドなど、数多のアンデッドは瞬く間に浄化され、塵1つ残さず消え去った。

アンデッドの姿が消え去った静謐な空気の中、それでもティードはいつもの緩んだ雰囲気を感じさせることなく、広間の柱の1つを睨みつける。

「その人、そろそろ出てきたらどうツスか？」

ティードが声を掛けると、少しの間を置いて柱の裏から人影が姿を現した。

体付きから女であることは分かるが、フードを被っており、顔立ちには分からない。

「……………いつから気付いていたの？」

「10階層からずっと私達を尾けていたツスよね。多分みんな気付いていたツスよ」

「……………そう、私もまだまだね」

「それで？あんたは何者ツスか？」

ダンジョンの魔物の異常はあんたの仕業ツスよね？」

「さあ、どうかしら？」

「まあ、素直に答えてもらえるとは思ってないツスよ。おおかた雇われの死霊術師ってどこツスかね？誰に雇われたんツスか？」

「さあ？」

「はあく、言うわけないツスよね。」

先月叩きのめした生臭神官ツスか？」

それとも去年潰した邪教団の生き残りツスか？」

「……………何言ってるの？」

「ん？私が成敗した奴の依頼で狙ってきたんじゃないんツスか？」

あ、それともあのクソ親父の関係ツスか？それなら私は無関係ツスよ？」

文句なら直接あのクソ親父に言ってほしいツス」

「何を言っているのか分からないわね。」

とにかく、私の邪魔をするなら排除させてもらおうよ、シスター」  
「え？」

女の答えにティーダは目を丸くする。

「私を狙った刺客じゃないんツスカ」

「貴女は無関係ね。邪魔をしないでほしいわ」

「……………あゝ、じ、じゃあ、お互い何も無かったってことで1つ」

「悪いけど、姿を見られたからには生きて返すわけにはいかないわ。分かるでしょ？」

「そうツスよね」

ガツクリと頂垂れるティーダの足下の地面を割って腕が伸びる。

「おっと」

ティーダが咄嗟に後ろに跳ぶと、地面から次々とリビングゲッドが這い出てきた。

「逃げられないわよ」

女が腕を振ると更にレイスまで現れる。

「またワラワラと……………これだから死霊術師は……………」

「愚痴を言うなんて、随分と余裕じゃない」

「そりゃあ余裕ツスよ。私は女神様の御加護が半端無いツスからね。アンデッドがいくら束になっても私には勝てないツスよ。相性が悪かったツスね」

「……………殺しなさい!!」

女が指示を出すとアンデッドは一斉にティーダに襲いかかる。

だが視界を埋め尽くすほどの不死者の群れを前にしてもティードには一切の焦りは見えなかった。

「だから無駄ツスよ。アンデッドでは私には勝てないツス【浄滅】」パニッシュ

今日3度目の上級魔法だが、ティードには疲労の様子は無く、魔法も正常に発動し、目の前のアンデッドの壁を消し去った。

そして……………。

「な  
」

アンデッドの壁の向こう側。

消え去ったアンデッドの背後には更なる敵が控えていた。

不死者共を隠れ蓑にティードに迫っていたのは鋭く光る剣や槍を構えた醜い悪鬼。

ホブゴブリンだった。

人間の子供ほどの背丈しかないゴブリンとは違う。

大人と遜色ない大柄な体格に、生まれ持った筋肉質な体を持つ魔物だ。

しかもその手に持つ武器はその辺のホブゴブリンが持つ略奪品などとは違った。

鎧や罅などは無く、手入れも行き届いている。

更にホブゴブリン共はお互いに死角をカバーし、連携を取ってティードに迫る。

明らかに訓練された動きだった。

ホブゴブリンの剣が、槍が、ティードの修道服を突き破り肉を裂く。

鮮血が舞い、僅かな暇にティードの足下に血溜まりを作り出した。

「ぐう……あ、あんた……し、死霊術師じゃ……ない……」はっ、  
も、モンスターテイマー魔物使い……ツスカ？」

「ご名答、正確には死霊術師であり、魔物使い。

私は『蠍』、人形使いの蠍よ」

そう言っただけで女はフードを取ってみせた。

褐色の肌に金の瞳、そして緩くウェーブの掛かった黒髪を持つ若い女だった。

「さようなら、名も知らぬシスターさん」

蠍がティードから視線を外してエリー達に向かって方へ足を向けた時、空を裂くような鋭い音が鳴る。

「『ティード』ツスよ」

「え？」

「イブリス教、大神殿所属、ティルダニア・ノーチラス。  
ティードって呼んでくれて良いツス」

蠍はホブゴブリンに串刺しにされたティードの方を振り向く。

あれだけの傷を負って平然と話せるはずがない。

ならば何故……。

蠍の視線がホブゴブリンの体の間からティードの瞳を捉えた瞬間、  
ホブゴブリンの体が崩れ落ちた。

いや、それは正確な表現ではない。

正確にはホブゴブリンの上半身が崩れ落ちたのだ。

胴体を鋭利な刃物で切断され、上半身のみが地に落ちた。

それを成したのは大鎌。

修道服が裂け、血が滲む。

しかし、その肌には傷一つ無いティードが手にしていた、柄から刃に至るまで全てが純白の大鎌だった。

「神器【神の恵みを刈り取る刃】<sup>ハーベスト</sup>」

**迷宮と大鎌 (後書き)**

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 迷宮と大鎌

物心付いた時には、とある国の貧民街で残飯を漁っていた。

金も名前も、生きる目的すら持っていなかった。

今日生きるために生きる日々を過ごしていた。

少しでも歯車が狂えば呆気なく死ぬ。

そんな生活が10年ほど続いたある日のことだ。

その女は娼婦や踊り子のような扇情的な服装なのに顔は黒いベールで隠した怪しい女だった。

「貴女、自分の運命を変えたいと思う？」

それが『烏』と呼ばれる女との出会いだった。

「ぐっ！」

狂気的な笑みを浮かべたシスターが振るう純白の大鎌をギリギリのところまで避ける。

烏から受けた今回の任務は帝国で活動している女商人へ揺さぶりを掛けるというものだった。

烏の作ったプラン通り、帝都へキングポイズンスライムの変異種を送り込み、商人の身内を害することでダンジョンへ誘い込むこと



に成功した。

そこで解毒に必要なエマヤ鉱石が採取できる16階層に向かうであろう女商人を待ち伏せていたのだが、そこでこの厄介なシスターと戦うハメになってしまったのだ。

アンデッド対策に急遽メンバーに入れた神官だと思っていた。それがどうだ。

高位の光魔法を連発し、更には神器まで発動したのだ。ただのシスターなんかではないことは明らかだ。

「そろそろ終わりにしてほしいッスね」

「舐めないでよ！【召喚<sup>サモン</sup>】」

私の周囲に魔法陣が煌めき、私が集めた『人形達<sup>魔物</sup>』が現れる。

「行きなさい！」

召喚したのはホブゴブリンの部隊だ。

魔法付与すら切り裂ける高価な魔法武器を装備させ、長年かけて訓練を施した魔物達だ。

そのホブゴブリン達の刃を受け、血を流すシスターだったが、その傷は瞬く間に治癒して跡形もなく消え去る。

「無駄ッスよ。私の【神<sup>ハーベスト</sup>の恵みを刈り取る刃】は斬り殺した相手の魔力を吸収するッス。

殺せば殺すほど、傷は治癒し、より速く、より硬く、より強くなるッス。

数に頼る魔物使いでは私に勝てるはずが無いんッスよ」  
「化け物め！！」

「こんなにぶりちいなティータちゃんに向かって化け物なんて酷いッスよ〜」

そんな戯言を述べながらもシスターの大鎌は私の首を狙い振るわれる。

すでにホブゴブリン達は返り討ちにされ、その魔力を吸収したのか、シスターのスピードは更に上がっている。

「くそ！！【召喚<sup>サモン</sup>】」

これは使いたくはなかった。

こんなところで使い捨てにするには勿体ない人形だ。

しかし、他に手が無い以上、使うしか無い。

「そいつを殺しなさい！アースドレイク！」

「ぬわっ！竜種ッスか」

私の切り札、それは土属性の竜種、アースドレイクだ。

強靱で硬く、力強い、強力な魔物だ。

卵から孵化させて命懸けで育て上げた手持ちで最も強力な人形。

それでもこのシスター相手では時間稼ぎにしかならないだろう。

私はシスターにアースドレイクをけしかけながら、撤退用に用意していた【転移<sup>ゲート</sup>】のスクロールを取り出した。

蠍と名乗った女が新たに召喚したのはアースドレイクだった。

その姿を確認したティードはスピードに回していた魔力を攻撃に振る。

神器【神の恵み<sup>ハーベスト</sup>を刈り取る刃】は、ティードが口にしたように斬り殺した相手の魔力を吸収できる神器だ。

より正確に言えば、吸収した魔力を神器に蓄積し、治癒や身体強化、武器強化へ振り分けることができるという能力である。

アースドレイクは強靱な鱗による高い防御力を持つ竜種だ。並の剣ではまともにダメージを与えることなど不可能だ。

そのため、ホブゴブリンから奪った魔力を全て威力の上昇に集中させる。

「グルオオ！！！」

頭上から迫る鋭い爪を刃を地に向けて柄で受け流す。

そしてそのまま掬い上げるように一閃。

一拍の間後、アースドレイクの首に赤い線が走り、更に一拍、巨大な首が地に落ちる。

竜種という強大な力を持つ魔物の命を刈り取った事で、【神の恵み<sup>ハーベスト</sup>を刈り取る刃】に新たな魔力が宿る。

それを感じた瞬間、アースドレイクから吸収した全魔力を身体能力の上昇に変える。

足下が爆発するような衝撃と共にティータは蠍に迫る。

蠍はその時には懐からスクロールを取り出していた。

「逃がさないツスよ！」

「ちっ！【ゲイト転移】」

光に包まれた蠍をティータの大鎌が捉える。

しかし、僅かに蠍の転移の方が速く、その姿が掻き消えてしまっ  
た。

「逃げられたツスカ……手応えはあったんツスけどね？」

純白の大鎌を肩に担ぎ、ティータは蠍が消えた場所に残る少量な  
ない血溜まりを一瞥するのだった。

## 迷宮と大鎌（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 迷宮と鉱脈

私に迫り来る大鎌を横から割り込んだユウの

【ヒリオト終結の戦斧】が弾く。

その隙に片手に抱えた【グリモア・ヘルセプ暴食の魔導書】に魔力を込めて魔法を発動させる。

「ファイア・ランスサンダー・レインライト・エッジ【炎槍】 【雷雨】 【光刃】」

炎の槍が虫型の魔物の攻殻を貫き、ワーフルフの群れに雷が降り注ぐ。

そして光で出来た巨大な刃がジャイアントオークの肩を深々と切り裂いた。

やけに良い装備を身につけたコボルトの集団に囲まれたエルザが  
レントゥスグランドイウス【不屈の大剣】を振り回し、纏めて輪切りにする。

「キシヤアアア!!!」

ユウはグレートマンティスの右鎌を斬り飛ばし、連撃を叩き込んでいる。

私の側にはコボルトの群れを始末したエルザが背を預ける様になって来た。

「おかしいわね」

「ああ、統制が取れ過ぎている。」

種族も違う野生の魔物がこんなに連携をとってくる筈が無い」

「やはり10階層から尾けて来ていた奴かしら？」

「そうだろうな。おそらく魔物使いだ。」

ティードが上手くやってくれれば良いが……」

「エリーさん！エルザさん！一体抜けました！」

ユウの声の方に目を向ければ鎧の様な攻殻を纏ったトラの魔物が此方に向かって疾走していた。

「アイアンタイガーだな、厄介な奴だ」

「エルザ、10秒お願い」

「任された」

エルザに前に出てもらい、私は神器を発動させる。

「神器【強欲の魔導書】ケリモア・マモン」

【暴食の魔導書】が消えて【強欲の魔導書】に切り替わる。

独りでページが捲れ、収納されていた物を取り出される。

空中から滲み出る様に現れたフリーユージェルを抜いた私は、エルザと入れ替わる様に出ると、アイアンタイガーとか言う魔物を細切れにする。

「相変わらず恐ろしい斬れ味だな」

「その分、扱いがむずかしいのよね」

「冒険者には合わないな……ん？」

「コレは……」

「魔物の動きが変わりましたね？」

グレートマンティスを討伐したユウが数匹の魔物を薙ぎ払いなが

ら此方へ合流した。

魔物は先程までの連携が嘘の様に、好き勝手に動きだし、終いには同士討ちまで始めた。

「どうなっているんだ？」

「もしかしたら魔物使いがこの場から離れたのかもしれないな」

「どちらにせよ、コレなら問題なく殲滅が可能ですよ」

「そうね、早いところ始末しましょう」

一体一体は強力な魔物だが、連携さえ取られないなら私達が苦戦する事などない。

ものの10分程で、残っていた魔物は全て討伐が完了した。

「のわっ　　なんすか、この魔物の山は　　」

上階からの階段から聞こえる緊張感の無いティードの声に、私達は揃って肩をすくめたのだった。

ティードと合流した私達は上での話を簡単に説明されながら16階層への階段を降りていた。

「……それで、私が蠍とか言う女が召喚したホブゴブリンの群れをボコってやったら何とアースドレイクを召喚して来たんツスよ」

「アースドレイク　　竜種じゃないか！」

「1人でアースドレイクを倒したんですか？」



「勿論ツスよ、女神様の加護を受けたこの鉄杖でベゴッと……」

「鉄杖でアースドレイクの鱗を砕いたの？」

「も、勿論ツスよ！あの程度私にかかれば雑魚ツスよ、雑魚」

ティードは何かを誤魔化す様に目を逸らした。

「……………まあ、良いけど」

何かを隠しているのは丸分かりだが、深く詮索するつもりは無い。切り札の1つや2つ隠しているのは当然の事だ。

しかし、『蠍』か。

状況から察するに、帝都にキングポイズンスライムを放ったのはその女だろう。

なら、その目的は……1番有りそうなのは帝国へのテロ……もしくは何かの陽動か。

帰ったら調べてみた方が良いわね。

何が目的かは知らないが、既に少なくとも死者も出ている。

それに何より、ミレイ達がやられた礼はしなければならぬ。

その辺りも含めて調査するべきね。

「エリー、そろそろだぞ」

エルザの声が私の思考を呼び戻した。

いけないわね。

まだダンジョンの中、集中しなければ命を落としかねない危険地帯だ。

私が気合を入れ直すと、前方に岩壁が見えて来た。

「有りました！あれがエマヤ鉱石の鉱脈です！」

## 迷宮と鉦脈（後書き）

今話が今年最後の更新となり、次回の更新は新年1月4日0時00分を予定しております。

皆様に読んで頂く事が出来たので此処まで書き続ける事が出来ました。

特に、ご感想を頂いた皆様、誤字報告を頂いた皆様、お気に入りに登録して頂いた皆様には、大変感謝しております。

今年は、今までになく大変な年になりました。

コレからも困難な日々が続くと思われず。  
皆様も体には十分にお気を付け下さい。

、（\*、、）

また来年もよろしくお願い致します。

良いお年を。

令和2年12月27日 はぐれメタボ

迷宮と探掘（前書き）

新年明けましておめでとう御座います。

本年もどうぞ宜しくお願い致します。

m ( ) m

## 迷宮と採掘

壁一面に広がるエマヤ鉱石の鉱脈は、殆ど手付かずの状態で放置されていた。

通常時なら、価値が低く、運ぶ手間が掛かる為、誰も手を出さないのだろう。

「わたしとエルザさんが必要量を採掘しますので、エリーさんとテイダさんは周囲の警戒をお願いしますね」

「ええ」

「了解ッス！」

私とテイダが少し離れてエマヤ鉱石の鉱脈が有る通路へ魔物が侵入しない様に警戒を始めると、ユウとエルザはツルハシを取り出してエマヤ鉱石をガシガシと採掘し始めた。

それから約1時間、テイダが魔物使いを追い払ってくれたお陰か、道中とは打って変わって魔物は全く現れなかった。

そして声が掛かり、ユウとエルザの元へ行くと、そこには私の背丈の何倍もの高さに積み上がったエマヤ鉱石の山がいくつも出来上がっていた。

流石はAランク冒険者と言ったところか、コレだけの鉱石を採掘していながら、2人とも息切れすらしていなかった。

「これだけ有れば足りるでしょう」

「エリー、頼む」

「了解、神器【強欲の魔導書】」

グリモア・マモン

2人が採掘したエマヤ鉱石を収納出来るか、少し不安があったが、わざわざ魔法契約書を使い所有権を明確にしたお陰か、問題無く収納出来た。

「おお……やっぱ凄いな。全部入っちゃった」

「便利な能力ですね。わたしのは戦闘以外には使えませんから羨ましいです」

「むむ……上手くやればいくらでもお金を稼げるツスよね。……」

……私もどうにか同じ様な神器を……」

「はいはい、用事は終わったんだから急いで帰るわよ」

私はパンパンと手を叩いて帰還を促すのだった。

「フリード、しばらくの間、お前を政務から外す」

「ち、父上……」

突然、ブライト王の執務室に呼び出されたフリードに突きつけられたのは政務から距離を置き、勉強し直せと言つ父王からの通告だった。

「何を言っているのですか！」

「黙れ！これは決定事項だ。」

今一度学び直せ。俺が認めるまで政務への復帰は許さん」

「……………」

「分かったら、退出せよ」  
「……………」

フリードは悔しげに頭を下げて部屋を出る。

「クソ！なんでこうなるんだ！！なんで……………」

俺の何が悪い！学び直せだと

失敗したのは周りが俺の言う事を聞かないからだ！

クソ！クソ！見ている！文句を付けられない程の功績を挙げて…

…………… そうだ！ そうだな。

この俺が王に成れば誰も逆らわない。

そうすれば父上も俺を認める筈だ」

城の廊下をブツブツと呟きながら歩くフリードを見つけ、声を掛ける者がいた。

「フリード殿下、此方でしたか」

「ん、コルトか」

コルトは伯爵家の次男であり、ロベルトが処刑された後、フリードが重用している男だった。

「どうした？」

「はい、例の件でドンドル大司教様がいらして居ります」

「分かった。応接室だな」

「はい」

フリードは目的地を変えて再び歩き始めながら、声を少し落としてコルトに尋ねた。

「……………それで、コルト。お前に任せていた計画はどうなっている?」  
「はい、商会の方のツテを使って進めております。来年には開始出来るかと……………」  
「それでは遅い。予算を増やしてやるから予定を早める」  
「え　し、しかし……………」  
「良いからやれ!此処で功績を挙げるしか無いんだ!」  
「わ、分かりました。可能な限り急がせます」  
「任せたぞ」

南大陸にある礫帝国の帝都。

板葺きの屋根の建物が並ぶ平民区で1人の少女が数人の男達と話していた。

黒髪を腰の辺りまで伸ばした、美しい少女だ。  
歳の頃は15程、つい最近成人したばかりなのだが、この国ではもう少し上に見られる。

黒髪黒目が普通な南大陸では珍しく、彫りが深くハッキリした顔立ちであり、翠の瞳が異国の血が入っている事を物語っている。

「……………と言つ訳で店のお金を横領しているのは番頭の馬蓮マーレンだろうね」  
「な、なんだと!」  
「やっぱりアイツが犯人か!」  
「みんなの話が本当ならそれ以外には考えられないかな」

「わかった。今の話を官に伝えて調べて貰おう！」  
「ありがとうな、嬢ちゃん。約束の銀貨だ」  
「まいど〜」

少女は男達から銀貨を受け取ると懐にしまった。

「アデル彩暁様！」

「マオラン猫蘭？」

男達が去った後、木陰から現れたのは少女より少し年輩な女だった。

何処か苦労性な雰囲気がある女が彩暁と呼んだ少女の元に駆ける。

「どうしたの、そんなに慌てて」

「慌てますよ！何度も言いますが、勝手に抜け出すのはお止め下さいー！」

「ごめん、ごめん、でもボクなら大丈夫だよ」

「彩暁様が大丈夫でも私共には大事なのです！」

「わ、わかった、わかった、猫蘭は心配性だな……………それと、外では敬語、止める約束だよ」

「約束を守れと言うなら、彩暁様こそ、外出時は私に声を掛けると言う約束を守って下さい」

「う……………ボ、ボクが悪かったよ」

猫蘭は少し落ち着いたのか、怒りに赤らめていた顔をすこし落ち着けた。

「全く……………ああ、それと港に交易船が帰って来ていますよ」

「クエン既船長の船？」

「はい」



「わかった！港に行こう！」

「阮船長！」

「ん？おお、彩暁の嬢ちゃん！」

「お帰り！それで、どうだった？」

「ああ！嬢ちゃんに教わった『ざわーくらつと』のお陰で今回も死人は出なかつたぜ！

中央大陸の商人も驚いていたぞ。

あとコレな。頼まれていた書物だ」

「ありがとう！」

代金を払い本を受け取った彩暁は、阮船長に別れを告げ、猫蘭を伴って帰路に着いた。

少し歩き人目が少なくなる辺りで待っていた馬車に乗り込む。

抜け目がない猫蘭が手配していた馬車だ。

「彩暁様が仰っていた通り、船乗り病は食事によって予防出来るって事ですね」

「そうだね。でもボクは知識を集めて組み合わせた物から答えを導き出したただだよ。」

「凄いのはそれらを見つけ出した研究者さ」

そんな話をしているうちに、馬車は平民区を抜け、更に貴区をも越えた。

向かう先は帝区と呼ばれるこの国で最も高貴な人物の支配する領域だった。

厳重な警備が敷かれた門を素通りすると、帝区の一部にある宮へと到着する。

馬車から降りた2人は、慣れた様子で宮へと入って行く。

「彩暁」

繊細な装飾が施された赤い柱が並ぶ廊下を自室に向けて歩いていくと、彩暁を呼び止める声があった。

この宮でその様な事が許される身分の者は多くは無い。

この帝国の頂点にいる帝や皇太子なら可能だが、この宮は彩暁に与えられたプライベートなエリアだ。

先触れも無く帝がやって来るとは考えづらい。

お付きの侍女であり、教育係兼お友達である猫蘭も彩暁に碎けて接する数少ない人物だが、こんな人目のある場所で主を呼び止める様な無礼を働く様な人間では無い。

そもそも、彼女は隣を歩いている。

ならば可能性は1つに絞られる。

「お母様」

彩暁が振り返ると、予想通りの姿があった。

黒髪に黒い瞳の妖艶な女性だ。

「また抜け出したのね」

「うう」

「全く……苦勞を掛けるわね、猫蘭」

「いえ申し訳ありません、玉涼様キョウリョウ。私が至らぬばかりに……」

彩暁の母、玉涼は、姿を見せたと同時に平伏していた猫蘭が謝意を示すのを片手を上げて振って止める。

「謝る必要は無いわ。貴女が懸命に止めてくれている事は知っているから。ありがとうね」

「勿体なきお言葉で御座います」

そんな母と侍女の会話を居心地悪そうに聞いていた彩暁だったが、目の前に差し出された物を見て首を傾げる。

「お母様、コレは？」

「貴女に届いた手紙よ」

「手紙？」

彩暁は母が差し出した手紙を不思議そうに受け取るのだった。

## 迷宮と探掘（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 果実と文献

「エリー様、珈琲をお持ちしました」

「ありがとうございます、ミレイ」

私はミレイが煎れてくれた珈琲を受け取った。

帝国は、私達がダンジョンから戻って直ぐに薬師や錬金術師を動員して解毒薬の調査を開始した。

そして約束通り、私やエルザはユウが調査した解毒薬をいち早く受け取る事が出来たのだ。

ミレイやルノアが復調する頃には、他の患者にも解毒薬が行き渡り、調査の結果として例のキングポイズンスライムの変異種の件も公表された。

状況から考えると、あのキングポイズンスライムもティーダが遭遇した蠍とやらの仕業の可能性が高い。

一般には公表されていないが、帝国の上層部は帝都を狙った他国からのテロでは無いか、と調べを進めているらしい。

私も個人的に人を雇って調べさせているが、今のところ、特に情報が入っていないかった。

ティーダはダンジョンから出た後、そのままドルドの町に残った。帝都に戻れば帝国から褒賞くらい出ると言ったのだが、『いやい

「やいや！公の場はこま……じゃなくて、女神様の下僕として当然の事をしたまでツス！」

報酬は十分に貰ったツス！

ですから私の事は内密に！くれぐれも！

私、奥ゆかしい美少女シスターツスから！」

と、怪しさ満点の遠慮をするので冒険者ギルドで別れて来た。

例の《光の道》に頼んでいたギガンテスの素材の売却が終わってお金を受け取ってから帝都に戻ると言っていた。

「そう言えばルノアから手紙が届いています」

「そう、変わりはない？」

「はい、久しぶりに家族でゆっくりと過ごしている様です」

ルノアは体調が回復した後、休暇を与えてレブリック伯爵領へ送った。

しばらくは両親の下で休ませるつもりだ。

「あっ！」

ミレイと取り留めのない話をしながらページを繰っていた私は、目的の物を発見して手を止めた。

朝から調べていたのは【傲慢の魔導書】グリモア・ルシフェルに記録されていたハルドリア王国に保管されていた古文書だ。

ダンジョンで見つけたカカオと言う木の実は、何処かで見た事があると思っていたのだが、この古文書で見たのだ。

「エリー様が持ち帰った果実の利用法ですか？」

「ええ、なるほど。どうやら乾燥と発酵をして、更に砂糖やバター

を加える事で菓子に出来るみたいね」

「菓子ですか？」

「ええ、古王国の貴族のお抱え料理人のレシピが残っているわ。とても人気がある菓子らしいわね。」

それにクツキーやケーキを始め、様々な用途に使えるみたい」

「それは……上手くすればかなりの利益が見込めますね」

「ええ、まずは試作よ。」

それと、ドルドの町の冒険者ギルドへ連絡して、《光の道》ってパーティに私の名前で指名依頼を出して頂戴。

秘密厳守を魔法契約で。

ダンジョン内の作物なんかは直ぐに繁殖するから枯渇はしないでしようけど、私達の商會が軌道に乗せるまでは模倣させないように」

「畏まりました。」

ギルドへの依頼と口の堅い料理人を集めます」

「お願いね。」

それから喫茶分野に明るい人材も探して頂戴。

スイーツとして確立出来れば、それを武器に軽食の店舗として展開出来るかも知れないわ」

「はい、早急に手配致します」

炎の様に赤い髪をポニーテールに纏めた若い少女が右手に手にしたマイクを口元に寄せて台詞を読み上げる。

『この時、当時の帝国では、まだ事の全貌は謎に包まれていました。しかし、この事件が後に多くの国々を巻き込む大事件の始まりと

なつたのです』

赤毛の少女が左手をビシッと突き出し決めポーズを取る。

『《実録！歴史ヒストリー》来週も見てください』

赤毛の少女の顔がアップになり、ウインクをする。

「……………はい！オツケーです。お疲れ様、アカリちゃん」  
「お疲れ様です」

「いや〜今回も良かったよ」

「ありがとうございます」

「次も宜しくね」

「はい、お疲れ様です」

「お疲れ〜」

スタッフに挨拶を済ませたアカリはマネージャーのマリーからコメントを受け取り楽屋へと戻る。

最近売り出し中の新人アイドルであるアカリにとって、この仕事は初めてのメインリポーターと言う大事な仕事だった。

それも公国の公共放送のゴールデンタイムの新番組だ。

絶対に成功させるぞ、と気合を入れて撮影に臨んでいた。

その撮影も終わり、ディレクターの反応も好感触だ。

「ふ〜」

「お疲れ、アカリちゃん」

「マリーさん、ありがとう」



マリーからお茶を受け取るとアカリのお腹から、くうくと小さな音が鳴った。

恥ずかしげに頬を染めるアカリにマリーは微笑みを浮かべる。

「朝からずっと撮影だったからね。

夕食前だけど、帰りに軽く何か食べる？」

「良いんですか？」

「ええ、今日の成功を祝って……そうね、《グリモアール》にでも行きましょうか」

「やった！新作のチョコレートケーキが美味しいって友達が言ってたんです！」

「ふふ、なら早く着替えなさい」

「はい！」

アカリは老舗の喫茶店の新作ケーキを思い描きながら、いそいそと着替えを始めるのだった。

## 果実と文献（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## ニセモノ

「うつつまあ〜」

テーブルの上に並べられた小粒の菓子を口に放り込み、ティードは感嘆の声を上げる。

菓子にはいくつもの種類がある。

クッキーやパンケーキ、ドライフルーツやナッツを包み込んだ物など多岐にわたる。

その全てに使われている物が、古王国で人気を博していた菓子を再現したチョコレートと呼ばれる物だ。

苦味と甘味を持つこの菓子は非常に多くの可能性を秘めている。

数ヶ月の試作によって、完成したチョコレートは、まだまだ研究の余地を残しているが、ひとまずは商品として販売できるレベルに到達した。

カカオの在庫もそれなりの量を確保している。

《光の道》は予想以上に優秀で、秘密もしつかりと守っている。

その為、先日トレートル商会の専属冒険者として契約した。

今後も毎月一定量のカカオ採取を依頼している。

そうして完成した試作のチョコレート菓子をタイミングよく帝都に帰って来たティードや先日レブリック伯爵領から帰って来たルノア、私と試作品を作っていたミレイ、ミーシャと共に試食していた。

「美味しいですね」

「私はこのナッツのヤツが好きです」

「甘さを控えた物も良いですね」

なかなか好評だ。

「これ、お酒にも合うと思うツス」

「お酒？」

「はい、私の勘が囁くツス！この濃厚な甘さには酒精がマッチする気がするツス」

「なるほど……料理人に伝えておくわ」

「完成したら是非、私にも味見させて欲しいツス」

「成功したら良いわよ」

既にトレートル商会内に喫茶部門を設立しており、店舗の確保や従業員の教育などを始めている。

「これなら行けそうですね」

「ええ、後は試作品をお茶会で貴族に振る舞いこの新しい菓子の噂を広められれば十全ね」

「はい、早速手配致します」

「お願い。それから料理人に言って皇室への献上用のチョコレート菓子を作らせて。」

「予算は気にしなくて良いから、最高の物をお願いね」  
「畏まりました」

こうして喫茶店『グリモアール』は無事オープンを迎えた。

商業区の中でも貴族街に近い場所に位置しており、裕福な商家の娘や御忍びの貴族の子女で賑わっている様だ。

「盛況で何よりね」

「はい、貴族の間でも話題になっている様です」

私が書類にサインを入れながらルノアと話していると、金貨袋を抱えたミレイが執務室に入ってきた。

「エリー様、今月分の金貨です」

「そこに置いておいて頂戴、後で纏めて金庫にしまっわ」  
「はい」

目の前に居たルノアは特に何も反応しない。

初めの頃は金貨が詰まった袋に目を回していたけど、成長した物だ。

ミレイが金貨が詰まった袋を机に置くと、中の金貨が音を立てる。

「ん？」

私は立ち上がり金貨袋が置かれたルノアの机にまで近づいた。

「エリー会長？」

ルノアが不思議そうに見上げて来るが、今はそれどころじゃない。

私は金貨を一枚取り出すと、裏、表とマジマジと見る。

「……………ルノア、この金貨を鑑定して」

「え？」

私はルノアに金貨を手渡す。

「早く」

「は、はい！」

机に金貨を置いたルノアは金貨に手をかざし、詠唱を始める。

「万物に宿し魂よ 秘めたる姿を我が前に晒せ

アイテム・アナライズ  
【物品鑑定】」

しばらく目を瞑っていたルノアが驚きの表情で目を見開いた。

「こ、これ！おかしいです！鉱物比率が金貨の物じゃないです！」

やはり。

先程、金貨袋から鳴った音が少し妙だった。  
しかし、どう見ても金にしか見えない。

「ミーシャ！秤とナイフを！」

「はい！」

秤に乗せて重さを測るが、その重さは金貨と同じ、ナイフで表面を少し削ったが金にしか見えない。

でもルノアの鑑定では金以外の鉱物が混ざっている。

「……………となると」

私はナイフを振り上げ、魔力を纏わせると金貨に向けて振り下ろ

した。

机の上で真つ二つになった金貨の断面を見ると、金の中心に黒くボロボロになった物が見える。

帝国金貨は金90%銀10%の比率で作られている筈だ。

こんな芯材が使われている筈がない。

「偽金ね」

## ニセモノ（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## カンテイ

私は金貨の中に仕込まれていた黒いかけらを観察する。

鉱石の様にも見えるが、所々がボロボロに砕けて粉末になっていた。

「ルノア、この芯材は何が分かる？」

「す、すみません、私の鑑定魔法ではそこまでは分かりませんでした」  
「そう」

鑑定魔法にはいくつ種類がある。

【鉱石鑑定】や【植物鑑定】などの専門に特化した鑑定や【生物鑑定】、【能力鑑定】などの幅が広い物も有る。

ルノアの【物品鑑定】はかなり幅広く鑑定出来る希少な魔法だ。

ただし、どの鑑定魔法でも共通であるが、未知の物を鑑定する事は出来ない。

鑑定魔法とは、自らが持つ知識から対象の情報を見抜く魔法なのだ。

つまり鑑定魔法を使いこなすには、相応に幅広い知識が必要になる。

この場合、鉱物や金属に関する知識が足りなかった為、ルノアはこの芯材の正体を見抜く事が出来なかったと言う訳だ。

ルノアが鑑定出来ないなら仕方ない。

この芯材に関しては後回しだ。

「ミレイ、ルノア、至急鑑定士を集めて商會が保有する金貨の真贋を確かめて」

「畏まりました、方式はいかが致しますか？」

「全数……と言いたいけど無理な話ね。抜き出し検査で偽金貨が見つかつたら細かく調べて頂戴。」

それと、偽金貨の流通ルートを追つて」

「はい」

「分かりました」

「ミーシャは馬車の手配と商業ギルドへ先触れを。」

緊急で重要性の高い話だと伝えて置いて」

「はい」

それにしても妙な偽金だ。

この様な偽金は通常ならあり得ない。

私は両断していない偽金貨を手に取り改めて観察する。

「変ね」

「そうですね」

「変ですか？」

「？」

首を傾げる私とミレイに、ルノアとミーシャは不思議そうな顔をする。

「変よ。この偽金貨……手が掛かりすぎているわ」

「えっと……どういふ事ですか？」

「ルノア、偽金貨はどの様に使われるか分かるかしら？」

「え？偽金なんですから、本物の金貨より安価な素材で作って、金貨として使用してその差額で利益を得るのでは？」

「そつよ、普通はね」

私の答えにますます首を捻るルノアとミーシャに説明する。

「帝国金貨には偽造を防止する為の細工がいくつも有るわ。

有名な物から、ごく一部の人間しか知らない物までね。

この偽金貨は見たところ、それらを完璧に模倣しているわ。

これだけの細工を調べる手間や、加工する設備、細工出来る人材を揃えるにはかなりの資金が必要よ。

それにこの金貨に使われている金の比率はかなり多い。

芯材にこの黒い鉱物を使っている分、使用される金の量は減っているから、本物の帝国金貨に比べると安価だけど、金としての価値で言えばそこまで下がっていないのよ」

「つまりこの偽金貨はそれなりに価値のある偽物って事ですか？」

「ええ、これだけ精巧に偽造する手間を掛けて作った偽金貨の価値だと考えると割に合わないのよ。

この金貨を使って利益を得るには相当量をばら撒かないと不可能なのよ」

ミレイが私の説明を引き継ぐ。

「そんな量の偽金貨を用意するとすると、初期費用も莫大な金額になります。

仮に用意出来たとしても、そんな大量の偽金貨を不自然なく使用する方法が有りません」

「そんな金額の取引をするとすると、帝国政府が大商人でしようけど、そつ言う大きな取引には鑑定士を同席させるのが普通だから、リスクが大き過ぎるわ」

「ですから出回る偽金貨とは、鉄製の物に金メッキを施した物など、かなり雑な物が多いのです。

そう言った物を田舎の小さな商店などで使い細々と利益を得る犯罪者がほとんどです」

「ではなぜこんな偽金貨が？」

「そうね……………予想だけど、これは他国からの帝国への経済攻撃だと思うわ」

## カンテイ(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## ハンニン

商会でミレイ達に指示を出した後、私はミーシャを連れて商業ギルドへと向かった。

先触れを出して置いたおかげか、はたまた特別認可商人の肩書のお陰か、待たされる事もなくすぐに応接室へ通された。

応接室のドアを潜ると、魔族の男が私を待っていた。

帝都の商業ギルド、ギルドマスターのカルバン。

グランドマスターであるグイード伯爵の右腕と呼ばれる男だ。

「突然のご訪問でお時間を頂き感謝致しますわ、ギルドマスター」

「ふふ、君が緊急の案件などと言うからな。」

無理にでも時間を作るさ。

本来ならグイード伯が対応しても良いのだが、現在は領地へ行っていてね。

私で我慢して欲しい」

「勿論、十分ですわ」

私はカルバンが手で椅子を示したのを確認して彼の正面に座り、ミーシャは背後に控えた。

「それでは早速本題と行こう」

「そうですね。ミーシャ」

「はい、エリー様」

ミーシャが肩に掛けていた鞆から取り出した小袋を受け取り、中

から偽金貨を取り出してカルバンの前に置いた。

「金貨？」

カルバンは金貨を摘み上げてマジマジと確認する。

「特におかしな所は……………いや、だが何か……………」

カルバンが驚きに目を見開く。

おそらく無詠唱で鑑定魔法を使ったのだろう。

「偽金か」

「はい、こちらをご覧ください」

私は袋から両断した金貨を取り出した。

「……………成る程、これは廃鉄だな」

「廃鉄ですか」

廃鉄とは錬金術で魔力合金を作成する時に触媒となる鉄が変質した廃棄物だ。

その性質は硬いが脆く、そして重い。

基本的に使い道のないゴミだ。

「廃鉄は錬金術師ギルドが回収して処分する筈だ。一般のルートに流れる事は少ない」

そう言ってカルバンは顎に手を当てて考える。

そして……………。

「……………何処の国が分かるかい？」

私と同じ答えへと辿り着いたカルバンが尋ねる。

「まだ分かりませんわ」

「そうか、先日のキングポイズンスライムの件も有る。

二つの事件に繋がりがあるのかも知れん」

「そうですね。私も個人的に調べてみますわ」

「ああ、私もギルドの調査員を動かそう。

もし何か分かったら教えて欲しい。

有益な情報なら高く買おう」

「はい、何かわかりましたら」

商業ギルドを後にし、屋敷に戻った私にミレイが駆け寄って来た。

「エリー様、例の偽金貨の出所が分かりました」

「……………随分と早いわね。もうルートをたどれたの？」

「トレートル商会に入ってきた偽金貨とは別のルートで入った情報です」

「別ルート？」

「はい、ハルドリア王国に置いている間者からの報告です」

ああ、分かってしまった。

成る程、そう言う事か……………。

「……………それで？」

私は片手を額に当てながら溜息を吐き出し、ミレイに報告を促し



た。

「はい……偽金貨の出所はファンネル商会。

王国に残して来たエリー様が作った商会です」

ファンネル商会は私が個人的に使える予算を確保する為に作った商会だが、あのクソ王子に上層部を挿げ替えられ実権を奪われた商会だ。

現在の経営陣はフリードの取り巻きである貴族子弟や上手く取り入った商家の人間で占められており、フリードの権力によるゴリ押し経営で評判は地に落ちてしていると聞く。

「如何なさいますか？」

「そうね……」

そろそろ王国の商会の件も後始末しなければいけないか。

それに今の上層部はフリードに近い馬鹿共だし。

「処分しましょう。」

私が作った商会を悪用している者達には地獄を見てもらうわ」

## ハンニン(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## アンヤク

「くふふ……ようやく俺にも運が回って来た」

ハルドリア王国の王都にあるファンネル商会の商館の商会長室で最高級のワインを飲むコルトは笑いが堪えられなかった。

「フリード殿下に帝国金貨を偽造しろと言われた時にはどうなる事かと思つたが、追加で用意してくれた金でどうにか形になつたな」  
「クツクツク、でも旦那、あんなに金を掛けて偽金を作つても儲けなんて無いだろ？」

「なんだって王子様はそんな事をしたんだ？」

コルトの正面、向かい合つて酒を飲むのは、大柄で暴力的な雰囲気、顔を隠そうともしない男だつた。

男の名はバル。

帝国金貨の偽造が形になつた後、自分の身を守る為に側に置く様になつた男だ。

「フリード殿下は別に利益の為に帝国金貨を偽造させた訳じゃない。偽金を流通させて帝国金貨の信用を貶すのが目的なのさ」

「はあ、信用？」

バルはよく分からないとばかりに首を傾げる。

「今、この中央大陸では多くの国々がそれぞれ金貨や銀貨を作つて  
いるが、その中でも信用がある、つまり価値があるのは帝国金貨と  
王国金貨だ。」

この2つの国の金は多くの国で両替なしでそのまま使う事が出来る。

その内、帝国金貨の信用が落ちるといふ事は、王国金貨がこの大陸の経済の中心になるといふ事だ。

そうなれば帝国の経済は大打撃を受け、王国の経済は大陸中を席捲する事になる。

その功績はフリード殿下にとつてとつともなく大きな物になるだろっ

「ふくん、よく分からん」

「まあ、別にお前が理解する必要は無い。

俺の身を守ってくればそれで良い」

「ガッハツハ！任せろ、誰が来てもぶっ殺してやるよ」

上等な椅子に腰掛けている男の前に傅き首を垂れる女がいた。

『蠍』と呼ばれる女だ。

右肩から先の腕は無く、傷が完全に癒えてはいないのか、顔色も悪い。

男が蠍に発言を許可すると、蠍は額が床に着くほど深々と頭を下げる。

「申し訳有りません、殿下。

与えられた任務を果たせなかった咎はこの命を以て償う所存です」  
「ふふ、頭を上げなさい。」

君は十分に役目を果たしてくれたよ」

「ですが……女商人どころか、同行していたシスターに敗れ……」

蠍は悔しさに奥歯を噛み砕かんとばかりに噛み締めた。

「構わん、そんな者が側に居た事を知る事が出来たからな。

それもまた面白い。

やはり、あの女商人、エリー・レイス……いや、エリザベート・レイストンこそが俺が探し求めていた女なのかも知れん」

男は機嫌良さげに笑う。

「そういう事でお前は気にする必要は無い。

退がって休め。支配下の魔物も殆ど失ったのだろうか？」

「面目有りません」

「気にするな。また用意してやる。

それからその腕もな。後で魔導義肢の職人を寄越す」

「殿下の御慈悲、痛み入ります」

蠍が退室した後、男は上機嫌で酒を呷った。

「鳥」

「はい、殿下」

部屋の隅の暗がりから滲み出る様に現れたのは娼婦の様な扇情的な服装に黒いベールで顔を隠した女だった。

「面白くなって来たな。蠍の腕を切ったとか言う、大鎌の神器を使

うシスターとはあいつだろ？」

「ティルダニア・ノーチラス。

『代行者』ティルダニアですね」

「ああ、まさかこんな大物が現れるとはな」

「刺客を放ちますか？」

「いや、まだ教会と事を構えるには早い。

それに、あの無能王子が無い知恵を絞って面白そうな事を始めた様だからな」

男はいつの間にか手の中で帝国金貨を玩んでいた。

「……………干渉しますか？」

「監視だけで良い。それよりも第五研究所の件はどうなった？」

「逃げ出した実験体はほぼ始末しました。

しかし、数体が国境を越えた様です。

現在『百足』『蜘蛛』『梟』に追わせています」

「追撃はいらん、戻せ」

「しかし、あの実験体が他国に渡れば……………」

「構わん。あのキングポイズンスライムのように変異種として処理されるだろう。

もし何かに気づかれるなら、それはそれで面白い」

「ですが逃げ出した中には……………」

「放っておけ、所詮は失敗作だ」

「御意」

男に頭を下げた鳥は現れた時と同じ様に、影に溶け込む様に姿を消した。

「……………さあ見せて貰うよ、エリザベート・レイストン。

君が本物の『イブ』になれるのかどうか」

## アンヤク(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## タイオウ

「ファンネル商会の現状はどうなっているのかしら？」

「はい、報告によりますとかなり悪どい商売をしていますね。」

エリー様が抜けた事でいくつかの商品の生産が出来なくなった事に加えて、量産法が確立していた主力商品である化粧品も原材料を安価で質の悪い物に変えたり、作業員の人員を減らし負担を増大させた為、品質が劇的に低下しています。

その所為で肌に合わず炎症などの症状が出たと言うクレームも王太子の名前で握りつぶしている様です。

取引先も王太子の名前を出されて切るに切れない状態ですね。

現在の代表はコルト・ブランチェ。

ブランチェ伯爵家の次男で王太子の取り巻きの1人です。取り立てて有能とは思えません。

如何にお金を搾り取るかとか考えていない小者です。他の幹部も似たり寄ったりですね。」

「よくそれで今まで商会が持ったわね。」

利益なんて殆ど出ていないでしょ？」

「王太子への収支報告書は偽装されている様です。」

利益を水増しして報告している様ですね。」

実際は複数の商会や金融機関から借金が嵩み、これまた王太子の名前で踏み倒しています。」

私はあんまりな惨状に目眩がする様だった。

それなりの蓄えがあった筈の私の商会が、何をやればたった数年でこれ程困窮するのだろうか。」

「ファンネル商会の名前も地に落ちたわね。」



「はい、エリー様が行っていた商会としての慈善活動などもお金の無駄だと中止したそうです」

「そう、商会内に潜伏している者達は？」

「既にかんりの人数が離れています」

現在、ファンネル商会内で我々の息のかかった者は数える程です。コルトはかなり慎重に準備していた様で、間者が情報を掴んだ時には既に偽金貨の生産が始まった後だった様です」

私はしばし瞑目すると、考えをまとめて指示を出す。

「ハルドリア王国の属国にダミー商会を作るわ」

大口の取引を餌にファンネル商会に接触しましょう」

「畏まりました」

直ぐに人員の選定を開始します」

ミレイの返しに頷くと、ルノアとミーシャを呼び、2人にも指示を出す。

「これからレブリック伯爵領の本店へ戻るわ。準備して頂戴」

ルーカスは自分の執務室で首を捻っていた。

「おい、先月、今月とハルドリア王国からの商人の流入がやけに多くないか？」

隣で作業していた文官がルーカスが差し出した資料を覗き込み妙

な顔をする。

「……………確かに多いですね。」

「1日、1日で見れば誤差の範囲ですが、トータルで見ると確かに異常に多いですね。」

「何か原因があるのか？」

「どうでしょう？ハルドリア王国との停戦が決まってから既に数年、経済活動が活発になるのはおかしな事では有りませんが……………」

「国同士はピリピリしていても、民間レベルでの交流はそれなりに進んでいる。」

「特に商人の類は利益になるのなら、長年の争いの相手であろうと気にせず商売を行う物だ。」

「それ自体は国にとって有益な事だが、この数字の変化は明らかに不自然、何処か人為的な感じがするのだ。」

「何者かの意図によってハルドリア王国の商人が帝国に送り込まれている気がする。」

「最近帝国に入った商人の目的を調べろ。」

「それと背後関係も洗い。」

「はい、直ぐに手配します。」

執務室を出てゆく文官の背を見送り、ルーカスは紅茶で舌を湿らせる。

「杞憂で有れば良いのだがな。」

「商人の目的はまだ分からない。」

「もしかすると自分の考えすぎで、ただ帝国での商売に光明を見た

商人が多かったのかも知れないが、それが分かるならそれでも良い。

ルーカスは言い表せない不安を抱え、何処か落ち着かない気分で仕事を続けるのだった。

## タイオウ（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## クンレン

手早く準備を整えた私達は馬車を駆りレブリック伯爵領の領都へ向かって出発した。

最近は帝都を中心に活動していたが、今回の件への対処の為に、より王国に近いレブリック伯爵領へ移動する事にしたのだ。

ファンネル商会の事は商業ギルドへは報告していない。

商会に忍ばせている間者からの報告以外に証拠も無いからだ。

間者からの情報だけでは正式に告発する事は出来ない。

仮令たとえそれで調査が入る事になっても末端を切って終わりだ。

それに私が苦勞して育てた商会を食い物にしている愚か者共は、私の手で叩き潰したい。

その辺りの思惑も有り、私は商業ギルドとは別口で動く事に決めた。

その内、商業ギルドの情報網に引っかかるだろうが、問題は無い。帝都からレブリック伯爵領へ向かう道中、治安の良くない領地に差し掛かった頃、私達の馬車の前を塞ぐ様に街道に丸太が転がされていた。

ミレイが馬車を止めると、茂みの中から薄汚い男達が馬車の退路を塞ぐ様に現れた。

「また野盗か」

帝都に向かう時にも絡まれた。

この領地は些か野盗が多すぎるのではないだろうか？

いくら領主の領内の管理が杜撰でも、冒険者は地域住民からの依頼や商人からの依頼で野盗を狩る。

こんなにも野盗が居付くなんて、裏で領主と繋がっていてもおかしくない。

そんな事を考えながら3人目の野盗を斬り捨てる。

視界の端ではミーシャが短剣を振るい野盗の首を掻き切っていた。

「ま、まて！待ってくれ！降参だ！降参する！」

残り4人になった野盗が武器を捨てて両手を上げていた。

「降参ねえ……同じ事を言った商人に貴方達がどうしたのか思い出してみたら？」

私がそう言うと、野盗達は顔を青ざめさせた。

コイツらの遣り口や動きから、コレが初めてと言うわけではない事は明白だ。

ミーシャも涙を流しながら命乞いをする野盗達を冷めた目で見ている。

ミーシャの両親も野盗によって殺されたと聞く。

初めての盗賊戦では動揺していたが、1度経験を積むと、ミーシャは容赦なく野盗を殺せる様になっていた。

「エリー様、いかが致しますか？」

いつもより低い声でミーシャが尋ねる。

私は4人の内、そこそこガタイの良い野盗を指さした。

「ミーシャ、コイツ以外は要らないわ」

「はい」

「な がばっ！」

それに驚いた野盗の1人の喉にミーシャの短剣が突き立てられる。

「ひっ！」

背を向けて逃げ出そうとした野盗の背中に投擲された短剣が突き刺さり、腰が抜けたのか、その場に崩れ落ちた野盗の首を素手のミーシャがゴキリと捻った。

流石は獣人族だ。

まだ小さなミーシャだが、野盗の首は不自然な角度を向いており、口からは泡を吹いていた。

さて最後に1人、残しておいた野盗にはやって貰う事がある。

「ルノア」

「ひゃい！」

馬車に隠れていたルノアを呼ぶと恐る恐る此方へとやって来た。

「ルノア、帝都を出る前に話したわね。

「覚悟は良い？」

「は、はい！だ、大丈夫です！」

ルノアは将来、立派な商人になりたいらしい。

その為に色々勉強しているのだが、一人前の商人になる為には乗り越えなければならぬ事柄が幾つもある。

今回、レブリック伯爵領への移動の際にその内の1つを済ませてしまおうと思っただのだ。

別にそういったルールが有る訳では無いが、コレをクリア出来ないなら、私はルノアを一人前の商人として認めるつもりは無い。

ルノアが私達の所まで来ると、私は捨てられた武器を拾い野盗へ手渡した。

「この子を倒せたら見逃してあげるわ。

この子が死ぬか、負けを認める、手足を斬るなりして戦闘の続行が不可能になればあなたの勝ち。

何処へなりと消えると良いわ。

それ以外、逃げ出そうとしたり戦わなかったりした場合は直ぐに首を刎ねるからそのつもりで」

「はあ」

驚く野盗を無視してルノアに向き直った私は優しく頭を撫でる。

「貴女の実力なら問題なく倒せる筈よ。

躊躇せずに殺しなさい。一人前の商人になるなら自分の身を守る事は必須だからね」

「はい！」



今までゴブリンや適度に弱らせたオークなどと戦わせた事はあったけど、人間の相手をさせるのは初めてだ。

此処で人を殺せない様では危険な行商の旅になど出す事は出来ない。

その場合はトレートル商会の鑑定士として安全な場所での仕事をさせる事になる。

ルノアが愛用の杖を取り出して構えるのを見て、野盗も剣を構えた。

ああは言ったが、勿論ルノアが殺されるのを黙って見届けるつもりなどさらさら無い。

本当に危なくなったら直ぐ様野盗を殺すつもりだし、ユウの店で買った上等なポーションも用意している。

これはあくまでもルノアの為の実戦訓練だ。

私が少し離れたのを見て、ルノアと野盗が戦い始めるのだった。

## クンレン(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## ケイケン

野盗の男は考えていた。

たまたま見つけた美味しい獲物。

女ばかりの一団に喜び勇んで襲い掛かったら、恐ろしい斬れ味の剣を持つ女と、奴隷の魔法刻印がある癖に俺達よりも遙かに上等な服を着た獣人族のガキに30人も居た仲間が次々に殺されて行ったのだ。

女共は徹底していた。

背を見せて逃げ出そうとする奴には馬車の御者をしていた女が投擲したナイフが突き刺さり、逃げ出す事を許さなかった。

結局、武器を捨てて投降したが、女の指示で俺以外は奴隷のガキに殺された。

そして残った俺なのだが、何故か捨てた武器を手渡され、ガキと戦えと言われた。

見たところ、人族で成人すらしていないだろう子供だ。

杖を持っている事から魔法使いなのだろう。

口振りから、このガキは女の弟子か何かで、俺と戦わせて実戦経験を積まそうとしているのだろう。

女は口では殺しても良いとか言っているが、そんな事をすれば逆上して殺されるかも知れない。

ならば俺が生き残るには、なるべくガキに手傷を負わせない様に  
勝つ事か。

俺は剣を振りかぶって踏み出した。

野盗が剣を振りかぶってルノアに斬りかかった。

ルノアは緊張している様だが、パニックになっている様子はない。

ミレイは周囲を警戒しており、ミーシャは心配そうにルノアを見  
ている。

私も取り敢えずは静観する。

「撃ち抜け【風弾】」  
エア・バレット

ルノアは野盗の剣を避けると、詠唱を省略した短文詠唱で魔法を  
放つ。

簡易的な詠唱によるイメージの為か、多少威力が落ちるが、ルノ  
アの魔法は野盗の体に命中する。

「ぐう！！」

威力が落ちているとは言え、【風弾】を受ければ思いっきり殴ら

れたくらいの衝撃を受ける筈だ。

顔を歪める野盗だが、痛みを堪えて無理やり剣を振る。

バックステップで野盗の剣を避けたルノアは続けて魔法を放つ。

「ぐあー！」

続けて打ち出された【風弾】の中に【風刃】エア・スラッシュが混ぜられており、

【風弾】なら我慢すれば耐えられると思った野盗は腕を大きく切り裂かれてしまった。

ルノアは出血で剣が下がった瞬間を見逃さず、距離を詰めると風を纏った拳を野盗に叩き込む。

【風掌】エア・ハンドと言う魔法だが、無詠唱で使った為、威力が極端に落ちている。

本来の威力なら野盗の身体はボロ雑巾の様になっていた筈だが、ルノアの【風掌】を受けた野盗は吹き飛ばされて背中から大木に叩きつけられただけだ。

「があぐうっ……」

野盗は打ちどころが悪かった様で、呻くだけで動けずにいた。それを見たルノアはチラリとこちらに視線を遣る。

しかし、私は何も反応をしなかった。

それを見たルノアは改めて気合を入れ直し、警戒しながら野盗へと近づく。

「はあ、はあ、ま、待って……待ってくれ！」

野盗はルノアから逃げる様に後退りながら命乞いを始めた。

折れたのか、片足が不自然な方に曲がり立ち上がる事は出来ない。

「もう2度とこんな事はしない！衛兵に出頭する！だから、だから命だけは助けてくれ！」

「……………」

「頼む！嬢ちゃん！お嬢さん！死にたくない、死にたくない！！」

「…………… 荒野を走る疾風 荒ぶる風を束ねて剣を打つ【風刃】！」

丁寧に詠唱された【風刃】は野盗の肩から脇腹を両断した。

「げふ…………た、た、すけ…………」

野盗がルノアに向かって手を伸ばすが、その手は直ぐに地に落ちた。

「はあ、はあ、はあ…………」

その光景を息も荒く見ていたルノアに近づいた私はゆっくりと頭を撫でる。

「よくやったわ、ルノア」

「エ、エリー会長…………」

「貴女のおかげでこの街道も少し綺麗になった。野盗なんかはゴミと同じよ。魔物でない分、ゴブリンよりもタチが悪い。

「貴女は正しい事をしたわ」

「は、はい」

「今日は御者の練習は良いから休みなさい」

私はミーシャを付き添わせてルノアを馬車で休ませ、自分は御者台のミレイの横に座った。

「やはりルノアにはまだ早かったのでは有りませんか？」

「いつかはやらなければいけない事よ。」

しばらくはシヨックでしょうけど、自分の中で折り合いをつけられれば大丈夫よ。

でも旅の間は気に掛けてあげて頂戴」

「はい」

一段、壁を乗り越えたルノアを乗せて、私達はレブリック伯爵領へと急ぐのだった。

## ケイケン（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## カイダン

レブリック伯爵領のトレートル商会の拠点へ戻って来た私は、出迎えてくれた商会員達を労い執務室の椅子に腰を落ち着けていた。

「お疲れ様です、エリー会長」

「久しぶりね、グランツ。」

ルノアの様子はどうか？」

「妻と少し話していましたが、落ち着いています」

「そう、しっかりと気に掛けていて頂戴ね」

「勿論です」

ルノアは初めて野盗を殺してから、領都に着くまでの間に落ち着いた様だった。

領都に着いてからはグランツ達、親元に帰したが、問題なく乗り越えられている様だ。

「頼んでいた件はどうなっているの？」

「はい、ステイア」

「此方が頼まれていた資料です。」

既に商会を置く国は選定してあります」

「ご苦労様」

「午後にはルーカス伯爵様との会食をセッティングしてあります」

「分かったわ。それまでにこの資料には目を通しておくわ」

それからいくつかの指示を出した私は、集められた資料に目を通すのだった。

陽が傾き始めた頃、派手すぎないドレスに着替えた私はミーシャが御者をする馬車でミレイと共にレブリック伯爵邸へ向かった。

屋敷に到着すると、使用人に迎えられルーカス様の所へと案内される。

応接室に入ると、ルーカス様に迎えられた。

「久しぶりだな、エリー会長」

「お久しぶりですわ、ルーカス様」

私達はお互いに和やかに挨拶を交わした。

その後、簡単に近況を話し、食事の用意が出来たとの事で場所を移した。

会食で卓を囲むのは私とルーカス様の2人だけだ。  
ミレイやミーシャは別室で食事を出して貰っているだろう。

「しかし、君も変わったな」

「あら、どういう事かしら？」

「王国を抜けたばかりの君はもっと張り詰めていただろう？」

「……………そうかも知れませんか」

確かに最近では以前ほどピリピリとはしていない。

勿論、王国への復讐心を忘れた訳では無いし、奴らから受けた仕打ちや亡命後の対応を思うと腑が煮えくり返って来る思いだが、そ

れとは別に今の生活を楽しんでもいる。

「ですが私の目的は変わりませんわ」

「わかっているよ。」

既に派手にやった後だしな」

「ロベルトの件ですか？」

「ああ、王国は未だに対応に苦慮している様だ。」

まあ、アレは半分以上は向こうの自滅と言えなくも無いがな」

「そうですね。」

あの紛争で私も派手に動いたのに未だに王国は接触して来ませんし」

「そこまで手を回す余裕が無いのだろうな。」

だが、流石にそろそろ見つかつても不思議では無いな」

「ええ、王国からの追手を躲す用意はそれなりにしているのですけどね」

所々に物騒な話題を挟みつつ、デザートまで食べ終えて、食後の珈琲を貰い、一息ついた所で私は切り込む事にした。

「さて、今日の本題なのですが………ハルドリア王国が帝国金貨を偽造して経済闘争を仕掛けて来ていますわ」

「なに」

「ハルドリア王国……正確にはあの馬鹿王子が糸を引いている様ですが、既に帝国内にいくらか入り込んでいます」

「……不味いな」

「ええ、既に商業ギルドには偽金が見つかった事は報告してありますわ」

「そうか……確かにここ最近、王国からの商人の流入が不自然に増えていたな」

「その中の何割かはフリードの息の掛かった商人でしょうね」

面倒な事になったと、ルーカス様は額を押さえるのだった。

## カイダン（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## ケイカク

「それで、君は何を企んでいるんだ？」

ルーカス様が呆れ顔で尋ねる。

「この偽金を作っている奴らを潰しますわ」

「フリード王太子の息の掛かった連中を潰したいと言うことか」

「それも有りますが……………偽金を作っている実行犯はファンネル商会。王国に残して来た私の商会なのです」

「頭をすげ替えてフリード王太子に乗っ取られた例の商会か」

「はい、私が残して来た商会ですし、この機会に片付けておこうかと」

「なるほど、では何故俺の所に？」

「協力して欲しい事があるのです」

私はコーヒークップを置き、現在進行中の計画をルーカス様に説明する。

「……………本当にそんな事が可能なのか？」

「フリードは現在王宮内での信用を失い、それを挽回しようと躍起になっているそうです。間違いなく食い付きますわ」

「……………」  
「この計画が成功すればルーカス様の功績も大きな物になりますわよ」

「……………わかった。初めからそういう話だったしな」

「ええ、私を助けてくれたルーカス様には約束通り利益を差し上げますわ」

「その利益を得るためには私も危ない橋を渡る必要が有るのだろうか？」

「それこそ、今更ですわ」

「確かにそうだ」

私はルーカス様と微笑み合うと、どちらからとも無く握手を交わすのだった。

「ふん」

政務から外されたフリードは自室でコルトからの報告を聞き、込み上げる笑いを抑えていた。

「良くやった、コルト」

「はっ！有り難きお言葉です、フリード殿下」

コルトが持つて来た報告書には帝国内にばら撒いた偽金の金額やそれによる利益などが事細かく記載されている。

設備投資の為に注ぎ込んだ金額には到底届いてはいないが、後半年も続ければ帝国経済に深刻なダメージを与えられるだろう。

「これで帝国を追い落とせる。

その功績を手に父王を廃せば俺がこの国の王だ」

「はい、フリード様の能力を理解せずに押さえつけようとするとは……ブラート陛下は御年齢の事もあり少々弱腰になっておられるの

でしょう。

ならば、フリード様が新たな国王陛下として即位され、ブラート陛下にご安心頂くのが親孝行というものですな」

「はっはっはっ！その通りだ。その時はお前も財務大臣として俺に仕えるよ」

「わ、私が財務大臣ですか」

「ああ、俺は王になったら上層部を一新するつもりだ。

今の官僚はカビの生えたロートルばかりだからな。

特に財務系の官僚連中は何かにつけてエリザベートの政策を持ち出して俺の邪魔ばかりしている。

あんな女の政策など、俺の国には必要ない。

これからの時代は俺やお前の様な若い世代が国を盛り立てて行くべきなんだ」

「流石フリード様！やはりこの国の未来を担うのはフリード様以外に考えられません！」

「はっはっは、世辞はよせ」

そう言いながらも明らかに持ち上げられて気を良くするフリードにコルトは自身の栄達を確信する。

「とは言っても先を見る目のない父王により、俺は謹慎中の身だ。

しばらくは表立っては動けんな」

「資金などは大丈夫でしょうか？」

今のフリード殿下は国庫のお金を動かさないのですよね？」

「それは心配するな。当てがある」

「当て？」

「俺の個人的なツテの様な物だ」

「そうでしたか」

「ああ、金の心配はない。

今は計画を練る事に集中するべきだな」



「はい、あ！しかし、来月にはパーティも有りますので、そちらも注力しなければいけませんね」

謹慎中のフリードだが、王太子として王国主催のパーティなどには出席する必要が有る。

その為の用意もしなければならぬ。

「全く、忙しくて堪らないよ」

今日のパーティは王国主催の記念パーティだ。

帝国と王国が停戦し、20年の不可侵条約が締結された事を記念して毎年開かれており、帝国でも今頃は同じようなパーティに王国の貴族が国王の名代として参加している筈だ。

ブライト王の王国と帝国の繁栄を願うと言う耳あたりの良い挨拶を聞き流したフリードは、婚約者であるシルビアと共に愛想笑いを浮かべて参加していた。

「おや、フリード王太子殿下」

一通りの挨拶を済ませたフリードに1人の貴族が声を掛けた。

帝国大使として皇帝の名代を務めるフリードよりも少し年上の帝国貴族だ。

腐っても英才教育を受けた王族である。

フリードは一瞬、顔に浮かんだ嫌悪の色をすぐに取り繕うと、笑

顔を浮かべて帝国貴族に向き直った。

「久しぶりだな、子爵。」

いや、伯爵になったのだったか。

遅くなったが祝わせて貰おう。

「陸爵おめでとう、レブリック伯爵」

## ケイカク（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## ケイヤク

「ありがとうございます、フリード王太子殿下。

ところで殿下、実は折り入ってご相談したい事が有るのです」

「相談？」

「はい、我が帝国と貴国の未来の為に」

シルビアをパーティ会場に残したフリードと、ルーカスは場所を  
会談用の小部屋に移し、向かい合って座っていた。

「それで、一体何の話だ？」

「はい、帝国と貴国の停戦が決まって数年、両国の関係を次の段階  
に推し進めるべき時だと思っております」

「ふむ」

「つきましては麦や芋をはじめ、現在交易に制限が掛かっている物  
品の制限緩和、規制品の一部解放、両国間の関税の引き下げなどの  
条約を結びたいと思っております」

「通商条約を結びたい、と？」

「正確には現在の条約の見直しですね」

ルーカスは笑みを浮かべて紙束を取り出した。

「こちらが帝国が希望する改定案です」

フリードが受け取り目を通すとこれまでの交易をそのまま拡大し  
た様な改定案が記されていた。

(特におかしな所はないな。

むしろ若干王国に有利な条件だ。

帝国との交易が拡大すれば偽金の流通を更に加速する事が出来る。  
だが……)

フリードは探る様に切り出す。

「確かに悪くない話だ。

しかし、この案をそのまま飲むと言うのはできん」

「と言いますと?」

「そうだな……この関税の引き下げだが、もう少し便宜を図っても  
らいたい」

「関税ですか……しかし、十分王国に配慮した条件だと思うのです  
が……」

「勿論、無条件でこちらに有利な条件を通そうとは思わん。

何か希望が有れば考慮しよう」

「うむ、では通商に関する細かな条約を整えるのと、関税の優遇  
に期限を付けると言う事で如何でしょうか?」

「期限だと?」

「はい、そうですね……向こう10年、関税に関して王国を優遇す  
ると言うのは如何ですか?」

「10年か……関税に関する細かな条約とはどういう事だ?」

「こちらは大した物では有りませんが、バランスを調整し、現在の  
条約の抜け穴を塞ぐ様な物です。

どれも他国間で結ばれている様なありきたりな条約ですね」

ルーカスはそれらが書かれた書類を取り出して手渡して来た。

(準備の良い奴だ。いや、初めからこの条約も結ばせるつもりだっ

たのか。

多少王国が有利でも10年後にはほぼ対等な条件になるなら、ここで通商条約を結ぶ事でコイツは功績を挙げる事が出来る。

だが10年後には帝国の経済は壊滅的な打撃を受けている事になる)

フリードは口の端が持ち上がりそうになるのを耐える。

「うむ、良いだろう」

「ありがとうございます、殿下！」

(帝国金貨の信用が暴落し、こいつが吠え面をかくのが楽しみだな)

嬉しそうに握手を求めるルーカスを内心では見下しながら、フリードは笑顔で手を差し出すのだった。

613

ファンネル商会の応接室でコルトは客を迎えていた。

「良く来たな、掛けてくれ」

「はい、失礼致します」

コルトが迎えたのは30歳程の男だ。

特にこれと言って特徴の無い、風貌である。

属国の1つに拠点を置く中小商会の番頭と名乗る男だ。

「改めまして、私はエリザベス商会のマーベリックと申します」  
「ファンネル商会のコルトだ」

挨拶がわりの握手を交わした2人は早速商談に入る。

「当方はハルドリア王国の庇護を受けるメリーナ王国の首都に店を構えているのですが、この度はハルドリア王国へ支店を出す計画が持ち上がりまして、私とその責任者を任された次第です。

そして大口の取引先としてコルト様のファンネル商会とお付き合いをお願いしたいのです」

「なるほど、何故うちなんだ？」

「王都を代表するほど大きな商会である、と言うことは当然なのですが、最近ファンネル商会では帝国との取引にも力を入れていらっしゃるとか」

「……………耳が良いな」

「はい、私共の様な小身の商会が生き残るには耳を澄ませ、強者の慈悲にすぎるしか有りませんから」

「それで、確かにうちは最近帝国との取引に力を入れているが？」

「はい、私共もいずれは帝国との取引を、と考えております」

「その為のパイプ作りも兼ねていると言うことが」

「おっしゃる通りです」

帝国金貨を偽造し、それを使って大きな取引を行っていたファンネル商会には、最近、こういった取引の誘いも多く来ていた。

「ふむ……分かった。数日待て、役員との協議の後、返事を返す」  
「かしこまりました。どうぞ宜しくお願い致します」

マーベリックはペコペコと頭を下げ退室して行った。

それを見送ったコルトは壁際で暇そうに立つ粗暴な雰囲気の人に声を掛ける。

「バル」

「なんでえ旦那」

「今の男、どう思う？」

「まあ、怪しいよな。」

どうにもやり手の商人って感じじゃないぜ。

俺が軽く殺気を漏らしたら僅かに反応していたし、ありゃあ裏稼業の人間だ」

「バル、あのマーベリックと言う男とエリザベス商会とやらの背後を洗えるか？」

「出来なくはないが護衛料とは別料金だぜ？」

「構わん」

「わかった……ああ、報酬の金貨は本物でな。がっはっはっは！！」

バルは、高笑いしながら去っていくのだった。



## ケイヤク（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## レンラク

「フリード！どういつつもりだ！」

ハルドリア王国の王城、その主人であるブラートの怒声が執務室に響き渡る。

机を挟んで不貞腐れた顔で向かい合っているのは、王太子であるフリードである。

「一体何を怒っているのですか、父上」

「貴様の勝手な振る舞いにだ！」

お前には謹慎を言い付けていた筈だ！

それが何故、勝手に条約などを結んで来る！」

「仕方ないでは有りませんか。」

王太子である私が王国主催のパーティに出席しない訳には行きません。

その場で帝国大使殿に声を掛けられたのに、謹慎中なのでお話できませんなどと断れないでは有りませんか」

「ぐう」

「それに私は我が国の利益の為に条約を結んだのです」

「むう」

ブラートがチラリと宰相であるジークの方を見る。

ジークはフリードが結んで来た帝国との新たな通商条約の詳細に目を通していた。

「陛下、フリード殿下が結んで来た条約には特に問題は無いと思われ  
れます。」

大筋は既存の条約の拡大、そしてそれに伴う調整と両国間の法的な整備。

どちらもおかしな点は有りません。

他国間でも普通に結ばれている物とほぼ同じ物です。

むしろ関税に関する条件は我が国にかなり有利な物です」

「……………わかった、今回は不問だ。

退がって良いぞ、ご苦労だった」

「はい、失礼いたします、父上」

勝ち誇った様な笑みを残し、執務室を出てゆくフリードを見送ったブライトはジークに問いかける。

「本当に問題ないのか？」

「はい、寧ろお手柄と言っても良いほどの成果です」

「どうなっている？俺はてっきり帝国大使の口車に乗せられて不利な条件での条約を結ばされて来たと思ったぞ？」

「そうですね……フリード殿下の話によると、初め帝国大使が用意して来た案でも既に王国に若干有利な条件が提示されていたそうです。

その上、フリード殿下が条件を釣り上げると、期限付きでは有りますが条件を飲んだ、と」

ジークは顎に手を当てて思考を巡らせる。

「多少不利でも条約を結びたかったと言うことか？」

「そうですね。帝国大使のレブリック伯爵は陞爵したばかり、此処で小さくてもしっかりとした手柄を挙げて地位を盤石な物にしたかったのではないのでしょうか？」

「思い当たるのはそんな所か」

ブラートとジークはしきりに首を捻るのだった。

開け放たれた窓から長い尾を持つ小鳥が部屋に飛び込んで来た。  
私が召喚したセイントバードだ。

脚に括り付けられた手紙をミレイが取り外し中を検める。

「エリー様、例の件に関する報告です」

「そう、貴方達は外して頂戴」

「はい」

「失礼します」

私は部屋で仕事していた商会員を退がらせると、ミーシャに目配せする。

私の視線を受けたミーシャは、扉の前に移動すると聞き耳を立てる者が居ないように警戒する。

鋭敏な感覚を持つ獣人族であるミーシャに気取られずに盗み聞きする事はまず不可能だろう。

開かれていた窓もルノアによって閉められ、カーテンも引かれる。

現在、執務室に居るのは私とミレイ、ルノアとミーシャの4人だ。

例の偽金への対抗作戦を知っているのは一部の人間だけである。

気配を探り、周囲に人がいない事を確認したミーシャが頷くと、  
ミレイが報告を読み上げる。

「エリザベス商会のマーベリックからの報告です。  
ファンネル商会の現代表、コルト・ブランチェとの接触に成功し  
たそうです」

「契約は結べそうなの？」

「いえ、まだ一度面会しただけのようですね。」

エリザベス商会の用向きを説明し、これから交渉に入るそうです」  
「わかったわ。マーベリックには多めにお金を撒いても良いから取  
引にねじ込む様に伝えて置いて」

「畏まりました」

私はミレイからマーベリックの手紙を受け取ると、机の引き出し  
にしまい、鍵をかける。

「ルーカス様からの連絡は？」

「まだですがタイミング的には今日中に届くかと」

と、話している内に、窓をコツコツと叩く音が聞こえ、ルノアが  
窓を開くとルーカス様の所に向かわせていたセントバードが戻っ  
て来た所だった。

## コウカイ

シルビア・ロッキートはつまらなそうな顔で、シャンパンのグラスを片手にパーティ会場で目的も無く佇んでいた。

庶民の生まれで片親。  
シルビアは、そんな底辺からのスタートで始まった人生に悲観していた。

元は貴族の屋敷で働いていた事もあると言う母親は、スラムに近い場末の酒場で客を取り、稼いだ日銭も殆どを酒に費やす様な人だった。

自分もその内、母親と同じように端金で体売られ、惨めに死んで行くのだらうと漠然と考えていた。

転機が訪れたのは母親が死んだ時だ。  
酒か、はたまた性病でも貰ったのか、原因は分からないが、母親は体調を崩すと呆気なく死んでしまった。

これからは自分で金を稼ぐしか無い。  
今までは酒場の給仕や簡単な手伝いで小銭を稼ぐ程度だったが、それではとても生きて行く事は出来なかった。

生きる為には、母親と同じ様に体売るしか無い。

母親に客を斡旋していた酒場の女主人に仲介を頼もうと出向いた時、そこではこの辺りの人間とはまるで違う上等な服を身に着けた男が女主人と話していた。

シルビアが見ている前で男と女主人が何事かを話した後、男はシルビアに話しかけて来た。

曰く、男はさる貴族様に仕える執事である。

曰く、母親はその貴族様の屋敷でメイドとして働いていた。

曰く、その貴族様がシルビアの父親である。

そして、執事を名乗るこの男は、貴族様の庶子であるシルビアを迎えに来たのだと言う。

正直『何を今更』と思わなくも無い。

しかし、このまま此処で母親と同じ運命を辿るよりはマシだろうとシルビアは執事について行く事に決めた、

連れて行かれたのは見た事もない程の大きな屋敷だった。

今にして思えば所詮は下級貴族。

貴族街ですら無い場所に構えられたこの屋敷よりも大きくて立派な屋敷などいくらでも有る。

しかし、貧民として生きてきたシルビアにとって、初めて見た貴族の屋敷は、噂に聞く王宮ではないのか、と思うほど立派に見えたのだ。

そこでシルビアは初めて自分の父親と対面した。

シルビアは少しだけ期待していた。

何かの事情があり、離れ離れになっていたが、父親は母親を愛しており、自分を助ける為に探してくれていたのではないかと。

しかし、父親に会い、それは幻想だった事を知る。

父親だと言う、でっぴりと腹の出たロッキート男爵は、好色を絵に描いたような笑みを浮かべながらシルビアをジロジロと見た後、メイドに何やら指示を出してすぐに部屋を出て行った。

その後、最低限の教育を詰め込まれたシルビアは貴族の通う学園へと入れられた。

入学までの僅かな間に知った事は、ロッキート男爵家が借金で破産寸前である事。

母譲りで器量の良いシルビアは、学園卒業後、羽振りの良い商人の後妻だが、第何夫人だかになるらしいと言う事だった。

なんて事はない。

借金でクビが回らなくなったロッキート男爵は、昔捨てた娘を売り払う事を思いついたただけだったのだ。

『貴族も平民も変わらないな』

その事実を知ったシルビアが思ったのはそれだけだった。

商人に嫁がされても貧民街で春を売るよりかはずっとマシだ。

そう思ったシルビアはロッキート男爵に言われるままに学園へ入学した。

そこでシルビアの運命は、再び大きく動く事になる。



あのキラキラした王子様と、温室でぬくぬくと育った癖に全てを知っているかの様に振る舞うイケすかない女との出会いだ。

色々と有ったが、結果あの女は捨てられ、シルビアは王太子の婚約者へと収まった。

まさに人生大逆転だ。

これでシルビアは幸福になる筈だった。  
それなのに……………。

あれだけ優秀だった筈の王子様は、仕事から逃げ回り、臣下からも陰口を囁かれる様になった。

いつも自分を気に掛け、遊びに連れ出してくれたのに、今では仕事や勉強でまともに構っても貰えない。

シルビアは学は無いが馬鹿でも無い。

未だに事実を認められず、逆恨みを続ける王太子と違い、フリードが優秀な王太子でいられたのは、あの女、エリザベート・レイストンのお陰だったと、既に気付いていた。

シルビアは殆ど飲んでいないシャンパンを近くの給仕に渡すと、早々にパーティ会場を出る。

王城に用意された自室へと帰るつもりだ。

「……………これで良かったのよね」

シルビアは自分に言い聞かせる様に呟く。

自分でも気付かない心の奥で、シルビアの後悔は続いていた。

潮風が髪を撫でる感触を楽しみながら彩暁は大海原を進んでいた。

大型の交易船を貸し切り目的地へと真っ直ぐ進んでいる。

「おい、嬢ちゃ……じゃなかった、彩暁アデル様。

そろそろ風が冷たくなるから船室に戻れ……お戻り下さい」

話しづらそうに声を掛けて来た既ケインに、彩暁は吹き出しそうになりながら返事をする。

「ぷっ！くっく。既船長、そんな無理な言葉を使わなくて良いよ。今まで立場を隠していたのはボクなんだから」

「い、いや、でもよお、彩暁……様は帝室の関係者なんだろう？」

「関係者と言っても末端だよ。

ボクの母上は皇帝陛下の従妹だけだね。

でもボクは異国の血を引いているから帝位継承権は無いよ。その内、宮を出て行く人間さ」

だから今まで通りの話し方で良いと言う彩暁に既は諦めた様に肩の力を抜いた。

「しかし驚いたぜ。宮廷から呼び出されたと思ったら彩暁の嬢ちゃ

んを運べだなんて」

「突然ごめんね。」

急な話で動かせる船が無かったんだ」

「まあ、俺たちは十分な報酬を貰うから良いけどよ」

彩暁を呼びに行った筈の阮が戻らない為、猫蓮が船室から出て話し込む2人に近づいた。

「彩暁様、阮船長、そろそろ中に……」

そんな猫蓮マオレンの声を遮る様に帆の上の見張りが鐘を打ち鳴らした。

「敵襲！敵襲！3時の方向！海竜だ！」  
シーサーベント

悲鳴の様なその叫びに、船室に居た船員達も飛び出して来る。

見張りが示した方角を見ると、遠くの波間に巨大な蛇の様な姿が垣間見える。

海竜と呼ばれる竜種だ。

ランクとしては火竜ファイアドレイクなどと同じ中位竜種と呼ばれる魔物だが、海に生息している都合、他の同ランクの魔物よりも遥かに厄介な存在である。

「くそ！なんだって海竜が！」

阮が苦虫を噛み潰した様な顔で吐き捨てる。

しかし、すぐに覚悟を決めると、指示を飛ばす。

海竜は既に此方を獲物として認識しているのか、真っ直ぐ向かって来ている。

「砲を用意しろ！術師は防御を！風術が使える奴は帆に風を送れ！」  
大声で指示を出した阮は1人の若い船員を呼び止める。  
若いが優秀で阮が特別目掛けている船員だ。

「おい！お前は彩暁の嬢ちゃんと猫蓮ちゃんを連れて小舟で逃げろ！」

「え　し、しかし、船長！」

「黙れ！反論は許さん！俺達が時間を稼ぐ！なんとしても2人を逃がせ！」

躊躇う船員に怒鳴る阮を止めたのは、異国の雰囲気纏った少女だった。

「まあまあ、阮船長、此処はボクに任せてよ」

「はあ　こんな時に何を言ってるやがる！」

「良いから、良いから。猫蓮、ちよつと行ってくるね」

「お止めしても行かれるのでしょうか？」

「うん、ボクも阮船長達にはまだ死んで欲しくないからね」

「では、ご武運を」

「お、おい！」

なお止めようとする阮を無視して彩暁は船の縁から身を躍らせた。

「な　」

船から海に落ちる間に彩暁は魔力を凝縮させる。

「神器【風華】」  
フエンファ

渦巻く様な魔力の奔流が彩暁に集まり物質化する。

それは羽織りだった。

艶やかな花と風を圖案化した美しい羽織りだった。

「【風歩】」

彩暁の足下に集まったのは風の塊。

それを踏み、彩暁は飛び上がる。

強化された身体能力で風を蹴ると同時に、集めた風を突風として体を吹き飛ばす。

それを数度繰り返した彩暁は瞬く間に海竜の頭上へとやって来た。

彩暁から放たれる強大な魔力に反応したのか、海竜は首をもたげると、人間とは比べ物にならない魔力によって口から水流を放つ。

【水息吹】ウォーターブレスと呼ばれる強力な攻撃だ。

彩暁は右腕を天へと振り上げる。

全ての指を揃えて、真っ直ぐに。

羽織りが旗めき彩暁の手刀に巻き付く様に風が這う。

「【風華】ふうか…つむじかせ旋風」

彩暁の手刀と共に振り下ろされた風の刃は、水息吹を切り裂き、海竜の鱗を深く斬りつける。

「【風華】ふうか…おろし嵐」

再び風を蹴り、怯んだ海竜のすぐ側を駆け抜けながら両手に纏った風を薙ぐ。

一瞬の静寂の後、海竜の首が落ち、海に血の赤が広がった。

「悪いね、海竜君」

海竜が死んだ事を確認した彩暁は猫蓮や阮が待つ船へと戻って行くのだった。

こうして彩暁の航海は続いていた。

## コウカイ(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## トリビキ

「コルト」

朝、目覚めたコルトが商会に向かう用意を済ませ、王都のブランチェ伯爵邸の自室を出ると、現当主である父に呼び止められた。

「おはようございます、父上」

「ああ、これからフリード殿下に任せられた仕事か？」

「はい、ファンネル商会で来客の予定があります」

「そうか……くれぐれも慎重に行動するんだぞ。ファンネル商会はエリザベート嬢が国の為に作った商会だ。

彼女が戻るまで、お前が守らねばならない。

最近はまだ良い噂は聞かないぞ」

「私の力が足りず、ご心配をお掛けしております」

「はあ、兎に角、お前はフリード殿下が暴走しない様にしっかりと目を光らせておく様に」

そう言い残して足早に立ち去る父をコルトは苦々しく見送った。

ファンネル商会の商会長室にやって来たコルトは不機嫌を隠さず護衛として付いているバルに声を掛ける。

「バル、エリザベス商会のマーベリックの調査はどうなった？」

「それなら今朝報告が来たぜ。」

「やっぱり妙な商会だ。つい最近になってメリーナ王国の王都の一



等地に商館を建てて大々的に商売を始めたらしい。

おかしいのはそれまで何処かで活動していた形跡が一切無い事だ。ポツと現れた癖に資金力に物を言わせて大きく商売をしている。バックに何か力のある奴が付いているのかも知れねえな。

商会長のエリザベスとか言う奴の姿は誰も見た事がないらしい。

あのマーベリックって男もそうだ。

今回、ファンネル商会と取引するって言う件で急に現れて責任者になったそうだ」

「怪しいな」

「ああ、経歴も洗ったが、綺麗な物だ。

まるで作り物の様にな」

「やはり取引の件は断るか」

コルトがそう考えていると、ドアの外から秘書が声を掛けて来た。

「コルト様、ビオート商会のベリット様がお見えです」

今日、面会の約束をしていた商人が到着したらしい。

「応接室で待たせておけ」

扉越しに言い付けると、コルトは再びバアルに顔を向ける。

あのエリザベス商会の件が有ってから、初めて面会する人間の素性は調べる事になっていたのだ。

「あゝビオート商会のベリットか。

調べているぜ。エリザベス商会と同じメリーナ王国の王都に商館を置く商会だ。

こっちはエリザベス商会とは違って王都で何年も店を出している老舗だな。

ベリットつてのも3代目である現商会長の息子で、次期商会長の名前だ」

バルから調査の結果を聞いたコルトは頷くと待たせている商人に会う為、席を立った。

「お初にお目にかかります。ビオート商会のベリットと申します」「ファンネル商会のコルトだ。

済まないが予定が詰まっていますね。

手早く用件を話してくれ」

「はい、用件と言うのは勿論取引の申し込みなのですが……………」

齒切れの悪いベリットの言葉に眉根を寄せたコルトは先を促した。

「どうした、さっさと話せ」

「はい、実は先日、こちらの商会にエリザベス商会から取引の打診があったとおききしまして」

「……………それが何か関係が？」

怪しいエリザベス商会の名前が出た事でコルトの警戒心が一段上がる。

「はい、コレは我々が独自に調べた情報なのですが、エリザベス商会はファンネル商会様を潰す為に作られたダミー商会らしいのです」

「……………」

「そこで、どうでしょうか？」

我々と組んで逆にエリザベス商会を潰すと言うのは？」

「詳しく話せ」

「はい、そもそも我々は迷惑しているのです。

ポツと出のエリザベス商会がお金をばら撒く様に我が物顔で商売をして市場を荒らしている現状は我が商会にとっても非常に業腹なのです。

しかし、相手は何者かの支援を受けているのか、全く資金が枯渇する様子を見せない。

そこで、奴らの標的らしいファンネル商会様と組んで、逆に奴らの資金を吸い上げてやろうと考えた次第です」

「ほう」

なるほど、エリザベス商会の奴らは派手にやり過ぎて地元の商会の恨みを買ったって事か。

バアルの話によればあのマーベリックと言う奴も裏の工作員としては優秀らしいが、商人としては二流以下って事だ。

「詳しい計画は有るのか？」

「はい、勿論です。

まずは表向きエリザベス商会と取引して頂いて……」

その後、ベリットが話す計画を聞いたコルトは彼と手を組む事を決める。

エリザベス商会の資金を吸い上げる事が出来れば、今の傾き掛けたファンネル商会を立て直す事が出来るかも知れないからだ。

「エリー様、予定通りファンネル商会との取引が成立致しました」

1日の仕事が終わりに、自室でミレイと珈琲を飲んでいた時、窓から手紙を携えたセイントバードが飛来した。

手紙はマーベリックからで、予定通りファンネル商会との取引が成立したという内容だった。

「計画も大詰めね」

「はい、マーベリックには予定通りしばらくはファンネル商会を儲けさせる様伝えておきます」

「お願いね。それと、計画に関わっている他の人員にも連絡を入れておいて。」

決行は2ヶ月後、私も直接乗り込むわ」

## トリビキ(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## カイコウ

「くつくつく……」

あれから2ヶ月、あのエリザベス商会とやらには随分と稼がせて貰っている。

俺達を嵌めるつもりらしく、信用を得たいのかこちらに有利な取引ばかりだ。

向こうに渡す金貨は全て偽金貨、それをメリーナ王国でベリットが手を回した鑑定士が本物であると鑑定した為、マーベリックの奴は疑いもせずに受け取っている。

その利益により、ファンネル商会はかつてない程に潤っていた。

一時はかなり危険だった経営も持ち直している。

そんな折、マーベリックから更に大きな取引の誘いがあった。

その取引の為にメリーナ王国に来て欲しいと連絡して来た。

奴の言によればこの取引は今までの取引とは段違いに大きな物だと言っ。

あからさまに怪しい。

そう思っていると、ベリットから連絡があり、エリザベス商会が荒くれ者を集めていると情報をよこして来た。

ベリットが調べた話では、エリザベス商会の目的は偽金製造ルートに乗っ取りらしい。

取引に出かけた所を捕縛すると言っ浅はかな策だ。

「面白いじゃないか」

「どうすんだ、旦那」

「勿論、乗り込むさ」

コルトはニヤリと口角を上げる。

そんなコルトにバアルは問う。

「おいおい、良いのか？明らかに畏だぞ」

「何のためにお前が居るんだよ。」

それともたかがチンピラ程度に尻尾を巻くつもりか？」

「へいへい、殺りゃ良いんだろ？」

「ああ、こちらも兵隊を集めるが、まあ、お前が居れば問題ないだろ？」

数日後、コルトはバアルを連れて、ハルドリア王国に近いメリーナ王国の田舎に有るエリザベス商会所有の倉庫の様な建物に案内されていた。

「ふん、馬鹿なのか？こんな所に呼び出したら今から襲います、と言っている様なものだろ？」

「がっはっは、わかりやすくして良いじゃねえか」

「それもそうだな」

既に従業員に扮した手下共も連れて来ている。

周囲には人目も無いので多少派手に暴れても問題ない。

そこにエリザベス商会のマーベリックがノックと共に入室して来る。

「これはコレはコルト様、お待たせして誠に申し訳ありません」

「いや、問題ない」

「それでは早速商談なのですが……」

「その前に」

「はい？」

「1人紹介したい者がいる」

「紹介……ですか？」

「連れてこい」

コルトが命令すると、1人の男が入室して来た。

「貴方は！」

「お久しぶりですな、マーベリック殿」

「べ、ベリット殿がなぜ此処に？」

今更警戒を露にするマーベリックの滑稽さに、コルトはまるで喜劇でも見ているのかと思う。

「何、ベリット殿が教えてくれたのだよ。」

君が俺達ファンネル商会を嵌めようと画策しているとな」

「な、な、何を……何を言っているのですか　そ、そんな事は……」

「おかしいですな、マーベリック殿、私が連れて来た者達が、この建物の様子を窺っていた武装した者達を数名捕らえたのですか？」

「な、い、いや、それはおそらく私共を狙う賊でしょう」

「どうだかな」



「と、兎に角、コルト様！我々はその様な事を考えてはおりません！  
そうだ！き、今日は我々エリザベス商会のオーナーがお世話にな  
っているコルト様に是非挨拶したいと……」

「ほう、エリザベス殿が来ていると？」

「い、いえ……エリザベス会長では無く、オーナーが来られていま  
す」

「オーナー？」

「はい！エリザベス会長はオーナーに雇われている方でして……」

「ふん、だったらさっさと連れてこい」

「は、はい、直ぐに！」

マーベリックは慌てて部屋を出てゆく。

「逃がして良かったのか、旦那？」

「多分、兵隊連れて来るつもりだぜ」

「なに、それなら正面から叩き潰してやれ」

この建物の周りにも100人以上潜ませている。

更にベリットも50人程兵を連れて来ているらしく、既に周囲の  
エリザベス商会に雇われた兵隊共を排除している様だ。

そしてこの場にもバルは別格として、かなり腕の立つ者達が6  
人も控えている。

ベリットの情報ではマーベリックが集めた者達はせいぜいがドラ  
ンク冒険者崩れだと言う。

そんな奴らはいくらいても物の数では無い。

「失礼致します」

戻って来たマーベリックがノックをして扉を開く。

「お待ち致しました」

「ふん、いくら兵隊を連れて来ても……え」

てつきり多数の戦闘員が雪崩れ込んで来ると思っていた。

しかし、マーベリックに付いて入室して来たのはたったの2人。しかも女だ。

2人の内の1人、美しい銀髪を腰まで伸ばしている女が、警戒心を露にする周囲を全く気にする事なくコルトの前のソファに腰を下ろし、連れのメイド服姿の女がその背後に立つ。

銀髪の女は何がそんなに楽しいのか、笑みを浮かべながら足を組むと、コルトに見下す様な視線を向ける。

荒事に慣れたチンピラ共では無く、美しい女が現れた事。

その女がこの状況を楽しんでいる様に笑っている事。

そんな事よりもコルトが驚いたのは別の事。

「初めまして、ファンネル商会のコルト殿」

違う、『初めまして』では無い。

コルトはこの女を知っている。

フリード王太子の元婚約者にして万能の天才と名高い公爵令嬢。

そして、ファンネル商会の産みの親。

現在は国家反逆の罪で指名手配されている女。

「私はエリザベス商会のオーナー、エリー・レイスと申しますわ」

エリザベート・レイストンである。

## カイコウ（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## ウラギリ

「う……あ……」

「どうかされましたか？コルト殿」

そう尋ねるエリザベートにコルトは動揺を隠し切れなかった。

エリザベス商会の裏に居る人間は何処かの貴族か豪商だと当たりを付けていた。

それがまさかあのエリザベートだ。

不味い……不味い……エリザベートは商売人としてだけでなく武人としてもかなりの実力者だと聞く。

いや、落ち着け……既に周囲に潜んでいるエリザベートの手下はベリットの配下が始末している筈だ。

なら目の前の2人とマーベリックを始末すれば良い。

こちらはバアルと腕利きが複数控えている。

いくらエリザベートでも勝ち目は無いはずだ。

エリザベートは国家反逆の指名手配犯、実質は王家が囲い込もうと探しているらしい。

生捕りに出来れば王家への恩を売れる。

それに未だ所在が掴めていなかった人物だ。

殺しても死体を始末してしまえば問題無い。

全身から冷や汗が噴き出るのを感じながらコルトは努めて冷静に考えようとする。

するとその場へ新たなる人物が扉を開けて現れた。

「失礼します」

入って来たのは猫人族の少女だ。

小綺麗な格好をしているが、魔法刻印があるので奴隷だろう。

「エリー様、周囲の伏兵の始末が終わりました」

「ご苦労様、生き残りは？」

「指揮官クラスと思われる者達を数名、降伏した者達を10数名捕らえています。」

捕虜はベリット様の私兵に預けておきました」

「な」

コルトは立ち上がりベリットを見る。

ベリットは苦笑いを浮かべながら手でエリザベートを示す。

「ご紹介が遅れました、こちらビオート商会のオーナー、エリー・レイス殿です」

「……………貴様……………最初から！」

ベリットは初めからエリザベートと手を組んでいたと言っことか。

「だが、ビオート商会は老舗の……………」

「クスクス、やはり貴方には商売人としての才能は有りませんね」

「な、なに」

「私はビオート商会を丸ごと買い上げただけですわ」

「ぐ」

エリザベートはファンネル商会を嵌める為にわざわざ老舗の商会を買い上げて、わざと怪しいダミー商会を作ったと言う事か！

だが、何故そんな事を……………」。

確かにダミー商会から資金を吸い上げるつもりで多額の金貨を費やしたが、それは全て偽金貨。

奴は金と手間を掛けて偽金貨を集めただけだ。

何が目的で……………」。

「1つ、良い事を教えて差し上げますわ」

「……………」

「今頃、貴方の偽金貨工場をレブリック伯爵の騎士達が制圧している頃です」

「馬鹿な」

レブリック伯爵と言えば帝国大使をしている帝国の貴族だ。

「此処は王国の属国であるメリーナ王国だぞ！帝国貴族が好き勝手に振る舞える筈がない！」

「あら、ご存知有りませんか？」

「？」

エリザベートは背後のメイドから書類を受け取りこちらへと滑らせた。

そこに書かれていたのは……………」。

「な、なんだコレは……………」

「そこに書いてある通りですわ。」

つい数ヶ月前、帝国と王国の間で通商条約が結ばれました。

そこで付随する条約として他国間で広く適用されている条約を、

帝国、王国間でも締結したそうですわ。

勿論、その中には偽金に関する条約も含まれます。

偽造硬貨が発見された場合、偽造された国はその偽造行為の捜査に限り、条約を交わした他国でも自国と同様に捜査権、逮捕権を行使出来る。

中央大陸では多くの国で結ばれている条約ですわよね」

「ば、馬鹿な……そんな話……」

「いいえ、条約の内容を詰めてつい数日前に発表された筈ですわ。商業ギルドを通じて各商會に通達された筈です」

此処に向かう為、数日前には帝都を出ていた。

その為になんざわざメリーナ王国まで呼びつけたのか。

「く……く、くくく、なら……仕方ないな……バアル！この女を殺せ！」

コルトの指示でバアルが前に進み出る。

「はあ、仕方ねえな。そういう訳だ、どうする、嬢ちゃん？」

「仕方ありませんわね」

指をボキボキ鳴らす巨漢のバアルを前にエリザベートはその微笑みを崩さない。

「では貴方の任務は此処で終了としましょう」

「はああ、なかなか良い金になる仕事だったのにな」

「貴方にはトレート商會の警備、護衛部門長の席を用意しているわ」

エリザベートと話したバアルは肩を竦めると、目にも止まらない速さで拳を繰り出しコルトの背後の腕利きを殴り飛ばす。

壁に叩きつけられた護衛は口から血を吐き出して絶命している。



更にバルはコルトが言葉を発する暇も無く、護衛達を殴り、蹴り殺した。

コルトは驚愕の表情でバルを見る。

「バル！貴様、裏切るのか」

「おいおい旦那、人聞きの悪い事を言うんじゃないやねえよ。俺は最初からお嬢の配下だぜ」

「バル、エリー様にその様な口の利き方は……」

「悪いなミレイの姐さん、俺は育ちが悪いんだよ」

エリザベート達と親しげに話すバルにコルトはようやく、自分の味方など、この場には初めから居なかつた事を悟った。

## ウラギリ(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## タクラミ

呆然とするコルトを無視し、ドアの前に立つミーシャに視線で合図を送った。

するとミーシャが扉を開き、外で待つ者達に声を掛ける。

そして部屋に入って来たのは3人、レブリック伯爵の下で働いている法衣貴族の文官と、護衛の騎士が2人だ。

「な、なんだ」

「帝国の文官と騎士様ですわ。」

コルト殿をお迎えに来て下さったのです」

「ば、馬鹿な！馬鹿な！馬鹿な！」

お、俺は貴族だぞ！こ、こんな事が許される訳……」

「許されます。コレは法によって定められた正式な身柄の拘束ですから。」

ああ、ご安心を。

貴方のお仲間は直ぐに帝国に引き渡されるでしょう。

金貨偽造に関する書類は粗方押さえましたし、貴方の証言もあるでしょうから」

「俺の……証言？」

「ええ、帝国の拷問官……失礼、尋問官は優秀らしいですから。」

コルト殿もきつと素直にお話ししたくなるに違いありませんわ」

私の言葉を理解すると、コルトの顔からスツと血の気が消えた。

「ま、待って……話す！話すから！」

「ええ、お話し下さい。

でも貴方が全てを話したと決めるのは私では有りません。

大丈夫ですよ、優秀な治癒魔法使いを用意してあるらしいので」

「ま、ち、違……」

「コルト・ブランチエ。帝国金貨偽造、及び帝室侮辱の咎で貴様を拘束する」

文官は取り出した書状を読み上げると、騎士達が問答無用でコルトを組み伏せて連行して行った。

何かをわめいている様だが、話なら帝国の拷問官が聞いてくれるだろう。

帝国金貨の図案は帝国の紋章と初代皇帝の横顔が刻印されている。

コレを無断で鑄造する事になる為、金貨の偽造は、同時に帝室への侮辱の罪にも問われる事になる。

先ず、生きて解放される事はないだろう。

久しぶりの金貨偽造の罪人だ。

見せしめとして、可能な限り惨たらしく処刑されるだろう。

「さて、こちらは片付いたわね。帰るわよ」

マーベリックとベリットに撤収を指示した私は、一足早くミレイとミーシャと共に馬車で次の場所へ移動を始める。

此処から1日程の距離にある金貨偽造の工房だ。

「やあ、お疲れ」

「あら、ルーカス様。わざわざ外で出迎えていただきかなくとも良か

ったでしょうに」

翌日、私たちが工房に到着すると、慌ただしく資料や証拠などを運び出す帝国兵達に混じってルーカス様が待っていた。

「コレを君に見せたくてね」

ルーカス様が一枚の書類を手渡してくれた。

「コレは……」

「君にとって良い武器だろ？」

それはこの帝国金貨の偽造がフリードの指示である事の証拠となる書類だった。

「本物ですか？」

「筆跡を鑑定しなければ分からないが、多分本物だろう。」

帝国に戻ったら直ぐに鑑定しよう」

こんな決定的な証拠を残しておくとは、あの王太子の愚かさを再確認した気分だわ。

「コレはルーカス様がお持ち下さいな」

「なに？」

「いくらなんでも王太子を罪人として帝国に引き渡すなんて事はないでしょう。」

あの馬鹿の身柄と引き換えにかなりの賠償を請求出来る筈です」

「良いのか？君なら別の使い方も出来るだろう？」

「構いませんわ。」

フリード個人を追い詰めるより、帝国に賠償させて王国の国力を

削ぐ方が得と見ました」

「そうか……では、有効に使わせて貰おう」

私はルーカス様に書類を返したのだった。

ルーカス様と合流した後、私はルーカス様の馬車に同乗して帝国へと帰国する道中に居た。

此処は王国と帝国の間の荒野に隣接する小国であるメリーナ王国から、帝国に編入されたサージヤス王国に続く街道であり、側の森を越えると、広大な砂漠が広がっている場所だ。

「しかし、随分と上手く行ったものだな」

「当然ですわ。私が作った商会ですもの、間者によって向こうの情報は筒抜けです」

「そのファンネル商会もこれで終わりか」

「間違いなく取り潰しですわね。」

まあ、私の息が掛かった者達は全て抜け出した後ですから、残っているのはフリードが集めた甘い汁を吸うだけの寄生虫共だけですから  
わ

「そうか、それから主犯だったコルトと言う男は貴族の出だろうか？  
実家の方はどう出る？」

「おそらく当人と縁を切らされた上で降爵、当主は強制隠居と言ったところでしょうか。」

フリードが主犯である以上、家族諸共処刑とは行かないでしょう  
ね

「君にしては優しいじゃないか」

「……………ルーカス様は私をなんだと思っていますの？」

私が半目で睨むと、ルーカス様は肩を竦める。

「ロベルトの時は民を巻き込んで大勢の死者を出しただろう？  
だが今回は犯罪者を捕らえただけだ。

俺はてつきり今回も血の雨が降る事になると思っていたぞ」

「私はそこまで悪辣では有りませんわ。

必要なら民を巻き込む事も厭いませんが、殺戮を楽しむ趣味は有りません。

それに、今回の一件は下準備です」

「下準備？」

「ええ、私は王国を潰すと言ったでは有りませんか」

ルーカス様が眉根を寄せて見せる。

「今回、王国は主犯であるフリードを差し出す訳には行きませんが、  
ですが、それ以外の貴族出身者の幾らかは帝国に引き渡されるでしょう」

「そうだな、全員渡せないなどとは言えないだろう」

「そうになると、引き渡された方の貴族はどう思うでしょうか？」

「それは……フリードのしかした所為で一族の者を帝国に差し出す事になり、更に降爵の不名誉」

「更に元凶であるフリードは健在となると？」

「王国の貴族と王族の間に不和が広がる……か？」

「はい、更に王国は現在属国との関係が悪化しております。

そしてロベルトの一件で貴族に対する平民の感情も良くありません。

これらも、元を正せばフリードの仕業ですね」

ルーカス様は私の言葉を聞き、自分の瞳を覆う。

「まさか……………」

「燻る火種に油を注ぎ、風を送ればどうなるか」

「……………大勢の死者が出るぞ？」

「初めからそう言っているでは有りませんか」

「……………やはり君は恐ろしいな」

固く目を閉じて溜息を吐き出すルーカス様に、何を今更と返す。

この計画を実行すればロベルトの事件とは比べ物にならない程の死人が出るだろう。

だが、私は止まるつもりは無い。

このまま行けば王国は立て直すことなく滅亡する。それを私の手で早めてやるだけに過ぎない。

そこから話題を変えた。

私が今力を入れているチヨコレートの話をし、ルーカス様が自領にも出店しないか？と誘いを掛けて来た時だ。

私たちが乗る馬車に大きな衝撃が走った。

車体が激しく揺れ、馬車を引く2頭の馬が竿立ちになり嘶く。

「何だ」

ルーカス様の声に応えた訳では無いだろうが、外から警備の騎士の叫び声が聞こえた。

「敵襲！敵襲！」



## タクラミ(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## オウセン

この馬車を護衛しているのはレブリック伯爵家の騎士の中でも腕利きだ。

その騎士達が動揺し、悲鳴の様に『敵襲』と叫んでいる。

それだけで、馬車を襲った者の異質さを感じるには十分だった。

私とルーカス様はそれぞれ、左右のドアを破壊する様に外へと飛び出した。

「な、何……これ……」

そこに居たのは竜種だった。

だが、私の知っている竜種とはどこか違う。

大まかにはファイアドレイクなのだが、所々に青い鱗や水晶の様な突起が存在しているのだ。

「見た事がない魔物だが、竜種か？」

ルーカス様も知らない魔物か。

初めて見る魔物を観察していると、さっきから感じていた違和感の正体に気付いた。

「この竜種……なんだか歪ね」

竜種が纏う魔力が不自然なのだ。

体から放出される魔力の性質が部位によって違う。  
自らの魔力同士が反発する事で異様な気配となっている。

「変異種……か？」

「おそらく……原種はファイアドレイクの様ですけど、此処まで歪な変異種が自然界でよく此処まで成長した物ね」

普通、この手の異常を抱える魔物は生まれて直ぐに淘汰される。

まともに成長する事など不可能に近い。

現に、目の前の竜種は自らの魔力の歪みに錯乱し、周囲の生物に見境なく攻撃しようとしていた。

「このままでは被害が出る！討伐するぞ！」

「仕方ありませんね」

「お前達は退がって非戦闘員を守れ」

「ミレイもミーシャと退がって、バアルは馬を」

周囲の者達に手早く指示を出すルーカス様の横で私も後続の馬車から降りて来たミレイ達に指示を出す。

すると、目の前の竜種が私達に狙いを定めたのか、口元に魔力を集めていた。

「ブレスが来るぞ！」

警戒を呼びかけるルーカス様の声を背に、私は前へと飛び出した。

「アイス・ウォール  
【氷壁】」

魔法で作り出した氷の壁が竜種のブレスを受け止める。  
しかし、竜種のブレスは強力な火属性の魔力が込められており、私の【氷壁】はみるみる内に蒸発して行く。

「代われ！」

ルーカス様の声に、私は咄嗟に後ろに跳んだ。

ルーカス様は私と位置を入れ替える様に前に出る。

「神器【リアマ・ファイロ鋭き火種】」

ルーカス様から溢れ出た魔力が凝縮し、一振りの剣へと変じる。

ルーカス様の神器【鋭き火種】は剣だ。

フランベルジュと呼ばれる剣に酷似した揺めく炎の様な波打つ刃を持ったその長剣を片手で軽々と振り、感触を確かめた後、両手で握り直し腰ダメに構える。

「【焰斬り】」

【スキル】なのだろう。

ルーカス様は、氷の壁を融解し迫る灼熱のブレスを斬り散らしながら、竜種へと肉薄する。

「はっ！」

気合一閃、ルーカス様が長剣を振り切り竜種の足を斬りつけるが傷は浅い。

「くっ、硬いな」

アイス・ランス  
「【氷槍】」

ルーカス様が離れるのと同時に氷の槍を撃ち込む。  
しかしそれも竜種の鱗に阻まれる。

「通常の竜種よりもかなり防御力が高いですね」

「ああ、それに見ろ」

ルーカス様が斬りつけた傷は既に出血が止まっていた。

「再生力も高いですね」

「厄介だな」

此方を威嚇する竜種と対峙し、私は神器を発動させる為、魔力を凝縮するのだった。

## オウセン(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

ハハオヤ

「神器【強欲の魔導書】グリモア・マモン」

【強欲の魔導書】に収納されていた翼フリューゲルを持つ者を取り出し抜剣すると、地を蹴って竜種へと向かう。

竜種はブレスを吐くが、横から飛び込んだルーカス様に斬り払われ私には届かない。

ルーカス様の横を走り抜け、竜種の胴体を薙ぐ様にフリューゲルを振るう。

極限まで薄く鋭い刃は竜種の鱗を何の抵抗も無く切断し、肉を斬り裂いて行く。

そのまま腕を振り抜く。

「な  
」

一瞬、衝撃が有った。

フリューゲルの刃を見ると粉々に砕けている。

斬れなかった。

刃筋は一切ブレていない。

では何故……フリューゲルを以てしても切断出来ない程の何が有る？

「エリー!!!」

ルーカス様の声にハツとする。

ほんの僅かな間であるが、動揺した。

目の前には竜種の尾が迫っていた。

「くっ!」

腕に魔力を込めて受け止め、自ら後ろに跳び衝撃を殺す。

地面を1度跳ねたが、なんとか体勢を変えて着地する。

追撃しようとする竜種の目の前に巨大な炎が上がり視線を遮る。

「大丈夫か!」

「問題ありません。ルーカス様、10秒稼いで貰えますか?」

「わかった」

私は再び魔力を練る。

「神器【暴食の魔導書】  
グリモア・ヘルゼブフ」

私が神器を発動したのを見てルーカス様が竜種から距離を取る。

「ライトニング・ヒール・ストーム・エッジ【光の柱】【暴風刃】」

光の柱が竜種を貫き無数の風の刃がその身を切り裂く。

巻き上げられた土煙が竜種の姿を隠す。



煙が晴れると竜種の姿が見えて来た。

「これでもダメか」

「2つも上級魔法を浴びてあの程度ですか」

竜種は負傷こそしているものの、行動に支障は無い様で、その傷も既に再生し始めている。

「どうする？逃げるか？」

「流石に放置は不味いのでは？」

「では、どうする？」

「……………ルーカス様、帰りの護衛は頼りにして良いでしょうか？」

「ん？どういう事かはわからんが、こんな化け物でも出ない限り問題は無いだろう」

ルーカス様の言葉を聞き、決断する。

代償が大きいので本当は使いたくないが仕方ない。

「神器【グリモア・レヴィアタン嫉妬の魔導書】」

物質化した【嫉妬の魔導書】を素早くめくり、目的のページを開いた私は更に魔力を込める。

「神器【グラザミエーチ雷神の剣】」

【嫉妬の魔導書】が消え去ると同時に雷を纏う大剣へと変じた。

「それは」

驚くルーカス様を横目に私は【雷神の剣】を振り上げる。

「トルハンマー【雷神の鉄鎚】」

此方に向かって迫っていた竜種を閃光が包む。

空から振り下ろされた戦鎚のごとき雷が地響きと共に竜種へと突き刺さる。

その圧倒的な熱量は周囲の空間を焼き尽くした。

閃光が収まると、そこには竜種の原型を留めてすらいない煤が残されているだけだった。

啞然とするルーカス様の隣で私は崩れ落ちる。

「エリー様！」

それを見たミレイとミーシャが走り寄って支えてくれる。

「大丈夫よ、ただの魔力切れだから……」

「エリー会長……先程の剣はまさか……」

【嫉妬の魔導書】の効果に気付いたのだろう。

ルーカス様が声を掛けて来た時だ。

消し炭になった竜種の残骸が崩れた。

その物音に反射的に警戒を向ける。

「……………な、何だアレは」

誰のかも分からない眩きだが、その場に居た全ての者達の代弁としてこれ以上の物はない。

竜種の残骸から出てきたのは大きな球体だった。

水晶球の様にも見えるそれは、あれだけの雷撃を受けていながら、一切の傷も曇りも無い。

だが、それよりも私達を混乱させたのが水晶球の中身だった。

「お、女の……子？」

水晶の中に膝を抱える様に身を丸めた少女が閉じ込められていたのだ。

歳の頃は10にも届いていないだろうか。

初めて会った時のルノアよりも幼い様に見える。

「何だ……どうなっているんだ？」

ルーカス様が呟くと、ピシツと音が鳴った。

見ると少女を内包した水晶球に罅が入っている。

その罅がだんだんと広がって行き、全体を覆うと、パリンと意外と軽い音を立てて水晶球が砕け散った。

粉々になった水晶は空気に溶ける様に消え去り、後には少女だけが残された。

周囲が静まり返る中、私は慎重に少女に近づき、取り敢えず抱き起す。

少女の体は温かく、胸が上下している。

生きている様だ。

私は自分が着ていたローブで少女の裸体を隠すと顔に掛かっていた髪を整えた。

光を放っているとすら錯覚しそうな金色の髪、顔立ちは整っているが、幼さ故に美しさよりも愛らしさが際立つ。

「ん」

すると少女が身じろぎし、ゆっくりとその目を開いた。

『綺麗』

ただそう思った。

少女の瞳は右目は夕日を写し込んだ様に紅く、左目は広大な海の様澄んだ青。

「……ま」

少女が口を開く。

「ママ？」

数刻後、私は再びルーカス様と共に馬車に揺られていた。

「しかし……本当に何者なのだろうな？」

ルーカス様の視線は私の膝を枕に眠る少女に向けられている。

その後、私達が何かを尋ねる前に少女は瞳を閉じて寝息を立て始めたのだ。

その手が私の服の裾を握ったまま離さないの、そのまま寝かせている。

「こんな事って有るのでしょうか？」

「有るわけないだろ？」

「ではこの子は？」

「……………」

腕を組んで首を捻ったルーカス様は諦めた様に『分かん』と言葉を溢した。

「無理に聞き出すつもりはないのだが、あの神器は……………」

話は変わるが、と前置きしたルーカス様が私が使った【嫉妬の魔導書】について聞いてくる。

まあ、ルーカス様になら言っても良いわね。  
特に隠すつもりも無いし。

「アレはブライト王の神器【雷神の剣】ですわ」

「やはり」

私の【嫉妬の魔導書】は神器を記録する魔導書です。条件を満たした人物の神器を記録し、使用する事が出来ますわ。

ただ、その条件は厳しい上、発動時に込めた魔力が尽きると消滅し、一度発動すると、消滅してから72時間、私は一切魔力が使えなくなります」

「なるほど、それで護衛の話をしたのか」

「ええ、今の私は無防備ですから。  
フリーゲルも完全に折れてしまったので再生するまで数ヶ月は  
必要です。」

「ですので……」

「そこで一息間を置き……」。

「私を殺すなら今が好機ですよ」

「……………何の冗談だ？」

「おや、ルーカス様は私を恐ろしいと思っていたのでは？」

「恐ろしいさ。だが……君は私に利益を齎すのだから？」

「ふふ、勿論ですわ」

ルーカス様がニヤリと口角を上げた。

多分私も同じ様な顔をしている事だろう。

ブラートは王城の一室で頭を抱えていた。

帝国金貨を偽造していた者達を捕縛する為、帝国の兵が国境を通  
過する、と連絡が有ったのが7日前、捕らえられたのが我が国の貴  
族に連なる者だった、と知らせが来たのが4日前、そしてその首謀  
者が息子であるハルドリア王国王太子フリード・ハルドリアと言  
う情報を持った宰相ジーク・レイストンが部屋に飛び込んで来たの  
が、つい先程の事だ。

「ジーク、フリードはどうしている」

「既に此方にお連れする様、人を向かわせました」

「そうか」

「帝国はどう言っている」

「金貨偽造に関わった者達の身柄の引き渡しと賠償ですね」

「流石に王太子であるフリードを罪人として帝国に送る訳には行かんか」

「そうですね。」

王家への支持は暴落するでしょうし、帝国がフリード殿下を神輿に王国に進軍してくる可能性もあります」

「だがそうなると……」

「賠償金が跳ね上がりますな」

「それだけではないだろう？」

「はい、先日フリード殿下が結んで来た条約も見直されるでしょう。おそらくかなり王国に不利な条件となるかと」

ブライトは再び頭を抱える。

「要求を突っぱねるのは……」

「無理でしょう。そうなれば停戦条約を無効にして戦端を開く口実になります。」

数年前なら兎も角、今戦争となる訳には行きません」

「属国に背後を突かれる可能性があるな」

武人として鳴らした男が人生で1番の痛みを受けている。

「それと陛下、例の件なのですが……」

ジークがブライトの耳元で手短に報告すると、ブライトは諦めと

も安堵ともつかない溜息を吐き出した。

そこでフリードが部屋に到着する。

何故か呼んでもいないシルビアも連れてきているが、最早それを咎める気力も残っていないかった。

「お呼びですか、父上」

「……………お呼びですか、では無い。

自分が何をしたのか分かっているのか」

「何の事でしょう？」

「偽金の件だ」

「……………」

「フリード。此度の件、お前はやり過ぎた。

いくら俺でもこれ以上は庇い切れん。そこで……………」

ブラートは苦しそうに奥歯を噛む。

「そこで、手を打つ事にした」

「……………父上？」

そこで取り次ぎの従者から話を聞いたジークがブラートに耳打ちする。

それに頷きで返したブラートは扉に向かって声を掛ける。

「入れ」

扉が開き2人の人物が部屋に入ってくる。

「な」



ガタツと椅子を鳴らしフリードが立ち上がる。

「何故、お前が此処にいる！」

その2人は女だった。

1人は従者、南大陸に多い黒髪に黒目の若い女。

もう1人は更に年若い少女だった。

従者と同じく黒い髪だが、その瞳は鮮やかな翠。

全体的な顔立ちは中央大陸の人間だが、纏う雰囲気は南大陸の気を帯びている。

混血特有の魅力を持つ少女だ。

少女は怒鳴るフリードに肩をすくめて言い返す。

「何故って、呼ばれたからに決まっているじゃないですか」

「何だと」

苛立たしげに少女を睨みつけるフリードを無視してブライトは遠く南大陸から呼びつけた少女に声を掛ける。

「久しぶりだな、アデル。」

「急な呼び出しで済まん」

「まあボクは構いませんけどね。お久しぶりです。父上、兄上、ジーク様も」

それから部屋にいる人間の顔を1人1人確かめる様に見たハルドリア王国第一王女、彩暁<sup>アデル</sup>・ハルドリアは最後にフリードの横で所在なさげに座るシルビアに視線を向け、首を傾げた。

「ところで……エリザベート姉様は何処に？」

## ハハオヤ（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## オカザリ

首を傾げるアデルに言いづらそうにしながらもジークが現状を詳しく説明する。

その話を聞き、次第にアデルの表情が不機嫌になって行く。そして全ての説明が終わる。

「……………馬鹿なんですか？」

そう言われてもしかたない。

ブラートは娘のその言葉を甘んじて受ける。

しかし、フリードは舌打ちをして腕を組んでいた。

「先ず兄上、何故エリザベート姉様との婚約を破棄したの？」

「ふん、奴がシルビイにした事を思えば当然の事だろう」

「証拠は？」

「は？」

「ですから、エリザベート姉様がそのシルビア嬢を害そうとした証拠だよ」

「そんなもの、シルビイの証言で十分だろう」

「そんな訳無いでしょう」

「ではなんだ？貴様はシルビイが嘘をついているとでも言いつつもりか！」

「そう言っているんだよ」

アデルがそう言つと、シルビアが立ち上がった。

「お待ち下さいアデル様！私はその様な事は……………」

「シルビア嬢」

シルビアの言葉を遮りアデルの冷たい声音が響く。

「ボクは君に発言を許した覚えは無いよ」

「アデル！シルビアは俺の婚約者だぞ！貴様は何様のつもりだ！」

「何様って、ボクは王女様だよ。」

婚約者は所詮、婚約者。今の身分はただの男爵令嬢に過ぎない。

上位者に対して許可なく声を掛けるのは不敬だと言うのは常識だ

よ

「……………」

アデルの視線に晒されてシルビアは縮こまってしまふ。

「それで父上、何故ボクを呼び戻したのかまだ聞いていないよ」

「ああ……エリザベートの出奔を始め、今の王国の現状はフリードを諷め切れなかった俺の責任だ。」

「だが、今回ばかりは俺も腹を決めた」

「どういふ事ですか、父上」

フリードが訝しげにブラートを覗む。

「アデル、お前には王太子の補佐として働いて貰いたい」

「……………ボクにエリザベート姉様の代わりをしる、と？」

「違う。形としては補佐だが、実質、王太子としての権限を与えるつもりだ」

「な」

「フリード、この際だからハッキリとっておく。貴様はお飾りだ。今後、王太子としての権限は剥奪する。」

何かする時はアデルの承認を得よ」

「馬鹿な」

「それでも温情を与えている。  
ハルドリア王国は伝統的に雷属性の魔力適性を持つ者が王位に就いてきた。」

だからお前を一応王位に就かせるつもりだが、実務は全てアデルに任せる。」

この上で更に問題を起こすならば、お前は廃し、正式にアデルを女王として即位させる」

啞然とするフリードを無視してブラートはアデルに向き直る。

「そういう訳だ。良いなアデル」

アデルは不機嫌そうな顔を直す事なく尋ね返す。

「その場合、ボクの権限はどうなるのかな？」

「お前には準1級命令権を与える」

「王太子と同等の権限か……兄上の権限は？」

「フリードには4級命令権を与えるが、しばらくは権限を停止する」

アデルはしばらく瞑目すると頷いた。

「分かった、それで良いよ。」

では早速、ジーク様。

調査委員会を設置してエリザベート姉様の容疑を再調査して。

それから王城にボクの執務室を設置して欲しい」

「待て！俺は認めんぞ！」

「兄上、これは王命だよ。」

ボクにも、兄上にも拒否権は無い。

それから今後は兄上には監視役を付ける。

人員を選考するまで自室で謹慎しておいて」

「貴様……妹の分際で！」

「黙れ、フリード。ジーク、アデルの指示通りに計らえ」

「御意」

「ではボクはこれで退がらせて貰うよ。」

兄上がしでかした一件の後始末をしないといけないからね」

アデルは席を立ち侍女を連れて部屋を後にする。

そしてドアに手を掛けながらブラートとジークに視線を送る。

「ボクは怒っているよ。それは兄上だけじゃない。父上にジーク様  
あなた方がエリザベート姉様を見捨てた事にも怒っている。

それは忘れないでね」

そう言い捨ててアデルは今度こそ部屋を出て行った。

「……………覚悟はしていたが、こうもハッキリと言われるとはな」  
「仕方ありません、我々が初めから対応を間違えなければこんな事  
には成りませんでした」

ブラートとジークは呆然としているフリードとオロオロと周囲の  
顔色を窺うシルビアを無視して席を立つのだった。

公国に新しく設置された工房で1人の男が自分達が作り上げた物

を見ながら不思議そうに首を傾げていた。

「どうした？」

「ああ、妙な物だと思ってな」

そこにやって来た同僚が男に声をかけた。

「だって見るよ。こんな紙切れが金貨一枚と同じ価値があるんだぜ」  
「まあ、言わんとする事は分かる」

男が手にしているのは先程刷り上がった紙幣と呼ばれる新しいお金だ。

「完全に流通して馴染むまではまだまだ時間がかかるだろうが、今後は利に聡い商人を中心に広がって行くだろう」

「そんなに良い物なのか？」

「これ自体には大した価値は無いがな。」

簡単に言つとコレは金貨の引換券みたいなものさ。

これ一枚に金貨一枚と同等の価値があると、公国が保証しているからこの紙切れに価値が生まれる」

「よく分からんな。俺なら金貨の方が良い」

「はは、しばらくはお前みたいな反応が一般人の反応だろうな」

男は肩を竦めると紙幣をマジマジと検める。

「この表側に描かれているのは初代大公のルーカス様だろ？裏の図はどついう意味だ？」

「お前なあ、初めに説明されたら？」

右側の7冊の本は黄昏の魔女様、左の花は初代大公妃様を表しているんだ」

「はあ、建国の偉人達の紋章って事か？」

「そんな所だな。さあ、そろそろ休息は終わりだぞ」  
「あいよ」

男達は午後の仕事に向けての準備を始めるのだった。



## オカザリ（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 褒賞の日

「エリー様、本当にドレスじゃなくてよろしいのですか？」

「良いのよ、貴族として行く訳じゃないんだからね」

私は自分の装いを確認してミレイに答えた。

今日の私は上等な仕立ての服ではあるが、ドレス姿では無い。  
どちらかと言うと男装に近い中性的な服装だ。

「エリー会長、時間です」

「今行くわ」

馬車が来た様で、ルノアが呼びにやって来た。

「ママ？」

ルノアやミレイと共に玄関へ向かっていると、中庭の方から私を呼び止める声が聞こえた。

トテトテとやって来たのは散歩中だった金髪に赤目、青目の少女と、共に居たミーシャだった。

「どこいくの？」

「ちょっとお仕事に行くから、アリスは良い子でお留守番しててね」

あの謎の竜種から出て来た水晶球の中から現れた少女だ。

何故か私を『ママ』と呼び、離れると泣き喚く為、紆余曲折の末、私が引き取る事になった。

コレには、まだ謎の多い少女を何処かに預けるのを躊躇ったルーカス様や私の思惑もある。

その結果、私は名前が無いと言う少女に『アリス』と名付け、手元に置く事にしたのだ。

最初の頃は私と離れる事を嫌がっていたアリスだが、最近では少しならお留守番出来る様にもなっていた。

私はアリスの頭を撫でてから手を振り、ルノアが御者をする馬車に乗り込んだ。

ガラガラと大通りを進む先に見えるのは宮廷。

その門の前で番兵に止められ、ルノアが緊張しながら書状を手渡すと、宮廷の一角に案内され、そこからメイドに連れられて控室へ通された。

控室に入ると中に居た人の視線が私に向けられる。

ルノアは緊張している様だが、私は穏やかな笑みを浮かべて挨拶する。

「ごきげんよう、ルーカス様、カルバン様」

控室に居たのはルーカス様と帝都の商業ギルドのギルドマスターであるカルバンの2人、そして2人の連れである従者達だった。

今日は先日の偽金貨事件で功績を挙げた者達が呼び出されている。

王国に乗り込んで犯人を叩き潰した私とルーカス様、そして帝国内に出回ってしまった偽金貨を回収し、新たに偽金貨が流入するのを防いでいたカルバンの3人だ。

正直私はこの手の褒賞を受けるには立場が微妙だ。

だが、既に亡命して年月が経つ上、前回のダンジョンでの功績もあり、褒賞を与えなければ帝国の面子としても不味いと言われ、渋々やって来た。

まあ、いい加減私の居場所もバレている筈だ。

未だに王国からの接触は無いのが不思議だけれど。

「エリー会長、あの少女の様子はどうかかな？」

「変わった所は特には……素直な良い子ですよ」

アリスについて簡単にルーカス様に話していると案内役が控室にやって来た。

「レブリック伯爵、カルバン殿、エリー殿、準備が整いました。

謁見の間へお願い致します」

会話を切り上げた私達は案内役の従者に従って謁見の間へ向かう。

大きな扉を潜り、赤い絨毯が敷かれた謁見の間に入った私達は、数段高くなっている場所の少し前で立ち止まり平伏する。

ルーカス様を先頭に後ろに私とカルバンが並んでいる。

すると、皇帝陛下が入室する。

「面をあげよ」

左右を帝国の貴族達に挟まれた私達。

そこで大臣が私達の功績を読み上げ、皇帝陛下からお褒めの言葉を頂く。

そして私とカルバンは帝国名誉騎士勲章を授与された。

そして最後はルーカス様だ。

「ルーカス・レブリック、此度の其方の働き、実に大儀であった。

其方の功績に対し、褒美として領地を与え、辺境伯へと陞爵とする」

「謹んで拝領致します」

今回の一件で、王国は帝国に対して多額の賠償金と共に、帝国に面した領土の一部を割譲した。

金貨偽造の賠償金だけで無く、広がった偽金貨を回収する為の費用も王国に請求されている。

その為に、わざわざダミー商会を作つてまで偽金貨を吸い上げておいた。

それによつて王国は更にダメージを負う事になる。

結果として、あまりにも高額になった賠償金と回収費用を支払う

事が出来ない王国は、賠償金の一部を領土で支払った形だ。

そして、新たに得た領土の一部をルーカス様が褒賞として与えられた訳だ。

それによってルーカス様が治める領地は広大になり、晴れて伯爵位から辺境伯位へと陞爵する事になった様だ。

こうして半日掛けて大きなイベントをこなしたのだった。

## 褒賞の日(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 適正の日

式典を終えて屋敷に帰って来ると、何故だか屋敷が騒がしかった。

「何かあったんでしょっか？」

「そうね……あ、ミレイ！」

ちょうど姿が見えたミレイを呼び止める。

「随分と騒がしいみたいだけど何か有ったの？」

「エリー様、おかえりなさいませ。」

「実はアリスの事なんです……」

「え」

困惑した様子の子のミレイによると、アリスに関して何か有った様だ。

「実はアリスがミーシャと中庭で遊んでいたらしいのですが、その時にアリスが魔法を使ったらしいんです」

「魔法を？」

確かにアリスはまだ幼いが、才能が有る子供が何かの弾みで魔力を漏らして魔法が発動してしまう事もなくは無い。

珍しい事だが、そんなに大騒ぎする事だろうか？

「その魔法なのですが……火属性魔法と水属性魔法を使ったのです」

「な、何ですって」

「本当ですか」



「はい、私もミーシャからの報告を聞き、アリスに確認しました」  
「……………アリスは？」  
「遊び疲れて眠っています」  
「そう、とりあえず執務室に行きましようか。ミーシャも呼んで頂戴」  
「畏まりました」

場所を移した私達は執務室にある応接用のソファに腰を下ろしていた。

「それで、アリスが火属性魔法と水属性魔法を使ったって言うのは本当なのね？」

「はい、エリー様。私がアリス様と中庭を散歩している時、アリス様の手から火花が飛んだんです。その後、自分の手から出た火花に驚いたアリス様が転ぶと周囲が水浸しになりました」

「典型的な魔力の暴走ね。今は大丈夫なの？」

「はい、アリス様には封魔の腕輪を着けて貰っています」

封魔の腕輪とは子供が魔力を暴走させない様にする為のマジックアイテムだ。

私が作った魔封じの枷程強力な物では無いが、魔力の発動を抑制する効果がある。

「魔力の暴走はそこまで珍しい物では有りませんが、問題はもう一つの方ですね」

「ええ、まさか2つの属性に適性があるなんて……………」

「あの一」

ミーシャがオズオズと手を挙げる。

「2つの属性に適性があるのはそんなにおかしいのですか？」  
「そうね。一応、複数の属性に適性を持つ場合もあるわ」  
「いわゆる、『複合属性』と呼ばれる物ですね」  
「それはどんな物なんですか？」

ルノアが首を傾げる。

「そうね……ルノアやミーシャはシスティア・プルオールは知ってる？」

「はい、Aランク冒険者『泥のシスティア』ですよ」

「前のお休みにルノア様と泥のシスティアの冒険と言う劇を観に行きました」

「ええ、そのシスティアよ。」

彼女が使う泥の魔法は、正確には水属性と地属性の複合魔法なのよ

「では泥のシスティアは水属性と地属性の2つに適性があるのですか？」

「そうよ。でも複合属性に適性を持つ人は普通、その複合属性しか使えないの。」

システィアの場合なら水属性や地属性の魔法は使えず、泥魔法しか使えない。

アリスの様に2つの属性をそれぞれ使える訳ではないのよ」

「2つの属性を使える人は居ないのでですか？」

私は腕を組み眉根を寄せる。

「うーん、記録に無い訳じゃないわ。」

例えばイブリス教の聖典に出て来る『黒の聖女様』は光属性と闇属性の魔法を使う描写が有るわ。

それから故王国時代のエルフの大賢者にして大錬金術師、ホールン・パラケルススは水、風、地の3属性を操ったと言っわ」

私の説明にルノアは反応に困った感じで口を開く。

「それは……どちらも伝説上の人物ですよ？実在したかどうかも分からない」

「確実に実在した人物だと、約1800年前、異界から現れて魔王を倒した『勇者』ヒロシ・サイトーは全ての属性の魔法を扱えたと言われているわね」

「いずれにしてもアリスはかなり特異な存在と言う訳ですね」

「そうなるわ。この話が広がれば妙な連中に狙われるかも知れないわ。」

早いうちに魔力の制御を教える必要があるわね」

私達はアリスの教育方針を話し合い、細かい指導方法を詰めて行くのだった。

## 適正の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 友愛の日

「へー、じゃあ最近はずっとアリスちゃんの魔力制御の特訓をして  
いるんツスカ？」

「ええ、アリスは物覚えが良いから直ぐに魔力を制御出来る様にな  
ったわ」

グリモアール  
喫茶店のテラスで新作のチョコレートケーキを食べながら久しぶ  
りに帝都に帰って来たティードと近況の話をする。

アリスが2つの魔法適性を持つ事は伏せて、魔力が高い為、制御  
を教えたと言ったのだ。

そのアリスは隣のテーブルでルノアの正面に座り、口の汚れを隣  
に座るミーシャに拭われていた。

「この歳でキッチンと魔力を制御出来るなんて、将来は大魔道士ツス  
ね」

「ふふ、才能が有るのは確かね」

「…………… エリーさん、意外と親バカツスね」

「……………」

私が視線で抗議すると、ティードはあからさまに話題を逸らす。

「それで、エリーさんはまだ帝都でアリスちゃんの面倒をみるんツ  
スカ？」

「そうしたい所だけど、そうもいかないのよ」

「と言うと？」

「仕事よ。アクアシルクの生産が軌道に乗り始めたんだけど、此処で大口の取引先を得る為に少し帝都を離れるつもりなの」

「何処に行くんツスカ？」

「ケレバンの街よ」

「ケレバン！」

ケレバンの街はコーバット侯爵領にある街だ。

この街は帝国でも特殊な存在で、なんと街1つが巨大な歓楽街となっている。

統治しているのはコーバット侯爵が派遣している代官……となっているのだが、それは表向きの話だ。

実際に街を支配しているのは、帝国商業ギルド評議会の評議員の1人、《銀蝶》ヒルデ・カレードだ。

彼女が経営する娼館や系列店は既にトレートル商会の大きな取引先となっている。

今回は新しく取り扱う事になるアクアシルクをヒルデの所に売り込むつもりだ。

その為に、彼女の本拠地であるケレバンの街へ乗り込む事になったのだ。

「け、け、ケレバンの街と言えば！」

ガタツと椅子を弾き立ち上がったティータが瞳をギラつかせて顔を寄せる。

「ちょっと、近いわよ」

私はティードの顔を押し返そうとするが、ティードはビクともしなかった。

「ケレバンの街と言えば！帝国最大の歓楽街ツスよね！

大きなカジノが有って、大陸中の美酒が集まると言っあの街ツスよね！」

「そ、そうよ」

「……………私も行くツス」

急に真顔になったティードが声のトーンを落として呟く様に、しかし力強く宣言した。

「私達は遊びに行くんじゃないわよ」

「良いじゃないツスカあゝ」

仕事って言っても少しはゆっくりするんツスよね。

私も一緒に連れてってくれても良いじゃないツスカあゝ」

机を回り込んだティードは、私の首に抱きついて駄々を捏ねる。

「離れなさいって。別に連れて行くのは良いけど……………貴女、一応聖職者でしょ？」

「歓楽街に遊びに行つて良いの？」

「聖職者は暫くお休みにするツス！」

「女神様が私に仰るツスよ『汝、休みなさい』って！」

「……………貴女、いつかバチが当たるわよ」

こうして数日後、商談の為にケレバンの街へ向かう私達一行にティードが加わったのだ。

「いやはや、お聞きしましたよ。フリード殿下。実に災難でしたな」  
「ちっ！嫌味でも言いに来たのか？」

フリードは、目の前に座るでっぷりと太った体を窮屈そうに法衣に詰め込んだ男を睨みつける。

「これは手厳しい。」

私はただ友人たる貴方様を励まそうと足を運んだだけでございませよ」

頬の贅肉をプルルンと揺らしながら笑う男の名はドンドル。

イブリス教の大司教であり、巡回司教だ。

彼の仕事は各地の神殿や聖地を巡り、その地の聖職者を取りまとめ、総本山との橋渡しをする事だ。

「だったら用は済んだだろ。さっさと失せろ」

「はは、どうやら今日は日が悪い様ですな。」

ではコレでお暇させて頂きましょう」

フリードはそう言って席を立つドンドルを苛立たしげに呼び止める。

「待て、帰る前に今回の分を置いて行け」

「今回の分？はて、フリード殿下は一体何の事を仰っておられるのですかな？」

「ちっ！馬鹿か貴様は！今回の分の金を置いて行けと言っているの



だ！」

「お金 何の事ですか？」

「くどい！貴様が国境を通る時、口を利いてやっているだろうが！」

「……………フリード殿下、正確には『口を利いてやっていた』ですよ」

「っ」

「今の貴方に国境の兵に指示を出す権限はないのでしょうか？」

「……………貴様がそう言う態度なら、貴様の馬車の『積み荷』について追及しても構わんのだぞ」

「はっはっは、フリード殿下、貴方はもつと世の理を知るべきですな。」

そんな事をすれば、今まで金を受け取り手引きして来た貴方も責任を追及される事になる。

貴方が金を受け取っていた証拠はちゃんと取っておりますよ」

「な」

「余計な欲を出さず、大人しくしておく事ですな。では失礼」

フリードを蔑む様な視線を残し、ドンドルは部屋を後にした。

「この生臭坊主が……！」

ドンドルが出て行った扉に叩きつけられたティーカップが砕け、甲高い音が響く。

「くそ！何故だ！何故こうなった！エリザベートを排除すれば俺がこの国の頂点に立てる筈じゃなかったのか……！」

口煩いエリザベートを廃して、可愛いシルビアと2人、贅沢三昧の生活が待っている筈だった。

それを父や宰相は些細なミスで懲罰を言い付け、先進的な戦略を国際法がどうたらと訳の分からない事で邪魔をした上、責任を取れと言ってくる。

挙げ句の果てには南大陸に留学し、そのまま向ここの有力者に嫁ぐ筈だった異母妹を呼び戻し、その傀儡になれと言っ。

フリードは怒りで目の前が真っ赤に染まるのを感じる。

「異国の売女の娘の分際で！！」

フリードの母親である正妃はフリードが幼い頃に流行り病で亡くなっている。

アデルの母親は第2王妃だ。

第2王妃ギョクリヨウはレキ帝国の帝室の出自で、当然高貴な身なのだが、フリードは南大陸に住むのは野蛮人ばかりだと言っ、根も葉もない噂を信じていた。

「くそ！くそ！くそ！国を乗っ取る阿婆擦れ共が！！！！」

フリードは怒りに任せて調度品を薙ぎ倒して行った。

翌日、アデルに呼び出され、破壊した調度品の賠償をフリードの年間予算から差し引くと告げられ、また荒れる事になるのだが、この時のフリードにはそんな事は考えも付かなかった。

## 友愛の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 捜査の日

ケレバンの街へ向けて出発する日、私達は帝都の屋敷の前に停めた馬車に集まっていた。

今回、ケレバンの街へ向かうメンバーは私とミレイ、ルノア、ミーシャ、アリス、そしてティードだ。

御者台に座ったミーシャの操車で帝都の門を抜けてコーバット侯爵領を目指して進む。

コーバット侯爵領は帝都が在る皇帝陛下の直轄領の直ぐ隣に位置している。

その為、街道周辺は帝国兵やコーバット侯爵の騎士団が定期的に魔物や野盗を排除している為、比較的安全なルートとなっている。

特に問題も無く、平和に旅を続けていた私達なのだが、3日目の昼過ぎ、私が手綱を握り、隣にアリスを座らせて進んでいると、街道を塞ぐ様に屯する集団に遭遇する事になった。

「ママ、だれがいるよ!」

「大丈夫よ」

遠くに見える集団だが、彼らが掲げる旗が大きくはためいていた。その旗に描かれた紋章はイブリス教の物。おそらくイブリス教の聖騎士団だろう。

「げっ」

そうアリスに説明していると、背後から顔を出したティーダが妙な声を上げる。

「どうしたのティーダ？」

「うう、アレは第4聖騎士団ツスね」

「第4聖騎士団と言えば犯罪の取り締まりを専門にしている聖騎士団よね」

「そ、そうツスね。」

あの……エリーさん、私はただのティーダ。

トレートル商会の関係者のティーダって事をお願いするツス」

そう言うのと、ティーダはいそいそと髪型を変えて帽子を深めに被ると馬車の角の目立たない位置に身を隠す様に座り込んだ。

「貴女何したのよ？………自首した方が良いわよ」

「な、何もしてないツスよ！

ち、ちよつと聖騎士団の倉庫からこつそりワインを分けて貰ったり、備蓄の干し肉を摘み食いした事があるだけツス」

「窃盗ですな」

ミレイが半目でティーダにじつとりとした視線を向ける。

「い、いや、ちゃんと謝ったツスよ！

聖騎士団長にめっちゃ怒られたツス。

女神様の像の前で5時間も正座させられたツスよ」

涙を浮かべて震えるティーダ。

どうやらそれ以来聖騎士団が苦手らしい。

「止まれ！」

聖騎士団に馬車を止められた私は、取り敢えず代表として彼らの話を聞く事にする。

「突然済まない。

我々はイブリス教第4聖騎士団第6分隊の者だ。

現在、各国で頻発している誘拐事件について捜査している。協力を願いたい」

若い聖騎士がそう説明し、私達の身元を尋ねた。

「私はトレートル商会の会長エリー・レイスです。この子は養子のアリス。

馬車に居るのが商會員のミレイ、ルノア、奴隷のミーシャ、それから……そっちは友人のティードよ」

「ん？随分と着込んでいるな」

ティードは帽子を深く被っていて顔がよく見えない。

実に怪しい。

ティードは必死で声色を変えて言う。

「す、少し馬車に酔ってしまった様なのですわ」

「……そうか、ではこの街道を進む目的を聞いても良いかな？」

「ケレバンの街で商談があつて向かっているところよ」

「そうか、一応、馬車を調べさせて貰っても良いだろうか？」

「ええ、どうぞ」

イブリス教の聖騎士団は多くの国での捜査権を持っている。

検問での調査への協力は任意なので、断つても問題は無いが、それをするとやましい事が有りますと言っている様なもの。

痛くも無い腹を探られるのは良い気持ちはしないが、変に目を付けられるのも面白くない。

此処は大人しく捜査に協力するのが無難だろう。

その後、積み荷や馬車を調べた聖騎士から問題なしと判断された。

「手間を取らせたな」

「いえ、事件が解決する事を願っているわ」

「ああ、君たちの旅に女神様の祝福があらん事を」

「ふう、何とか切り抜けたツスね！」

「いえ、我々は何処にもやましい事など無いのですから普通にしていれば問題は有りませんでした」

「ビクビクしていたのはティーダだけよ」

「ティーダお姉ちゃんは悪い人なの？」

「ち、違うツスよ〜アリスちゃん！私は聖騎士が苦手なだけツスよ  
お〜」

## 捜査の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## 到着の日

聖騎士との遭遇から数日、特に何事も無く旅を続けていた私達の目の前に立派な防壁で囲まれた街が見えてきた。

門の前にはケレバンの街に入ろうとする者達が列を成している。

「おお！見えて来たツスよ！」

「ティーダお姉ちゃん、マドからお顔をだしたら危ないんだよ」

「あ、はいツス……」

それから馬車の列の最後尾に並び、順番を待つ。

列は意外と早く進み、早々に私達の番がやって来た。

そこで番兵に身分証などを提示し、ケレバンの街に入った私達は、取り敢えず今日の宿を求めて大通りを進むのだった。

ハルドリア王国の王城の一室、急遽用意された執務室で王国の第一王女であるアデルは山の様な書類を相手にしていた。

王太子の代理として仕事を始めたアデルは、まず帝国との偽金問

題の対処から手を付け始めた。

ブライトやジークは属国への対応や通常業務で手一杯であり、新たに持ち上がったこの問題に対処する時間が取れなかったのだ。

国内の無駄を整理し、資金を捻出し、更にその過程で明らかになった不正を働く貴族から罰金を徴収、それを払えない貴族や罰金で済まない程の罪を犯していた貴族を処断し、没収した領地を整理し、帝国に面した領地を持つ貴族を説得し、代替地として没収した領地を与えるなどして領土を帝国へ割譲する事でようやく帝国との和解決が成立した。

その結果、王国は領土を失い、貴族も減った。

コレだけを見ると王国の弱体化だが、実情は違う。足を引っ張っていた不正貴族を排除し、領土を縮小する事で、王国の国力はそこまで落ちる事は無かった。

寧ろ、フリードに与していた貴族の力を削ぎ、中立を保っていた貴族にフリードへの不信感を植え付ける事が出来た。

アデルが王太子の代理となった事は未だ公にはなっていないが、今のうちに公表された後の事を考えてアデルは情報を操作していた。

「マオラン、この書類は不備があるから軍部に戻して置いて」

「はい……………アデル様、本当にコレで良いのですか？」

「ん？良いんだよ。その書類の不備は軍部の責任なんだから、戻して訂正させれば良いよ」

「いえ、そうでは無く……………コレではアデル様も王国から裏切られたエリザベート様と言う方と同じでは有りませんか？」

「王国はアデル様も使い潰すつもりなのでは？」  
「ああ、そう言う話か」

アデルは持っていた書類を積み重ねた書類の山の上に戻してマオランに視線を向けた。

「確かにボクにエリザベート姉様の代わりをさせようと言う意図は有るだろうね。」

でも、エリザベート姉様とボクには決定的な違いがあるんだよ」

「違いですか？」

「うん、ボクには王位継承権がある」

「」

アデルの発言の真意を理解し、マオランは息を呑んだ。

「アデル様……」

アデルはマオランに頷く。

「ボクは王位を取るよ。」

兄上の様な愚物に国を任せる事なんて出来ない。兄上にはボクの為に精々楽しく踊って貰うよ」

## 到着の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 休息の日

ケレバンの街の中でも程々の宿に部屋を借りた私達は、ひとまず休息とする事にした。

部屋割りには私とアリス、ミーシャとルノアが2人部屋、ミレイとティードはそれぞれ1人部屋だ。

荷を下ろし食堂に集まった私達は食事をしながら今後について話し合う。

「では、明日にでもカロード氏に面会を求める書状をお届けしておきます」

「ええ、任せるわ」

さて、そこはミレイに任せるとして、面会までの時間に何をするかだ。

普通の街ならば観光でもしていれば良いのだが、このケレバンの街はあまり観光には向いていない。

いや、ある意味観光地なのだが、アリスやルノア達の教育上、よろしくない観光地だ。

まあ、全てが如何わしい店と言うわけではない。

そう言った店は街の中央部に集中しており、防壁に近い街の外側にはごく普通の食堂や冒険者向けの道具屋、各ギルドの支所なども存在している。

明日は市場調査を兼ねてその辺りを探索してみるのも良いかもしれない。

「明日は店を見て歩いてみるけどみんなはどうする？」

「アリスはママといっしょ！」

「あ、私も一緒にします」

「では私もエリー様達と」

ふむ、予想通りアリス、ルノア、ミーシャは私と来る様ね。

「私は予定の調整をいたします」

ミレイはアポイント取りなどの雑務を任せる事になるか。

「私は……」

「ティーダは大丈夫よ」

「ちょ！聞いてくれても良いじゃないッスか！」

ティーダはカジノだろう。

もしくは酒場だ。

「羽目を外し過ぎたらダメよ」

「わ、分かってるッスよ、エリーさん達に迷惑は掛けないッス」

それからは旅の疲れもあり、食後は早々に休む事にした。

翌日、朝食の後、私はアリス、ルノア、ミーシャを連れて宿を出た。

ミレイはまだ宿に残っており、ティーダは早々に出て行った。

「皆、手を出して」

私は懐から取り出した小袋を3人へ手渡した。  
中身は小銀貨が10枚ずつ入っている。  
子供のお小遣いには少々高額だが、彼女達の将来を考えると、この程度の金額は使い慣れているべきだ。

「この街に居る間のお小遣いよ。好きな物を買いなさい」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます、エリー様」

「ありがとうございます、ママ？」

アリスはまだお金の使い方を中心に覚えていない。  
知識としては教えているが、まだ実際に自分でお金を払って買い物をした事が無いのだ。

この機会にその辺りも教えておきたいところだ。

それからいくつかの店を回った。

私は性分なのか、つい商品の値段や質などを見てしまう。  
ダメね。

ワーカホリックかしら？

アリス達は3人で楽しそうに小物を見て回っている。

「ママ〜」

アリスが私を呼びながら駆けってくる。

「あら、可愛いわね」

アリスの輝く様な金髪は一房取り上げられて赤いリボンが結ばれていた。

見ると最近伸びて来てから三つ編みにしていたルノアの髪と、ミシャの尻尾にも同じリボンが結ばれていた。

「エリー会長、どうですか？3人でお揃いのリボンを買ったんです」

「私は結べる程髪が長く無いので尻尾に……」

「皆似合っているわ」

嬉しそうにお互いのリボンを見合う3人を見て、私も自然と笑みが溢れた。

それから次の店ではルノアが両親へのお土産を悩み、冒険者向けの武具屋でミシャが真剣に短剣を品定めし、露天商ではアリスの為にルノアが木彫り人形を値切ったりして、街を見て回った。

そして日が傾き始める頃に、宿へと帰って来ていた。

「お帰りなさいませ」

「ただいま、そっちはどうだった？」

「はい、3日後の昼過ぎに面会出来る事になりました」

「そう、思ったよりも早いわね」

「そうですね。最低でも7日は待つ事になると思っていましたから」

アリスがルノア達の部屋に行っている間に、ミレイと商談について話し合うのだった。



## 休息の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 休息の日

ヒルデとの商談は3日後、明後日は準備があるとして、明日は時間が取れる。

翌日の昼過ぎに宿を出た私は、昨日のメンバーにミレイを加えた全員で市場を冷やかして歩いた。

ケレバンの街は娯楽の集まるその特性上、多くの嗜好品が販売されている。

輸入品の小物を取り扱っている商店でミレイが見ているのは東の砂漠の先に有る国で作られた茶器だ。

帝国や王国の白くスマートな茶器とは違い、彼の国の茶器は丸くずんぐりとしたフォルムで花や小鳥が精緻に描かれ、鮮やかな色で彩色されていた。

普段はあまり表情を表に出さないミレイが薄く微笑みを浮かべている。

ミレイの趣味は茶器や珈琲カップのコレクションだ。

勿論、貴族が集める様な大仰なコレクションでは無いが、気に入った茶器などを市場などで見掛けると細々と買い集めていた。

それらのコレクションは王国を出て帝国に亡命する際には持ち出す事は叶わなかったのは申し訳なく思う。

最近では私達も金銭的に余裕が出来て、ミレイにもその働きに見

合うだけの給金を渡しているのだが、ミレイは相変わらず茶器や珈琲カップを買い集めるくらいにしか使ってはいなかった。

悩んでいた様だが、ミレイは砂漠の国の茶器を購入する事にしたらしい。

いつも通りの表情に見えるが、長い付き合いである私には彼女が上機嫌である事が分かる。

そして北大陸からの輸入品である小物細工を見ていた3人を呼び、少し早めの夕食を食べる事にする。

店は宿の主人のおすすめのレストランだ。

「あの〜エリー様、やはり私は……」  
「良いのよ、気にせず入りなさい」

レストランの立派な建物に気遅れしたのか、ミーシャが遠慮しようとするが、私は気にせずミーシャの手を引いて入店する。

最近では減っているが、偶にミーシャは奴隷の身分だから、と遠慮しようとする事があった。

やはり近い内に奴隷身分から解放するべきかしら？

帝国法が定める奴隷身分からの解放に関する法では、奴隷の解放にはいくつかの条件がある。

最も簡単なのは金銭での解放だ。

私はミーシャに渡しているお小遣いとは別に、彼女の働きに応じた額を貯めている。

その金額が解放に必要な金額に達したら、奴隷身分から解放するつもりだ。

私がお金を出して解放しても良いのだが、ミーシャはそれでは納得しないだろう。

獣人族は全体的にプライドが高い気風がある。過度な施しはミーシャを傷付ける事になるかも知れない。

今度、セドリックにでも相談してみようかしら？

その日はレストランで夕食を楽しんだ後、早めに宿へと戻った私は、部屋でアリスやルノアに魔力操作を教え、ミーシャはミレイに従者としての仕事を教わりながらゆっくと過ごした。

その夜、アリス達が寝付いた後、深夜にはまだ少し早い時間に、宿の食堂でミレイとワインを飲んでみると、宿の入り口からユラユラと揺れる人影が現れた。

「あつるれ〜エリーさんとミレイちゃんじゃないツスかあ〜。珍しいツスね〜、こんな夜おしょくに〜」

「ご機嫌に酔ったティードである。」

「もう、ベロベロじゃない」

「いくら治安がいい街とは言え、女性が泥酔して外を歩くのは危険ですよ。最近は良くない噂も有りますし」

ミレイが言うのは今日、外で聞いた噂だ。

なんでも最近、怪しい人物を見たと言う話があるのだ。

まあ、こんな街だから怪しい人の1人や2人いてもおかしくは無

いか。

私とミレイは呆れながらティータを支える。

「だ〜いじょ〜ぶツスよ〜、ティータちゃん、強いツスから……

…うっぶ

「ちよっ！吐くなら外で吐きなさい！」

「エリー様、外に運びましょう」

「そつとよ、そつと」

「うっぶ……うっぶ」

## 休息の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 商談の日

ヒルデとの商談当日、私とミレイは商談に向かう用意を整えて宿で軽食を取っていた。

「じゃあ、私とミレイは商談に行くから、皆は好きにされていて良いわよ」

私はルノア達にそう伝えた。

ルノアとミーシャにはアリスと共に過ごして貰う事にした。

多少心配は有るが、ルノアとミーシャも13歳だ。まだ成人はしていないが、子供でもない。

この年齢なら、一般的な社会では冒険者として魔物を討伐したり、見習いとして仕事をしている年齢であり、貴族なら婚約し始める年齢だ。

過保護にするよりも自立心を養ってやるべきだろう。

「今日は正門前広場に行くんだっけ？」

「はい、正門前広場に大道芸人が来ているそうなので行ってみます」

「その後は自由市を少し見て戻るつもりです」

「そう、夕方までには帰るのよ。」

アリスはルノアとミーシャの言う事を聞いて良い子にしているのよ」

「うん」

元気に出かけて行く3人を見送り、私もミレイと共にヒルデの屋敷へ向かう。

ちなみに昨夜もフラフラで帰って来たティータだが、早朝には鼻歌を歌いながら出掛けていった。

ヒルデ・カロードの屋敷はアリス達が向かった正門前広場があるちょうど反対側、裏門がある辺りにある。

その辺りは代官の屋敷や会議場、役場、など、街の運営の施設や公共施設などが有るエリアだ。

ヒルデの屋敷は広く、帝都の貴族屋敷と比べても立派な建物だった。

従者の控えの間に案内されるミレイと別れ、応接室へ通された私を迎えたのは、薄いナイトドレスに透ける様なストールを肩にかけて魔族の女性だった。

魔族の証で有る角が側頭部から頭を沿うように額まで伸びており、まるでティアラの様だ。

「ようこそ、お久しぶりね。エリー会長」

「お久しぶりです、カロード議員」

「あら、そんなに畏まらないで良いですよ」

「ふふ、ではヒルデさんと呼びしても？」

「勿論、私もエリーさんと呼ばせて頂くわ」

ヒルデは元娼婦と言う経歴だが、その瞳には深い知性と、商売人としての油断ならない鋭い情熱が宿っていた。

ヒルデと握手を交わして座った私は、用意していたチョコレートをお勧めする。



「へえ、これが帝都で流行しているお菓子なのね？」  
「ええ、ケーキヤクツキーなど色々と応用出来ますわ」

菓子や紅茶の話題で場が温まった所で今回の目的であるアクアシルクを取り出した。

「今回お邪魔させて頂いたのはこのアクアシルクの商談が目的なのです」

「これは……本物のアクアシルク。」

製法が確立したと言う噂は本当だったのね」

「はい、本格的な生産はまだですが、ある程度の量は確保出来ました。」

一部の高位貴族や有力者にお声を掛けさせて頂いておりますわ」  
「なるほど、これは徐々に大きな取引となりそうですね」

ヒルデとは直接ではないが、商会として既に化粧品関係で何度も取引をしている。

その為、ある程度の駆け引きは有っても、そう争う事なく穏やかに取引の話は纏まった。

契約書を交わし、一先ず交渉を終えた私とヒルデはお互いの健闘を讃える様に談笑しながらチョコレート菓子を摘んでいた。

「ふふ、どうかしらエリーさん。良かったら今晚、夕食でも？」

「嬉しいお誘いですが、義娘や弟子も居ますので」

「なら皆さんご一緒ならどう？」

「そう言う事なら喜んで」

ヒルデからの誘いを受けた私が、一度お暇する為に腰を上げた時

だ。

廊下から何やら騒がしい声が聞こえて来た。

ヒルデと視線を合わせ、2人同時に扉に視線を向ける。

すると扉が勢いよく開かれ、メイドや執事に止められるのを振り切りミレイが応接室へ飛び込んで来た。

「ミレイ」

「エリー様、大変です！アリスとルノアが！」

## 商談の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 疾走の日

「落ち着いて、ミレイ。何が有ったの？」

ミレイの肩を押さえて落ち着ける様にして尋ねる。

荒い息を整える様に深く呼吸したミレイは手短かに状況を報告する。

「アリスとルノアが何者かに拐われました。

犯人と交戦したミーシャは重傷です」

「な」

私は飛び出しそうになる脚を気力で押さえ付けミレイに問う。

「ミーシャは何処に？」

「この屋敷の一室を借りて手当を受けています。こちらです」

駆け出すミレイを追う様に私も走り出す。

その背後でヒルデもこちらに付いて来ていた。

「ミーシャ！」

その部屋に飛び込む様に入ると、ソファに寝かされたミーシャを  
治癒魔導士らしき初老の男性が治療していた。

「ローレンス、その子の容体は？」

ヒルデが初老の治癒魔導士に尋ねる。

「良く有りませんな。切り傷に骨折も多数、右眼は潰れ、内臓も傷付いています。私の魔法では治療は難しい」

ミーシャは身体中にナイフで斬りつけられた様に傷が走り全身を血に染めている。

頬や腕、胴などが内出血で赤黒く変色しており、顔にも右目を断ち切る様に大きな裂傷があり、大量に出血している。

「これは……」

ヒルデがその惨状を見て言葉を飲み込む。

どう見ても致命傷で、持って後数時間。

直ぐにでも上級治癒魔法が使える治癒魔導士に治療されなければ確実に死ぬ傷だ。

「退いて！」

私は初老の治癒魔導士を押し退ける様にミーシャに駆け寄る。

「神器【暴食の魔導書】」  
グリモア・ヘルゼブフ

直ぐに神器を発動したわたしはミーシャを治療する。

「【上級治癒】」  
エクスピール

ヒルデと初老の治癒魔導士が驚き息を呑むが、今はそれどころではない。

「う……エ、エリー様……」

「ミーシャ！まだ起きちゃダメよ。」

傷は塞がっているけど失った血は魔法では戻らないわ」

「エリー様……アリス様とルノア様が……」

「ええ、聞いたわ。良く知らせてくれたわね」

「私……守れなくて……」

ミーシャは何かを握った右手を差し出してくる。

先日買ったリボンだ。

「大丈夫よ、アリスとルノアの事は私に任せて休みなさい」

私が頭を撫でるとミーシャは一雫だけ涙を余して気を失った。

私は眠ったミーシャの手に握られていたりリボンを抜き取る。

金糸の様な髪が数本絡まっている。

アリスのリボンだ。

アリスは、ルノアやミーシャとお揃いのリボンが嬉しいらしく、リボンを買ってからずっと身に付けていた。

髪に癖が付くと言っても聞かず、寝る時も着けたままにしていた程だ。

「ミレイ、ミーシャをお願い」

「畏まりました」

ミーシャの事をミレイに任せ、ミレイがミーシャから聞いた情報を受け取った私は、直ぐ様踵を返す。

「エリーさん」

「ヒルデさん、申し訳ないけど食事はまたの機会に」

「待って！私も行くわ」

「……しかし……」

「この街で私の客人が被害を受けたのよ。このまま黙っている訳には行かないわ」

ヒルデの瞳には明らかに怒りの色が浮かんでいる。

「良いわ、なら急ぎましょう」

屋敷の玄関に向かいながらヒルデは使用人達に矢継ぎ早に指示を出す。

「街の全ての門を封鎖して」

「はい」

「住人には外出禁止令を出して、怪しい奴には身元の確認を。抵抗するなら捕縛を許可するわ」

「畏まりました」

「ヒルデ様、馬車の用意が出来ました」

「ありがとう。エリーさん、馬車に……」

「必要無いわ」

「え？」

「走った方が早いから」

私は玄関を出ると同時に身体強化を発動させる。

私の魔力であれば、短時間なら馬より速く駆ける事が出来る。

「エリーさん！」

ヒルデの声を置き去りに、私は石畳を踏み碎き駆けた。

ヒルデが指示した緊急配備の為の兵士達が住人達に退避を促しているが、まだ多くの人々が通りに屯している。

その間をすり抜ける様にミーシャが襲われた正門前広場へ向かう。周囲の景色が高速で背後に流れるなか、不意に横から声が掛かる。

「エリーさん、落ち着いて」

「ヒルデさん……」

横目で見ると、ナイトドレス姿のヒルデが私の直ぐ横を追従していた。

ヒルデは私と同等かそれ以上の身体強化魔法を使っていた。

彼女の種族である魔族は魔力、身体能力共に人族を上回り、かつては魔王に率いられ世界を支配するべく人族やエルフ、ドワーフ、獣人などの人種と争っていた種族だ。

今では他の種族とも友好的な関係を築いているが、一部の国や地域では未だに忌み嫌われる。

その魔族として見てもヒルデの魔力は高い。

全力で強化している私の身体能力に問題無く追いついて来ている事からもそれは明らかだ。

「エリーさん、正門前広場へ行くなら中央区を通り抜ける方が速い。こっちよ」

そう言って先導するヒルデの後を追いつき、夕日が照らす街中を駆け抜けて行った。



## 疾走の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 誘拐の日

エリー達がヒルデとの商談の為に出発した後、ルノアとミーシャはアリスを連れて正門前広場へと向かった。

「アリスちゃん、今日は大道芸人が来ているらしいよ」

「“だいどうげいにん”ってなあに？」

「曲芸やパントマイムなどの芸を披露する人の事ですよ、アリス様」  
「？」

「ふふ、もう直ぐそこだから見た方が早いよ」

「あ、ルノア様、走ると危ないですよ」

そう言っつてルノアがアリスの手を引いて路地から広場へと飛び出して行くのをミーシャは慌てて追いかけた。

「わーすーいー！」

アリスは、5本の短剣を使って器用にジャグリングする女性に歓声をあげ、周囲の観客と共に拍手を送る。

火吹きやパントマイム、ジャグリングと、広場で様々な曲芸を楽しんだ3人は、広場の近くの屋台で簡単に昼食を済ませた後、隣の区画にある自由市へと足を伸ばしていた。

自由市とは、行商人や個人などが一律の税を納める事で1日限りの営業許可を受け、売買を行う事が出来る場所だ。

詐欺紛いの商売人も居るが、稀に掘り出し物や、その地域では見かけない珍品が売りに出される事がある。

それらの品々を見て回るだけでも楽しく、3人で数々の露天を冷やかして回った。

「あれ？」

そして太陽が中天を過ぎた頃の事だ。

初めにその異変に気づいたのはミーシャだった。

「どうしたの、ミーシャ？」

「いえ……なんだか妙な……」

ミーシャが周囲を見回し、僅かに感じた違和感の正体を見定めようとする。

欠けた石畳……ベランダに吊るされた洗濯物……一段下を流れる川……商品が並べられたシート……無人の屋台……捨てられた串……古ぼけた街灯……。

「……………人が、居ない……………っ」

それに気づいた時、ミーシャの耳と尻尾の毛が逆立った。

「ルノア様！アリス様！」

「え？」

「どうしたの、ミーシャお姉ちゃん？」

「走って下さい！これは、人払いの魔ほ、ぐっ！」

ミーシャがルノアとアリスの手を取り走ろうとしたが、そのミーシャは腹部を蹴り飛ばされ、小柄なミーシャは数メートルの距離を飛ばされた。

「く、げほ」

「ちっ！勘のいい奴だ」

ミーシャを蹴り飛ばした男は舌打ちしながらルノアの腕を捕まえる。

更に男の仲間らしき男達が2人、その内の1人がアリスを捕らえていた。

「ルノア様！アリス様！」

「うう　うぐうう！！」

アリスを捕らえていた男が暴れるアリスの口を布で覆うとアリスの全身から力が抜け意識を失ってしまう。

「アリスちゃん！荒野を走る疾風　荒ぶる風を束ねて剣を、うぐ

」

ルノアが魔法を使おうと詠唱するが、それに気付いた男が直ぐに口を塞ぐ。

「ちっ！このガキ、魔導士だ！おい、早く薬を寄越せ！」

ミーシャは脚に魔力を纏うと、懐から取り出した短剣を両手に構えて地を滑る様に駆け出す。

「このガキ！」  
「ふっ！」

ミーシャを殴ろうと奮われた拳を躲し、短剣で男の腕を斬りつける。

「ぐあー！」

「ちっ、グズが！ガキ相手に何やってんだ！」

「おい、ガキ！動くんじゃねえ！」

アリスを捕らえていた男がナイフを取り出しアリスの喉元に突き付ける。

その隣では薬を嗅がされたルノアが意識を失う所だった。

「アリス様！」

「動けばこのガキを殺す」

「……………っ」

ミーシャはギリリと奥歯を噛み男達を睨みつける。

「このクソガキがあー！！」

「きゃっー！！」

腕を斬りつけられた男がミーシャを殴りつけ、倒れ込んだミーシャを何度も踏みつける。

肉を打つ音と、骨が折れる不快な音が響く。

「テメエ…………舐めた真似をしてくれたな」

「ぐううー！！！！」

男はミーシャが取り落とした短剣を拾い上げると、髑るようにミーシャの体を斬りつける。

「ガキが調子に乗ってんじゃねえ!!」

男はミーシャの髪を掴み上げると、短剣をミーシャの右目の上に当て、一息に切り裂いた。

「ああああ!!」

ミーシャの悲鳴と共に血飛沫が石畳を赤く染めた。

「おい!そろそろ人払いが切れる」

「ちっ!クソが!このガキはいらねえんだろ?」

「ああ、獣人は魔力が低いからな」

「へっ!じゃあ殺して構わねえ……な!」

「がっはっ!!」

男は血の中に転がるミーシャの腹を蹴り飛ばす。口から血を吐きながら転がる。

「うっ……ぐっ!」

ミーシャは朦朧とする意識の中、フラフラと立ち上がると、よるける様に歩き、すぐ側の川へと真っ逆さまに落ちた。

「あ!待て!」

「おい、もう時間がない、行くぞ」

「だが!」

「あの怪我で川に落ちたら助からねえよ」

「クソ！」

男達が去ってから少し後、岸に這い上がった血だらけの少女は、全身の痛みを堪えながらその場に落ちていたリボンを無意識の内に拾い上げる。

「……………エ、エリー様……………」

ミーシャは激痛を堪えて身体強化を使うとエリーの元へと駆け出しました。

## 誘拐の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ



## 追跡の日

ケレバンの街の中央を横断する様に正門前広場に到着した私とヒルデは、そこから隣の区画にある自由市へ向かう。

アリス達が拐われたのは自由市の端の辺りらしい。

その辺りでは商品を広げていた商人達が衛兵隊に誘導され、チェックを受けた者から別の場所に誘導されていた。

非常に手際が良い。

「エリーさん、コレを」

ヒルデがしゃがみこんで地面に落ちていた何かを拾い上げた。

「コレは……魔法球？」

「ええ、残っている魔力から考えて、おそらく闇属性の魔法が込められていたようね」

「多分、【人払い】アシマァンドウね。」

ミーシャが突然周囲から人の気配が消えたと言っていたから」

私は左手に魔力を集める。

「グリモア・ベルフェゴール【怠惰の魔導書】」

「エリーさん」

神器を作り出すと同時に、懐から取り出したナイフで自分の左の

手首を切る。

勢いよく吹き出す血飛沫にヒルデが目を剥き驚きの声を上げた。

「大丈夫よ」

私の血が石畳に血溜まりを作り出した所で、水属性の治癒魔法で傷を塞ぎ、詠唱を始める。

「冥府を駆ける四足の眷属よ 焼け焦げた荒野の支配者 群れなす悪夢の一翼よ

我、契約に従い我が血潮を贄として捧げる

【召喚：ヘル・ハウンド】」

私の血が蠢き石畳に魔法陣を描き出す。

その魔法陣から這い出て来たのは一体の獣。

黒い体毛に、背中から尾まで走る赤い毛皮を持つ体長約2メートルの四足獣型のヘル・ハウンドだ。

「まさか……冥界の魔物？」

「ええ、私の神器の能力で契約しているヘル・ハウンドよ」

冥界とは私達の世界と重なり合うもう一つの世界だ。

この世界は私達が住む人界、女神様や天使様、聖獣が守護する天界、悪魔が支配する冥界の3つの世界が重なり合って存在している。各世界への干渉は僅かだが存在しており、女神様や天使様からの神託や天界や冥界に繋がる高難度ダンジョン、私の様な契約魔法や召喚魔法での繋がり、古代文明のマジックアイテムなどで関わる事が出来る。

また、冥界の悪魔の一部などは、人界や天界への侵略を虎視眈々

と狙っているらしい。

私も【怠惰の魔導書】によって冥界の悪魔の1人と契約しており、この話もその悪魔から聞いた物で、人界では権力者などの一部の者しか異界の存在を確信していない。

冥界の魔物と言う言葉から、ヒルデはその存在を確信しないまでも、知っては居たことが窺える。

私はアリスのリボンを取り出すと、ヘル・ハウンドの鼻先へと近づける。

「この匂いを追うのよ」

「グルウ」

ヘル・ハウンドは数度リボンの近くで鼻をヒクヒクさせると、クルリと踵を返し、地面の匂いを嗅ぎながら歩き始めた。

狩猟犬にしては大仰な魔物だが、アリス達の後を追えるなら問題は無いわ。

私とヒルデがヘル・ハウンドの先導で進むと、水で雑に流されているが明らかに血の跡が広がる戦闘痕を見つけた。

「此処がああ猫人族の娘が襲われた場所で間違いないみたいね」

「ええ、ミーシャが落ちた川が多分あそこでしょう。匂いの強い方を追って」

「バウ」

ヘル・ハウンドが短く鳴いて歩き始め、私達もそれに続く。

そうして、一件の民家へと到着した。

「此処なの？」

「グルウ」

見た目には何の変哲もない民家にしか見えない。

中の気配を探って見るが、1人分の気配しか感じなかった。

「私が行くわ」

ヒルデがノッカーをコツコツと叩く。

「はい？」

出て来たのは、コレまた何処にでも居そうな普通の男だった。

「邪魔するわ」

「え？え？ヒルデ様？」

ヒルデは男が開けたドアを閉じられない様に押さえて強引に開く。

「ちよ、こ、困ります！ヒルデ様、一体何が？」

「貴方には誘拐事件への関与が疑われているわ。大人しく捜査に協力しなさい」

「ちよ、ちよっとお待ち下さい！誘拐？私が？私は代官様の意を受けているのですよ！いくらヒルデ様でもそんな横暴は……」

男は何かを言い切る前にその場に崩れ落ちた。

僅かに魔力が動いたのを感じたので、多分ヒルデが魔法で何かをしたのだろう。

先程の身体強化もそうだったが、彼女の魔法はほとんどロスが出ていない。

通常、魔力を魔法として変換する際にロスが発生する物だ。

このロスは魔力の操作が熟達する程少なくなり、比例して魔力の消費が抑えられ、また魔法の気配を気取られ難くなる。

察するに魔法の腕に関しては、私よりもヒルデの方が上のようにだ。

意識を失った家主の男を適当に端に追いやり、家に入り込む。

「良かったの、ヒルデさん。あの男、代官と何か関係があったみたいだけど」

「仕方ないわ。」

「私がやらないとエリーさん、殺すつもりだったでしょ？」

「……………」

元娼婦から商才で今の地位にまで登り詰めた女傑と言う話だったけど、戦闘面に関して予想以上の手練れみたいね。

大きな身体で窮屈そうなヘル・ハウンドに匂いを辿らせると、居間の中央の床をガリガリと引っ掻き始めた。

「この下に空洞が有るわね」

「ヒルデさん、少し退がってもらえる？」

何処かに何かの仕掛けが有るのだろうか、私はそれを探す時間を惜しんだ。

ヒルデが部屋の隅に移動するのを確認して

【強欲の魔導書ケリモア・マモン】から取り出しておいた剣を抜く。

フリーユゲルはまだ修復中なので、帝都で購入した《最高級ハイエンド》の剣だ。

魔力を纏わせ床を斬る。

すると、床下から階段が現れた。

どつやら下は地下通路になっている様だった。

## 追跡の日(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 拘束の日

地下通路は狭く、私やヒルデは兎も角ヘル・ハウンドは流石に通  
り抜ける事が出来なかつたので冥界へ送還し、薄暗い通路を2人で  
慎重に進んだ。

「あの男、代官と繋がりが有ると言っていたわね」

「ええ、何か知っているの？」

「代官のブルタスは最近妙に金回りが良いのよ。私の経営する娼館  
の1つに、毎日の様にやって来て人気の娼婦を買って行く。

貴族がたまの贅沢、平民が一生に一度の思い出に訪れる様な高級  
娼館よ。

とても代官程度の給金で豪遊出来る物では無いわ。

何かしら表に出せない金を得ていると思って調べを進めていたの  
だけれど、もしかしてこの誘拐事件に何か関係が有るのかも知れな  
いわ」

「誘拐……確かケレバンの街に来る前に、街道で誘拐事件について  
調べている聖騎士に会ったわね」

「ええ、このケレバンの周囲の街でも多くの行方不明者が出ている  
と聞いているわ。」

ケレバンの街ではあまり報告に上がらないけど、孤児や旅人を狙  
っていて、もし被害が出ていても代官が握り潰していたのかもしれ  
ないわ」

小声で話す私達の声が薄暗い通路に反響する。

光源の無い通路だが、ヒルデが手の平に生み出した炎の明かりを  
頼りにするしか無く、畏や隠し通路などを警戒しながらなので歩み  
は速くは無い。



「もうかなり歩いたわよね？」

「ええ、体感だけど既にケレバンの街を出ていると思うわ」

「街の外に拠点が？」

「ケレバンの街の外の岩石地帯には古王国時代の遺跡が有るのよ」

「まさか……ダンジョン？」

「いいえ、ただの古びた遺跡よ。」

ただその内のいくつかはイブリス教の聖地に指定されているから人の出入りがあっても不審には思われないわ」

そう言っている内に地上へ上がる階段を発見した。

畏や警報の類いが無い事を慎重に調べてから登ると、鉄製の扉で塞がれた出口を発見した。

そつと窺うと外に2人の気配を感じた。

ヒルデに視線を向けると、彼女は一つ頷き鉄扉に忍び寄り、軽く指を振る。

すると、扉の外から何かが倒れる音が2度響いた。

「大丈夫よ」

ヒルデの言葉に頷きで返すと、私は鉄扉の取っ手に手を掛け押し開いた。

外は既に陽が落ちている時間だが、その場には燭台に火が灯されており、視界を確保するには十分だった。

石造りの通路は、いつかのダンジョンの中を思わせる雰囲気だ。

私達が出て来た扉の左右に通路があり、右は少し進んで行き止まりとなっていて、左は別の通路と合流していた。

側には2人の男達が倒れて居る。

ヒルデの魔法で意識を奪われた見張りだろう。

「え？コイツら……」

私はその男達の格好に僅かに驚きを表した。

男達が身に着けていたのは法衣であり、首から下げているのはイブリス教の聖職者の証である聖印だ。

「聖職者？」

「此処は……まさか」

ヒルデもその男達の姿と、周囲の光景を見回して目を見開く。

「此処は……旧ケレリア神殿跡……ケレバンの街の外に有るイブリス教の聖地の1つよ！」

ルノアが目を覚ますと、口を塞がれ、両手両足は縄で縛られており、身動きの出来ない状態で男に荷物の様に担がれている所だった。

「んぐっ」

「ん？ちっ！起きたか。薬の効きが悪いな。」

おい、クソガキ。大人しくしている。  
妙な真似をすれば金髪のガキを殺す」  
「ん」

何とか視線を動かせばもう1人の男に担がれた意識の無いアリスの姿が見えた。

今は抵抗しない方がいいと思ったルノアは、取り敢えず周囲を観察する。

どうやら石造りの遺跡か何かの様だった。

「おらっ！此処で大人しくしている」  
「ぐっ！」

牢となつている場所で、鉄格子を開いた男達は、中にルノアとアリスを放り込み、壁に取り付けられた長い鎖を手繰り寄せてルノアとアリスの足に取り付けた。

鎖の長さは牢の中なら動けるが、外にまでは出られない長さだ。

「おっと、お前にはコレを付けとかないとな」

そのまま鉄格子を閉めようとした男が、何かを思い出した様に牢の壁際の机から首輪を持ってきてルノアの首に取り付けた。

「コイツはハルドリア王国で作られた魔導土用の枷だ。コレを付けていれば魔法は使えない。無駄な抵抗はせずに大人しくしている」

そう言い残して男達は鍵を閉めて出て行った。

「ん！んぐう」

何とかアリスの様子を見ようと地面を這うルノアだったが、不意に背後に気配を感じた。

「ん」

「騒ぐな。今縄を解いてやる」

声の方に振り向くと、ルノアと同じように鎖に繋がれた少年が縄を解こうと手を伸ばしていた。

歳はルノアより少し上か。

薄汚れた服を着て、肌が日に焼けた少年だった。

落ちて着いて見れば、少年の背後にも同じ様に鎖に繋がれた数人の人影が見えた。

「よし、解けたぞ」

「あ、ありがとうございます」

ルノアはお礼の言葉もそこそこに、アリスに駆け寄り様子を見る。見たところ外傷は無い。眠っているだけの様だ。

「大丈夫か？」

「……………分かりません」

「多分、薬で眠らされているだけだ。」

同じ様に眠らされていた奴も居たが直ぐに目を覚ましたからな  
「そう……………ですか」

ルノアはアリスを抱き寄せる。

「俺はナナキだ。君は？」  
「ルノア……です」

## 拘束の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 脱出の日

ルノアは不安になる心を押し殺してナナキと名乗る目の前の少年に尋ねる。

「あ、あの、此処は何処なんですか？」

「分からねえ。俺も……」

ナナキは背後にチラリと視線を向ける。

「……コイツらも拐われて来たんだ。」

ケレバンの街で拐われた奴の話では、何処かの家の床下の隠し通路を通って来たって話だ。他にも他国で拐われて連れてこられた奴も居るな」

「……つまり、此処はまだケレバンの街の中……少なくともケレバンの街の近くなんですね」

「ああ、そう離れては居ない筈だ」

ルノアは眠るアリスの頭を撫でながら考える。

（此処はまだケレバンの街の近く……なら私とアリスちゃんが居なくなつた事にエリー会長達が気づいてくれたら……ううん、それよりミーシャはどうなつたの？

私が意識を失う直前……思い出せる限りでは誘拐犯と互角に戦っていた。

でも、私とアリスちゃんが此処に連れてこられているって事はミーシャが負けたと言う事……でもミーシャならきつと逃げ切つてエリー会長達に知らせてくれている筈……。

なら、今私がやるべき事は……アリスちゃんを守りながら最善を  
尽くす事)

「うう……うう？」

「アリスちゃん！」

「う……ルノアお姉ちゃん？」

「気が付いたのね。何処か痛いところはある？」

「だ、大丈夫だよ」

不安げに周囲を見回すアリスの背中を安心させる様に撫でながら  
ゆっくりと話しかける。

「ナナキさん、誘拐犯は見張りを置いていないのですか？」

「あ、ああ、いつも新しい奴を鎖に繋いだら直ぐに居なくなる。」

此処に来るのは新しい奴を連れてくるか、誰かを連れ出す時だけ  
だ。

あと、俺の事はナナキで良い。さん付けとかムズムズするからな

「わ、分かりました。」

兎に角、此処に居るのは不味いと思います。

脱出しましょう」

「どうやってだ？俺も石で叩いてみたり、引っ張ってみたりしたが  
鎖は外れなかったぞ」

「……………」

ルノアは自分の足に繋がる鎖に手を向ける。

「荒野を走る疾風 荒ぶる風を束ねて剣を打つ【風刃】」

エア・スラッシュ

ルノアの手に魔力が集まるが、魔法に変換される前に霧散してし  
まった。



「ルノアは魔導士なのか。だが無駄だぜ。さっきの誘拐犯が言ってたろ。お前の首に付いている首輪は魔法を封じる効果があるらしい。向こうにも1人、同じのをつけられる奴が居る」

ナナキが『向こう』と示した方を見るとルノアと同年代の、少し身なりの良い少女の首に首輪が付けられていた。

ルノアはアリスの手を引きながらその少女の側に寄り話し掛ける。

「ごめんなさい、その首輪を少し見せて貰えますか？」

「え、う、うん」

ルノアは少女の首輪をマジマジと見る。

そんなルノアをナナキが背後から興味深気に覗き込んでいた。

「何か分かるのか？」

「はい、コレはハルドリア王国で開発された『魔封じの枷』です。

古王国時代のマジックアイテムを復元した物らしいんですけど…

……コレ、おかしいです」

「……何処がおかしいんだ？」

ナナキが首を傾げた。

ルノアの固有魔法である【アイテム・アナライズ物品鑑定】は、その性質上、幅広い知識が求められる。

その為、ルノアはエリーやミレイに習う他、多数の家庭教師を付けて貰い、多くの知識を吸収していた。

その知識が目の前の首輪の不自然さを教えてくれている。

「魔封じの枷は製造から管理まで全て国の管理下に置かれています。他国の政府に対して輸出する場合も、全てにシリアルナンバーを振られて厳重に管理されるんです。」

でもこの魔封じの枷にはそのシリアルナンバーが有りません。

それに側面に刻まれた魔法陣も僅かに歪んでいます。

多分、模造品……いえ、正規に製造された物の内、耐久魔力量が規定に達していない欠陥品が非正規ルートで闇に流れた物だと思います。」

「そ、そうなのか？」

ナナキを始め、周囲の少年少女達は、ルノアの説明を理解できなかったのか、戸惑った表情を浮かべた。

「これくらいの耐久魔力量なら………アリスちゃん」

「なに？」

「私の首輪に魔力を流して。」

此処！この魔法陣の部分に思いつきり」

アリスは早々に薬で意識を奪われた為、魔法が使える事が知られておらず、魔封じの枷をつけられていなかった。

もつとも、アリスくらいの年齢でまともに魔法が使えるレベルの魔力操作力を持つ者など殆どいない。

誘拐犯がアリスが魔法を使える事に気付かないのは無理からぬ事だった。

「い、いくよ？」

アリスがルノアの首輪の魔法陣に手を添えて、ルノアが頷くと同時に魔力を込めた。

グングン吸い取られ、霧散して行くアリスの魔力だったが、次第にルノアの首の枷が熱を持ち始め、罫が入ったと思うとパキリと甲高い音と共に割れて地面に落ちた。

「「おおー！」」

牢に居た少年少女達が小さく歓声を上げる。

事前にナナキに静かにする様に言われて無かったら叫んでいただろう。

「っっ……」

「おい！ルノア！」

「ルノアお姉ちゃん！」

「だ、大丈夫……」

一方でルノアの方も首に少し傷を負っていた。

首輪の破片で切ったのか、はたまた余剰魔力の所為なのかは分からない。

「鳴り響け福音の鐘　その音は遠く　春風に乗って

【癒しの風】ヒル・ウインド」

ルノアは唯一使える風属性の治癒魔法を唱えた。

風属性の治癒魔法は広範囲治癒や遠隔治癒に特化しており、回復力では光属性には遠く及ばない。

更に言えば未熟なルノアの魔法では完治する事は出来ず、首には赤い跡が残っている。

「ルノア大丈夫か？」

「はい、一応傷は塞ぎました。」

少し痛みますけど大丈夫です」

「ルノアお姉ちゃん……」

「大丈夫よ、アリスちゃん」

ルノアは差し出されたナナキの手を取って立ち上がる。

「私達は此処を脱出します。皆さんはどうしますか？」

「……………」

ナナキは他の囚われている者達の顔を見てから強く頷いた。

「俺も行くぜ！このまま此処に居れば何をされるか分からない」

ナナキの言葉に反応し、他の者達もお互いに顔を見合わせたり、頷き合った後、次々に立ち上がるのだった。

## 脱出の日(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 脱走の日

継ぎ目を狙って器用に放たれた風の刃によって少女を拘束していた鎖は断ち切られた。

「彼女で最後ですね」

「ああ」

ルノアは鎖の切れた足枷を付けた少女に手を貸しているナナキの言葉に答えた。

「では次はこの牢の鍵ですね」

「出来るのか？ 牢には鎖の様に継ぎ目なんて無いぞ？」

「大丈夫だと思います。鍵穴の部分は他に比べて脆弱ですから。そこに効果範囲を絞り込んだ魔法をピンポイントで打ち込めば破壊出来る筈です」

ルノアは牢にある小さな鍵穴に指を当てる。

「逆巻く烈風 巨人の息吹たる嵐 矮小なる者を撃ち砕く審判の風

天に渦巻き荒野を駆けよ【万物を粉碎せし斬風】フレイド・テンベスト」

小さな鍵穴に込められた魔力が一気に魔法へと変換され、行き場を失った暴風が頑丈な鉄を切り刻む。

錠が内側からの力に破壊された牢は、力なくその扉を開いた。

「す、すげえ！」

「うう……」

「ルノアお姉ちゃん！」

「ルノア！」

「大丈夫……1度に大量の魔力を使ったから負担が大きかっただけです。【万物を粉碎せし斬風】は風属性の最上級魔法、私は不完全にしか使えないから……ただでさえかなりの魔力を使うのに、制御出来ずに無駄に魔力を消費してしまうんです。

その上、威力も本来の物よりかなり落ちます」

しかし、ルノアの習得している魔法は身体強化や魔法障壁の様な無属性の基礎魔法と固有魔法の【物品鑑定】、そして風属性魔法だけである。

風属性魔法は、速度や鋭さに優れる反面、硬い物を破壊する様な純粋な攻撃力は低い。

魔力を無駄にしようと、不完全な【万物を粉碎せし斬風】を使わざるを得なかった。

荒くなる息を整えたルノアはアリスの手を握りナナキに目を向ける。

その視線を受け止めたナナキは頷き、開いた牢の扉を更に押し開けた。

「行こう！」

ナナキに付いて牢を出たルノアは廊下に繋がる扉に耳を当て、外の様子を探るナナキの合図を待った。

（残りの魔力は少ない。下級魔法でも数回分、身体強化を使う事を考えると倒せるのは2人か3人が限界）

ルノアが残りの魔力の配分を考えていると、ナナキが手を振りル

ノア達を呼んだ。

「大丈夫だ、誰も居ない」

ナナキはそつとドアを開けるともう1度外の様子を確認してから、スルリと扉をくぐり抜けた。

ルノアとアリスもそれに続き、その後には他の囚われていた少年少女も続く。

ルノア達は全員で7人居る。隠密行動をするには難しい人数だ。

しかし、周囲には不自然なほど見張りや誘拐犯の一味の姿は無く、遠くの方で何やら争っている様な物音が聞こえて来る。

「何やら騒がしいな。誰も居ないのはこの騒ぎの所為か？」

「分からないけど……今がチャンスだと思えます」

「そうだな。みんな、外に出るまでの辛抱だ！頑張れよ」

ルノア達は早速石造りの通路を進み始めた。

通路は燭台は有るが薄暗く、来た時の道を思い出すのは難しい。

騒がしい音も、反響して何処から聞こえて来ているのか分からなかった。

(この音……もしかしてエリー会長達が助けに来てくれているのかも……でももし違ったら危ないかも知れない。

なら、何処かに隠れるべきかな?)

「止まれー！」

ナナキが小声で鋭く叫ぶ。



見ると通路の先が広がっていて、廊下よりも明るくなっている。そして、そこには5人の大人が何やら作業をしていた。

「おい、なんの騒ぎださつきから？」

「なんでも侵入者らしいぜ」

「マジかよ、大丈夫なんですか？」

「なに、始末してしまえば問題ない。

いつも通り、事件になる前に揉み消して貰えば良い。それよりさつきと始めるぞ」

男達は部屋を中心に有る机を囲む様に集まった。

その机の上には……。

「っ  
」

ルノアは目を見開いた。

机の上には手足を拘束された10歳程の少女が意識無く寝かされていたのだ。

「あいつ、マルカだ！」

「知り合いですか？」

「知り合いつて程じゃねえ。ルノア達が来る直前に牢から連れ出されたヤツだ」

男の1人がマルカの頭の側に水晶玉の様な物を置く。

周囲の男がマルカへと手を翳す。

そして中心に立つ男が呪文の様な物を詠唱し始めた。

「な、何をしてるんだ？」

「分かりません、多分古代語の詠唱だとおもいます。それにあの中心の男、あの男が首に提げているのはイブリス教の聖印です」

「あいつ、聖職者なのか？」

「多分、形や材質から考えると司祭です」

ルノア達が隠れて様子を窺っていると、司祭の詠唱が終わり、魔法が発動する。

「あああああ！！！！」

突然目を覚ましたマルカが悲鳴を上げる。

全身を痙攣させ、白目を剥く。

「あ、あがつ　　がああいい！！！」

ルノア達が目の前の惨状を前に言葉を失っている中、机の上で激しく身を振っていたマルカの全身から血が吹き出し倒れ伏すと、2度と動く事はなかった。

司祭はマルカの死体に興味すら向けず、色が変わった水晶玉を手満足げに頷くと、踵を返してルノア達が隠れる方とは反対の通路へ足を向けた。

「絞りカスはいつも通り片付けておけ」

「へ〜い」

4人の男達がマルカの髪を掴み上げると、その血塗れの姿が晒され、それを見た誰かの喉から悲鳴が上がる。

「ひっ！」

「誰だ！」

男達の視線がルノア達の方へ向けられた。

「脱走だ！」

「ガキ共が逃げたぞ！」

## 脱走の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 奮戦の日

「不味い、見つかった！」

「まってナナキ！アリスちゃん、防御魔法を！」

咄嗟に飛び出すナナキを追って広間に足を踏み入れながら、ルノアはアリスに指示を出す。

「で、でも……」

「早く！」

「み、水よ その水流を以て 遮断せよ

【水壁】」

ウォーター・ウォール

アリスが水の壁を作り出し広間と通路の間を遮った。

アリスは身体強化や防御系の魔法を中心に習ってはいるが、それでもまだ魔法を習得してから半年も経ってはいない。

ましてや魔法を補助する杖なども無いのだ。

アリスの【水壁】は形は出来てはいるものの、魔力の込め方が甘く、生身でも突破出来てしまう程度の防御力しか無かった。

ルノアは男達がそれに気付く前に、と1番手前の男に組み付いているナナキの背後から魔法を放つ。

「撃ち抜け その風圧を以て粉碎せよ

エア・バレット

【風弾】」

「ぐあ！」

完全に詠唱した【風弾】は、前に野盗に使った短文詠唱とは違い、

杖の無いルノアでも体格の良い男を数メートルの距離を吹き飛ばした。

男は頭を床に打ち付けて意識を失ったのか、動きを止める。

それを見た残りの3人がルノアを警戒した。

「あのガキ、魔導士だぞ」

「バカな！魔封じの枷を付けていなかったのか」

「いや、確かに付けた筈……」

「うおおおお！！！」

動揺する男達に、ナナキが近くに有った燭台を振りかざして殴り掛かる。

「ぐっ！てめえ！！！」

男が咄嗟に腕を上げて燭台を受け止めるが、その腕からは鈍い音が響く。

しかし、男も荒ごちに慣れており、直ぐにナナキの体を蹴り飛ばす。

後方に倒れ込むナナキの影に隠れる様に迫っていたルノアがステツプを踏む様に軽やかに接近する。

「つめんなあ！！！」

ナナキを蹴り飛ばしたのは、別の男がルノアに向かって拳を振り抜く。

だが、ルノアはバクバクと轟音を鳴らす自分の心臓の音を聞きながら、何処か冷めた目で見ている意識が有ることを自覚していた。

恐怖と緊張でパニックになる自分。

男達の位置取りを確認し、迫る拳を避ける為、【スキル】を使う自分。

まるで2人の自分が同時に存在する様な不思議な感覚だった。

「【フェザー・ステップ】」

ルノアが使った【スキル】は自身の体重を一瞬軽くするだけの風属性の【スキル】だ。

男の拳に足を掛け、一息に跳躍したルノアは、中空で体を反転させ天井に着地する。

以前、訓練の時にエリーがミーシャへのお手本として見せていた立体的な体捌きの1つだ。

「荒野を走る疾風 荒ぶる風を束ねて剣を打つ【風刃】」エア・スラッシュ

「ぎゃあ!!」

男は咄嗟に転がり、頭上から叩き付けられる風の刃を躲そうとするが、ルノアの魔法は石の机を砕き、男の両足を深く切り付けた。

「女の方だ！魔法を使わせるな！」

男が近くに有った棒の様な物を、床に着地したルノアに振り下ろす。

「うっ……」

避けようとするルノアだが、不意に目眩に襲われてタタラを踏む。

(ダメ……魔力が……)

「あぶねえ!」

「きやつ」

反応の遅れたルノアだったが、背後から襟首を掴まれて強く引かれる。

入れ替わる様に出たナナキの手にも棒が握られていた。

どうやら部屋の端に積まれていた薪の様だ。

「おらああ!」

「ぶぐつ」

「おら!おら!孤児を舐めんじゃねえぞ!」

ナナキは男の攻撃を懐に潜り込む様に避けると、手にした薪で男の顔を何度も何度も打ち据えた。

「ちつ!」

最後に残った男はナナキが取り落とした燭台に手を掛けると、それを大きく振り上げた。

ルノアは壁に掛けられていた布を引きちぎる様に手にすると、【風刃】で砕いた机の欠片を素早く包み込む。

「うわああ!」

いざという時のために覚えて置きなさい、とミレイに教わった即席の打撃武器だ。



教わった時には、まさか役に立つ日が来るとは思わなかった。  
無事帰れたらミレイにお礼を言おう。などと余計な事を考えながら、一方でルノアは男の顎を狙って冷静に武器を振るった。

「おっっ！」

仰向けに倒れた男をナナキと一緒に何度も打ち据え、男の意識が無くなった所でようやく安堵の息を吐いた。

「はあ、はあ、はあ、や、やったのか？」

「は、はい……多分……」

息を整えながら視線をずらすと、水の壁が形を保てなくなり消え去る所だった。

水の向こうには少女に支えられながら肩で息をするアリスが見える。

「全く、騒がしいと思えば何だこの様は」

広間に聞こえた声に、ルノア達は一齐に顔を向ける。

そこには先程出て行った聖職者の男がいた。

ルノアとナナキはアリス達の前に立ち、聖職者の男と対峙する。しかし、ルノアの魔力は既に尽き、ナナキの体力も限界に近かった。

「……………どうすれば」

「くそ……………」

聖職者の男は呆れた様に溜息を吐き出す。

「はあ、おいクソガキ共、死にたくなければ牢に戻、ぶがああ！」

「」

聖職者の男は最後まで言い切る事は出来なかった。

何故ならその言葉を吐き出す筈の口が横から叩き付けられた拳に砕かれたからだ。

その拳の持ち主は肩口で切り揃えた金髪を不思議そうに揺らした。

「あれ？ルノアちゃんとアリスちゃんじゃないツスカ？」

こんな所で何してるんツスカ？」

子供はもう宿に戻って寝ないとダメツスカよ。め！」

## 奮戦の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 釣行の日

早朝、朝食もそこにティータは軽やかに宿のロビーに躍り出た。

「じゃあ、行つて来るツスよ」

「はいはい、気を付けなさいよ」

「そうツスね。ティータちゃん、美少女ツスから、暴漢に襲われるかも知れないツス！」

気を付けるツスよ！」

「いや、そこは心配してないわ。

呑み過ぎに気を付けなさい。

連日、泥酔して帰つて来るんじゃないわよ」

「……………前向きに善処する事も視野に入れて、建設的で誠実な対応となる様、努力するツス」

エリーと目を合わさない様に視線を逸らしながらも、ティータは鼻歌を歌いながら機嫌良く宿を出た。

宿を背後に通りを歩くティータは、少し進んだ先で、中央区に入る門を抜け、このケレバンの街の中心で有る歓楽街へと入って行った。

まだ早朝にも関わらず、男と腕を組んで歩く薄着の女や、酒の匂いを漂わせる人々が闊歩する光景は、まさに歓楽街である。

ティータは楽しげに路地を曲がると、裏路地にひっそりと存在し

ていた、小さな看板が出ているだけの酒場へと入った。

酒場の中は薄暗く、席はカウンターのみで5人も入れれば満席になる様な小さな店だ。

「……………此処はガキが来る様な店じゃねえぞ、帰んな」

「まあまあ、そう言わずに。」

この店の事はロブさんに聞いたんツスよ」

「ロブの野郎に？お前、あいつの知り合いか？」

「昨夜、大通りの酒場で意気投合したんツスよ。そしたらこのお店を紹介されて……………ふっふっふ、聞いているツスよ、良いヤツ揃ってるって」

ティードの言葉に肩をすくめた店主は、親指で空席の1つを指し示した。

「座んな」

「……………まあ、そんな感じだな」

「ふくん、そんな奴が居たんツスカ」。

あつ、次はそっちの果実酒をロツクで」

太陽が空の中央にまで来てもティードは機嫌良く呑み続けていた。そして店に置いてあった目ぼしい酒を一通り味わったティードは、代金を支払って店を出た。

「うへへ、本当に楽しい街ツスね」

ほろ酔い気分で楽しげに街をフラつくティーダは、酒やツマミの匂いに誘われ、炎に惹かれる羽虫の様にフワフワと店を渡り歩いた。有名な人気店、常連から聞き出した穴場、気になった小さな店と次々にハシゴしたティーダは酔いが深まるのと同時に、人通りの少ない路地へと迷い込んで行ってしまった。

「おろ？道を間違えたツスカね？」

そう首を傾げた時、ティーダの前後を塞ぐ様に険呑な様子の男達が立ち塞がった。

「ん？私に何か用ツスカね？」

はっ！もしかしてナンパ　ナンパツスカ？

ダメ！ダメツスよ！ティーダちゃんは敬虔なる女神様の僕なんツスよ！

遊びのお付き合いは出来ないツス。

あと、お兄さん達は好みじゃないツス、顔が

「ああ」

「よせ」

くねくねと身を擦るティーダに苛立った男が前に出ようとするが、リーダー格の男が手を上げて押し留めた。

「おいお前、最近俺たちの事をコソコソと嗅ぎ回っているらしいな」

「ええ？何の事ツスカね？ティーダちゃん、わかんない？」

「シラを切つても無駄だ。既に情報屋が吐いたぜ。どうせ口止め料を渋ったんだろ？」

「……………それは違うツスよ。【解毒】」  
アンチ・ポイズン

ティードは光属性の治癒魔法で体内のアルコールを分解しながら男達の言葉を否定する。

「私はちゃんと支払ったツスよ。でもそれは口止め料じゃないツス。私はお金を支払って、あんた達の事を私が探っていると言っ情報流して貰ったんツスよ。」

まさか、こんなに早く釣れるとは……ぼったくりの様な料金を支払った甲斐が有ったって物ツスよね」  
「なん……ぐあ！」

一足で間合いを詰めたティードは、リーダー格の腕を掴み捻り上げた。

「さあ、知っている事を全て吐いて貰うツスよ」  
「クソっ！殺れ！」

リーダー格の命令で他の男達が武器を取り出してティードに向かってくる。

「はあ、まあ、数人残っていれば話は聞けるツスよね」

数分後、人気の無い路地裏には鉄の匂いが充満し、全身を血に染めた男達の生き残りの数人がうめき声を上げていた。

「ま、待て！何だよ！何なんだよお前は」  
「んん？私の事を知って襲って来たんツスよね？」

「お、俺達は上に命令されただけだ！」

嗅ぎ回っている女を殺せって……」

「そうツスか、ではその上について教えて下さい」

「それは……勘弁してくれ！話せば殺される」

「では今死にますか？」

「ま、待て！だ、だが、良いのか？こんな街中で派手に殺して、お前だってこれが表沙汰になれば……」

「ああ、そう言う心配は要らないツス。

ええつと……どこやったツスかね？」

普段は着けてないツスから……あ、あつたあつた！」

そう言つてティードは懐から取り出した物を首に掛け、男の目の前で揺らして見せた。

「コレ、知つてるツスよね？」

「………バカな………そんな、そんな情報聞いて……」

「そりゃあ、バレない様にこの街に来る商会の一行に潜り込んで来たツスからね。

で、どうするツスか？」

「い、命だけは……」

「それはコレからのお話次第ツスね。

取り敢えず、拐つた子供の居場所から吐いて貰いましょうか？」



## 釣行の日(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 探索の日

「何か騒がしいわね？」

「そうね、音が響いてよく分からないけど揉めているみたいよ」

エリーとヒルデは身を隠しながら誘拐犯のアジトらしき遺跡を探索していた。

遭遇する人間は、首から聖印を提げた聖職者らしき者や、チンピラっぽい奴など。

しかし、そのどれもが何処か柄が悪い気がする。

「ん、この通路は知ってるわ」

「来た事があるの？」

「ええ、コレでも私はこの街ではそれなりの立場だからね。」

此処にも何度か来た事があるわ。

確か、この通路の先に聖堂がある筈よ」

「聖堂……」

「聖堂と言っても遺跡だから、何も無い広い空間に旧時代の神の像があるだけの場所よ」

「旧神の像か……確か、イブリス教の教典では、この世界には元々古き神々が居て、天界を去る時にイブリス教の聖女を天界に招いて力を与え、女神として世界の守護を任せ、て言うヤツよね」

「ええ、だからこの遺跡はイブリス教の聖地とされているのよ」

ヒルデの先導で広い場所に辿り着いた。

どうやらこの広間が聖堂らしい。

かつては豪華な装飾や優美な彫刻が施されていたのだろうが、現在は石壁が剥き出しになっており、所々崩れかけた旧神の石像が旧

時代の威光を僅かに残すだけであった。

「……………何も無いわね」

「そうね……………一応、この聖堂がこの遺跡の中心部なのだけど」

「となると、アリス達は途中の分岐の先に……………」

私の言葉の途中、轟音と共に遺跡が揺れたと感じる程の衝撃が響いた。

「な、何」

「今の揺れ、下から？」

「先程の騒ぎと言い、どうやら今この遺跡では何かが起こっている様ね」

「アリスとルノアが巻き込まれているかも知れないわ。下へ向かう道を探しましょう」

「そうね、仕方ないわ。

本当はあまり使いたくは無かったけど……………」

ヒルデから溢れ出た魔力が右手に凝縮され、銀色の煙管を形作つた。

「神器【泡沫の蝶】ペタルダ」

ヒルデは煙管を咥えると大きく吸い、『ふう』と白煙を吐き出した。

「コレは？」

「私の神器【泡沫の蝶】は魔力を煙状の半物質へ変換する事が出来るの。」

魔力の消費が大きいし、目立つから使いづらいんだけどね」

ヒルデは何度か白煙を吐き出し、小さな雲のようになった煙に煙管を向けてクルクルと掻き混ぜる様に振る。

すると白煙は聖堂中に広がって薄い霧の様に漂う。

「ここまで薄くすると殆ど何も出来ないけど、これなら私達の周囲を隈なく調べられるわ。コレで通路を……ん？」

「ヒルデさん？」

「コレは？」

ヒルデは聖堂の中心にある大きな男神の像の足元を見た。

すると白煙が神像の足元の辺りに集まり数秒漂うと、ゴゴゴと音を立てて石床が持ち上がり下へ向かう階段が現れた。

「隠し階段よ」

私は階段に近づいて状態を調べる。

「頻繁に使われていた形跡があるわね」

「行きましよう。拐われた子達を隠すならやはりこの手の仕掛けの先の可能性が高いと思うわ」

私はヒルデの言葉に頷くと、2人で階段を下りて行った。

遺跡の地下にある一室で、イブリス教の大司教ドンドルは豪華な

椅子にドカリと腰を下ろしていた。

「騒がしいぞ！何事だ！」

「も、申し訳有りません。どうやら侵入者がいる様で……」

「何？聖騎士団の連中か？」

「いえ、金髪の女が1人、暴れているそうです」

「ふん、ならさっさと始末しろ」

「はっ！」

ドンドルは慌てて出てゆく配下の聖職者を睨みつける様に見送った後、視線を正面に戻した。

「全く申し訳有りませんな、コロンゾン伯爵」

「いやいや、ドンドル大司教も大変ですな」

「使えない部下ばかりで苦労しますよ」

ドンドルは肩をすくめる。

「ところでコロンゾン伯爵、本日はどの様なご用件で？」

「ああ、馬車の事故で右足をな。」

「難儀していた所、この事をトアリート侯爵にお聞きしまして」「そうですか、では早速治療を始めましょう」

## 探索の日(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 旧交の日

聖堂の隠し階段を下り、薄暗い通路をヒルデと2人で進んだ。

ヒルデの神器【泡沫の蝶<sup>ペタルタ</sup>】の探索能力は非常に高く、道中、巧妙に隠されていた隠し通路を見つけた。

「ん？」

通路の先に明かりが灯っているのを見つけた私とヒルデは、暗がり

に身を隠し、そつとその広間を覗き込んだ。

その広間は、上の聖堂と同じくらいの広さで、石壁が剥き出しだった聖堂とは打って変わって高級感の有る装飾が施され、まるで大都市の神殿の様だ。

そこに居るのは数人の聖職者と身なりの良い男が1人。

「あいつ！」

「知ってるの、エリーさん？」

「ええ、イブリス教の巡回神官のドンドル大司教よ。」

中央大陸におけるイブリス教の総責任者。

その癖、悪い噂が絶えない生臭坊主よ。

王国でも会う度に私にいやらしい視線を向けて来たわ」

「聖職者よね？」

「まあ、こんな所に居るんだから噂通りのクズだったって事でしよう。」

それに一緒に居る身なりの良い男、ハルドリア王国の貴族ね。

パーティで見た事が有るわ。

確か……コロンゾン伯爵、王太子を支持して甘い汁を吸っている悪徳貴族だわ」

「王国の貴族？」

そんな知らせは受けて無いわ」

「つまり、コロンゾン伯爵はわざわざ極秘裏に関係の良くない隣国にやって来たって事になるわね。

そして、その理由がこの場に有る訳ね」

コロンゾン伯爵が右足の裾を捲り上げると、ドンドルは別の聖職者が持つて来た水晶玉を手に祭壇に立った。

「何、あの水晶玉？」

「分からないわ。」

でも、状況から考えるとあの足を治療しようとしているみたいよ」  
「でもあの足、相当酷い怪我よ。」

あれを治療するとなると【上級治療】、それも大司教クラスの使い手でどうにかって程の大怪我。

ドンドルは大司教とは言え、政治的な手腕でのし上がってきたらしいから、とてもじゃないけど治療なんて無理だと思っわ」

コロンゾン伯爵の怪我は馬車の車輪にでも巻き込まれたのか、ぐちゃぐちゃになった物を無理やり治療魔法で直した様な傷だ。

おそらく出先で他に手が無くそのまま治療魔法を掛けたのだろう。命に別状はないが、下手に治療している分、元に戻すのは以前のルノアの怪我の治療より難しい。

ドンドル大司教は水晶玉を触媒に呪文を詠唱し始める。

しかし、その詠唱の内容は聞き取れない。



「これ……古代語？」

「そうね……暗喩や固有名詞が有って完全には訳せないけど……」  
生贄を捧げて身体をあるべき姿に戻す』って感じの意味ね」

「エリーさん、古代語も分かるのね」

「簡単な物だけならね」

「生贄って言うのはあの触媒の事を指しているのかしら？」

「そうね。見た感じだと魔力が封入された水晶みただけ……ま  
あ、良いわ。」

それより奴らを捕らえましょう」

「見つかるわよ」

「コレだけ探しても見つからないのだから仕方ないわ。」

此処、予想以上に広くて入り組んでいるし、それにあいつらは多  
分この遺跡の一団の中でもトップの方でしょうから、締め上げてア  
リスとルノアの居場所を吐かせましょう」

「良いの？ハルドリア王国の貴族も一緒よ？」

「大丈夫よ」

元々コロソン伯爵には消えて貰うつもりだった。

アイツはフリードを唆して色々と暗躍していたらしい。

帝国に亡命してから調べた事だが、あのシルビア・ロックウィート  
を王太子であるフリードに近づけ私を排除しようとしていた痕跡が  
有った。

その方がフリードを御しやすいからだろう。

所謂、私が居なければ得をするタイプの貴族だ。

その癖、私の前では忠臣面していたのだから始末が悪い。

「……………おっと、今はアリスとルノアを救け出す事が先決ね」

思い出したら怒りが込み上げて来たが、それをグツと抑え込む。  
奴らにはアリスとルノアの事を聞かなくてはならないのだ。

私とヒルデは通路から広間へと堂々と歩いて出て行った。

「誰だ！」

「あんだ達が誘拐した子の保護者よ。」

死にたくなければ大人しく子供達を返さない」

私達の姿を見ると、ドンドルの周囲にいた聖職者達が慌てて武器を手にする。

「ヒ、ヒルデ・カレード！それに貴様は……まさか、エリザベート・レイストン」

「何だと エリザベート嬢！帝国に居たのか」

「お久しぶりですわ、ドンドル大司教、コロンゾン伯爵。」

旧交を温めたい所ですが、私達は急いでいますの。

拐った子供達の居場所を吐いて貰いましょうか？」

## 旧交の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ） ノ シ

## 蹂躪の日

啞然とした様子のドンドル大司教とコロンゾン伯爵だったが、先に気を取り直したのはコロンゾン伯爵の方だった。

正確には、彼は誘拐の件は知らないの、ドンドル程対応に困っていた訳では無い事が理由なのだが、エリー達には関係ない事だ。

「拐った子供？どう言う事が分からないが、エリザベート嬢。

国王陛下や宰相閣下がご心配されておりましたよ。どうぞ、私と一緒に……」

コロンゾン伯爵の言葉は頬を氷の矢が掠め、血が顎から垂れ始めた事で止まる。

「残念ながら私は王国では国家反逆の罪で指名手配されているわ。

そもそも、私を探しているのも利用する為でしょう。

それから、私の質問に答えなさい。

子供達は何処？

此処に連れてこられたのは分かっているのよ」

コロンゾン伯爵はエリーの殺気を受けて、冷や汗を滝の様に流しながらドンドル大司教を見る。

「わ、私は子供の事など知らない！本当だ！

此処に来たのも、足を治療してくれると聞いて、今日初めて来たのだ！」

「そう、なら貴方は必要ないわ」

「うがっ！」

治療されたばかりのコロンゾン伯爵の右足に氷の矢が突き刺さった。

「な、ま、待つて……ぐあああー！」

氷の矢が刺さった傷口の辺りから、次第に足が凍りつく。

「ひっ！い、嫌だ！た、助けて……」

「貴方、私を排除する為に随分と骨を折って下さったそうね」

「な、何の事だ！そんな証拠が何処に……」

「証拠などありません。」

私を知っている。それが重要です。

本当なら、貴方も他の馬鹿共の様に裏から手を回して破滅させるつもりだったけど、ちょうど良いから此処で死になさい」

「ひっ、い……や……」

コロンゾン伯爵は瞬く間に真っ白な氷像となり、ピシリと一度大きな音を立てたかと思うと、粉々に砕け散ったのだった。

私はコロンゾン伯爵だった赤黒い氷の塊に視線を向ける事もなく、ドンドル大司教を正面に捉えた。

「さて、ドンドル大司教、貴方なら知ってるわよね」

「な、何を……」

ドンドル大司教が言い淀んだ時、今度は剣の形をした白煙がドンドル大司教の周囲を流れた。

「ぎゃああー！！」

一拍の間の後、ポトリと床に落ちたのはドンドル大司教の親指だった。

「言い逃れは死よ。貴方達は私の客人に手を出した。この《銀蝶》ヒルデ・カロードの顔に泥を塗ったのよ？お分かりかしら？」

ヒルデが腹立たしそうに煙管を啜え、白煙を燻らせる。

「ちっ！殺せ！こいつらを殺せ！」

ドンドルが叫ぶと、部屋の中に居た聖職者達が次々と武器を手にして私達を包囲し始めた。

「こいつら……」

「エリーさん、此処は私が片付けるわ」

「良いの？」

「ええ、私もこのままでは面子が立たないのよ。私の足下で好き放題されてたらね」

ヒルデの苦笑いに、私は肩をすくめて返す。

「【誘死蝶】」

ヒルデが煙管を一振りすると、周囲に漂っていた白煙が掌サイズの蝶へと姿を変えた。

蝶はヒラヒラと舞いながら聖職者達へ向かって行く。

「ひっ！」

聖職者の1人が手にしていたメイスで蝶を薙ぎ払うが、白煙で出来た蝶は一度形が崩れても直ぐに元の形へと戻り、後退りする聖職者の頭へと留まった。  
すると……。

「ふぐつ！」

剣を手にしていた聖職者は、その剣で自らの喉を掻き切った。

「うがっ！」

「うぶっ！」

メイスが隣の聖職者の頭を砕き、頭を砕かれた聖職者が手にしていた槍はメイスを振り下ろした聖職者の胸を突いていた。

私達を取り囲んでいた聖職者達は皆、白煙の蝶が頭に留まった瞬間、自死や同士討ちをしたのだ。

「エグいわね」

「ふふ、私の【誘死蝶】は蝶の形にした魔力に【催眠】を込めているの。」

ある程度魔力に対する抵抗力が有ると効きづらいけど、有象無象を相手にするには便利よ」

私も【暴食の魔導書】の効果で通常の【催眠】を使った事は有る。しかし、それは少し気を張っていれば抵抗出来る程度の能力しか無い筈だ。

臨戦態勢の相手に【催眠】を掛け、その上忌避感の強い自死や同士討ちをさせるとは……。

ヒルデの魔力や魔力操作の技量だけでは説明出来ない。あの神器の力なのだろう。

おそらく、煙に魔法を込める事で効果を一点に集めて威力を高める類いの物だと思う。

私の魔力なら抵抗出来るだろうけど、敵にはしたくないわ。

「さて、もう終わりかしら？」

煙管を手中でクルクルと回すヒルデを忌々しそうに睨みながらドンドル大司教が叫ぶ。

「ば、化け物共め！何なのだ！侵入者は1人では無かったのか！」

「はあ？何を……」

ドンドル大司教がパニックになり喚き散らし始めると、不意に広間から繋がる通路の1つから人間が吹き飛ばされて来た。

広間に飛び込んだ人間は壁に叩きつけられて赤黒いシミに変わる。

「ひい！だ、誰だ」

ドンドル大司教の言葉に答えた訳では無いだろうが、通路からそれに応える声があった。

「どうも、美少女シスターのティーダちゃんツスよ」



## 蹂躪の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 階級の日

「ティーダ？」

「おや、エリーさんまで居るんツスカ」

「ママ！」

ティーダの背後から小さな金色の影が飛び出して来た。

「アリス！」

私は駆け寄って来たアリスを抱きとめた。

「エリー会長」

アリスに続きルノアも姿を見せる。

「ルノアも無事だったのね」

「はい、囚われていた場所から逃げ出した所をティーダさんに助けて貰ったんです」

「そう、ありがとう。ティーダ」

「いえいえ、お礼ならお酒で良いツスよ」

「ふふ、良い物を用意するわ」

見るとティーダの背後にはルノアと同年代の数人の子供達の姿がある。

「どうやら拐われた子供達は彼女が助けてくれたみたいね。

それなら後は……あれを始末すれば終わりか」

ヒルデはドンドル大司教に一步近づく。

「馬鹿な！！私は大司教だぞ！！世界の3分の1を支配するイブリス教の大司教だ！」

この中央大陸におけるイブリス教の纏め役で、中央大陸最高位の聖職者だ！！

貴様ら如きがこの私に逆らって良いと思っっているのかぁ！！！！」

「ああ、その事ツスか……」

狂った様に叫ぶドンドルだが、ティーダが冷めた声音で横槍を入れた。

「それなら問題ないツスよ。」

今この時を以て貴方の大司教の地位は剥奪されたツス。

今の貴方はただの信者……いや、女神様のご意志に逆らう背信者ツス」

「ふざけるな！！何の権限が有ってそんな戯言を……」

「私の権限ツスよ」

ティーダは首に掛けていたチェーンを引っ張り、シャツの中から聖印を取り出した。

聖印は聖職者の階級を表す物で、イブリス教内での地位によって材質や文様が変わる。

ティーダは普段、聖職者の証である魔除けしか身に着けていなかったが、聖印を持っていると言うことはイブリス教内で確固たる地位に有ると言う事だ。

ドンドル大司教はティーダの聖印を見て目を剥いた。

いや、ドンドル大司教だけではない。  
私とヒルデもティーダの聖印を見て驚いている。

ティーダの実力から、ただの無役のシスターではないとは思っていた。

おそらく、魔物専門の第2聖騎士団か、女神様の意に反する背信者を狩る第12聖騎士団辺りではないかと考えていたのだが、流石にコレは予想外だわ。

「おやおや？ドンドル君は私の事、忘れてしまったんツスカね？  
3年前に聖都の大神殿で会ってる筈なんツスけどね？」

まあ、しょうがないツスカね。

私は演説台、ドンドル君は広い聖堂の端っこの方にいたでしょうから、しょうがないツスね。」

「あ……あ、い、いや……な、何で……何で貴女が……」

ドンドルは顔を蒼白にしながらガタガタと震えだす。

ティーダの聖印は一見すると、銀製に見える。

しかし、その自ら光を発するかのような特徴的な材質は間違いなく  
聖銀ミスリルの物だ。

そして、イブリス教の聖職者で聖銀製ミスリルの聖印を身につける事が許されているのはたったの5人。

私はその内、2人には1度だけ会った事が有る。

別の2人は会った事はないが、姿絵が出回っている有名な  
となると、ティーダは残りの1人と言う事になる。

「お、お待ち下さい……お待ち下さい……」

こ、これは何かの間違いなのです！

私は敬虔なる女神様の僕で……」

「黙れ、背信者が女神様の僕を騙るな」

ゆっくりとドンドル大司教……元大司教に歩み寄るティータからは、いつもの陽気さは全く感じられず、冷たく刺す様な殺気を纏っていた。

「ひっ！は、話を……どうか、話を聞いて下さい、猊下！  
ティルダニア枢機卿猊下！」

## 階級の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 召喚の日

「話なんて聞く気は無いツス。」

お前は拐ってきた子供の魔力を限界まで抜き取って殺し、その魔力を使って古代の禁術で富裕層を治療、多額の報酬を受け取っていたそうツスね。

既に近くに居た第4聖騎士団の分隊にも此方に急行する様に使いを出してるツス。

このまま、大人しく聖騎士団の拷も……じゃなかった、審問を受け全てを話すなら痛い目を見ずに済むツスよ……今は」

ドンドルはヒルデに斬り飛ばされた親指を押さえながら青い顔で後退りするが、壁際にまで追い詰められて逃げ場を失ってしまった。

「わ、私は……私は……私はこんな所でえ!!!」

ドンドルは懐から取り出した短剣を振り上げた。

その短剣は武器として作られた物には見えない。

無駄な装飾や不必要な刃の湾曲など、実戦用の武器としては意味の無い要素が多過ぎるからだ。

インテリアか……もしくは何かの儀式用の物か。

ドンドルはその短剣を側に有った聖職者の死体へと突き立てた。

「ん？何をしてるんツスか？」

私は突然の魔力の膨らみを感じた。

「ティータ、退がって！」

「っ」

「な、何？」

ティータが私やヒルデの側まで跳び退がると、短剣が突き刺さった死体を中心に魔法陣が広がった。

「な、何ツスカ、コレは」

「魔法陣……それも召喚系！」

ヒルデが魔法陣を読み取る。

「あの短剣、何かを召喚するマジックアイテムツスカ？」

「これは……」

私はその魔法陣に見覚えがあった。

ヒルデが言う通り、これは召喚の魔法陣だ。

それも、冥界からの。

「……悪魔召喚」

あの短剣を突き刺した死体を贄に冥界から悪魔を呼び出すつもりか。

だが、死体一つの贄で呼び出せる悪魔なら私1人でも対処出来る。

ドンドルは光を放つ魔法陣を見てニヤリと口角を上げた。

「ふひ……ふひひひひい！！」

小娘共があああ！！この【招来の短剣】の力でええ！！」



その時、私はドンドルの足下の魔法陣が不自然な動きをしたのに気が付いた。

一度描かれた魔法陣が描き変わったのだ。

「っ」

「ん？」

ヒルデとティータも違和感を感じたらしい。

「今の一体……」

ドンドルはそれに気付かずに両手を上げて高笑いを続ける

「ひあはっはっはあ！！これで終わりだあ！！小娘共おお！！」  
【召喚】

ドンドルが叫ぶと魔法陣の光が黒く染まり、黒い棘が突き出る。  
その棘は周囲の聖職者の死体やドンドルを貫いた。

「じぶっ　な、な……ぜ……」

短剣を突き刺された死体と、黒い棘が刺さったドンドルや聖職者の死体が塵となって崩れて行く。

「な、何だ　か、身体が……い、痛い……怖い……何だコレはあ  
ああ！！！」

「干渉されてる　」

「割り込まれた！本来の召喚とは別の物が来るわ！」

部屋中に転がる幾つもの死体と、ドンドルの命を贅に魔法陣から悪魔が現れる。

青白い肌に魔族よりも太い角、そして黒い眼球に白い瞳、典型的な悪魔の特徴を持つ男は、貴族の様な上等な服を着こなしており、黒地に紋章が刺繍されたマントを靡かせている。

その佇まいには一定以上の実力者が持つ凄みの様な物が滲み出ていた。

「明らかに初めの召喚で呼ばれていた悪魔より高位の悪魔ね」

召喚に割り込んで無理やり贅を増やして自ら召喚されたわけね。

悪魔はゆつくりと周囲を見回した後、私達の方に顔を向けた。

「初に相見える、人間よ。あいまみ

私は伯爵二位、アルトロス・イザ……」

悪魔は名乗りを中断し剣を抜くと、死角から振り下ろされた真っ白な大鎌を受け止めた。

「神器【神の恵みを刈り取る刃】」ハーベスト

「ふむ、名乗りを遮り攻撃とは……品性に欠けるぞ、お嬢さん」

## 召喚の日(後書き)

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

(・・)ノシ

## 悪魔の日

ティードの神器らしき真っ白な大鎌を剣で受け止めた悪魔、アルトロスは無造作に剣を振り抜いた。

弾かれたティードは空中で体勢を立て直し片手を突いて着地する。

「ティード、いきなり何をするの」

悪魔はその全てが邪悪な存在では無い。

人間と友好的な関係を築こうとしている者、人間界、そして天界を支配しようとしている者、無関心な者と様々だ。

召喚に割り込んで無理やり人間界へやって来たこの悪魔の目的は不明。

召喚への割り込み方から、あまり友好的には見えなかったが、いきなり事を構えるには相手が悪い。

奴は『伯爵二位』と名乗った。

悪魔の爵位とは、人間の国々のそれとは違い、血族の間で受け継がれて行く物ではない。

悪魔の爵位は強さで決まるのだ。

自分より上位の悪魔を倒す、上位の悪魔からの承認を複数受ける事で、悪魔は爵位を得る。

悪魔王を頂点として、公爵、侯爵一位、二位、伯爵一位、二位、三位、子爵一位、二位、三位、四位、男爵、騎士と続く。

そして現在、伯爵二位の悪魔は4人居るらしい。  
その誰もが一騎当千の強者だと言う。

ならば此処は迂闊に攻撃せず、目的を聞き出すべきではないか？

「エリーさん！コイツは《冥界の夜明け》ツス！」

「冥界の夜明け？」

「人間界と天界を支配しようとしている悪魔の組織ツス！」

奴のマントの紋章は冥界の夜明けの物、つまり敵ツス！」

ティーダの言葉に私とヒルデも直ぐに戦闘体制を取った。

私が持っている悪魔の情報は、グリモア・ベルフェゴール【怠惰の魔導書】で契約している

男爵位の悪魔から聞いた物だ。

彼はいわゆる中立派、人間界や天界との争いに興味を持っていない悪魔だ。

故に細かい組織だのの情報聞いていなかった。

だが、ティーダはイブリス教の枢機卿。

イブリス教は歴史の影で何度も人間界を狙う悪魔と戦っていると聞いている。

つまり……………コイツは敵か。

「神器【暴食の魔導書】」

私が神器を出した事で、この場にいる神器使いは3人となった。

アルトロスは私が手にする【暴食の魔導書】を見て、そこからヒルデの【泡沫の蝶】ペタルダ、ティーダの【神の恵みを刈り取る刃】ハーベストへと視

線を移した。

「なるほど、人間が修練の果てに会得する神器と言う物が……  
どうだお前達、私は今此処で暴れるつもりは無い。

此処はお互いに刃を収めないか？」

「……………」

「……………どう言う事？人間界を狙っているんじゃないの？」

「エリーさん、それとそちらのお色気魔族さん！」

「ヒルデよ」

「ヒルデさん、奴は今万全じゃないツス！

伯爵二位の悪魔が人間1人の命と10数体の死体程度で召喚出来る筈が有りません。

奴は召喚に自分の魔力を使った筈ツス！」

「なら、回復前に倒すべきね」

「そうね、誘拐犯を追ってきたら御伽噺の悪魔と戦う事になるとはね」

アルトروسは溜息を吐き出し私達を一瞥する。

「ルノア、アリスを連れて子供達の所に」

「は、はい…！」

ルノアは私の背後に隠れていたアリスを連れてこの場から離れる。

アルトروسの動きを警戒しながら2人が離れるのを待っていたが、アルトروسはルノア達に手を出す事なくその場で堂々と立っていた。

「ふむ、戦いを選ぶか。

良いだろう、お前達を戦士として認めよう。

私は伯爵二位、アルトロス・イザリース。

人間の戦士達よ、その力を見せてみよ！」

アルトロスが地面を踏み碎きながら間合いを詰める。

【縮地】並のスピードだが、魔力の流れは感じない。  
純粋な身体能力による踏み込みだ。

「くっ  
」

ヒルデが咄嗟に白煙を集めて盾を作る。

モワモワとした盾は、振り抜かれたアルトロスの蹴り脚を受け止めて見せた。

更に白煙はアルトロスの足を包み込む様に取り込んでゆく。

「ほう  
」

アルトロスは煙を断ち切る様に剣を振るう。

しかし、剣は白煙を素通りしてまるで効果が見えなかった。

「ふふ、煙による拘束よ。いくら剣を振るっても切る事は出来ないわ」

「なるほど、その煙管の能力で魔力を半物質化しているのか。面白い」

アルトロスが再び剣を振るうと、今度は白煙が斬り散らされてしまった。

「魔力なら、魔力をぶつければ散らせるだろう？」

「……むう」

たった一合でヒルデの神器の攻略法を見抜いたアルトロスは周囲

から迫る白煙を全て斬り払った。  
その動作の中、僅かな隙に魔法を叩き込む。

「【雷撃】 【岩槍】 【熱波】」

だが、アルトロスは雷撃が剣に当たる瞬間手を離し、岩の槍を受け止めて振り、熱波を消しとばした。

やはり中級魔法では防がれるわね。  
でも此処は地下。

上級魔法を連発すれば生き埋めだ。

その為、中級の中でも周りに被害が出にくい3つを使ったのだ。  
防がれてしまったが、まあ良い。

奴は剣を手放し、注意は此方に向いている。

「神威を受けるッス!!!」

背後から走り寄ったティータが大鎌を振り下ろす。

「ふむ、まずまずと言った所か」

アルトロスは完全な不意打ちの筈のティータの攻撃に反応して見せた。

素早く振るわれた手刀がティータの胴体を上下に分かつ。

だが、ティータの上半身と下半身はその輪郭を失うと、白煙となって揺れた。

「……………」



アルトロスが僅かに目を見開いた気がした。

白煙で作られたティータの真逆の方向、魔法による土煙の中から、純白の大鎌を引き絞る様に構えたティータが飛び出した。

## 悪魔の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 悪魔の日

ティーダの大鎌は、アルトロスの首を斬り飛ばす軌道で振るわれた。

アルトロスは白煙で作られたティーダを迎撃した為、どう動こうとも、迎撃よりも大鎌の方が早い。

「貰ったツス！」

しかし、ティーダの大鎌は甲高い音を立てて止まった。

「なっ  
」

ティーダの大鎌を止めたのは主人を失った筈の剣だった。

アルトロスが素早く手を振ると、その動きに連動する様に宙に浮く剣が踊る。

「わっ　　ちょ、な、何すかコレ！」

「ティーダ！」

私はティーダの盾になる様に氷を作るが、あっさりと切り裂かれる。

しかし、その間にヒルデの白煙がティーダを掴み、私達の方へと引き寄せていた。

「あ、危なかったツス！」

おい、悪魔！不意打ちなんて卑怯ツスよ！卑怯！正々堂々と正面から戦うツス！」

不意打ちを仕掛けて返り討ちに遭ったばかりとは思えない清々しいクレームだった。

アルトロスは戻って来た剣を再び手にすると、切先を此方へと向ける。

「【炎】」

剣から噴き上がり、弾丸となって飛来する。

「【氷壁】」

「【風】」

氷の壁が炎を受け止めるが、アルトロスが振るった剣から風の刃が放たれ、【氷壁】を砕いた。

「どうなっているの　悪魔は複数の属性が使えるって事？」

「違うツスよ、ヒルデさん。悪魔も使える属性は一種類の筈ツス」

「となると、あの剣ね。多分、マジックアイテム」

「じゃ名答」

アルトロスは剣を掲げる様に見せつける。

「名は『全一』<sup>アンリ・マンユ</sup>、使用者の魔力を別の属性に変換する『伝説級』<sup>レジヘント</sup>の名剣だ」

伝説級……それが本当なら、能力が魔力の変換だけの筈がない。

他にも能力を隠している筈だ。

「これは本気で不味いわね、エリーさん」

「ええ、弱体化していてコレとはね。」

あのアルトロスと言う悪魔、伯爵二位と言っているけど実力はもつと上かも知れないわね」

アルトロスは強い。

その上、場所や相性も良くない。

私は崩落の恐れがあるから大魔法が使えず、《エリック叙事詩級》の細剣、フリュウゲル翼を持つ者』も再生中で使えない。

ヒルデの神器は見たところ、対応力が高く、攻防自在に戦える様だけど、魔力主体の戦い方をするアルトロスとの相性は悪い。

ティーダの神器の能力は分からないけど、彼女程の実力者の神器がただ鋭いだけの大鎌などあり得ない。

なら、ティーダの神器もこの状況では真価を發揮できないのだから。

「仕方ないツスね。奥の手を使うしかないツスカ……」

ティーダはアルトロスを睨みながら顔を歪め、嫌そうな声音で吐き捨てる様に言った。

「エリーさん、ヒルデさん、10秒で良いので持ち堪えて欲しいツス」

「分かったわ」

「何か手があるのね」

「正直、使いたくは無いんツスけどね」

ティードが純白の大鎌を担ぐ様に構え、魔力を練り上げて行く。私とヒルデは、ティードの前に壁になる様に立った。

「ほう？神器を超える力が有ると言うのか？」

「それは見てのお楽しみツスよ」

「そうか、だが残念だが時間切れだ」

そう言うと、アルトروسは剣を地面に突き立てた。

「【地】」

すると、地下空間に轟音が鳴りひびいた。

「な」

「崩れるわ！！」

「アリス！ルノア！」

私は水を作り出すとアリス達の方へと伸ばした。

崩れ始めた天井に驚き、固まっていたアリスとルノアを絡め取り、ついでに近くに居た少年も水の中に放り込むと、私は自分の体を水で包み込み、完全に崩落する前に水を操り地上へ向かって無理やり突き進んだ。

土砂を受け流し、岩を砕きながら地上に飛び出すと、月明かりと共に、遺跡を包囲する武装した集団の拵えた篝火や光魔法に照らされた。

アレは……聖騎士団。  
ティータが連絡したと言っていたやつか。

地面に降り立った私は急いでアリス達を水から出した。

「う、げほ、げほ……」

「はあ、はあ、はあ……」

「がはっ！」

どうやら無事らしい。

私の近くの地面が切り裂かれ、ティータが飛び出し、瓦礫が弾かれ白煙に包まれたヒルデが現れた。

2人とも腕に子供を抱えている。

「みんな無事」

「何とかね」

「死ぬかと思ったツス……」

「子供は……」

「ドロシーが居ない」

子供は無事かと尋ねようとすると、少年が叫ぶ様に言った。

見れば首輪をつけられて居た少女が居ない。

流石にあの崩落に巻き込まれては生存は絶望的だ。

「くっ！」

私は頭を切り替えてアルトロスの姿を探した。  
すると、遺跡の屋根だったのであるう、少し高くなっている場所にアルトロスは立って居た。

「この外道がああ！！！」

怒りを滲ませたティータが飛び出す。

「ふむ、冷静さを欠くのは愚かだぞ、お嬢さん」  
「な……に」

アルトロスが抱えていた何かをティータへと投げた。  
ゆっくりと投げられたソレを両断しようと大鎌を引き絞ったティータだったが、投げられたのが、首輪をつけられた少女だと気付き、咄嗟に神器を解除して受け止める。

「今宵は此処までだな。」

「いずれまた、今度は互いに万全の状態で死合うとしよう」

「ま、待つツス！」

アルトロスはティータに応える事なく剣を振り、土埃を舞い上げた。

私達が視界を取り戻した時には、あの貴族然とした悪魔の姿は消え去っていたのだった。



## 悪魔の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 帰還の日

「今日は大変だったわね」

私はヒルデの屋敷の一室でミレイに淹れてもらった珈琲を口にしていた。

あのアルトロスと言う悪魔との戦闘後、子供達を保護してケレバンの街へと戻って来た私達は、ヒルデの好意で屋敷に部屋を用意して貰っていた。

宿を引き払って帰って来たミレイに早速、珈琲を淹れて貰い、ようやく一息つく事が出来たのだ。

現在、ヒルデは誘拐を行っていたイブリス教と裏で結びついていた代官を捕縛したり、領主であるコーバット侯爵に連絡を取ったりと忙しく動いている。

この大捕物の後、街の治安を守る為、ヒルデもしくはらくは徹夜になるだろう。

ティーダも枢機卿として、集まった聖騎士団の指揮を執らなくてはならないと、崩れた遺跡に残っている。

本人は面倒臭いと、必死に抵抗していたが、「これ程の大事なのですから、猊下に指揮を執って貰わねば困ります！」と聖騎士団の分隊長だと言う騎士に連行されて行った。

アリスとルノアは、ミーシャに会いに行った。ミーシャは傷は治癒しているものの、流した血は多く、まだ安静にしていなければな

らないので、無理はさせない様によくよく言い含めておいた。  
しかし、そのミーシャなのだが、どうもアリスとルノアを守れな  
かった事を相当気に病んでいるらしい。

確かにミーシャは歳の割には戦える方だが、彼女はあくまでも、  
私の従者として側に置いて居るのであり、護衛では無い。

そもそもアリスとルノアが拐われたのは、街の治安を過信し、3  
人の護衛は不要と判断した私の責任だ。

よって、護衛の不備を気にする事はないと言ったのだが、「でも  
私をもっと強かったら、アリス様とルノア様が危険な目に合う事は  
有りませんでした」と言って聞かないのである。

「はあ、ミーシャの事はどうにかしないとね」

「そうですね。このままでは無茶な訓練でもして体を壊しかねませ  
ん」

「帝都に戻ったら何か考えないと……」

私は正面に座ったミレイが飲み干したカップに新しくポットの珈  
琲を注いで、そのまま自分のカップも芳ばしい液体で満たす。

「エリー様、飲み過ぎですよ」

「……………そうかしら？」

「はい、珈琲は飲み過ぎると胃が荒れます。

今日はそれで最後にして下さい」

考える事が多いと、つい口が寂しくなってしまう。

数少ない、なかなか直せない私の悪癖の1つだ。

「ところで、そのイブリス教の大司教達は何故子供を拐っていたの  
でしょうか？」

子供の魔力が目当てなら、わざわざ拐わずとも殺して魔力だけ奪った方が手間が少ない様に思いますが？」

「そうね。ティードによると、どうも人間から無理やり抽出した魔力は水晶玉に込めても数時間で霧散し始めてしまいうらしいわ。」

その上、治癒に使う魔力は治癒される者の魔力との相性に因つても変えなくてはいけないそうよ」

「なるほど、なので遺跡の地下に子供達を生かしたまま囚えていたのですね」

遺跡に囚われていた子供達のだが、親や親類がいる者は送り届ける様にヒルデが手配していた。

中にはハルドリア王国から連れてこられた子供も居たらしい。

あのバカ王子がお金を貰って、ドンドルが子供を連れて国境を越えるのを見逃していたらしい。

それを示す証拠はティードが押さえていた。

イブリス教の不祥事でも有るので、大々的には無理かも知れないが、ハルドリア王国にもそれなりの余波が及ぶ筈だ。

行き場のない子供達はヒルデが支援する孤児院に引き取られる事になった。

ケレバンとは別の街に有るその孤児院に向けて、近々子供達を乗せた馬車が発する筈だ。

そして2人、行き場のない子供達の中から私が引き取る事になった。

あのルノアと一緒に子供達を守ろうとしていた少年ナナキと、魔法の素質を持った少女ドロシーだ。

この2人の身の振り方も帝都に帰った後の課題になるわね。

一応、今回の目的であったアクアシルクの商談はとても上手く行った。

しかし、その後には多くの問題が残されたのだった。

「助けて頂きありがとうございます」

“無事で良かったです。皆さんの無垢な祈りを聞き届けた女神様が私達を此処へ導いて下さったのです”

そう言ってティルダニア様は、邪教に囚われていた子供達を優しく抱きしめました」

区切りの良い所でナンシーは本を閉じた。

ベッドで横になる息子は既に眠そうにしている。続きはまた明日だ。

既に半分夢の中に居る息子を見て笑みを浮かべたナンシーは、本を棚に片付ける。

本のタイトルは『ティルダニア英雄譚』。

かつて仲間と共に世界を救った、慈愛と無欲の大英雄ティルダニア・ノーチラスの活躍を子供向けに描いた本だ。

「もう眠ったのかい？」

「ええ」

ナンシーは隣の部屋から顔を覗かせた夫に応え、息子の頭を撫でてから、そつと部屋を出るのだった。

## 帰還の日（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## ミーシャの迷走：霧の中を歩むが如く

私は弱い。

エリー様なら、簡単に誘拐犯を返り討ちに出れた。  
ミレイ様なら、アリス様とルノア様を連れて逃げ切る事が出来た。

「……もつと……強くならなきゃ……」

帝都に戻って来て数日、私は早朝の帝都を走っていた。  
ランニングを始めて1時間程が経っただろうか。  
こんな事で本当に強くなれるのかもわからないけど、今私に出来るのはこれくらいしか思い付かない。

「はあ、はあ、はあ」

エリー様の屋敷に戻って来た私は、息を整えた後、濡らしたタオルで汗を拭って着替える。

これからミレイ様に従者としての仕事を教わる予定だ。

「5分の遅刻ですよ、ミーシャ」

「も、申し訳ありません」

準備に手間取り予定の時間に遅れてしまった。  
待たせてしまったミレイ様に、私は慌てて頭を下げて謝罪する。

「貴女、また朝からトレーニングしていましたね」

「……はい」



「はあ、貴女は死んでもおかしくない程の重傷を負ったのですよ。まだ、激しい運動はダメだと言ったでしょう？」

「す、すみません……で、でも、私……」

ミレイ様は、バツが悪く目を逸らした私の頭を撫でてくれた。

「貴女の気持ちは分かります。

私も同じ経験がありますから」

「ミレイ様も……」

ミレイ様はソファに座ると、私にも正面に座る様に促した。

私が一礼してミレイ様の正面に腰を下ろすと、ミレイ様は私の練習用に用意していたティーセットで紅茶を淹れてくれた。

「エリー様がハルドリア王国の貴族の出だと言っつのは聞いていますね」

「はい」

「エリー様は幼少の頃より、その才覚を發揮され、まだデビュータムトも済ませる前から国政や商売などで活躍されておりました。

私の生家も貴族だったのですが、没落してしまい、スラムで物乞いをするか、身売りをするかと言う時に、そんなエリー様に拾われたのです」

「……………」

私は、ミレイ様の生い立ちを聞いて、自分の状況に重ねた。

私も奴隷として後が無い状況でエリー様に買って頂いた。

セドリック様の奴隷商会は比較的まともだと言っつ話だったけど、可能性で言えば、酷いご主人様を買われて悲惨な人生を送る可能性だっつて少なく無かつた筈だ。

そこをエリー様に救われた。

私の身分は奴隷だけど、扱いは他の商会員とほぼ変わらない。十分な休息も貰えているし、自由に出来るお金も貰える。

でも、だからこそ、私はエリー様のお役に立たなければいけないのだ。

「ミーシャ？」

「は、はい！ すいません」

いけない、私は姿勢を正しミレイ様の話に集中する。

「……それから、私はエリー様のご実家で雇って頂き、従者として恥ずかしくない教育を与えて貰いました。

故に私は、全身全霊を掛けてエリー様に仕えようと思ったのです。そんなある日、商会の仕事の関係で、私とエリー様はハルドリア王国の王都を歩いていました。

そして、そこで男達に襲われてしまったのです」

「えー」

「エリー様を守ろうとした私は、あっさりと捕まってしまう、私を人質にされたエリー様は抵抗出来ずに男達に拐われてしまったのです」

驚いている私の視線を気にする事なく、ミレイ様は紅茶を一口飲み、話を続ける。

「そして、私は解放されました。

エリー様のご実家に身代金を要求する手紙を渡せと言われて放り出されたのです。

私は自らがエリー様の足を引いてしまった事を悔やみました。

エリー様に迷惑を掛けるくらいなら、自ら死を選ぶべきだとも……しかし、私が手紙をご実家に持ち帰って自己嫌悪に陥っていた時、エリー様はあっさりのご帰宅されたのです」「え？だ、誰かが助けてくれたのですか？」「いいえ、エリー様は誘拐犯のアジトに連れて行かれた後、自ら犯人達を叩きのめして帰って来たのです」

「そ、それは……」

「そして、泣いていた私にエリー様は言いました。『泣いてないで珈琲でも淹れて頂戴、ミレイはミレイに出来る事をしてくれたら良いのよ。ミレイに出来ない事は、出来る人に任せたら良いの。』

さあ、私の口に合う珈琲を淹れるのはミレイにしか出来ないんだから』と」

「……………」

「今はまだ分からないかも知れませんが、いずれミーシャにも、ミーシャにしか出来ない事が見つかる筈です」

そう言っただけで微笑み、ミレイ様はティーカップを置いた。

「さて、では紅茶の淹れ方の練習を始めましょうか」

「は、はい……」

私は慌てて残りの紅茶を飲み干して立ち上がる。

ミレイ様はあまり表情を表に出さないが、とても優しい。

だけど、今日は遅刻した分少し厳しめに指導された。

ミレイ様の話に何かを考えさせられるが、それはまだ私の中で明確な形にはなっていない。

まるで霧の中を迷い歩いている様な中、私は僅かに輪郭が見えて

来た気がする答えを探していた。

ミーシャの迷走：霧の中を歩むが如く（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## ミーシャの迷走：答えに手を伸ばすが如く

お昼を過ぎた頃、ミレイ様の紅茶の淹れ方やマナーの指導を受け  
終えた私は、商会の仕事をこなして居た。

倉庫で在庫の確認を終え、エリー様の執務室に戻り報告書を提出  
した私に、エリー様が声を掛けた。

「ミーシャ、悪いんだけど《鋭き切先》のエルザに手紙を届けて貰  
える？今は帝都のパーティホームに居る筈だから」

「畏まりました」

「届けたらそのままお昼の休息に入って良いわ。」

午後の仕事までには戻ってね」

「はい」

私はエリー様から手紙を受け取ると、上着を羽織って屋敷を出た。

エルザ様達が住んでいるパーティホームは平民街だが、貴族街に  
近い高級住宅地にある。

つまりエリー様の屋敷と同じ区画だ。

10分程歩くと周囲の建物は大きな屋敷から、造りの良い民家へ  
と変わる。

この辺りは羽振りの良い商人や地主の自宅や、上級冒険者パーテ  
イヤ上級傭兵団向けの貸し家が多く有る。

私はその内の一軒、冒険者パーティ《鋭き切先》がパーティホ  
ムとして借りている家の門を抜け、呼び鈴を鳴らした。

しばらくの間の後、扉が開き私よりも少し年上の狐人族の少女が顔を覗かせた。

「はい、どちら様……あら、ミーシャちゃん」

「こんにちは、マルティ様。エリー様からお手紙をお預かりしているのですが、エルザ様はご在宅でしょうか？」

「うん、居るよ。上がって」

「お邪魔します」

マルティ様に促されパーティホームにお邪魔した私は共有スペースの居間へ通された。

「エルザさん、エリーさんの所のミーシャちゃんが来ましたよ。エリーさんからの手紙を預かっているそうです」

「ん？そうか、わざわざ済まないな」

「いえ」

居間のソファではエルザ様とパーティメンバーのシシリー様がボードゲームに興じていて、それをサリナ様が見物していた。

治癒魔導士のリサ様の姿は見えない、出掛けているのでしょうか？

「それで、手紙と言うのは？」

「はい、こちらです」

エルザ様は私が手渡した手紙を開き、一読すると頷きます。

「なるほど、返事を書くから少し待っていて貰えるか？」

「はい」

エルザ様は手早く返事の手紙をしたためました。

「はい、よろしく」

「お預かりします」

「ふむ……ミィシャ、少し時間は有るか？」

「え？は、はい、この後はお昼の休息を頂いています」

「そうか、では一緒に昼食でも食べるとしよう」

エルザ様に連れられてやって来たのは近くの食堂だった。

食堂とは言え、下町の賑やかな感じでは無く、落ち着いたカフェの様な雰囲気のお店だ。

エルザ様が注文し、机の上に料理が所狭しと並べられる。

「適当に注文したから遠慮せずに食べると良い」

「ありがとうございます、頂きます」

それからエルザ様と談笑しながら食事を進めた。

エルザ様は冒険者らしく、健啖家で、沢山の料理も残す事なく私達のお腹に収まる事になった。

「それで、何か悩み事でも有るのか？」

食後のお茶を頂きながら、エルザ様はそう切り出した。

「どうやら、今日私を食事に誘ってくれたのはコレが本題だった様だ。」

「……………実は」

私は先日有った誘拐事件について話す。

アリス様とルノア様を守れなかった事、強くなりたい事、ミレイ



様に私にしか出来ない事が有ると言われた事など。

「なるほどな。ミーシャは今度こそアリスやルノアを守る様になりたいのか？」

「はい……でも、どうすれば強くなれるのか……」

「ふむ……なあ、ミーシャ。『強い』って言うのはどう言う事なのか分かるか？」

「え？」

「ミーシャの目指す強さって奴が具体的に何なのかって事だ」

「それは……」

「何があっても確実に仲間を守る強さなんて存在しない。どれだけ強くなったとしても、更に強い奴って言うのは存在している」

エルザ様は紅茶で口を湿らせて続ける。

「冒険者パーティーって言うのはな、メンバーがそれぞれの役目を全うする事で大きな力となる物だ」

「は、はい」

「斥候に前衛、盾役、援護と治療。それぞれに役目が有り、誰が欠けてもダメだ。」

ミレイが言っていたミーシャにしか出来ない事って言うのも、きっとそんな役割を見つけてるって事だと思っぞ」

「私の役割……ですか」

「ああ、お前はまだ若い……ん？こんな言い方をすると私が若く無いみたいだな。」

まあ良い、大きな壁にぶつかって自分の在り方に迷うのはよくある事だ。

そしてその壁を乗り越えた者は強くなる。

私から言えるのはこれくらいか。

ミーシャの悩みは自分で考えて乗り越える事に意味があるからな」

「……………はい」

エルザ様の言葉は理解出来る。

しかし、実感する事は出来ない。

ミレイ様の話も同じだ。

2人の言葉から読み取れるのは、単純な強さを求めてもダメだと  
言う事。

ではどうしたら良いのか、2人が言う私にしか出来ない、私の役  
割とは何なのか。

深い霧のなか、掴めそうで掴めない何かを探す私は、臃げに見え  
て来た答えに必死に手を伸ばすのでした。

ミーシャの迷走：答えに手を伸ばすが如く（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## ミーシャの迷走：手にした光を確かめるが如く

ミレイ様やエルザ様にアドバイスを受けて数日、どうしたら良いのか分からない日々が続いていた。

今日はお休みを頂いていた私は、帝都の通りを1人、歩いていた。誘拐事件も有ったので、あまり遠くに行く事は禁じられています。が、この辺りなら衛兵の巡回も多いので問題ありません。

本当なら今日の休みは鍛錬に充てるつもりだったのだけれど、それはエリー様に禁じられてしまった。

昼を屋台で簡単に済ませた後は、特に目的も無く街をブラブラと歩いていました。

「がっはっはっは！！マジかよ！」

「ふはっはっは！そんなんツスよ〜」

なんだか聞き覚えの有る笑い声に私の耳がピクピクと反応する。声の方に顔を向けると、酒場も兼ねる食事処の大きく開かれた扉から、昼間から大量の酒瓶を机の上に並べた大男とシスターの姿が見えた。

「お！ミーシャちゃんじゃないツスカ〜」

「ん？おお、猫の嬢ちゃんか」

「こんにちは、バアル様、ティーダ様」

まだ日も高い内に顔を赤らめる2人は、両人とも私の知人だった。

イブリス教の聖職者のティード様と、エリー様直属の部下である  
バル様だ。

このお二人は知り合いだったのだろうか？

2人に誘われて席に着いた私は果実水を貰う。

「ティード様はいつの間に帝都に戻られたのですか？」

「今日ツスよ。エリーさんへの挨拶は明日にして、今日は休もうと  
宿に入ったらバルさんと知り合いました、話したらエリーさんの  
舎弟だって言うじゃないツスか」

「んでせっかくだから2人で呑んでたんだ。

で、猫の嬢ちゃんは何で1人でこんな所に居たんだ？」

「私は……特に何も……」

「ん、悩み事ツスか？」

なら私が相談に乗るツスよ。なんだって私はシスターさん、悩め  
る子羊を導くのがお仕事ツス」

ティード様はそう言って胸をドンと叩いた。

詳しくは知らないけれど、エリー様の話では、ティード様はイブ  
リス教の中でもとても偉い人らしい。

こんな所でお酒を飲んでいて良いのだろうか？

「えつと……それが……」

私はだんだんと相談し慣れて来た話をする。

ミレイ様とエルザ様に言われた事も付け足して話したらバル様  
がその大きな手で私の頭をポンポンと叩いた。少し痛い。

「若けえ悩みだな」

「そうツスね、しかし、エルザさんの言う通り、その答えは自分で

見つける物ツスね」

「ではもし、ティード様やバル様が私と同じ状況に陥ったらどうなさいますか？」

「ん？友達が誘拐されそうになった場面の事ツスよね？」

「そうツスね……私なら人質が多少怪我してでも犯人を仕留めるツスね」

「ええ」

「即死さえしていなければ魔法で治療出来るツスからね。大きな街ならそれなりの治療魔導士も居る筈ツスから」

「……………バル様は？」

「そつだな……………俺は逃げるな」

「え」

「相手は誘拐犯だからな。囚われても直ぐに殺される可能性は低い。なら逃げて仲間を呼ぶ方が良いだろ？」

「一人で勝てないなら、勝てる面子を揃えるのが手っ取り早い」

「2人の話は確かに理解出来る回答でした。」

「ティード様は理的に状況を判断し、バル様は最善手を瞬時に導き出した。」

「……………私は間違つて居たのでしょうか？」

「ミーシャちゃんの行動も不正解ではないツスよ。でも、それを実行する力が足りなかつたんツスね」

「ではやはりもつと強くなるしか……………」

「確かに強くなるのはいい事だぜ。」

「だがな、相手がそれを待ってくれる事はない。」

「今の自分に出来る最善を尽くすしか無いんだぜ」

「自分の最善……………」

「私の最善……………あの場での最善は何だったのか。」

ルノア様とアリス様が人質にされた瞬間、逃走してエリー様を呼ぶべきだった。

万全の状態の私なら、もっと早くエリー様達を呼ぶ事ができた筈だ。でも……。

「私は……私は強くなりたいです。

でも、私には出来ない事が沢山あります」

「なら出来る仲間に任せれば良いッス」

「それは良いのでしょうか？」

「良いに決まってるだろ。」

何でも出来る奴なんて居ねえんだからよ」

「ミーシャちゃんは責任感が強いみたいッスけど、もっと人を頼るべきッスよ」

人に頼る。

それは甘えでは無いのだろうか。

だけど、確かにそれは有効な手段だと思う。

誰かに頼り、誰かに頼られる存在。

私の良い所を伸ばし、苦手な所を誰かに頼る。

全く分からなかった答えが僅かに光を放った様に感じた。

少しだけ、ミレイ様やエルザ様の言っていた事がわかったかも知れない。

私は少しだけ心が軽くなった気がした。

私の感謝の視線に気付かぬまま、2人の酔っ払いはお酒を飲み続けるのでした。

ミーシャの迷走：手にした光を確かめるが如く（後書き）

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ



## 冒険者ルノアの冒険：初めての冒険

「冒険者になりたい？」

私の話を聞いたエリー会長は珍しく目を丸くしてキョトンとした顔でそう返しました。

「商人になるのを辞めるの？」

「いえ、私は経験を積みたいのです」

あの誘拐事件があつてから、私は考えていました。

ミーシャは私達が拐われた事をずっと気に病んでいる様で、元気が無い。

だけれど、それはミーシャだけの責任では無い。

あの時、私がもっと冷静に対処出来ていれば、ミーシャと協力して戦えていれば結果は違った筈だ。

でも私は動揺してまともに戦え無かった。

私に足りなかった物、それは経験だと思う。

エリー会長達の指導で魔物や野盗と戦った事はある。

でもそれは与えられた戦いを、教えられた通りに戦っただけで、自分で考えて行動した訳ではなかった。

だから私は経験を積むために冒険者になろうと思ったのだ。

そう説明すると、エリー会長は納得した様に頷いた。

「ルノアの考えは分かったわ。」

確かにその経験はあなたの糧になると思う。  
でも……そうね……」

エリー会長は顎に手を遣り考え込む。

「うん、分かったわ。許可しましょう。

ただし、依頼の状況は細かく報告する事。

約束よ」

「はい！」

エリー会長から許可を貰った私は、次の休みに帝都の冒険者ギルドへとやって来た。

商会の仕事で何度か来た事はあるが、今回は冒険者としての登録なので、キチンと武装している。

エリー会長から貰ったトレントと風の魔石の魔杖と、昨日ミレイさんから手渡された魔力の回復を僅かに早める魔女の帽子、たまたま外で会った《鋭き切先》の治癒魔導士、リサさんに街の防具屋で見立てて貰った、丈夫な布を魔物の革で補強したローブだ。

少しドキドキしながらギルドの受付に進むと、狐人族のサラサさんが対応してくれた。

「あら、ルノアちゃん。会長さんのお使いかしら？」

「いえ、今日は冒険者として登録をしに来ました」

「ええ」

私は簡単に説明した。

「なるほど、 会長さんも許可しているなら私が止める事は出来な  
いわね。」

でもくれぐれも気を付けるのよ」

必要事項を記入した書類を渡し、ギルドカードを受け取る。

これで私もフランク冒険者だ。

取り敢えず今日は、日帰り出来る近場の薬草採取の依頼を受けて  
みる事にした。

帝都から近い森の浅い場所で指定された薬草を集める。

この薬草も、【物品鑑定】の為に勉強した知識の中に有り、上手  
く群生地を見つける事が出来た。

更に珍しいキノコや効果の高い薬草もついでに採取する。

依頼以外の品もギルドで買い取ってくれる筈だ。

「こんな物かな」

なるべく質の良い薬草を依頼の量より少し多めに集めた私は、日  
が暮れる前に帝都に戻る為、そろそろ帰路に就こうと立ち上がった。

すると、私の居る場所から少し先、森の中から複数の足音と悲鳴  
の様な声が聞こえて来た。

「なに？」

私が傍の魔杖に手を遣り、荷物を纏めて警戒していると、少し先

の森の中から私と同年代くらいの冒険者達が飛び出して来たのだ。  
片手剣と盾を持った男の子と槍を持った男の子、弓を手にした女の子の3人だ。

見ればゴブリンの群れに追われている。

私は僅かな逡巡の後、魔法を詠唱しながら走り出した。

**冒険者ルノアの冒険：初めての冒険（後書き）**

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 冒険者ルノアの冒険：初めての共闘

「エア・スラッシュ  
【風刃】！」

私の魔杖の先端に付けられた風の魔石によって増幅された魔法が、3人の冒険者に迫っていたゴブリンの群れの先頭に直撃する。

群れの最前列に居たゴブリンを真っ二つにし、数匹のゴブリンを負傷させる。

「な、何だ」

「走って！こっち！」

私が叫ぶと、こちらに視線を向けた3人が慌てて駆けて来る。

「荒野を走る疾風 荒ぶる風を束ねて剣を打ち 吹き抜ける烈風は  
スラッシュ・ショット  
数多の切先となる【風連刃】」

私の正面に浮かび上がった魔法陣から幾つもの風の刃が放たれ、3人の背後を追うゴブリンを切り裂いて行く。

「わ、悪い、助かった」

「まだです！体勢を立て直してください！」

3人は慌てて武器を構え直した。

残りのゴブリンは6体程、4体が棍棒持ちで、弓持ちと杖持ちが1体ずつ居る。

「ストロング・ウインド  
【強風】」

無詠唱で唱えた魔法は強い風を起こすだけの物だ。

足止めと言う程の効果は無いが、僅かにゴブリンの速度を落とし、弓持ちが放った矢を逸らすには十分な効果だった。

「うおおお!!」

剣と盾を持った少年がゴブリンに駆け寄り、棍棒を盾で受け止め、肩から袈裟懸けに斬りつける。

仲間を殺されたゴブリンが少年に向かうが、少年は深追いする事なく退がり、槍を構えた少年が交代で前に出た。

槍がゴブリンの首の中心を穿つ。

槍に突き刺さったゴブリンを蹴り飛ばす、その隙を突く2体のゴブリンに少女が矢を射る。

1体は額を射抜き仕留めるが、もう1体は肩に矢が突き立ちひっくり返り、少年が槍の石突きで頭を叩き潰す。

「グギャア!!」

杖持ちのゴブリンが叫ぶと炎の塊が勢い良く迫る。

3人はゴブリンの魔法に驚き足を止めてしまいが、私は既に準備していた魔法を発動する。

「エア・ウォール  
【風壁】」

風の障壁に阻まれた炎は数秒で掻き消える。

「矢を！」

「はい！」

少女が弓に矢を番えて引き絞る。

「敵を射抜く鏃に風の祝福を……」

「ギギヨオ！！」

「させるか！」

私を狙って放たれた矢は少年の盾で弾かれ、弓持ちのゴブリンは大回りで接近した少年の槍で討ち取られた。

「エア・エンチャント【風属性付与】」

風の魔法を付与した矢は高速で空を駆け、杖持ちのゴブリンの額を撃ち抜いた。

ゴブリンの奇声が無くなり、周囲は元の静けさを取り戻していた。

「はあ、はあ、か、勝ったのか？」

「もう……居ないようだ」

「た、助かったの？」

3人は安堵の息を吐き出すと私の方へとやって来た。

「助けてくれてありがとな、俺はレウス。」

こっちの槍使いがリオ、弓使いがレイアだ」



「助かった、礼を言う」

「ありがとう、君は命の恩人だよ」

「私はルノア、私も1人である数は厳しかったから、共闘出来て良かったよ」

私達は取り敢えず討伐したゴブリンから討伐証明の右耳を切り取り、穴を掘って死体を燃やし、帝都へと戻った。

門を通り、ようやく落ち着いた所で3人に改めてお礼を言われた。

「本当にありがとな！ルノアのお陰で命を拾ったぜ」

「凄い魔法だった」

「そうだよね、同じフランクなのに凄く冷静だったし」

「私は訓練を付けて貰っていたから」

冒険者ギルドへと向かう道を3人と話しながら歩く。

レウスとレイアは同じ村の出身で、冒険者になって一旗揚げるとして帝都に出て来て、同じ境遇のリオと出会いパーティを組んだらしい。

そしてギルドで訓練を積んでいざ木の実集めの依頼を受けたら、新しく出来たゴブリンの群れに遭遇してしまったそうだ。

ギルドでそれぞれの依頼を完了し、ゴブリンの討伐報酬を受け取り、4人で等分した。

3人は遠慮しようとしたが、4人で戦ったのだから、と等分にしてもらった。

冒険者の報酬は平等に分配するのがトラブルを避ける方法だと聞いた事がある。

報酬関連の事柄を終わらせると、レウスが改まった様子で声を掛けて来た。

「なあ、ルノア。もし良かったら俺達のパーティに入ってくれないか？」

**冒険者ルノアの冒険：初めての共闘（後書き）**

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## 冒険者ルノアの冒険：初めての約束

「パーティに？」

「ああ、ルノアが加わってくれば百人力だ！」

「心強い」

「うん、どうかな？」

パーティか。

でも私は普段は商会の仕事がある。

常に行動を共にする固定のパーティに入るのは難しい。

「ごめん、私は本業で商会の仕事もしてるから、パーティに入るのは無理かな」

「そうなんだ、残念」

「無理強いは出来ない」

「だな、残念だが諦めるか。」

でも、もし時間が取れたら一緒にクエスト受けようぜ」

「うん、それなら」

その後、私達は冒険者ギルドに併設している酒場へと移動した。

3人が助けて貰ったお礼として、食事を奢ってくれると言っているので、有り難く頂く事にした。

皆で日替わり定食（今日はオーク肉の香草焼きとポイル野菜のセツトだった）を食べながら、これからの冒険の話に花を咲かせた。

「やっぱ効果の高いポーションは必須だよ」

「だが金が無い」

「ゴブリンと遭遇した時に虎の子のポーションを使ってしまったからな。」

新しいポーションを買ったら今回の報酬の大部分が飛んじまうぜ」

「ポーションか……………そうだ！私、良いお店知ってるよ」

「なに！本当か？」

私はレウス達を連れてギルドを出ると、大通りから一本裏へと入り、少し歩く。

「この辺りは来た事がないな」

「そうだね、マイナーなお店や上級冒険者向けのお高いお店が多いから」

「俺達みたいな駆け出しは用がないよな。本当に此処にお得なポーションを売っている店なんて有るのか？」

「ふふ、着いてからのお楽しみだよ」

この情報は先日聞いたばかりの最新の物だ。

まだ殆どの人は知らない筈だ。

そうこうしている内に、私達は一軒のお店の前に到着した。

古い雑貨屋を改装したそのお店は、一見、何処にでも有る薬屋に見える。

2階建てで、一階が店舗、2階は倉庫と店主の自宅となっている小さなお店だ。

「ちょ、此処って……………」

「聞いた事あるよ」

「知ってる」

3人はお店の看板を見て固まっていた。

ドアに掛けられたOpenの文字が書かれた看板には、止まり木で羽を休める鳥の絵が描かれており、そのすぐ下に《雷鳥の止まり木》と店名が記されていた。

「おい、ルノア！此処ってあの有名な《雷鳥の止まり木》だろ？」

「そうだよ」

「帝国一の薬師のお店だよ」。

確か、上級冒険者の人が万が一の為に1つだけポーションを用意したりする超高級店だよ」

「買えないぞ」

「大丈夫、大丈夫」

私は予想通り、驚く3人の顔を見て、満足気に笑い、二の足を踏む。レウス達の背を押してお店のドアを開けた。

「いらっしやいませ」

「こんにちは」

お店の中は濃い薬草の匂いが漂っていて、正面にカウンター、左の壁一面に薬や薬草などが所狭しと並べられていた。

右側には応接テーブルと何に使うのか分からない道具が丁寧に納められた棚があった。

「あ、ルノア。いらっしやい」

「ごめんね、リリ。忙しかった？」

カウンターに居たのは私と同じ歳の人族の少女だ。

彼女はこれお店の店主である帝国一の薬師、

《漆黒》ユウカ・クスノキの弟子、リリだ。

何度かエリー会長のお使いで、このお店を訪れた私は、彼女とも仲良くなっていたのである。

そんなリリはカウンターで店番をしながら、乾燥した木の実の殻を剥いていたのだが、リリは直ぐにそれを片付けてしまった。

「別に忙しくないよ。時間があつたからトナの実の下処理をしていただけだから。」

それで、そつちの3人は友達？」

「うん、前に私、冒険者になるつて言つたでしょう？外の森で出会つて共闘したんだ」

「へえ、怪我は無かつた？」

「大丈夫。それで彼らは手持ちのポーションを使い切つたみたいなの。」

そこで、リリが言っていた件を思い出してね」

「ああ、アレね。ちよつと待つてて」

そう言い残し、リリはカウンターの奥の扉へと姿を消してしまつた。

「お、おい、ルノア。いくら何でもこんな超高級店じゃ買えないぞ？」

レウスが心配そうに尋ねる。

レイアとリオは棚に並べられたポーションの値段を見て呆然としていた。

そこに陳列されているポーションは1番安い物でも、フランクの冒険者が1ヶ月、懸命に働いても手が出せない様な高級品だ。

「お待たせ」

そこにリリが木箱を抱えて戻って来た。  
その木箱をカウンターに置くと蓋を開けて見せる。

中には低級ポーションや低級解毒ポーション、低級魔力ポーションなど、基本的なポーションや、火傷薬、解熱薬、痛み止めなどの基本的な薬が保管されていた。

「この木箱のヤツは1つ銀貨1枚で良いよ」

「え！本当か」

低級ポーションで銀貨1枚は少し高い。

でも店主のユウさんが作った低級ポーションなら軽く銀貨6枚はする。

何故ならそこいらの中級ポーションなどよりも余程効果が高いからだ。

まあ、それをすると市場が乱れるから、ユウさんはあまり安い薬（銀貨6枚は安くないと思うけど……）は作らないそうだ。

「コレは私が作った薬だからね。」

最近、師匠が許可してくれた物ならお店で売って良いって言って貰ったの」

「ユウさん程では無いけど、リリの作ったポーションでも他のお店の低級ポーションより上質だよ」

リリのポーションはユウさん程、常識を逸脱した物では無いけど、それでも十分高品質の出来だ。

そう説明すると、3人は一本ずつ低級ポーションを購入する事に



決めた。

駆け出しの冒険者にとって銀貨1枚はなかなかの出費だが、いざと言うときにポーションが有るのと無いのでは大違いだ。

それに初級冒険者なら、魔法薬は低級ポーションが有れば十分だ。

私は鑑定魔法を使って、特に出来の良い3本の低級ポーションを取り出した。

「相変わらず、便利だね【物品鑑定】の魔法は」

リリは苦笑しながら木箱の中から魔法薬では無い傷薬を3つ取り出す。

「これはオマケね。3人は私の初めてのお客さんだから」

「ありがとう」

「恩に着る」

「もっと稼いでまた買いに来るぜ」

こうしてリリが調薬したポーションを購入してお店を後にした。

「じゃあな、ルノア。今回は助かったぜ」

「いい店も教えて貰った」

「また、一緒に冒険しようね。約束だよ」

「うん、約束するよ」

こうして私に初めての冒険者の友人が出来た。

後に私は、商会での仕事の傍ら、約束通り彼らと数々の冒険を経験するのだが、それはまだ先の話である。

**冒険者ルノアの冒険：初めての約束（後書き）**

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## バアルの華麗なる暗闘：扇動の場合

街の外れにある廃墟の一角で俺は先に潜入していた配下からの報告を受け取っていた。

「ほう、随分と敵意が集まっているな」

「はい、我々が流した情報も有りますが、元々この領の領主は重税と賦役で民衆からの支持が離れていました」

俺が今いるのはハルドリア王国のブギー子爵領の領都だ。

ブギー子爵領は、偽金貨事件の賠償として、かなりの領土が帝国へ割譲された為、帝国との領土を接する事になった領地である。

俺がわざわざこんな田舎領地へと足を運んだのは、当然だがお嬢の命令だ。

領主のブギー子爵は、仕事をお嬢に押し付けるばかりか、身勝手な申請やらチマチマした改竄やらで手間を掛けた拳句、散々世話になっていた癖に、お嬢が国を出ると手のひらを返してあのバカ王子に擦り寄って行ったらしい。

その結果、お嬢から要らないので処分しておく様に、と俺が派遣されて来た訳だ。

まあ、お嬢が自ら手を下す価値も無いと判断した程の小者だ。

「それで、武器の方はどうだ？」

「はい、そちらも順調です。」

流れの商人を装って質の良い物をばら撒き、更に盗賊団に武器を流して討伐、冒険者の戦利品として纏まった数を領内に持ち込んで

います。

事が始まった後は、ダミー商会の倉庫からも掠奪に偽装して武器を放出する用意が有ります」

「そうか、領主の方の軍備は？」

「大した事は有りませぬね。」

元々帝国との国境を接していた領地では有りませんでしたからね。領内の治安維持も適当ですし、トレートル商会の護衛の方が装備、練度共に優れています」

「なるほど、今回は早めに帰れそうだな」

数日後、俺は配下を引き連れてある酒場へとやって来ていた。

酒場のドアを蹴り破り、中に押し入ると、そこでは男達が卓を囲んで話し合いを行っていた。

奴らはいわゆるレジスタンスってヤツだ。

ブギー子爵への反抗を企てている連中の中核である。

「ば、馬鹿な 何で此処が……ぎゃー!!」

「ひっ！う、うがあー!!」

「やばい！逃げ……ぐふう」

慌て出す男達を俺達は次々と斬り伏せて行つた。

「クソ！領主の野郎！問答無用かよ！」

「ちくしょう！ちくしょう!!」

現在の俺達の姿はこのブギー子爵領の領軍の革鎧を身に付けてい

る。

奴らから見れば、反抗を察知した領主が兵を差し向けて鎮圧しようとしている様に見えるだろう。

「皆殺しにしろ！一人も逃すなとブギー子爵様の命令だ！！反逆者共を殺せ！！」

わざとらしく子爵の名前を出す。

そして逃すなどは言っているが、半数は逃す予定だ。

程よく殺して、ほどほどに撤退。

事前に増税の噂（嘘）や、領主の横領（コレは本当）の情報を流して、国や領主への悪感情を煽っていた領民は、コレをキツカケに大規模な反乱を始める。

分かっていた事だが、お嬢のプランは怖くなる程すんなりと進んで行く。

今も街中に潜む俺の視線の先では武器を手にした民衆が10人程駆けて行った。

もう数時間もすれば、配下達が街のあちこちに火を付けて回る筈だ。

「お嬢もだいぶイカれちまってるな」

帝国に亡命してからのお嬢は随分と不安定だ。

もともと、貴族共にこき使われても義務だからと自分を押し殺す様に教育されていた所為で、不安定だった精神が、ブチ切れた事で

180度振り切れた。

身内には慈悲深い、嫌っている王国貴族には全く容赦しない。それも、無関係な民衆を巻き込む事に躊躇も無い。

あのロベルトのクソガキをハメた時もかなり死んだ。今回の反乱でも老若男女問わず多くの領民が死ぬだろう。

こりゃあ、早いところお嬢の報復を終わらせて、静かな時間を過ごして貰わないと、お嬢の心が保たないかもしれねえな。

タバコを啜え、紫煙を吐き出しながら取り留めもなくそんな事を考えていると、配下が音もなく部屋に入ってくる。

「バルさん、民衆が衛兵詰所を占拠したそうです」

「ああ、これから領主の屋敷か？」

「ええ、既に包囲が始まっています」

「よし、俺達も動くか。」

お嬢に子爵の首を土産にしてやらないとな」

冗談と共にタバコを放り捨てる。

部屋の隅に積まれた雑多なガラクタに燃え移り、煙が上がるが、気にしない。

「エリー様は嫌がりますよ、多分」

「なら、代わりに金庫の中身を頂くか。」

それなら喜ぶだろ？どうせ民衆に掠奪されるんだからな」

俺は漂って来る血の匂いと木霊する誰かの悲鳴に、機は熟したとばかりに歩き始めた。

## バアルの華麗なる暗闘：暗殺の場合

悲鳴と喧騒に包まれたブギー子爵領の領都の裏路地を配下を引き連れて進む。

配下の手によって街には火が放たれており、大通りは逃げ惑う人々、領主を狙う者や掠奪を行う者で溢れていた。

「おい、早く来るんだ！」

「ま、待って、お父さん」

別の路地から俺達の前に子供の手を引いた父親が飛び出し、遅れて母親が姿を見せる。

「ん？おい！こっちは危ないぞ！君達も早く逃げるんだ！」

3人の家族は小走りで俺達に近づきながら、父親がそう言った。

「はぁ、嫌な仕事だな」

「へ？」

俺は素早く抜いた短剣で父親の首を斬りつけた。

「うわぁぁぁー！」

「いやぁぁー！アナタぁー！」

首から血飛沫を上げながら倒れる父親に悲鳴をあげる母親の喉に

短剣を突き立て、返す刀で子供の心臓を背中側から貫いた。

「目撃者は殺せ。例外は無い」  
「了解」

配下の返事を適当に聞き流し、更に数人の街人を殺しながら領主の屋敷に到着した。

事前に入手していた情報通り、警備が手薄な場所を狙い、見張りの兵を殺して屋敷に侵入した。

屋敷の周りを民衆に囲まれて混乱するブギー子爵の屋敷は警備の連携もガタガタで、民衆に踏み込まれるのも時間の問題だろう。

俺達は近くの窓から屋敷内へ侵入し、その場に居合わせたメイドと従者見習いを始末する。

「此処からは二手に別れるぞ。俺はブギーを殺る。お前らは宝物庫へ行って民衆の掠奪の様に偽装しろ」

「はい」  
「分かりました」

配下と別れ、屋敷の中心部へと向かう。

この手の屋敷の構造なら、偉いやつが立て籠もる部屋は大体決まっている。

予想通り、大きく頑丈そうな扉の前に、武装した兵が5人、不安そうな表情で立っていた。

兵達はお互いに顔を合わせて、不安を紛らわせるかの様に何かを話している。



馬鹿なのだろうな。  
そもそも、練度が足りていない。

俺はハリボテの兵達との間合いを一足で詰めると、1番近い兵の首を手刀で叩き折った。

仲間の首が不自然な方向に折れ曲がるのを、驚愕の表情で見つめる兵達。

いや、せめて臨戦態勢くらい取れよ。

此処に来る前に、お嬢の命令で新人教育の真似事みたいな事をした名残りか、全くなつてない兵達の動きに嘆息した。

それから残りの4人を殺すまで、5秒も掛かって居ないだろう。

俺はあまりの手応えの無さに誰にともなく肩をすくめて見せた。

そして大きな扉を思いつき蹴り開ける。

大木が倒れたかの様な音を立てて開かれた扉の奥には、丸々と太った男が1人、その男を守る様に位置取る武装した男女が4人。

こいつらは部屋の前の奴らとは違い、まともそうだな。  
護衛として急遽雇った冒険者が傭兵だろうか？

「紅蓮の炎よ 我が敵を焼き尽くせ

【火球】！」

魔導士風の男が人の頭程も有る炎を放つ。

「ふっ！」

しかし、それは俺の蹴りで霧散する程度の物。  
残念ながらブギー程度が雇える護衛では俺には勝てないらしい。

【火球】に身を隠す様に走り寄っていた槍使いの女が突き出す刃を、  
首の動きだけで躲し、カウンター気味に顎を蹴り上げ首を折る。

「マデユラ!!」

仲間を殺されて動揺したのか、詠唱中だった魔法が崩れた魔導士  
に短剣を投擲し、雄叫びを上げて迫る剣士に槍使いの女の死体を投  
げつける。

態勢が崩れた剣士を、死して尚、槍使いが手にしていた槍で貫き、  
その手から奪った剣で、胸から短剣を生やしのたうち回っていた魔  
導士に止めを刺す。

そして、仲間を瞬殺され、腰を抜かして小便を漏らしながらガタ  
ガタと震える治癒魔導士の少女の首を刎ねた。

「まだまだ経験が足りないな」

悪くは無かったが、俺を止めるには20年は早い。

「さて、後はお前だけだな」

「ま、待て!か、金だろ!金ならいくらでもくれてやる!

よ、よせ!来るな!……そ、そうだ、ワシには娘が居るんだ!ま  
だ13だが器量は良いぞ!お前を娘の婿にして家督を継がせてやる  
!そうすればお前も貴族だ!な、だからワシの命だけは……がぁ!  
!」

俺は何やら喚く肉ダルマの右足を膝から切り落とした。

「ひっ！ま、待て！待ってくれ！ワシが悪かった！これからは無茶な賦役はしない！税も減らす！だから……ぎゃあ！！」

短剣を左足の腿に突き立て踏みつける。

「悪いが俺はアンタの領民じゃねえ」

「はあ？」

間抜けな顔で目を丸くするブギーに一切感情を出さない視線で告げる。

「俺はアンタを殺せと言われただけだ」

「な！だ、誰だ！アルスマン男爵か　それともスレンガン子爵か

それとも……」

「エリザベート・レイストーン」

「っ」

俺がお嬢の名を告げると、ブギーは顔を蒼白にして歯をガチガチと鳴らし出す。

「そ、そんな……エ、エリザベート嬢が……」

「お前はお嬢を散々利用した挙句、裏切ったんだろ？今後、王国に復讐する時に邪魔だし、要らないから消しておけ、と言われたぞ」

「……………ち、違う、違う！誤解なんだ！エリザベート嬢に……」

……エリザベート様に会わせてくれ！必ず！ワシは必ずお役に立……あ？」

顎を蹴られ、脳を揺らし倒れ込むブギーの胸に足を乗せ、少しずつ力を込める。

「もう黙れ」

「……ひゅ！……ま、まつ……て……ぎびえ」

肋が砕け、内臓に突き刺さったブギーは大量の血を吐き出しながら暴れ、2度と動かなくなった。

「バアルさん！」

「おう、終わったか？」

「はい、宝物庫に有った現金は持てるだけ頂き、その他、適当に荒らしておきました。」

それと、使用人を数人、あとブギー子爵の妻と息子、娘と名乗る奴らが居たので殺しておきました」

「ご苦労、帰るぞ」

ブギーの屋敷に火をつけた後、俺は配下を連れて帝国へと戻るのがだった。

**バアルの華麗なる暗闘：暗殺の場合（後書き）**

お気に召して頂けたらブックマーク登録、評価をお願いします。  
また、感想を頂けたら嬉しいです。

（ ・ ・ ）ノシ

## バアルの華麗なる暗闘：報告の場合

配下を引き連れて帝都に戻った俺は、門を抜けた所で配下に金を渡して別れた。

アイツらの仕事は此処で終わり、だが俺は面倒な事に報告を行う必要がある。

これも仕事なので仕方ないと言われれば反論は出来ないな。

俺と俺の配下数名はお嬢の手勢の中でも特に表に出せない仕事をこなせる数少ない戦力だ。

その為、俺はお嬢に直接指示を受ける立場にある。

王国のファンネル商会への潜入から帰還してからは配下を直接指揮してお嬢の報復の為に暗躍する日々を過ごしている。

表向きには、トレートル商会の護衛、警備部門の責任者と言う立場だ。

お嬢の屋敷に着いた俺は、門番に用件を伝え、メイドに案内され部屋へと通された。

少し待つとミレイの姐さんが姿を見せた。

「待たせました」

「いやいや、大して待つちやいねえよ。

お嬢は居ないのか？」

「バアル、何度も言いますが、エリー様と……まあ、言っても無駄

ですか。

エリー様は店舗への視察に行っているので、代わりに私が報告を聞きます」

「そうかい」

俺は焼き菓子を口に放り込み、紅茶で流し込んでから口を開く。

「お嬢の計画通りブギー子爵領で領民とブギー子爵の対立を煽り、民衆の不満がピークになった所で火蓋を切ってやれば簡単な反乱に発展したぜ。」

その後は混乱に乗じて領主の屋敷に潜入、ブギー子爵を殺して撤退した。

その時、工作ついでに奪った金貨は後で金庫に放り込んでおく」

「分かりました。金庫に入れるのは半分で構いません。残りは貴方と配下で分配して下さい」

「そりゃ有難い。奴らも喜ぶ」

「それと一応聞きますが、誰かに目撃されたりはしていませんか？」

「ああ、目撃者は全て始末した」

「そうですね、エリー様には私から報告を上げておきます。」

貴方は3日程、休息に当て、その後は別命が有るまで通常業務に戻って下さい」

「りょーかい」

俺は最後の焼き菓子を口に入れ、ミレイの姐さんに視線を向ける。

ミレイの姐さんはお嬢に心底心酔している。

今のアンバランスなお嬢を見ても、王国の奴等から解放されて自由になったと思っっているのだろう。

他の奴らも似たようなもんだ。

帝国で出会った奴らはお嬢の裏側はあまり見ていない。それに王国に居た頃の人形の様だったお嬢も知らないのだから無理もない。

ずっと側にいたミレイの姐さんなら気付きそうな物だが、ミレイの姐さんは王国の奴らのお嬢への対応に、ある意味お嬢以上にブチ切れているからなあ。

「なあ、ミレイの姐さん。本当にこんなやり方で良いのかい？」

「何ですかバアル、エリー様の計画に何か不満でも有るのですか？」

「別に不満は無いさ。俺もお前さんと同じ、腐って潰されるだけだった所をお嬢に拾われた口だからな。」

お嬢の命令なら何だってやるし、誰だって殺す。配下の奴らも同じだ。

だが、こんな事を長く続けていては、お嬢の精神が保たない。

ミレイの姐さんも気付いているだろ？

お嬢は困っている奴には優しく手を差し伸べるが、報復の為なら身内以外に多大な犠牲が出てても気にしない。

そんな矛盾を抱えているのに、自分で気付いて無いんだぜ。

最近、お嬢はどんどん手を広げて勢力を拡大している。

それはハルドリアのクソ共への報復の為だろうが、そんなことだけに人生を注ぎ込んで何になるって言うんだ？」

「それは……」

「別に報復を止めたら良いつて言っている訳じゃねえよ。」

ただ、もう少し余裕つつーか、せつかく王国から解放されたんだから、人生を楽しんだ方が良いと思うぜ」

言いたい事を言い切った俺は少し冷めてしまった紅茶を一気に飲み干した。

「私も……エリー様の抱える矛盾に気付いていない訳では有りませ



ん。

ですが、王国への復讐を終えれば……」

「復讐を終えて、スッキリしたら後は自分の人生を生きる、ってなれば良いけどな。」

もし、そこで燃え尽きちまったら？

もし、復讐心で隠されていた罪悪感が芽を出したら？

その時、お嬢の支えになる物は有るのか？」

「それは………」

俺達が支える、と口に出せたらカッコいいんだろうけどな。

だが、お嬢は俺達数人で支えられる程軽い器じゃない。俺は無言で席を立つ。

「じゃあ、報告は以上だ」

「ご苦労様です。」

エリー様の件、私も少し考えてみましょう」

「ああ、任せるよ。ミレイの姐さんなら、何かお嬢に新しい生き甲斐や、人生の楽しみ方を気づかせる事が出来るかも知れねえ。」

何か俺に出来る事が有ったら言ってくれよ」

「ええ、分かりました」

俺はミレイの姐さんと別れて帝都へと繰り出した。

まだ日は高いが、大仕事を終えたのだから一杯やるとするか。

俺は行きつけの酒場を兼ねる食事処に入ると、早速酒とツマミを注文して飲み始めた。

30分程一人で呑んで居ると、ドアが勢い良く開き、女が1人入って来た。

「いっや〜、やつと帰って来れたツス！  
あ、おばちゃん、取り敢えずエールとツマミを適当に！」

修道服を着たシスターだが、慣れた様子で悪びれもせず酒を注文しやがった。

いや、別にイブリス教は飲酒を禁じている訳ではないから良いんだろうけどな。

それからそのシスターは木製のジョッキになみなみと注がれたエールを一息で飲み干した。

「ぷっは〜！！生き返るツス！女神様にマジ感謝ツスね！おばちゃん、おかわり！！！」

随分と愉快的なシスターだった。

「おい、姉ちゃん。良い飲みっぷりだな。

どうだ、一緒に呑まないか？」

「おお？ナンパスか？」

「ちげえよ。ちようど誰かと呑みたい気分だったんだ」

「へ〜、まあ良いツスよ」

「お、サンキュー」

俺はシスターの隣に移動すると、おかわりのエールを持って来たおばちゃんに注文する。

「おばちゃん、俺のキープから『オーガ殺し』と『ハルトリバー酒』を出してくれ。

グラスも2つ」

「あいよ」

おばちゃんから酒とグラスを受け取り、シスターに手渡してやる。

「ほらよ」

「おお、太っ腹ッスね！」

こうして俺は偶然出会ったシスターと楽しく飲み明かすのだった。

## ティータ狛下の報告書：清酒とモツ煮の相性について

「はあ、もう良いんじゃないツスカねえ？

こんなに細かくやる必要無いツスよ」

「何をおしゃっているのですか、狛下！

ささ、次はこちらの書類に目をお通し下さい」

私が疲れを溜息として吐き出すが、第4聖騎士団第6分隊長のユリウス助祭が真面目くん丸出しで書類を押しつけてくるツス。

ケレバンでの誘拐事件が悪魔召喚騒動へと発展し、更には悪魔を取り逃してから、はや3日。

昨日エリーさんも帝都へ帰ってしまったツス。

それなのに私はケレバンの外、遺跡の近くで聖騎士団の天幕に缶詰にされているツス。

ああ、私もさっさと帰りたいたツス。

悪魔とか全て忘れてお酒飲みたいツス。

「うう、現実逃避でもしてないとやってられないツスよ」

「こう言う面倒……いえ、繊細な配慮が必要な事柄は私向きじゃ無いツスよね。

良きに計らえ、でいい感じにしておいて欲しい物ツス。

大体、あのドンドルとか言う背信者がこんな事をしでかすから悪いんツスよ。

地獄に……落ちてるツスね。悪魔の贄にされたんツスから、女神様のお側へとは向かえず、その魂は永劫に苦しむ筈ツス。

「はい、これで最後ッス」

「お疲れ様です、猊下。では次の書類を……」

「いやいや、ユリウス助祭！今日はこの辺にしておくべきッス」

「え、しかし、猊下……」

「女神様！女神様もそう思うッスよね！………ほら！女神様もこう言っているッス！」

「え、ぼ、僕には何も……」

「それはいけないッス！修行が足りないッスよ！ユリウス助祭！さあ、瞑想して祈りを捧げるッス！今すぐ！5時間くらい！」

「え、は、はい、猊下！」

慌てて瞑想を始めたユリウス助祭に気付かれない様にそっと天幕を抜け出した私は、聖騎士共に見つかからない様に、スタコラサツサとケレバンに戻ると、流れる様なムーブで近くの酒場に滑り込んだ。

「い、いらっしやい、お嬢さん」

「お邪魔するッス。えっと……取り敢えず、おすすめのお酒とツマミを」

「はあ」

慌てて飛び込んで来た私に、店主は目を丸くしながらも、熟練の手付きで酒を用意してくれる。

「はい、どうぞ。清酒と鬼鹿のモツ煮だよ」

「おお？」

私の前に差し出されたのは水の様に透き通ったお酒と、鹿の内臓の煮込み料理だったッス。

「これは東の島国のお酒ツスね？」

前にユウさんに貰った薬酒に使われていた彼女の故郷のお酒ツス。大陸ではあまり見かけない透明なお酒ツス。

「若いのによく知っているね。僕は昔冒険者をしていてね。その時のツテで仕入れているんだ。このケレバンの街でも清酒を出せるお店は少ないよ」

「へえ」

私は逃げ込んだだけのお店で、レアなお酒に出会えた事に少しテンションが上がる。

曇りなく磨かれたグラスに満たされた透明なお酒。それでいて、漂って来るのは濃く強い酒精の香り。

クイっと一口。

途端に喉を焼く様な感覚が、胃の腑に落ちるまで帯を引いて行く。その後、体の中心から全身に広がる様に熱が伝わって行くのを感じるツス。

ワインやエールとは違う、上品で有りながらもワイルドさも有る上等な酒。

そして次に共に出された内臓の煮込みを口にする。

「こ、これは！」

なんて濃厚で深い味わいなんツスカ！

鬼鹿の内臓は、猟師が森で食べるご馳走ツス。

鮮度の関係で、あまりお店で出される事はなく、もし出されたのなら、安い内臓を使った安物料理が殆ど。

しかし、この煮込みには内臓の臭みなどはまるで感じられない。

鮮度の良い内臓を丁寧処理した証拠ツス。

それに……。

「ご主人、この不思議な風味は一体……」

「ふふ、これはね、味噌と言う調味料だよ」

「味噌？」

「大豆を醗酵させて作る東の島国の調味料さ。最近は一部の地域で取り扱われる様になって来ていてね。清酒によく合うだろ？」

「最高ツス！この濃厚な味わいを酒精の強い清酒で洗い流すのがまた！」

私は熱々の味噌煮を口に入れ、グニグニと内臓の独特な食感を楽しんだ後、口に残る塩気と味噌の風味を酒で一掃する。

「はは、お嬢ちゃんはなかなか行ける口だねえ。ほら、コレも試してみな」

「これは？」

店主が差し出して来たのは小さな瓢箪。

手にとって振ってみると、中に何かの粉末が入っている事が分かったツス。

「それは唐辛子と言うスパイスを粉末にした物だ。味噌煮に掛けるとピリつとした辛味が加わって更に酒が進む」

「おお！」

言われた通りに試してみると、塩気と風味が何処までも広がる味

わいだった味噌煮が、鋭い辛味でピシッと引き締まった。

「素晴らしいツス！」

「気に入って貰えて嬉しいよ」

「いやあ、まさに隠れた名店ツスね。」

「こんな美味しいお店があったなんて知らなかったツス！」

その後も、甘く酒精が弱い甘酒や、芋から作られた強い辛口のいも焼酎など、店主お勧めの東方のお酒を堪能し、ツマミも天麩羅や醤油と言う調味料で味付けしたモツ煮も美味しく頂いた。

こうして、仕事に追われていたイライラなど吹き飛ばして、私は楽しく飲み明かしたと言う訳ツス。

西大陸に有るイブリス教の中心地、イブリス神聖国の聖都にある大神殿の一室で、つい先ほど届けられた報告書に目を通していたのは、見る角度によって七色の光を放つ美しい髪を足元近くまで伸ばした女性だった。

彼女こそ、イブリス教の頂点に座す存在、イブリス教教皇カルデイナ・イブリスである。

イブリス教の教皇は、その座に就くと同時に家名を捨て、イブリスを名乗り、生涯を女神様へと尽くす。

その姿は、神聖国のみならず、イブリス教の影響下にある国々、一信者に至るまでの尊敬と敬愛を集めていた。



そのカルディナが目を通していた報告書をグシャリと握りつぶす。

「き、教皇猊下！」

その報告書を持ってきた司祭が驚き身をすくませた。

「あらあら、私つたら、ごめんなさいね」

「い、いえ、一体何が……」

「ふふ、ティードがまた悪しき背信者を成敗したそうですよ」

その表情は慈愛に満ちた笑み。

しかし、明らかに怒気を孕んでいるのを感じて司祭は背筋が冷たくなった。

カルディナが読んだ報告書は、『報告書』と言っていで送られて来た物だが、その内容の殆どは中央大陸で飲んだ酒や美味しい食べ物の話だった。

肝心の大司教の不祥事や悪魔の召喚の話など、最後にps扱いでちよろつと書かれているだけだ。

そのティードからの旅行記風報告書は、立場上、大神殿からあまり出る事が出来ないカルディナにとっては、胸踊らされると同時に羨ましい限りなのだ。

勿論、ティードはワザとだろう。

これは、今度帰ってきた時、生半可なお土産では済まさないぞ！とカルディナが心に刻んでいると、助祭が言いにくそうに告げる。

「あ、あの教皇猊下。実はティルダニア猊下から、今回の調査に使用した経費の請求と、次回の任務に必要な軍資金の催促が来ている

「の ですが……」  
「うふふ……却下」

## ティータ狨下の報告書：果実酒と川魚の親和性について

ケレバンの街での一件がある程度落ち着いて来た頃、私は残りの仕事を真面目くんのユリウス助祭に押し付……………頼りになるユリウス助祭に任せて、帝都へ向かっていた。

コーバツツ侯爵領は帝都と隣接しているので、帰るのにそんなに時間が掛からないのは嬉しいツスね。

街道をのんびりと歩いていると、小さな村が見えて来た。

「今日はもう日が暮れるツスね、あの村で泊めて貰えたら良いんツスけど」

私が村に近づくと、村の門番らしき男が少し警戒し、私が修道服を着ているのを見て、警戒を緩めた。

ケレバンの街を発つ前に着替えておいて正解だったツス。

美少女のひとり旅と、美少女シスターのひとり旅なら、後者の方が安全ツスからね。

悪人とは言え、聖職者に手を出すのは忌避する場合が多いツス。気にせず襲って来る奴も居ないではないツスけど、そんな奴らは神威を示してやるだけツスけどね。

「よつこそ、シスター様」

「こんにちはツス、一晚の宿をかりたいんツスけど、構わないツスか？」

「はい、それでしたら村長のお宅を訪ねてください。村の中心の大

きな家ですだ」

「分かりましたツス」

「この様な時にシスター様が来て下さったのは女神様の思し召しですだ」

「ん？」

何やら熱心に祈りだした門番に私は首を傾げたツス。  
熱心な信者なんツスカね？

門番に聞いた家は一目で分かった。

周囲の民家に比べて2回りか3回り程大きな家だ。

この手の田舎の村では、村長の自宅が村の集会所や宿泊施設を兼ねる事が多いので、よくある作りの家ツスね。

村長に交渉して、一晩の宿を得る事が出来た私は、村長の奥さんが出してくれた質素な食事を有り難く頂いたツス。

「シスター様、少々お願いがあるのですが……」

そして食後、村長と奥さんに揃って声をかけられた。

「お願いツスカ？まあ、私に出来る事なら……」

正直、面倒ツスけど、流石に一宿一飯の恩義が有るので無碍には出来ないツスね。

「実は、私共の孫の事なのですが……」

「孫ツスカ？」

「はい、実は数日前、現れた魔物に襲われて重傷を負っているので

す。

魔物は冒険者の方に退治されたのですが、息子夫婦はあの子を庇って死んでしまって……残された孫ももう先が長く無いのです。どうか、孫の為に祈ってやっっては貰えないでしょうか？」

おう、随分とへビーな話ッス。

「ええ、構わないッスよ」

そして、村長のお宅の奥の部屋に案内されると、そこには5歳くらいの少年がベッドに寝かされて、荒い呼吸を続けていた。

「ん？」

確かに大怪我ッスけど、きちんと治癒魔法を使えば治りそうな傷ッスね。

ふむ、田舎の村では確かに治療は難しいと諦めても仕方ないッスか。

「村長、この傷なら私の魔法で治せるッスよ」

「ほ、本当ですか」

「ええ、【中級治癒】<sup>ハイ・レベル</sup>」

私が魔法を使うと、少年の呼吸が安定し、うつすらと目を開いた。

その後、しきりに感謝する村長夫婦を宥め、少年の体力を回復させる為に滋養の有る物を食べさせる様に伝えた。

すると、村長が嚮を1つ取り出して来て、私に手渡したッス。

「これは？」

「この村で昔から作られている果実酒です。

村の祝い事などで飲まれる物ですが、どうか一杯お付き合い下さいませんか？」

「喜んでお付き合いするツス！」

木製のお椀に村長が甕から果実酒を注いでくれた。

「では、頂くツス」

果実酒を口に流し込むと、程よい酒精と果実の爽やかな香り、酸味と甘味が混ざりあつた味わいが駆け抜けて行った。

「おお、美味しいツス！」

少々雑多で荒削りなところがまた趣があるツス。

「こちらもどうぞ」

「これは？」

「村でよく食べられている川魚の塩焼きですよ」

村長の奥さんが出してくれたのは、指くらいのサイズの魚を丸焼きにしたツマミだったツス。

その魚を頭から一口で半分齧ると、腹の中に詰まっていた白い卵が零れ落ちる程の姿を覗かせた。

「今の時期は子持ちで酒のツマミには最適なのですよ」

目を丸くする私に村長が説明してくれた。

魚の丸焼きは、腹の卵のプチプチした食感と内臓の苦味、魚の旨味と僅かな塩気が一体となって私の舌を楽しませるツス。

この動物的な旨味に、植物の恵みを凝縮した様な果実酒が意外にもマッチしていた。

たまたま立ち寄った村では有るが、少年の命を救えた上、こんな美味しいお酒とツマミに出会えたとは、流石私ツスね。

西大陸に有るイブリス教の中心地、イブリス神聖国の聖都にある大神殿の一室で、つい先ほど届けられた報告書に目を通していたのは、見る角度によって七色の光を放つ美しい髪を足元近くまで伸ばした女性、イブリス教教皇カルディナ・イブリスだった。

カルディナは読み終わった報告書を丁寧に折り畳むと、ポイッと投げ捨てパチンと指を鳴らす。

すると、報告書は空中で燃え上がり、チリ一つ残さずに消滅した。

「教皇猊下？」

「あらあら、ごめんなさいね。私ったらつい……」

カルディナに不審な目を向けたのは、共にテーブルを囲みお茶を飲んでいた筋骨隆々の若い男だった。

男は28歳と言う若さで全聖騎士団をまとめる聖騎士団総長を務める英傑、カールソン枢機卿だ。

「重要な機密なのですか？」

「いえ、ティードが果実酒と川魚が美味しかった、と自慢して来ました」

「……………」

「ところでカールソン枢機卿、2日後、第1聖騎士団は演習でマタタ湖へ行くのですよね？」

「……………肯定です」

「そうですね……………演習なら、現地で食料を調達する訓練も重要よね？」

「……………魚を獲って来い、と？」

「訓練ですよ？訓練。でももし取りすぎてしまったら勿体ないですよね」

「……………そうですね」



## ティード狛下の報告書：ウイスキーとチョコの融和について

「まあ、それで仕事を押し付けて帰って来たって訳ッスよ」

帝都で人気の喫茶店グリモワールのテラス席でホットチョコレートと言う甘苦い飲み物を少し飲みながら、私は正面に座る《グリモワール》のオーナー、エリーさんにケレバンでのその後を伝えていたッス。

「ティード……貴女、もう少し本音を取り繕いなさいよ」

「ええ、良いじゃないッスか」。

エリーさんは私の事知ってるッスから言っちゃうッスけど、私、偉いッスから。

面倒事は下っ端にお任せッスよ」

「何言ってるのよ、上に立つ者には上に立つ者の責務が有るでしょ」  
う

エリーさんが呆れた様に溜息を吐く。

すると、そこに《グリモワール》のパティシエがワゴンを押す店員さんと共にやって来た。

「オーナー、例のチョコレートの用意が出来ました」

「ありがとうございます」

そう言うと、パティシエが私とエリーさんの前にオシャレな皿に綺麗に飾られた一口サイズのチョコレート菓子を差し出した。

「これは？」

見た目はお店で出されているチョコレートと変わらない様に見えるッス。

お店で出されているアーモンドやドライフルーツが入ったチョコレート菓子とは違うんッスかね？

「前にティーダがチョコレートにお酒が合うと思っと思っていましたでしょうか？」

エリーさんの言葉に、私はハツと目を見開いたッス。

「これはそれを研究させた物の完成品よ。

砂糖の殻に北大陸のウイスキーって言う蒸留酒を包んでチョコレートでコーティングしたの」

「おおー！」

私は皿に並べられたチョコレートを一粒摘み上げてじっと見つめる。

見た目はやはり普通のチョコレートだが、確かに蒸留酒特有の強い香りを感じるッス。

「まあ、食べて感想を教えてください」

「頂くッス！」

私は蒸留酒のチョコレート菓子を口に入れた。

甘苦いチョコレートの味と、僅かな酒精が口いっぱい広がる。

そして、チョコレート菓子の中心を割る様に歯を立てると、薄い砂糖の殻が割れ、濃厚な蒸留酒が流れ出し、口の中で溶けたチョコレートと混ざり合う。

「うっまいッスー！とっても美味しいッスよ、エリーさん！チョコ

レートと蒸留酒がお互いを引き立て合い、最後に一体となる味わい！まさに酒好きの為のチョコレート菓子ツス！！」

「うん、良い出来ね。これなら貴族受けも良いでしょうね」

「うん、うん、これは本当に最高のお菓子ツスよ！」

私は皿のチョコレート菓子を一つ一つ味わいながら堪能した。

中に入ったウイスキーの種類が違うのか、それぞれ違った味わいがあるツスね。

「エリーさん、このチョコレート菓子はなんて名前なんツスか？」

「名前？まだ決めて無いわよ」

「そうなんツスか？」

「ええ、完成したばかりだから」

「ほほう、ではこのティルダニア枢機卿が名を授けて差し上げましょうツス」

「え？まあ良いけど……」

「え！良いんツスか？」

「冗談のつもりだったんツスけどね。」

「貴女は一応このチョコレート菓子の発案者だし、一応イブリス教の枢機卿だし、聖職者に名前を貰うなら一応ご利益有るかも知れないからね」

「『一応』多くないツスか？」

「気の所為よ。それで、どんな名前にするの？」

「そうツスね」

ふむ、なんか流れでお菓子に名前を付ける事になってしまったツス。

これは責任重大ツスよ。

『名付け』と言うのは大事な宗教儀式ツス。

この世に生まれた物は、名前を与えられる事で女神様の祝福を得てその存在を世界に刻むツス。

私も聖職者として、産まれた子供の名前を求められた事も有りま  
すし、修道院ではその手の勉強もさせられたツス。

しかし、この場合はチョコレート菓子への命名。商品として世に  
出すなら、子供の名付けとはまた、別の考えも必要ツスね。

「ウイスキー……チョコレート……砂糖の殻………ん？そう言え  
ば砂糖の殻で何かを包むお菓子が有った様な気がするツスね？」

「はい、北大陸で広く親しまれておりますボンボン菓子の事で御座  
いますね」

私の呟きに、静かに成り行きを見守っていたパティシエが答えて  
くれたツス。

「ボンボン菓子……チョコレート・ボンボン……ボンボン・ウイス  
キー………はっ」

閃いたツス！

何処か親しみやすく、更に耳に残る響き！

これこそが完璧なる名前ツス！

「決まったの？」

「はい、このチョコレート菓子の名前はズバリ！『ウイ………』」

大きく息を吸い込んで名を告げようとした私の鼻に、風に煽られ  
た木の葉がひらりと舞い降りた。

「『……ふえクチー!』」

「はい、じゃあこのチョコレート菓子の名前は『フェクチ』ね」

「え?」

「お願いね」

「畏まりました」

エリーさんがそう言うつと、パティシエは一礼して早々に去って行った。

「……………あれ?」

い、今何が起こったんツスか?

私は目の前のエリーさんを見つめるが、彼女は何事も無かったかのようにホットチョコレートを飲んでいたツス。

解せぬ。

「ところでティード」

「な、なんツスか?」

「さっきの貴女の話だと、上司である教皇猊下へ自慢気な手紙を送っているのでしょうか?」

「ふふん、そうツスよ。」

教皇猊下はきつと今頃羨ましくて悶えているに違いないツス。

修道院時代からの友達なんツスけど、揶揄い甲斐の有る人ツスからね

「良いの?」

「え?大丈夫ツスよ。あの子は西大陸にいるんツスから」

「いや、でも上司でしょ?その気になったら手紙1つで呼び戻されたりするんじゃないの?」

「……………」

そう言われると、最近はちょっとだけ調子に乗り過ぎていた気もして来るッスね。

あの子は昔から揶揄い過ぎるととんでもない仕返しをするッス。

「……………エリーさん、1つお願いが有るッス」

「……………毎度あり」

西大陸に有るイブリス教の中心地、イブリス神聖国の聖都にある大神殿の一室で、イブリス教教皇カルディナ・イブリスは、中央大陸へ派遣した幼馴染からの報告書に目を通していた。

「あらあら……………」

カルディナは嬉しそうに読み終えた報告書を丁寧に折り畳み懐へとしまった。

上機嫌なカルディナの様子に首を傾げたのは正面でハーブティーの香りを楽しんでいた老シスターだった。

「誰からの手紙なのかしら？ 猥下」

「ティーダからですよ、マザー・ラリエル」

「ああ、またあの子が何かやかしたのかしら？」

マザー・ラリエルは修道院時代に手を焼かされた2人組の片割れの顔を思い浮かべながら、もう1人の片割れへと問う。

「いえいえ、今回はただの時節の挨拶の様な物でしたわ。それと贈り物も」

カルディナは手紙と共に運ばれて来た上等な箱に収められた菓자에視線をやる。

「何でも中央大陸で出来た新しい友人が開発した菓子だそうですよ」「へえ、あのティードが……………今日は女神様へしっかりとお祈りしておかないと、天変地異でも起きかねないわね」

「ふふふ、マザー・ラリエルは相変わらずご冗談がお好きですわね」「……………貴女も同類なのよ、猯下」

マザー・ラリエルの呟きは菓子の箱を開けるのに夢中の教皇へは届かなかった。

「『フェクチ』って言うお菓子ですって」

「中央大陸のセンスなのかしら？変わった名前ね」

「でもとても美味しいですわ。マザー・ラリエルも一緒に」

「ええ、頂くわ」

## アデルの奮闘：憂慮すべき事案

目の前の書類に目を通して、最後にサインを入れる。

既に朝からずっと続けている動作を繰り返しながら、偶に混ざるミスやミスに見せかけた不正を見つけては抜き出して行く。

「アデル様、例の件の報告書です」

「ありがとうございます、マオレン」

ボクはマオレンから書類を受け取りサッと目を通した。

「ふうん、やっぱりおかしいね」

「はい、先日のブギー子爵領での反乱には扇動された形跡が有ります」

「武器の流れもおかしいね。」

偶然にしては出来すぎているよ」

ボクは疲労を誤魔化す様に眉間を揉む。

「ブギー子爵領以外にも似たような兆しがある領地もある。

誰かが糸を引いているのは確実だと思う」

「他国の工作でしょうか？」

「その可能性はあるね……………もしくは……………」

もしくは……………エリザベート姉様の報復。

ボクはその可能性を捨て切れていない。

扇動した形跡はあるが、武器やお金の流れから黒幕に辿り着く事



は出来なかった。

エリザベート姉様ならこれぐらいの工作は出来る筈だ。ボクの懸念をマオレンに伝えると、彼女は首を捻る。

「私はそのエリザベート様を直接存じ上げませんが、奉仕活動や慈善事業、公共事業などに力を入れておられたのですよね。

その様なお方が、民に多くの被害が出る反乱の扇動などを行うのでしょうか？」

確かにブギー子爵領の反乱では多くの民に被害が出た。

反乱を起こした民衆とブギー子爵家の兵力の衝突に加え、ブギー子爵亡き後の領都では暴行や略奪などの横行により治安が悪化、更に敗走したブギー子爵家の兵力が盗賊団となり、近隣の領地へ被害を出している。

それらを治める為、ボクは国軍を動かして鎮圧するハメになった訳だ。

とても慈愛に満ちた人間の計略とは思えないが、エリザベート姉様は貴族なのである。

「確かにエリザベート姉様の経歴だけを見るとそう感じるよね。

でも、エリザベート姉様は貴族に生まれ、国を動かすべく育った人間なんだよ。

その人間性が善良だろうと邪悪だろうと関係ない。エリザベート姉様は世界が綺麗事だけでは動かせない事を知ってる。

時には汚い手も使うし、卑劣な手段が有効な時もあるんだ。

エリザベート姉様は、1000人を生かす為なら、迷いなく10人を切り捨てる事ができる人だった」

「ですが、フリード様に婚約破棄を告げられただけでこの様な事を？」

「……それだけなら、此処までの事はしなかったんじゃないかな。」

調べによると、エリザベート姉様が幽閉されてから、1ヶ月以上、父上もジーク宰相も何も行動を起こさなかったそうだよ。

エリザベート姉様なら自力でなんとでも出来るだろうからって。流石にそれで愛想をつかせたんだろうね。

此処までなら、エリザベート姉様も国を出て行くくらいで済ませた可能性はあった。

少なくとも、無関係な民を巻き込む事なく、最悪でも、兄上やバカな官僚達に復讐する程度で済んでいたんじゃないかな。

でも、その他の対応が酷かった」

「商会の乗っ取りと、噂の流布ですね」

マオレンは長話になりそうだと思ったのか、冷めてしまっていたお茶を新しい物と交換してくれた。

「うん、これによつて民心はエリザベート姉様から離れた。

更に愚かな事に、帰ってきた父上やジーク宰相までエリザベート姉様を貶める様な噂を流したんだ」

「フリード様の不祥事を誤魔化す為ですね」

「うん、確かに有効だよ。

エリザベート姉様を悪役に仕立て上げて、兄上達を持ち上げる。噂を信じた民衆は大盛り上がりだろうね。

だけど、その策にはエリザベート姉様の感情が考慮されていない。ジーク宰相の話では、貴族として王家を守る為、エリザベート姉様も汚名を受け入れると考えていたそうだよ」

「何ですか、それは？」

「本当にバカしか居ないよ。

その結果、民衆はエリザベート姉様を糾弾し、エリザベート姉様は完全に敵対した。

そんなところじゃないかな」

「では、アデル様はやはり、今回の反乱はエリザベート様が黒幕で

有ると？」

「……いや、今回だけじゃない。

ロベルト・アーティの乱心や、属国との関係悪化、その辺りもエリザベート姉様が噛んでいると思う」

「まさか」

驚くマオレンだけど、ボクはこの説はかなり真実に近いと考えている。

先ず、エリザベート姉様を支持していて、未だにその姿勢を変えず、兄上を問題視している貴族の領地や隣接する属国では比較的問題が少ない事が分かっている。

何より、ジーク宰相を始め、多くの貴族がエリザベート姉様の行方を探っているのだけれど、一向に発見出来ていない。

ボク自身も、エリザベート姉様の搜索にはかなり本腰を入れているのに、影も形も掴めないでいる。

もし、この考えが真実ならば……。

「……………エリザベート姉様、貴女はボクの敵になるのでしょうか？」

## アデルの奮闘・排除すべき害悪

ハルドリア王国の王城、その一角には人払いがされ、最低限の間だけ働く区画があった。

まあ、ボクが信用出来る人間しか入れない様になっているだけなんだけどね。

ボクはその区画に設けられた中庭を、マオレンを引き連れて歩いている。

昼を過ぎ、日が傾き始める辺りの時間、木陰から差し込む光が、水路を流れる水に反射する美しい庭園の中心で足を止めたボクは、深い溜息を吐き、斜め後ろのマオレンに愚痴を吐く様に言った。

「……………また来たのか」

「その様ですね」

「いい加減諦めて貰えないのかな？」

「そうですね。そろそろ無駄だと学習してもよろしいと思うのですが……………」

「それが出来ないから、外に出された筈のボクが呼び戻されたんだろうけどね」

呆れた表情を浮かべながら、ボクの眉間に向かって飛来した矢を掴み取る。

それと同時に放った無詠唱の【風刃】が、弓を持つ兇手の腕を切り落とした。

ボクの意識が弓持ちへと向いた瞬間、建物の影や生垣の裏から如

何にも暗殺者と言った格好をした者達が迫って来る。

ボクは袖を翻し、隠していた短剣を手に襲撃者の喉笛を掻き切った。

ボクが武装しているのを見た暗殺者は標的をマオレンへと移すが、マオレンが投げた長針が脳天を貫き即死する。

それに怯んだ暗殺者を風で押し潰して拘束、マオレンに、人を呼ばせて牢へと連れて行った。

「これで6回目ですね」

「うん、どうせまた兄上か、兄上の派閥の貴族が雇った殺し屋だろうね」

「良いのですか？この件を突けばフリード様を完全に排除出来ますが？」

「しょうがないよ。王国は未だ混乱の中にあるからね。」

今はまだボクが表に出るのは早い」

ボクが帰国した事や、王太子の代わりをしている事は、殆どの間は知らされていない。

ボクが止めたからだ。

「この混乱を収める為には、それなりに汚い手を使う事もある。」

兄上にはその汚名や恨みと共に退場してもらおう予定だから、今は襲撃者は拘束して情報を溜めるくらいしか出来ないんだよ。

今後の事を考えると、やはりあの件をハッキリさせないと……」

「エリザベート様の事ですね」

「うん。もし、今の王国の混乱がエリザベート姉様の策だとしたら、と思うとね。」

その懸念を晴らすにはエリザベート姉様の居所を見つけなければいけない。

何処かの国でひっそりと暮らしてるとかなら問題ないんだけど……」

王国の多くの問題などよりも、ボクはエリザベート姉様を敵に回す可能性がある事の方が問題だと考えているからね。

「やや！アデル！一体どうしたのだ！」

ボクの足下の拘束された暗殺者達を見て、白々しく声を上げながら近づいてきたのは、ボクの兄上、フリード・ハルドリアだ。

「兄上……この区画は立ち入りを禁じていた筈です」

「堅い事を言う物ではない、アデル。」

私は兄として、貴様が心配だったのだ。

さあ、その暗殺者共は私が連行しよう」

兄上がスツと手を挙げると、待つてましたとばかりに数名の騎士がやって来る。

「いえいえ、兄上のお手を煩わせる程の事ではありませんよ」

ボクがそう返すのと同時に、ボクが呼んだ者達も到着する。

彼らは下級貴族や平民の出身だが、ボクに対する忠誠心は高い。それを基準に選んだのだから当然だ。

「おいおい、そんな平民の兵士や位の低い騎士では心配だろう？  
安心しなさい。」

私が用意したのは皆、家柄の確かな者達だ」

家柄しか確かなものが無い奴らの間違いでしょう。

喉元まででかかった言葉を飲み込み、兄上が連れてきた者達を無視して暗殺者を連行させた。

あいつらに引き渡したら口封じされるに決まっている。

「さて、兄上、兄上達には、この区画に立ち入る権限は無い。早々に立ち去って貰おう」

「貴様！兄に対して何て口をー！」

「兄上……私は兄上の尻拭いで忙しいのです！兄上は大人しくあの尻軽の胸でも弄っていて下さい」

「なっ それはシルビアへの侮辱だぞ！取り消せ！」

「あの尻軽がエリザベート姉様の罪をでっち上げた事は既に調べがついています。

虚偽の証言をした者達は拘束済みです。

今は時が悪いので、泳がせていますが、シルビア・ロッキートも当然処断します。

兄上は余計な事を考えず、大人しくして下さい」

「つぐう……………」

「衛兵！」

「はっ！」

騒ぎを聞きつけ姿を見せた衛兵を呼びつける。

本来なら、暗殺者に侵入され、ボクに刃を向けさせた事は、彼ら衛兵の失態だが、この区画はボクが選んだ衛兵以外は配置していない。

流石に、その人数で完璧に防げとは無謀な話だ。

その警備の甘さもあり、兄上は何度も暗殺者を送り込んでいるのだらう。

「王子殿下がお帰りだ。部屋までお送りして差し上げる」

「はっ！」

「ちっ！放せ、無礼者！平民風情が私に触れるな！」

兄上は衛兵の手を振り払おうとするが、彼らは平民とは言え、ボクが自らスカウトした者達だ。

その程度で振り払うことなど出来はしない。

「構わん、お連れしろ」

「はっ！」

その後も喚き続ける兄上と取り巻きは、衛兵達に連れて行かれた。

「はあ、疲れたな。それももう少しの辛抱か」

「はい、あの方は既に王都に到着されております」

「うん、早速面会の申し込みがあったよ。」

正直、彼は使いづらいなだね」

有能な事には違いないのだけれど、性格に難がありすぎるのだ。

「仕方ありません。彼しかいないのですよね？」

「そうだね、仕方がないか」

明日、ボクはある貴族と会う予定だ。

その貴族との対話次第では、時流が大きく動く事になるだろう。  
良い方向に動けば、兄上を排除し、ボクが、正式に王子となる。  
悪い方向に動いたならば……………。



「最悪……戦争だよね」

## アデルの奮闘：嚙下すべき猛毒

この日、ボクは執務室に隣接している応接室で、1人の男と向かい合っていた。

「お久しぶりです、アデル殿下。

お会いできて光栄です」

「久しぶりだね、エイワス。

わざわざ呼び出して悪かったね」

「いえいえ、幼い頃は可愛らしかった殿下も、実に美しくなられた。殿下の様な女性に呼ばれたのならば、このエイワス、万難を排して馳せ参じましょう」

朗らかな笑みを浮かべて口上を述べるこの男はエイワス。

一見すると軽薄で軟派な優男に見えるが、その実、とんでも無く厄介で有能な男だ。

「はてさて、田舎の領地に引っ込んでいただけの私の様な者に殿下は一体どの様な御用でしょうか？」

「ああ！殿下のその美しく神秘的な御姿を詩に詠めと言う事でしょうか？」

それならば、このエイワスにお任せ下さい。

社交界の鷲と呼ばれたこの私が……」

「エイワス、用件なら分かっているだろ？」

「はて？私の様な凡人には、賢者の如き殿下の御考えの片鱗すら見えませぬ。

どうか、この暗愚に殿下の叡智のカケラをお与え下さい」

エイワスはまるで舞台俳優の様にツラツラと言葉を綴る。  
この芯を掴ませない喋り方は苦手だ。

「エイワス、ボクは回りくどい言い回しは嫌いだ。エリザベート姉様は何処に居る？」

「ああ、殿下！その件で御心を痛めておいでなのですね。

ですが貴女様にその様なお顔は似合いません。どうか笑って下さいませ。

そうだ！王都に美味しい甘味屋が有るのですよ。

是非、私に殿下をご案内する榮譽を賜りたく……」

「エイワス！」

ボクは中身のない彼の話を強い口調で止める。

「……………」

「ボクは君の戯言に付き合う暇は無い。

エリザベート姉様の居場所を教えて貰おう」

「申し訳有りません、殿下。

彗星の如く煌めく王都の貴族方が手を尽くして知りえぬ事柄を、田舎に引き籠もる領主代行に過ぎぬ私に分かるとは思えません」

「くだらないね。君が知らない筈がないだろ？」

ボクは心を落ち着ける様に息を吐く。

エイワスに会話のペースを掴まれてはいけない。

少しでも隙を見せると、この軟派な優男はすぐに話を逸らし、相手を丸め込む。

「エイワス………単刀直入に言おう」

魔力を纏い威圧するが、エイワスはまるで気付いていないかの様

に飄々としている。

「ボクの下に付け」

「……………殿下、いくつかお尋ねしても？」

「いいだろう」

「なぜ、殿下はその様な事を？」

殿下は南大陸で随分と優秀であつたとお聞きしました。

わざわざ呼び出しにに応じて、こんな面倒事を押し付けられて、何をなさりたいのですか？」

そう尋ねるエイワスの顔は、いつもの笑みを張り付けているが、その身に纏う空気はガラリと変わっている。

「民の為だ。」

愚かな父や兄の所為で民が苦しむ事になる。

ボクは王族に生まれた者の責務として、民を護らなければならぬ。

その為なら、父や兄を廃する事になつても構わないと思っている。この身に流れる血と誇りに賭けて、ボクは民の守護者であり続けると決めている」

「……………誇りですか？」

「そうだよ。ボクは民の血税で生きて来た。」

ボクにはその肉の一片、血の一滴に至るまで、民の為に使う覚悟がある」

「……………その生き方の先に幸福はないと思えますか？」

「そうだろうね。」

だが、この国を滅亡させる訳にはいかない。

いや、国は別にどうでも良いか。

ボクは、この国に生きる全ての人々を護りたいんだよ」

「その為に私に忠誠を捧げると？」

「そうだ。この先、国は動乱と混沌の時代に入るだろう。お前が必要だ」

そう、この先を生き抜く為、ボクはこの猛毒の様な男すら、飲み下さなければならぬのだ。

エイワスは最早、最初の柔らかな笑みを消し去っている。その瞳に浮かぶのは鋭い眼光と強い意志。

「それは……それは、殿下が姉と慕う者と対立してもですか？」  
「っ」

やはり……今の王国の混乱の裏にエリザベート姉様がいるのか。ボクはエイワスが暗に告げた事実を噛み締める。

「その言葉を聞いて、更に君が必要になった。エイワス、ボクに従え。」

ボクはこの国を救う為、君が必要なんだ  
「ふむ………良いでしょう。」  
ひとまず、アデル殿下の下に付きましよう。  
ただし、貴女が私を納めるに値しない器で有ると判断したら……  
「その時はボクの寝首を搔けば良い」

ボクのその言葉に、エイワスは声を上げて笑った。  
そして……。

「トレートル商会？」

「はい、ユーティア帝国のレブリック辺境伯領と帝都を中心に活動している新興の商会です。そして、その商会の商会長がエリー・レイス」

「エリー・レイス……………エリザベート姉様」

ボクはとうとう知りたかった情報を聞く事になった。

その結果は最悪の予想が当たった。

エリザベート姉様は完全に王国を敵視しており、復讐の為の力を得ようとしている。

本気で抗わなければならないな。

ボクの瞳に浮かぶ覚悟を読み取ったエイワスは、不敵な笑みを浮かべると、その場に跪き臣下の礼を取った。

「殿下の覚悟、しかと拝見致しました。

このエイワス、殿下が御心にその覚悟を抱き続ける限り、忠誠を誓いましょう」

アリス・イン・ワンダーワールド：ぎ・ふぁーすと・おぶ・おっ  
かい

「アリス」

私が中庭で遊んでいると、ママが私を呼ぶ声が聞こえて来た。

「は〜い」

私が声のした方に振り返ると、ママとミレイお姉ちゃんが中庭に  
やって来た。

ママと出会う前の事はよく覚えていない。

ママには、どうしてママと呼ぶのか、と聞かれた事があるけど、  
ママはママだ。

自分の事はよく分からないけど、私は毎日楽しく暮らしてる。

でも少し前にお出かけした街で、ルノアお姉ちゃんと私が怖い人  
達に拐われてしまった事から、今は一人で遊びに行ってはダメだと  
言われているのは少し悲しい。

私が駆け寄ると、ママは私の頭を撫でてくれた。

髪に結んでいるルノアお姉ちゃんやミーシャお姉ちゃんとお揃い  
のリボンが揺れる。

ママは私の頭を撫でながら言う。

「アリス。実はアリスにお願いが有るの」

「なに？」

「市場の場所は分かるでしょ？」

「幾つか必要な物が有るのだけれど、ママ達はちょっと忙しくて買  
いに行けないの。」

「だからアリスにお使いに行って欲しいの。」

「1人で？」

「ええ、出来るかしら？」

「うん！」

ママから初めてお仕事を任された！

私は嬉しくなって元気に返事をした。

ルノアお姉ちゃんやミーシャお姉ちゃんは、普段ママの商会で立  
派にお仕事をしている。

私もママの為に何かしたいと思っていただけけれど、ルノアお姉ちゃ  
んやミーシャお姉ちゃんのお仕事は難しくてお手伝いする事が出来  
なかった。

だから私はママ達のお手伝い出来る事が嬉しかったのだ。

お金と買う物のメモを受け取った私は、ママとミレイお姉ちゃん  
に手を振ってお屋敷を出発した。

買い物に行くのは市場だ。

ママやお姉ちゃん達と一緒に何度か行った事が有る場所だ。

「あ、あれ？」



前に来た事のある道の筈だけれど、なんだか見覚えが無い気がする。

少しだけ不安になる私だが、深呼吸をしてから、落ち着いて周囲を観察する。

すると、近くに居た長い金髪の女の人が衛兵さんに話しかける声が聞こえた。

「衛兵さん、ちっと聞きたいツス……少々お尋ねしたいのだけれど良いかしら」

「はい、どうされました？」

「市場の場所を教えて貰いたいツス……貰いたいだけれど」

「ああ、市場でしたら1本隣の通りの先ですよ」

「そうですか、1本隣の通りでしたか。」

「1本隣の通りとは気付きませんでした。」

「1本隣の通りを真っ直ぐですね」

「え、ええ、そうですよ」

なるほど、隣の通りだったのか。

偶然、女の人の話を聞いた私は通りを移動して、無事市場に到着した。

「えっと……」

メモを取り出し、そこに書かれている物を1つずつ買って行く。

「後は……あれ？」

メモが無い！

私は慌てて周囲を見回すが、人が多すぎて小さなメモを見つける事が出来ない。

「君」

動揺する私に声を掛けて来たのは大柄な男の人だった。

男の人は冒険者風の装備を身につけており、顔は仮面で分からない。

一見怪しいけれど、冒険者の中には顔の傷を隠す為、仮面を着ける人も居ると聞いた事があるし、こんなに人の多いところで何かされる事は無いと思う。

「これを落としましたぞ」

「あー！」

男の人が差し出したのは私のメモだ。

「ありがとうございます」

「お使いか？気をつけてな」

「はい、ありがとうございます」

私が仮面の男の人にお礼を伝えていると、市場の反対側から来た少し柄の悪そうな男の人達が、仮面の男の人に話しかけた。

「あれ？それ昨日用意していた仮面ですか？

それにその格好……一体どうしたんですか、バア……ごふ」

仮面の男の人が柄の悪そうな男の人のお腹にパンチを入れた。

手加減したみたいで、柄の悪そうな男の人はお腹を押さえて不思議そうな顔をしていて、仮面の男の人が耳元でヒソヒソと何かを話すすと、イソイソと早足で何処かに去っていた。

「あ、あの……」

「気にしないでくれ、あいつは……友達なんだ。少しふざけていただけだ」

「そ、そうですか」

「ああ、じゃあな。気を付けて行けよ」

そう言っただけで仮面の男の人は去っていった。

「……あの、何処かで会った事が有るような……まあ、良いか」

私はメモに書かれていた残りの物を買って屋敷に帰った。

なんだか最初のメモと少し違う様な気がするけど、書かれている物は同じ筈だから気のせいだろう。

「ママ！」

「アリス、おかえり」

私は買って来た物をミレイお姉ちゃんに渡して、両手を広げるママの胸に飛び込んだ。

「ちゃんとお使い出来たかしら？」

「うん！」

私は1人でお使いが出来た事を誇らしげに報告するのだった。

「アリス・イン・ワンダーワールド・ユー・トゥー・ゼ・おちゃかい

「お茶会？」

「うん、リリに誘われたんだ」

「リリオ姉ちゃんに？」

朝のお勉強の後、ルノアお姉ちゃんに声をかけられた。

リリオ姉ちゃんは、ママのお友達のユウお姉さんの弟子の人だ。

「明日、私とミーシャはお仕事がお休みだからリリとお茶会しよう  
って事になったの。」

「だからアリスちゃんも一緒にどうかなって思ったの」

「私も一緒に行っても良いの？」

「うん、エリー会長が良いって言うてくれたらけど」

「聞いてくる！」

私は早速ママを探してお屋敷の中を歩き回る。

普段、ママがお仕事をしているお部屋には居なかった。  
と言う事はママも休憩しているのだと思う。

「あ、ミレイお姉ちゃん！」

「アリス？」

「ママは何処？」

「エリー様なら書庫に居る筈ですよ」

「ありがとうございます！」

ミレイお姉ちゃんに手を振りながら書庫へ向かった。

書庫には難しい本が沢山あるけど、絵がいっぱい描いてある図鑑も沢山あるから私もよく出入りする場所だ。

書庫のドアを開くと、窓際の椅子にママが座って本を読んでいた。

「ママ」

「どうしたの、アリス？」

「明日、ルノアお姉ちゃんとミーシャお姉ちゃんと一緒にリリオ姉ちゃんのお茶会に行っても良い？」

「お茶会？ルノアとミーシャも一緒なの？」

「うん」

「うん、リリの所ならユウも居るから平気か……うん、良いわよ」  
「ありがとう！」

私はママにお礼を言ってルノアお姉ちゃんの所に戻った。

翌日、お昼頃にルノアお姉ちゃんとミーシャお姉ちゃんに連れられてユウお姉ちゃんのお店へやって来た。

ユウお姉ちゃんのお店はママのお店みたいに大通りの大きなお店じゃないけど、貴族様や宮廷からもお仕事が入るすごいお店だとママが言っていた。

「ああ、いらつしやい」

「……お邪魔します」「」「」

お店に入ると、カウンターで黒い髪のお姉さんがお店番をしていた。ユウお姉さんだ。

ルノアお姉ちゃんと同じくらいに見えるけど、もっと年上らしい。

「リリは上に居るからね」  
「はい」

ユウお姉さんに見送られてカウンターの横からお邪魔して、奥の階段を登った。

すると、2階の部屋からリリオ姉ちゃんが出て来て私達を迎えてくれた。

「みんな、いらっしやい。お茶会の準備出来てるよ」

「こんにちは、リリ」

「お世話になります、リリ様」

リリオ姉ちゃんはブラウンの髪を肩くらいで切り揃えていて、とても明るくて優しい人だ。

「アリスちゃんもいらっしやい」

「こんにちは、リリオ姉ちゃん！」

リリオ姉ちゃんは私達をお部屋に招き入れてくれた。

お部屋に入ると、壁一面に沢山の本やお薬の瓶、カラカラになった葉っぱやよく分からない粉が置いてあった。

テーブルには不思議な香りのお茶と沢山のお菓子が用意されている。

「この薬茶はこの前、近くの山で採取した薬草で作ったんだ」

「リリ様が作られたのですか？」

「うん、師匠に教えて貰ったんだ。」

お菓子も私が作ったんだよ」

「美味しそうだね。」

「そうそう、私達もお菓子を作って来たんだ」

そう言っつてルノアお姉ちゃんが下げているカゴからパイやチョコ  
レートを入れたパンケーキを取り出した。

「このお菓子は私も一緒に3人で作った物だ。」

お屋敷の料理人さんも上手に出来ていると褒めてくれたので、マ  
マやミレイお姉ちゃんにも渡しておいた。

みんなで椅子に座つて不思議な香りのお茶とお菓子を頂きながら  
お喋りをする。

リリオ姉ちゃんは、ユウお姉ちゃんに幾つかのお薬をお店で売っ  
ても良いつて言われて嬉しかったそうだ。

ルノアお姉ちゃんは最近、冒険者のお仕事も始めたらしく、偶に  
リリオお姉ちゃんの作ったお薬を買いに来るらしい。

ミーシャお姉ちゃんは前にお出かけした街で、怖い人に勝てなか  
ったのが悔しかったけど、今は強くなるだけじゃなくて、もっと出  
来る事を増やそうとお勉強を頑張っていると言っていた。

みんなすごいと思う。

私ももっと勉強して、魔法も沢山使える様になりたいな。

アリス・イン・ワンダーワールド：ねっすん・とう・まじっく

「水よ 我が意に従え【水操作】」  
ウォータクトロール

私がかざした右手の先に私の体の半分くらいの水が球のようになって浮かぶ。

目の前に立ったママが私の作った水球を見ながら言う。

「そのまま維持して……もう一つも出来る？」  
「うん！」

私はママの指示通り、左手も掲げて呪文を詠唱する。

「炎よ 我が手に宿れ【炎操作】」  
ファイアクトロール

水球の横に同じ大きさの炎の球が現れた。

「良いわよ、限界まで維持して」  
「むむむ……」

2つの魔法に同じ様に魔力を流して行くけど、次第に炎球の方のバランスが崩れてくる。

「わっわっわ！」

そうしている内に、炎球がポンと弾けて消え、残った水球が大きいく形を変えて揺れ、私の頭の上で弾けてしまった。



「大丈夫、アリス？」

「うん、ビックリしただけだよ」

水浸しになった私にミレイお姉ちゃんがタオルを手渡してくれた。タオルを頭の上に乗せると、ママがタオルを手に取って丁寧に拭いてくれる。

「やっぱりアリスの魔法適性は少し水属性に傾いているみたいね」

私には水属性と火属性の2つに適性があるらしい。

それはとても珍しい事らしく、ママ達には外では火属性は使った  
らダメだと言われた。

その為、魔法の練習は水属性を中心にやっていたのだけれど、私  
は水属性の方が得意みたいだ。

「アリスもなかなか魔法を制御出来る様になって来たわね」

「本当？」

「ええ、随分と維持時間も伸びているわ。」

そろそろ、攻撃魔法の練習も始めましょうか」

「うん！」

私は今まで攻撃魔法はほとんど教えて貰っていなかった。

出来る事と言えば、【水球】ウォーター・ボールくらいだ。

「それじゃあ、明日から攻撃魔法を教えるわね」

ママが私の髪を拭いてくれるのがくすぐったくて笑みが浮かぶ。

「はい、おしまい」

「ありがとう、ママ」

「へえ、アリスちゃん、とうとう攻撃魔法を教えて貰える様になっ  
たんだ」

「うん、明日から教えてくれるって」

「アリス様、頑張つて魔法の練習をしていましたからね」

魔法の練習を終えた後、お昼休憩をしていたルノアお姉ちゃんと  
ミーシャお姉ちゃんに魔法の事をお話した。

「アリス様は攻撃魔法を習得して、戦える様になりたいのですか？」

「別にそう言う訳じゃないよ？」

「そうなの？」

「うん」

「じゃあどうして？」

「分からないけど……今は色々な事が出来る様になりたいんだ」

私はママのお陰で毎日楽しく暮らしている。

だから、いつかママのお手伝いが出る様に、いろんな事をお勉  
強したい。

「そっか、アリスちゃんはエリー会長の役に立ちたいんだね」

「うん」

ルノアお姉ちゃんが頭を撫でてくれる。

「アリス様がそう思っているだけでエリー様は嬉しいと思いますよ」

「そうかな？」

「はい」

ミーシャお姉ちゃんもリボンを結んだ尻尾をフリフリと揺らしながらそう言ってくれる。

ルノアお姉ちゃんもミーシャお姉ちゃんも強いし、優しい。私もお姉ちゃん達みたいになる為に頑張らないと。

フンス！と気合を入れると、お姉ちゃん達は顔を見合わせて笑った。

翌日、朝の魔法の練習の時間になると、いつも通りの基礎練習をした後、ママから攻撃魔法を教える事になった。

「それじゃあ、始めるわよ」

「はい！」

私は攻撃魔法の習得の為、気合を入れるのだった。

## ミレイの長い1日：朝

私、ミレイ・カタリアの朝は早い。

空が白み始めた頃には既に身支度は整え終え、屋敷を任せている使用人頭や侍従頭を集めてミーティングを行う。

既に使用人では無いので、私の仕事では無いのだが、エリー様の周囲は信頼できる者で固めているので人数が少なく、私が1人で全てを把握する事はできない。

目に入らない様な雑事を把握する為に必要な事だ。

ミーティングを終えた後は一旦自室に戻り所用を済ませる。  
が、それは表向きの話だ。

実際には裏向きの仕事を任せている者達からの報告を聞き、指示を出す時間だ。

今日の報告は屋敷に侵入しようとした暗殺者数名を捕らえたと言  
う物だ。

最近では減って来たが、まだエリー様を狙う者は残っている。

主に商売敵の大商会や既得権益を脅かされた貴族などが送り込んでくる暗殺者だ。

屋敷の警備を抜けても、私が配置している暗部の者達に捕らえられて終わるのだけれど、ごく稀にエリー様の近くまで迫る者もいるので油断出来ない。

それらが終わると朝食だが、今日は少し時間があるので紅茶でも楽しむでしょう。

自室の一角に設えた食器棚に綺麗に並べられたティーセットから、先日ケレバンで購入した茶器を選び、取り出す。帝国や王国のスリムでシンプルな茶器とは違い、砂漠の先の国からの輸入品であるこの茶器には花や小鳥が描かれており、実に華やかだ。

隣の棚を開くと、そこには多種の紅茶や薬茶、コーヒーなどが収められている。

「……………今日はアール 그레이の気分ですね」

紅茶の中から一つを選び出して丁寧に淹れる。

香りを楽しみながら朝のひと時を過ごして居ると、先日、バアルから言われた言葉を思い出す。

バアルは今のエリー様の危うさを告げていた。

確かにそうだ。私はそれに気付きながら目を逸らしていた。

王国にいた頃……………エリザベート様だった頃がエリー様にとって良かったとは思わない。

だが、今のエリー様は……………。

先日、バアルからの報告を伝えた時。

『エリー様、ブギー子爵領からバアルが戻りました』

『そう、首尾はどう？』

『全て予定通りです。ブギー子爵はバアルが殺害、家族も全員始末しました。』

ブギー子爵領は治安が極めて悪化、暴行や略奪が蔓延り、困窮した領民は野盗化しております。

また、非合法的な奴隷商人の出入りも確認しています。

この状況から自力での復興は不可能かと」

「そうね、多分王国は軍を動かして鎮圧に動くでしょうね。

それと合わせて王国が民を弾圧していると噂を流しておきましよう。」

ついでに治安維持の為に軍備を増強している周囲の属国にも、王国に叛意有りとして懲罰的派兵の用意をしているとプロパガンダを」

「かしこまりました」

「ああ、それとミレイ」

立ち去ろうとする私をエリー様は呼び止める。

「はい」

「帝国領の一部地域で不作が続いているらしいわね」

「はい、天候不順が原因と思われる不作が確認されております。

現地の領主が対応しておりますので、餓死者までは出ないと思われませんが、困窮はしているものかと」

「大変よね。予備予算からトレードル商会名義と私の個人名義で義援金を送って置いて頂戴」

「……………かしこまりました」

「ふう」

香り高い紅茶の風味を含む息をゆっくりと吐き出す。

残虐な報復を行いながら、人々の不幸に心を痛めて施しをする。

その二面性を持つのは問題では無い。

その二面性を一切自覚していないのが問題なのだ。

エリー様は自らを裏切った王国の民がどれほど苦しもうと気に止める事はないが、一方で弱い立場の者に、かつてと変わらず慈愛の手を差し伸べる。

その心のバランスが崩れる時がいつかやって来る筈だ。

その時、エリー様の精神が耐えられるのか……。

やはり、バルルの言う通り、なんとかしなければいけないでしょうね。

エリー様に復讐以外の生きる意味を見つけて頂かなくては。

空になったカップとティーポットを片付けた私は、朝食後のミーシャへの侍従教育の内容を考えると同時に、エリー様にそれとなく人生の楽しみを見つけて貰う方法を考えるのだった。

## ミレイの長い1日：昼

昼食の後、仕事を片付けているとバアルが私を訪ねてやって来た。

「どうしたのですか、バアル」

「仕事中に悪りいな、ミレイの姐さん」

バアルは後ろに2人の子供を連れている。

ケレバンの街の事件の後引き取った2人だ。

「実はこっちのドロシーの事なんだがな」

そうやってバアルが視線を向けたのは魔法が使えるらしい少女の方だ。

「この2人は取り敢えず警備部の方で面倒を見ていたんだが、ナナキの方はなかなか見どころが有るんだが、ドロシーはどうにも戦闘に適性が無くてな」

「そ、その……ごめんなさい」

少女が申し訳なさそうに謝る。

「ああ、気にすんな。人には向きと不向きが有るんだからよ。

警備の方はナナキに任せとけば良いさ」

「うっす！任せて下さい、バアルの兄貴！」

「誰が兄貴だ、警備部長、もしくはバアルさんと呼べ」

「すみません、兄貴！」



ふむ、ケレバンで少し話した時はもつと大人びた少年の様に思えたのだけれど、今は年相応に見えますね。

まあ、良い傾向なのでしょう。  
バアルにも懐いている様ですし。

「それで、ドロシーの方は内務の方に回して欲しいんだ」

「分かりました。配置換えに関しては私からエリー様に話しておきます。数日中に辞令が出るでしょう」

「ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます」

話は終わりかと思っただが、バアルは立ち去る事なくその場に留まった。

「それともう一つ報告なんだけどな」

「はい？」

「どうやらドロシーは、妙な魔法が使えるみたいなんだ」

「妙な魔法ですか？」

「ああ、ナナキ」

「うっす！」

少年が革袋から氷のカケラを2つ取り出して机に置いた。

氷のカケラは2つとも同じくらいの大きさで、既に少し溶けかけている。

「ドロシー」

「は、はい！」

少女が氷のカケラの1つに手をかざし、眉間に皺を寄せて唸り始めた。

「うううう……」

それから数分が経ち……。

「なるほど」

「な？」

片方の氷は既にほとんど解けてしまったのに、ドロシーが手をかざしていた方の氷はまだ形を残していた。

「これは……多分『固有魔法』ですね。

おそらく【状態保存】の魔法かと……」

「ほお、レアじゃないか。それも有用だ」

「そうですね。これもエリー様に報告しておきます」

「おう、頼んだぜ」

言うだけ言うと、バルは子供達を連れて戻って行った。

それにしても固有魔法ですか。

エリー様は特に気にせず引き取ったのでしょうかね。

トレートル商会では、魔法の素質がある孤児などを商会員見習いとして引き取ったりもしているのだが、現在、商会員で固有魔法を使えるのはルノアだけだ。

ドロシーもしっかりと鍛えれば商会の重要な戦力として期待出来ますね。

私は手早く報告書を纏めると、エリー様の元へ向かった。

「そうね、後はこのルートを通った場合の対処を……」

エリー様の執務室では、エリー様が数人の商会員と共に帝都の地図を囲んで話し合っていた。

「エリー様」

「あら、ミレイ。ちょうど良い所に来たわね」

「どうされたのですか？」

「明日のアリスのお使いの作戦を確認していた所なのよ」

「……………少々過保護すぎるのでは？」

既に1週間掛けてバル達が市場周辺から浮浪者や裏社会の者達を追い払っており、当日にはトレートル商会のスタッフやティータ、《鋭き切先》のマルティなどの信頼できる冒険者を市場の周辺に配置する予定だ。

流石に安全性は十分だと思う。

「何を言っているのよ！ついこの前誘拐されたのよ？」

でも、このお使いは、アリスの自立心を養うには重要な事、なら万全を期すのが私の務めよ」

「は、はあ」

「あ、もしアリスが途中でお使いのメモを失くしたらどうしようかしらっ。」

「……………周囲のスタッフに予備のメモを持たせて置きましょう」

「良い考えね」

エリー様は早速指示を出し始め、それからアリスの初めてのお使い作戦の詳細を詰めて行った。

それがひと段落すると、私はエリー様に報告書を差し出した。

「コレは？」

「先日、ケレバンで引き取った2人に関する報告書です。」

少年の方は問題ありません。バルを慕っている様なので、あのまま彼の下で警備要員として鍛えて貰いましょう。

少女の方は戦闘に適性が見えないので、内務に回して欲しいそうです。」

「分かったわ、手続きしておきましょう。」

「それと、どうやら少女は固有魔法が使える様です。」

「本当？」

「はい、おそらく【状態保存】かと。」

「それは有用ね。しっかり才能を伸ばしてあげましょう。」

「はい、指導出来る者を手配しておきます。」

「ええ、任せるわ。」

さて、報告はこれくらいか。

「ねえ、ミレイ。」

「はい？」

「貴女、午後からお休みだったわね？」

「はい、この報告が終われば業務は終了です。」

「そう、最近忙しかったから、ゆっくりして頂戴。」

ふむ、少し探りを入れてみましょうか。

「ありがとうございます。久しぶりに帝都のお店を見て回ろうと思います。」

所で、エリー様はお休みなどは何をされているのですか？」

「私？」

私は……………商品開発や市場調査かしら？」

「それは仕事ですよ」

「そ、そうよね……………」

「偶にはご友人とご親睦を深めては如何ですか？」

「……………そう、ね。それも良いかも知れないわね」

エリー様は少し意外そうな顔をされた後、少し考え込んでからその結論した。

「これで少しは復讐や仕事以外に目を向けて貰えると良いのですが……………」。

## ミレイの長い1日：夜

昼を少し過ぎた頃、私は1人で帝都の通りを歩いていました。大通りから少し離れたこの辺には、小物屋やアンティークショップなどが軒を連ねている。

「こんにちは」

「あら、いらっしやいミレイちゃん」

行きつけのアンティークショップの店主のご婦人が笑顔で声を掛けて来る。

「ミレイちゃんが好きそうなの、入荷したのよ」

「本当ですか？」

手招きする店主に近づくと、店主はカウンターの後ろの棚からテーブルセットを取り出した。

「これは……硝子製ですか」

「そう、東の島国からの輸入品だね。」

ほら、硝子に切り込みで模様が入っているでしょう？

東の島国の職人が手掛けた品だそうよ」

薄く色の入った硝子に、幾つもの線が走り模様が描かれている。それにコレは……。

「コレはもしかして……」

「ふふ、気が付いた？」

実はこの模様が魔法陣になっていてね。

お茶を適温で保つ事が出来るのよ」

「凄いですね。」

確かにそう言った効果を持つ茶器のマジックアイテムはありますが、どれも見えない所に魔法陣を隠しているのが普通で、この様に魔法陣を模様として描き込んだ物は初めて見ました」

「どうだい？硝子の輸入品はなかなか入って来ないよ」

「おいくらですか？」

「そうさね……金貨6枚と言いたい所だけど、ミレイちゃんはお得意さんだからね、金貨5枚と銀貨5枚でどうだい？」

「むむ……悩みますね」

茶器の値段としては相当に高い。

でも壊れやすい硝子製で、東の島国から帝国まで運ばれて来た事と、マジックアイテムである事を考えると妥当な値段でしょうか？

そして何より、私には購入出来るだけの余裕が有る。

「買いましょう」

「じゃあ商談成立だね」

「流石に持ち合わせては無いので、支払いと引き取りは明日でも良いでしょうか？」

「構わないよ。売約済みにしておくよ」

「ありがとうございます」

実に良い買い物をしました。

その後も何件かお店を回り、趣味の関係で知り合った友人が営む茶屋で気に入っている茶葉を購入した時には、太陽は沈み薄暗くなり始めていたので、屋敷へと戻る事にした。

「うん？」

「？」

屋敷の居間に入るとエリー様が腕を組んで首を傾げていた。

「どうされたのですか？」

「ミレイ？お帰り」

「ただいま戻りました。それで何を悩まれて居るのですか？」

「ええ、今日ミレイが言ったじゃない？」

友人と友好を深めた方が良いつて」

「はい」

「それで考えていたんだけど、友好を深めるって、何をすれば良いのかしら？」

「それは……」

そうか、エリー様は生まれた時から王太子の婚約者として貴族社会の中心で生きてきたのでした。

当然、エリー様の一挙手一投足は意味を持つ事になる。

幼少から、エリー様の交友関係には全て政治的な配慮が必要とされて来たのだ。

エリー様はその様な利害関係などを考慮しない、普通の交友関係が分からないのだろう。

「やっぱりアレかしら？夜会を開いて情報交換とか……」

「エリー様、それは交友ではなく社交です」

「むむむ、それならミレイには友達は何人居るの？」

エリー様は少し拗ねた様に唇を尖らせて言う。



「この様な表情も王国にいた頃は見せる事は無かったな。」

「勿論、友人は居ますよ。主に趣味の仲間ですが」

私が言うと、エリー様は目を見開いて驚いていた。

私に友人が居るのがそんなに驚く事ですか？

「ま、まさか、ミレイにちゃんと友人が居たとは……」

「エリー様、取り敢えずご友人と何かされたらよろしいのでは？」

「何かって？」

「そうですね……ショッピングとか、ランチとかでしょうか？」

「なるほど……そうですね！私ももう人の顔色や利害関係とかを気にしなくて良いのよね」

「どうやらやる気になってくれたみたいですね。」

「こうして見ると、エリー様も年相応に見えます。」

さて、明日のアリスのお使いの後はエリー様の交友に関して作戦を立てる事になりそうです。

エリーのお友達大作戦：mission 1 市場を散策せよ！

ミレイに友人と遊べと言われた。

彼女が何を目的としてそんな事を言ったのかは分からないけれど、何か意味があるのだろうか。

それも、私の為の意味が。

ミレイは私の従者であり、幼馴染であり、姉のような存在であり、大切な家族だ。

ミレイはいつだって、私の事を考えていてくれた。

王国で受けていた仕打ちに対する怒りを自覚出来たのもミレイのお陰だ。

なら、やはり私はミレイの言う通り、友人と友好を深めなければならぬのだろう。

「……………友人って何をすれば良いのかしら？」

私は今までの人生に於いて、ただ楽しむ為だけに誰かと交流した事など無かった。

どうするべきかと、悩んでいると、帰宅したミレイがアドバイスをくれた。

その後、ミレイと相談して、予定を立てた私は、早速次の休日に作戦を決行する事にしたのだ。

「ああ！皆さん、お待たせしたッス」

帝都の中央広場、大きな時計塔の下の噴水の前で、待ち合わせをしていた最後の1人、ティーダが駆け足で姿を現した。

「遅いぞ、ティーダ」

「そうですよ、10分の遅刻です」

「し、しょうがないじゃないッスか、時計なんてこの広場くらいにしか無いんッスから」

この場に集まって居るのは私とティーダ、ユウ、エルザの4人だ。共にダンジョンに潜った仲である。

「ほらほら、騒いでないで行きましょう」

「そ、そうッスね！行きましょう！」

「まったく……」

「ふふふ」

こうして、私達は姦しく帝都へと繰り出した。

「あ、見てください！あの果実はこの辺りではなかなか手に入らない物ですよ」

「チルムの実ね。凶鑑で見た事があるわ」

「ほう、美味しいのか？」

「さあ、どうかしら？食べた事はないわ」

「わたしも薬用に乾燥させた物しか扱った事は有りませんね」

「じゃあ、1つ買って食べてみるッスよ」

銅貨と引き換えに真つ赤に熟した拳程の果実を受け取り、エルザがナイフで切り分ける。

「ん、甘いわね」

「随分と濃厚だな」

「口に残る甘さツスね」

「コレはそのまま食べるよりお菓子の材料とかにしたほうが良さそうですね」

「良いわね」

今日は午後まで帝都を散策し、その後はユウの店で女子会と言う物を催す予定だ。

夕食も自分達で用意するつもりだから、お菓子も作るのも良いかも知れない。

果実を幾つか購入し、更に気になる食材をつまみながら気に入った物を買って行く。

エルザと露天商が売っているナイフを吟味し、異国の行商人が扱っていた薬をユウに解説して貰い、フラフラと酒屋に向かうティードを連れ戻す。

そうして居ると、時間は空を飛ぶ飛竜の如く進んだ。

気の許せる友人と、目的も無く街を歩く。

なるほど、確かにコレは楽しいのかも知れない。

「そろそろお腹が空きましたね」

「そうツスね、何処かでランチにしましょうか」

「何処か美味しいお店知ってる？」

「私は安くて量の多い冒険者向けの店しか知らないな」  
「美味しい酒場なら知ってるツスよ？」

私も帝都では殆ど屋敷で食べるか、パーティに出る事が多いからあまりお店は知らないわね。

「ふふふ、では私がオススメのお店に案内しましょう」

何やらユウが自信ありげに宣言する。

ダンジョン内で共に行動した感じだと、ユウはかなり料理達人だ。そのユウがオススメだと言うなら期待が出来そうだ。

私達はユウの案内でお店へと向かうのだった。

エリーのお友達大作戦：mission 2 ランチトークをせよ！

ユウに案内されたのはごく普通の食堂だった。

昼間は食堂で、夜には酒場になると言うよくある営業形態のお店だ。

「こんにちは」

「いらつしゃい、ユウさん」

「今日は友達を連れて来ましたよ」

私達を迎えてくれたのは恰幅の良い女将さんだ。

厨房の奥にはご主人だろう、禿頭の男性がフライパンを振っている。

日替わりの定食を注文した私達が席に座り雑談に花を咲かせて居ると、女将さんが早々に料理を運んで来てくれた。

「ほう、美味そうだな」

「そうね」

日替わり定食はサラダと鳥の魔物の唐揚げ、スープにパンだった。特に変わったところの無い普通のメニューだけれど、よく見ればサラダは香草や薬草を使った物だった。

唐揚げもハーブをふんだんに使っており、結構クセの強い魔物の肉だけれど、まったく臭みがない。

スープも詳しくは分からないが滋味溢れる味だ。

「随分と変わった料理ツスね」

「初めて食べる料理ね」

「ああ、味は間違いなく美味いんだが、この辺りの料理では無いな」  
「ふふふ、実はこの食堂の料理は私がプロデュースしているんです」  
「え？」

「それで……やけにハーブや薬草が使われていると思ったわ」

「私の故郷では食事で健康を保つって考え方が強いんですよ。コレは食事に薬草や薬効の有る食材を使う料理なんです。

美容にも良いので女性に人気があるんですよ」

確かに周囲を見回すと、大衆食堂の様な店にしては女性客が多い様に見える。

それからユウに料理の効能を説明して貰いながら舌鼓を打つ。  
美味しい料理を食べながら、私達の会話は無軌道に変化する。

「エリーさんは街の食堂とかで食事とかするんツスか？」

「最近はしていないわね。」

帝国に来たばかりの頃はミレイと2人で食堂でご飯を食べていたわよ」

「ミレイさんと言えば……」

取り留めのない話は尽きる事なく、食後のハーブティーを飲み終わる事でようやく区切りをつける事が出来た。

「さて、この後はどうするツスか？」

「そつね……」

午後の予定は特に決めていない。

夜にはユウの店に行くつもりだけれど、それまでは自由時間だ。

初め、私はキッチリ予定を立てるつもりだったが、ミレイに相談すると、予定を友達と遊びながら考えるのも楽しい物らしいので、プランで挑む事にしたのだ。

「あの……」

私達が次の予定を話し合っていると、不意に声をかけられた。

振り返ると、ブロンドの髪に羽を象った髪飾りを付けたエルフの女性がこちらに近寄って来た。

見た目は15歳前後に見えるが、エルフ族は長命種族なので年齢はよく分からない。

「私、ローザと言います。駆け出しの吟遊詩人です」

駆け出しと言う事はやはり若いのかしら？

でもエルフならそれなりの年でも駆け出しとして吟遊詩人になる事も有るのかも知れないわね。

「何か用ツスカ？」

「は、はい！あの……皆さん、冒険者さんですよね？」

「ん？まあ、そんなところだ」

エルザが答える。

正確に言えば私とティードは違うのだが、その辺の説明は面倒だと思ったのだろう。

「是非、皆さんの冒険譚を聞かせて貰えないでしょうか？」



私達は顔を見合わせた。

吟遊詩人はこうして各地を旅して、訪れた土地の光景や見聞きした話を元に唄を作ると聞いた事がある。

せっかくなので、私達がダンジョンに潜った話を語り、ローザにも幾つかの唄を歌って貰った。

まだ経験が浅く、緊張している様だったが、ローザの声は美しく、情景が浮かび上がる様な不思議な魅力が有った。

きっと彼女は吟遊詩人として成功を収めるのだろうと、彼女と別れた後、再び帝都の街を歩きながら、私達は話していたのだった。

エリーのお友達大作戦：final mission 女子会を  
開催せよ！

帝都の散策を終えた私達は、ユウのお店に場所を移した。

買って来た食材で作った料理やお菓子、私が用意したチョコレー  
ト菓子やエルザが持って来た紅茶やユウが作った薬茶を囲んでいる。

意外な事に、私達の中で1番料理が上手かったのはティーダだっ  
た。

「修行時代によく作らされていたんツスよ」とはティーダの談だ。  
因みに次点はユウ。

この2人はまさにプロ並みで、私とエルザは人並みだ。

その後も料理をつまみながらひたすら話す。市井の女性はいつま  
でも話す、と聞いた事が有ったが、なるほど確かにコレは楽しい物  
だ。

そして今の話はユウの出身地の話だ。

「ユウは確か東の島国の出身だったわね」

「そうですね。1800年前、魔王を倒した勇者様が、迫害されて  
いた魔族や国を失った人々を集めて作った国、『日ノ本列島王国』  
です」

「勇者ねえ、それってアレでしょ？」

異界から来たって言うヒロシ・サイトーの事よね」

「そうですね」

日ノ本列島王国の現国王、斉藤弘信様の御先祖様ですね」

「勇者が作った国か、どんな国なんだ？」

「良い国ですよ。」

周囲は海に囲まれて、陸地は山が多ですね。

それと地震が頻繁に起こります」

「……………それは良い国なんツスカ？」

「はい」

話だけ聞くと住みにくそうに思えるけれど、ユウは問題無いと頷いた。

「自然災害が多くて厳しい環境では有りますが、そこに勇者様が齎した異界の知識を駆使して、御先祖様達が頑張って国を作ったんです」

「へえ、異界の知識ツスカ。何か凄そうツスね」

「まあ、そうは言っても生活の知恵みたいな物がほとんどですからね。」

食べ物の保存の仕方とか、山の多い土地での農法とかです」

「そうなんツスね。私はてっきり異界の魔法で開拓したりとかだと思ってたツス」

「異界の物って事なら、勇者様の残した三宝が有りますよ」

「三宝？」

「はい。勇者様がこの世界に現れた時、手にしていた異界の品です。今は日ノ本列島王国の国宝として5年に1度、建国祭の日に一般に公開されるのです」

「なんか凄そうだな」

「凄いですよ。1つ目は『すまほの書』です。異界の知識が記された魔導書で、医学、農法、政など、あらゆる叡智が記されているとされています」

「何で曖昧なんツスカ？」

「『すまほの書』は誰にも読めませんからね」

「魔導書なんでしょ？王族とかなら読めるんじゃないの？」

「それがですね、『すまほの書』は私達が普段見る様な書物とは全く別の物なんですよ」

「別の物？」

ユウは手で掌より少しだけ大きいくらいのサイズを示す。

「はい、見た目はこれくらいの黒い板なんです。それで、勇者様が触れると光を放ち、求める知識が浮かび上がった、と伝えられています」

「へえ、所有者を定めるタイプのマジックアイテムか？」

「そうね、多分異界の魔法の産物でしょうね」

「それで他の2つはどんなのなんツスか？」

「2つ目は服です。勇者様が身に着けていた『がくらん』と言う黒い生地には紋章が刻まれた金のボタンが付けられたシンプルな服です。本物は【状態保存】の魔法をかけられて宝物庫に保管されていますが、複製された物は今でも王族の正装として使われて居ます」

「ほう、異界の品はやはり我々の常識とは異なる形をしているんだな」

「それで3つ目は？」

「3つ目は『宇宙狩人ギャラクシーもも、ファイナルハンティング Ver.』と言うヒラヒラした服を着た女の子の人形です」

「はあ？」

「人形と言っても、子供が遊ぶ様な感じの物では無く、硬いけど柔らかくも有る不思議な素材で作られた精巧な人形です。

これについて勇者様はあまり多くの話を残して居ないので、時折勇者様は1人でその人形を眺めていたと言う話から、学者の見解では、おそらく勇者様の世界の女神様を象った神像ではないかと言われています」

「異界の女神様ツスか。神像を持ち歩き、別の世界に来て祈りを捧げるなんて、勇者様は敬虔な信徒だったんツスね」

ティードは感心とばかりに頷く。

「それと、勇者様が作られた装束が王下二十一家に伝わっています」  
「王下二十一家？」

「初代国王である勇者様の21人の側室の子供の家系です。  
大陸風に言くと王家の傍流ですね。」

「下位では有りますが王位継承権も有ります」  
「側室が21人か……」

「正室を合わせて22人、随分と剛気な人だったんツスね」

勇者の妻の数にエルザとティードは少し引いていた。

確かに王族とは言え22人は多い。  
だが、それは平時の国の話だ。

「日ノ本列島王国は多民族国家なんでしょ？」

なら、その初代が各種族から妻を娶り国としての結束を示すのは  
政治的には有効な手段だと思っわよ」

「そうですね。確かに政治的な思惑も有ったでしょうけど、勇者様  
は妻を全員愛していたそうですよ」

「懐の深い人なんツスね」

「それで、その王下二十一家に伝わる装束って言うのは何なんだ？」  
「勇者様が22人の妻に贈った物ですよ。」

正室……王家に伝わる『せーらー服』、田中家に伝わる『ちやいなドレス』、  
神手家に伝わる『みこ服』、水鷲家に伝わる『すくみず』など、  
それぞれの妻に贈られた装束が伝わっているのです。

因みに、わたしの実家である楠木家は、王下二十一家の分家の1  
つで、本家である天木家には『なーす服』と言う装束が伝わっています」

「へえ……ん？じゃあ、ユウさんは傍流王族って事ツスカ？」

「まあ、血筋的にはそう言えなくもないですね。

傍流も傍流なので、王家の家系図にも載りませんし、王位継承権も有りませんけど。」

帝国で言つと公爵家の陪臣の一族くらい位の地位ですね」

「それでも結構良いところのお嬢様じゃない。なんで帝国に？」

「冒険者に憧れて飛び出して来たんですよ。」

実家は兄が継いでいますし、姉も2人いますから、わたしは比較的自由に育つたんです」

ユウの故郷の話はなかなか興味深いわね。

異界から来た勇者が作った国か。

もし機会があれば行ってみるのも面白いかも知れないわ。

その後はエルザやティードの故郷の話聞いた。

エルザは帝国の属国の出身、ティードは西大陸の出身らしい。

私も多少オブラートに包みながら王国の話をする。

ユウは商業ギルド評議員としての情報網があるだろうし、エルザも上級冒険者として、ティードはイブリス教の枢機卿として、それぞれ情報網を持っているだろう。

私の出自も知っているのかも知れないが、一応誤魔化しておく。

気兼ね無く過ごす友人達とのひと時は、今までに感じた事のない楽しい時間だった。

なるほど、ミレイはコレを伝えたかったのだろう。

これからも偶に彼女らと過ごすのもわるくないと思う。

## 人々の日常：来たる嵐の前の一幕

女子会で楽しい時間を過ごしてから数日、私は屋敷の前で馬車に積み込む荷物を確認していた。

これからアクアシルクの加工に必要な素材の産地へ取引に行くのだ。

今回の目的地は荒野に点在する都市国家の1つ、『リースベール』だ。

独立を保っていると言えれば聞こえは良いが、実情は利益が無いので大国に併合されなかつた為、自立するしか無かつた貧しい都市だ。特に立地が悪い。

都市国家が有る荒野は、過酷な環境に加え、強力な魔物が巣くっている危険な場所だ。

「エリーさん、こっちは準備出来たツスよ」

「ええ、こちらでももう終わるわ」

大きなバックパックを背負ったティードガがやって来た。

今回の旅にはティードガも同行する予定だ。

先日の女子会で近々リースベールに行く、と言ったところ、ティードガが同行したいと言いだしたのだ。

なんでも、次は荒野の都市国家を廻るつもりだったらしい。

その為、リースベールまで共に向かい、向こうで別れる事になったのだ。

「ママ」

「アリス、行ってくるわね。」

「祝祭までには帰るから、良い子にしているのよ。」

「うん」

「ルノアとミーシャもアリスをお願いね」

「はい」

「畏まりました、エリー様」

今回の旅は危険なのでアリス達は留守番だ。

私に同行するのはミレイとバル、それとティードだけだ。

私が幌馬車に乗り込むと、御者台のバルが馬に鞭を入れ、門に向けてゆっくと進み始めた。

私は馬車の後ろから手を振るアリスに手を振り返すのだった。

上等なソファに腰を下ろした男は、高価なワインを口に運びながら傍に跪く女に声を掛ける。

「蠍、魔導義手の調子はどうだ？」

「はっ！殿下から賜りましたこの義手は素晴らしく、自らの腕よりも調子が良く感じます」

「はっはっは、世辞が上手くなったな。」

「人形」の方はどうだ？」

「はい、低ランクの魔物は既に数が揃っております。」

高ランクの魔物の数は以前程では有りませんが、数体の竜種や変



異種をタイムしております」

「そうか、では任務を与える。」

ハルドリア王国に居る烏と合流して指揮下に入れ」

「はっ！」

蠍が退室した後、男はテーブルの上に盛られた肴からチーズを取り上げて味わいながら口を開く。

「いやはや、慌ただしくて済まない。」

もう直ぐ帝国の祝祭があるので、私も少しちよっかいを掛けよう  
と思っいてね」

男は、それらの行動をじっと見ていた正面に座るもう1人の男に、  
微笑みかけながらそう言った。

「くだらん。貴様らの行動に興味は無い」

「はっはっは、勿論理解しているとも。」

我々はお互いの目的の為に相互を利用すればそれで良い、そう  
言う事だろっ？アルトロス卿」

「ふん」

男の正面に座る青白い肌、黒い眼球に白い瞳を持つ伯爵二位の悪  
魔、アルトロス・イザリースは男の笑顔を見て、不機嫌を隠そうと  
もしなかった。

「エイワス」

アデルは与えた執務室で任せた仕事を、次から次へと片付けてゆく優男に声を掛けた。

「ん？これはアデル殿下。

ご機嫌麗しゆう御座います。

本日は殿下の美しい御尊顔を拝謁でき、このエイワス、王国一の……」

「はあ、そう言うのは良いと言っているだろう」

「ふむ、では何か御用でしょうか？」

エイワスは慇懃な動作でアデルに椅子を勧めながら尋ねた。

アデルは胡散臭い物を見る様な瞳でエイワスを警戒しながら椅子に座ると、懐から手紙を取り出してエイワスに差し出した。

「コレは……」

「招待状だよ。帝国の祝祭の。

君には王太子の代理として帝国の祝祭に行つて貰いたいんだ」

「おや、私で宜しいので？」

「本当ならボクが行きたい所だけだね。

でも今、城を空ける事は出来ない。

だから君に任せるよ」

アデルは諦めた様に肩をすくめて見せた。

「………目的は分かっているよね？」

「ええ、お任せ下さい」

「クソっ！」

フリードは自室の机に拳を叩きつけた。

アデルが王太子の仕事を熟す様になってからはフリードは実質、軟禁状態であった。

「あのクソアマがあ！どいつもこいつもっ！」

酒瓶が転がる広い室内を落ち着かずウロウロと歩きながらフリードは誰にもなく怒りを吐き出す。

部屋の周囲にはアデルの息の掛かった者達が監視しているので抜け出す事も出来ない。

更にアデルはシルビアがエリザベートを貶めた証拠を集めているらしい。

おそらくそうやって自分から王太子の地位を奪う為のでっち上げの小細工をしているのだろっ、とフリードは考えていた。

「クソ！クソ！このままでは俺もシルビアも……」

「あらあら、随分と荒れているのね」

突然の声に驚いたフリードは、声のした方に振り向いた。

すると、先程まで誰も居なかった筈の場所に、闇に溶ける様な黒いドレスを身につけた女が居た。

娼婦か踊り子の様な妖艶な衣装に反して、喪に服している様な黒いベールで顔を隠した怪しい女だ。

「な、なんだ、お前は 何処から入った！」

「ふふ、そんなに慌てないで欲しいわ」

「だ、黙れ！おい、衛兵！何をしている、侵入者だ！」

フリードが部屋の入り口に向かって叫ぶが、衛兵が駆け込んで来る様子は無い。

「無駄よ、誰も来ないわ」

その言葉はフリードの直ぐ後ろから聞こえた。

部屋の端にいた筈の女は、いつの間にかフリードの背後に立っていた。

女がフリードの肩に手を置くと、フリードの身体は動かなくなる。訳の分からない状況に恐怖するフリードの耳に口を寄せた女が囁く様に告げる。

「ねえ、王子。

今の状況から抜け出したくはない？」

「……なに？」

フリードの反応に女は笑みを深めるが、体が動かないフリードからは見る事は出来なかった。

荒野に有る小国家群の中心地であるリースベールの魔導鉄道の駅前の広場のベンチで公国の青年、ハルトが疲れた顔で正面の噴水に

視線を向けていた。

恋人のイズと共に旅行で訪れたリースベールで観光地を回った後、イズの買物に付き合わされて疲れ切ったハルトはベンチで休息する事にしたのだ。

因みにイズは大陸でも有数の歴史を持つ喫茶店で、伝統の人気菓子フェクチを購入する為嬉々として行列に並んでいる。

「はあ、イズは元気だよなあ」

目の前の噴水の中心には竜種に立ち向かう4人の人物の銅像がある。

かつて、リースベールに巢食っていた竜種を討伐し、荒野に交易路を切り拓いて当時、貧しい都市国家だった国々に繁栄を齎した英雄の銅像らしい。

竜種の正面に立ち、剣と盾を構える青年と、青年に並び槍を向ける青年、その後ろで弓を構える女性の3人はAランク冒険者パーティ《竜の番い》だろう。

そして3人の後ろから竜種に杖を向ける、魔女のトンがり帽子を被った魔法使いは、《荒野の商人》ルノア・カールトンに違いない。

公国で有名な《黄昏の魔女》の弟子だったとされ、ハルトも学生の時に歴史の授業で習った事が有る。

「ごめん、お待たせ」

「おお、買ったのか？」

「うん」

ぼー、と銅像を見ていると、フェクチを購入したイズが戻って来た。

イズと少し話していると、噴水の前でブロンドの髪に羽を象った髪飾りを着けたエルフの吟遊詩人が唄い始めた。

有名な唄や歴史的な事件を題材にした唄などを美しい声で歌い上げる。

特に冒険者が病を治す薬の材料を求めてダンジョンに挑む唄は、初めて聴いたがなかなかワクワクする内容だった。

歌い終わり、拍手する人々に頭を下げるエルフの吟遊詩人に近づき、彼女が置いていた帽子にコインを入れる。

「ありがとうございます」

「良い声だったよ」

「素敵でした」

「えへへ、照れますね」

ローゼと名乗ったエルフの吟遊詩人は照れた様に笑った。

お世辞では無く、素人考えであるが、彼女なら芸能界でも十分通用すると思う。

「あのダンジョンの話は初めて聴いたな」

「アレは私のお婆ちゃんが駆け出しの頃に冒険者から聞いたお話を唄にした物なんです」

「へえ、じゃあ実話なんだ」

「らしいですね。昔帝国で数百人の死者が出た病が有ったらしいの

ですが、その時の話らしいですよ」

10分程談笑した後、ローゼと別れたハルトとイズは、魔導列車に乗り込むと、公国への帰路に着いたのだった。

人々の日常・来たる嵐の前の一幕（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

（ ． ． ． ）以下お知らせです。

クライマックスに向けてプロットを詰める為、少々時間を頂きたい  
と思います。

次章更新は1週間後、3月21日の予定です。



## リースベールの商談

帝都よりも強い日差しに、少し目を細めて燦々と降り注ぐ陽光を浴びる。

荒野に有る都市国家リースベールに到着した私は、リースベールの国王（実質的には地方領主程度の影響力だが）と、この過酷な土地で育つナダマイル草の栽培と、買取に関する契約を結ぶ事に成功した。

ほとんど外貨を得る方法が無かったリースベールなので、特に揉める事もなく契約を結ぶ事ができた。

むしろ感謝されたくらいだ。

リースベールまでの道中は強力な魔物が多く出たけれど、私達の戦力なら苦戦する方が難しい。

討伐した魔物の肉や素材を手土産（決して賄賂では無いわよ）としてリースベール王へと献上したのも大きいだろう。

リースベールの王館（私の屋敷より少し大きいくらいの屋敷だった）を出た私は、ミレイと共にリースベールの中央通りを宿に向けて歩いて行く。

リースベールの街並みは、田舎の少し発展した街の様な印象だ。帝都の様な活気は無いが、穏やかな空気が流れている。

「これでこの街での用事は終わりね」

「そうですね。市場調査も終わりましたし、帝国の祝祭も近いです

し、そろそろ戻りますか？」

「ええ、明日にでも出発しましょう」

宿に戻って来ると、馬の世話をしていたバアルが宿の裏の厩から正面へと戻って来る所だった。

「おう、お嬢。交渉はもう終わったのか？」

「ええ、問題無く。」

今後の取引はこちらからリースベールに人を派遣して行う事になるから、その辺りはバアルにお願いするわ」

「あいよ」

リースベールの周囲は強力な魔物が多く生息しているので、帝都まで運んで貰うのは難しいのだ。

だからこちらから取引の為の人を送る必要が有るのだが、リースベールに向かう商隊に塩や小麦などの物資を輸送する事で、ナダマイル草を非常に安く引き取れる事になったのは良い知らせだろう。

実際の取引時には、ある程度商路が確立するまではバアルに商隊を率いて貰う事になると思う。

「お帰りツス、エリーさん」

「ただいま」

バアルやミレイと共に宿に入ると、カウンターの椅子に座るティードがこちらに顔を向けていた。

食事を終えたばかりの様だ。

荷物を纏める為、部屋に戻るミレイとバアルを見送り、ティードの隣に腰掛け宿の女将さんに果実水を注文する。

サツパリとした柑橘類の果汁が加えられた果実水が、少々埃っぽ  
い外を歩いて来た私の喉を潤してくれた。

「ティーダ、私達は明日には帝都に向けて出発するけど、貴女はど  
うするの？」

「そうッスね。私は次の都市国家に向かう事にするッス」

「そう、じゃあしばらく会えないわね」

「まあ、いくつか都市国家を回った後、帝都に戻るッスから」

「でも意外よ。もう直ぐ祝祭でしょ？」

「私だって祝祭に参加したいッスよ〜！」

でも、大神殿から荒野の都市国家を廻れって指令書が届いたんッ  
スよ。

酷いッスよね。

絶対わざと祝祭の時期に重ねたに違いないッス！」

どうやらチョコレート菓子だけでは、今までのイタズラ的な報告  
書をチャラに出来なかつた様だ。

その夜は、祝祭に参加出来ず教皇の悪口を言いながらお酒を飲む  
ティーダに付き合った。

翌日、宿の前でティーダと別れた私達は帝都を目指して馬車を走  
らせ始めた。

ティーダは別の都市国家へ向かう商隊が居たら同行するらしい。  
荒野の都市国家群を廻る商隊は少ないが、治癒魔法を使えるテイ  
ーダなら引く手数多だろう。

バルが手綱を握る馬車は、素朴な街並みとは不釣り合いな大きく頑丈な防壁の門を抜け、帝都に向けて道なき荒野を進み始めた。

## 荒野での遭遇

「ゴゴゴゴッ！」

頭上から振り下ろされる岩石を削って作られた棍棒を躲す。

フリーゲルの再生が完了していれば、それを振るう腕ごと断ち斬る所だが、それにはもう少し時間が掛かる。

「ふっ！【剛撃】」

私が躲した棍棒を足場に駆け上がったバルが、全身が岩石で出来た巨大なロックゴーレムに拳を叩き込んだ。

スキルによって強化された一撃はロックゴーレムを構成する岩石を砕き、中心に存在していた核を露出させた。

【剛撃】は魔力で拳や蹴り脚を強化する単純なスキルだ。

しかし、単純で有るが故にそのポテンシャルには天井が無く、鍛え上げる事で素手で鋼鉄をも砕ける威力となる。

バルの【剛撃】は頑強なロックゴーレムの岩石を易々と砕いたのだ。

ロックゴーレムは特殊な鉱石が魔力によって変質した核によって動いている。

生物と言うよりも自然現象に近い魔物だ。

その行動原理は、生物を襲い殺す事で、死体から魔力を奪おうとするだけで知能などは存在しない。

地面に転がったロックゴーレムの核に周囲の岩石が集まり再生しようとするが、それよりも早く私の剣が核を斬り砕いた。

「こいつで最後かしら？」

「みてえだな」

私達は周囲を見回して、他のロックゴーレムが居ないか気配を探る。

此処はリースベールから帝都に向かう途中の岩石地帯だ。

乾燥した荒野の一角に在り、魔力の強い土地柄か、ゴーレムやサンドゴーストの様な自然発生系の魔物が多く存在している。

そんな場所で数体のロックゴーレムに襲われた私達は、ミレイに馬車を任せて、私とバルの2人でロックゴーレムを撃退した。

「少し場所を移動して休息にしましょう」

「分かりました」

ミレイが守っていた馬車には傷などは無く、馬も無事だ。

戦闘が有った場所から少し進み、バルに周囲の安全を確認して貰っている間に昼食の用意を始める。

辺りに散らばる石で石窯を組み、鍋を火にかけ、乾燥野菜や燻製肉を放り込み、塩と多少のスパイスで味を整えた。

ついでに火のそばでパンを温めておく。

同時にミレイは、私が魔法で創り出した水を沸かしてお茶を用意している。

スープとパンで手早く食事を済ませた私達は、食後のお茶を飲みながら地図を広げていた。

「3分の1くらいは進んだわね」

「はい、往路と復路でルートを変えましたが、何方もあまり商路として適したルートとは言えませんね」

「そうだな。何処もかしこも魔物だらけだ。

それもCランク以上の強力な魔物がゴロゴロ居やがる。

その上、ロックゴーレムや竜種みてえなものも出るってんだから、戦力の乏しい商人なんかではとてもじゃないが交易なんて出来ねえだろうな」

「バアルの見解は当然ね。

ロックゴーレムはBランク、強力な物理攻撃が出来なければ逃げるしか無い難敵だ。

「交易路はいずれ考えないとダメね」

今後の展開はさておき、この後は岩場を抜けて、Bランクの魔物であるロックバードの生息地らしい溪谷を越えなければ行けない。

リースベールに向かう時は毒の沼地や、一体一体はDランク程度だが、群れの討伐ランクはAランクに達する事も有るアーミアントの巣の側を通る事になった。

溪谷のルートを確認し、休息の跡を片付けようと立ち上がった時だ。岩場の先から異様な気配を感じ、3人同時に視線を向けた。

すると、岩場の隙間からこちらに猛スピードで走って来る馬車が見えた。

「おいおい……」

「不味いですね」

それを見たバルとミレイは顔を顰める。

「バル！ミレイ！戦闘用意！」

私は傍に置いていた細剣に手を伸ばした。

こちらに向かって来る馬車は魔物に追われていた。

それもただの魔物では無い。

亜竜種と呼ばれる魔物の一種、ワイバーンの群れに追われていたのだ。



## v s ワイバーン

「揺らめく虚像よ 我らを包め【幻影】」  
ミラーージュ

ミレイが光属性魔法を使い馬車を幻影の中に隠す。

ワイバーンは亜竜種の中では視覚に頼る所が大きい魔物だ。

近くで臭いを探られれば不味いけれど、遠目になら誤魔化せるだろう。

馬をミレイに隠して貰い、私とバアルは岩の上に立ち、威嚇の為に抑えていた魔力を解放した。

すると、馬車を操っていた少年が私達に気付き、馬車の中に声を掛ける様な仕草をすると、馬車の針路を90度変えて私達から離れようとした。

馬車を追っていたワイバーンも、方向転換で速度が落ちた馬車に、好機と感じたのか速度を上げる。

「今のワイバーンの動きは不自然だな」

「そうね。群れから逸れてこちらに向かって来ているのは2匹だけあのタイミングなら群れの半数はこちらに向かって来てもおかしくはない筈よ」

「こりゃあ、多分『匂い袋』を使ったな」

「ええ、思ったよりもまとまな連中の様ね」

追って来る魔物を他人になすり付ける行為は、場合によっては犯罪になる。

それでも生き残る為、他人を犠牲にする事を躊躇わない者も少な

くない。

例えば、あのまま馬車を走らせ、私達の隣を通り過ぎる時に、魔物を惹き寄せる匂い袋を投げ捨てれば、ワイバーンの群れを全て私達に押し付ける事も出来ただろう。

だが、それをせずに針路を変え、匂い袋でワイバーンを自分達の方に誘うとはね。

「ワイバーンは本来自分達のテリトリーから遠くに離れる事はねえ。故に、襲われたなら全力でワイバーンのテリトリーから離れるのがセオリーだ」

「そうね。今回はその進路上に私達が居たのが不運だったわね」

私とバルが話している間にも、匂い袋に誘われなかった2体のワイバーンが此方へと迫っていた。

「エリー様、いかが致しますか？」

馬を隠れさせたミレイが私の隣に立つ。

「私が1体、バルとミレイで1体で」

「畏まりました」

「了解」

私は剣を抜くとワイバーンに向かって走る。

「アイス・バレット【氷弾】」

撃ち出した氷の礫は、亜竜種の強靱な鱗に阻まれてダメージは与

えられていない。

だが、飛来する礫を鬱陶しく思ったのか、ワイバーンの内の1体は身体を捻り、空中で体勢を変えて私に向かって急降下して来た。

「【氷剣】」

剣に纏わせていた魔力を冷気に変えて迎え撃つ。

私を驚掴みにしようとするワイバーンの爪を剣で受け止める。それと同時に、冷気がワイバーンを襲う。

「グギア」

驚き飛びあがろうとするワイバーンだが、冷気によってその動きは鈍い。

ワイバーンの鱗は硬いが、翼の付け根や顎など、可動部は柔らかい。

そこを狙い剣を突き出す。

私の剣は、狙い通りにワイバーンの翼の付け根に突き刺さる。

そこで更に魔力を込め、体内から凍結させると、物の数秒でワイバーンは息絶えた。

もう1体のワイバーンはと言うと……。

「【鎚撃】」

向かって来るワイバーンに飛びかかる様に跳躍したバアルが、スキルを使った踵落としを脳天に叩き込むと、脳震盪を起こしてワイバーンが地上に墜落する。

「【光の拘束】」  
ライト・バインド

すかさずミレイが光の鎖で地面へと縛り付け、バアルが再び蹴りを放ち、ワイバーンの頭蓋を砕いた。

「2人とも怪我は無い？」

「はい」

「問題ねえよ」

2人も危なげなくワイバーンを討伐した様ね。

「さて……」

私は5体のワイバーンに襲われている馬車へと目を向ける。

「やはり助けに行くべきくしら？」

此処で逃げたとしても罪にはならないし、助ける義理は無い。

だけれど、相手はこちらに被害を出さない様に自らワイバーンを惹きつける為に匂い袋を使った。

誠実な対応と言えるだろう。

此処で見捨てるのは少々寝覚めが悪い。

私は、襲われている馬車を助けに行こうとするが、それよりも早く馬車から飛び出した2つの影が、今にも馬車を掴み上げようとしていたワイバーンの首を刎ね、もう1体のワイバーンの翼を斬り落とした。

「……………助けは要らねえんじゃないか？」

「同意します」

ふむ、やはりこの危険な荒野を旅している者達がそんなに弱い筈はないか。

取り敢えず、事態を静観する事にした私達は、彼らが危険になれば介入出来る体勢で3体のワイバーンと対峙する2人を見守るのだった。

## 砂漠の商人

馬車から飛び出して来たのは、2人の男だった。

ワイバーンの首を綺麗に切断したのは、三日月の様に湾曲したシヤムシールを手にした色黒の男。

そしてワイバーンの翼を切ったハルバードを担いだ鉄仮面の男だ。鉄仮面の男は冒険者風の身軽な革鎧姿なのだけれど、何故か顔はフルフェイスの鉄仮面で隠されている。

鉄仮面の男は翼を切られてもがくワイバーンにトドメを刺し、色黒の男の横に並ぶ。

すると、ワイバーンが2人を目掛けて急降下して来た。

鉄仮面の男がワイバーンの接近に合わせてハルバードを振るい爪を受け止めると、その背中を蹴って色黒の男が飛び上がり、シヤムシールでワイバーンの首を綺麗に斬り落とす。

「やるな」

「そうね。亜竜種の鱗を物ともせず斬り割いている腕もそうだけど、あのシヤムシールとハルバードもかなりの業物よ」

私がバアルと話している間にも彼らの戦いは続いている。

2人の連携は巧妙で、瞬く間にワイバーンを討伐して行った。

「終わった様ね」

ワイバーンを討伐した彼らは私達の方へとやって来る。

「やあ、この度は巻き込んでしまつて申し訳ない」

色黒の男が私達に声を掛けた。

「気にしなくて良いわ。事故の様な物よ」

「そう言つて貰えて助かるよ。」

ワイバーンの縄張りの近くを通つてしまつた様でね。

倒しても素材を運ぶ事なんて出来ないし、逃げようとしていたんだ。

まさか、この広い荒野で人と鉢合わせるなんて思わなくてね」

「こちらも特に怪我は無かつたからもう良いわよ」

そう返しながらも、私は男の姿を見て少しだけ驚いた。

色黒の肌は砂漠の先にある国、ナイル王国の民に多いが、そこまで珍しい訳ではない。

私が驚いたのは彼が混合種だつたからだ。

彼の耳はハーフエルフの様に少し尖つており、右側のこめかみには魔族の様な角、更に狼人族の尾も持つていた。

通常、多民族との間に子を残せるのは人族だけだ。

エルフ族とドワーフ族の間には子供は生まれませんが、エルフ族と人族、ドワーフ族と人族の間では子供を作ることが出来る。

そして異種族の間に生まれた子供は、両親のどちらかの種族か、ハーフ種族となるのだ。

では混合種とは何か。

それは、異種族の親から生まれた人族の子供が、別の異種族と子

をなした時にごく稀に生まれる複数の亜人種の特徴を持った人間だ。

総じて魔力や身体能力に秀で易く、歴史に名を残した英雄にも混合種で有ったとされる人物も多い。

特に彼の様な3種族以上の特徴を持つ者はそうそう居ない筈だ。

「おっと、名乗りもせずに申し訳ない。

俺はイーグレット・バーチ。バーチ商会と言う小さな商会を経営している」

バーチ商会……聞いた事は無いわね。

風貌からナイル王国の商会かしら？

イーグレットは隣に立つ鉄仮面の男に視線を向ける。

「コイツはグレン。俺の幼馴染で護衛をして貰っているんだ。

グレンは以前、魔物に大怪我を負わされてね。その時の傷が原因で声を出せなくなっただ。

いつも暑苦しい鉄仮面で傷を隠している。

俺は気にする事は無いと言っているんだが、「こんな大怪我は恥以外の何物でも無い」って頑なに鉄仮面を取らないんだ」

イーグレットは更に近くに馬車を停めて降りて来た少年の背中を押して私達の前に出した。

「こっちはオウル。

見ての通り奴隷だが、俺の大切な仲間だ」

オウルと呼ばれた少年はペコッと頭を下げた。



なるほど、確かに首の辺りに奴隷の魔法刻印が見える。  
しかし、身に着けている衣服は旅用のしつかりとした物で、顔色も良い。

「ご紹介に与りました<sup>あずか</sup>、オウルと申します。この度は大変ご迷惑をお掛け致しました」

随分と出来た子だった。

私はオウルにも気にしない様に伝え、こちらも自己紹介をする。名乗られたならば、こちらも名乗るのが礼儀と言うものだ。

「私はエリー・レイス。トレートル商会の商会長をしているわ。こつちの大男がバアル、護衛よ。」

そして彼女はミレイ、私の従者兼、商会の幹部をして貰っているわ」

バアルとミレイも軽く挨拶を交わす。

「トレートル商会」

イーグレットはトレートル商会の名を聞くと少し目を丸くした。

「今、帝都で話題の商会だよね。」

たしか、化粧品やスイーツで貴族階級の御婦人や御令嬢を虜にしているとか、それに最近ではアクアシルクの生産に成功したと聞いたよ？」

「え、ええ、そうね」

イーグレットの勢いに少し驚きながら肯定すると、彼も自分が前のめりになり過ぎていた事に気付いたのか、居住まいを正して謝罪

を口にした。

「おっと、済まない。まさか、こんな荒野の真ん中で大商会の商会長と出会うなんて驚いてしまつてね」

「随分と詳しいのね」

「ああ、俺の拠点はナイル王国だが、荒野の都市国家群を廻ったり、帝都に赴く事も多いからな。

噂は耳にしていたんだ。

祝祭に合わせて帝都に向かう所だね、その時に噂のチョコレートと言つ菓子を食べてみたいと思つていたんだ。

ナイル王国で懇意にしている貴族から大物貴族のパーティで供されたと聞いていてね」

「へえ、もうナイル王国にまで伝わっていたのね」

うゝむ、他国の貴族の間でも噂になつているのか。

これは良い話を聞いたわね。

「それにアクアシルクも話題だね。

ナイル王国はお国柄、年中気温が高くなるんだ。そこで、アクアシルクで作られたストールが王妃殿下に献上されて、商人の間で話題になつていたんだよ」

「なるほど、アクアシルクを錬金術師が加工すれば、半永久的に周囲を程よく冷却出来るストールを作れるわね」

これは盲点だった。

私の育つたハルドリア王国も、今住んでいるユーティア帝国も夏や冬は有るが、そこまで劇的に気温は変わらない。

その為、アクアシルクを錬金術で加工するなら耐熱性の高い防具としてしか考えて居なかつた。

「……………これは……………そうね……………いずれはナイル王国や南大陸向けの高級品として……………」

「エリー様……………エリー様」

「……………ん？」

「イーグレット殿が困っていますよ」

「あら？」

顔を向けるとイーグレットが苦笑いを浮かべていた。

しまった、つい思考に没頭していた。

幼い頃はよくこうして自分の世界に入ってしまった物だ。

最近では気をつけていたのだけれど。

「ごめんなさいね。つい、新しい商売のタネについて考え込んでしまっ……………」

「はっはっは、流石は大商人だ。」

是非、俺も1枚噛ませて欲しいな」

イーグレットもなかなか強かった。

## 旅は道連れ

岩場から少し進み、溪谷の手前で早めの野営をする事にした。

イーグレット達は祝祭に参加する為に帝都を目指していたらしいので、同行する事になった。

彼らの強さは先程の戦闘で目にしていたし、これから向かう溪谷に生息するロックバードはBランクとはいえ、10体から50体程の群れを作り集団で獲物を狙う危険な魔物だ。

強者が増える分には歓迎だ。

「美味しいな、荒野を旅していてこんなに美味しい食事でありつけるとは思わなかったよ」

イーグレットがキザな笑みを浮かべ私が作ったスープを口へ運びながらそう言う。

ワイバーンの骨で出汁を取り、干しキノコと乾燥野菜を加えたスープだ。

ワイバーンのもも肉も香草で焼いている。  
手はかけてないが、豪華な夕食だ。

「大袈裟ね。こんな適当な料理で」

「いやいや、こっちは男所帯だからな。

食事なんて、塩漬け肉を齧りながら堅パンをお湯で流し込む程度さ」

「ボク達、料理出来ませんからね」

「がはっはっは、坊主。これからの時代、男でも料理くらい出来ねえとダメだぜ」

バルがオウルの頭をワシワシと乱暴に撫でながら笑う。

ああ見えてバルはそれなりに料理が出来る。

街中の食堂の様な料理では無いが、野営料理ならお手の物だ。

「それにワイバーンの素材の件も感謝しているよ」

私達が討伐した2体とイーグレット達が討伐した5体のワイバーンは、現在私の【強欲の魔導書】の中に収納されている。

私が素材としてこの場で買い取ったのだ。

「それにしても、本当に彼だけに見張りを任せて良かったのでしょうか？」

ミレイがふと気になった様で、背の高い岩の上で周囲を警戒しているグレンに目を向けた。

ミレイの視線を追ったイーグレットは気にするな、と肩をすくめ。

「ああ、グレンは人前で食事を取らないからね」

鉄仮面で顔の傷を隠しているグレンは、私達が食事をしている間の見張りを買って出てくれた。

彼はこの後、1人で食事を取る事になる。

少し申し訳ないと思うのだけれど、イーグレットが言うには、グレンは普段から誰かと食事をする事は無いそうだ。

その後は話もそこそこに、早めに休む事にした。

明日はロックバードの縄張りを突っ切らなくてはいけないからね。

翌日、明け方に見張りを交代した私とバアルは、皆が起きる前に朝食の用意をしておく。

見張りをバアルに任せた私は、昨夜のスープの残りにパンとチーズを加えてパン粥を作り、紅茶を淹れる。

そうしていると、皆が起き出して来る。

パン粥と紅茶で食事を済ませ、食休みを挟んでから、溪谷へ脚を踏み入れた。

溪谷はそれなりの幅があり、馬車が通る事に苦勞する事はなかったけれど、そこから中から視線を感じて居心地が悪かった。

既に私達はロックバードの群れに捕捉されている様で、頭上を巨大な影が何度も通り過ぎて行った。

ロックバードの偵察だろう。

溪谷に入ってから2時間程経つと、頭上をロックバードが引つ切りなしに飛び交う様になった。

「こりゃあそろそろ来るか」

「ええ、段々と道が広くなって来たわ。」

この辺りがロックバードの狩場なのでしょうね」

「エリー様、この先に広場の様になっている場所があります」

手綱を握るミレイの言葉で、私はミレイの後ろから前方を確認すると、確かに少し先の道が広がっている。

あそこならロックバードが数を生かして襲いかかるのに適した地形だ。

私は馬車の後ろから、すぐ後ろをついて来ているオウルが御するイーグレットの馬車に事前に決めていたハンドサインを送る。

それを見たオウルは頷くと、馬車の中のイーグレットとグレンに声を掛けた。

私も剣を手にロックバードとの戦闘に備えるのだった。

## 溪谷の戦い

事前の取り決め通り、馬車のスピードを上げて広場へと突入した。それと同時にバル、イーグレットが飛び降りて殿とした馬車の後ろを追いかけ、走り出す。

2人ともスキルで身体強化を施ほどこしており、全速力の馬車にも軽々と並走していた。

私は手綱を握るミレイのすぐ後ろ、御者台の僅かなスペースに立ち、空からの襲撃を警戒している。

後続のイーグレットの馬車でも同じ様にグレンがハルバードを構えている筈だ。

「来るぞ！」

バルの声が溪谷に響くのと同時に、数多の影が私達を目掛けて滑空して来るのが目に入った。

ロックバードは、体の一部が岩石で出来た鳥の魔物だ。

その見た目通り、高い防御力を持つ。

しかし、その重量故に小回りが利きづらいつ言つ弱点も有った。

1体だけなら余裕で討伐も可能なのだが、ロックバードは群れで狩りをする。

その防御力と質量を生かして獲物に体当たりを喰らわせるのだ。

「アイス・ランス【氷槍】」

牽制で魔法を撃ってみるが、先頭の1体に当たっただけで氷の槍



は碎けてしまう。

衝撃でダメージを与え、軌道を変える事は出来ているが、致命傷には至らない。

直ぐに別のロックバードが入れ替わるが、それをグレンの振るったハルバードから放たれた風の刃が両断する。

更に先頭のロックバードを仕留めた風の刃は無数の小さな刃に分裂し、背後のロックバードの群れを切り裂いた。

刃は小さく、倒せたのは当たりどころの良かった1体だけだが、群れ全体のスピードがやや落ちる。

グレンの持つ『風の牙』と言うハルバードは《寓話級》<sup>ファブル</sup>の魔法武器らしい。

更にイーグレットのシャムシールも《民話級》<sup>フォークロア</sup>の魔法武器だ。

共闘するにあたり、私達はお互いの手の内を交換していた。

勿論、秘匿する所は秘匿しているが、それなりに戦闘力は伝えて、何度か連携の訓練もした。

その時に聞いた話だが、イーグレットは神器まで使えるそうだ。

彼はナイル王国の貴族の生まれで、幼い頃から英才教育を受けたらしい。

だが妾胎で5男、兄も優秀。故に居場所が無かったイーグレットはグレンと共に冒険者として、貴族籍を抜け家を出たそうだ。

その後はナイル王国のダンジョンで幸運にも財宝を手に入れ、そのお金を元に商会を作ったのだと言う。

グレンのハルバードはその財宝の1つで、イーグレットのシャムシールは大金を積んで購入したそうだ。

私も神器や魔法の事は伝えている。

勿論【強欲の魔導書】や【暴食の魔導書】など伝えても問題無い事だけだ。

【強欲の魔導書】や【暴食の魔導書】に関しては帝都の情報屋に金貨を握らせれば手に入る情報だ。

【怠惰の魔導書】や【色欲の魔導書】などの情報は勿論出さない。

さて、グレンが時間を稼いでくれている間に詠唱を完成させる。

「凍てつく名槍 輝く氷雨 白き獣は王墓に座し 万軍を喰いて凍土を築く 我が名は氷狼」

ブリザード・ランス  
フィニッシュ  
【白銀の氷槍】

普段は詠唱破棄や短文詠唱で使っている上級魔法の完全詠唱だ。

私が展開した魔法陣から無数の氷柱がロックバードの群れへと放たれる。

小さな氷柱だが、そこに込められた魔力はかなりの物だ。

氷柱が命中したロックバードは一瞬で凍りつき砕け散る。

この一撃で群れの半数は落ちただろう。

更に魔法を避け、馬車の横腹を狙うロックバードもいたがバアルの拳とイーグレットのシャムシールがそれらを防ぐ。

大きく数を減らしたロックバードは、上空で隊列を整えると再び馬車に向かって突っ込んで来た。

馬車に迫るロックバードだが、イーグレットが馬車を足場にその

正面に跳び上がった。

「神器【クレセント・ムーン三日月の夜】」

イーグレットの身体から魔力が溢れ、瞬時に右手へと凝縮する。

その手に物質化されたのは左手に持つ《フォークロア民話級》の魔法武器と同じシャムシールだった。

イーグレットは両手のシャムシールを交差させて構え、魔力を込めて十字に振るうと斬撃が空を走り、10体以上のロックバードを纏めて斬り捨てた。

すると残った数体のロックバードは逃げる様に高度を上げ、しばらくこちらを窺った後、逃げ去って行った。

「追い払ったかな？」

「取り敢えずはな」

「別の群れに襲われる前に渓谷を抜けましょう」

バアルとイーグレットを馬車に乗せ、私達は馬車を走らせるのだ  
った。

## 帝都への帰還

溪谷を抜けた後は直ぐに帝国領へと入り、それからは魔物の襲撃は激減した。

この辺りは帝国の直轄領なので、騎士団が演習がてら定期的に魔物の討伐を行っている地域だ。

街道に出て数日、野营地から朝早くに出発し、昼前にようやく遠目に帝都の防壁が見えて来た。

焦って走らせても仕方がないので、昼の大休止を取り、夕方と言うには少し早い時間に帝国へと帰り着く事が出来た。

帝都の門には多くの旅人が並んでいるが、検閲をしている衛兵の数も多いのでそこまで待たされる事なく列は進んだ。

私の番になり、商業ギルドのギルドカードを衛兵に手渡し確認して貰う。

私のギルドカードを見た衛兵は少し目を見開く。

多分、ギルドカードに記されている特別認可商人の記述に驚いたのだらう。

帝都でも数人、帝国全土でも20人と居ないからね。

その肩書きのお陰もあり、私のチェックは簡単な物だけで直ぐに終わる。

次のイーグレット達は外国からの行商なので少々嚴重に調べられている。

まあ、それは仕方ない事か。

「すまない、待たせてしまったね」

「仕方ないわ。他国の人間なんだからそれなりに調べられるわよ」

彼らには帝都で宿を紹介する約束をしているのでもう暫く同行する事になる。

その後、私の商会と取引のある宿を紹介し、イーグレット達と別れた。

彼らとはアクアシルクの件で商談をする予定なので数日後にまた会う事になるだろう。

トレートル商会としても、ナイル王国での販路を持つバーチ商会とのツテは有り難い。

イーグレットは貴族出身である為、そっちの方にも顔が利くらしい。

トレートル商会で扱う化粧品やチョコレート、アクアシルクなどは上流階級をターゲットにした高級品なので、貴族に顔が利くのも都合が良い。

少々寄り道をしてしまったが、まだ昼間と言える時間に屋敷へと戻って来られた。

馬車をバアルに任せてミレイと共に屋敷の玄関ホールへと入った。

「ママ〜!」

帰ってきた馬車が見えたのか、2階からの階段からアリスが走っ

て来た。

「お帰りなさい」

「ただいま、アリス」

飛びついて来たアリスを受け止めて頭を撫でる。

そうしていると、アリスを追う様にルノアが降りて来る。

「お帰りなさい。エリー会長、ミレイさん」

「ただいま、ルノア。何か問題は無かった？」

「その……お仕事には問題は無かったんですが……」

困った様に眉根を寄せるルノアによると、私に客が来ているそう  
だ。

今まで不在だった私が帰った途端に来客か。

おそらく人を使わずと門を張っていたのだろう。

「来客はどんな人なの？」

「えっと……多分、貴族様だと思います。」

今は応接室でミーシャが対応しています」

貴族？

ミレイと顔を見合わせた私はルノアに来客の名前を聞いて、苦虫  
を噛み潰した気分になった。

応接室の扉を少々乱暴に開いて中へと踏み込んだ。

整えられた応接室のソファには軽薄そうな優男が優雅にカップを傾けていた。

「どうしたんだい、エリザベート？」

君らしくないな、そんなに乱暴に扉を開けるなんて。

もっと淑女らしくなくてはいけないよ。

ああ、キミ。済まないが珈琲のお代わりを貰えるかな？

キミの様な可憐なお嬢さんに淹れて貰うとより美味しいよ」

「は、はい、ありがとうございます」

貴族然とした優男の微笑みにミーシャは緊張しながらも、練習通り丁寧に対応していた。

「ミーシャ、珈琲は私のだけで良いわ」

「え？」

珈琲を淹れようとしていたミーシャが私の言葉に戸惑う。

「おいおい、ダメじゃないか。

お嬢さんが困っているよ？」

両手を上げて身振り手振りを交えてオーバーにやれやれと胡散臭く微笑む優男を睨みつけ、正面のソファに腰を下ろした。

オロオロするミーシャから珈琲を受け取り、一口飲む。

ミーシャは私の背後に立ったミレイに手招きされ、入り口の近くでルノアと並ぶ。

「やあ、ミレイ。久しぶりだね。

キミも変わらず美しいね。会えて嬉しいよ。

これも女神様のお導きなのかな？」

「……………」

ミレイも私と同じ胡散臭い物を見る様な視線を向けているが、優男は気にする事もなく微笑んでいた。

「それで……………本日は一体どのような御用でしょうか、エイワスお兄様」

私は警戒心を隠す事もなく、優男……………私の兄であるエイワス・レイストンへと問い掛けるのだった。



## エイワスの主

「連れられないね、可愛い妹を心配して会いに来たに決まっているじゃないか」

「ご冗談を。フライト王 脳筋お父様か宰相の差金ですか？」

「はっはっは、まさか本当にそう思っているのかい？」

「いいえ、エイワスお兄様が自らの利益の為以外に行動するとは思えませんが」

「ふふ、そうだね。あんな老害共の為に私が動くなどあり得ない」

エイワス・レイストンは優秀で多才であるが、非常に利己的な人間だ。

外面は取り繕っているので、深く知らない人間には心優しい貴公子だと思われているが、実際には自分の利益以外に関心が無い。

だが、自らの評価の為に善政を敷いており、それ故に生活に余裕がある領民は、高い生産性を維持出来る。

また国を信用しておらず、いざと言う時の為の自衛力として領軍の練度を上げるべく、時には自ら剣を手にして小まめに魔物や野盗を討伐して鍛えている。

全て自分の為の行動だが、結果として税収は上がり、領地の治安も良いので中央貴族からの評価や領民からの人気も高い。

閑話休題である。

「では目的は？」

「冷たいなあ。私はエリザベートが王国に見つからない様に情報を操作してあげていたんだよ？」

「可愛い妹を守っていた兄にもっと感謝してくれても良くないかい？」

なるほど。

紛争後からは特にだけれど、結構目立っていた筈の私の情報が王国に伝わった様子が無かった事が気になっていたが、エイワスお兄様が情報を遮断していたのか。

だが、その理由は本人が言う様な物ではないだろう。

「私に利用価値があるから王国に取られないように隠していただけでしょう」

私の言葉に肩をすくめたエイワスお兄様は、雰囲気ガラリと変えて私と視線を合わせた。

私はフリード王子との婚約の件が有ったので、領地で過ごす事はあまり無かった。

なので幼い頃から次期領主として領地経営の勉強をさせられていたエイワスお兄様と共に過ごした時間は短い。

それでも兄だ。

それなりに噂は入って来るし、その人と為りは大体分かっている。いま見せているのは滅多に無い真面目な顔だ。

「私が此処に来た用件だが……エリザベート、王国に戻ってくれないか？」

「……………」

ここに来てその話？

何か裏があるのかしら？

「話にならないわね」

「さて」

エイワスお兄様は席を立とうとした私を引き留める。

「王国と言ってもあの老害どもや色ボケ王子のところに戻れと言っ  
訳じゃない」

「……………」

ソファに座り直して無言で先を促す。

「私が仕えている主の元に来て欲しいんだ」

「仕えている？」

エイワスお兄様が仕える？何を言っているんだ？

この男は確かに優秀だが少しでも隙を見せれば寝首を掻く、猛毒  
の様な男だ。

そんなのを懐に入れた奴が王国に居る？

いや…………。

確かに最近の王国の動きは少しおかしい。

私に関係を崩す様に仕向けた属国との仲も修復されて来ている。  
更に王国の戦力を削る為に適当に始末していた小者貴族の滅亡も  
利用して戦力を中央に集めて立て直そうとしている様子もある。

腐った貴族が処分され、まともで優秀な者が後釜に据えられてい  
た。

それらの政策はフリードの名前で行われていたが、あの無能がそ

んな事を出来る筈がない。

初めは宰相がやったのだと思っただが、宰相のやり方は効率や利益率など数字を第一に考える。

人心を纏めるあの手腕は宰相のやり方では無い。

優秀なブレインが付いたのだと思っただが、それがエイワスお兄様だったのか？

だが、脳筋や宰相にエイワスお兄様を御せるとは思えない。

なら、エイワスお兄様が仕えていると言う人物がそのブレインか。

怪しいのは偽金騒ぎが有った頃に城に入ったと報告があつた馬車か。

馬車に乗っていた人物は不明。

それらしい人物が城から出たと言う報告は無い。

だが、その時期から王国の動きが変わつた。

理と心を介した政治が目立つ様になった。

それに城の一部の警備が異様に厳しくなつて情報が得られない場所が出来た。

エイワスお兄様の話を聞き、私の頭の中でバラバラだった今までの情報や違和感が次々と繋がって行く。

「その仕えている方の名前をお聞きしても？」

私が尋ねると、エイワスお兄様は頷き、あっさりとその名を口にした。

「私がお仕えしているのはアデル殿下。

ハルドリア王国第1王女、アデル・ハルドリア殿下だ」

## アデルの勧誘

「アデル殿下……アデルが帰って来ているのですか？」

「ああ」

アデルはブラート王の第二王妃の娘でフリードの腹違いの妹だ。

兄と違い聡明で優秀な少女だ。

私の事を実の姉の様に慕ってくれていた。

だがアデルは彼女の母の故郷である南大陸のレキ帝国へ留学し、卒業後はそのままレキ帝国の高位貴族に嫁入りする予定だった筈だ。

そのアデルが帰って来ているらしい。

それも、王国を立て直しているブレーンの正体として。

「私はアデル殿下にお仕えする事にした。

あの方はいずれ王国の頂点に立つ傑物だ。

エリザベートにも私と共にアデル殿下を支えて欲しい」

「……………」

「エリザベートがフリードや老害共に報復したいと思っている事は分かっている。

王国の民を見限っている事もな。

別にもう一度貴族として王国の民に尽くせと言う訳ではない。

ただ仕事として力を貸してくれば良い。

それにアデル殿下はエリザベートが望むなら報復相手の身柄を引き渡すと言っている」

「……………そうですか」

私は目を瞑りエイワスお兄様の話を吟味する。

この話を飲めば私の報復は完遂する。

今までの王国の状況を鑑みるに、アデルはそれを成すだけの力を  
持っている。

だがそれは再び王国の為に働くと言う事。

以前の私なら気にする事は無かったが、国を出て自由を得た私は  
あの頃に戻りたく無いとも考えている。

アデルなら私を利用だけして顧みないなんて事はしないだろう。

私にとっても可愛い妹分なので協力しても良いとは思う。

私が悩んでいると、エイワスお兄様は席を立つ。

「直ぐには答えられないだろう。」

私は王太子の代理として祝祭に参加する。

帰国は数週間後だ。

ゆっくりと考えると良い」

そう言い残してエイワスお兄様は颯爽と帰って行った。

私はエイワスお兄様が帰った後も応接室のソファで瞑目しながら  
考えを巡らせていた。

ミレイ達にはしばらく1人にして欲しいと伝えて出て行って貰っ  
た。

このまま自力での報復を目指して商人を続けるか、王国でアデル  
と共に再び政治の世界に戻るのか。

トレートル商会は既に巨大な商会へと成長している。  
私が居なくても十分やって行けるだろう。  
だが……………。

「……………ふう、悩んでいても仕方ないわね」

私は立ち上がり、今日は休もうと自室を目指して歩き始めた。  
大体私は帝都に戻ったばかりだ。

馬車の旅はそれなりに体力を消耗するものだ。

こんな状態で考えても的確な判断なんて出来ないだろう。

思えばエイワスお兄様がこのタイミングで現れたのは、私の判断  
力が鈍っているのを狙ったのだろう。

だが、私がクビを縦に振らなかったので長期戦へとシフトしたと  
言う所だろう。

「取り敢えずエイワスお兄様は祝祭が終わるまでは帝都に居る。  
ゆっくりと答えを考えるとしましよ」

## 帝都の祝祭

エイワスお兄様からアデルの話聞いた翌日、私は気分を切り替えて祝祭の用意を始めた。

この祝祭は帝国の建国を祝う物で、帝都では5日間のお祭り騒ぎとなる。

初日から4日目までは帝都の彼方此方で大道芸人や吟遊詩人の姿が見え、屋台や露天商などが増える。

更には闘技場では様々なイベントが有り、特に盛り上がるのが武術大会だ。

決勝戦には皇族も姿を見せ、優勝者が希望すれば騎士として叙勲される事も可能だ。

そして最終日には大掛かりなパレードが行われる。

皇帝陛下や騎士団などが帝都を練り歩くのだ。

私とミレイはアリス、ルノア、ミーシャの3人を連れて大道芸や演劇を観て、屋台を冷やかしながら祝祭を楽しんでいた。

エイワスお兄様への答えはまだ出てはいないが、もし話を受ければこんな日々を過ごす事は出来なくなるかも知れないわね。

少し意識を逸らしていると、アリスが興奮しながら前方の人垣を指さした。



「ママ、あれは何？」

「ん？ああ、騎士団が主催している魔法の的当てね。遠くに置かれた的に魔法を当てると賞品が貰えるのよ」

表向きは騎士団と民の交流の為の演し物だけど、もう一つの理由として腕の良い魔法使いを探して勧誘すると言つ目的もある。

「アリスもやってみる？あとルノアも」

2人とも最近はかなり繊細な魔法を使える様になっている。結構良い線を行けるのでは無いだろうか。

「いいの？」

「良いわよ」

「私も良いのですか？」

「ええ、偶には自分の実力を試してみるのも良いと思うわ」

騎士団への勧誘と言っても軽く誘われるくらいな物らしいので問題ないだろう。

私達は受付に行き、アリスとルノアの参加を伝えた。

的当ては遠くに置かれた的に向かつて魔法を放つと言つ単純な物だ。

ただ的までの距離は結構遠く、実戦レベルの魔法使いでなければ的に当てる事は難しいだろう。

そして結果は、アリスはギリギリの端に当て、ルノアは見事的中心を撃ち抜いた。

特にアリスは的に命中させた最年少で周囲の見物人は驚きの声を上げており、ルノアも魔法師団見習いにならないかと勧誘されていたが、丁寧な断っていた。

「やあ、エリー」

その後、別の広場に行こうとする私達に声を掛ける者がいた。

「イーグレット」

声を掛けて来たのは共に帝都まで旅をしたナイル王国の行商人イーグレットとその仲間のグレンとオウルだ。

私はイーグレット達にアリス達を紹介する。

すると、アリスを紹介した時、イーグレットはアリスを見つめて驚きの表情を見せたが直ぐに表情を取り繕う。

疑問の視線を向けると、少し罰が悪そうに苦笑いを浮かべた。

「いや、済まないね。エリーの年齢でこんなに大きな子供が居るとは思わなくて驚いたんだ」

「ああ、そう言う事ね。」

アリスは実の娘じゃないわよ。

色々と事情があつて引き取る事になったのよ」

「そう言う事か、驚いたな」

その後、少しだけ話した後、イーグレット達と別れて別の広場へと向かうのだった。

帝都にあるスラムの一角、廃墟の様な場所に1人の男が息を潜める様に潜伏していた。

男は『殿下』と呼ばれる人間に仕え、表沙汰に出来ない仕事をこなす裏家業の人間で『蜘蛛』のコードネームで呼ばれる存在だ。

蜘蛛が潜伏している廃墟の扉を蹴破って数人の男達が中に座り込む蜘蛛を取り囲む。

「おい、テメエが最近この辺に住み着いたって男だな」

「……………」

「この辺りは俺たちガトーファミリーの縄張りだ。この辺に住み着くなら払うもの払って……………」

そこまで言った所で男の言葉と動きが止まる。

「兄貴？」

仲間が男の顔を覗くと、苦悶の表情を浮かべた男の首が落ちた。

「ひっ！ひゃああ！！」

腰を抜かして倒れ込む男の首にいつの間にか細い糸が絡み付いている。

「づぐ……………」

見れば他の仲間も同じく糸に絡められて苦しんでいる事に気づいた男は、自らの未来を近くに転がる首無しの死体に見る。

「あ、が……た、助け……」

男の意識が有ったのはそこまでだった。

男達を殺した蜘蛛は、自ら作り出した死体を無視して懐からマジックアイテムを取り出して視線を向けている。

蜘蛛が主人から受け取った物だ。

「見事任務を遂行して見せます……殿下」

## 帝都の祝祭

アデルからの誘いに悩みながらも、私はアリス達と祝祭を楽しんでいた。

2日目には、神殿での礼拝に参加した。

そして多額の寄付金を出しておくのも忘れない。

祝祭で貴族や大商会などが神殿に寄付するのは定番だ。

更には私の屋敷で、帝都の孤児院の孤児や先生達を招いて食事会を開催する。

コレはとても好評で、来年からは真似する商会や貴族が出るかも知れない。

イブリス教との関係は良好に保っておきたいので此処でお金をケチったりはしないのだ。

3日目はイーグレットとの商談を行った。

アリス達はミレイを付けて遊びに出したので、屋敷に残っているのは私と数人の使用人だけだ。

イーグレットとの商談は特に問題無く進み、アクアシルクを使った商品をナイル王国の貴族向けに販売する事に決まり、更にチヨコレート菓子も試験的に輸出する事になった。

帝国内でも需要を満たせていない状態なので、質の良い物を少数のみ。

本当に超高級品としての輸出だ。

特に揉める事もなく契約書を交わした私達は和やかに珈琲を飲む。

イーグレットは初めて珈琲を飲んだそうだが、ミルクを多めに入れたカフェオレの様な飲み方が気に入った様だ。

「そう言えば今日はあの娘……アリスだったかな？留守にしているのかい？」

「ええ、ミレイや他の子達と祝祭に行っているわ」

「そうか、それは済まなかったね。」

俺との商談で娘との時間を取れなかっただろ？」

「気にする事はないわ。」

これが成功すれば、ナイル王国への販路の確立の一步になる大きな取引だし、アリスにはルノアやミーシャが付いていてくれるわ。

まあ、明日は1日遊んであげないとダメでしょうけどね」

イーグレットと笑い合う。

今日は良い取引が出来た。

4日目は闘技場での武術大会の決勝トーナメントを観覧した。

3日目までの予選を勝ち抜いた8名による勝ち抜き戦である。

参加者は帝国全土から集まった強者達だ。

光魔法で投影される参加者リストを見る。

Aランク冒険者、『泥のシスティア』

Aランク冒険者、『鋼のゴウラン』

Bランク冒険者、『レオン』

光剣傭兵団団長、『光剣のレイ』

旅の魔導士、『激流のエレン』

流れの剣士、『剣鬼ムサシ』

ラムテ伯爵家の5男、『カラッド・ラムテ』

エルフの森の守人、『ファム』

流石、決勝トーナメントに残っただけの事はある、半数以上が『異名持ち』だ。

アリス達はシスティアを始め、劇団や吟遊詩人がテーマにする様な冒険者に興奮している。

こうして始まったトーナメントは盛況で、朝から夜に掛けて数々の激闘が有った。

優勝者はAランク冒険者、ゴウラン。

決勝でエルフのファムとの激戦を制して優勝したのだった。

私が見たところ、ゴウランとファムの実力はまさしく拮抗しており、弓や短剣、魔法などと多彩な攻撃手段を持つファムだったが、ゴウランの強力な身体強化の前にギリ貧になり敗北していた。

3位はカラッド・ラムテ。

魔法と剣技をバランス良く習得している正統派の強者だ。

あのレベルなら騎士団の目にも止まるだろう。

伯爵家とは言え、5男の彼としてはまさに立身出世の足掛かりだ。

アリス達は以前に劇を観たらしい『泥のシスティア』を応援していた様だが、彼女は1回戦で同系統の魔導士であるエレンと戦い、辛くも勝利したが、2回戦で相性の悪いゴウランに敗北してしまった。

その後、参加者達が観覧していた皇帝陛下や皇太子オーキスト殿下からお褒めの言葉を貰い武術大会は幕を閉じた。

そして5日目、私達は帝都の中心部の広場で多くの人々の中に居た。

これからパレードが有り、此処を皇帝陛下が乗った馬車が通るのだ。

正直、かつて為政者側だった私は、コレが人気取りや武威を示す

為の物だと分かっている。

だが生粋の帝国人であるルノアやミーシャ、見る物全てが気になる年頃のアリスは、とても楽しみにしている。

なのでわざわざここまで出向いてパレードを見物に来たのだ。

「おや、また会ったね」

「イーグレット、貴方達もパレードを？」

「ああ、せっかく帝都で祝祭を迎えたのだからね。話のタネに観ておこうと思っただけ」

そう言えば広場はイーグレット達に紹介した宿の近くだったか。

それから軽く話しながら待っていると、歓声が近づいて来た。

遠くの方から皇帝陛下が乗った馬車が騎士団に囲まれながらゆっくりと此方に近づいて来る。

民衆に手を振りながら進む皇帝ダドリー・ユートニアの姿は、ルノアやミーシャはギリギリ見えている様だが、頭1つ背の低いアリスには人垣で見えていない。

「よっ」

「ひゃっ」

するとイーグレットがアリスを抱え肩車をする。

「見えるかい？」

「うん！」

「悪いわね」

「一昨日に『ママ』を独占してしまったお詫びだよ」



そうしてパレードが私達の目の前に差し掛かった時だ。

パレードの進行方向側から悲鳴が上がる。

ギョっとして視線を向けるが人垣に遮られて何も見えない。

すると更に大きな悲鳴が上がり、逃げようとするとする人々が人波となり押し寄せ、それと同時に濃い血の匂いが風に乗り漂って来るのだった。

## 帝都の祝祭

「な、なに」

アリスが不安げな声を上げる。

「イーグレット！」

「ああ、アリス！掴まっている！」

「掴まってルノア！ミーシャも着いて来なさい」

「は、はい」

「はい！」

イーグレットが肩の上のアリスを抱える様にして跳躍、民家の壁を蹴り屋根の上上がった。

それにルノアを抱えた私が続き、更にミレイにミーシャ、オウルも自力で屋根の上上がった。

最後にグレンがその体格からは予想出来ない程の俊敏さで屋根に跳び上がってくる。

「何が有ったのでしょうか」

「あの辺りね」

何度も悲鳴が上がる場所に視線を遣ると、遠目からも分かる程、辺り一面が血の海となっていた。

「テロか？」

イーグレットがアリスを降ろしながら問う。

血溜まりの中心部では蜘蛛の絵が描かれた仮面の男が周囲の人間を手当たり次第に斬りつけていた。

皇帝陛下を狙ったにしては意味の無い行動だ。と言ふ事は帝都で騒ぎを起こすのが目的か。

アリスに見せない様にしながら様子を窺っていると、皇帝陛下の命を受けたのか、近衛騎士が2人、現場に踏み込んだ。

「取り敢えず何とかかなりそうだね」

「そうね、いくら何でも近衛騎士2人を相手に……」

私は此処で言葉を飲み込んだ。

男が腕を振ると、まだ距離が有った筈の近衛騎士の1人が四肢を切断されて地面に転がったのだ。

倒れた仲間に一瞬気を取られたもう1人の近衛騎士も、瞬時に間合いを詰めた男の短剣で喉を貫かれる。

「あいつ、ただの暴漢じゃないぞ！」

イーグレットの言う通りだ。

あの間合いの外からの攻撃にはラクラクが有るとしても、近衛騎士が気を取られたのは一瞬、普通なら全く問題ないくらいの僅かな間だ。

仮面の男は、それを見逃さず隙を突く事が出来るレベルの強者だ。

だが、この場は皇帝陛下の御前だ。

その場に居る近衛騎士は全員が選りすぐりの精鋭。2人がやられ

たと知ると、皇帝陛下が直ぐ様増援に出る様に命じて、今度は10人が仮面の男へと向かう。

その場に居た近衛騎士の3分の1を向かわせた訳だが、皇帝陛下の周囲は20人の近衛騎士と更に多くの兵士が固めている。

10人の近衛はスキルを使って仮面の男への距離を一足で縮めると、卓越した剣技で斬り払おうと剣を振るった。

仮面の男もギリギリで躲そうと身体を捻ったが、右足を斬り落とされて血溜まりの中を転がる。

そして再び腕を振り、謎の遠距離攻撃を放つが、その攻撃の正体に気付いた近衛騎士が仲間の前に躍り出て剣を薙ぐ。

「今度こそ終わりだな」

「ええ、今のうちにこの場を離れましょう」

皇帝陛下も既に宮廷へと戻り始めている。

あのテロリストの目的は分からないけれど、ここまでだ。

そう思った時、仮面の男から膨大な魔力を感じた。

驚き振り向くと、仮面の男は右手を掲げて何かを持っている。

魔力の出所はその『何か』だ。

「マジックアイテム」

誰かが言った。

これ程の魔力が込められたマジックアイテムだ。

何が起こるか分からない。

私は【暴食の魔導書】を作り出し防御魔法を張ろうとするが、それよりも早くマジックアイテムの魔力が凝縮して行った。

魔力は全て仮面の男の身体に押し込まれる。

あんな物、人間が耐えられる筈がない。

「まさか……」

私はその現象を起こすマジックアイテムを知っている。

ハルドリア王国の禁書庫の中に収められた文献にある物だ。

「『死者の宝玉』」

驚く私を他所に、仮面の男が身体を震わせると、その肉体がみるみる内に腐り落ちて骨だけの姿に変わる。

最後に仮面が落ちると、完全な骸骨となった。

その姿は、下級アンデッドのスケルトンと酷似しているが、内包する魔力は桁違いだ。

近衛騎士達も慌てて距離を離そうとするが、骸骨の姿が掠れると、次の瞬間には近衛騎士の1人の目の前に移動していた。

「ぐあああー!!」

骸骨の抜き手が近衛の鎧を貫き、背中までを貫通させる。

崩れ落ちた近衛騎士の死体から、血液が生き物の様に這い出し骸骨に纏わりつくと、赤黒い外套へと変化する。

「あの男……ノーライフキングに転生した……」

そんな言葉がポツリと口から溢れた事にハッとする。

私は作り出したばかりの【暴食の魔導書】を消し、入れ替えに【強欲の魔導書】を手にすると、つい先日再生したばかりの細剣フリーゲルを取り出した。

「ミレイ！3人を連れてこの場を離れて！」

「オウル、お前も逃げろ」

「……………」

イーグレットとグレンもマジックバッグにしまっていた武器を手に入れている。

ノーライフキングを放置する事は出来ない。

この場で叩かねば帝都が消滅する！

私は、周囲に散乱する遺体を次々とアンデッドに変えて行くノーライフキングへと向かって飛び出して行った。

## 帝都の祝祭

ノーライフキングに向かって疾走する私達だったが、接近に気付いたノーライフキングが腕を上げると、周囲のアンデッドが道を塞ぐ様に立ちはだかった。

「邪魔よ！」

フリーゲルを一振りすればゾンビやスケルトンなどの下級アンデッドは抵抗無く両断されるが、直ぐに別のアンデッドが迫り、その間に斬り倒したアンデッドは再生してしまう。

「退がれ、エリー！」

イーグレットの声を聞き、反射的に背後に跳ぶ。

「【紅焰剣】」

「……………」

イーグレットが手にしていたシャムシールから放たれた炎がグレインのハルバードが作り出した風を飲み込み、津波となってアンデッドを飲み込む。

火属性のスキルか。

確かにアンデッドに有効な属性だ。

燃え尽きて灰となったアンデッドを踏み越えてノーライフキングの首を断つべくフリーゲルを握る腕を引き絞った。

高位アンデッドであるノーライフキングに通常の斬撃は効果が薄

く、瞬時に再生されてしまっただろう。

だが、魔力を込めた斬撃ならばそれなりのダメージを与えられる筈だ。

完璧なタイミングでフリーゲルを振り切るが、赤黒い外套が霧の様に変わり、斬撃がすり抜けてしまう。

「霊体化」

「エリー！」

血霧が再び形となり、姿を現したノーライフキングはその手に禍々しい剣を振り上げていた。

「くっ！」

腕に魔力を集めて防御を固める私に、ノーライフキングの剣が叩き込まれる直前、私達の間には大量の泥が割り込み、私を掴み上げて後方へと放り投げる。

空中で身体を捻り、何とか着地した私は、泥の巨人がノーライフキングの手にする剣によって腕を斬り落とされるのを目にした。

視線をずらすと、鳶色の髪を一纏めにした若い女が前線に立っている。

昨日の武術大会でも見たAランク冒険者『泥のシスティア』だ。それだけではなく、大会に参加していた他の人達や帝都に居合わせた高ランク冒険者や傭兵など腕に覚えのある者達が集まって来ていた。

近衛騎士達も体勢を立て直しており、連携してアンデッドが広場



から出ない様に立ち回っている。

「エリーさん、大丈夫ですか」

「無事か？」

「ユウ、エルザ」

何処かでパレードを観ていたのだろう、ユウとエルザも武器を手に姿を現した。

「アレはノーライフキングか」

「ええ、此処で抑えないと次々と帝都の住民がアンデッドに変えられてしまうわ」

「こんな時にティードさんが居てくれたら良いんですけどね」

確かにティードならノーライフキングとの戦闘をこなしながら、浄化の魔法を掛ける事が出来るだろう。

だがティードは荒野の都市国家群に出向いていて不在。

帝都に居る聖職者では、浄化の魔法を唱えている内に殺されて終わりだ。

「居ない奴の話をしてもしようがないだろう。幸いかなりの数の実力者が集まっている。ゴリ押しをしてでも倒し切るしかない！」

目の前のスケルトンを大剣で叩き割りながらエルザが言う。

「そうね。イーグレット、グレン、周囲の下級アンデッドを任せても良い？」

「ああ、任せてもらおう」

「……………」

片手を上げて答えるイーグレットと首肯するグレンに露払いを頼み、私はユウやエルザと共に泥の巨人を倒し『鋼のゴウラン』と数人のAランク冒険者を数で取り囲み攻め立てるノーライフキングへ斬り込んで行った。

## 帝都の祝祭

カタカタと音を鳴らしながら手を伸ばすスケルトンに、若い母親が幼い子供を庇いながら悲鳴を上げる。

それを間一髪、割り込んだ青年、ラムテ伯爵家の5男、カラッドの盾がスケルトンの腕を阻んだ。

「お怪我は有りませんか？」

「は、はい、ありがとうございます」

「此処は危険です、直ぐに避難して下さい」

「は、はい……」

そう言うが母親は腰が抜けたのか立ち上がる事が出来ない様だった。

そこに冒険者が駆けつけて来る。

《鋭き切先》のシシリーとマルティだ。

「君達、御婦人と少女を頼む」

「はい」

2人に親子を預けたカラッドは他の人々を逃す為に走り出した。

迫り来るスケルトン達を大斧の一振りで薙ぎ払ったユウは、アンデッドの数に溜息を吐き出す。

すると少し先でエリーやシスティアと戦っていたノーライフキングが僅かな隙に此方へと瘴気の塊を放った。

その瘴気を核としてスケルトンが集まり巨大なスケルトンへと変貌する。

「むう、ジャイアントスケルトンですか」

ユウが大斧を構え直すが、それを無視してジャイアントスケルトンは近くに居た着流し姿の男に拳を振り落とし土煙を上げた。

しかし次の瞬間、その拳はバラバラに切り刻まれ、土煙から姿を現した着流しの男、『剣鬼ムサシ』は刀を鞘へと落とす。

「おや、ムサシさんじゃないですか、お久しぶりですね」

「ん、ユウカか？」

「ええ、まさか帝国で同郷の人と出会うとは思いませんでした。

ところでムサシさんはお1人ですか？」

「師匠の事か？あいにくだが師匠は居ない。

武者修行として放り出されたんだ」

「そうでしたか。残念ですね」

ムサシの師は『剣聖』と呼ばれるSランク冒険者だ。

彼が居ればもっと簡単に事態は収束するのだろうが、仕方ない。

「取り敢えずジャイアントスケルトンを仕留めましょう。手を貸して下さい」

「そうだな、共闘と行こう」

エルザは群がるゾンビの脚を斬り飛ばして機動力を無くす事に尽力していた。

魔法に長けたエリーをノーライフキングに向かわせて、エルザとユウはアンデッドが多い場所を抑える為に途中で離脱したのだ。

エリーには砂漠の民らしき男と鉄仮面の男が付いている。

どうやら知り合いらしく、2人とも魔法武器を手に行っているので問題は無いだろう。

エリーの説明によると、怪しい仮面の男が使ったと言う『死者の宝玉』とやらは、使用者をアンデッドに変える呪いのアイテムらしい。

変貌するアンデッドは、使用者の力量、死者の宝玉に込められていた魔力、そして使用者が纏う怨念によって変わる。

中でもノーライフキングは最悪の部類だそうだ。

ノーライフキングは存在するだけで周囲の死者をアンデッドに変える。

更に怨みや恐怖と言った負の念が充満する事で、配下のアンデッドはより強力になって行く。

歴史に詳しい訳ではないエルザだが、かつて1体のノーライフキングに滅ぼされた王国の話くらいは知っていた。

「はあ！」

剣と盾を装備したスケルトンナイトを両断する。

「上位種が出だしたか。急げよ、エリー！」

エルザは近くで苦戦している傭兵の援護に回るのだった。

ハルドリア王国の王都、その中心にある王城の更に奥に、厳重に警備された区画があった。

その区間にある執務室で、アデルは目を通していた書類にサインを入れた後、ゆっくりと伸びをした。

「アデル様、はしたないですよ」

「良いじゃないか、誰も見てないんだし」

「私が見ています」

口を尖らせて文句を言うアデルに真面目な顔で注意するマオレン。この執務室ではよく目にする光景だった。

「エイワスはちゃんとやっているかな？」

「如何でしょうか、あの御仁は少々読み辛いと感じましたが」

「そうだね、でも優秀なんだよ。」

仕方ないから手元に置くけど、警戒は緩めないようにね」

「はい」

「警戒と言えば……」

アデルは思い出した様に冷めたお茶を口にしながらマオレンに問いかけた。

「……兄上はどうしてるの？」

「報告によりますと大人しく自室で軟禁されて居る様です。」

シルビア嬢の方はようやく自らの状況に気付いたのか、少々焦りが見えますが、まあ何も出来ないでしょう」

「そう、大丈夫だろうけど兄上の監視は厳重にね」

「はい。ところでそろそろお時間になります」

「分かった、行こうか」

アデルが執務室を出て別の部屋に入ると、平伏する2人の人物が待っていた。

「面を上げて良いよ」

許可すると、2人は緊張を滲ませながら顔を上げた。

狼人族の男性とエルフの女性だ。

ハルドリア王国ではまだ亜人族への差別が根強く残っているなか、貴族との縁もない2人が王族であるアデルの前に通されたのは理由がある。

それはこの2人がアデル直々に推薦して取り立てた元冒険者だからである。

アデルは人を使い広く人材を探していた。

その中で見つけたのがこの2人だったのだ。

冒険者ランクは2人ともCランク。

まだまだ無名の2人だが、アデルはその将来性を買っていた。

狼人族の青年オルト。

エルフ族の女性フロンテ。

この日、アデルの配下に加わった2人である。

煌びやかな帝都に比べると、田舎としか言いようがない寂れた都市。

一応、この都市国家ナラカイヤの中心地なのだが、あまり発展している様子はなかった。

しかし、ここは砂漠の大国ナイル王国と最も近い位置に有る為、普段ならそれなりに活気は有るのだが、数ヶ月前に謎の魔物の襲撃に遭い、その爪痕がまだ癒えていないのだ。

強力な変異種に率いられた魔物は多大な犠牲の結果討伐されたのだが、元々体力の無い都市国家には相当な負担となっている。

そんな街中をティーダは気分良く歩いていた。

夜の帳が下りてからそれなりの時が過ぎているが、その足取りは軽い。

こんな状況でも、人々は遅く生きようとしているのだ。

具体的に言うと酒場は営業していた。



「もし」

ティータが逗留している宿まであと少しと言う所、不意に声をかけられた。

ティータが辺りを窺うと近くのベンチに横になっているハーフエルフらしき少女と目が合った。

ハーフエルフなので少女かどうかは分からないが、少なくとも見た目は少女だ。

「そのシスターさん」

「私ツスか？」

「そうなの～親切なシスターさん。ちょっと、あちしのお願いを聞いて欲しいの～？」

「……………面倒事ツスか？」

「そんな事ないの～、簡単な事なの～」

「面倒事を持って来る人はみんなそう言うツスよ」

「違うの～あちしを宿までおぶってって欲しいだけだよ～」

「はあ？」

「頼むの～」

「……………宿って何処ツスか？」

取り敢えず聞いてみたティータに、ハーフエルフの少女は直ぐそこに見えているティータが逗留している宿を指さした。

「あそこなの～」

「近っ」

宿まで歩いても5分掛からない距離だ。

「これくらい自分で歩いたら良いじゃないッスか」

「面倒いの〜、今日は1時間も働いたの〜、もう動きたく無いの〜」

ティータは顔を顰めたが、此処で捨て置くと、それはそれで面倒な事になりそうな気がしたので、仕方なくハーフェルフの少女を小脇に抱えて宿へ帰るのだった。

## 帝国の祝祭

ノーライフキングへの道を塞ぐアンデッドはユウとエルザが引き受けてくれた。

その上で群がるゾンビやスケルトンをイーグレットとグレンが薙ぎ払ってくれる。

複数の【泥人形】ド・ゴレムを作り出しノーライフキングの攻撃を凌いでいたAランク冒険者、泥のシスティアの横に並び立つ。

「さつきは助かったわ」

「なに、災害クラスの魔物を相手に有能そうな味方を失いたくなくっただけさ」

「周囲のアンデッドに上位種が出始めたわ。

時間が無い。協力して貰えるかしら？」

「良いだろう」

システィアと短く会話を交わした私は、イーグレットとグレンの援護を受けて再びノーライフキングへと斬りかかった。

私の剣を躲したノーライフキングがカウンターとして刃を向けるが、割り込んで来たグレンのハルバードが受け止める。

更にイーグレットがノーライフキングの首を狙うが、それを身体を霊体化しイーグレットの背後に回り込む。

「【泥沼】ド・スワンプ」

ノーライフキングが実体化した瞬間、その脚を泥が絡め取り地面

へと縛りつける。

「はっ！」

動きを止めた所にフリーゲルを一閃。

ノーライフキングが手にしていた禍々しい剣を中心から切断し、肩の骨を斬る。

しかしノーライフキングは動きを止める事はなく、全身から瘴気を吹き出し、周囲に居た私達は距離を取らざるを得なかった。

その隙にノーライフキングは瘴気の塊を飛ばし、その1つはユウが居る辺りで周りのアンデッドを吸収して巨大な骸骨、ジャイアントスケルトンを創り出す。

「不味いな」

「アンデッドが広場から溢れ出すぞ！」

ノーライフキングの瘴気を浴びて強化されたアンデッドが戦っている人々の包囲を突破して広場から溢れ出しそうになっていた。

その光景に戦意を喪失する者も現れ始めている。

「士気が持たないわね」

倒しても倒しても復活するアンデッドとの戦いは体力と共に精神力も大きく消費する。

こちら側の戦線が崩壊するのは時間の問題だ。

「恐れるな！！！」

その時、広場に声が響き渡った。  
声の主は目立つ鎧を身に着けた青年だった。

「アレは……オーキスト殿下？」

青年はユーティア帝国の皇太子、オーキスト・ユーティアだった。

オーキスト殿下はよく通るその声で告げる。

「恐れるな、騎士達よ！我らの背には守るべき民が居るのだ！

そして勇敢なる冒険者や傭兵達、義勇の心を持つ者達よ！

帝都を守る為に剣を手にしたその勇姿、このユーティア帝国皇太子、オーキスト・ユーティアがしかと心に書き留めた！

ノーライフキング討伐の暁には、必ずその献身に報いると約束しよう！

さあ英雄達よ！その名を帝国の歴史に刻め！」

オーキストの演説に地鳴りの様な歓声が上がる。

剣を手放していた騎士や兵士は再び剣を構え、報酬と栄誉を約束された冒険者や傭兵は気合が入る。

「士気は何かかなりそうね」

「そうだな、報酬は何処に請求するべきかと思っていたが、どうやら帝国が払ってくれる様で安心したよ」

システィアが肩をすくめながら戯けて見せる。

更にイーグレットはシャムシールの背で自分の肩をトントンと叩きながら問いかけて来るので私も軽口で返す。

「なあ、エリー。オーキスト殿下の言う報酬ってヤツは商人でも貰

えるのかな？」

「活躍すれば貰えると思うわよ」

そんな会話をしながらも、私達はノーライフキングと何度も刃を交える。

瘡気から生成している禍々しい剣は何度叩き折っても無駄な様で、直ぐに別の剣を作り出している。

そんな状況を変えたのは私達の戦いに参戦した新たな戦力だった。それは首の無い黒馬に跨った首の無い漆黒の騎士だ。

「ちっ！デュラハンまで現れたか」

イーグレットが舌打ちしながらシャムシールを振るがデュラハンは大楯で受け止めて弾き飛ばす。

「ぐっ」

「イーグレット！」

「……大丈夫だ！」

デュラハンはノーライフキングに次ぐ最上位アンデッドの一種だ。いよいよ本当に危険な状況になって来たわね。

私とイーグレットはデュラハンの参戦に気付くと同時に神器を生成する。

デュラハンとノーライフキングが合流して連携し始める前に仕留めなければ、と少し無理をしても仕掛けるつもりで踏み出そうとした私達だったが、更に戦線に加わった騎士が瞬きの間でデュラハンを細切れにした事で状況がまた一変する事になる。

「あ、貴方は……」

私はその騎士を知っていた。

ハルドリア王国とユーティア帝国の戦争が終結して最初の交流パーティーの時だ。

戦後直ぐと言う事で非常に危険な時期のパーティーで、常に皇帝側に侍り守護していた初老の騎士だ。

「……マティアス殿」

ユーティア帝国騎士団総長、マティアス・ロードストス。

帝国最強の騎士が戦場に現れたのだった。

## 帝都の祝祭

「遅くなって済まぬ。

貴殿らの奮戦に感謝と敬意を」

マティアス殿はノーライフキングを睨みながら短く私達を労った。

「騎士団総長のマティアス殿か……正直助かったな」

「噂の帝国最強の騎士様か」

「……………」

システィアとイーグレットは初老の騎士の登場に安堵の表情を浮かべた。

マティアス・ロードストスは数々の戦争や討伐で活躍した歴戦の勇士だ。

全盛期の頃の實力はSランク冒険者に匹敵すると言われている。既に老齡に達しており、全盛期は過ぎてしまっているが、それでも並の冒険者や騎士では足下にも及ばないだろう。

私も戦闘体勢のマティアス殿の姿を見るのは初めてだけれど、実際に目にするとその實力がよく分かる。

少なくとも私は正面からでは、まず勝てないと思う。

マティアス殿を警戒しているのか、ノーライフキングはジリジリと距離を取ろうとし、更に撒き散らしていた瘴気を再び自身の下へと集めていた。



「あいつ」

ノーライフキングは集めた瘴気を核に、死体やアンデッドを集め、ユウが戦っていたジャイアントスケルトンを超える程の巨大な魔物を生み出そうとしていた。

「おのれ……我が守護すべき帝国臣民をあの様な化け物に変えるとは」

マティアス殿は額に皺を寄せてノーライフキングを睨みつける。

「あのノーライフキングは我が相手をしよう。済まぬが向こうは貴殿らに任せても良いだろうか」

「ええ、構いませんわ」

「随分と大きいな」

「……………」

「報酬は貰えるのだろうか？」

ノーライフキングに対峙するのはマティアス殿に任せ、私達はノーライフキングが新たに作り出したアンデッド、スケルトンドラゴンを相手にする事になった。

スケルトンドラゴンが身体を震わせ、大きく顎門を開き威嚇する。肉と声帯が有れば雄叫びが轟音となって私達に降り注いでいただろう。

スケルトンドラゴンがその巨体に似合わない素早さで身体を半回転させ、骨で出来た尾を叩きつける。

一斉にその場を跳びのいた私達はスケルトンドラゴンに武器を向

ける。

【暴食の魔導書】を使い10発以上の上級魔法を叩き込む。

更に両手にシャムシールを構えたイーグレットと風を纏って加速したグレンがスケルトンドラゴンとの距離を詰め、それぞれが骨組みだけの翼を砕き落とす。

カタカタ！

スケルトンドラゴンが大きく口を開く。

「ブレスが来るわ！」

「任せろ！【泥巨人】」

システィアが地面に手を突くと、瞬く間に石畳が泥へと変わり、そこから泥で出来た巨大なゴーレムの腕が伸びスケルトンドラゴンの首を掴んで顔を空へと向けた。

スケルトンドラゴンの口から放たれた瘴気のブレスは雲を突き抜けて空へと消える。

そして腕だけでは無く地面から這い出る様に姿を見せた泥の巨人はスケルトンドラゴンを組み伏せようと掴みかかる。

「チャンスだ！行くぞグレン！」

「……………」

胴体を抱える様に押さえ込まれたスケルトンドラゴンにイーグレットとグレンが駆け寄り、肋骨を砕きながら頭へと迫り、グレンは首の太い骨にハルバードを叩き砕き、イーグレットは牙の半数を斬

り落とした。

「【大地の檻】 【雷の豪雨】 【紅蓮の竜巻】」

イーグレットとグレンが離れた所を狙って魔法を撃ち込む。

巨大な石柱でスケルトンドラゴンを囲み、雷雨と火災旋風で泥の巨人ごと破壊する。

「あれがエリーの神器の能力か。まるで天変地異だな」

スケルトンドラゴンの骨の身体を砕き焼き尽くす私の魔法を見てイーグレットが頬を引き攣らせながら言った。

「流石にアレは耐えられないだろう。」

マティアス殿はどうした？」

システィアがマティアス殿とノーライフキングの姿を探す。

先程まで居た場所は見る影もなく破壊されており、マティアス殿とノーライフキングの姿は無い。

私は魔力を探ると、猛スピードで移動しながらぶつかり合う2つの魔力を見つけた。

「あそこよ」

私が視線を向けると、所々に血を流し、鎧の一部が砕かれたマティアス殿が空中で光り輝く剣を振り上げ、ノーライフキングに振り下ろす所だった。

## 妥協と約束

祝祭の最終日に起こった惨劇から3日、私は自分の屋敷で今回の騒動の報告書に目を通していた。

帝都では未だに混乱が続いており、犠牲になった人々の身元を照合するだけでもまだまだ時間が掛かるだろう。

そして今回のテロの主犯、ノーライフキングへと転生したあの仮面の男の正体についても調べが進められているが、今のところ何も分かっていない様だ。

マテイアス殿の光属性スキルで消し飛ばされたノーライフキングだったが、彼が居なければ帝都壊滅の可能性すら有った。

これだけの騒動を起こした仮面の男が単独犯とは考えられない。

死者の宝玉の入手経路や帝都への侵入ルートなど、調べる事は山程あるはずだ。

私も死者の宝玉の情報などは、商業ギルドを通じて帝国に渡した。あれだけの希少なマジックアイテムだ。

もしかしたら出所が分かるかも知れない。

さて、これ以上の事は一介の商人が考える事では無いわね。後は帝国の仕事だ。

私は私の問題と向き合わなくてはならない。

「エリー様、お約束のお客様がお見えになりました」

「分かったわ」

知らせを持って来たミーシャに珈琲の用意を頼み、応接室に向かった。

「ふう」

一度深く息を吐き出してから扉を開いた。

応接室には既にミレイとルノアが壁際に控えており、ソファにはエイワスお兄様が腰を下ろしていた。

「やあ、先日は大変だったね」

「そうですね。まさかこの様な事が起こるとは、お兄様も滞在中に災難でしたね」

「まあ、私は宮廷に居たから直接の被害は無かったよ。心配してくれるのかい？」

「いえ、多少は痛い目に遭えばよろしいかと思っただけです」  
「はっはっは、手厳しいね」

私の嫌味を笑顔で躲したエイワスお兄様は、真面目な表情を作ると、少し声のトーンを変えて問う。

「さて、答えを聞かせて貰えるかな？」

王国に戻ってアデル殿下を助けて貰えるのだろうか？」

「ここ数日、ずっと悩んでいた事だ。

確かにアデルの下に行けば相応の待遇でも迎えられるだろう。

私の報復も問題無く果たされる筈だ。

しかし……。

「……お断りします」

「理由を聞いても？」

「確かにアデルに付けば、私はかつての地位と名誉を取り戻せるでしょう。」

でも、既にこの商会は私にとって大切な場所になっているのです」

「ふむ……ではこの商会ごと王国に来るのはどうだろう。」

王城に出仕する必要も無い。

市井の民の1人としてアデル殿下を支えてくれるのでも構わない」

「申し訳有りません。」

私が大切だと思っている商会はこの帝都での関係性を含めての商会なのです」

「……そうか」

エイワスお兄様は1度目を瞑り、数秒程してから目を開く。

「では1つだけ頼みたい事がある」

「……お聞きします」

「エリザベートがフリードやブライト王、父上達に報復するのは止めない。」

むしろ協力しよう。

そのかわり、アデル殿下と敵対しないで欲しいんだ」

「具体的には？」

「報復するに当たり、王国の民を巻き込まないで欲しい」

「……」

「エリザベートが王国の民を見限っている事は分かっている。」

だが別に王国の民を1人残らず殺そうと言う程、憎んでいる訳では無いのだろう？」

「……そうですね、別に王国の民はどうでも良いですよ。私の報復に必要なら利用しますし、その結果、血が流れても気にしません」

「それを曲げて欲しい。報復には協力する。なのでアデル殿下の邪魔をしないでくれ。」

エリザベートも別にアデル殿下には隔意はないだろう?。」

「そうですね」

確かにアデルには恨みは無い。

寧ろアデルは可愛い妹の様な存在だ。

彼女には幸せになって欲しいと思っている。

「……分かりました。今後は民を巻き込む様な策は控えましょう」

「感謝するよ。アデル殿下も喜ぶだろう」

細かい条件などを詰め、今後は民や領地に被害が出る様な事はないと約束した。

そのかわり今後、王国は私に干渉しない。

私の周りにも手を出さないと言う事を約束させた。

そしてエイワスお兄様が帰り際に足を止めて振り返る。

「エリザベート……いや、エリー。」

全てが終わった後で良い。アデル殿下に会ってあげてくれ」

「……………ええ」

私が答えるとエイワスお兄様は王国へ帰って行った。

しかし、やられたわね。

多分、お兄様の目的は最初からお互いの不干渉の確約を得る事だったのだろう。

これまでの王国の動きから、アデルは十分に力を付けている事が分かる。

私が手を出さなければ問題無く王国を立て直せるはずだ。

まあ、私もアデルとは敵対したくは無い。

民を巻き込む策を使えなくなつて、少々動き辛くはなるが、アデルの協力が得られるならお釣りが来るか。

私はミーシャに珈琲のお代わりを頼み、幼い頃のアデルとの思い出と、成長した妹分の活躍に思いを馳せるのだった。



## 届いた知らせ

エイワスお兄様が帝都を出てから数日、そろそろ王国に帰った頃だろうか。

これでアデルと争う事は無い。  
約束もあるし、その内会いに行くのも良いだろう。

「エリー会長、商会関係の被害報告のまとめが上がって来ました」  
「ありがとう、ルノア」

ルノアから受け取った報告書に目を通す。

「やはり商会員にも被害者が出ているわね」

ノーライフキングによってアンデッドにされた人々の中には私の商会で働いていた人間も居た。

「ルノア、財務担当者に被害者の遺族に見舞金を手配する様に指示を出してくれる？」

「はい」

その他、細かい指示を出し、向かいの机で書類を仕分けていたミ  
ーシャにも指示を出そうと視線を向けた時、ミレイが慌てて執務室  
に飛び込んで来た。

「エリー様！緊急事態です」

「どうしたの」

「コレを」

ミレイが差し出したのは鳥で送られて来た様な小さな手紙だった。

受け取った手紙に目を通した私は、思わずその手紙を握り潰して奥歯を噛んだ。

「……………どう言つつもり……………アデル」

「アデル様、エイワス殿が戻られた様です」

「ああ、通して良いよ」

午後の執務の前に帝国でエリザベートと交渉して帰って来たエイワスが面会を求めて来たので許可を出した。

既に先触れによって交渉の成功の報告は受けているが、本人に話を聞かなければならない。

「アデル殿下！」

珍しく冷静さを欠いたエイワスがアデルの執務室へと早足で入室する。

「エイワス？」

「コレはどつ言つ事ですか」

「何を……………」

エイワスが差し出したのは走り書きされた報告書の様だった。受け取って内容に目を通すと、アデルの背筋に氷柱が突き刺さったかの様な寒気が走る。

「何だコレは」

「アデル殿下はご存知の無い事ですか？」

「当たり前だ！」

「私も王城に戻ってからようやくこの報告を受け取ったのです。明らかに情報が隠されています。」

「それも並の情報操作では有りません」

「くっ！」

アデルはマオレンとエイワスを引き連れて執務室を出ると、険しい顔で王城を進み、城の一角に着くと部屋の前で警備をしている兵士が敬礼をするのも待たずに話し掛ける。

「アデルで……」

「兄上はどうした！」

「ふ、フリード様は部屋に居られますが……」

「開ける」

「は、はい」

兵士は慌てて部屋の鍵を取り出して扉を開ける。

この部屋は外からしか鍵が掛けられず、窓も無い幽閉用の部屋だ。その部屋に踏み込むと、そこには誰も居ない。

「どう言う事だ！フリードはいつから居ない！」

アデルが兵士に強く問うと、兵士は戸惑った様にソファを手で示した。

「あ、あの……フリード様ならそちらに……」

だが、そこには誰も居ない。

「まさか……」

アデルは兵士の胸に手を当てると魔力を流し込んだ。

「【幻解】」

「うぐっ！あ、あれ……」

やはり兵士は幻覚を見せられていた。

「やられた……」

アデルは己の失態に唇を噛んだ。

警戒している兵士にこれだけ強力な幻術を掛けられる様な魔導士はそう何人も居る筈がない。

当然、フリードにこれだけの事が出来るとは思えない。裏で動いている何者かがいる。

アデルは自らが集めた配下達を集める様に指示を出し、急ぎ執務室へと戻るのだった。

ティーダが宿の部屋を出て食堂に入ると、カウンターの一席でダ  
ラリと身を伏せたハーフエルフの少女の姿があった。

「あゝ、ティーダなの〜」

「おはようツス、フラウさん」

「はよ〜なの〜」

彼女を宿に連れ戻ってからと言うもの、ティーダはこのハーフエ  
ルフの少女に妙に懐かれてしまっていた。

日中何をしているのかは知らないが、ティーダが神殿で仕事を終  
えて宿に帰る途中、道端で力尽きている所を持ち帰る事もあった。

窓から飛び込んだ鳥が、朝食を食べる為に窓際のいつもの席に座  
ったティーダの下に飛来する。

「んん？」

その鳥はイブリス教の上層部が情報をやり取りする為に使う小型  
の魔物だ。

ティーダもこの鳥を使って西大陸の大神殿とやり取りをしている。  
しかし、この鳥は普段ティーダの元にやって来る大神殿の鳥とは  
別の鳥だった。

「一体何の連絡ツスカね？」

ティーダは鳥の足に付けられていた手紙を一読し、目を見開く。

「な、何でこんな事になってるんツスカ」

ティードが朝食の腸詰肉を喰えたまま驚き立ち上がった時、宿の外から鐘を打ち鳴らす音が鳴り響き、人々の悲鳴が聞こえて来た。

「こ、今度はなんツスカ」

ティードは慌てて宿を飛び出して行った。

いつもの部屋より随分と手狭な一室、高価では無いが丈夫な作りのソファに腰を掛けた男が木製の盃に満たされたワインを味わっている。

普段口にするワインより数段格は落ちるが、男は気にする事なくその味わいを楽しんでいた。

そんな男の背後、不自然に濃い暗がりから、まるで踊り子が娼婦の様な格好で有りながら黒いベールで顔を隠した女が、影から滲み出る様に姿を現した。

「ご報告致します、殿下」

「話せ」

「フリード王子は軍を率いて帝国に攻め入っております。

軍は寄せ集めですが『蠍』と『百足』が付いておりますので、戦力としては十分かと。

既に帝国の都市を数力所、蹂躪しております。

私が情報操作をしておりますが既に解除致しました。

そろそろこちらにも情報が入るでしょう。

また、アルトロス卿も行動を開始したようです」

「そうか、ご苦労だったな」

「随分とご機嫌がよろしい様ですが、何か有ったのですか？」

女は男の様子を疑問に思い、問い掛ける。

「ふふ、面白い物を見つけてな」

男は楽しそうに笑いながらも1人の男に視線を向けた。

部屋にはもう1人、顔に大きな傷があるグレアム大佐が居る。

彼は男の視線を受けて口を開いた。

「以前、研究所から逃げ出した変異種の件だ」

グレアムが短く言うと、男は我意を得たりとばかりに破顔する。

「そう、その通りさ。例の失敗作だよ。」

何が有ったのか知らないが、アレが目覚ましていたんだ」

「あの失敗作……『人造精霊No.17』がですか？」

「ああ、人造精霊……今はアリスと呼ばれている様だが、アレは今、エリー・レイスと共に居る」

「そうでしたか」

女が納得すると、部屋の窓の木窓が音も無く開き、少年が滑り込む様に部屋の中に入った。

「お帰り、『梟』」

「ご報告致します、殿下。トレートル商会に『鳥』が入りました。」

王国の軍の情報だと思われませう」

「そうか、これから更に面白い事になるだろうな」

男は笑みを浮かべながら自らの角のすぐ下にある僅かに尖った耳に手を這わせ、無意識のうちに狼の尾を揺らした。

複数の種族の特徴を持つその男、イーグレットは、コレから起こる戦乱に思いを馳せるのだった。

帝国の青年、ネロは大学の卒業論文のテーマとして帝国と公国の歴史について研究していた。

その一環として、休日に、此処レクセリン砦へと足を運んでいた。するとそこにはテレビ番組の撮影だろう、撮影クルーとリポーターの炎の様に赤い髪をポニーテールに纏めたアイドルがマイクを持ってレクセリン砦について話していた。

『此処、レクセリン砦は大戦期、もっとも大規模な戦闘が有った場所です。』

この戦場には、《雷神ブライト》《漆黒のユウカ》《不死鳥のエルザ》《泥のシスティア》そして《黄昏の魔女エリー》など、当時その名を轟かせていた者達。

《賢星アデル》《双頭の蛇オルト》《魔弾のフロンテ》《紅蓮のルーカス》と言ったこの戦争で名を上げる者達。



そして《従影マオレン》 《従星エイワス》 《百薬のリリ》 《荒野の商人ルノア》 《刃獣のミーシャ》など、後にその名を歴史に刻む事になる者達など、錚々たる面々がその身を置いて居ました』

ポニーテールのアイドルの声を遠くに聞きながら、ネロは朽ちて崩れ掛けた砦の防壁を見上げ、壮大な歴史を思っただった。

届いた知らせ（後書き）

読んで頂きありがとうございます。

（・・・）

また、少しお時間を頂こうと思います。

次章の更新は4月14日の予定です。

## 義勇軍

ハルドリア王国が軍を率いてユーティア帝国に攻め入った。

その報告を聞いて1日、帝都は大変な騒ぎとなっている。

そもそも、不可解な事に報告が届いた時には、既にいくつもの帝国の都市が攻め落とされた後だった。

どう考えても偶然などでは無い。

何者かが情報を封鎖していたのは確かだろう。

問題は誰が黒幕なのか、と言う事だ。

アデルは私の周囲に手を出さないと約束した。

だが、次の瞬間にはこれだ。

アデルが黒幕ならば、情報操作をしていたのはエイワス兄様か。では何故わざわざ私に接触して来たのか。

「ふう、これ以上は考えても分からないわね」

今、分かるのは1つ。

既に戦争が始まっていると言う事だ。

執務室にノックの音が飛び込み、私が入室を許可すると、使いに  
出していたミレイが姿を見せた。

「お帰りなさい。帝国からの返事は？」

「はい、前回の紛争での功績が認められ、今回も義勇軍を率いる許可を得ました。」

また、それに当たったの支援金も出して貰える様です」

「そう、冒険者ギルドと傭兵ギルドからの返事が返ってきたらすぐに編成を開始するわ」

「はい、今回も少数精鋭ですか？」

「いいえ、前回とは違い、相手はハルドリア王国の軍よ。」

小国の軍とは規模が違うわ。

こちらも数を揃える必要があるのよ」

そう答えながらミレイを見る。

ミレイはいつも通り平静に見えるが、その立ち居振る舞いに、隠しきれない緊張があるのがわかった。

ハルドリア王国軍は強い。

以前の紛争とは違い、必ず勝てるという保証が無いのだから当然か。

その後、義勇軍設立に関するいくつかの事柄や、私達が不在の間の商会業務に関する話をしていると、使用人が来客を告げて来た。

来客の名を聞いた私は、ミレイを連れて応接室に移動する。

応接室に入ると、イーグレットがソファに腰掛けて私を待っていた。

「やあ、エリー。忙しいのにすまないな」

「構わないわ。それで、今日は？」

「ああ、君が義勇軍を率いて王国との戦争に参加すると聞いてね」

「……耳が早いわね」

「まあね。それで、君は何故そんな事を？」

商人がわざわざ首を突っ込む事ではないだろう？」

「個人的な理由よ。私は王国に恨みがあるの」

「そうか……では、俺も義勇軍に加えて欲しい」

私は疑う様な視線をイーグレットに向ける。

「何故？貴方も言った様にただの商人が首を突っ込む事ではないでしょう？」

帝国臣民でも無い行商人の貴方が身を危険に晒してまで王国と戦う理由が見えないわ。

私の様に王国に恨みでも有ると言っの？」

私の問いにイーグレットは肩をすくめて見せた。

「ノーライフキングの騒動が有っただろう？」

アレの報酬として帝都での商売に援助が貰える事になったんだ。帝国としては復興の為に資金を回したかったのだろうな。

俺は商人だし、長期的に見ればその場で報奨金を貰うより利益が大きいので喜んで受け取ったんだが、その矢先に戦争さ。

このままナイル王国に帰るってのも考えたが、せっかく手に入れたチャンスだからな。

此処で帝都に拠点を作ればウチの商会は更に大きくなる」  
「そう、分かったわ。」

イーグレット達なら実力は十分だし、心強いわね」

「はっはっは、ご期待に添える様に努力するさ。」

ところで戦地に出ている時、アリス達はどうするんだ？」

「アリス達？勿論、帝都に残すつもりだけど？」

「そうか……」

イーグレットは考え込む様に顎に手を当てて視線を下げた。

「何か気になる事もあるの？」

「ああ、帝都はつい先日襲撃されたばかりだろうか？」

「……………また帝都を狙われると？」

「分からない。だが、無い話では無い。

今回のノーライフキングの襲撃だって、帝国への侵攻の発覚を少しでも遅らせたかった王国の工作って可能性もあるだろ」

「そうね……………」

アデルが本当にそんな手を使うとは思いたくは無い。

だけれど、帝国を完全に崩壊させたいなら、確かに有効な手では有る。

このまま軍を戦地に引き出しておいて、手薄になった帝都を再び襲撃、も有りだ。

私ならそうする。

「……………そうね、今回はアリス達も連れて行きましょう」

後方に配置して、私の目の届く場所に置く方が安心だ。

その後、私はイーグレットと戦地になるだろう地域の情報を交換するのだった。

## 義勇軍

宮廷に赴き、正式に義勇軍の軍団長としての任命書を受け取った私は、物資の集積や、主なメンバーとの打ち合わせを数日で終わらせて帝都の外に集まった軍勢を率いて行軍を開始していた。

今回の義勇軍は総勢、約1700人。

内訳はDランク以上の冒険者約600人、傭兵約900人、その他、狩人や用心棒、武芸者などの義勇兵約100人。

そして、兵站や予備の武器、医薬品などの軍事物資の運搬や雑用を行う後方要員（主にEランク以下の冒険者や小規模な傭兵団）が約1000人だ。

流石にこれだけの人数の物資を私の【強欲の魔導書】に収納しておく事は難しい。

量は問題ないのだけれど、取り出して配布するのに非常に効率が悪いのだ。

その為、馬車での物資の運搬が必要となる。

「エリー会長、まずはレブリック辺境伯領の領都に向かうのですよね？」

「ええ、現在前線の指揮を取っているルーカス様や私達の後に帝都を出る筈の帝国軍と合流してから戦地に向かう事になるわ」

「は、はい」

ルノアは緊張している様だった。

当然か、野盗や誘拐犯などとの戦闘経験は有るが、今度の戦いは本物の戦争だ。

比較的安全な後方に置くとしても恐怖を感じるだろう。  
お昼寝中のアリスは別として、ミーシャもルノアほどではないが、緊張している様だ。

ルノアの両親が居るレブリック辺境伯領の領都に残す事も考えたが、帝都に残すのと同じリスクが有るので出来なかった。

アデルは私を危険視している。

エイウス兄様の行動からそれは明らかだ。

故に、私の動きを縛る人質になり得るアリス達を狙って来る可能性は十分にあるのだ。

イーグレットと相談した私は、その結論に至った。

今回の戦争にアデルがどう関わっているのかは分からない。

だが、王国がアデルと私の契約に反して攻め込んで来たのは事実だ。

アデルの考えがどうであれ、こうなってしまうてはもう無傷での和解はあり得ない。

「……………戦争ね」

「今すぐ兄上を捕縛して帝国に謝罪と和解を申し入れるべきです！」

アデルは会議室の机に両手を強く叩きつけた。

「ですがアデル殿下、既にフリード殿下が率いる軍は帝国の都市や



村々を攻め落としております。

賠償金はかなりの額になりましょう」

「しかし、ならばフリード殿下に援軍を出し帝国の領土を切り取る方が利が有るのではないか？」

「ふむ、フリード殿下の軍は優勢らしいですからな」

大臣達の発言にアデルはギリリと歯を鳴らす。

「今は帝国軍が出て居ないだけです！

このまま帝国の被害が拡大すれば止められなくなります！

兄上の軍を離反軍として処罰するべきです！」

「アデル殿下、それは王太子である兄君を討つ事になるのですよ」

「落ち着いて下さい、アデル殿下。」

向こうが国軍を出すのなら、我々も国軍をフリード殿下への援軍に出せばよろしいのです」

「……………」

大臣はアデルの意見をそう大きく捉えない。

これは今までアデルが自らの存在を隠し、フリードの名前で政策を行っていた弊害だった。

アデルの存在を知っていたのは国王と宰相、そしてアデルが選んだ直属の臣下くらいだ。

罪や恨みと纏めてフリードを切り捨てる予定だったのが仇となつてしまった。

大臣達から見ると、今のアデルは突然帰って来た第二王位継承者が、第一王位継承者である兄を排除しようとしている様に見えるだろう。

「陛下！宰相殿！進軍などと言う馬鹿な真似はお止め下さい！

確かに賠償は厳しい物となるでしょうが、このまま全面戦争とな

れば民への被害は甚大な物となります！」

大臣の説得は難しいと判断したアデルは、ブライト王と宰相であるジークに矛先を向ける。

「……………私は進軍に賛成です」

「ジーク殿！」

「アデル殿下。フリード殿下は既に帝国の中まで食い込んでおります。」

此処で引いて賠償となれば王国の衰退は明らかです」

「しかし、それでは民が！」

「国が滅びれば民も苦しむ事になります。」

それに、連綿と続くこのハルドリア王国の歴史を終わらせる事は出来ません。陛下、ご決断を」

ジークが話を振ると、ずっと腕を組んで瞑目していたブライトが口を開いた。

「……………帝国に向けて進軍する」

「陛下！！」

「これは決定だ。」

フリードが優勢に事を進めているのは事実。

この機に帝国を叩く」

その後もアデルは戦争回避を訴えたが、ブライト王を翻意させる事は叶わなかった。

## 義勇軍

数ヶ月ぶりに訪れたレブリック辺境伯領の領都は、一見普段通りに見えるが、戦火の足音により、肌を刺す様な張り詰めた空気で満たされていた。

そして、よくよく見てみれば領都内の要所には警戒心を顕にした衛兵が嚴重に警備の任に就いている。

引き連れて来た義勇軍に領都の衛兵施設を使い休ませた後、主要メンバーを連れてルーカス様の所へ向かった。

「久しぶりだな、エリー会長。いや、今はエリー軍団長か」  
「お久しぶりです。ルーカス様」

私を通された領主邸の一室は、作戦室として使われているらしく、中央の大きな机の上には幾つかの駒が並べられた地図が広げられており、伝令が報告を持ってくる度に担当の武官や文官が書類に情報を書きつけ、駒の位置を動かしている。

私は一緒に連れて来ていたユウや傭兵団の団長2人をルーカス様に紹介する。

「騒がしくしてすまないな、掛けてくれ」

「失礼します。」

「早速ですが状況をお聞かせ下さいますか？」

「ああ」

部屋の端にある応接用のソファに並んで腰掛けたのは私とユウの2人、ミレイと傭兵団の団長2人はソファの背後に立つ。

ルーカス様は新しい地図を机に広げ、幾つかの駒や棒を配置する。

「これがハルドリア王国軍……正確には王太子のフリード・ハルドリアが率いている私兵とそれに同調した諸侯軍、雇われの傭兵や冒険者の一団だな、これが奴らの進行ルートだ」

「フリードの私兵？」

正式なハルドリア王国軍では無いのですか？」

「その様だ。王国に送り込んでいる間者の報告では、王都の軍はまだ動いていない。」

だが、物資の集積などは始まっているらしく、近く軍が出る可能性は高い」

「フリードの暴走って事でしょうか？」

それにしても率いている軍が強すぎるわよね」

「そうですね。正規兵は諸侯軍だけ、それも王国軍よりは練度は落ちる筈ですから、いくら情報を上手く遮断出来たとしても、この短時間で複数の都市を落とすなんて出来ないと考えます」

ユウも私と同意見らしい。

するとルーカス様は、私達の疑問の答えかも知れない情報を口にした。

「それなんだが……フリード王太子が率いる軍にはかなりの数の魔物がいるらしい」

「魔物ですか……複数のモンスターテイマーを雇えば不可能では無い……かしら？」

「どうだろうか？かなり強力な軍勢らしい。」

中には高ランクの魔物や変異種らしき個体、竜種も確認されたぞうだ」

ルーカス様は困った様に額を押さえながら溜息を吐いた。

確かにそれだけ強力な魔物ならば都市規模では抵抗するのは難しい。

そしてもう一つ、気になる事がある。

「強力な魔物を複数連れたモンスターティマー……………」

「エリーさん、もしかしたら……………」

ユウもそれに思い至った様だ。

以前、帝都でキングポイズンスライムの変異種が地下水脈に現れた一件で、私とユウ、エルザ、ティードがダンジョンに潜った時の事だ。

あの時、異常に多い魔物や、ダンジョン規模に不釣り合いな強力な魔物に襲われた。

別行動を取っていたティードが、それらの魔物を操っていたモンスターティマーの女と交戦したと聞いた。

かなりの手練れだったそうで、腕を切り落としたものの、本人には転移のスクロールで逃げられてしまったらしい。

「あの時のモンスターティマーがフリードの所にいるとしたら、帝都でのキングポイズンスライムの一件もフリードが関わっていた可能性があるわね」

「ふむ、聞いた限りでは、そのモンスターティマーの実力はかなりの物だな。」

しっかりと対策を立てる必要が有る」

私達の話聞いたルーカス様は、眉根を寄せて頷くと、更に詳しい話を聞く為に紙とペンを用意させるのだった。

「どうだい、シルビイ。これが俺の力さ」

代官を殺し、占領した屋敷のバルコニーから半壊した都市を見下ろしながらフリードは傍らのシルビアに笑顔を向けた。

シルビアは少し間が開くが、微笑みを浮かべながらフリードに言葉を返した。

「……………素晴らしいですわ、フリード様」

「そうだろう？これだけの功績を以てすれば、あの生意気なアデルにも俺を認めさせられる。当然、シルビアの事もだ」

「嬉しいです」

シルビアはフリードにそっと身を寄せた。

その後、兵の所に行くフリードと別れたシルビアは、充てがわれた自室に戻り、護衛と世話係を退がらせると、整えられたベッドに握りしめた拳を振り下ろした。

「何で 何でこんな事になったのよ」

私は……………私はただ幸せになりたかっただけなのに 王子様と結婚して！何不自由なく暮らせる筈だったのに！！」

怒りに顔を崩すシルビアは、何度も何度もベッドや枕を殴り付ける。

「何が『俺の力』よ！あの女に良い様に使われているだけじゃない！！」

あの鳥とか言う女、絶対に関わつたら不味い人間よ！！

クリスにも繋がっていたって事は、ずっと前から利用されていたって事じゃない！

大体、アデル殿下に認めさせるなんて出来ないわよ！

帝国が本気を出したら私達は殺される。

王国が加勢して勝つたとしても良くて生涯幽閉、悪ければ処刑か暗殺よ！

何でそれが分からないのよ！！」

不幸にもシルビアは愚かでは有ったが、馬鹿では無かった。

利用され、騒動の中心地に連れてこられたシルビアは現状を正しく認識していたのだ。

一人、涙ながらに捲し立てるシルビアの声に応える者は誰も居なかった。

## ミーティング

私達がティエーダから聞いたモンスターティマーの情報をルーカス様に伝えた後、話は再びフリード軍の情報に戻った。

「フリード軍が進行して来たルートが不自然ですね」

「ああ、ある程度の安全が確保されているルートを避け、魔物の遭遇率の高い地域を突っ切って侵攻している」

「これも、モンスターティマーの仕業でしょうか？」

「そうね、高い実力を持つモンスターティマーなら魔物避けや誘導の技術にも長けているでしょう」

「俺も同意見だな。交易路にもなっているルートは嚴重な監視や警備が置かれている。」

それを潜り抜ける為に危険地帯を進軍ルートにしたのだろうな。

危険地帯を突破したフリード軍は道中の村や町で物資を略奪しながら進軍し、レブリック辺境伯領の都市を蹂躪、更に隣のハツフル子爵領との領境に近い都市を落として占領している。

現在は強行軍を行った後だからか、占領した都市を拠点に軍を整えている様だ」

「なるほど……ルーカス様は今後ほどの様な動きを？」

「もう数日でオーキスト殿下が率いる帝国軍が合流する。」

それを待ってフリード軍の征伐に向かう。

君達、義勇軍もそれに合流して欲しい」

「分かりました。オーキスト殿下が合流したらお知らせ下さい」

「分かった」



ルーカス様の所を辞してトレートル商会の商館兼屋敷に戻った私は、執務室で商売関係の報告を受けたり、書類を確認して過ごしていた。

仕事がある程度落ち着いたのは既に陽が落ちた後であった。

机の上に積まれた書類をミーシャやルノアが別の部署へと持ち出した時、窓から私が【怠惰の魔導書】で召喚したセントバードが戻って来た。

このセントバードは私が手紙と荷物を持たせて送り出したものだ。

そのセントバードが手紙の返事を持って戻って来たのだ。

その手紙を一読した私は、隣で決算書を整理していたミレイにアリス、ルノア、ミーシャの3人を呼んで来る様に頼んだ。

「どうしたの、ママ？」

「何かあったのですか？」

「ええ、3人と、コレを受け取って頂戴」

私は【強欲の魔導書】から3本のスクロールを取り出してアリス達の前に置いた。

「これ……スクロールですか？」

「ええ、【転移】のスクロールよ」

私の言葉にルノアとミーシャは目を丸くし、アリスは小首を傾げた。

【転移】のスクロールは希少な物だ。

対となるスクロールで予め転移先を設定しておく必要があるが、要人の緊急退避や上級冒険者などの命綱など、その需要は大きい。

この3本も私が念のために集めて置いたものだ。

「3人とも、この戦争の間は常にこのスクロールを携帯しておきなさい。」

命が危ないと思った瞬間、もしくは私がミレイが使う様に指示した瞬間、迷わず発動させること。

転移先はコーバット侯爵領のケレバンの街、ヒルデの所に設定してあるわ」

帝都を出る時に、対となるスクロールともしもの時の3人の保護を頼んだ手紙をセイントバードに持たせてヒルデの元に送って置いたのだ。

先程、保護の了承と転移先の設定が完了したとの返事が届いた。

「それと、此処までもそうだったと思うけど、戦地では今まで以上にアリスから目を離さないでね。」

私が個人的に雇った護衛を付けるつもりだけど、最低でもルノアとミーシャのどちらかはアリスと一緒に居て頂戴」

「はい、会長」

「お任せください、エリー様」

これでアリス達の身の安全に関して出来る限りの手は打った。何が起るか分からない帝都に置いておくよりは安全な筈だ。

「愚かな選択としか言えませぬね」

アデルから会議の話聞いたエイワスは言葉短く吐き捨てた。

「ボクも同意見だよ。」

目端の利く者やボクが戻っていた事に気付いていた情報に長けた者など、数人の大臣や重臣はボクに賛同してくれたけど、それでも少数派だ。

そこに父上が進軍を押ししたのがトドメになり、国の方針は決まっ  
てしまった」

「何故、国王陛下や宰相閣下はその様な決断をしたのでしょうか？」

マオレンが苦い顔をしながら疑問をなげる。

「父上……宰相の判断は単純に国の存続を考えた判断ですね。」

父上は国その物を守ろうと考えている。

民を一番に考えているアデル殿下との相違はこの一点でしょう。

此処で帝国に降れば国力が低下し、帝国に頭を押さえられてしま  
います。」

そうなれば王国の存続にまで関わるでしょうからね」

「陛下の考えはもつと甘いよ。」

このままいけば兄上を処刑しなければならぬ。

帝国との和解には兄上の首は不可欠だからね。

なら、此処で無理矢理にでも功績をつくり、王命に逆らって城を  
脱走し、帝国との条約を反故にした罪と相殺させて、生涯幽閉くら  
いに落とし込みたいのだろう。」

父上は昔から兄上に甘いんだ」

アデルは肩をすくめて見せ、マオレンが淹れた紅茶で口を湿らせ  
る。

「さて、以上を踏まえてボクの計画を伝えよう」

そしてアデルは直属の臣下達に計画を伝えた。

「反対意見も有ったが、アデルはそれらを認めなかった。」

「民を守るにはこれしか方法が無い、とアデルの身を案じて反対する臣下を黙らせたのだ。」

アデルは複雑な表情の臣下達を見回し、敢えて和やかに笑って見せる。

「さあ……戦争だ」

## ミーティング

私がレブリック辺境伯領領都に到着して2日後、オーキスト殿下が率いる帝国軍が到着した。

オーキスト殿下は、領都の外、防壁の近くの草原に野営地の設営を指示した後、ルーカス様の屋敷へと足を運んだ。

その連絡を受けた私も、ルーカス様の屋敷で合流する。

会議室で卓を囲んで椅子に腰を据えた私達に、上座のオーキスト殿下が軍議の開始を告げる。

「皆、良く集まってくれた。

ルーカス卿。遅滞戦闘と情報収集、ご苦勞であった。

エリー殿も我が帝国の危機に立ち上がってくれたその義侠心に感謝する。

では、これより条約を破り不法な侵略行為を行っているハルドリア王国の侵略軍の撃退及び、敵軍の支配地域に取り残されている帝国臣民の解放の為、皆の意見を聞かせて貰いたい」

そこからはオーキスト殿下の副官である騎士（たしか第三騎士団長だったと思う）が軍議の進行を引き継いだ。

オーキスト殿下は優秀で軍事にも明るいが、やはり専門家である騎士の意見は重要だ。

これがフリードなら無理矢理軍議の主導権を取ろうとするでしょうね。

だけど、フリードが率いているらしい侵略軍は特に問題なく進軍

を続け、強力な魔物を操っているとは言え、都市規模の防衛戦力を排除しスムーズに攻略している。

余程優秀な軍師が上手くフリードを誘導しているのだろうか。状況からすれば、それはアデルの配下の可能性が高いかしら？

私は少し迷った。

此処でアデルの存在についてオーキスト殿下達へ告げるべきか。私を姉の様に慕ってくれていたアデル。

『アデル殿下』と敬称を付けると頬を膨らませて不機嫌になった物だ。

正直、フリードなどより余程聡明だったし、私とも近い関係だったかも知れないわ。

アデルが13歳となり、フリードが成人して正式に王太子となった頃、アデルの母君であるギョクリヨウ様の故郷である南大陸の大国レキ帝国へと留学して行った。

そしてそのままレキ帝国の高位貴族に嫁入りする予定だった筈だ。

何故アデルが帰って来ているのか、エイワス兄様は口にしなかった。

だが当然そこにはブラート王が関わっている筈だ。

「……………今はこれ以上は分からないか」

「ん？エリー軍団長、何か気になる事でも有ったかね？」

「いえ」

確かに私はアデルに好意的な感情はあるが、それは数年前の関係性からの物だ。

先に協定を破ったのはアデルの側、ならば私は私の目的の為にア

デルと敵対する事も辞さない。

「一つ、ご報告したい事があります」

此処に居る者達は帝国の上層部と私の配下や友人だけだ。私の出自の話をしてても問題は無いだろう。

私はオーキスト殿下達に、アデルの存在と侵略軍を率いているフリードに付いている可能性がある軍師の予想を語るのだった。

アデルは軍を率いて王都を出発するブライト王と向かい合っていた。

「父上、考えはお変わりになりませんか？」

「変わらぬ。フリードは愚かな事をした。

しかし、これが好機なのはちがいない。

帝国の領土を切り取り、フリードを連れ帰ればアイツは幽閉とする。

この国はお前に任せる事になるだろう。

もう直ぐギョクリヨウが乗った船も着くだろう。俺が戻るまで城と母を頼んだぞ」

「……………行ってらっしゃいませ、父上。御武運を」

## 進軍

オーキスト殿下と合流した私は、義勇軍を率いて進軍していた。

前方には先行するレブリック辺境伯軍とオーキスト殿下率いる帝国軍が居る。

私達は殿だ。

軍の中央部を進む馬車の中には私とミレイ、アリス、ルノア、ミーシャの5人が座っている。

「エリー様、私達はハルドリア王国軍が居る都市を目指しているのですか？」

ミーシャがそう尋ねた。

軍の主要なメンバーには伝えていたが、その時ミーシャはアリスと共に別室に居たのだったわね。

「私達が目指すのはレクセリン砦よ」

「レクセリン砦？」

ミーシャは少し悩み首を傾げた。

ミーシャは私の従者見習いとしてしっかりと勉強している。

しかし、レクセリン砦については知らないだろう。

無理も無い。

「かつてまだこの辺りが帝国の領土じゃ無かった頃の砦よ。今は放棄されているわ」

「せっかくの砦を放棄しているのですか？」

「ええ、この辺り一体が帝国に飲み込まれたから必要無くなったの



よ。

取り壊すのも予算の無駄だし、街道から離れ過ぎているから野盗の根城としても旨味が薄いよ。

だから年に数回、兵士が巡回する程度で放置されているの」

「その砦を指しているのですね」

「ええ、あの砦は位置的に有用だからね。」

都市に立て籠っている侵略軍に奪われたら不味いから、先に確保するのよ。

侵略軍も砦に気付いて狙っているかも知れない。砦の奪い合いで戦闘になるかも知れないから油断したらダメよ」

「はい！」

ミーシャは真剣な顔で頷いた。

まあ、現在の義勇軍は全体で見ると後方だから、遭遇戦になる可能性は低い。

「でも気を張りすぎてもダメよ」

「は、はい」

軍を率いて出立したブライト王を見送った後日、船で到着したギョクリヨウを迎えたアデルは、母と話すのも程々に、城に残った大臣や重臣達を会議室へと集めていた。

「皆、忙しい所済まない。楽にしてくれ」

アデルがそう伝えると、起立して礼を取っていた大臣や重臣達が

椅子に腰を落ち着けた。

「ん、アデル殿下、何故この場に『人もどき』をお連れになつているのですかな？」

大臣の1人が不思議そうに尋ねた。

今日、アデルはマオレンとエイワス以外に、最近臣下へ加えたオルトとフロントを連れていた。

「ポルトレアド卿。彼等は狼人族とエルフ族だ。民の規範となるべき国の重臣が『人もどき』などと差別的な言葉を使うべきでは無い」

「おお、これは失礼致しました」

心にも無い事を言うポルトレアドを見た者達の反応は2つに分かれる。

亜人族を見下し、下品な笑みを浮かべる者。

その者達を冷めた目で見る者。

前者は実績も無く、女で若いアデルを舐めている者達。

一方、後者は何かしらの情報を得てアデルが王国で暗躍している事に気付いている者、純粹に差別意識の薄い者達だ。

数としては半々、いや少しアデル寄りの者達が多いか。

戦争賛成派の貴族の多くは兵を出してブラート王と共に戦地に向かったので残った者達は戦争に反対していた者、中立の立場を取った者が多い。

「皆に今一度問いたい。

今回の戦争は我が国の不始末、反逆者であるフリードを捕縛し、帝国に謝罪するべきだと思つる者は居るだろうか」

「アデル殿下！何を仰るのですか！

進軍は国王陛下がお決めになつた事ですぞ！」

「お気持ちは分かりますが、いくらアデル殿下でも今更どうにも出来ませんぞ」

顔を真つ赤にして立ち上がったポルトレアドとは対照的に、アデルを諭す様に発言するのは老境のキルティア伯爵だ。

「分かっているよ。ただ聞きたいだけだ。

皆がどの様な考えなのかを知りたいのだ。今回の進軍に賛成している者は起立してくれ」

アデルが願うとポルトレアドを始めとして3分の1程が立ち上がった。

キルティアは座つたまま静かにそれを見ている。

「6人か。ありがとう、よく分かった」

アデルは立ち上がると、風を纏つた手刀を振るい、すぐ側のポルトレアドの首を斬り落とした。

それと同時にアデルの背後に控えていたオルトとフロンテが懐から短刀や短剣を取り出し残りの5人に斬り掛かる。

瞬く間に4人を殺した2人の後ろから、腰を抜かして震える最後の1人に歩み寄つたアデルは溜息混じりに呟く。

「はあ、無能どもの首はエリザベート姉様に差し出す約束だったのに……」

「あ、あ、アデル殿下！お、お待ち、お待ち下さがあー！！」  
「ごめんね。君達は邪魔なんだよ」

風の刃が振るわれ、アデルの呟きは悲鳴に掻き消された。

「アデル様、こちらを」

「ありがとう」

マオレンから受け取ったハンカチでわずかに返り血で汚れた手を拭いたアデルは、青い顔をして視線を向けて来る者達、何かを期待する顔を向けて来る者達の目の前で、空席となっていた最上位の席、国王のみが座る事を許されている席へと、ゆっくり腰を下ろした。

「諸君、この国はボクが貰う。何か意見が有る者は発言を許す。申せ」

その場にいた者達のアデルの問いへの答えは、跪き臣下の礼で以て返されるのだった。

## 進軍

レクセリン砦を目指して軍を進める事10日。

普通の馬車なら疾とうに到着している距離なのだが、軍の速度に合わせている為、その歩みはかなり遅い。

私もアリス達に算術や野営術を教えるくらいしかやる事がなかった。

今日は野営での料理を3人に教えている。

ちょうどバルが近くの森で数羽の角うさぎを狩って来てくれたので、解体の仕方や不可食部位の処理の仕方などを実際にやらせ、野生のハーブと塩で味付けして串焼きに、骨で出汁を取った野草のスープだ。

食後はテントの設営や見張りのローテーションなどの基本的な事を教える。

もう10日目なのでアリス達も慣れてきている様で、3人とも問題なくスムーズに野営の準備をこなした。

その後は就寝時間まで算術を教え、翌朝には野営地の始末をして再び馬車を進ませる。

そんな日々を過ごしていたのだけれど、その日は前方のオーキスト殿下から進軍の停止と私に出頭命令が届いた。

オーキスト殿下とルーカス様の所へ出向くと、そこには簡易テントが設営されており、オーキスト殿下とルーカス様が難しい顔で向

かい合っていた。

「義勇軍団長エリー・レイスです。」

「お呼びにより参上しました」

「ああ、急に呼び出して済まないな。」

「取り敢えず掛けてくれ」

「はい」

私が組み立て式の椅子に腰を下ろすと、従軍しているメイドが紅茶を淹れてくれる。

流石、皇太子だ。

紅茶も美味しい。

「何か有ったのですか？」

私の問いにルーカス様が答えてくれる。

「実は先程、先行偵察に出ている者達が帰還したんだ。」

それによると、レクセリン砦は既に侵略軍によって占拠されていたらしい」

「むう」

「不味い事態だ。」

「奴らは砦を補修して防御力の底上げまで行っているそうだ。」

「その上、砦の周りには多数の魔物が確認されている。」

「偵察に行った者の半数以上が魔物にやられたそうだ」

「事前に監視の任務に付けていた者も連絡が取れず、合流も出来ていない。既に死んでいるのだろうな」

「斥候狩りですね。おそらく連絡用の鳥も狩られていたかと」

「ああ、それなりに有能な人物が砦を押さえているのだろうな」

「フリード王子では有りませんわね。」

彼がこんな危険な最前線に居る訳がありません」

「そうだな。フリード王子は占領している都市に入ってから、都市を出た報告は受けていない。大規模な軍もだ」

私は簡易テーブルに広げられた資料を手に取る。

斥候が命がけで集めた資料だ。

これによると、砦の周辺を固めているのはほとんど魔物だ。

人間の姿もあるらしいが、砦の中に少数の姿が見えるだけだ。

「この資料を見る限り、人間の兵士はかなり少ない様ですね。モンスターティマーと少数の精鋭兵士で砦を確保し、本隊を待っているのでしょうか」

「どうしたものか。下手をすれば砦を攻めている所を敵の本隊に挟み撃ちにされるかも知れない」

私は少し思案してから提案する。

「まずは砦の周囲の魔物を削るのは如何でしょうか？」

いくら凄腕のモンスターティマーであつても魔物の数は有限、魔物を削り切れるならばそのまま砦を攻め落とし、敵の援軍が現れたのならば、軍を分け魔物を抑えている間に敵軍を討つ。

このまま静観して合流を許すよりも、戦力が分散されている間に削るべきだと思います」

「なるほど。確かに挟み撃ちにされる可能性も有るが、逆に考えれば敵の戦力が分散されているとも取れる訳か」

「はい、魔物を削る役目は義勇軍にお任せ下さい。

義勇軍には多くの冒険者が居ます。

彼らは魔物と戦う事が本職ですから」

「そうだな、軍の兵士は基本的に人間の相手をする事を想定した訓練を積んでいる者が殆どだ。」

ならば魔物は冒険者に任せるべきか。

エリー軍団長、明日の明け方より作戦を開始する。

義勇軍を率いて魔物共を殲滅せよ。

ルーカス卿と私の軍は周囲の警戒と撃ち漏らしを狩る。

魔物討伐の経験がある兵士を選抜し、臨時部隊を編成せよ。

敵の援軍が予想される方角には斥候を放て」

「はっ！」

「はっ！」

私とルーカス様はオーキスト殿下に簡易的な敬礼をすると、自らの率いる軍の元へと帰って行った。



## 一方その頃：都市国家の危機

非常事態を告げる鐘の音を聞いて宿を飛び出したティードは、街の防壁の僅かな罅や欠けた場所を足場に防壁の上まで駆け上がった。そして防壁から見える光景に、ティードは息を呑む。

視線の先、荒野の向こうに砂漠が広がる地平の先から砂煙を上げながら大量の魔物が向かって来ていたのだ。

「な、なんツスカアレは」

まだ砂粒の様に見えるだけだが、直ぐにこの都市国家へと、到達するだろう。

以前の変異種の魔物の襲撃とは比べ物にならない被害が出る。

ティードは僅かな迷いも無く防壁を飛び降りると、魔物の軍勢に向かって走り出す。

少しでも数を減らしておかなければ、都市国家に居る冒険者や兵士では対応出来ない数だ。

ティードは戦いやすい開けた場所に陣取ると、直ぐに神器を作り出し構えた。

ティードの神器【神の恵みを刈り取る刃】<sup>ハイベスト</sup>は斬り殺した相手の魔力を奪って自己強化や治癒を行う力を有している。

多数の敵を相手にするのに有利な能力なのだが、広範囲の敵を攻

撃するのには向いていない。

スキルや魔法を使えば戦えるが、攻撃力で言えば神器での直接攻撃の方が強力だ。

更に【神の恵みを刈り取る刃】の発動条件の制限もある。相手の魔力を奪うには神器の刃で止めを刺す必要がある。

つまり、ティータ1人で全ての魔物を押し留める事は不可能なのだ。

必ず抜けられるだろう。

「はあ、損な役回りッスね」

ティータは柄から刃まで真っ白な大鎌を一閃する。

移動速度が速く、先行していた砂色の大きな狼の魔物、Dランクのグレーターサンドウルフを3匹纏めて斬り捨てる。

そしてすかさず奪った魔力を身体強化に回し、高く跳躍すると上空から爪を振り下ろそうとしていたデザートファルコンを縦に両断する。

すると地面を突き破って巨大なミミズのような魔物、サンドワームが無数の歯が生えた口を開き、空中に跳び上がっているティータを丸呑みにしようと身体を伸ばした。

「うげ　キモいッス！」

ティータはデザートファルコンの魔力を自らの魔力に上乘せし魔法を強化する。

「ホーリアロー【聖なる矢】」

放たれた聖なる力を宿した光の矢は、通常の矢よりも大きく数も多く、サンドワームの口へと飲み込まれて行った。

すると体内に魔法を受けたサンドワームは身を擦って苦しみ、その身体を蹴り体勢を整えたティータは、地面に戻るまでの数瞬間でサンドワームを斬りつける。

「む、浅いッスね」

再び地につけたティータは、真っ白な大鎌を大きく振りかぶり、全力で振り切る。

魔力を纏った刃は白い光閃となりサンドワームを真っ二つにした。

次々に襲いかかる魔物を斬り殺し、時に魔法での広範囲の攻撃を交えながら戦うティータの目に、魔物の本隊と言える集団が見えて来た。

「な、あ、アレは」

ティータが驚きで目を見開いた。

明らかに変異種だと思われる魔物が数体混じっている事にも驚いたが、何より驚いたのはその魔物を率いる様に進む3体の存在だ。

人型で、頭部に角を持つ存在。

「なんで悪魔が居るんッスか」

## レクセリン砦

私が合図を送ると、冒険者を中心に砦の周囲に屯している魔物に向かつて駆けて行く。

彼等はずもともとパーティ単位で活動する冒険者だ。

無理に軍団として運用しては、彼等は本領を發揮する事は出来ないだろう。

その為、私が彼等に出した指示は1つだけだ。

『無理をせずに危険だと感じたら直ぐに後退して態勢を立て直せ』である。

最前線には冒険者、そこから少し退がって傭兵団、更に後ろに帝国軍とレブリック辺境伯軍から選抜された魔物との戦闘経験が有る部隊が配置されている。

帝国軍とレブリック辺境伯軍の本隊は侵略軍の本隊が居る都市の方角を中心に警戒している。

「私も出るわ。バアルは着いて来なさい。」

ミレイはアリス達と後方に退がっておいて

「おう」

「かしこまりました」

バアルを伴って私も雑多な魔物の群へと飛び込んだ。

魔法で吹き飛ばす事も考えたが、この後は砦攻め、更に砦の奪還後には侵略軍からの防衛戦となるだろう。

タイミングが悪ければ連戦となる可能性もある。  
念の為魔力は温存しておく。

【強欲の魔導書】からフリーゲルと帝都で購入したショートソードを取り出した。

このショートソードは刀身が短めで刃が厚い特注品だ。  
短剣よりも少し長い程度のこの剣は、鋭さよりも頑丈さに主眼を置いて鍛造された物で、武器と言うよりも防具に近い。

敵の攻撃を受け止めたり受け流す様な防御的な扱いが出来ないフリーゲルをフォローする為の剣だ。

バアルも最高品質のグローブを装備している。  
拳と甲に薄いアダマントタイトが使われている逸品だ。

私の視線の先で、人間の10倍はある巨大な亀、アイアントータスガユウの大斧で両断され、視界の端ではエルザが《鋭き切先》の仲間と共にゴブリンジェネラルが率いるゴブリンの群れと対峙している。

遠くに見えるコボルトを呑み込む泥の波はシスティアだろう。

ゴウラン、ムサシなどの強者も一騎当千の活躍をしているのが見える。

「ふっ！」

フリーゲルの一閃で変異種らしきデススコピオンを斬り裂き、横合いから振られるオークの槍をショートソードで捌き、返す刀で両腕の腱を斬り槍を取り落とした所でフリーゲルで首を刎ねる。

直ぐ隣からは堅い甲殻や骨を砕く音と共に、魔物の断末魔が響く。  
バアルも久々に全力で暴れている様だ。

レクセリン砦に有る尖塔の1つ、そこには失った右腕を錬金術によつて造られた魔法で動く義手に変えた蠍が戦場を見渡していた。

眼下では蠍の配下である魔物が冒険者共に狩られていた。

勿論、冒険者にも犠牲が出ているが、冒険者の中に数人、相当な手練れが混じっているようで、変異種や竜種なども倒されていた。

「おいおい、上げえだな。」

大斧の黒いガキ、銀髪の二刀流の女、赤毛の女剣士、泥の魔法使い、東の剣士、馬鹿みてえに打たれ強い男。どいつもこいつも強すぎなんだな」

「奴等は殿下も警戒する要注意戦力だ。」

「気を抜けば私達でも死ぬぞ」

「おお、恐ろしいべ。」

オラの様なか弱え奴なんで、直ぐに殺されっぺよ」

「下らない事を言うな。」

殿下の為ならば我々は命も捨てる。そうだろ？」

「んだな」

「ではお前にも出て貰うぞ、百足」

「怖えけど、仕方ないっぺよ。オラは平和に過ごしたいんだけど、殿下の為なら躊躇は無いべ。」

…… んだら、オラも暴れてくるだ」

そう言つて蠍の隣で戦場を見ていた男。

何処にでも居そうな田舎の村人と言つた風貌の男は、階下へと降

りて行った。

男の後ろ姿を見送る蠍の視線は冷ややかだった。

「……………お前が誰よりもエゲツないだろ」

蠍の眩きを拾う者は居ない。

## レクセリン砦

レクセリン砦の周囲の魔物の半数近くの数を討伐した頃、砦に近い場所で戦っていた冒険者パーティに異変が起こった。

順調に魔物を討伐していたパーティが全滅したのだ。それも、魔物を相手にしてでは無い。

「なっ！」

その光景に私は目を丸くした。

いや、私だけでは無い。

その光景を見た者は皆、驚きを隠さなかった。

屈強な冒険者達を素手で捻り殺したのは、どう見ても田舎の農村に居るただの農民にしか見えなかったのだ。

その男はフラフラと戦場に現れたかと思うと、猛スピードで冒険者に迫り、素手で首を掴み上げ肩に手を置くと、首を引き抜く様に冒険者を殺し、驚いたパーティメンバーの冒険者にも同様に襲い掛かった。

拳で革鎧ごと胴体を貫かれた冒険者、蹴りで首を折られた冒険者、剣で反撃を加えたが、全く怯む事なく喉を潰された冒険者。

だが、農民の方もただでは済んでいない。

革鎧を貫いた腕は拳が砕け、折れた骨が腕から飛び出しており、蹴り脚はドス黒く腫れ上がり、剣で斬りつけられた腕は皮一枚で繋がっていて、ブラブラと揺れている。



しかし、悲鳴を上げるところか、痛がる素振りも見せず、近くの冒険者へ向かって襲い掛かるうとして斬り殺された。

「な、なんだったんですか？」

「分からないわ。でも戦闘訓練を受けた者の動きじゃなかったと思うのだけれど……。」

ユウが気味悪そうに言うが、私から返せるのはその程度の答えだけだ。

「お、おい、アレを見る！」

少し離れたところからエルザが声を上げる。

エルザが指し示す方を見ると、先程の農民の様な男達がフラフラと現れたのだ。

「お、おいどうする」

私は得体の知れない相手に動揺する冒険者を一喝する。

「敵よ！殺しなさい！」

私の指示に、一瞬はつとした様子の冒険者達が妙な男達に向かって行った。

男達は痛みや恐怖と言った感情が無いのか、自分の身の損傷を省みる事なく冒険者達を殺そうと向かって来た。

その為、数人の犠牲を出してしまったが、何とか男達を討ち取る事が出来た。

パチパチパチ

男達の死体が積み上がり、血の匂いが広がる戦場に不釣り合いな拍手の音が鳴り響いた。

見れば先程の男達と変わらない、特に特徴の様なものが無い男が両の手を打ち鳴らしていた。

「何者？」

「オラは『百足』つつーもんだ。

悪いけど、オメエらには死んでもらうだよ」

「面白い冗談ね。さっきの男達はなに？」

「薬か何かで操っていたの？」

「まあそんなところだあ」

男は頷き両手を広げる。

「痛みを感じない、死を恐れない兵士。

まさに理想的な兵士だよ」

男がニヤニヤと笑うと砦の門が開き、再び男達がフラフラと現れる。

その数、およそ100人を超える程だ。

「さあ、どうするべか？」

「ぐっ、ユウ、システィア、私と来て！バアル、エルザは傭兵と冒険者に指示をだして魔物の対処を」

こちらに人を割きすぎると魔物に抜けられ帝国軍とレブリック辺境伯軍は背後から襲撃を受ける事になる。

男達への対処は最小限の人数でこなすしか無い。

私はユウとシスティアの2人を連れて、皆の中へ逃げ込んだ百足と入れ替わる様に出てきた、焦点の定まらない目の男達と対峙するのだった。

## レクセリン砦

フラフラと体を揺らしながら迫る不気味な男達に私はユウとシスティアと共に迫る。

広範囲魔法で一網打尽にも出来るのだが、砦を破壊してしまつては意味が無い。

フリーゲルを一閃し、手前の男の胴体を上下に分ける。

だが、なんと男は上半身だけになり血を吐き出しながら私の足を掴んだ。

「っ  
」

人間離れた握力で私の足首を握る男をユウが大斧で叩き潰した。

1091

「大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとう。中途半端はダメね。確実に頭を仕留めましょ  
う」

次々と襲いかかってくる男達の首を斬り落として行く。

「やっぱり変ですね」

「そうだな。コイツらには意識の様な物を感じない。薬か魔法か分からないが、洗脳されて強制的に戦わせられている様だ……【泥沼】

」

システィアが男達の足下を崩し、動きが鈍った所を私とユウが仕留めて行く。

負ける事は無いが、油断は出来ない。

「グゴオドア!!!!」

横合いから飛び込んできた地竜にユウが直ぐに大斧を振り上げ、魔力を幾つもの層にする様に刃に纏わせる。

「【遍断ち】」

身体ごと回転させる様に大斧を振るったユウのスキルは、強靱な鱗と強力な身体強化を持つ地竜を縦に真っ二つにし、一撃で地に沈めた。

あの魔力を層にするスキルは凝縮した魔力による武器強化を効率化した物だろう。

ユウは簡単にやって見せたが、魔力の凝縮、同時複数の魔力操作どちらも高等技術だ。

1つなら私にも可能だが、同時は難しいだろう。

ユウは何事もなかったかの様に再び男達との戦闘を再開させ、片手間に考察する。

「多分、薬と魔法の併用ですかね。薬で意思を奪って強力な催眠魔法を掛けたのでしょうか？」

「並の技量じゃない。何かしらのマジックアイテムも使っているのかも知れないな」

2人の言う通り、この男達は妙だ。

体格は良く、筋肉も有るが、戦う為に鍛えた身体ではない。

なるほど、ユウとシスティアがいう様に、農民を洗脳して痛みや恐怖、意識を消したと考えるなら納得できる。

あの百足とか言う男がやったのなら、まさに外道の所業だ。

「一般人、それも帝国の民の可能性も有るけど……今は勝利を優先するわ」

「分かってます」

「嫌な仕事だ。後であの男は必ず殺す」

ユウヤシスティアもトップクラスの冒険者だ。

感情では納得出来てなくても躊躇はしない。

それだけこの男達は危険な存在なのだ。

私は名も知らぬ哀れな男の首を斬り続けるのだった。

振り下ろされる巨大な棍棒を手にした曲刀で受け流し、返す刀で一つ目の巨人、サイクロプスの肩から脇に掛けて切り裂いたイーグレットは、遠目に見える戦場に視線を向け、すぐ隣で槍を振るうグレンに声を掛ける。

「見る、グレアム。百足が出てきた様だぞ」

「……………誰が聞いているか分からないのです。グレンとお呼び下さい」

「お前こそ、喋れないって設定だろ？」

「……………」

からかう様に唇を尖らせるイーグレットに、グレンは少し疲れた様なため息を吐き出す。

勿論わざとだろう。

「アリスの方はどうなっているんだ？」

「梟が付いているが、やはりガードが固いですね。」

子供達だけなら問題無いです、あの従者は難しいでしょう。身内以外の全てを対象に警戒しています。

腕も立つ様で、私であつても彼女を倒してアリスを拐うまでの間にエリー・レイスに気付かれるでしょうね」

「回収するのはまだ難しいな。なら隙を見せられるまで、信用させるとしようか」

イーグレットは魔力を込めた曲刀シャムシールをくるくると弄びながら、向かってくる魔物を次々に殺して行くのだった。

## レクセリン砦

バルは自分の身長の2倍は有るオーガキングと対峙していた。オーガキングは通常種なら褐色の肌に額に2本の角を持っている。しかし、バルの目の前のオーガキングは黒い肌に入れ墨の様な赤い紋様が走っており、頭部には王冠の様な角が生えていた。

「こりゃあ、変異種ってヤツか」

バルは警戒する様に呟くと、腰を落として拳を構えた。

オーガキング変異種がバルを叩き潰すべく、その腕を振るうと、その拳はバチバチと雷を放ち、落雷の様な轟音を響かせる。

「ぐっ！」

オーガキング変異種の拳から紫電が走るのを目にした瞬間、受け流す為に差し出していた腕を引き、身体を捻って跳ぶ。

直撃は避けられたが、電撃がバルの身体を焼いた。

「ちっ、厄介だな」

バルは焦げた上着を脱ぎ捨て、再び拳を突き出す様に構える。

「ふっ！」

【縮地】を使いオーガキング変異種の背後を取る様に回り込み、魔力を纏わせた回し蹴りを叩き込む。

並のオーガなら、頭が千切れ飛ぶ程のバルの蹴りだが、オーガ



キング変異種は僅かに揺らぐだけで、腕を振り回して反撃してくる。バルはオーガキング変異種の裏拳が当たる前に再び【縮地】で距離を取る。

「攻撃だけじゃねえみてえだな」

バルはオーガキング変異種の首を蹴った自分の脚を視線だけで確認した。

ズボンには焼け焦げた跡が残り、そこから見えている肌は一部が黒く炭化している。

「ギブアアア！！！」

雄叫びを上げたオーガキングは全身に雷を纏いバルに向かって駆け出した。

エルザは《鋭き切先》の仲間を指揮して魔物の群れを相手に戦っていた。

現在、相手にしているのはバンデットワールフの群れだ。

二足歩行する狼の魔物であり、体長はエルザよりも少し大きい。

「リサ退がれ！マルティはリサの護衛だ！

サリナ、私と前に出るぞ！シシリーは援護を！」

仲間の返事を聞きながらエルザは盾士のサリナと共に迫り来るバンデットワールフに向かって行く。

剣鉈を振り上げるバンデットワールフの前にサリナが飛び出し

盾で剣鉈を受け止め、脇をすり抜けたエルザが一刀でバンデット  
ーウルフを斬り捨てた。

次々に襲い来るバンデットワーウルフをサリナが受け止めエルザ  
が斬る。

サリナの盾を抜けそうになる者はシシリーの矢を受け、回り込ん  
だ少数のバンデットワーウルフはマルティの短剣とリサの魔法で倒  
れる。

「き、切りがないよ」

「頑張るのよマルティ！」

「エルザ！後ろが不味い！」

「くっ！サリナ、一旦退がるぞ！」

「分かった！」

囲まれ始めていたエルザ達は、バンデットワーウルフの群れを一  
旦突破して抜け出す。

「グルルウー！」

バンデットワーウルフもエルザ達を獲物として認識したのか、大  
きな輪になり、ゆっくりと輪を狭めて行った。

群がる男達を振り返りにした私達3人は、砦の周囲の魔物を他の  
冒険者達に任せ、砦の中に突入した。

「エリーさん、奴は何処に行ったんですかね？」

「セオリーとしては中心部でしょうね」

「それにしても人の気配が無いな。」

偵察ではそれなりに兵士の姿が有った筈だが……」

システィアがそう言った時だ。

「うわあああ……！」

突然、正面の大扉が開き、鎧姿の兵士が3人、何かから逃げる様に駆け出して来た。

その兵士を追って姿を現したのは、全身に炎を纏った巨大なトカゲ、サラマンダーだ。

サラマンダーは兵士の1人を焼き殺し、もう1人をその大きな脚で叩き潰した。

「ひ、ひ、や、やめ………た、助け………あああああ……！」

残った1人も、私達に助けを求め手を伸ばしながらサラマンダーに食われてしまった。

「サラマンダーか、これは面倒だな」

「わたし、サラマンダーと戦うのは初めてです」

「来るわよ」

「ジァアアア……！」

サラマンダーは私達に向かって猛烈な勢いで火炎を吐き出した。

## レクセリン砦

バルは拳を覆う薄手のグローブを中心に魔力を練り上げる。

このグローブに仕込まれているアダマントイトは魔法に対する高い耐性を持っている。

オーガキング変異種は全身に雷を纏っており、近づくだけでもダメージを受け、触れれば肉が焼け焦げる。

懐からポーションを取り出したバルは、オーガキング変異種から視線を外さない様にながら足の傷に振りかける。

すると激痛が和らぎ、皮膚が再生を始める。

「グオンー！」

バルが傷を治療している事に気が付いたオーガキング変異種は、そうはさせまいと放たれた矢の様に距離を詰めてくる。

「ちっ！これだから無駄に知恵の回る魔物は！」

まだ完全に傷は再生していない。

無理に動いては不完全な治癒になるだろうが、このまま攻撃を受ける訳には行かない。

バルは側転からのバク宙で大きく距離を取る。

(右足が痛むが動かせる程度には回復したか)

「グオー！」

オーガキング変異種は大きく右腕を振り上げ、紫電を進らせながらバアルに向けて振り下ろす。

「おらあ！！」

その拳に合わせる様にバアルも魔力を込めた拳を振るい、オーガキング変異種の拳を迎撃する。

お互いの拳が激突した瞬間、閃光が走る。バアルは多少の火傷を負っているが焼け焦げる程ではない。

アダマタイトの魔力耐性と魔力により雷を抑え込んだバアルは、更に拳を繰り出す。

右、右、左、バアルの連撃にオーガキング変異種は拳を砕かれ腕を押さえてタタラを踏む。

その隙を逃さずオーガキング変異種の懐に飛び込んだバアルは、身体を焼く雷撃に耐えながら腰を深く落とし、右腕をグツと引く。

「【烈震正拳】！」

渾身の魔力を込めた正拳突きスキル。

地属性の魔力が込められたバアルの正拳は、オーガキング変異種の胴体に突き刺さり、その身体に強力な振動を与える。

「グゴオオオオオ！！！」

全身をガクガクと震わせたオーガキング変異種は、紫電を撒き散らせながらのたうち回る。

バアルが撃ち込んだ魔力が振動となり、オーガキング変異種の体内で反射、共振、増幅され、内臓をぐちゃぐちゃに破壊する。

「グツ、ゴバ……ガフ」

血を吐き倒れ伏したオーガキング変異種の死を確認したバルは、新しいポーシヨンを取り出し飲み干した。

「はあ、はあ、つたく……手間かけさせやがって……」

周囲には未だに魔物が溢れかえっており、全身に火傷を負ったバルが、後方に退がって回復を待つ時間は無い。

グローブを締め直したバルは、再び魔物の群れの中へ飛び込んで行った。

「あゝあ、こりゃあ無理だべ」

「そうね」

外で魔物を倒す冒険者、中庭でサラマンダーと戦う3人、援軍は間に合わないだろうし、間に合ったとしても帝国軍が万全の態勢で待ち構えている。

蠍と百足がこの場に居る以上、王国の無能王子の指揮では勝てる筈などない。

「此処は撤退するわ」

「んだな」

蠍が手を挙げて合図を送ると、通常のワイバーンよりも一回り大きなワイバーンが砦へと舞い降りた。

「今は私達の負けよ」

蠍と百足を背に乗せたワイバーンは空高く舞い上がり、フリード達が駐留している都市がある方向へ飛び去って行った。

## レクセリン砦

エルザ達《鋭き切先》はお互いをカバーしつつ、バンデットワーウルフの群れから距離を取っていた。

しかし、バンデットワーウルフは、《鋭き切先》を獲物として認識しており、逃すつもりは無い。

ジリジリと後退する《鋭き切先》を半円形に広がった群れで飲み込む様に包囲していた。

バンデットワーウルフは、体長2メートル程の二足歩行の狼の魔物で、武器を器用に使いこなす、とすれば獣人族の様な姿をしているが、体内に魔石を持ち、対話や意思疎通が不可能である為、魔物として分類されている。

その討伐難度は1体のみでCランク、この規模の群れならばAランクにもなる強敵である。

エルザは回復の要であるリサを中心に入れ隊列を組む。

「包囲を抜けるぞ！神器【不屈の大剣】」  
レントゥスケラディウス

エルザから溢れ出した魔力が瞬時に凝縮され、長身のエルザと比べても大きな大剣となる。

エルザの神器である【不屈の大剣】レントゥスケラディウスは炎を吹き上げたり、風を放つたりと言った特殊な攻撃技は使えない。

その刀身に宿す力は【身体強化】のみである。

その身体強化ですら、通常時では自力で身体強化のスキルを使っ



の方が効果が高い有様である。

だが、【不屈の大剣】レントゥスケラディウスの身体強化は、エルザが窮地にある程、その身体強化は強力になって行く。

Cランクの魔物の群れに囲まれ、逃げる事も叶わないこの状況に、普段の身体強化の数倍の効果を受けたエルザは、様子見に突っ込んで来た若いバンデットワーウルフの槍を素手で掴み取り、バンデットワーウルフごと後続の群れに投げ返した。

「行くぞ、皆！【不屈の軍勢】」

エルザが【不屈の大剣】レントゥスケラディウスを掲げると、刀身に罅が走り、肉厚の大剣が光となって砕け散った。

エルザの神器から溢れ出したその光は、《鋭き切先》のパーティーメンバー達に降り注ぐ。

この【スキル】こそが、神器による身体強化を仲間と共有するエルザの切り札である。

制限時間も短くなり、半日程、神器を使えなくなるが、その恩恵は計り知れない。

5人もの上級冒険者が、普段の数倍の身体強化を受け巧みな連携で戦うのだ。

「はあ！」

エルザが剣を振るえば数体のバンデットワーウルフの胴体が輪切りにされ、背後に回ろつとするバンデットワーウルフはシシリーの矢が2体同時に貫く。

攻撃は全てサリナに受け止められ、受けた傷はリサの治癒魔法で

瞬時に回復する。

慌てて体勢を立て直そうとするバンデットワーウルフだが、影の様に低く、駆け回るマルティの短剣と火属性魔法が混乱を収める事を許さない。

数々の死線を潜り抜けてきた《鋭き切先》の必勝の型だ。

勢いに任せてバンデットワーウルフの群れの左翼を突き破ったエルザ達は瞬時に転進し、群れの中央部の後方、長が居るだろう場所に向けて突撃する。

長を狙われていると気付いたバンデットワーウルフも、エルザ達をはばもうと捨て身で立ち塞がるが、強化されたマルティの魔法とシリリーの矢に討ち取られ、傷だらけになりながら無理矢理抜けてきたとしてもサリナの盾に阻まれる。

「終わりだ！」

群れの中央部を突き破った先、体毛が白く、仲間を守られる様になっているバンデットワーウルフをエルザは頭から一刀両断に斬り捨てた。

その後は、長を失い統率を無くしたバンデットワーウルフの群れを殲滅するだけだ。

エルザ達は物の数十分程で、バンデットワーウルフの死体を積み上げる事となるのだった。

## レクセリン砦

囷にされていた兵士達を殺し終えたサラマンダーは、私達の方に頭を向けて無造作に息を吸い込んだ。

「ブレスが来るわ！」

「マッシュ・ウォール【泥壁】」

私が叫ぶのと同時にシスティアが地面に手をつき、地面から私達を覆う様に半球状の泥の壁が迫り上がった。

轟音と周囲の温度が急激に上がる。

サラマンダーは中位の竜種だが、その性質は精霊に近い。自然種のサラマンダーは火山などで自然界の魔力を取り込んで生きている。

その為、縄張りを侵さなければ他の生物を襲う事は少ない。だが、一度暴れ始めれば周囲一帯を火の海に変える魔物だ。

「不味いな、温度が高すぎる」

「このままだと破られてしまいますね」

システィアの【泥壁】は柔軟な泥で攻撃を受け止める強力な防御魔法だが、サラマンダーの炎は泥の水分を急激に奪っていた。

「壁が崩れた瞬間、散開しましょう。私が時間を稼ぐわ」

「はい」

「分かった」

目の前の泥で出来た壁が、次第に乾いた土へと変わり、幾つもの罅が入る。

「今よ！【氷華刃】」  
アイス・フラワー

小さな氷の華を吹雪の様に放つ。

サラマンダーの視界を塞ぎ、炎のブレスを相殺する。

あまりに火力が高すぎて長くは持たないが、その間にユウとシスティアは左右に分かれてサラマンダーのブレスの範囲外へと退避した。

「【氷珠】」  
アイス・スフィア

ブレスに押し切られる瞬間、自分の体を氷で包み込む。

強力な炎で氷がどんどん溶けて行く。

1人なら、これで終わっていたかも知れないわね。

氷が溶け切る直前に、泥の巨人の拳がサラマンダーに叩きつけられ、そのまま地面と同化して取り押さえる。

身体中から炎を吹き上げて脱出しようとするサラマンダーだが、私は氷の珠を砕き出ると直ぐに拘束を強化するべく魔法を唱える。

「【氷枷】」  
アイス・バインド

泥の拘束ごとサラマンダーの身体を氷漬けにした私は、防壁の上に視線を向ける。

「ユウ！」

「はい！神器【終結の戦斧】」  
エンド

ユウの手に具現化された巨大な漆黒の戦斧は、膨大な魔力を纏ってサラマンダーに振り下ろされた。

強靱な竜種の鱗も攻撃に特化したユウの神器の一撃には耐えられず、その首を刎ねられる事になった。

「ふう、終わりましたね」

「ええ、さて、後は……」

「ん、あれは！」

システィアが指差す方を見れば、あの百足と名乗った男と手綱を握った女が大きなワイバーンに乗って飛び立って行く姿が見えた。

「あの女がモンスターテイマーかしら？」

「そうですね。ティードさんから聞いた特徴に一致します」

「逃げられたか」

「取り敢えず、砦の奪還は成功でしょう。周囲の魔物もそろそろ討伐が終わるでしょうし、オーキスト殿下に連絡して砦の確保の人員を送って貰いましょう。」

こうして私達はレクセリン砦を確保し、拠点として侵略軍を迎え撃つのだった。

## レクセリン啓（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

また、誤字報告も大変感謝しております。

次回の更新は5月6日（木）を予定しております。

## 砦での1日

レクセリン砦に用意された私室の机に広げられた資料に粗方目を通した私は、少し冷めてしまった珈琲を飲む。

戦場であるこの場ではなかなか贅沢な嗜好品であるが、この珈琲は私の【強欲の魔導書】に大量に備蓄している。

南大陸からの輸入品なのでそれなりに値が張る物だが、トレートル商会の規模と実績を考えればこの程度の贅沢は許されるわよね。

「ふう」

芳ばしい吐息を吐き出した私は、資料を整理して鍵付きの引き出しに仕舞う。

その後、大きく伸びをして席を立つと、部屋から出た。

レクセリン砦は石造の頑丈な作りであり、長年放置された事でありなり老朽化していたのだが、侵略軍と帝国軍が連れて来た工作兵と魔法使いのお陰で随分しつかりと修繕されている。

石造故、夜は冷え込むが、今は季節的に暖かいので問題は無い。だが、この戦争があまりに長引くとその辺りの物資の補給も考えなければいけない。

この拠点を陣取れたのは戦略的に見て僥倖だが、物資の補給を考えると少々難がある。

「水よ 我が手に【水生成】」

頭の中で物資の輸送ルートの開拓計画を練りながら中庭に出ると、ミレイヤルノア達に付き添われたアリスが自分の身体よりも大きな

樽に水を出していた。

「お疲れ様、アリス」

「ママ！」

アリスが出しているのは軍で使う飲料水だ。

砦に有った井戸には毒が投げ込まれていたのだが、その毒も私が浄化したので問題無い。

それでも軍団規模の人員の飲料水や生活用水にするには心許なく、私や水属性魔法が使える魔法使いも同じ様に交代で水を出している。アリスもそれに協力している様だ。

一般的な魔法使いに比べても魔力量が多いアリスはとても重宝されている。

「エリー様、お仕事の方はよろしいのですか？」

「ええ、ひと段落したわ」

私はアリスの頭を撫でながらミレイに答えると、残っていた樽に魔法で水を創り出して満たし、アリス達を連れて部屋に戻った。

部屋でアリス達と簡単な食事を済ませた私は、オーキスト殿下に呼ばれて作戦室へと向かった。

作戦室は広く、中央には大きな地図が広げられた机があり、その机を囲む様に数人の人物が既に腰を下ろしていた。

つまらなそうにしているユウの隣に座り、ユウと軽く話しながら待っていると、次第に人が集まりだし、最後にルーカス様とオーキスト殿下が入室すると、全員が立ち上がり礼を取った。

「楽にしてくれ」



オーキスト殿下が奥の上座に座り、声を掛けると皆再び座り直す。

「さて、急な招集で済まない。

先程間者から連絡が届いた。数日前、ハルドリア王国軍が王都を出立したそうだ」

オーキスト殿下からの情報にざわりと騒めきが上がる。

「更に厄介な情報がある」

しかし、次のオーキスト殿下の言葉でその騒めきすら止まる。

「その軍を率いているのは『雷神』ブラート・ハルドリアだそうだ」

ブラート王はこと戦に於いては天才だ。

その力は、ハルドリア王国出身の私よりもユータティア帝国の人間の方がよく分かって居るだろう。

動揺する帝国人達の中、私は溢れそうになる笑みを抑え込む。

帝国に亡命した時、帝国の戦力を利用するつもりは無いとは言ったが、この状況なら話は別だろう。

ブラート王を殺す絶好の機会、逃す手は無いわ。

## 一方その頃：3体の悪魔

悪魔の存在を確認したティードだが、目の前の魔物を無視する訳にはいかず、歯痒くも足止めを食らっていた。

獣型の魔物や飛行する魔物など、足の速い魔物に混ざりオーガやゴブリンの様な軍勢の中核を成す魔物も姿を見せ始めていた。

この広い荒野で、数を増やすばかりの魔物に対してティードは1人。

当然、全ての魔物を狩り尽くす事など不可能で、既に多くの魔物がティードを抜けて都市国家へと向かってしまっていた。

「ええい！鬱陶しいツスよ！！」

大量の魔力を纏わせて振るわれた純白の大鎌がティードに群がっていた20体を越えるゴブリンの群れを一雑で斬り飛ばすが、直ぐに後ろから新たなゴブリンが現れる。

「うおおおお！！！！」

あまりの物量に、流石のティードも焦りを感じてきた頃、都市国家のある方角から雄叫びが聞こえてきた。

「な、なんツスカ」

見れば、武装した者たちが武器を振り上げてティードが防ぎ切れなかった魔物を討伐しながら近づいて来ていた。

「冒険者ツスカ！」

「おう、シスター！待たせちまったな！」

冒険者達を率いて来たらしい男がティータに近づき声を掛ける。  
どうやらたまたま居合わせた上級冒険者らしい。

「助かったツスよ。正直1人でこの数は厳しかったツス」

「こんだけやれたら上等だろうが。それにそいつは神器だろ？なら俺たちはシスター程強かねえ。」

Aランク冒険者は俺だけだし、Bランク冒険者も3人だけだ」

「そつツスカ。都市国家の守りはどうなってるんツスカ？」

「そつちは衛兵を中心に下級冒険者や有志の者達で守りを固めてい  
る。」

多少は問題無いだろうが、この魔物全てを受け止めるのは無理だ」  
「ならやはり此处で数を減らさないとダメって事ツスね」

ティータと冒険者の男は周囲のオークを倒しながら情報を交換す  
る。

「魔物の中には変異種みたいな奴も混じっているから気をつけて欲  
しいツス」

「なに そいつは不味いな。Cランク以下の奴では止められない  
かも知れねえ。」

シスター、俺達で変異種を倒さねえとな」

男の提案にティータは首を横に振る。

「もう一つ、良くない知らせがあるツス」

ティードの鋭い視線にグレーターウルフにバトルアックスを叩きつけながら冒険者の男は息を呑む。

「魔物を率いてる悪魔の姿を見たッス」

「あ、悪魔」

男が戦闘中だという事を一瞬忘れて驚きの声を上げる。

ティードの様なイブリス教の上位者などは別として、一般人にとって悪魔とは、『そんな奴らが居るらしい』と言う様な曖昧で不確かな存在だ。

恐ろしい存在であると聞いた事はあるが見た事は無い。

それが一般的な人間の悪魔に対する知識である。

「ぐああ!!」

「な、なんぎああ!!」

冒険者の悲鳴が聞こえてくる。

「な、なんだ、あいつら 魔族……いや、違うな、あれが悪魔か？」

「そっツス！此処は私に任せるツス」

男にそう言い残したティードは、冒険者に振り下ろされた剣を大鎌の柄で受け止めた。

「ん？なんだ貴様は？」

「悪魔に名乗る名前は無いッス!!」

ティードが大鎌を一閃、二閃と振るうが、悪魔は剣を巧みに使い攻撃を受け流した。

(並の悪魔じゃ無いッスね。あの『伯爵二位』程では無いッスけど、おそらく爵位持ちの悪魔ッス)

ティードの大鎌を捌いていた悪魔は不意に背後に跳んで距離を開けた。

「ん？」

虚を突かれたティードが一瞬、隙を見せると、それを逃さず、左右から別の悪魔が槍を突き出した。

「ぐっ！」

なんとか躲すが、左の肩を抉られた。

「ほう、今のを躲すか」

「……………3対1は卑怯じゃないッスか？」

「我々は目的の為なら手段を選ぶつもりは無い」

対峙する悪魔を観察すると、衣服や武具に同様の紋章がある。

「《冥界の夜明け》ッスか」

「ほう、よく知っているな……………そうか、その大鎌の神器、貴様が伯爵閣下が仰っていた人間か」

「伯爵…………アルトロスの事ッスか」

「ふむ、見たところ、貴様が此処の人間共の最高戦力だな。大人しく消えて貰おうか！！」

3体の悪魔は連携し、ティードへと斬りかかって来るのだった。

## 王座のアデル

ユーティア帝国の都市の1つ、侵略軍に支配されたこの都市は、破壊された家屋や石畳に広がる血痕など、至る所に争いの痕跡が残されている。

都市を支配する者達は横暴で、食料や金品の強奪、強姦や暴行など、戦時国際法に反する行為を取り締まられる事もなく己の欲望を満たしていた。

生き残った都市の住人は、目をつけられ無い様に息を殺して生活していた。

「この無能共め!!!」

その都市の中心部、元は代官の屋敷であった場所に侵略軍の旗頭であるフリードの怒声が響き渡った。

屋敷の中でも最も上等なその部屋には、怒りで顔を歪ませるフリードと、その前に傅く2人の人間が居た。

「貴様らは俺が居なければ皆1つ守る事も出来ないのか!」

怒鳴りつけるフリードに、頭を垂れたままの蠍は黙り込む百足をチラリと見やり、謝罪を口にする。

「誠に申し訳ありません。

率いていた手勢では帝国軍の物量に……」

「言い訳など不要だ！結果を出せ、無能！」  
「……………」

フリードはソファにドカリと腰を落とすと足を組み頼杖を突く。

「もう良い、さっさと失せる。」

レクセリン砦はこの俺が直々に軍を率いて再び攻め落としてやる。  
無能な貴様らの尻拭いをしてやるんだ、感謝するんだな」

「はい、フリード殿下の慈悲に感謝致します」

虫でも払うかの様に手を振るフリードに、もう一度深く頭を下げた蠍と百足は部屋を出た。

「たつく、なんなんだべ、あの王子様は」

「あそこまで傲慢だと面白いでしょ？」

「腹立たしいだけだべ。殺してやりてえだ」

「ダメよ。殿下のシナリオを違える訳には行かないでしょ」

「んだども……………」

「あんなの、はいはい言っていれば良いのよ」

蠍はフリードの部屋を背後に百足の愚痴を聞きながら廊下を歩いて行った。

アデルは、背後に武装させたオルトとフロンテを控えさせ、目の

前に傳く男達を一段高くなつた壇上の王座から見下ろしていた。

「面を上げよ」

顔を上げたのは上等な衣服を身に纏つた男達だ。

アデルが命じて領地から呼び出した。

「答えを聞こうか。リナンド公爵、オーデイル辺境伯」

「はっ！此度のブライト殿の暴挙はとても擁護出来ませぬ。

我がリナンド公爵家はアデル様の戴冠を支持致します」

「オーデイル辺境伯家も同じ考えです」

アデルは2人に頷きを返す。

「うむ、今後は乱心されたブライトとフリードの征伐に出る故、貴公らの忠誠は直ぐに示されるだろう」

「お任せ下さい」

「王国の平和の為ならば、この命を以て戦いましょう」

「期待しているぞ」

控えていたエイワスに促されて2人が退室した後、アデルはふう、と息を吐き出した。

「これで国内の大きな力を持つ貴族は粗方まとめ上げたかな」

「そうですね。ブライトに着いた貴族は出兵した者以外は肅清しました。

あと残っているのは日和見の連中だけです。

属国もブライトに着いた国も多いですが、リシダ国とファーレン国は此方に着くとこの事です」

「そう。後は戦場で決着を付けるだけだね」



「はい。既に諸侯軍の編成は出来ております」  
「分かった。皆、よろしく頼むよ」

アデルが立ち上がると、エイワス達は跪き臣下の礼を取り、ニヤリと笑みを浮かべる。

「アデル陛下に勝利を捧げましょう」

## 開戦

本隊と思われるハルドリア王国軍をブライト王が率いて出立したとの報告が届いてから半月程が過ぎた頃、私達が陣を張るレクセリン砦を扇状に取り囲む様に侵略軍が包囲していた。

レクセリン砦の尖塔の1つ、見張り用に周囲を見渡せる様になっている場所からその光景を見る私とルーカス様は、冷静に敵の戦力を観察していた。

「レクセリン砦を奪還する時にかなりの魔物を討伐した筈だが、まだ結構魔物が残っているな」

「そうですね。しかし、質の面ではだいぶ落ちている様に見えますわ」

「ふむ、目立つ魔物は変異種らしき竜種とジャイアントワームくらいか……おっと、妙なホブゴブリンも居るな」

ルーカス様の視線を追うと、やけに上等な鎧や魔法武器らしき剣や盾を手に持ち、更に同じく魔法武器の槍を背負っている。

明らかに魔物に持たせる様な装備ではない。

それが与えられていると言うことは、あのホブゴブリンはそれだけの力を持っていると言うことだろう。

「しかし、フリード王子は何故こんな事を？」

もう少し待てばブライト王の軍と合流出来た筈だろう？」

確かに、ブライト王の軍勢と合流して攻められれば、レクセリン砦を守り切る事は出来ない。

それなのにフリードはブラート王の到着を待つ事なく支配していた都市の防衛に少数の兵だけを残してレクセリン砦に攻めよせて来ていた。

「何か理由があるのですかね？」

「そうだな……こちらの間諜に対する攪乱か、何かしらの作戦があるのか……」

「もしくはフリードとブラート王との間で連携が取れていないのかも知れませんか」

「なに？」

「いくらブラート王が戦で名を上げた好戦的な武人とは言え、帝国と王国の間で交わされた不戦協定を破棄する様な今回の侵攻は今までのやり方と明らかに違う気がするのです」

私の説を聞いたルーカス様は顎に手を当てて考え込む。

この説はかなり可能性が高いと思っている。

となると、もしかしたらブラート王の軍勢は暴走したフリードを鎮圧する為に軍を出した可能性も考えられる。

フリードはそんなブラート王を黙らせる為に功を必要としており、その為レクセリン砦を必要として焦って攻め込んで来たとも考えられる。

だが、そう考えると、アデルの動きが分からない。

王国が一枚岩では無いとすると、アデルの立ち位置が重要になる。間諜の報告ではブラート王が居ない王都に、公爵家や边境伯家が諸侯軍を率いて集結し始めているそうだ。

最悪の展開を考えるならば、ブラート王の軍はフリードへの援軍であり、王都に集まっている戦力は後詰である可能性だ。

「まあ、考えても仕方ないだろう。」

今はまだ情報が足りないからな。とにかく、目の前の敵を排除する事が先決だろう」

「そうですね。帝国の各地からの援軍も向かっている様です。流石に間に合わないでしょうけど、幸い、兵站や矢玉などの物資の補充は間に合いましたから、防衛戦なら十分に勝機は有ります」

「ああ、ブラート王の軍が敵への援軍だと考えると、早々に追い返すべきだな」

私とルーカス様が話している間に、侵略軍から馬に乗った貴族らしき男（確か何処かの男爵だったと思う）が何かしらの書状を大声で読み上げる。

よく聞こえないが、多分降伏勧告だろ。

散々、無作法をしておいて、此処はちゃんと戦争形式を取るのかと、少し可笑しく思ってしまう。

すると、別の場所で指揮を取っているオーキスト殿下からの指示が有ったのか、1人の弓兵が防壁の上から降伏勧告の使者に向かって矢を射掛けた。

この矢は決して当てないのが慣例で、弓兵が放った矢も、男爵から離れた地点に落ちる。

これで互いの戦闘意識が確認された。

「始まるな」

「ええ、開戦ですわ」

## 開戦

こうして、戦争作法に則って始まった戦いだが、一進一退の膠着状態になって3日が過ぎた。

その間、私は正直に言って暇を持て余していた。

侵略軍は数こそ多いが、それは魔物で量増ししているだけで、個々の戦闘力や一点突破能力などは優れているが、攻城戦に向いているとは言い難い。

×

此方は、バリスタなどの砦の防衛設備を駆使して近づけない様に立ち回っており、隙を狙って軍の魔導師隊の広範囲魔法を撃ち込む事で数の不利を覆していた。

私が大魔法や【暴食の魔導書】を使えば更に戦果を上げる事も出来るだろうが、そこは政治と言う物がある。

そもそも余所者である私がオーキスト殿下率いる帝国の正規兵を差し置いて武功を独り占めにする訳にはいかない。

なので砦の守備はオーキスト殿下の指揮の下、帝国軍とルーカス様の辺境伯軍が担っている。

ブライト王の軍が合流したら私達も出なければ不味いかも知れないが、その頃には此方も諸侯軍が合流しているだろう。

それまで私の義勇軍は後詰として待機するだけだ。

しかし、やる事はある。

私がドアを開けて部屋に入ると、そこはさながらもう一つの戦場と化していた。

「しっかりと下さい！意識を保って！」

「お湯を早く！」

「包帯足りません！」

衛生兵の腕章を付けた者達や法衣を纏った従軍神官達が忙しく走り回っている。

「エリー軍団長！」

「魔力は回復したわ」

「では甕の水の補充をお願いします！」

「此方の包帯を消毒して下さい」

直ぐに衛生兵や神官から指示が飛ぶ。

私は魔力が多いので水も大量に出せるし、包帯や医療器具を消毒も出来るので重宝されている。

魔力を使い切っては回復させてまた治療を手伝う、これが最近の私の仕事だ。

「ママ」

「アリス」

私を見つけたアリスが駆け寄ってくる。

だが、その足取りは少々覚束ない。

魔力が枯渴しかけているのだろう。

「私、お手伝い頑張ったよ」

「そう、偉いわね。でももう魔力がない様ね。

一旦部屋に戻って休みなさい」

「でも……」

「アリス、休むのも大切よ。ここでアリスが倒れたら迷惑が掛かる

でしょ？」

「うん」

「ルノア、ミーシャ」

私が声を掛けると、風属性の治癒魔法で軽傷者を治療していたルノアと、水や包帯を運んでいたミーシャが仕事を切り上げてよつて来る。

「貴女達もそろそろ休みなさい」

「はい」

「わかりました」

2人にアリスを任せて私は治療の手伝いを始める。

「エリーさん！」

少なくなつた水甕に水を補充していると、遠くの方から私を呼ぶ声が聞こえた。

あの辺りは重傷者の治療をしている辺りだ。

私が急いでそちらに向かうと、指揮官の1人らしい青年をユウが治療していた。

「ユウ！」

「エリーさん、解毒魔法をお願いします。」

魔物の毒を受けている様です」

「分かったわ」

「リリ」

「はい！」

「ナルガ草の粉末とキナの実を」

ユウの弟子であるリリが薬草を手早く調査している。  
その手際は流石、帝国一の薬師の弟子だ。

私はユウの指示通りに解毒の魔法を掛けて行く。

そうして青年の容体が安定すれば次の患者へと向かうのだった。



## 開戦

アルバ・ファーンロルドは帝国の端にあるファーンロルド男爵家の嫡男である。

貴族の嫡男と言えば聞こえは良いが、その実、ファーンロルド男爵家は田舎の貧乏貴族であり、元を辿れば田舎の土地を切り開いた開拓民のリーダーでしかなく、男爵家の者達も普段は領民とともに畑を耕していた。

そんな田舎暮らしが嫌になったアルバは、成人すると共に親類を頼って兵士になるべく帝都に出て来た。

そこで兵士をしている親類のツテで訓練兵になり、1年の訓練を経て正規兵として配属されたばかりだった。

ようやく兵士になったばかりのアルバは、隣国であるハルドリア王国からの侵略軍を迎え撃つ為に、皇太子であるオーキスト殿下に率いられ、レクセリン砦へと出兵して来ていた。

南側の城壁に配置されたアルバは、攻め寄せて来る魔物混じりの軍隊に、少々飲まれてしまっていた。

盗賊やゴブリンの群れの討伐経験はあるが、本格的な戦争など初めての事だ。

緊張に息を飲むアルバの肩を、隣にいた兵士がポンと叩く。

「ゆっくり深呼吸しろ、アルバ」

「兄貴……」

帝都に来てから何かと世話を焼いてもらっている親類だ。

先輩兵士でもあり、アルバが所属する小隊の小隊長でもある。

言われた通り、息を整えたアルバは、雄叫びを上げて攻め寄せる

敵軍との戦闘を開始するのだった。

「うおおお!!」

アルバの突き出した槍が、敵兵の胸を貫く。

現在、アルバの所属する小隊は、防壁から降りて壁際に溜まった敵兵や魔物の死体を焼き払う任務を受けていた。

このまま死体を放置すれば、魔物を誘き寄せたり、敵兵が防壁を越える足場にされてしまう。

そこで、油を掛けて焼いてしまうのだ。

そうすれば、死体を始末出来る上、炎が防壁代わりになってくれる。

アルバもいい作戦だと思った……その死体を焼く任務を与えられるまでは。

仲間が死体に油を掛けている間、敵兵の相手をする危険な任務だ。

だが、一兵士に拒否する事など出来る筈もなく、アルバは同期の戦友と共に槍を振るっていた。

「ぐあああ!!」

「っ」

同期の叫び声に振り向くと、アルバ達に与えられている正規兵用の装備よりも遥かに上等な武具を身に纏ったホブゴブリンが同期の首を刎ね飛ばしていた。

「っ、うわああ!!」

目前で友人を殺されたアルバは、半ばパニックになりながら懸命に槍を振り回す。

それを見たホブゴブリンは、つまらない物を見る目をアルバに向けて、背中の槍を手に取りクルリと回した。

たったそれだけの動作で、アルバの槍は魔法の様に宙高くへと飛ばされてしまう。

「あ、あ、あ……」

空になった自分の手を啞然と見つめるアルバ。

「アルバあああ……!!」

ホブゴブリンが自分に向かって槍を突き出す様子や、目を見開き此方に駆けて来る親類である小隊長の姿が、やけにゆっくりと見えただ。

瞬間、脇腹に焼き型を押し付けられたかのような痛みが走った。

「ぐああああ……!!」

「アルバ……!!」

小隊長がホブゴブリンに剣を振るうが、軽やかに躲かされてしまう。ホブゴブリンが小隊長に狙いをつけようとした時、更に横から別の兵士が剣を突き出した。

「大隊長！」

「こいつは俺が相手をする！お前は負傷者を連れて退がれ！他の奴らも撤退だ！」

「は、はい……」

大隊長はかつてBランク冒険者として名を馳せた人だ。  
そんな人が決死の表情で殿を務めるなか、小隊長の背中に背負われて運ばれる自分を、アルバは何処か他人事の様子に情けなく思っていた。

ユウが調合の為に部屋を出た後も、私は治療の手伝いを続けていた。

「通してくれ、通してくれ！重傷だ、治療を頼む！  
アルバ、頑張れ！もう助かるからな！」

背中に血だらけの青年を背負った男が部屋に飛び込んで来た。血を流しすぎたのか、怪我人の青年は真っ青な顔だ。

「此方に！エリーさん、水をお願いします！」  
「ええ」

私のそばに居たりりが即座に反応し、空いているスペースに青年を寝かせる様に指示をだした。

その青年は槍で突かれた様で、脇腹に大穴を開けている。

「これは……」

無理ね、助からない。

勿論、上等なポーションを使ったり、私の【暴食の魔導書】で【上級治癒】でも掛ければ直ぐに治せる。

しかし、それは出来ない。

この戦場で兵士達には、その階級に応じて使える治療法が制限されている。

魔力も薬も限りがあり、より多くの兵士を救い、継戦能力を維持する為には必要な事なのだ。

見たところ、彼は下級兵士、使用出来るのは下級治癒魔法と下級ポーションくらいだ。

もう助からないなら、これ以上苦しませ無い事が彼の為だ。

リリモユウの弟子として経験を積んだ薬師だ。

当然、助けられ無い事もあると理解しているだろう。

だが泣きながら青年を背負って来た兵士にそれを伝えるのはまだ幼いリリには心苦しいだろう。

私は傷を睨みつけているリリの肩に手を置く。

「……………」

「リリ、私が……………」

懐の短刀を取り出しながらそう言うと、リリは私の腕を握り止める。

「リリ？」

「まだ助かります！エリーさん、消毒の用意をお願いします！」

リリは強い意志を込めてそう告げると、懐から愛用の医療器具を

取り出した。

## 開戦

「リリ、大丈夫なの？」

「はい。勿論、確実にとは言えませんが……助かる可能性は有ります」

そう話しながらもリリは手早く道具を取り出して並べて行く。

鋭く研ぎ上げられたナイフや鋭利な針、何に使うのか分からない物も多くある。

「エリーさん、この道具に消毒の魔法をお願いします」

「ええ」

私は水を創り出しリリの道具を包み込み消毒する。

私の消毒魔法は水属性の魔法なので、光属性の消毒魔法程使い勝手は良く無い。

そのまま青年の傷口も消毒した私は、リリの治療を手伝う。

リリは青年を連れてきた男にも指示を出す。

「彼を押さえていて下さい」

「分かった」

男が青年をがっしりと押さえ付けると、リリは消毒したナイフで傷口を切り開いた。

「お、おい！」

「黙って！治療です」

「ぐああー!!」

青年は痛みで暴れようとするが、男が慌てて押さえ直した。大きく開いた傷口に手を差し入れたリリは、なんと針と糸で繕い物をする様に傷口を縫い合わせ始めた。

「これは……」

リリはポーションや魔法を使う前に、傷口を糸で物理的に塞ごうとしている様だった。

確かに大きく開いた傷口にポーションを使うより、傷口を合わせてポーションを使った方が治癒効果が高い。

それを糸で合わせ続ける事で行おうと言う訳か。

リリは額に汗を浮かべながら手早く傷口を縫うと、最後に下級ポーションを掛ける。

「これで大丈夫です。後は造血薬と痛み止めを飲んで休んで下さい」

「あ、ありがとう!」

「う……あ……」

男がリリの手を握りお礼を言うと、痛みで目を覚ましたのか、青年が薄く目を開いた。

「アルバ!」

「あ……き……ね、は……」

「もう大丈夫だ、この嬢ちゃんが助けてくれたんだ」

青年はリリに視線をやると、再び気絶してしまった。

私は空いているスペースを確認し、青年を移動させる指示を出し



た。

「お疲れ様、リリ」

「はい、お疲れ様です。エリーさん」

「あの治療法はユウが考えた物なの？」

「いえ、アレは私が考案して研究していた治療法です。」

「師匠に見てもらいながらゴブリンで実験して、その後小さな怪我で試していたんです。」

「彼程の大怪我に処置するのは初めてでしたけど」

「そう……」

「アレを自分で編み出した、か。」

「……流石、ユウが弟子に取るだけの事はあるわね。」

「この治療法は多くの人々の命を救う物になるかも知れないわ。」

「その後も次々と運ばれてくる怪我人の治療を行い、魔力が半分を切った頃、私も魔力を回復する為に部屋に戻り、アリス達と休息する。」

「そして翌朝、魔力が回復した私はオーキスト殿下に呼び出された。」

「どうやらブライト王が近くまで来ているらしい。」

「帝国軍の面子の問題も有るが、その為に負けてしまっただけでは意味が無い。」

「オーキスト殿下はその辺りの引き際は心得ているらしく、私達義勇軍にも出撃を命じたのだった。」

## 開戦

ブライト王が来る。

その話を聞いた帝国軍の上層部達は僅かに動揺を見せた。

『雷神』と渾名されるブライト王の武名は、戦場で生きる軍人達にほど轟いている。

勿論、それで怖気付く様な事は無いが、張り詰めた緊張感が空気を満たす。

軍の情報士官が資料を見ながら状況を説明する。

「ブライト王の目的は不明だが、まず間違いなく侵略軍への援軍だと思われます」

「暴走したフリード王子を止めに来た可能性は？」

「絶対に無いとは言えませんが、可能性は低いでしょう。もしその様な目的なら事前に連絡が有って然るべきです。

事前通告無しに国境を越えた時点で協定違反は明らかでしょう」

「うむ、やはり最悪の事態を想定するべきだな。

ブライト王が率いる軍は敵の援軍と想定する。

それを踏まえて何か意見がある者は居るだろうか？」

オーキスト殿下の問い掛けに、数人の軍人が発言の許可を求めた。オーキスト殿下が許可を出す。

「やはり、ブライト王との合流を許すのはリスクが高いと思われますな」

「然り、レクセリン砦を包囲している敵軍を先に撃破すべきと具申致します」

「防衛では無く撃つて出るとすると魔物が厄介ですね」

「うむ……エリー軍団長。敵軍の魔物に関して何か意見はあるだろうか？」

「そうですね。義勇軍に所属する多くは冒険者です。魔物との戦闘なら、専門家である彼等を頼るのが常道かと」

「役割を分けると言うことか」

「はい、魔物は義勇軍が、侵略軍は帝国軍、皆の防衛をレブリック辺境伯軍が担うのがよろしいのではないのでしょうか」

私の進言を元にオーキスト殿下や参謀達が話し合う。

その上で決まった作戦は、全軍から選抜された魔法使いが広域魔法を撃ち込み、混乱の隙に義勇軍が魔物を、軍が兵を攻めると言う物だった。

その命を了解した各員はそれぞれ準備に動き始める。

決行は明日、朝日が昇るのと同時に、だ。

義勇軍に与えられた作戦室に主だった者達を集めた私は、作戦内容を伝えた。

「ようやく出番だな！」

「へっ！魔物相手ならこつちの物さ」

「魔物の素材はどうなるんだ？」

得意分野を任される事になった冒険者達の士気は上々ね。

普段、警備や護衛などを主としている傭兵団には別の指示を出しておく。

魔物と戦っている冒険者に、侵略軍の兵士が不意打ちしない様に牽制する役目だ。

魔物と兵士の板挟みになる危険な役目だが、こう言った中規模の

集団戦は彼等の得意とする所だ。

その他、細かい指示を出した私は、最後に今日はお酒を控えて早めに休む様に言っつて、アリス達が待つ部屋に戻り明日に備える。

作戦決行当日、私は選抜された魔法使い達と共に城壁の上から少し離れた場所に布陣するハルドリア王国の侵略軍を見渡していた。見張りは立っているが、この時間は気が緩んでいる筈だ。

私は集まった魔法使い達に行動内容を確認する。

「先ず、私が敵陣の対魔法防御結界を破るわ。  
あなた達はその後、時間差を付けながら魔法を撃ち込んで頂戴。  
火属性持ちは備蓄された物資、その他の属性持ちは歩兵戦力を狙つて。」

火属性持ち以外は威力よりも攻撃範囲を意識して」

「そうなるかと一撃で戦闘不能とするのは難しいと思いますが？」

「いいのよ。この攻撃で敵兵を倒す必要は無いわ。」

負傷させて戦力を削るだけで良いのよ。」

相手は此方の領土に突っ込んでいるから、簡単に補給は出来ない。なら敵兵を殺すよりも負傷させて医薬品などの物資を消費させたり救護の為の人的リソースを割かせた方が良いわ」  
「なるほど、了解しました」

指示を終えた私は魔力を練り上げ魔法を構築する。

狙いは敵陣を囲む結界。

戦争では自陣を守る為に結界を使うのが定石だ。

そしてその結界の強度はなかなかの物。  
だが、私の魔法なら撃ち破る事が出来る筈だ。

「豪雪と氷塊 薄氷と魔槍 穿ち、撃ち抜き、抉れ  
それは白き終焉を齎す者 我が名は氷狼【霜巨人ヨツンヘイムの氷槍】」

## 開戦

私が創り出した巨大な氷の槍が高速で侵略軍の陣地へと飛ぶ。

この魔法は貫いた物を凍らせるなどの特殊な効果を持たない純粋な物理攻撃魔法だ。

陣地の防衛で使われる結界魔法は、主に魔法に対する防御であり、物理攻撃に対しては矢を止めるのがせいぜいだ。

この魔法の威力ならば一撃で結界を破壊する事が出来るだろう。

氷の槍が侵略軍の陣地へ到達すると、光の膜が揺らめいたが、次の瞬間ガラスが割れる様な音と共に結界が光の粉となって消える。

そして降り注ぐ数々の魔法。

炎の槍や岩の礫、風の刃が侵略軍の陣地に備蓄されている物資を焼き、天幕で休んでいた兵士を負傷させて行く。

私も再び魔法を使い、無数の氷柱を雨の様に降らせる。

それを確認したオーキスト殿下が合図を出すと、義勇軍と帝国軍が侵略軍に向けて進み始めた。

侵略軍は突然の魔法攻撃にまだ混乱しており、立て直すには少し時間が掛かる。

兵士の命令系統はめちゃくちゃで、魔物はパニックになって好き勝手に暴れ出している。

「私達も行くわよ」

魔法を撃ち終えた魔法使い達にそう言って、私も防壁から跳び降り、フリーユージェルを片手に進撃する義勇軍の後を追うのだった。

その時、フリードはまだ眠っていた。

布陣した軍の中心部、一際大きな天幕の中で精鋭に周囲を警戒させた上で休息を取っていたのだ。

シルビアは占領した都市に残してきたので、今は1人だ。

自身の采配を以てしても数日ばかりでレクセリン砦を落とさない兵士達を無能と散々罵った後、戦地とは思えない豪華な夕食を食べ、わざわざ持ち込んだベッドに横になったのだ。

そんなフリードは明け方、空気を揺るがす轟音と、大地がひっくり返る様な衝撃に叩き起こされる事になる。

「な、なんだ！何が起こっている！」

無警戒に天幕から飛び出したフリードに空から鋭く尖った氷が降り注いだ。

「殿下あー！！」

天幕を警備していた騎士が咄嗟にフリードを突き飛ばした。

彼は、王城から逃してもらった時に連れて来た男の1人で、フリードにたいする忠誠心の高い数少ない騎士だ。

騎士はフリードを庇った事で背中から複数の氷柱で貫かれてしま

「じはっ……で、殿……か……ご、ご無事で……」

騎士のお陰で難を逃れたフリードは立ち上がり、血を吐き膝を突く男に歩み寄ると、その頭を蹴り飛ばした。

「この無礼者があー！この俺を突き飛ばすなど、許されると思っ  
ているのかー！」

「げぶ……で……ん……」

「貴様ら騎士が王太子である俺を身を挺して守るのは当然の事だろ  
うが！身を盾にするなり、剣で打ち払うなり出来ないのか軟弱者め  
！恥を知れー！」

騎士を罵って溜飲が下がったのか、フリードは少し冷静になり、  
自身の身代わりとなり、だんだんと冷たくなって行く騎士を捨て置  
き周囲を見渡した。

「ちっ！これはなんの騒ぎだ！誰か報告せよ！」

「で、殿下！ご報告致します！突如、強力な魔法で結界が破壊され、  
陣地への魔法攻撃を受けております！」

「何をやっているんだ貴様らは！結界担当の魔法使いは何処だ！処  
刑してやるー！」

「い、今はそれどころでは有りません。物資に火が着き消火が追  
いついておらず、また負傷者が多く出ております。」

また、帝国軍が此方に向かっているとの報告も……殿下、どうか  
撤退を！」

「ふざけるな！」

撤退を進言した兵士を殴り付け、フリードは叫ぶ。

「帝国軍を迎え討て！」



「お待ち下さい！負傷者の手当にも人が足りていません！とてものでは有りませんが迎え討つなど……」

「戦えない負傷者など放つて置けば良いだろう！」

「なりません！その様な事をすれば士気が……」

「五月蠅い！」

この俺の采配に意見するな！この軍の指揮官はこの俺だ！

命令に反するならば今この場でその首を叩き斬ってやるぞ！」

「ぐっ……ぎ、御意」

兵士は罵倒の言葉を飲み込んでフリードの命令を了承する。

絶望的な戦いに赴く事になると確信した男は、王国に残してきた妻と子供の顔を思い浮かべながら腰の剣を確かめ、前線へと走って行った。

## 開戦

すれ違いざまに敵兵や魔物を斬りながら駆ける私の前で魔物に苦戦する冒険者の姿があった。

3人の冒険者が1体の魔物を囲んでいるが、冒険者側の方が劣勢の様だ。

相手は以前尖塔から見たホブゴブリンか。

ホブゴブリンは冒険者の攻撃を剣と盾で巧みに捌き、隙を見つけては堅実にダメージを蓄積して行く。

魔物と言うより、経験を積んだ武人の様な安定した冷静な戦い方だ。

群がるオオカミ型の魔物の首を斬り飛ばす為に足を止めた私の視線の端でホブゴブリンに殴り掛かる冒険者が居た。

「ぬおおりゃあー!!」

「グル」

ホブゴブリンが盾を掲げその拳を受け止める。

帝都の祝祭の武術大会で優勝したAランク冒険者、ゴウランだ。

「ふん！」

ゴウランは回し蹴りに肘打ち、手刀からの正拳突きと、流れる様な連撃を繰り出す。ホブゴブリンは全てを防ぎ切る。

ホブゴブリンの技も見事な物だが、手にする武器もかなり上等な物だ。

剣、盾、槍、全てが魔法武器。

効果はそこまで強くは無さそうだが、身体強化や武器の強度強化など、地味だが有用な効果ばかりだ。

ゴウランとホブゴブリンの一進一退の攻防が続く。

そこに他の冒険者も弓や魔法で援護する。

すると、ホブゴブリンはゴウランの僅かな隙を突き、弓を構えるエルフの冒険者に剣を振り下ろした。

「あぶねえ！！」

ゴウランは咄嗟にエルフの冒険者を庇い、ホブゴブリンの攻撃を受けてしまう。

「ゴウランさん！」

知り合いだったらしいエルフの冒険者が自分を庇って斬られたゴウランを咄嗟に抱き抱えてホブゴブリンから距離を取ろうとするが、女性であるエルフの冒険者では、長身で筋肉質なゴウランを素早く運ぶ事が出来ない。

オオカミ型の魔物を斬った私は、【強欲の魔導書】から短剣を取り出す。

フリーユージェルは強力だが、防御が出来ない。

その欠点をカバーする為に私は左腕に手甲を装備していたのだが、この短剣はそれを更に強化する為に用意した物。

斬れ味はそこそこだが、刃が厚く、敵の剣を絡め取る為の返しも付けたオーダーメイドの品だ。

「ぐっ！」

私は傷を押さえるゴウランに迫るホブゴブリンの剣を短剣で受け止めた。

「貴女はゴウランを治療室に運びなさい」

「は、はい！」

エルフの冒険者は短く魔法を唱えると風属性魔法でゴウランの身体を浮かせてレクセリン砦へと走って行った。

「……………随分と紳士なのね」

「ギイウ」

私が牽制していたとは言え、ホブゴブリンは戦闘不能になり撤退するゴウランやエルフの冒険者に手を出す素振りを見せなかった。むしろ、私が戦い易い様に彼等が去るのを待っていた様にも思えた。

ホブゴブリンは私と相對すると好戦的な笑みを浮かべた。

「戦闘狂ってやつね」

冒険者や兵士にも偶にいるわね、戦う事に生き甲斐を感じる手合いは。

このホブゴブリンからは彼等と同じ雰囲気を感じる。

私は左手の短剣を前に出し、右手のフリーユージェルを自分の身体で隠す様に構えた。

「良いわ、始めましょう」

## 開戦

閃光の様に突き出されるホブゴブリンの槍を左手の短剣で滑らす様に捌き、返しを引っ掛けて押さえ付けフリーユージェルで両断しようとする。

しかし、ホブゴブリンは直ぐに槍を捻り短剣の返しを外すと、素早く槍を回しながら腰の鞘に落としていた剣を抜剣、逆袈裟に迫る刃をバツクステップで回避した私に片手とは思えない威力で連続突きを繰り返して来る。

「【氷棘】」

更に大きく距離を取りながら尖った氷をホブゴブリンの足下から突き上げる。

「ゲル！」

咄嗟に槍を手放したホブゴブリンは背負っていた盾を手にして鋭く伸びる氷の棘に叩きつけ撃ち砕く。

魔力を込めて精製した私の氷は生半可な武器よりも余程硬い。

それをただのシールドバツシュで砕くとは少々驚いた。

「【縮地】」

盾を持つホブゴブリンの腕がシールドバツシュで伸び切った所にスキルで間合いを埋めた私は、胴を一雑にする様にフリーユージェルを振り抜いた。

「ッ  
」

それを盾で受けようとするホブゴブリンだったが、フリーゲルの刃が抵抗無く盾を切り裂き始めたのを見た瞬間、盾を手放して身を退け反らせる。

盾を両断したフリーゲルは、ホブゴブリンの胴を浅く斬るが、致命傷には程遠い。

「素晴らしい判断力と反射神経ね、ホブゴブリンにしておくのが惜しいわ」

「グル、グギヤアガア」

何を言っているのかは分からないが、何となく同じような事を言っている気がした。

ホブゴブリンは足下に転がる槍を足で跳ね上げると、空いている左手で掴み構える。

右手に剣、左手に槍と言う変則的な二刀流であるが、その立ち姿にはぎこちなさなど無く、一流の武人の風格を感じた。

どちらからとも無く攻撃を始めた私達は、一合、二合刃を合わせる。

しかし、押されているのは私。

向こうは両手の剣と槍で雨霰と刃を撃つが、それを防御する私は、左手の短剣しか使えない。

ホブゴブリンも私のフリーゲルの斬撃は受け止める事は出来ないと理解したのか、斬撃は躲すのみだ。

それでも手数はホブゴブリンの方が上だ。

一步、また一步と後ろに退がる。

「っ  
」  
「グルッ！」

戦争の余波で荒れた地面に足を捕られ、ほんの僅かに私の重心がブレてしまう。

ホブゴブリンはそれを見逃す事なく、間合いを詰め、剣を振り翳す。

「くっ！」

身を投げ出す様に跳び、剣を避ける。

そこに更に槍を突き出すホブゴブリン。

地面を転がる様に躲す私を追って追撃するホブゴブリンの槍を狙ってフリーユージェルを振るうが、ホブゴブリンは槍をクルリと回して斬撃から槍を守った。

私はその隙に素早く身を起こして立ちあがるうとするが、瞬間、ほんの僅かな揺れが私のバランスを崩した。

その揺れは槍を回すのと同時に振り上げられたホブゴブリンの右足が大地へと振り下ろされた衝撃による物だった。

「【震脚】」

地属性の魔力を持つ者が使うスキルと酷似したその技は、通常時ならば幾らでも対応出来る物だった。

しかし、私は転倒した状態から起き上がる絶妙なタイミングで受けた。

結果、私は一瞬隙を見せてしまったのだ。

「グルガアア！！！」

「ぐっ!!」

ホブゴブリンが剣を振り抜くと同時に血飛沫が舞う。  
身を捻って致命傷を防いだ私だったが、躲しきる事は出来なかつた。

再びホブゴブリンと向かい合いながら息を切らせ、フリーユージェルを構える私の背後にドサリと落ちたのは、短剣を握ったままの私の左腕だった。



## 開戦

「ぐっ……」

私は血が流れ落ちる左腕に魔力を集めて身体強化を強める。  
大した効果は望めないが、止血代わりだ。

「グル、ギオン」

私の体勢が整うまで待っていたホブゴブリンが再び一步を踏み出す。

「ギオオオ!!!!」

「っっ」

突然、雄叫びが聞こえた。

私の血に誘われたのか、上空から巨大な昆虫型の魔物、デスビートルとギガヤンマが此方に急降下して来た。

魔法で迎撃しようとするが、間に合わない。

「グルッ!!!!」

「【遍断ち】」

その昆虫型の魔物を止めたのはホブゴブリンが投げた槍と飛来したサンダーバードに乗ったユウの大斧の一撃だった。

こちらに少しだけ視線を向けたユウは、一瞬迷った瞳を見せるが、直ぐに空高く舞い上がると更に寄って来る飛行型の魔物を次々と倒し始めた。

ユウのサンダーバード『オリオン』の背には、手綱を握りながら大斧を振り回すユウと、その後ろで長剣を握る魔族の冒険者が乗っていた。

確か、ユウの知り合いのAランク冒険者だった筈だ。

あの2人なら、上空を任せても大丈夫だろう。

「ふう……待たせたわね」

私は息を整えてホブゴブリンに向き直った。

私を襲おうとした魔物を槍を投げて倒すとは、随分な騎士道精神の持ち主ね。

「……………」

私はフリーユゲルを一旦口に啞えて手を空けると、魔物に突き刺さったホブゴブリンの槍を引き抜き、投げ返した。

ホブゴブリンが投げ渡された槍を掴み取り、魔物の体液を振り払った。

「さあ、再開と行きましょう」

「ゲル」

再び激しい撃ち合いが始まった。

とは言え、左腕を失った私は、ホブゴブリンの攻撃を受け止める事が出来ない。

その為、全ての攻撃を避けなければならず、完全な劣勢だ。

どんどんと後退する事を余儀なくされた私は、背後に転がるアレ

を確認し、ホブゴブリンの槍を躲すと同時に大きく跳ぶ。  
そして地面に転がっていた私の腕をホブゴブリンに向けて蹴り上げた。

「我が血を喰らい 咲き誇れ徒花【氷血扇華】」

私の腕を触媒にした魔法を発動させる。

自分の肉体を触媒にする禁忌の古代魔法だ。

短い詠唱で発動出来るが、その威力は強力だ。

腕一本だけで発動したので完全な物ではないが、瞬時ホブゴブリンの周囲を真っ赤な氷の薔薇の蔦が包み込み、その効果範囲内を凍結させた。

「……………っ」

しかし、ホブゴブリンは一步を踏み出す。

赤い蔦を引きちぎりながら突き進んで来る。

その体を凍りつかせながら。

赤薔薇の結界を突き破ったホブゴブリンは、しかしながら満身創痕。

私に僅かに届かず倒れ伏した。

その衝撃で凍りついた腕は砕け、次第に全身が凍って行く。

「グ……………ルオ……………」

「はぁ、はぁ……………貴方は強かったわ」

「……………ギア……………」

「【強欲の魔導書】」

ホブゴブリンの死を確認し、神器を発動させた私は、フリーユージェ

ルとホブゴブリンの死体を収納した。

「エリーさん！」

「ユウ」

サンダーバードが私に向かって急降下し、その背のユウがこちらに手を伸ばしていた。

その手を掴み取った私は、ユウと魔族の冒険者に引き上げられ、レクセリン砦へと運ばれるのだった。

## 開戦

私を背に乗せたユウの従魔、サンダーバードのオリオンはレクセリン砦の中庭へと、突風と共に舞い降りた。

中庭を警備していたレブリック辺境伯軍の兵士達を無視してユウと魔族の冒険者に支えられながらオリオンの背中から飛び降りる。

「大丈夫ですか、エリーさん」

「ええ、何とかね」

あのホブゴブリンは本当に強かった。

洗練された武術に強力な武器、更には気高い騎士道精神まで持っていた本物の武人だった。

だからこそ私は、彼の亡骸をわざわざ回収したのだ。戦が終わったら静かな所に埋葬してあげるつもりだ。

いや、こんな事を考えている場合では無い。

血を流しすぎたせいで思考が定まらず、ふらつく私を支えながらユウが指示を出す。

「義勇軍団長のエリーさんが重傷です。

道を開けて下さい」

その言葉に慌てた兵士達が道を開け、また報告の伝令が走る。

「ユウ……麻酔薬と気付薬……持ってるでしょ？」

「も、持っていますですがそんな気休めでどうにかなる怪我では有りませんよ。」

早く傷口を塞いで出血を止めないと……」

「いいから……」

「は、はい」

ユウが取り出したポーションを飲むと痛みが和らぎ意識がハッキリとして来た。

流石は帝国一の薬師だ。

並のポーションより一段上の効能だ。

「はあ、はあ、ユウ、戦況はどうなっているの？」

「既に大局は決まっています。変異種のホブゴブリンや竜種などの強力な魔物は討伐され、負傷者を見捨てて無謀な突撃をして来た侵略軍は帝国軍に返り討ちにされました。」

それにより侵略軍の士気はガタ落ち、逃亡兵も出ていて継戦は不可能、敵首脳陣は撤退、友軍は追撃戦に移行しています」

「そう、ならば暫くは戦う必要は無さそうね」

私は魔力を凝縮し、神器を発動させた。

流石にこの傷で神器を使うのは辛いけど、今は時間との勝負だ。

「神器【嫉妬の魔導書】」

他者の神器を記録する【嫉妬の魔導書】をめくり、目当てのペーシを開いた私は再び魔力を操る。

「神器【祝福の鐘】」

創り出したのは黄金に輝くハンドベルだ。

「じ、これは一体……」

「説明は……後よ」

驚くユウを他所に、私はハンドベルを鳴らす。  
すると打ち鳴らす度に虹色のベールが現れて私を包み込む。  
そして全身を包み、一度強く発光すると光の粉となってハンドベルと共に中空へと溶けて消えてしまった。

「ふう、危なかったわ」

私はすくつと立ち上がり、身体の各部に異常が無いか確かめる。  
うん、問題無いわね。

斬り飛ばされた左腕も無傷で元に戻っている。

「な、何ですかそれは」

「私の神器【嫉妬の魔導書】の力は他者の神器を記録し再現するのよ。今のはハルドリア王国王都の大司教様の神器、能力は完全治癒よ」

「凄まじい能力ですね。普通、魔法でも薬でもあれだけの大怪我なら完治まで数日掛かりますよ」

「それなりに制限が多いけどね。【嫉妬の魔導書】を使ってしまったから私は72時間、一切魔力を使えないわ」

「それでも強力な神器ですよ」

「それでも使い勝手の良い能力じゃ無いわ。

【祝福の鐘】は治癒対象に制限が多いのよ。

息があればどんな傷でも治せて、出血して失った血も元に戻るけれど、使えるのは1ヶ月に1度、同じ対象を治癒出来るのは1年に1度、治せる傷は1時間以内の傷まで、ってね」

「それは……確かに乱用は出来ませんね」

「ええ、切り札にはなるけど、魔力が使えなくなるから連戦は出来ないわ」

そんな事をユウと話しながらレクセリン砦の司令部に向かって歩いてみると、慌てた様子のルーカス様が姿を見せて、平然と歩く私の姿に目を見開いて驚いていた。



## 敗退

「くそ！くそ！無能共めえ！！」

「で、殿下、お静かに願います。敵の追撃部隊にこちらの位置が…

…」

「五月蠅い！それくらいわかってる！」

レクセリン砦を攻め落とすべく軍を率いていたフリードは、返り討ちに合い占領している都市まで撤退を始めていた。

既に陽は落ち、深夜に近い時間帯だ。

フリードを護衛する者達も次第に数を減らし、今では10人も居ない。

こんな状態で帝国の追撃部隊に見つかれば一巻の終わりである。その為、フリード達は火を焚く事もせず、夜露で湿った草木の中に身を隠しながら息を潜め、身体を休めていた。

今まで、まともに軍事訓練などに参加した経験も無いフリードには耐え難い環境であった。

苛立ちながら周囲の兵士達を邪魔だと遠ざけたフリード。

「おい4号！出てこい」

「此処に」

そのフリードの声掛けに近くの草むらから兵士の格好をした1人の男が姿を見せた。

フリードの護衛をしていた兵士達の中には居なかった男だ。

彼は王国からフリードに与えられている隠密……通称『影』と呼ばれる者達の1人だ。

影に名前は無く、番号で呼ばれる。

4号は王命により、フリードに忠誠を誓った影であった。複数居る影の中でも、王族にはそれぞれ腹心と言える者がいる。フリードは王城から逃げ出す際、自身の影である4号を連れて来ていた。

その実力は高く、フリードがここ数日、少数の護衛だけで逃げおせているのも、偏にこの4号が敵を攪乱し、また排除して来たからに他ならない。

「今回の戦で本陣の結界を破壊したクソ野郎は何者だ」

「確かな情報では有りませんが、敵兵の会話の内容から推察すると、義勇軍団長の『黄昏の魔女』と呼ばれる者の仕業だと思われます」

「黄昏の魔女？ふん、女か。」

義勇軍と言う事は傭兵か何かだろうな。

4号……………周囲の敵はどうだ？」

「現在この周囲に帝国軍は居ません。」

明日には占領している都市の勢力圏に入るかと」

「よし、ではお前はレクセリン砦に引き返し、その義勇軍団長とやらに接触しろ。」

所詮卑しい女傭兵だ。帝国からの報奨金の倍額をくれてやると言えば尻尾を振って此方に着くだろう。

もし、此方に着かないならば殺せ。出来るな」

「帝国皇太子やレブリック辺境伯ならば難しいでしょうが、義勇軍は所詮外部戦力、そこまで厳重な警備では無いでしょう」

「よし、行け」

「御意」

フリードが命じると、4号は再び音もなく草陰へと姿を消した。

これで、あの忌まわしい魔法の主は無効化される。

もし、味方に着いたならば戦力として利用し、最後には始末すれば良い。

フリードは満足げに眠りにつくのだった。

翌日、朝早くから都市を目指して進んでいたフリード達の前に兵士が姿を見せた。

一瞬、帝国兵かと身構えたが、その鎧に刻まれたハルドリア王国の紋章を見て安堵の息を吐く。

「フリード殿下、ご無事で何よりです」

「殿下、お疲れの所誠に恐縮で御座いますが、ブライト陛下がお待ちです。我々と御同行を願います」

「ちっ」

どうやら、戦地へ向かっていたブライト率いる王国軍は、レクセリン砦でのフリードの敗北を察して、占領中の都市に進路を変えらしい。

ブライトは既に到着しており、都市の実権も奪われていた。

兵士達に連れられて都市の領主の屋敷の執務室に来たフリードは扉の先で、父王と久方ぶりの再会を果たした。

「お久しぶりです父上、ですが私が攻め落とした都市に口を出すはいかがな物でしょうか？」

これは私の功績でありまばらばあー!!」

そこまで口にしたフリードはとてつもない衝撃を受けて意識を失う。

目の前には、さっきまで椅子に座って隣に立つジークと共に書類を見ていた筈のブライトが拳を振り抜いた姿で立っていた。

## 潜入

4号と呼ばれる男が居る。

彼はハルドリア王国で生まれ、王家に仕える『影』となると決まった時、その存在を示す全ての記録が抹消された、存在しない人間である。

任務は王家の命に従う事。

自分の意思は不要。

ただ命令に従うだけの存在である。

国王であるブラートから与えられた命令はフリード殿下に従う事。その命令は撤回されていないので、4号は国王陛下の意に反したフリードに未だ従っていた。

そのフリードから新たに命令されたのは、ユーティア帝国の義勇軍団長『黄昏の魔女』の離反工作、又は暗殺である。

何処にでも居るありきたりな顔をした4号は、他人の印象に残らない。

隠密系のスキルや感覚を狂わせる閻属性魔法を併用する事で、あらゆる場所に溶け込み潜入する事が4号の得意技だった。

レクセリン砦の周囲に駐屯する義勇軍の傭兵や冒険者達の中に溶け込んだ4号は、数日掛けて情報を集めていた。

それによると、黄昏の魔女はトレートル商会と言う帝国の商会を経営するエリー・レイスと言う女商人らしい。

トレートル商会と言えば今話題の大商会だ。

これは金銭での取り込みは難しいな。  
そうになると暗殺するしかないか。

4号はレクセリン砦内に与えられている義勇軍団長の私室の場所を調べ上げ、夜陰に紛れ潜入していた。

レクセリン砦の内外の歩哨を隠れてやり過ごし、目的の部屋へと到達する。

一切の音を立てずにドアを僅かに開き、その隙間から滑り込む様に部屋に侵入した。

薄暗い部屋の中、ベッドに忍び寄る。

「っ  
」

刃を黒く染めたナイフを手にした4号は、漏れそうになった声を飲み込んだ。

エリー・レイスが眠っている筈のベッドがもぬけの空だったのだ。そして、それを視認すると同時に喉元に突き付けられた刃の感触。突然背後に現れたその気配の主は、軽く腕を動かすだけで4号の首を掻き斬れる状態だ。

「こんな夜更けに、レディの部屋にどんな御用なのかしら？」

部屋の隅、ベッドの隣にある小さな応接セットのソファにいつの間にか腰掛けている女が4号に声を掛けた。

「……………」

「【灯】」

「なっ  
」

女が魔法で部屋を明るくすると、今度は堪えきれずに声が漏れてしまった。

応接セットのソファに座るその女は、銀系の様な髪に透き通る様な青い目をした美女だった。

「馬鹿な……エリザベート様？」

「久しぶりね、4号」

4号が視線だけをずらして背後を窺うと、見覚えのある黒髪の従者が短剣を握っていた。

「ミレイ殿……」

4号は今まで集めた情報から現在の状況を整理する。  
すると答えは1つだ。

「エリザベート様。貴女が……エリー・レイスなのですか」  
「そうよ」

その返事に4号は手に持ったナイフに僅かに力を込めるが、さかさずミレイが短剣の刃を少し引き、4号の首から鮮血が一筋落ちる。

「……………」

ミレイの無言の催促に、4号はナイフをエリーの足下に放った。  
それを見てミレイも短剣を下げる。

「最近、私の事を探っている者が居ると報告があったから、誘い込んでみたんだけど、掛かった獲物は意外と大きかったわね」

「……エリザベート様、お戻りになるつもりはございませんか？」

「無いわね。フリードは殺すわ。ブラート王や宰相もね」

「そつ……ですか」

「ところで4号」

エリーが立ち上がり4号の正面からゆっくりと近づいて来る。  
手には国宝である名剣フリーユージェル。

「王国を抜けて私の下に付く気は無いかしら？」

エリーが尋ねる。

ただの間者なら此処で裏切を選ぶ者も居るかも知れない。

そもそも、フリード殿下に正義は無い。

それくらいは分かっている。

分かっているが、その上で命令に従う。

それが自分達『影』なのだ。

「有りえませんね」

「そつ、知ってたわ」

エリーは、手にしたフリーユージェルを一閃した。

## 大戦

ブライト王はフリードが制圧した都市に駐留していた。

碌に統治もされていなかった都市は酷い有様で、ブライト王が兵を率いて到着した時には、フリードが連れて来ていた傭兵や不良冒険者が好き勝手に暴れ回り、我欲の限りを尽くしていた。

その光景を目撃したブライト王は、すぐ様兵士に命じて住民に狼藉を働く者達を捕縛し、特に酷かった者達に対しては都市の広場で公開処刑を行った。

その結果、都市の住人達は表面上はブライト王の一行を受け入れた。しかし、あくまでも表向き。

内心では侵略者である王国軍に対して不満を募らせていた。

「やはり、都市の住人の不満は相当な物ですね」

「……そうだろうな。あのバカは占領した後、碌に統治もせず、略奪や暴行を止めようとしなかった。

その父である俺への反発が有るのは当然だ。

兵達には改めて、住人に対して手を出さない様に通達しておけ。

都市の住人に対して略奪や暴行を行った者は公開処刑とする」

「畏まりました」

ジークが部下に指示を出すのを見ながらブライト王は尋ねる。

「フリードはどうしている?」

「あの令嬢と共に屋敷の部屋に軟禁しております」



「そうか」

フリードが戦場から逃げ帰って来た時、ブライト王に会うなり、ふざけた事を言い始めたのでブライト王が殴り飛ばしたのだ。

「軍の方はどうだ？」

「属国や貴族の軍は続々と集まって居ます。」

しかし、帝国の方も国内の戦力がレクセリン皆へと集まりつつ有ります」

「そうか……………フリードを呼べ」

「フリード殿下を？」

「そうだ。奴は連れ帰り今回の責任を取らせて幽閉するつもりだったが、都市での統治の失敗は看過出来ん。」

「軍を率いさせて最前線に出す」

「ですが……………」

「彼奴は飾りで良い。実績が無ければ幽閉も厳しくなるだろう」

「御意」

ブライト王の執務室に不貞腐れた様子のフリードが入って来た時だ。

いつの間にか執事姿の老境の男がブライト王の背後に立っていた。

「どつした1号」

男がブライト王の耳元に口を寄せる。

「なに、直ぐに連れて来い！」

ブライト王が言うと、左右を支えられた男が執務室に入って来た。左腕と片目を失い、全身に傷を負った特徴の無い男だ。

「で、殿下……も、申し訳……」

「4号」

「4号、何が有った？」

執事姿の男が懐から取り出したポーションを4号の口に含ませると、出血は止まり、顔色も少し良くなった。

「ご、ご報告致します。」

私はフリード殿下より、ユーティア帝国義勇軍団長エリー・レイスの離反工作、又は暗殺の命を受け、レクセリン砦へと潜入致しました。

そこで振り返ちに遭い……」

「ちっ！無能め」

「フリード、貴様は黙っている！！4号、お前はフリード付きから外し、俺の元に戻す。報告を続ける」

「はっ！レクセリン砦に潜入した際に判明した事なのですが……義勇軍団長エリー・レイスは……」

4号は一瞬言葉を切り、チラリとジークを見た後告げた。

「行方不明となっているレイストン公爵令嬢、エリザベート・レイストン様でした」

## 大戦

ブライト王が侵略軍と合流してから3ヶ月、ついに王国軍がレクセリン砦に向けて進軍を始めた。と斥候から情報が入った。

オーキスト殿下に集められ、その説明を受けた私達は各々の麾下の軍についての報告を挙げる。

「レブリック辺境伯軍は問題ありません。兵員、糧食、武装、全て万端です」

「うむ、エリー団長はどうだ？」

「義勇軍も準備は出来ておりますわ。戦が長引いております故、多少の人員の入れ替わりも有りますが、兵数は保っております」

「そうか、帝国からの補助金が出ているとは言え、冒険者や傭兵への報酬の多くを私財を以て賄ってくれているエリー団長には感謝の念が絶えない。」

以前、侵入者が居たと報告されているが、その後はどうだ？」

「ええ、そちらも問題有りません。取り逃したのは残念ですが、警備も強化されておりますし、此処数ヶ月は何事も有りません」

その後、オーキスト殿下は最近合流した帝国貴族の諸侯軍にも同様に聞き取りをし、また各指揮官にも声を掛けている。

会議を終えた私は、左足を僅かに引きずりながら私室に戻り、ミィシャが淹れた珈琲を受け取った。

「ついに王国軍との戦いが始まるのですね」

ルノアが不安げに呟いた。

「そうね。でもそれもまだ1ヶ月は先の話よ」

「え？でも王国軍が居る都市までそんなに離れていませんよね？」

「ええ、でも軍と言う物は馬車よりもずっと移動が遅いのよ。とくに歩兵は鎧を着て武器を持ち、更に自分の荷物も持たないとダメでしょ？軍は1番足が遅い者に合わせなければならぬから移動はゆっくりになるの。」

多分、ミレイやバアルも間に合うわ」

ミレイとバアルは一度帝都に戻っている。

このレクセリン砦に布陣してもう半年近い時間が経っている。

その間、トレートル商会の方を放置しておく訳には行かないので、ミレイとバアルにはレクセリン砦と帝都を何度か往復してもらっていた。

今も帝都の商会で仕事をしている筈だが、呼び戻す時間は十分に有るだろう。

「ミーシャ、ペンと紙を用意して頂戴」

「はい」

冒険者や傭兵はただ待機して偶に訓練するだけで報酬が貰えるので、喜んでレクセリン砦に留まっている者も多いが、中には街で別の仕事を受けていたり、ユウとリリの様に別の仕事を持っている者もあり、そんな者達は一時的に義勇軍から離脱していた。

その中でもめぼしい者達を呼び戻す為に手紙を書くのだ。

特に神器使いであるユウとイーグレットは戦力として無視できない。

ユウは店の為、イーグレットは帝都への出店の為に帝都に戻っている。

だが、連絡をすれば直ぐにレクセリン砦に向かうと言ってくれる。

いるので、心強い。

手紙を書き終えた私は、セイントバードを召喚して手紙を配る為に窓を開けるのだった。

## 大戦

レクセリン砦を北に見る平原にハルドリア王国とユーティア帝国、両国の軍が距離を置き睨み合っていた。

両軍共に数万の兵力。

中央大陸を二分する大国同士の内、属国の軍を集めた大戦力である。

両国との関係の薄い数少ない国を除く、中央大陸の殆どの国が関係している過去に類を見ない大戦争である。

ハルドリア王国軍は一点突破を狙い、中央に強力な戦力を配置して敵の陣形を穿つ楔型の陣形を取っており、対するユーティア帝国軍はそれを受け止め、包囲して削る鶴翼型の陣形だ。

兵力の総数では僅かにハルドリア王国の方が多いが、レクセリン砦を背後に構えるユーティア帝国軍の方が有利な戦場だろう。

両軍からの使者が中央で互いに降伏勧告を行うが、それで降伏するならこんな事にはなっていない。

当然、お互いに相手の降伏勧告を拒否する。

その後、使者同士がお互いに敗北を認める場合は白旗を掲げる事や、捕虜の取り扱いは戦時国際法を適用する事など、この戦争における取り決めを確認し、自陣に戻る。

コレが伝統的な戦争作法だ。

そして、それが交わされた今、この中央大陸で歴史上最大級の大戦争が始まった。

初めはお互いに射程の長い魔法の撃ち合い、だがコレは結界魔法

や魔法による迎撃などで防がれるのが常だ。

その後は歩兵同士のおつかり合いだ。

このレベルの戦いとなると、個人の武技は埋もれてしまう。

それでもAランク冒険者クラスの实力者なら1人で100人以上の相手を出来る者も存在している。

しかし、その様な戦力は温存されるもので、始まったばかりの大戦では、まだ目立った存在は見えていなかった。

私はレクセリン砦の防壁から、ぶつかっては引き、また一当たりする兵士達を見下ろしていた。

全体的に見れば大した事ではない。

だが、この数分で何百人もの人間が死に、何千人もの人間が負傷している。

「この空気も久しぶりね」

私の麾下にある義勇軍は遊撃を任されているので、まだ前線には出していない。

ハルドリア王国にはモンスターテイマーが率いる魔物の軍勢やあの不気味な男達の様な戦力もある筈だ。

そう言った者達が戦場に出て来た時には直ぐに遊撃に出る心算である。

「エリー団長、君の言う通りだったな」

私の隣に武装したルーカス様が並ぶ。

私は送り込んだ間者から得たハルドリア王国軍の戦術や陣形などの情報をユーティア帝国の上層部へと流している。

勿論、無条件で信じて貰える訳では無いが、有力な参考意見とし

て受け取って貰えている。

その為、ハルドリア王国とユーティア帝国の初めのあたりは、敵戦力の配置を読み切ったユーティア帝国が優勢となって始まった。



## 大戦

戦端が開かれてから2日、歩兵同士がぶつかり合う地味だが多くの血が流れる戦いが続いていた。

朝からぶつかり合い、夕方頃には軍を引き休む。

フリードが率いている様な軍なら、夜襲を掛けて一気に叩き潰す手を使えば良いのだけれど、ブライト王相手にそんな生温い手は通さない。

軍議で夜襲を提案する者もいたが、私が反対しオーキスト殿下によって却下された。

野営中に結界の強度を敢えて偏らせる事でわざと隙を見せて、襲撃して来た敵軍を返り討ちにするのはブライト王の常套手段だ。

夜陰に紛れて結界を打ち破り、ハルドリア王国軍の陣地に攻め込んだ瞬間、移動力を捨てた完全武装の重装部隊に包囲される。

更には新たに発動される結界魔法によって逃げる事も出来ない敵軍は押し潰される様に殲滅されると言うわけだ。

今までこの戦法は王国の外には漏れていなかった。

重装歩兵部隊はブライト王が直々に鍛え上げた精鋭であり、ブライト王を裏切る事はない。

そして攻め込んだ敵軍は1人残さず殺される訳なのだから情報が漏れる事がなかったのだ。

私がこの戦法を伝えた所、ユーティア帝国の諸侯達は顔を青くしてドン引きしていた。

もともとただのカウンター戦法だったのを、私が助言してブラッシュアップした結果、現在の一種の罠の様な戦術になったのだから少し複雑な気分だ。

「明日、騎兵を使う事になった」

敵軍を監視する見張りの部隊以外に休息を命じたルーカス様と私は、レクセリン砦の中の一室で簡単な夕食を食べながら明日の戦いの話をしていた。

「敵軍を突破するのは難しいと思いますが？」

「いや、敵軍を切り裂く様な運用はしない。」

騎馬の突撃力を使って楔型に布陣するハルドリア軍の端を突き抜けて背後を狙う予定だ」

「そうですか……そうになると、おそらくあの不気味な男達か魔物の軍勢が出る可能性がありますね」

「なに？」

「ブラート王は各部隊に信頼の厚い上級指揮官を配置しています。その連携を崩すのを嫌って、イレギュラーな動きをする敵には傭兵や消耗前提の部隊を割り当てる事が多いのです」

「なるほど、留意しよう」

その後も、いくつかブラート王が得意とする戦術を解説し、対策を進言しておいた。

部屋に戻った私は、昼間救護の手伝いで疲れ切っていたアリスの寝顔を見た後、報告の書類を確認し、眠りに着こうとした時、ドアがノックされた。

前に4号が潜入して来た事で多少警戒心が湧くが、入室許可を求めミレイの声で肩の力を抜いた。

正直、今の状態で白兵戦はしたく無かったので安心した。此処にはアリスも居るしね。

左足を少し引き摺りながらドアの前まで行き、ミレイを招き入れた。

「夜分遅くに申し訳ありません。

皆への到着のご報告だけでもと思ひまして」

「ありがとうございます」

「こちらが報告書です」

「後で目を通すわ」

「急ぎの報告は有りませんので、明日時間がある時で大丈夫です。

では、私は隣室で休ませて頂きます」

「ええ、お疲れ様。お休み」

「お休みなさいませ」

少し疲れが見えるミレイは、ルノアとミーシャが眠っている隣室へ続くドアへと姿を消した。

ミレイとバルは戻って来た。

ユウとリリも昨日の夜に到着しているし、イーグレットもそろそろ帰って来る頃だろう。

「明日は戦況が大きく動くかも知れないわね」

## 大戦

わたしの眼下では隊列を組んだ騎兵が逆三角形に布陣したハルドリア王国軍の端を突っ切る様に突撃し、その速度と息の合った連携で王国軍を突破し軍勢の背後へと躍り出ました。

「む、出てきたな」

「エリーさんの予想通りですね」

騎兵部隊が軍勢を突き抜けた瞬間、それを予想していたかの様に魔物の群れが騎兵へと迫っていました。

「ユウ、騎兵に魔物が到達するぞ！」

「では行きましょうか」

わたしは手にしていた手綱を握り直し、従魔のオリオンに指示を出します。

現在、オリオンの背に乗って騎兵部隊の援護に向かったのはわたしとバルさん、エルザさん、システィアさん、そして広域魔法が使える冒険者が2人です。

正直、この人数は少し厳しいですが、なんとかオリオンには頑張っ  
て貰っています。

わたし達が騎兵部隊の救援に向かっていると、ハルドリア王国軍の陣地からワイバーンに跨った騎士が飛び立ち、猛スピードで向かって来ました。

「お？竜騎兵だぜ」

「構っている暇は有りませんよ」  
「なら、私が引き受けよう」

システィアさんがそう言うって立ち上がると、背後から追って来る竜騎兵を確認し、オリオンの背から飛び降りました。  
猛スピードで飛行しているオリオンから飛び降りれば、当然後方から迫る竜騎兵との距離が瞬く間に縮まります。

「あちらはシスティアさんにお任せしましょう」

「そうだな、お嬢からの指令は騎兵を狙う魔物の殲滅だったか」

「ああ、ひと暴れさせて貰うとしよう」

「先ずは一当てしますか、オリオン」

「キューー！！！！！」

オリオンが大きく嘴を開くと、轟音と共に雷が閃光を伴って魔物を焼き尽くした。

騎兵に向かう魔物の集団の先頭付近の一团にオリオンのサンダーブレスを叩き込んだわたし達は、魔物の集団の上を飛び去りながら飛び降りて騎兵部隊と魔物の間に立ち塞がりました。

「さて、此処は通しませんよ」

「やはり魔物が出てきたか」

「そうですね。でもユウ達なら問題なく撃退出来るでしょう。その間に騎兵部隊には王国軍の後方を掻き回して貰いましょう」

「そうだな……だが、竜騎兵も出て来ている様だが……」

「どうやらシスティアが相手をしているみたいですね。彼女なら問題ないでしょう」

私とルーカス様が見ている前で、地面から突き出て来た巨大な泥の腕が隊列を組んでいた竜騎兵の内の一体を掴みハルドリア王国軍の中に投げ飛ばしていた。

更にシスティア自身は空中に作り出した薄い泥の足場に立ち、竜騎兵相手に立ち回っていた。

ユウ達の方はサンダーバードの雷撃を打ち込み、魔物の集団の眼前に布陣していた。

「さて、どうするのかしら？」

私は此処からは見えないハルドリア王国軍の本陣が有るであろう方角を睨みつけるのだった。

## 大戦

ユウの従魔であるサンダーバードから飛び降りたシスティアは、後方から向かって来ていたハルドリア王国の竜騎兵が迫る中、素早く魔法を組みあげる。

「【泥弾】」

最も扱い慣れた魔法の1つ。

泥で出来た拳大の弾丸を高速で撃ち出す単純な魔法だ。

システィアの魔法適性は水属性と土属性の複合属性だ。

これは水の柔軟さと土の頑強さを両立させる事ができる強力な魔法なのだが、現在の状況では少し使い辛い。

空気中の水分を使える水属性は良いのだが、魔力のみで土を生み出すのはかなりのコストが掛かるのだ。

出来るならば、地面にある土を利用したいが、空中ではなかなか難しい。

泥の弾を受けて先頭を飛んでいた一騎の竜騎兵がバランスを崩す。それにより、後方の竜騎兵も僅かに速度が落ちた。

システィアはその隙を見逃さない。

空中戦は得意では無いが、不得意だからと言って対応出来ない様ではトップクラスの冒険者など務まらない。

「荒廃せし天空の廃都 空を走る泥に塗れし箱庭 土と水の領域は我が意のままに【泥の庭園】」

システィアが作り出したのは薄く広がる泥で出来た足場だった。泥を操作する魔法を応用し、空上に泥で出来た庭園を形作ったのだ。

「敵兵！エンゲージ！」

「魔法使いだ！距離をつめろ！トーマス続け！」

竜騎兵は体勢を立て直すと、動揺などは無く、直ぐに2騎がシスティアに狙いを定めて槍を構えて突撃して来た。

「【泥の巨腕】」

泥の足場を作り出すのと同時に魔力を地面へと伸ばしていたシスティアは、巨大な泥の腕を使って向かって来る竜騎兵を掴み取った。

「トーマス！！」

「ぐああああ！！！」

ワイバーンごと掴み上げられた竜騎兵は、投げ飛ばされ下の軍勢の中へと叩き落とされた。

「くそ！よくもトーマスを！！！」

「落ち着け、マイク！」

奴はAランク冒険者の『泥のシスティア』だ。

片手間で相手に出来る相手では無い。

隊列を組め！水竜を相手にしているつもりで戦え！」

指揮官らしき竜騎兵が風魔法を使って仲間には指示を出した。

「ちっ、流石に対応が早いな。出来れば油断している内にもう2、



3 騎落としたかったんだけどね」

システィアは伸ばした泥の腕を使って蛇竜の様な形に変える。

「【泥蛇竜】」

身をくねらせ近くの竜騎兵に牙を向ける泥の竜を相手に、竜騎兵は見事な手綱捌きで散開し、タイミングを合わせてファイアブレスを浴びせる。

泥が乾燥し、土に変わってしまうとシスティアの操作から外れてしまう。

それを防ぐには、魔力を消費して水分を補充しなければならない。

竜騎兵の的確な対応に、舌打ちしながらシスティアは足場の泥を伸ばしながら走り出す。

今頃、ユウ達が騎兵部隊を狙った魔物の群れを相手取っているはず、そんな中で空から竜騎兵の襲撃を受けては、いくら実力者揃いのメンバーとは言え、致命傷になりかねない。

一騎たりとも此処を通す訳には行かないのだ。

## 大戦

魔力を纏わせた大斧で目の前の魔物を数体纏めて薙ぎ払ったユウは、周囲で戦う冒険者達の様子を見回した。

エルザは長剣を巧みに操りオークの群れを蹂躪し、バルは拳でロックゴーレムを殴り砕いている。

2人の魔法使いもお互いをカバーしながら次々と広域魔法を叩き込んでいた。

ユウ達選抜された冒険者達が魔物の群れを抑えている間にユーティア帝国の騎兵部隊はハルドリア王国の前線拠点を次々と襲撃して行った。

壊滅まではさせる事は出来ないが、上位の指揮官を複数打ち取り、物資に火を着け混乱を煽るだけでも十分な戦果だ。

「おっと」

ユウが大斧を掲げて半人半牛の巨体の魔物、ミノタウルのハンドアックスを受け止めた。

「ほほう、なかなか良い斧ですね」

刃を合わせ拮抗していた大斧を右腕を引く事で傾けてミノタウルのハンドアックスを流し、時計回りに大斧を振り抜く。

腕力に魔力、遠心力を加えた一撃は分厚い筋肉の鎧で覆われたミノタウルの巨木の様な胴を抵抗なく斬り飛ばした。

ユウは死んだミノタウルスの腕からハンドアックスを抜き取ると、軽く数回振り回し、死角から飛び掛かって来ていたポイズンウルフの首を叩き斬った。

「悪くない斧ですね」

大柄なミノタウルスが手にしていた片手持ちのハンドアックスだが、小柄なユウが持つとまるで長柄のバトルアックスの様だ。

「ギューー!!」

上空からオリオンの嘶きが聞こえた。

騎兵部隊が作戦を終えた合図だ。

「撤退しますよ」

急降下して来たオリオンの背に飛び乗ったユウが、手綱を握り低空を飛ぶとバアルが魔物を引きつけて隙をつくり、その間にエルザや魔法使い達がユウの後ろに乗り、飛び立つ時にバアルもオリオンの足に掴まってその場を離脱した。

「システィアさんはどこですか？」

「……あそこだ！」

エルザが指さした方には泥の龍の背に乗り竜騎兵と渡り合うシスティアの姿があった。

「流石ですね。王国の精鋭である竜騎兵を何騎か落としていますね」

ユウ達はシスティアを回収する為に急行するのだった。

「騎兵を出して来たか」

「はい、フリード殿下が連れてきたモンスターテイマーの魔物部隊を向かわせましたが、サンダーバードに乗って現れた数人の高ランク冒険者らしき集団によって妨害されてしまいました。

竜騎兵も出しましたが、『泥のシスティア』に阻まれ5騎が落とされました」

「そうか」

「前線で指揮を取っていた者達とフリード殿下は撤退して来ています。兵は如何致しますか？」

「そのまま戦わせておけ。」

所詮は俺の命を無視して愚息に着いた反逆者共の軍だ。

せいぜい役に立って貰わねえとな」

「ではその様に」

もともと捨て駒であった前線の戦力が溶けたところでブライト王の軍勢には大した影響はない。

それで敵が疲弊してくれるなら儲けものだ。

ブライト王とジークが話していると、青い顔をした伝令兵が報告を持って駆け込んで来た。

「ご、ご報告致します。王都から伝令！王城に残っていたアデル殿下が王位の継承と戴冠を宣言！王国に残っていた戦力を王都に集めております」

「な、何だと」

「

## 大戦

「ハルドリア王国の先鋒はほぼ壊滅、ひとまずは我々の勝利だろう」

オーキスト殿下の宣言で会議室の中に静かな歓声が上がった。

「はっはっは、ハルドリアの弱兵共は全く手応えがありませんでしたな」

「しかし、噂に聞くブライト王の兵とはこの程度だったのでしょうか？」

ん、少々不味い方に意識が向かっている者も居るわね。

「皆、気を緩めるのは早計だ」

私と同じ事を考えたのか、オーキスト殿下も静かだがしつかりと浮き足立つ士官達を嗜めた。

「確かに騎兵が敵の前線指揮官を討つてからは一方的な戦運びだったが、戦上手として名高いブライト王の采配にはお粗末だと思う。」

その辺りについて、ブライト王の戦略に詳しいエリー義勇軍団長に尋ねたい」

オーキスト殿下に水を向けられた私は、立ち上がると一礼し、口を開く。

「先ず始めにお伝えしたいのは、あの先鋒を務めた軍勢はブライト

王が鍛えた軍では有りません。

「どうやら王太子フリード・ハルドリアが攻め込んで来たのは彼の暴走だった様です。」

その後、ブラート王はフリード王太子の行動に便乗し、帝国との戦を始めました。

今回、先鋒に回されたのはフリード王太子に加担した貴族や属国の軍や私兵、傭兵です」

「ふむ、確かな情報かい？」

「はい」

「情報源を聞いても？」

「初戦時に敵軍に間者を送り込みました。」

その間者からの報告と、私が個人的に王都に置いている人間からの報告です」

「なるほど、了解した。」

では今後、ブラート王はどう動く？」

「正規軍で以てレクセリン砦に攻め寄せらるでしょう。」

そして、それと同時に精鋭部隊による迂回戦術を執る物と思われるます」

「具体的には？」

「物資輸送の部隊への襲撃と後方の街道の封鎖によるレクセリン砦の孤立です」

私の発言に一同はより一層空気を重くした。

「あのブラート王がその様な搦め手を執るでしょうか？」

「1人が発言の許可を取るとそう尋ねた。」

確か、北方に領地を持つ伯爵だったか。

「ブラート王はその武名のお陰で正々堂々、正面からのぶつかり合

いを好む様に思われておりますし、事実彼の性格はその通りです。しかし、今回ほどの戦ならば、宰相のジーク・レイストンが同道している筈です。

ジーク宰相は常に効率を重視し、味方の損害を抑え、敵にダメージを与える様に策を練ります。

そして、ブラート王は臣下の献策に耳を貸す度量も有ります」

「成程、貴重な意見を聞かせて貰った」

オーキスト殿下は頷き、私は静かに頭を下げてから席に坐り直す。

「では、王国の搦め手を想定し、対策を話し合いたいと思う。」

「おそらく帝国は我々が搦め手に出ると想定し対策を練ってくるだろうな」

「ええ、エリザベートが向こうに居るならば当然そう読むでしょう」

「アデルの動きも予想できん。此処で時間を食う訳にはいかぬ」

「では……」

「うむ、帝国がどんな策を練ろうともそのまま食い破ってくれよう」

ブラート王の言葉に王国の軍人達は歓声を上げた。

「帝国に浸透する部隊はファーマー将軍に任せる。

俺の直率以外なら好きに編成せよ」

「はっ！」

ファーマー將軍が部隊の編成の為、退室したのをきっかけに軍議は終わり、部屋にはブラート王とジークが残っていた。

「これで良かったのか？」

「はい、エリザベートならば初戦でこちらの軍に間者を紛れ込ませているでしょう。」

間者が紛れているならば味方ごと騙すしか有りません。

こちらから送った間者は全て弾かれてしまいましたしね」

「仕方なかるう。こちらは軍を展開しているが、向こうは皆に籠っているのだ。間者は厳しくチェックされているに決まっている。愚息が不用意に影を送り込んだ事もあり警戒は強まっているだろう」  
「そうですね」

ブラート王とジークは周囲を警戒しながら対策を話し合うのだった。



## 大戦

ハルドリア王国の先鋒を追い払った2日後、新たに姿を見せたハルドリア王国軍はレクセリン砦に対して苛烈な攻撃を続けていた。

「よもやこれ程とはな」

「はい、一人一人の練度が高く、連携も巧みです」

レクセリン砦の周囲で激戦を繰り広げる両軍を見ながらオーキストとルーカス。

そんな2人の視界の中で、南側を防衛していた帝国軍の兵士達が10数人まとめて轟音と共に吹き飛ばされてしまう。

「何事だ！」

「て、敵兵の攻撃の様です。あ、アレは」

側にいた士官がオーキスト達へと報告を上げる。

「王国のランドル伯爵です！」

「ランドル伯爵……神器使いか」

「オーキスト殿下、私が出ます」

「分かった、任せよう」

ルーカスは水を纏う槍を振り回して、周囲の帝国兵を薙ぎ払う壮年の男を止めるべく、城壁から飛び降りるのだった。

ハルドリア王国の將軍の1人であるファーマー侯爵は王国軍から選抜した精銳達を率いて戦場の側の林の中で馬を走らせていた。

率いているのは30人程、王国軍の基準では中隊程の規模だが、選り抜いた人員は全て冒険者と言うならA〜Bランクは有るであろう猛者ばかり、その上ファーマー侯爵の他にも2人、リモン侯爵子息と属国の貴族、合計3人も神器使いが居る。

1つの部隊の戦力としては明らかに過剰だが、例え帝国軍が行手を阻もうと、力尽くで薙ぎ払い補給線を断つにはこれくらいは必要だとファーマー侯爵は考えていた。

「っ 全隊、止まれ！」

林を抜けた瞬間、自ら先頭を駆けていたファーマー侯爵が愛馬を竿立ちにさせながら腹に響く声で号令を掛けた。

次の瞬間、目の前を雷が薙ぎ払う。

「今のを躲しますか」

上空から聞こえてきたのはまだ若い少女の声。

頭上の巨鳥の魔物から飛び降り、ファーマー侯爵の前に降り立った少女は中央大陸では珍しい黒い髪に黒い瞳を持っていた。

「噂の『漆黑』か」

「わたしだけでは有りませんよ」

そういふ少女の背後から数人の冒険者らしき者達と帝国貴族に率いられた大隊規模の帝国軍が現れる。

帝国貴族が手にしている懐中時計型の神器の能力だろう。

これ程の戦力の気配を一切感じなかった。

お陰でファーマー侯爵の率いる部隊は帝国軍の懐に飛び込んでしまったという訳だ。

姿を隠したまま不意打ちをしなかったのは貴族としての誇り故か、はたまた神器の効果に制約でも有るのか……。

何方にしてもファーマー侯爵のやる事は1つ、目の前の敵を食い破り任務を遂行する事だけだった。

レクセリン砦から少し離れた谷を静かに進む部隊が有った。  
率いているのはハルドリア王国の宰相にして筆頭軍師、ジーク・レイストンだった。

ブライト王の腹心であるジークが連れているのはハルドリア王国の精鋭の中でもほんの一握りの強者であるブライト王の直率部隊の半数と国軍の精鋭100人だ。

潜入の為に周囲の地形を事細かに調べ尽くしていた王家の影、4号を案内に、ファーマー侯爵を囮にする形で更に大回りをしてレクセリン砦の背後を突く様に移動していた。

「こちらです、ジーク様」

「ああ、この戦にあまり時間を掛けられなくなったからな。

我々の作戦の成否が戦況を決めると心得よ」

「……はっ！」「」

ジークは4号の後に続きながら周囲の兵に告げる。

王国でアデルが不穏な動きをしている報告が入った為、早急に戦いに勝利し、王都へと戻らなければならなくなったのだ。

アデルのクーデターの話はまだジーク達、ほんの一部にしか情報が回っていないが、知れ渡るのは時間の問題。

兵達に動揺が広がる前に帝国に決定的な一撃を与えなければならぬ。

「っ　上だ!!」

不意に頭上で巨大な魔力の膨らみを感じたジークが叫ぶ。

優秀な兵士達は慌てず魔法を放ち、突然頭上に現れた巨大な粘液を吹き飛ばした。

「なんだ今のは？」

「はっ!どうやらスライムの一種の様です。

それもかなりの高位種かと」

鑑定魔法を使える騎士がすぐにジークに伝える。

「スライム……召喚魔法か？」

油断なく防御隊列を組む部隊の中、ジークが周囲の魔力を探ると、崖の上、こちらを覗き込む様な岩場の上によく知った魔力を発見した。

ジークがそちらを見上げると、そこに居たのはジークと同じ銀の髪と青い瞳の美女。

その姿を見て、ジークは口を開く。

「……………久しぶりだな、エリザベート」



## 大戦

崖の上から防衛隊列を組む兵士を見下ろしながら、隊の中央に居る銀髪青眼の壮年の男の口が私の名前の形に動くのを見た。

ジーク・レイストン、私の父親だ。

その場から身を踊らせると、数秒の自由落下の後、魔力を纏い着地する。

「エ、エリザベート様」

「貴女様が何故」

私の姿を見た兵士達に動揺が広がる。

「狼狽えるな」

しかし、ジーク宰相の言葉で直ぐに落ち着きを取り戻す。やはり優秀な兵士達ね。

「エリザベート、お前は自分が何をやっているのか理解しているのか？」

「勿論、理解しておりますわ。」

それと、エリザベート・レイストンの名は捨てました。今はエリ・レイスと名乗っております。

「今後はそうお呼び下さい」

「何をふざけた事を！お前は貴族なのだぞ！

王国に仕え、国の為に身命を捧げる。その為に存在する。それが

貴族だと教えて来た筈だ。

お前がしている事は国に対する裏切りに他ならない」

「……………下らない」

「なに？」

「では貴方は如何なのですか？ジーク・レイストン宰相殿。国を脅かすフリードの行動を正当化する為に娘に国家叛逆の罪を負わせ、ユートイア帝国との停戦条約を反故にするブラート王を諫める事もしない。

貴方の行動は国に仇を為していないと言えるのですか？」

「当然だ。フリード殿下はハルドリア王国の正統な後継者だ。フリード殿下を失えば王国の屋台骨が揺らぐ事になる。何を犠牲にしてもお守りしなければならぬ。

今回の戦争にしてもそうだ。

戦を決めるのは国、つまり王だ。

ならば、臣下である私は最大限の助力を行うのは当然の事だ」

「やはり、貴方とは意見が合わないわね……………殺しなさい4号」

「っ  
」

私が命令すると同時に4号が短剣を抜きジーク宰相に突き出した。片腕を失っている為、以前の様な鋭さは無いが、無警戒の所に至近距離からの一撃だ。

「閣下！」

1人の兵士がジーク宰相と4号の間に自分の身を差し入れる。

「ぐっ！」

「う、あ、あ……………」

4号は兵士から短剣を抜き、流れる様な動作で首の頸動脈を斬り

つける。

「何をしている4号!」

「さ、さ、宰相閣下……わ、わた、わた、私は……あ、え?」

訳がわからない、と言った表情の4号だが、その体はジーク宰相を殺そうと短剣を振るっている。

「くっ、仕方ない」

「がはっ」

ジーク宰相が腰の剣を抜き4号の短剣を弾き、返す刀で4号の脇腹から肩に掛けて逆袈裟に切り裂いた。

「じ、ひゅ」

全身を痙攣させながら倒れ込んだ4号にトドメを刺したジーク宰相は私に視線を向ける。

「エリザベート、4号に何をした」

私はその問いに答えず肩をすくめた。

そして、4号が死ぬのと同時に私の足から痛みが消える。

4号には【色欲の魔導書】による洗脳を施していた。

この二重の浸透行軍の情報を流したのも4号だ。

私はここ数日、激痛と痺れで上手く動かせなかった左足を確かめる様に数歩を歩きながら【強欲の魔導書】からフリーユージェルを取り出す。



「……………なんだ、お前のその神器は？お前の神器【英知の魔導書】にそんな能力は無かった筈だ」  
「今から死ぬ貴方には知る必要の無い事ですわ、お父様」

## 一方その頃：王者

次々に繰り出される刺突をティータはステップを踏み、体を逸らせ、大鎌で弾く。

やられはしないが攻め切る事も出来ない。

1対1ならば確実に勝てるが、3対1では拮抗するのがやっと、むしろ少し押されている。

もし変異種などの強力な魔物が乱入すれば一気に均衡が崩れてしまっただろう。

「多少戦える人が居るのが救いツスカね」

ティータが視線を向けると、先程のAランク冒険者が中心となって変異種の相手をしている。

「余所見とは余裕だな！」

悪魔の1人が槍を突き出すのを左手で掴み取り、胸を蹴り付ける。

「当然余裕ツスよ、お前らの様な雑魚の相手くらい」

そう強がりながら奪い取った槍を倒れ込んだ悪魔に投擲するが、槍を別の悪魔の槍で弾かれ、更にもう1人の悪魔が斬りつけて来るのを背後に跳んで躲す。

「……………とは言ったものの、このままではジリ貧ツスね」

「「ぐあああ!!」」

「っ」

声のした方を見ると、数人の冒険者を薙ぎ倒した2体の変異種らしき魔物が此方へと向かって来ていた。

「くっ！」

悪魔はニヤリと笑みを浮かべてティードから距離を取った。変異種の魔物を前面に出して一気に叩き潰すつもりなのだろう。

「ちっ！これだから悪魔は！奥の手を使うしか無いツスカ」

ティードは大鎌を担ぐ様に構えて魔力を練り上げる。しかし、魔物の方が僅かに速い。

「……………」

額から流れる汗と背中に氷を突き込まれた悪寒の中、ティードはギリギリまで魔力を高める。

「【聖……………」

「グラアア！！！」

間に合わない！

その言葉がティードの脳裏を過った時、突然足下の砂が巻き上がり蛇の様に2体の変異種を巻き取り悪魔達の方へと投げ飛ばした。

「っな」

「間に合ったの、ティード、大丈夫なの？」

「フラウさん！」

その場に現れたのは冒険者ギルドの制服を着た男に背負われたハーフエルフの少女フラウだった。

「は、今日は沢山働いたの」

「ちょ！フラウ様！まだ終わっておりません！ピンチの真っ最中ですって！」

フラウを背負っている冒険者ギルドの職員が焦りの表情を浮かべる。  
当然だろう。

フラウはティーダに襲い掛かるうとしていた変異種の魔物を吹き飛ばしただけで、全身の力を抜いてだらけ始めたのだ。

「フラウ様！あ、悪魔が向かって来ます！お、起きて下さい！」

「え、めんどいの」

非常に嫌そうにギルド職員の背中から降りたフラウは、フラフラとティーダの側まで歩いて来ると、一瞬、膨大な魔力を放出するとそれを瞬時に凝縮、フラウの背後に豪華に装飾された王座が現れた。

「神器〜【王者の証明】なの〜」

フラウの魔力に悪魔達は怯み、足を止める。

啞然とするティーダの目の前でフラウは「よっこいせ」と気の抜けた言葉と共に、王座にグデッとダラシなく座った。

すると地響きと共に足下の土が砂に変わりグングンと盛り上がって来た。

「な、なんツスカ！何が起こって……」

「だ、大丈夫です、ティーダ殿。コレはフラウ様の神器の能力です」

ギルド職員の男は慣れた様子でバランスを取っていた。そして揺れが収まり、ティーダは周囲を見回す。

「な、ど、如何なっているんツスカ!！」

出来上がったのは砂で作られた巨大な城だったのだ。

「こ、コレは……」

「何だ!何が起こった?」

見れば近くで戦っていた冒険者達も皆、城の中に收容されていた。ティーダが居るのは城のバルコニー。

眼下では魔物が城壁を破壊しようとして攻撃を加えているが、崩れた場所から直ぐに元に戻る砂の城壁を突破出来ない。

そんな魔物の後ろで3体の悪魔は目を丸くして突然出現した巨城を見上げていた。

ティーダの側、王座に腰掛けたフラウは広く開けたバルコニーから面倒臭そうに手を振るう。

「【砂の騎士団】」

複数有る城門の1つが開くと騎馬に乗った騎士達が飛び出して行く。

どう見ても精強な騎士の一団だが、その身から馬や鎧、武器に至るまで全て砂で出来ており、次々と魔物を討伐し始めた。

「ふ、フラウさんは何者なんツスカ?」

「あちしは〜帝国の〜冒険者ギルドの〜……はあ、以下略なの〜」

「いやいやいや!それで通る訳無いツスカよ!」

「えゝ、むゝ、あちしはゝ帝国冒険者ギルドのゝグランドマスターなのゝ」

「帝国冒険者ギルドのグランドマスター」

側の冒険者ギルドの職員に視線を向けるとコクリと頷く。

どつやら嘘では無いらしい。

帝国冒険者ギルドのグランドマスターと言えば有名人だ。

「で、ではフラウさんがあのSランク冒険者『王者フラウリエット』  
ツスカ」

「うん、そうなのゝ」

フラウは、肘置きに上半身を引っ掛ける様にダラシない格好でテイーダの言葉を肯定するのだった。

## 因縁

私は再び神器を作り出す。次の神器は【怠惰の魔導書】。

「冥府に座する支配者よ 悪夢を体現する闇の眷属よ

我、契約に従い死せる肉体を捧げる【召喚：悪魔】」

「っ何」

目の前に転がる4号の死体を贅に悪魔を召喚した。

悪魔はその全てが人間にとって敵対的な存在では無い。

あの伯爵二位の悪魔の様に人間と敵対的な悪魔以外は積極的に人間と関わりとうとしない為、悪魔は邪悪な存在だと思われているのだ。

4号の死体が消えて代わりに現れたのは細身でスラっとした体躯でモノクルを掛けた知的な雰囲気紳士だった。

両のこめかみから伸びた山羊の様な角を持つ悪魔だ。

召喚された悪魔はキョロキョロと周囲を見回し、私の姿を認めると、胸に手を当て恭しく礼を取る。

「これはこれはエリザベート嬢、お久しぶりですね。

お会い出来て光栄で御座います」

「お久しぶりですわ、リスティアード卿。

それと私、名を改めましたの。

コレからはエリーと呼んで下さいな」

「畏まりました、エリー嬢」

敵国の兵士に囲まれていると言うのに、私とリスティアードは、まるで貴族の夜会での一コマの様に優雅に挨拶を交わす。

「それで、此度の召喚はどのような御用件で御座いましょうか？」  
「リスティアード卿の御手をお借りしたいです」

私がジーク宰相達に視線を向けると、リスティアードも納得した様に頷いた。

「成程、承知致しました。」

しかし、わたくしはあまり戦闘に長けている訳では有りません。見たところかなりの強者揃いの様ですし」

「勝つ必要は無いですわ。」

私があそこの銀髪と戦う間、邪魔をさせないで欲しいのです」  
「時間稼ぎですか。なら問題有りませんね」

リスティアードとの相談を終えた私はハルドリア王国軍に向かい合う。

彼らは悪魔であるリスティアードを警戒している様だ。

ハルドリア王国の精鋭と言えど、悪魔との戦闘経験がある者は少ないだろうし、それすらも恐らくは悪魔が操る傀儡であるレッサーデーモン、良くて爵位を持たない悪魔だろう。

リスティアードが一步前に踏み出し、優雅に腰を折る。

儀礼に則った丁寧な礼だ。

「お初にお目に掛かります、皆様方。」

わたくしの名はリスティアード・サンゼルマン。  
魔界にて子爵四位の位を賜っております」

リスティアードの言葉に私はふと思ひ至る。



「あら、リステイアード卿、確か貴方は男爵だったのでは？」

「はい、有り難い事に最近陞爵致しました」

「まあ、おめでとございます」

照れ臭そうにはにかむリステイアードに祝福の言葉を贈る。

だがハルドリア王国軍の一部の兵士達はその言葉に警戒を強めた。彼らは知識としては悪魔を知っているのだろう。

『悪魔の陞爵』と聞いて警戒したのがその証拠だ。

悪魔にとつての陞爵とは、人間の様に功績を挙げたり、王への忠誠心を見せたりしてなる物ではない。

悪魔が陞爵する方法は1つ、自分より上位の悪魔を倒す事。

それを知っている兵士達は、先程のリステイアードの戦闘は得意では無いと言う言葉を信じる事なく剣を構えている。

「では、エリー嬢。兵士達はわたくしにお任せを【召喚：下級悪魔】

」

リステイアードは詠唱も無く、空中に魔法陣を描き出すと、大量のレッサーデーモンを召喚した。

その光景を横目に、私はフリーゲルを構えてジーク宰相に向かって駆け出した。

## 因縁

ハルドリア王国の精鋭達をリステイアードが召喚したレッサーデーモンに任せた私はフリーユージェルを構えてジーク宰相に迫っていた。

「ふっ！」

「閣下あ！」

精鋭騎士の1人がレッサーデーモンを無理やり振り払ってジーク宰相を庇う様に立ち塞がった。

「【震盾】」

「っ」

その構えた盾ごと斬り捨てようとフリーユージェルを振りかぶった私だったが、精鋭騎士がスキルを使った瞬間、ピタリと斬撃を止める。【震盾】は盾を細かく振動させ、敵の斬撃を受け流すだけの単純スキルだが、フリーユージェルを相手にした場合は非常に効果的な防御になる。

透ける程の薄い刃を持つフリーユージェルは、僅かな衝撃で粉々に砕けてしまう。

生半可な技量では素振りすら出来ない程繊細な武器なのだ。

振動する盾など斬りつければ、フリーユージェルの方が砕けてしまう。

「【氷弾】」

至近距離から魔法を放つが、精鋭騎士は盾と剣で巧みに防ぎ、ジーク宰相は素早く私の死角を取ろうと移動する。

「しっ！」

ジーク宰相が突き出す短剣を上体を反らせる事で躲す。

「ぐっ……」

「何をしている！殺せ！」

僅かに隙を晒した私に、精鋭騎士は斬り掛かるべきか戸惑いを見せたが、すかさずジーク宰相が殺す様に命じる。

娘に対して何の躊躇いも無い。

昔からそうだった。

何よりも効率を優先し、より多くを生かす為なら少数を躊躇いなく切り捨てる。

為政者としてはとても正しい。

だけれど……。

「切り捨てられる身にもなって欲しいわね」

精鋭騎士の剣撃が迫るが、それは無視する。

横合いから飛び込んで来たレッサーデーモンがその身で剣を受けて私を守る。

更に数体のレッサーデーモンが精鋭騎士に群がって行くので、そちらは任せても良いだろう。

ジーク宰相が短剣を連続で突き出すのを左手の肉厚な短剣で捌き、受け流した反動を利用し、体を半回転させる勢いを乗せてフリーユールを振るうが、ジーク宰相は身をかがめてそれを躲す。

流石に私の手をよく知っている。

「エリザベート、大人しく帰って来い。」

ブライト陛下とフリード殿下に謝罪すればお前を迎えてやる用意はある。

指名手配の件を気にしているならば、新しい名も身分も与えよう。

フリード殿下は今回の責任を取る形で表舞台からは退いて頂く事になるだろうが、殿下の第二夫人として婚姻を結び、王族としてアデル殿下に助力するんだ」

「……………話にならないわ」

「何が不満だと言うのだ」

「それが分からないから貴方は『王』になれないのよ。」

王を補佐する事は出来ても王として立つ事は出来ない」

「私は王になるつもりなど無い。王に仕える事こそが貴族の誉れ、私の誇りだ」

「誇りねえ？無能を晒し、王国崩壊の危機に導いた愚王とその側近が随分と立派な事を口にするわ」

「ふん、煽っているつもりか？」

お前の様な小娘に心を乱される程耄碌してはいないぞ」

ジーク宰相は会話を交わす中でも常に容赦なく急所を狙って短剣を繰り出している。

ブライト王の武功に隠れ、軍師としての活躍の方が華々しく語られているが、ジーク宰相もまた、王国の精鋭を率いるに足る武人なのだ。

「【白霧】」

私が魔法を使うと周辺の気温が一気に落ち、真っ白な霧が立ち込めた。

その霧の中に身を隠し、不意打ちを狙っていると、ジーク宰相は目を瞑り集中しているのが分かった。

「正面から戦い手間取る様なら迷いなく搦め手を使う。全て私が教えた通りだな、だが……………そこだ！」

ジーク宰相の短剣が、フリーユゲルを上段に構え霧から飛び出した私の喉を貫く。

その瞬間、喉から罅が走り、私の体が碎け散った。

【氷人形】を使ったデコイである。

「貰っ……………」

デコイの反対側、身を低くして飛び出した。

ジーク宰相はデコイの方を向いている。

このまま斬り捨てて終わり。

そう思った私は、此方に向けられたジーク宰相が左手で握っている短剣を目にした。

「しまっ……………」

「状況が完全に自分の策の通りに進んでいる時、最後のツメで僅かだが視野が狭まり、他の可能性を見逃す。

お前の悪い癖だと教えただろうか？」

咄嗟に【暴食の魔導書】を出そうとするが、ジーク宰相の方が僅かに早かった。

「神器【氷牙】……………」

## 因縁

エリザベートは昔から聡い少女だった。

ようやく歩き始めたと思えば、すぐに言葉を覚え、更には別大陸の言語や古代語などを瞬く間に習得してしまった。

学問に加えて剣術や魔法など様々な分野に天才的な才能を発揮したのだ。

そしてエリザベートは幼くして神器までも習得した。

神器を習得するには幾つか条件がある。

この条件は各貴族家が経験から得た物で、基本的に秘匿される物なので一般には知られていない情報だ。

我がレイストン公爵家に伝わる文献によれば、神器を習得する条件は3つ。

『高レベルな魔力の活性化』

『魔力の完全な制御』

『精神的な強さ』

魔力の活性化と魔力の制御は、幼い頃から修練を積みあがる程度の物は修める事が出来る。

しかし、最後の精神的な強さと言うものが曲者なのだ。

その意味合いは広く、使命感や誇り、意識と言った覚悟の類や、恐怖や怒り、歓喜と言った感情などが必要になる。

その為、高位貴族家では、強い感情を呼び覚ます催眠暗示や特殊な薬物などが秘伝として伝えられていたりする。

レイストン公爵家にも、強い覚悟を抱ける様にする為の精神力を鍛える教育法が代々伝わっている。

だがエリザベートはそれらをすっ飛ばして自力で神器を会得してみせたのだ。

【叡智の魔導書】と名付けられたその神器は、戦闘力こそ無いものの文官として、貴族として非常に有用な能力だった。

兄のエイウスが1つの分野を極めた天才だとするならば、エリザベートはあらゆる分野に優れた天才だったのだ。

ブライト陛下と相談した私は、エリザベートを王太子になる予定のフリード殿下の婚約者にする事にした。

フリード殿下と婚約したエリザベートはその才覚を以て王家を支えた。

フリード殿下は少々、考えが足りず楽な方に流されてしまう性分ではあるが、我が友であるブライト陛下の御子息であるが故か、全体的な能力は悪くは無い。

エリザベートが手綱を握ればハルドリア王国は安泰だと思っていた。

しかし、私がブライト陛下や国の重鎮と共に会合で国を空けている間に、フリード殿下がエリザベートとの婚約を破棄し、エリザベートを地下牢に幽閉すると言う暴挙に出たのだった。

その報告を受けた私だったが、エリザベートなら私が何かをする必要もなく、自力で解決するだろうと、事を大きく捉えてはいなかった。

だが蓋を開けてみればエリザベートはどうやったかは不明だが、地下牢を抜け出し、姿を眩ませたのだ。

その後、私はエリザベートに罪を着せる事で国の安定を計った。国の為、王家の為の行動だ。

エリザベートも当然理解してくれると確信していた。

エリザベートが帝国と手を結び、私達の前に立ち塞がるまでは。

私は自分の神器の能力によって全身が氷漬けになっている娘に視線を向ける。

確かに優れた娘だったが、まだまだ経験が足りていない。

ツメが甘いと言うのも、普通なら気にならない位の物だ。

自分の娘を殺す事に何も感じない訳では無い。

私は確かに娘を愛していた。

それでも王家への……国への忠義が勝る。

「【氷壊】」

短く唱えるとエリザベートは砕け散った。

これで最大の障害は排除した。

後はエリザベートが召喚した悪魔を始末し、帝国の街道を封鎖…

…。

そこまで考えた時だった。

胸から焼きごてを押し付けられたかのような痛みが広がり、喉元から込みあがった鮮血を吐き出した。

「な……なに？」

全身を襲う震えを堪え視線を向けると、背中から私の胸を貫く短剣とその柄を握るエリザベートの姿があった。



「策を完遂した後、次の行動に移る時に、僅かに思考が分散するのは悪い癖ですわ、お父様」

「エ……リザ……」

「さようなら、お父様」

短剣が引き抜かれると同時に、逆の手に握られたフリーユージェルが振るわれ、私の視界は宙に舞い上がり、思考は黒く染まって行った。

## 因縁

ジーク宰相の神器【氷牙】には強力な凍結能力がある。

その効果を使い、私の姿をした【氷人形】を凍結させた。

通常の【氷人形】は姿形を似せるだけの魔法だ。

だが、私は【暴食の魔導書】の能力を併用し、動き喋る【氷人形】を作り出したのだ。

それによつて騙されたジーク宰相の隙を突き、背中から心臓を貫き、首を刎ねた。

「さて……」

【白霧】を解除してレッサーデーモンと戦っている精鋭騎士達の姿を確認する。

流石は精鋭、死者を数人出しながらも何とか持ち堪えている。

リスティアード卿が召喚するレッサーデーモンは弱い。

しかし、その数は驚異だ。

いくら倒しても次々と召喚されるレッサーデーモンに心を折られる者もいるだろう。

このままリスティアード卿に任せていても彼等を殲滅する事は可能だろう。

正直、彼等の戦力は惜しい。

だけれどブラート王に忠誠を誓う彼等は最後まで寝返る事は無いだろう。

ならば此処で殺しておく方が今後の為か。

リスティアード卿に目配せすると、彼は頷き、レッサーデーモン

の配置を操作し、ハルドリア軍を包囲する様に布陣させた。

「はあ、はあ、エ、エリザベート様……」

「悪いわね。貴方達には死んで貰うわ」

「……………」

「それとも私に付いて来る？」

「……………」それは出来ません。我々はブライト陛下に剣を捧げてお  
ります」

「そう、残念だわ」

騎士達を斬り捨てようと踏み出した瞬間、飛来する魔力を感じて  
反射的に跳び退がった。

私と騎士達の間には暴風を纏った人影が突き刺さる。

土煙が辺りを覆い隠すが、すぐに突風によって吹き飛ばされた。

そこに立っていたのは小柄な人影。

私はその人影にゆっくりと近づいた。

小柄で中央部大陸では珍しい黒髪を腰まで伸ばしており、その瞳  
は翠、チグハグな印象を持つ髪と瞳が不思議と調和した美しい少女  
だった。

剣の間合いの少し外で足を止めて視線を合わせる。

「久しぶりね、アデル」

「お久しぶりです。エリザベート姉様」

数年振りに会ったアデルは、私の記憶にある頃よりも頭2つ程大  
きくなっていて、私の後を『姉様』と言ってついて来ていた頃の  
愛らしさと、重責を負う王族としての風格の両方を宿していた。

身に着けているのはハルドリア王国の軍服、その上に艶やかな花と風を圖案化した南大陸風の上掛けを羽織っている。

相当な魔力を発している事から、高位のマジックアイテムか……いや、神器ね。

アデルは背後にハルドリア王国軍の生き残りを庇い、私の目を見て言った。

「エリザベート姉様、此処は引いて頂けませんか？」

「無理ね。彼等の戦力は無視出来ないわ。王国を裏切る可能性も無いとなると、殺せる時に殺して置かなければならないでしょ？」

「ボクが彼等に手を出させないと言ってもダメですか？」

「ダメね」

アデルの顔に僅かに緊張が増す。

「貴女は以前、お互いに手出しをしないと云う協定を結び、それを反故にした。

貴女の意味では無かったのかも知れないけれど、契約に反した事は事実。」

故に貴女をすぐに信用する事は出来ないわ」

「ボクは！……ボクはこの戦いを止める為に来ました。

既にハルドリア王国の王宮はボクが掌握しています。

父上と兄上の凶行を止めに来たのです」

「そう。その言葉はきつと真実なのでしょうね」

「エリザベート姉様！」

「でも、全て嘘で私を騙し帝国に侵攻する計画である可能性もある」「そんな……」

私はアデルの言葉を手を差し出して止める。

「信用を失うとはそう言う事よ、アデル」

「……………」

「私も貴女とは戦いたくは無いのよ。」

投降して頂戴。捕虜として丁重に扱ふ事は約束するわ」

「……………それは出来ません、今はまだ」

「そう」

悲しいがコレが戦争だ。

私は魔力を練りながらフリーユージェルと短剣を構えるのだった。

## 因縁

私が思考を戦闘時の物に変えたのを感じ取ったのか、アデルの肩がピクリと動き、反射的に構えを取ろうとする。

「エリザベート姉様！」

「今はエリーと名乗っているわ」

先程はああ言ったけれど、アデルの話していた事は多分真実だろう。

ならばハルドリア王国側は幾つかの勢力に分裂している事になる。

そしてその内の1つ、おそらく穏健派とでも言うべき戦争に反対している勢力の長がアデルか。

既にかかなりの被害が出ている以上、簡単に講和とは行かないだろうが、どちらかが滅ぶまで戦うよりはましね。

私としても妹の様に可愛がっていたアデルを殺したくない。

短剣の柄で殴り付けて気絶させましようか。

捕虜として情報を得て、場合によっては解放し協調する。

取り敢えずの方針を決めた私は無防備に立っているアデルの頭に短剣の柄を振り下ろし……身体を捻りその場から身を投げ出し、数回地面を転がってから素早く立ち上がった。

私の頬に一筋の赤い線が走り、そこから熱い血が流れ出す。

その男はいつからそこに居たのか、戦闘状態だった私が気付かない程の隠密術だ。

耳と尻尾の特徴から狼人族の男だ。

魔法武器らしき2本の槍を両手に構え、アデルを守る様に立ち塞がっていた。

「オルト！退がっている！」

「……出来ません」

「命令だ」

「命令違反の罰は後で受けます。アデル陛下は騎士達を連れて撤退を」

「だが姉様が……」

「エリザベート様はアデル陛下を捕らえるつもりです。

今は捕まる訳にはいかないでしょう」

「……………」

アデルの配下の様ね。

オルトという名前には聞き覚えがないけれど、見たところかなりの使い手である事は間違いない。

獣人族が高い地位に就く事が難しいハルドリア王国にもともと居た人材では無い。

アデルが見出した者が。

「エリザベートね……エリー姉様。またいずれお話する時が有るでしょう」

「待ちなさい、アデル！」

後ろを向いたアデルを捕らえようとした私だが、僅かに聞こえた風を切る様な音に、身体が反応し、短剣で矢を斬り落とした。

「矢？何処から……………」

弓兵の存在など感じなかった。

気配を隠したまま攻撃する事など不可能だ。

あのオルトと言う槍兵も直前まで完全に気配を絶って居たが、攻撃の瞬間、僅かだが気配が漏れていた。

弓兵の居場所も分からないまま、一矢、二矢と次々と矢が飛んでくる。

だがその方向の魔力を感知しようとしても何も見つからない。

「フロンテまで、姉様には手を出すなと言った筈なのに……」

「アデル陛下を守る為です。命令違反は俺もフロンテも承知しております」

やはり、この矢の射手もアデルの配下か。

しかし何処に居る？

考えられる可能性は私の魔力感知範囲よりも外側から射掛けていると言う事か。

そうなると3キロ以上先から弓で狙撃していると言う事になる。

並の弓兵では無い。

弓も相当な代物だろうが、この距離から正確に私を狙い、更にアデルを追うことを妨害する様に狙って撃っている。

「エリー嬢、これは無理では無いですか？」

リステイアードが告げる。

見れば退路を絶っていたレッサーデーモンの群れをアデルとオルトが薙ぎ倒して精鋭騎士達を連れて撤退して行く。

そちらに意識を割き過ぎれば弓兵はすかさず狙って来る。



「.....此処までね。撤退よ」

## アデルの進行

軍を率いて王都を出たアデルはユーティア帝国の領土の近く、荒野の真つ只中に布陣していた。

「アデル陛下、全軍布陣を完了致しました」

「うむ、ユーティア帝国への通達は？」

「はっ！ハルドリア王国離反軍征伐の為、進軍の許可を願っていますが今のところ返答は有りません」

「まあ、当然だよな。今の状況で「はい、そうですか」って軍が国内に入る事を許す筈がないよ」

アデルはそう言つて報告に来た兵士を退がらせた。

その後、一番大きな天幕に幹部を集めたアデルは現在のハルドリア王国軍の配置やレクセリン砦を中心に展開しているユーティア帝国軍の配置を予想した図を囲んでいる。

「おそらくブラート様は帝国軍の補給を断つ手を取ると思われます」

「そうだね。ジークならそう進言して、父上は受け入れるだろう」

「ですがどう致しますか？帝国から軍を入れる許可が出るとは思えません」

「無許可で入るしか無い」

「アデル陛下！それではブラート様と同じ事になります！帝国との講和が成つたとしても後の軋轢になります」

「分かっている。行くのは僕と数名の精鋭だけだ。」

君達は軍を纏めてこの場で待機、僕は帝国側と接触するか、父上を叩きのめすかして戦いを一旦止める」

「しかし……」

「このまま此処で立ち止まっていたでは意味が無い。

早急にこの戦争を止めなければ更に民が苦しむ事になる」

「……………」

アデルの言葉に幹部達は押し黙った。

彼等はアデルが重用した新しい幹部達だ。

今までは爵位が低かったり、敵対する派閥に頭を押さえられていて、表に出られなかった者達が多い。

彼等は皆、民の事を第一に考える立派な貴族達だ。

幹部達をどうか説得したアデルはオルトとフロンテ、他数名の供回りだけを連れて帝国領へと侵入した。

神器を使い全員纏めて風で運んで行く。

説得するならば父上よりもジークだ。

彼の目的は王国の存続、父上の行動のリスクと僕が提案する案を秤に掛ければ、僕を支持してくれる可能性が高い。

彼を騙す形になるが、民を守る為には仕方ない。

全てが終わった後、父上や兄上とまとめてエリザベート姉様に引き渡すか、もしくは僕の手で始末する。

ハルドリア王国とユーティア帝国の軍の位置から王国が街道封鎖を行うルート予想する。

父上達が帝国側にエリザベート姉様が居る事に気付いているのかは分からないが、もし気付いて居なくても帝国の首脳陣を舐めている筈はない。

多分、二手に分かれて浸透行軍を行っているだろう。

そうなるとルートは2つ、うち1つは本体兼囃、もう一方が本命だろう。

ジークが居るならこの本命の部隊だ。

予想したルートの辺りで戦闘音が聞こえて来た。  
近くに着地して僕達は念の為気配を消しながら戦闘中の場所を  
認める。

「エリザベート姉様！」

すると、白い霧の中、ジークと戦うエリザベート姉様の姿と、ハ  
ルドリア王国軍の精鋭部隊に足止めする様に群がるレッサーデーモ  
ンが居た。

「アデル様！」

フロンテの声に視線をエリザベート姉様の方に戻すと、エリザベ  
ート姉様の剣がジークの首を刎ねるところだった。

「間に合わなかったか」

エリザベート姉様は霧を払い、残った精鋭部隊の方に足を向けた。  
彼等は王家への忠誠が高い者達だ。

帝国側であるエリザベート姉様に降る事は有り得ない。

しかし、父上の命令が実行不可になった今、王族である僕の命令  
なら聞くだろう。

有能な彼等を此処で失いたくは無い。

「皆は此処で待機。エリザベート姉様に対しては一切の手出しを禁  
止する」

「アデル陛下！」

僕はオルトの制止を無視して飛び出した。

## 帰還

アデルとハルドリア王国の精鋭兵をとり逃した私は、リスティアード卿を送還し、レクセリン砦へと帰還した。

すると、砦は王国軍に取り囲まれており、帝国軍が防衛戦を行っていた。

何処か敵影の薄い場所から突破しようとして観察していると、砦の正面から少し南側で激しく戦っている2人が目に入った。

莫大な水量を持った水の塊が舞い上がり、竜のアギトを形造り上空から飲み込む様に降り注いだ。

その攻撃を受け止めたのは、燃え盛る炎で出来た虎だった。

竜のアギトを操るのは、ハルドリア王国の貴族ランドル伯爵、炎の虎を従えるのはルーカス様だ。

2人の実力は拮抗しており、周囲の兵を寄せ付けない程の激闘を繰り広げている。

「神器【暴食の魔導書】」

具現化した魔導書を片手に敵影の濃い場所を狙って上級魔法を何発も撃ち込んだ。

「な、何だ」

「ぐああああ！！！！」

「ひい　ま、魔法だ！」

「逃げる！」

「馬鹿者！敵前逃亡は重罪だぞ！引くな！迎え撃て！」

動揺する兵を懸命に統率しようと、指揮官の貴族が声を張り上げる。

「くそ！一体何人の魔法使いが居るんだ」

「見る 相手は女1人だぞ！」

ハルドリア王国軍の兵士達は背後から次々に魔法を撃ち込まれた事でパニックを起こし掛けるが、私が女で1人だけだと気づくと、何とか動揺を抑え込み態勢を整えて反撃に出ようとする。

「相手は女1人だ！魔法など無視して数で押し潰さなきゃあ！！！」

「うあああ！！！」

「子爵様がああ！！！」

大声で私に兵を向けようとしていた指揮官の頭を氷の槍で吹き飛ばした。

突然指揮官を失った兵に動揺が走る。

「逃げる！殺されるぞ！」

「おい！そこを退け！」

何方に逃げたら良いのかも分からず仲間内で争い始めた。

追加で魔法を叩き込みつつ、私は、混乱に乗じて敵軍の真っ只中に突っ込んだ。

邪魔な兵士を斬り殺し、時折兵の多い場所へ魔法を放ちながらハルドリア王国軍を突き破った私の前には、周囲から兵が逃げ去った空間で槍とフランベルジュを手に戦うランドル伯爵とルーカス様の姿があった。

ランドル伯爵の槍が水を纏いルーカス様に襲いかかるがフランベ

ルジュから嘖き上がる炎を受けて背後に跳び退がる。

正面のルーカス様を見据え、集中するランドル伯爵は背後から迫る私に気付かなかった。

「じぶっ」

驚愕に目を見開いたランドル伯爵が血を吐きながら首を回して私の姿を見る。

「エ、エリザベート様……」

「悪いわね、ランドル伯」

彼は私に色々と協力してくれていた真面目な貴族だ。

フリードに地下牢に入れられた時にも、私を解放しようと尽力してくれていた人だった。

戦争で正面からぶつかる事さえ無ければ殺すつもりは無かった。

だが戦場で会ったのなら仕方ない。

私はランドル伯爵の背中から短剣を引き抜き血振りをする。

同時に崩れ落ちるランドル伯爵に視線は向けず、苦笑いを浮かべるルーカス様と合流したのだった。

## 覚悟

ジーク宰相に率いられていたハルドリア王国軍の精鋭と共に戦線から離脱した僕達は、丸1日を掛けて撤退を続け帝国軍の勢力圏から抜け出す事が出来た。

此処はまだ帝国国内だが、帝国軍が拠点とするレクセリン砦からの距離や地形的な重要度などの観点から考えて、監視や警戒の範囲外だと判断できる。

— 先ずは逃げ切ったと言って良いだろう。

「今日は此処で休息としよう。念の為火は使わないようにしてくれ。日の出と共に出発すれば何とか国境に布陣する友軍と合流出来るだろう。明日は強行軍になる。」

体を温める事は出来ないがしっかりと休んでくれ」

僕の指示を聞いた騎士や兵士達は木の影や草叢に身を隠しながら休息を取り始めた。

暗い木陰で冷たい地面に身を横たえての休息だ。

当然まともな休息など取れないだろうが、帝国から出るまでは油断は出来ない。

「アデル陛下」

僕も同じ様に休もうとするが、その前に声を掛けられた。

振り向けばオルトとフロンテが僕の前に膝き頭を差し出した。

「アデル陛下。先刻の命令違反の件、弁解のしようもありません」

「我ら2人、どの様な罰も受ける覚悟です。どうか御裁可を」



先刻の命令違反……エリザベート姉様、今はエリー姉様か。

エリー姉様への攻撃を禁じると言う命令を無視して僕とエリー姉様の間に割って入ったことだろう。

「……………その件なら不問だよ。アレは僕の失策だ」

そう、僕は甘かった。

口では覚悟が何だと言ってはいても、エリー姉様との交渉が決裂して動揺したのだ。

そもそも初めから僕はツメが甘かった。

最初にエイワスを送り、エリー姉様と交渉しようとした時点でフリードを拘束しておくべきだった。

父上がフリードに加勢すると決定した時に力づくでも止めるべきだったのだ。

僕は甘かったのだ。

エリー姉様には覚悟が有った。

自らの邪魔をするならば、僕を迷い無く殺す覚悟が。

「今、僕が捕まったら王国の民にも多くの被害が出るかも知れない。それを防ぐには今回の侵攻の上層部、特にブラートとフリードの2人の身柄の確保は絶対条件だ。

出来る事ならジークも確保したかったが、エリー姉様に先を越されてしまった。

もう、甘い事は言ってもらえないよ」

「アデル陛下……………」

「民の為にももう失敗は出来ない。

ブラートとフリードの身柄は確実に僕が確保する。

エリー姉様とかち合う可能性も高いが、これだけは譲れない」

あの2人を確保するのはこの戦争から民を守る為に必要なことだ。

「もしそれでエリー姉様と敵対すると言うのなら……………」

その時は、僕はエリー姉様を殺す。

## 報告

ルーカス様と共にレクセリン砦に戻る頃には、ハルドリア王国軍の陣地から銅羅が鳴り響き、砦を包囲して攻め立てていた兵士達が波が引く様に撤退して行った。

砦の補修や負傷者の治療を指示してたオーキスト殿下に時間を取ってもらい報告を行う。

【強欲の魔導書】に収納して持って来た父の遺体をオーキスト殿下に差し出し、事の経緯を説明した。

私の認識では魔物は倒した物に所有権が有る。

野盗も同じくだ。

その考えで行くと、殺した敵兵の死体の所有権も私に有る。

試しに【強欲の魔導書】を使うと父の死体は何の問題も無く収納された。

【強欲の魔導書】の使用条件で有る『所有権』に関しては少々曖昧な所が有るが、概ね私自身の認識に左右される事が経験として分かっている。

「そうか、ジーク・レイストンを討ち取ったか」

「はい、ジークはハルドリア王国軍の筆頭軍師です。」

今後のハルドリア王国軍の軍事行動に大きな影響が出るでしょう」

「はあ、本来ならば独断先行を咎める所なのだが、エリー殿は独自裁量権を持つ義勇軍団長。」

その上、義勇軍の編成費や維持費の殆どをエリー殿が負担していて、義勇軍の戦果も十分にある。

ハルドリア王国軍の重要人物を討ち取った功績も有るから、私からは嚴重注意くらいしか出来ないな」

「今後は留意しますわ」  
「是非、そうして欲しい」

オーキスト殿下は、肩を竦めると話を変える。

「それとアデル・ハルドリアか」

「はい」

「ハルドリア王国の侵略を止めに来たと？」

「本人はそう言っておりまして」

「なるほど、ハルドリア王国の内部は我々が思っているよりも割れているのかも知れないな」

「そうですね。どうやらアデルはブライト王が出払っている間に国内を掌握した様です。」

配下からは『陛下』と呼ばれていました」

「すでに戴冠していて臣下もそれを認めていると言っ事か。……エリー殿から見てアデル殿は信用できるのか？」

「そうですね……アデル自身は善性の人間です。」

しかしながら完全に信用を置いて、命運を共に出来るかと問われれば答えかねる、と言った所でしょうか。

能力は有りますし、配下にも恵まれている。

ですが、経験の浅さ故か甘い所が有ります」

「そうか、ならば問題なければ利用し、場合によっては切り捨てるか」

オーキスト殿下の中で方針が決まったようだ。

「ご苦労だったエリー殿、しばらく休んでくれ」

「はい、ところで殿下。背後を突こうとしていたもう一つの王国軍はどうなりましたか？」

あちらには、ユウやエルザ達に行つて貰つた。更には神器使いの帝国貴族に率いられた軍も同行しているので心配はしていない。

「そっちの方も報告が上がつて来ている。

敵軍と戦闘になり、兵に多少の損害は出たが、見事に追い返した。

義勇軍のユウカとエルザが共闘して敵指揮官を倒したそうだ」

「そうですか。では私はこれで」

「うむ、ご苦労だった」

## ハルドリア王国軍

ハルドリア王国軍が前線基地を築いているのは、レクセリン砦から半日ほど離れた平原だった。

その前線基地の中心地、最も警備が厳しい天幕の中では、集められたハルドリア王国軍の幹部とブラート王が簡易的な机を囲んでいた。

「それで、ジークからの連絡は？」

「有りません。ですが帝国軍からジーク宰相閣下を討ったとの声明が出されております」

「真偽の程は？」

「不明です」

「そうか、ジーク以外の兵も見つからんのか？」

「はい、ジーク宰相閣下と率いていた者達、全て姿を消しました」

「……分かった。今後、ジーク達は戦死したものとす。ファーマーの方はどうなった？」

何かを飲み込む様にジークの戦死を宣言したブラート王は、もう一方の軍の報告を求める。

ブラート王自身には既に報告は届いているが、この場での情報の共有の為に敢えて尋ねた。

「別働部隊はユーティア帝国軍と冒険者の混成部隊と遭遇、奮戦虚しく敗退。指揮官のファーマー閣下は部隊を撤退させる為、殿として異名持ちと思われる冒険者2人と交戦、部隊の撤退には成功しましたが、ファーマー閣下は討死致しました」

「……………この一戦は我々の敗北だな」

呟く様に吐き出されたブラート王の一言に、天幕に集った一同の顔に苦渋の色が見えた。

しかし、士官が持つてきた情報はそれだけでは無かった。つい先程届いた情報だと、前置きして士官は報告する。

「アデル殿下が率いる軍が帝国の国境を越え、真っ直ぐこちらに向かって来ております」

「本当か？」

「はい。アデル殿下は帝国にハルドリア王国の離反軍の征伐の為に、越境を申請していた様ですが、帝国からの許可は無く、アデル殿下は無許可での越境を強行した様です」

「ふむ、アデルの動きに対する帝国の反応はどうだ？」

「無許可での越境に抗議しておりますが、具体的な行動は起こしておりません」

「表向きは抗議しているが、実質は黙認か。」

「もしかすると帝国軍と裏で手を結んでいる可能性も考慮する必要があるな」

ブラート王はしばし瞑目し、今後の方針を決定する。

「帝国軍にはエリザベートが居る。ジークを欠いた今、小細工を弄したとしても無駄となるだろう。」

「その上、時間を掛けるとアデルに背後を突かれるか……」

ブラートはゆっくりと周囲の諸侯や士官を見回した。

「3日後、レクセリン砦に布陣する帝国軍に対して総攻撃を掛ける。俺も前線に出る。帝国軍を正面から叩き潰してやる」

## 決戦

ブラート王に率いられたハルドリア王国軍が全軍を以て攻め込んで来たのは、帝都からイーグレットとグレン、オウルが戻って来た翌日の事だった。

見張り用の尖塔からレクセリン砦の正面、魔法の届かないギリギリの位置（ブラート王はこう言う所が非常に巧い）に整然と並んだハルドリア王国軍を見渡しながら昨日戻ったばかりのイーグレットと携帯食を水で流し込みながらお互いの情報を交換した。

イーグレットは帝都で商会の拠点となる建物を購入し、人脈作りの為に貴族や商人などの有力者との顔つなぎに勤しんでいたそうだ。このレクセリン砦に戻る際にも大量の物資を運んで来てくれたので、食料や武具、矢玉なども十分に余裕がある。

「俺の方はこんな物だな。特に変わった事はしていないが、商人としては今が面白い所さ」

「あら、それならこんな最前線に戻らなくても帝都に残った方が良かったんじゃないの？」

私が揶揄う様に問いかけると、イーグレットは肩を竦めて苦笑いを浮かべた。

「揶揄うなよ。今更放り出したりしないさ。

帝国でここまでの下地を作れたのはエリーのおかげだからな。商人としてそんな不義理はしないよ」

戯けるイーグレットに笑みを返した私の耳に地響きの様なハルド



リア王国軍の雄叫が轟いて来た。

「始まったわね」

「ああ、俺達の出番も直ぐに来るだろう」

私達は来る決戦に向けて体を休めるのだった。

ハルドリア王国軍が支配している都市の元代官の屋敷、現在はブライト王が残した文官が統治していた。

都市に到着したアデルは、直ぐに文官に都市を解放してブライト王とフリードを征伐に向かう自分の軍に加わるように命令した。

その命令に戸惑う文官を背後に引き連れながら、代官の屋敷の廊下を歩く。

「お、お待ち下さいアデル殿下」

「邪魔をしないで欲しいな」

「しかし、ブライト陛下に……」

「父王は乱心された。此度の帝国侵攻は条約に反した義の無い暴挙だ。」

僕はハルドリア王国の女王として乱心した父王を討つ。

既に王都で諸侯の同意を得て戴冠を済ませている」

「それではクーデターではないですか」

「そうだ」

文官が息を飲む音がやけに大きく聞こえた。

思わず足を止めた文官に、アデルは振り返り問う。

「君は何方に付くんだい？」

「何方に……………」

「ブライトに付いてこの大儀なき侵略を続けるのか、僕に付いて共に平和を求めて戦うのか。」

「思案する時間はない。今すぐ決めて」

覚悟を決めたアデルの瞳は一切揺るがない。

まだ幼さが残るアデルだが、文官はその堂々とした振る舞いに確かに王としての姿を見た気がした。

悩んだのはほんの数秒、文官はその場に跪くと臣下の礼を取るのだった。

## 決戦

ユウが振るった大斧は、一薙で5人もの敵兵を切り飛ばした。

更に遠心力を使ってクルリと体を回転させ、魔法武器である投げ斧を投擲した。

ユウが投げたのは風属性魔法が付与された《烈風の斧》である。

烈風の斧を中心に風が逆巻き、回転を増してハルドリア王国軍の兵士の間を飛び、腕や足を切断して再びユウの手に戻った。

そして直ぐに烈風の斧を赤い柄の片手斧に持ち替えると、大きく振り上げて地面に叩き付けた。

すると赤い柄の片手斧の刃が輝き、炎が吹き上がり敵兵を飲み込んだ。

「ぎゃあああ！……！」

「熱い！た、助け……！」

ユウの周囲ではハルドリア王国兵の悲鳴が絶え間なく上がり続ける。

「……………ユウと敵じゃなくて良かった」

その光景を目にしながら、エルザは小さく呟きながら迫りくる敵兵を斬る。

エルザはこの戦争での雇主である友人、エリーの事を思い浮かべた。

エリーは以前、小国との紛争で依頼人として出会った。

その仕事の後にもエリーと気が合ったエルザは交流を続けていた。

そして共にダンジョンに潜った事で更に親しくなった。

エリーがハルドリア王国の貴族の出身だと言うのは知っていた。

私もAランクの冒険者だ。

人よりも強力な力を持つている事は自覚しているし、当然それなりに警戒心だつて持っている。

親しくなつた人間について調べるのは当然の事だつた。

それを怠れば、仲間が犠牲になるかもしれないのだ。其処だけは手を抜く事は出来ない。

そうして知つたのは、ハルドリア王国に裏切られたエリーの過去、国に尽くしたのに国に見放され、守ろうとした国民に蔑まれ、指名手配までされる仕打ちだ。

エリーがハルドリア王国を恨むのも当然だろう。

しかし、エリーは少し不安定にも見える。

普段の聡明で余裕のある様子からは想像出来ないが、ハルドリア王国が関わると途端に無茶をしようとする様だ。

先日も独断で王国軍の精鋭部隊を1人で返り討ちにしたらしい。

エルザが戦争に参加したのも祖国を守りたいと言う気持ちも有つたが、この新しい友人を放つて置けないと言う気持ちがある事も否定はしない。

詳しくは話した事は無いが、ユウも似たような物だろう。

あれでも彼女は帝国商業ギルド評議会の議員の1人だ。

当然、相応の情報網を持っているだろう。

エルザはずれ始めた意識を戻す。

周囲を取り囲む兵士の質が上がつたのを感じたからだ。

「正に絶体絶命だな」

エルザはニヤリと笑みを浮かべる。

エルザは焦らない。

こんな危機など、今まで何度だって切り抜けて来たのだ。

魔力を高めたエルザは神器を手にするのだった。

雷鳴が轟き帝国兵が一瞬で炭に変わる。

それを遠目に見た私は、口の端に笑みが浮かぶのを堪えた。

「よつやくですわね、ブライト陛下」

私は【暴食の魔導書】とフリーユージェルを手に尖塔から飛び降りると、晴天の中、不自然に雷が降り注ぐ方へ向かうのだった。

## 決戦

ブライト王の周囲は焼け焦げた死体や重度の火傷を負って呻くユ  
ーティア帝国の兵士が山となって転がって居た。

若い頃からブライト王の戦い方は変わっておらず、それは王とし  
ての戦い方ではなく、1人の戦士としての圧倒的な力を振りまく戦  
い方だった。

全体指揮は配下の軍師達に任せて敵兵の真っ只中に1人で攻め込  
む、それがブライト王の戦い方だった。

「相変わらず王とは思えない戦い方ですわね」

肉が焼ける嫌な匂いが立ち込める戦場で、私はブライト王と対峙  
した。

「エリザベートか、久しいな」

「お久しぶりですわ、陛下」

最近、碎けていた言葉が昔の堅苦しい感じに戻って行くのを感じ  
た。

「エリザベート。まずは謝らせて貰おう。

愚息がしでかした事、その後の俺の対応、どれもが間違っていた。  
済まなかった」

「……………」

「エリザベート、王国に戻って貰えないだろうか」

「もう全てが遅すぎますわ」

「……………そうか」

ブラート王が手にした剣を振る。

特に力を込めた様には見えず、何気なく振るった様だが、その剣から雷が放たれ私へと襲い掛かる。

「【強欲の魔導書】」

【暴食の魔導書】を【強欲の魔導書】に変え、取り出した物を投擲する。

すると私に向かっていた雷が投擲した物に引き寄せられ私から逸れた。

「む、雷電石か」

「ええ、陛下と一戦交えるのですから当然の備えですわ」

雷電石とは高品質な魔石をベースに多くの希少素材を使って錬金術師によって作られるマジックアイテムだ。

その効果は雷を引き寄せて溜め込むと言う物。

それだけの効果なのに素材が高く、技術も必要なマジックアイテムなのでかなり高価な物だ。

しかも、一度雷を溜め込むと砕いて雷を放出するだけの為、使い捨てが前提だ。

一応雷から塔や家屋を守る事に使われる事もあるが、それなら避雷針を建てた方が安価で長持ちする為、使い道の無いマジックアイテムだ。

私はそれを錬金術師に依頼して大量に作らせた。

「【雷雨】」

降り注ぐ雷の雨を再び【強欲の魔導書】から取り出した雷電石を投げて無効化する。

「【氷槍】」

反撃に魔法を放つが、ブライト王は軽く腕を薙ぎ雷で氷を砕く。

あまり接近しすぎると、雷電石での防御が間に合わなくなる。

私は氷の槍や刃を次々に撃ち出すが、ブライト王も軽くそれを防ぎ切る。

「雷電石の防御は悪く無いが、決め手に欠けるな」

ブライト王は自らの体に雷を纏うと、落雷の様に轟音を立てて踏み込んだ。

ブライト王が得意とするスキル【瞬雷】だ。

自分の体を一瞬雷と同化させて高速で移動する技。

普通の人間なら反応すら出来ずに雷と化したブライト王に撃ち抜かれる。

だが私はブライト王の移動ルートを読み躲す。

【瞬雷】は本物の雷と同じある特徴がある。

それが『閃光放電』だ。



ブライト王が移動するほんの少し前に感じる僅かな空気の変化を感じる事で雷を躲すのだ。

だがこんなギリギリな回避は長くは続かない。

私は反撃に出る為、魔力を練り上げるのだった。

## 決戦

身体強化の魔法に更に魔力を注ぎ込んだ私は、突撃して来るブライト王を迎え撃つ様にフリーユージェルを薙ぐ。

しかし、このフリーユージェルを私に下賜したのはブライト王だ。当然この剣の特性は熟知している。

ブライト王は恐ろしい程の反射神経でフリーユージェルの刃を挟み込む様に雷の速度で手刀を繰り出した。

最大まで強化した動体視力でギリギリ見える速度だ。

フリーユージェルの刃を破壊される訳にはいかない。

咄嗟にフリーユージェルを【強欲の魔導書】に収納しブライト王の手刀を躲した後、再びフリーユージェルを取り出して左下から逆袈裟に斬り付けるが、ブライト王は左足を軸に体を回転させ刃を避け、雷鳴を轟かせながらかかとを振り落とした。

「【氷盾】」

氷の盾を作り出すとするが、完全な盾を作り出す前にブライト王に蹴り碎かれる。

「ぐっ！」

何とか直撃は防いだけれど、ブライト王が纏っていた雷が周囲に走り私の皮膚を焼いた。

「ふん！！」

腰ダメに拳を引いた構えから、破城槌のような正拳突きが放たれる。

雷光で輝く拳が私の胸に突き刺さる。

その威力はもはや打撃技などと言う生易しい物ではなく、私の胸を易々と突き破り、体を上下の真つ二つに引き千切った。

「また妙な魔法を……いや、スキルか」

「はあ、はあ、はあ」

私の上半身と下半身は氷となって碎け散る。

それと同時にブライト王に破壊された【氷盾】の残骸から氷が繋がり、1つの氷塊となり砕けるとその中から私は現れる。

自分の体を雷に変えるブライト王のスキル【瞬雷】を参考に作り上げたスキル【氷身】だ。

自分の体を氷に変化させるスキルなのだが、ブライト王の【瞬雷】とは違いまだ未完成な部分も多いので継続時間はほんの一瞬である上、体力を大きく消耗してしまう不完全なスキルだ。

「もう降参しろ、エリザベート。」

今なら、出奔や帝国に与した事は不問にしてやろう。

お前には新しい名前と国王補佐の地位を用意しよう。

望むのなら王家が婚約を用意するし、爵位を与えても良い。

フリードとシルビア嬢が許せないと言うなら奴らを国から追放しよう」

膝を突き必死で息を整える私を見下ろしてブライト王は言う。

「お断りしますわ。もう私は陛下達に利用されるつもりはありません。」

「この場で陛下を殺してハルドリア王国の歴史を終わらせるわ」「そうか……では仕方ないな」

ブライト王は自らの神器【雷神の剣】を手に構えた。  
それに答える様に私も立ち上がる。

「済まないが死んでもらう。許せ、エリザベート」  
「私はエリー・レイスですよ」

## 決戦

わたしがハルドリア王国の兵士を鎧ごと真つ二つに叩き切った時、視界の端で雷光が走り、遅れて轟音が戦場に鳴り響きました。

「雷ですか？」

「みたいだな」

わたしの眩きに、いつの間にか背中合わせになっていたエルザさんが答えます。

「ハルドリア王国軍で雷と言えば《雷神》ブライト・ハルドリアですな」

「ああ、もし冒険者ならばSランク确实と言われている武人だ」

「相手をしているのは……エリーさんですね」

「エリーの来歴を考えれば自然な事か」

「戦況はどうなっているのでしょうか？」

「此処からではよく見えないが、流石のエリーでもあの《雷神》相手では厳しいだろうな」

敵兵は皆、練度が高く連携も巧みです。

その上、時折実力の有る騎士や冒険者が混ざっているのです、わたし達でも油断は出来ません。

「【遍断ち】」

魔力を何重にも纏わせた戦斧で目の前の騎士を掲げた盾ごと叩き切ろうとしましたが、騎士が掲げた盾は魔力の光を放つとわたしの

戦斧を受け止めました。

「むー！」

「《漆黑》ユウカ・クスノキ殿とお見受けした。

我が名はテオドル・ラストランド！

貴殿との一騎打ちを所望する」

「お受けしましょう」

テオドルと名乗った騎士は剣と盾に魔力の光を纏わせます。

わたしと同じ、魔力を凝縮して武器に纏わせる技の使い手の様ですね。

「いざー！」

テオドルが盾を前に突き出して騎兵のチャージの様に突撃してくる。

「ふっ！【飛刃】」

その盾に合わせて蹴りを放ち、テオドルのシールドバツシュの威力を利用して大きく跳び退がりながら斧を振り、魔力の刃を飛ばします。

迫る魔力の刃を剣で叩き落としたテオドルは同じように魔力の刃を飛ばして来るので戦斧の柄で弾きました。

「テオドルさんでしたか、強いですね」

「ふふ、貴女程の強者に認めて頂けるとは、騎士として誇りに思います」

わたしは手にしていた戦斧を背中に背負い、腰から吊るしていた双斧を手に出します。

白い柄の斧『スノーホワイト白雪姫』、赤い柄の斧『シンデレラ灰被り』。  
二振り一対の双斧で強力な魔法武器です。

左手のスノーホワイトを振ると、氷の棘が所狭しと突き上がり、テオドルが回避しようと飛び上がった所に右手のシンデレラから吹き上がった炎が襲い掛かります。

テオドルはそれも魔力の放出で炎や氷を吹き飛ばし、わたしから距離をとり、一瞬の間を置いて斬りかかって来ます。

流れる様な剣戟を双斧で受け止め、受け流し、弾き返します。

エリーさんの方も気になりますが、そんな事を考えていられる相手では有りませんね。

わたしは気を引き締め直して両手の斧を振り上げました。

## 決戦

「つく」

ゆっくりと近づいて来たブライト王は、消耗して足に力が入らない私の前に立ち紫電を走らせる神器を頭上に掲げた。

「さらばだ、エリザベート」

振り下ろされる剣。

だが私には届かなかった。

ブライト王の神器は交差させた大剣とシャムシールによって受け止められていた。

「エルザ！イーグレット！」

剣を止められたブライト王は刃を合わせる2人を排除しようと神器に魔力を込めて雷撃を撃ち出そうとするが、黒い矢の様に飛び込んできたユウの大斧を躲す為に2人から離れ、そこを狙った泥の杭が猛スピードで迫るが、神器の一振りで蒸発させた。

エルザに支えられた私は、ユウからポーションを受け取り口にしながら立ち上がるのだった。

時は少し戻り……。



私はハルドリア王国兵に囲まれる中、神器【不屈の大剣】を手にその圧倒的な強化能力で殺到する敵兵を寄せ付けなかった。

私の神器【不屈の大剣】は自らの身体能力を強化するだけの単純な能力しか無い。

しかし、その強化率は窮地に陥るほど上昇すると言う特異な能力だ。

周囲を強力なハルドリア王国兵に取り囲まれて居る現状、【不屈の大剣】は秘めたる能力を十二分に発揮していた。

「はあああ!!!!!!」

女にしては長身である私が手にしてもなお大きく見える大剣を片手で振り回し、敵を触れる端からミンチに変えて行く。

私の周囲が血の海となり、むせ返る様な鉄の匂いが満ちる血霧の先で、ユウが腕の立つ騎士の防御を崩し、大斧の神器で盾ごと叩き割るのが見えた。

「ユウ」

「エルザさん、かなりの数に囲まれていましたがご無事でしたか」

「ああ、そっちも相当強い騎士が相手だったみたいだな」

「はい、テオドルさんと言う騎士でした。とても強かったですね」

ユウが懐から取り出した2本の疲労回復ポーションの内1本を投げ渡してくれる。

一言礼を言っで一息で呷った。

ポーションは流石の効能で、溜まっていた疲労感がすうっと消えていった。

この辺りの敵兵は私とユウが暴れたせいでかなり距離をとってこちらを窺っていた。

次の行動を簡単にユウと話し合っていると、泥の巨人に乗ったシスティアとエリーの友人のイーグレットと言う商人が姿を見せた。

2人が泥の巨人から飛び降りる。

「システィアさん、イーグレットさん。其方は如何ですか？」

「悪くはないな。ハルドリアの兵は強いが、報酬分くらいの働きはしたさ」

「こつちもだ。だが、エリーが不味い。

あの《雷神》と闘っていて、押されている様だ」

「エリーさんが」

「加勢に行こう。相手はあの《雷神》だ、エリーでも1人では勝てないかも知れない」

私の言葉に頷いた皆と共に、雷が降り注ぐ方へと向かって走り出した。

## 決戦

「【泥沼】 【泥枷】」

システィアが地面に手を突くとブライト王の足下を中心に地面が緩み、泥の触手が伸びてブライト王の脚を拘束する。

「【月刃】」

すかさずユウが大斧を横風振るうと、三日月型の魔力の刃が空を駆けた。

「【破電】」

ユウのスキルが当たる寸前、ブライト王の全身が轟音と共に雷光を放ち、魔力の刃を消しとばし、周囲の泥を蒸発させる。

紫電を纏いながら僅かに浮遊するブライト王は、神器である剣の切先を此方に向けた。

ユウのポジションでようやく動ける様になった私は咄嗟に叫ぶ。

「雷撃よ！回避！」

エルザに肩を借りながらブライト王の正面から退避する私。  
イーグレットやユウ、システィアもブライト王から距離を取る。

「エルザ、大丈夫？」

「ああ、何とか。神器をつかっていなかったら不味かったな」

エルザは私を庇って火傷を負ってしまったが、神器による強力な身体強化で上昇した治癒能力によりすぐに傷は治って行く。

「今ので誰も死なないか、強いな」

土煙の中から余裕の表情でブライト王が現れる。

私は近くに居るエルザとシスティアに手早く動きを伝える。

更にユウとイーグレットに視線を向け、ハンドサインを送る。

義勇軍を組織した時に決めた簡易的な物だが、簡単な意思の伝達くらいは可能だ。

ユウとイーグレットは左右から同時にブライト王へと斬りかかる。それを視線を向ける事すらせずにブライト王は雷撃を放ち迎撃しようとするが、その雷はシスティアが伸ばした泥の塔に引き寄せられる。

あの泥の塔の先端には私がシスティアに手渡した雷電石が仕込んである。

「っ  
っ」

不意を打たれたブライト王は咄嗟にユウの大斧を神器で受け止め、イーグレットのシャムシールを腕で受ける。

強力な身体強化で高めた防御力で腕を守るが、半ばまでを断ち切った。

「ちっ！」

ブライト王が2人を振り払おうとするが、それよりも早くユウと

イーグレットは距離を取る。

好機に深追いしなかった2人に訝しげな視線を送るブライト王の眼前に私は躍り出た。

「エリザベート!!」

私に神器を向けるブライト王。  
その姿を正面に捉えて駆ける。

「神器【嫉妬の魔導書】」

## 決戦

「神器【雷神の剣】」

「つな  
」

他人の神器を複製する【嫉妬の魔導書】で作り出したのはブライト王の神器【雷神の剣】だった。

驚き目を見開くブライト王の剣を同じ剣で受け止め、刀身から放たれた雷撃は、私の【雷神の剣】が吸収する。

そこからは純粹な剣技の競い合いとなった。

火花と紫電を散らしながら剣を撃ち合う私達を、ユウ達は遠巻きに武器を構えている。

周囲に雷を撒き散らしながら剣を合わせる私達に近づけないのだらう。

一撃の威力よりも手数を意識して剣を振るう。

切り上げから半円を描き首を狙い袈裟懸けに振り下ろす。

それに合わせるブライト王だが、イーグレットに斬りつけられた腕が反応を僅かに鈍らせていた。

「ぐう！」

ほんの一瞬の隙、その隙を逃さず振われた私の剣はブライト王の左腕を斬り飛ばしていた。

ブライト王が片手で剣を握り直す。

喉を狙って突き出した切先を身を投げ出す様に躲したブライト王は、地面を転がる様にして私から距離を取ろうとするが、システィアがすかさず地面を泥沼に変え、ユウとイーグレットが斬撃を飛ばした。

肩を深く斬られたブライト王は雷を纏いながら無理矢理私達から距離をとる。

「陛下、お覚悟を」

雷光を放ちながら駆ける私は剣を肩に担ぐ様に構える。  
ブライト王も私と同じ構えを取る。

「『【轟雷一閃】』」

雷を凝縮した様な剣が打ち合った瞬間、閃光が視界を埋め、私達の立っていた場所を中心にクレーターが出来上がる。

「エリーさん!!」

「エリー!!」

ユウ達の叫び声が聞こえた気もするが、それも轟音で聞こえなくなつた。

閃光が収まった時、ブライト王の姿は消えていた。  
流石に蒸発させたなどと言うことはあり得ない。

「……………逃げられた」

まさか、あのブライト王が大技である【轟雷一閃】を使ってまで

逃げに徹するとは思わなかった。

「はあ、はあ、はあ」

膝から崩れ落ちた私は、ユウやエルザ達が通って来るのを感じながら意識を手放したのだった。

「ぐっ！」

ブライトは何とか戦線を離脱して後方へと退がっていた。軍の最後方、司令部の天幕がある場所のだが、少し様子がおかしかった。

「何故誰も居ない？」

斬り落とされた腕を押さえながら一番大きな天幕に入ったブライトが目にした物は、司令部に残っていた忠臣達の死体だった。

「何があつた！」

叫ぶと同時に警戒を最大にし、周囲の気配を探るブライト。すると、天幕の奥からゆっくりと近づく気配がある事に気付いた。

「お帰り、父上」

花と風を凶案化した羽織を肩に掛けた黒髪翠目の少女はブライト



と真っ正面から視線を合わせた。

一方その頃：精霊結晶

バルコニーから戦場を見下ろすティードは、フラウが気怠げに腕を振ると、それに合わせて騎馬に乗った砂の騎士団が1つの生き物の様に魔物を引き裂き、城門に備え付けられたバリスタから放たれた砂の巨矢が、一際大きな竜種を撃ち倒すのを見た。

「す、凄いッス」

3体の悪魔も倒しても倒しても直ぐに元に戻り戦線に復帰する砂の騎士に討ち取られる。

「終わったの〜」

あれだけ居た魔物の群れが全て屍に変わるのに1時間も掛からなかった。

「……………これがSランク冒険者の実力ッスか」

「あちしは〜大群を相手に〜するのが得意なの〜」  
「得意とかって次元の話ッスか？」

ティードとフラウは魔物の死体の間を歩いていた。  
……………フラウはティードに背負われているが。

「変異種も問題なく討伐されてるッスね」

「そうなの〜」

どうでも良いと言う感じでフラウが適当に返事を返す。

「ん？」

ティータは魔物の死体の山の中に、違和感を感じた。

「どうしたの？」

「いや……何か妙な感じが……」

フラウを背負ったままティータが近づいたのはグランドベアーの変異種の死体だ。

「どこかへんなの？」

「何処と言うか……変な魔力の流れを感じるんツスよん？」

フラウはティータの背から手を伸ばすと指先をクイッと回した。たったそれだけの動作で砂の刃がグランドベアーの変異種を輪切りにした。

「ちよっ」

「これで問題ないの？」

ティータが慌ててグランドベアーの変異種を見ると、切断された身体の中から妙な物が覗いていた。

「何ツスか、コレ？」

それは大きく透明な水晶球だった。

「ちょ　子供が入っているツスよ！」  
「あわ〜なの〜」

フラウを取り落としながらティーダが水晶球に駆け寄る。

水晶球の中に閉じ込められているのは金色の髪の毛の裸の少年だった。歳の頃は10歳程、ティーダは鉄杖を振り上げて水晶球を叩き割ろうとするが、罅1つ入らない。

「う〜落とすなんてひどいの〜」  
「フラウさん、水晶の中に子供が閉じ込められているツスよ！」  
「ん〜？」

フラウが水晶球を覗き込む様に調べると何度か頷いた。

「これは〜多分、精霊結晶なの〜」  
「精霊結晶？」  
「そうなの〜」  
「……………」  
「……………」  
「いや、説明して下さいツス！」  
「え〜」

フラウが渋々説明し始めた事を簡潔に纏めると、精霊結晶とは精霊が魔力を凝縮して作り出す結晶で、非常に硬く破壊する事は難しいらしい。

「何でそんな物の中に子供が入っているんツスか？」  
「さあなの〜」

首を傾げたフラウの横で水晶球が不意に溶ける様にして消え去った。

「え」

「消えたの」

ティータは急いで子供に駆け寄って抱き起こした。

「……………もう死んでるツスね」

ティータは精霊結晶に閉じ込められていた少年を寝かせて布を掛け、胸で手を組ませてやった。

「一体どうなっているんツスカね？」

## アデルvsブラート

アデルはブラートに近づいて行く。

「アデル、これは貴様がやったのか？」

ブラートは周囲に残る血の跡を見遣り問う。

「はい。彼らは忠義者でした。

高位士官は誰一人貴方を裏切らなかつたよ」

「アデル！何故こんな事を！」

「何故？それは此方のセリフです。

父上、何故こんな戦いをするのですか！

確かに貴方は好戦的ではありませんが、こんな馬鹿な真似をする人ではなかつた筈だ！」

「全ては国の為だ！俺は王国を守る為、王国の発展の為に戦っている！」

「この戦いの所為で王国が滅びようとしている事が何故わからないのですか！」

アデルとブラートの言い争いは平行線をたどり、一向に交わる事は無い。

そしてついにアデルはため息を吐き出しブラートとの間合いを測る。

ブラートもそれに気付き、纏う空気が戦の気配を匂わせ始める。

「最後だ、ブラート。ハルドリア王国第54代女王アデル・ハルド

リアの名に於いて命ずる。抵抗を止め、速やかに降伏せよ」

「戯言を抜かすな小娘が。貴様の戴冠など認めていない」

睨み合う2人の間に渦巻く魔力によって、周囲の机や棚が砕け、崩れて行く。

棚に収められていた資料が落ち、音が響いた瞬間、アデルが疾風を、ブライトが紫電をその場に残留して姿が掻き消える。

一拍の間を置いて天幕が風の刃で粉々に砕け、雷が焼き尽くす。

天幕が有った場所の上空でアデルの拳とブライトの拳がぶつかり合う。

ブライトが繰り出す拳をアデルはそつと自分の手を添えて受け流す。

片腕を失ったブライトは攻めきれず、アデルは懐に入り込む。

「【風華：神風】」

「ぐばあ！」

アデルがブライトの胸に添えた手から放たれた衝撃はブライトの体内で暴れ回る。

口から血を吐き出したブライトは膝を突く。

「その腕、エリー姉様にやられたのですよね？」

魔力も殆ど残っていない。今の貴方は万全とは程遠い。ボクには勝てないよ

「ぐう……」

ブライトは立ち上がろうとするが、直ぐに崩れ落ちてしまう。

「拘束しろ！」

アデルが指示を出すと控えていたオルトとフロンテが魔封じの枷を手に歩み寄り、ブラートの魔力を封じて拘束した。

その後、連行されるブラートの後ろ姿を見ながらアデルは呟く。

「父上、何故こんな事を……」

ブラートの行動は何処がおかしい。

短絡的で粗暴な所は有るが、王としては善性の人間だったはずだ。それに側にはジークも居た。

だが、要所要所での判断ミスが王国をこれ程の危機へと導いている。

「一体何が……」

「アデル陛下！」

アデルが考え込んでいると1人の兵士が平伏して報告する。

下級の伝令兵らしく、革鎧と兜を身に着けた特徴の無い男だ。

「ご報告します。撤退の用意が整いました」

「そうか、では全ての兵を撤退させる。国境まで後退する」

「はっ！」

命令を出したアデルは神器である羽織を翻しその場を後にした。

それを見送りながら伝令兵は1人、口を歪めて不気味な笑みを浮かべる。



「御下命、賜りましただよ」

伝令兵の格好をした男、百足はアデルの命令を伝える為に軍令本部へと向かって走り出した。

## 追撃戦

深い闇に光が差す様に意識が浮上し、私は目を覚ました。

「ん、此処は……」

「目が覚めましたか？」

「ユウ」

「此処はレクセリン砦のエリーさんの部屋ですよ」

「私は……」

「ブライト王との戦いで魔力を使い果たして倒れたんです」

「彼奴はどうなったの？」

ブライト王を倒しきれでは居なかった筈だ。

確か、大技をぶつけ合った隙に逃げられたと思う。

「ブライト王は逃走しました。一応追いかけたのですが見失ってしまいました」

「そう……私はどれくらい眠っていたの？」

「丸1日くらいですね」

その言葉を聞き、私は魔法で灯りを点そうとしてみるが、自分の魔力を動かせなかった。

【嫉妬の魔導書】の反動で魔力が使えなくなっている。

魔力が使えないと身体強化も出来ないなので、私は多少鍛えている程度のみしか無い。

「後2日は戦えないわね」

「あの神器の代償ですか？」

「ええ、アレは1度使うと3日間魔力を使えなくなるのよ」

それからユウから現在の戦況を聞いた。

ブラート王を逃した後、半日程するとハルドリア王国軍が攻め手を緩め、遠巻きに包囲するように陣形を変えた。

どうやらハルドリア王国軍の指揮官達は混乱している様だが、物資や馬車の動きから撤退しようとしていると見られている。

帝国側は監視を強め、ハルドリア王国軍に動きがあれば直ぐに対応出来る様に構えていた。

そして、私が目覚めてから1日が経った後、ハルドリア王国軍が撤退を開始した。

オーキスト殿下はその機を逃さず、足の速い騎馬部隊を中心とした追撃部隊を放った。

背を見せる敵軍を容赦無く攻め立てて戦果を挙げていた追撃部隊だが、半日程経つとハルドリア王国軍も殿に強力な兵を配置したようで、当初程のダメージを与えられなくなっていた。

「【灯り】」

私の指先に淡い光が点く。

再び魔力が使える様になっている事を確認した私は、直ぐに指を振るって光を消すと、ミーシャが連れてきてくれた軍馬の手綱を受け取った。

「じゃあ、私も追撃に出るわ」

「御武運を」

「ミレイとミーシャも此処を頼んだわよ」

「お任せ下さい」

ミレイ達に見送らせた私は、軍馬に跨り撤退するハルドリア王国  
軍を追うのだった。

## 追撃戦

砦を出発して数時間、追撃に出ていた友軍を前方に捉えた。

追撃部隊は簡易拠点を築いて休息している様だ。

私の馬に気付いた兵士が武器を取り警戒するが、姿がハッキリと確認出来る距離まで近づくと、武器を下げ、直立不動で敬礼を送って来た。

「お疲れ様です、エリー軍団長！」

「ええ、皆もお疲れ様。部隊長は何処？」

「ご案内致します！」

兵士は仲間を呼ぶと見張りを交代し、私を先導して歩き始めた。簡易拠点とは言うが、土嚢が積んでいたり、逆茂木が設置している訳ではない。

見晴らしが良く警戒しやすい場所に屋根だけの天幕を置いて周囲を見張っているだけの場所だ。

彼らはこの場所を拠点に逃走するハルドリア王国軍の背後を攻め立てている。

一目散に逃げているとは言え、ハルドリア王国軍は大軍だ。

当然、その足は遅い。

騎兵を中心とした追撃部隊はすでに何度も攻撃を仕掛けており、ここに至るまでに転がっていたハルドリア王国兵の死体も彼らの戦果なのだろう。

先導してくれている兵士は天幕の下で作業していた上官に声を掛ける。

「部隊長、エリー・レイス義勇軍団長殿が到着されました」

「ん？ああ、ご苦労。お前は任務に戻れ」

「はっ！失礼致します」

私が案内してくれた兵士に軽く手を上げて礼を伝えると、彼はビシッと敬礼して小走りに見張りに戻って行った。

戦果の大小に大きく影響する追撃部隊に選ばれるだけ合って教育の行き届いた兵士だ。

「邪魔して悪いわね。現在の状況を教えて貰えるかしら？」

「はい。我々は部隊を3つに分けております。」

今もハルドリア王国軍の背後を突いて圧力を掛けている者達、周囲の索敵を行っている者達、そして我々拠点で指揮を取る者達です」

「ハルドリア王国軍の動きは？」

「はい。現在は此処から数キロ程離れた場所に最後尾が有ります。」

騎兵を中心に手傷を負わせる事を念頭に置いた攻撃を仕掛けております。

反撃は散発的で、末端の兵士の混乱は大きく、潰走に近い状態です」

部隊長の報告に頷いた私は、頭の中にこの周囲の地図を描く。

部隊長は潰走と表現したが、此方の追撃部隊が鶴翼陣形で攻め立てているので、敗残兵が山や森に逃げ隠れ、野盗になる様な事は少ないだろう。

さながら羊を追い立てる牧羊犬の様だ。

「私も追撃を行うわ。広範囲魔法を数発撃ち込むだけでかなりのダメージを与えられるでしょう」

「はっ！前線にご案内致します。護衛の兵士は必要でしょうか？」

「必要無いわ。案内の兵士だけ貸して頂戴」  
「了解致しました。直ぐにご用意致します」

私は部隊長が用意してくれた兵士に案内され、ハルドリア王国軍の最後尾を追撃している最前線へと向かって馬を向けたのだった。

## 追撃戦

見えてきた最前線では、帝国軍の追撃部隊が啄む様に攻撃を加えていた。

ハルドリア王国軍の殿は正規兵だが、騎士程では無い。傷を負えば交代し、少しずつ被害は増えて行っている。

追撃部隊と合流した私は早速魔法を使うべく、友軍を退避させた。ハルドリア王国軍は、急に攻め手が緩んだ事を訝しんでいる様だが、コレを好機と捉えたのか指揮官が下級兵を急かして足を早めていた。

「【石塔】」

【暴食の魔導書】を片手に石の塔を作り出し、頂上に立つ。直径1メートル程の足場だが視界を確保する為の塔なので問題は無い。

使う魔法は広範囲が良いが、威力は抑えめにするべきか。

高威力で死者を量産することも出来るけれど、帝国の領土内でそれをするとアンデッド対策や病気対策など面倒な事になるのでオーキスト殿下に止められたのだ。

なのでなるべく多くの兵に傷を与えて継戦能力を削る方針だ。

「【氷雨】 【旋風】 【炎矢】」



空から降り注ぐ魔法にハルドリア王国軍はパニックになる。

直撃さえしなければ即死はしないが、砕けた氷や火の粉が風に舞い広範囲に被害を与える組み合わせだ。

隊列を乱して逃げ出そうとする者も居るが、其方は事前に左右に配置した追撃部隊が迎え撃っている。

私は石の塔の上から何度も魔法を放つのがだった。

「アデル陛下！」

「如何したの？」

ボクは撤退中の軍の先頭近くで伝令の兵に対応していた。

「帝国軍の追撃が更に苛烈になりました」

その報告にボクは顔をしかめる。

一応、殿には正規の訓練を積んだ兵と、占領していた都市でいろいろとやらかしていた部隊を配置して居ただけけれど、如何しても被害が出るだろう。

更に詳しく聞くと、帝国の追撃は大量の広範囲魔法を打ち込む物らしい。

嫌らしいのは、その魔法が明らかに手加減されていると言う所だ。怪我はするが死にはしない。

戦場で一番厄介な物だ。

「相手の魔法使いは何人？」

「1人です。噂の黄昏の魔女だと思われます」

「……………エリー姉様が」

ボクは後方に目を遣る。

此処からでは何も見えないが、後方ではエリー姉様の魔法が雨霞と撃ち込まれているのだ。

「ボクが出るよ」

「アデル陛下！」

「大丈夫だよ、オルト。エリー姉様を止められるのはボクだけだ。今度は戦うよ」

## 追撃戦

「【岩雨】」

手にした【暴食の魔導書】に魔力を込めると、人の頭程もある岩がハルドリア王国軍の頭上に現れた魔法陣から降り注ぐ。

「【風華：神風】」

岩が兵士の頭を砕く寸前、風が無数の岩を一つ一つ捕らえて粉々に砕いてしまった。

「アデル」

私は正面から少し視線を上げて、空中に留まるアデルと目を合わせた。

「エリー姉様、兵を退いて貰えませんか？

ハルドリア王国軍は既にボクが掌握しました。

速やかに国境まで撤退し、帝国との和平交渉へと移ります」

「貴女にそんな覚悟が有るとは思えないわね」

「……………そうですね。先日は無様を見せてしまいました。ですが、ボクが王国の民を守りたいと思っているのは事実です」

「そう……………あんな国の民を守る為に命を掛ける気が知れないわ」

「エリー姉様からすればそうですね」

アデルは苦笑いを浮かべた。

次の瞬間、私とアデルの間で激しい火花が散る。

私は瞬時に距離を詰め、【強欲の魔導書】から取り出した細剣を振るう。

フリーゲルはアデルの風魔法で対策されている。

先程からアデルの神器らしき羽織からはランダムに突風が吹き出しており、さながら大嵐の中にいる様だ。

こんな場所でフリーゲルを取り出せば即座に刃は砕け散るだろう。

代わりに取り出した細剣は数打ちの物だが、帝都の一流工房で作られた最高級の逸品なのだが、アデルの手刀と数合打ち合っただけで刃毀れしている。

やはりアデルの神器の能力は風属性魔法の増幅と高速化ね。

良くあるタイプの能力だけど、アデルの練度は高く非常に強力だ。

「ふっ！」

アデルの回し蹴りに剣を合わせて足を斬り落とす様な軌道で振ったのだけれど、逆に刀身を蹴り砕かれてしまう。

細身の刀身が災いしたか。

咄嗟に両手で拳を握り胸の前で揃え、肩を狭めて膝を曲げて重心を落とす。

パンチやキックなどの打撃を中心にしたハルドリア王国式軍隊格闘術の構えだ。

対するアデルは左手を柔らかく前に出し、半身にした自分の身体で左腕を隠す様に構える。

アレは確か、受け流しや関節、投げ技など相手の力を利用する南大陸のレキ帝国で生まれた拳法の構えだ。

「久しぶりに稽古をつけてあげるわ、アデル」

「ボクは既に王です。舐めていると痛い目を見てもらう事になりますよ、エリー姉様」

お互いに獰猛な笑みを向け合い、私とアデルの戦いが始まった。

## 追撃戦

私とアデルの間合いは約3メートル。

一般的な徒手格闘戦の間合いとしては離れているが、身体強化や【縮地】などのスキルを使える私達にとっては一瞬で埋められる距離だ。

アデルの踏み込みに合わせて上体を逸らし、抜き手の三連撃を躲し、アデルが呼吸したタイミングで胴を撃ち抜く様に拳を放つ。

だが、アデルは私の拳の軌道を撫でる様にして僅かにずらし、両腕を蛇の様に絡めようとする。

拳を放った腕が伸び切る前に引き戻す。

あのまま腕を伸ばしていたら関節を破壊されていただろう。

アデルの後ろ回し蹴りを屈んで躲す。

戦況は悪い。

神器の効果なのか、アデルは打撃の一つ一つに風の刃を纏っている様だ。

それを防御する為に通常よりも多くの魔力を身体強化に回さなければならぬ。

そして、この猛スピードでの戦闘で、私の神器【七つの魔導書】を使う隙を潰されている。

私の神器は魔導書を作り出し、使用する性質上、効果を発動するのに数秒の時間が必要となる。

アデルの動きから考えて、それだけの時間が有れば大技を撃ち込まれる可能性が高いのだ。

「【水壁】」  
「っ」

アデルの掌底に合わせて水の壁を弱めに作り出す。  
腕を水に突っ込んだタイミングで即座に水を氷に変えた。

「神器【暴食の魔導し……】」

作り出した際に神器を出そうとするが、アデルはノーモーションで氷を砕き、間合いを詰めて来た。

今のは初めて見る技だ。南大陸の気功と言われる技だろうか？

「くっ」

【暴食の魔導書】に魔力を込めようとするがアデルの方が速い。

「【風華：絶掌】」

腹部に添えられたアデルの掌から魔力に似た何かが放たれ、私は数メートルの距離を飛ばされる。

「うう……ごほっ」

内臓がダメージを受けたのか、胃の腑から込み上げて来た血を吐き捨てる。

「妙な技ね。南大陸の【気功】かしら？」

「そうだよ。魔力を『気』として練り上げて使う技術。こと近接戦闘に於いては魔力による身体強化よりも強力だよ」

集中が乱れたせいか、【暴食の魔導書】は消えている。もう一度作り出す隙は有るだろうか？

どうやら無手での戦闘はアデルの方が圧倒的に強い様だ。最後に会った時はまだ小さな少女だったのだけれど、まさかここまで強くなっているとは驚いたわね。

こんな状況なのに、私はアデルの成長が少し嬉しかった。

数秒で良い。

数秒時間を稼ぎ、神器を使う。

私は全力で身体強化の魔法を掛けると無詠唱で魔法を放った。

「【白霧】」



## 追撃戦

霧を作り身を隠すが、アデルは直ぐに突風で霧を吹き飛ばす。

「【風華：旋風】」

アデルが振り下ろした手刀から放たれた風の刃が私を両断する。しかし、2つに分かれた私は輪郭を失い霧となって消えた。驚くアデルの直ぐそばの空間が揺らぎ、私は姿を現す。

「なっ  
」

以前、ヒルデの神器【泡沫の蝶】を見て思い付いた魔法だ。

【白霧】で作った霧の一部を魔力で人型に変えて、【氷人形】の応用で幻影を重ねた【霧人形】の魔法だ。

【氷人形】よりも低コストで動きも滑らかに再現出来る。

更に本物の私は霧を身に纏い周囲の景観を写す事で姿を消していたのだ。

反応が遅れたアデルに魔力を乗せた拳を振り抜いた。

確かな手応え、アデルは腕を上げて受けたが、殴った感覚から骨は折れている筈だ。

「神器【暴食の魔導書】」

僅かな隙を突き魔導書を手にする。

「【竜巻】 【火柱】」

2つの魔法がアデルを中心に交わり巨大な火災旋風へと変わる。ハルドリア王国軍も帝国の追撃部隊も私とアデルが戦い始めてから距離を取っているので巻き込む事はない。

私は自分の魔法に巻き込まれない様に距離を空けると次の魔法を用意する。

そして火災旋風が収まって来た所で追加の魔法を叩き込む。

「【岩槍】 【変質：鉄】 【天雷豪雨】」

天を突く様に地面から飛び出した岩の槍を、土属性魔法と錬金術を応用した魔法で鉄に変える。

それを避雷針として、本来なら広範囲に無数の雷を降らせる魔法を収束させる。

その威力はブラート王の神器による大技【雷神の鉄槌】に匹敵する。

避雷針にした鉄の槍は瞬時に蒸発し、高熱で地面が硝子化する。

距離を空け、高威力の魔法を連続で叩き込む。

それが私の本来の戦い方だ。

剣や格闘術でも戦えるが、本質的に私は、所謂『魔法使い』タイプなのだ。

『拳士』であるアデルとの接近戦では勝ち目は無い。

更に数発の魔法を浴びせると、強烈な魔力の放出と共に土埃が風で吹き飛ばされる。

「ぐう」

重心を落とし、腕を上げて顔を庇う。

風が止むとそこにはアデルが立っていた。

「アレを受けてまだ生きているなんて……流石はブライト王バケモノの娘ね」  
「はは、もう限界が近いよ。ボクも」

そう言いつつアデルは右手の指を揃えて風の刃を纏う。

私はそれに答える様に【暴食の魔導書】を掲げ……魔力を霧散させて魔導書を消した。

「エリー姉様？」

「止めておくわ」

私アデルに向けていた殺気を止めると、アデルも風の刃を消し、神器を解除した。

「これって引き分けなのかな？」

「私の負けで良いわよ。あれだけ魔法を叩き込んで無事だったんだから、勝ちが貴女にあげるわ。」

強くなったわね、アデル」

「ふふ、有り難く貰っておくよ、エリー姉様」

私は踵を返すと遠巻きにこちらを窺っていた追撃部隊に撤退の指示を出す。

アデルも私に背を向けると自軍の方に去って行くのだった。

## 一方その頃：ナイル王国の異変

周囲の魔物を討伐したティータ達は、精霊結晶から出て来た少年の遺体を弔った後、リースベールに戻り、そこを拠点に散発的に現れる魔物を討伐していた。

しかし、最初の悪魔に率いられた群れ程の大群では無く、リースベールの冒険者達でも十分に対処可能だったものの、いつまで経って魔物の襲撃は終わらなかつた。

ティータは正直もう帰りたかつたが、大神殿からシャイニングバードが運んでくる教皇からの命令で、悪魔が関係している可能性が高いこの魔物の大発生の原因の調査を命じられたのでトンスラする訳にも行かない。

そんな理由でティータは、これまた嫌々連れてこられたフラウと共に魔物の発生源を探る為に旅立つ事になった。

「はあ、何で私がこんな事をしなきゃいけないんツスカね？」

「ほんとなの。あちしもどぞかん」

「フラウさんは冒険者じゃないツスカ。私は聖職者ツスよ」

「疲れたの、帰りたいの」

「そう言うセリフは自分で歩いてから言っただけいいツス」

ティータは背中に背負ったフラウに口を尖らせて文句を言ったが、フラウは無反応だった。

しばらく門の近くで待っていると、フラウと共に帝都の冒険者ギルドから来たらしい男性職員のジョンが馬車を御してやって来た。

調査に行くのはこの3人だ。

道中、ただでさえ魔物が多く危険な道のりの都市国家間のルートに強力な変異種や悪魔も混ざる様になっていた。

魔物が来た方に進むなか、倒した変異種の内、キングオーガ、ブレードタイガー、アックスドレイクの3体の変異種の魔物からは例の精霊結晶に包まれた子供が出て来た。

少年が2人と少女が1人、いずれも直ぐに精霊結晶が消滅し、子供達は生きてはいなかった。

子供の死体を供養し、旅を続ける。

魔物の襲撃が酷く、1日の移動距離は非常に少ない。

時折、神殿から届く手紙で世の中の情報は耳に入る。

エリーと別れて1年近くが経った頃、ようやくナイル王国の王都が見えて来た。

だが、様子がおかしい。

王都を出入りする商人や冒険者などの姿が見えないのだ。

フラウと相談したティータは、王都に入らず近くで身を隠しながら様子を窺う事になった。

「何で誰も出入りしないんツスカね？」

「わかんないの〜」

「あっ！」

眠そうなフラウと食事の用意をしているジョンの横で王都を見ていたティータは声を上げた。

「どっしたの〜」

「悪魔ツスよ！悪魔がナイル王国の王都から出て来たツス」

## 終戦

追撃を終えた私は、追撃部隊と共にレクセリン砦に戻っていた。ハルドリア王国軍が撤退して行った方角とは別の方に逃げた脱走兵を狩る為に出ていたユウ達や、他の兵も戻り初めている。

国境まで退がったハルドリア王国軍は、その場で陣地を敷き拠点を作っていた。

帝国軍は国境を越えない様に監視だけはしていたのだが、半月程経つとハルドリア王国からの使者がレクセリン砦にやって来た。

オーキスト殿下と謁見した使者はアデルからの書状を持っていた。使者が帰った後、私やルーカス様など主だったメンバーが集められた。

「今日、ハルドリア王国からの使者が訪れたのは知っているな？」

オーキスト殿下の言葉に、私達は頷きで返した。

「その使者が持って来た書状の内容なのだが、端的に言ってしまうは降伏状だ」

事情を知っている私やルーカス様以外の幹部達は戸惑いを見せる。

「あれだけの事をしておいてすんなり降伏するとは思えないですな」「うむ、何か裏が有るではありませんか？」

「いや、どうやらハルドリア王国内で政変が有ったらしい。ブラート王は排斥され、アデル・ハルドリアが女王として即位したそうだ」

「アデル・ハルドリア？」

幹部達の中には首を傾げる者も少なくない。

アデルは幼い頃に南大陸に留学した為、知名度は高くないのだ。

「エリー殿」

「はい。アデル・ハルドリアはブライト王の側室であるギョクリヨウ妃の娘でフリードの腹違いの妹ですね。

ギョクリヨウ妃の故郷である南大陸のレキ帝国に留学していたのであまり知られていませんが、ハルドリア王国の王位継承権第2位です」

私の説明に幹部達は納得した。

「では現在のハルドリア王国の君主はアデル女王陛下と言う事か」「そうだ、数日後そのアデル陛下が交渉の為にレクセリン砦を訪れる。」

その為の会議をしたいと思う」

そこからはオーキスト殿下と文官が中心となって、和平の条件やハルドリア王国への要求などが話し合われた。

流石に私はあまり口出しは出来なかったが、ブライトの処遇には多少の意見を言わせて貰った。

そしてレクセリン砦に少数の護衛だけをつれ、アデルがやって来た。

## 終戦

レクセリン砦にやって来たアデルは、オーキスト殿下に促され会議室へと入って行った。

此方からはオーキスト殿下とルーカス様、それとオーキスト殿下の補佐官である帝都の文官が数人だけ同席している。

私はその間は自室で待機だ。

暇なのでミレイに珈琲を淹れて貰う。

「ハルドリア王国は降伏するのですよね？」

「そうね。今はアデルが女王だから、アデルが降伏を決めたのならそうなるわ。」

その為にブライトやフリードの身柄を押さえたみたいだし」

「帝国に差し出す首と言う事ですか」

「ええ、帝国は都市を1つと村を幾つか潰されているのだからそれなりの報復が必要なのよ」

「ですが、アデル様はこの戦争でエリー様と何度かぶつかったのですよね？」

「そうするくらいなら、此方と協力して戦った方が良かったのでは？」

「いいえ、今回の件ではアデルが……ハルドリア王国側がブライトとフリード、その他の責任者を捕らえて帝国に引き渡す必要があるのよ。」

アデルは民の生活を守る事を第一にしている。

もし帝国の手を借りてブライト達を倒した場合、ハルドリア王国は代償を支払う必要があるの。

具体的に言うと、王国の都市の1つでも焼き払うくらいはしない



と釣り合いが取れない」

「っ  
」

「勿論、オーキスト殿下なら民には避難する時間を与えるでしょうけど、それくらいはしないと帝国の面子が立たないわ」

「ではアデル様が今回の戦争の首謀者を引き渡した場合だとどうなるのでしょうか？」

「その場合は、ハルドリア王国側である程度の解決がなされたと見做して責任者の処罰と賠償辺りで何とかなるわ」

「……屁理屈では？」

「政治なんてそんな物よ。形式と建前が大事なの。」

オーキスト殿下だって別に王国の都市を焼きたい訳では無いでしょうから、アデルが言い訳を用意して来たのなら乗っかるでしょう」  
「そうですか……ではハルドリア王国はどうなりますか？」

私は珈琲の苦味を味わって香ばしい香りを吐息と共に吐き出した。

「ハルドリア王国はもう終わりでしょうね。」

条約を破って攻め込んで来たのだから当然よ。

これで王国の存続を認めたら帝国は麾下の国々にいつ反乱されるか分からなくなるわ。」

此処で甘い対応はあり得ない」

「エリー様はそれでよろしいのですか？」

「そうね。正直、私が計画していた報復とはかなり違う展開になってしまったわ。」

でもこれで良かったのかも知れないわね」

「そうですか。私もそう思います。エリー様が王国の民に報復したいと思うのは当然でしょうが、それだけに支配されてしまうのは良くない」

「ええ、意外とスッキリした気分よ。私の手でブライトとフリードを始末出来なかったのは残念だけど、断頭台で罵声を浴びながら死

ぬのを見るのも悪くないわ」

「そうですね」

そこでミレイは何かに気付いた様に目を見開く。

「あつ！あの……アデル様はどうなるのでしょうか？」

「アデルは……多分、皇帝陛下より毒杯を賜る事になるでしょうね」  
「なっ」

「ハルドリア王国はやり過ぎたわ。ブラートやフリードだけでは首謀者の首として足りない。民の生活を守るなら、現女王のアデルの命は差し出す必要があるでしょうね」

「し、しかし、サージャス王国の様に傀儡として担ぐ可能性も……」  
「無いでしょうね。サージャス王国とハルドリア王国では規模が違いすぎるわ。」

アデルを傀儡にすると、統治のリターンより反乱のリスクの方が高い。

王族の血を根絶やしにした方が今後の統治には有利よ」

「ですが……」

ミレイも幼い頃のアデルを知っている。

私も出来ればアデルには死んで欲しくはない。けれど……。

「アデルは全て覚悟の上で行動していたのでしょうか。だから私には止められないわ。」

止めてはアデルの覚悟と誇りに唾を吐く事になる」

「……………」

ノックの音が鳴り、ミーシャが顔を出す。

「エリー様、オーキスト殿下とルーカス様がお呼びです。会議室ま

「でお越し頂けますか？」

## 終戦

ミーシャにドアを開けて貰い、会議室に入った。  
会議室では円卓を囲む様にオーキスト殿下とルーカス様、文官達、  
そしてアデルが座っていた。

「やあ、エリー姉様」

「こんにちは、アデル」

私は空いていた文官の隣の席に腰を下ろす。

「アデル陛下が君と話がしたいと言っつね。

既に和平交渉は終わっている。私達は席を外す」

そう言っつて部屋を出るオーキスト殿下に頭を下げて見送った。

そうして2人になった私達は、戦争やフリード達の事を話題に出  
す事はなく、子供の頃の思い出話やアデルの留学先のレキ帝国の話、  
私の商会の話をして過ごした。

私達の談笑はオーキスト殿下の侍女がそろそろ、と声を掛けるま  
で続いた。

侍女に促され部屋を出るアデルは、ふと立ち止まり、私に振り返  
る。

「エリー姉様、ありがとう」

「何のことかしら？」

「ボクの誇りを守ってくれた事だよ」

「……………」

「1つだけ頼んでも良いかな？」

「構わないわよ」

「ボクの配下達の事、面倒を見て欲しいとは言わないけど、少しだけ気に掛けてあげて欲しいな」

「ええ、約束するわ」

「ありがとう。また話して貰えるかな？」

「勿論よ」

私の答えを聞いて破顔したアデルは機嫌良さげに部屋を出て行った。

アデルは、これからはしばらくレクセリン砦の一室で軟禁され、1度ハルドリア王国の王城でオーキスト殿下と諸々の処理をした後、身柄を帝都に移される事になるだろう。

それまでの間、なるべく会いに行ける様にしたいと思う。

こうして、ハルドリア王国の長い歴史は幕を下ろす事になった。

広く荘厳な帝都の宮廷の謁見の間で、壇上の帝座に腰を下ろした壮年の男の前に、ルイスは頭を垂れていた。

皇帝陛下は長々と口上を述べた後、ルイスと隣で同じ様に頭を垂れるリサーナに面を上げる様に促した。

そうして皇帝陛下直々に勲章を付けて貰ったルイスは、決められた口上を述べた後、リサーナをエスコートして皇帝陛下の前を辞した。

控室に戻ったルイスはソファにドサッと身を投げて緊張で張り詰めていた息を吐き出した。

「お行儀が悪いですよ、ルイス様」

「緊張してたんだからしょうがないさ」

「これからは正式な公国の後継になるのですからしっかりして下さい」

ルイスのフルネームはルイス・レブリック・ハルドリア。  
ハルドリア公国の公子であり、次期大公である。

公国を治める大公家は、ユーティア帝国より与えられた爵位であり、公国は国としての自治権を持つてはいるが、実質は帝都の傘下の国である。

その為、次期大公となった者は婚約者と共に皇帝陛下より勲章を賜るのが伝統であった。

「しっかりして下さい。公国に帰ったらもつと緊張する儀が待っているんですから」

「……そうだった」

ルイスは身を起こし、緊張を誤魔化す様に机の上に有ったりモコんで映像水晶のスイッチを入れる。

画面の向こうでは、炎の様に赤い髪をポニーテールに纏めた若い少女がマイクを手にポーズを取っている。

『《実録！歴史ヒストリー》来週は2時間スペシャル！『英雄ティルダニア』様の素顔に迫る！』

軽快な音楽と共に赤毛の少女が和かに手を振り番組の終了を告げていた。

「今週の、見逃してしまっただな」

「私はメイドに頼んで記録結晶に録画して有りますから、帰ったら一緒に見ますか？」

「ああ。それにしても来週はティルダニア様の特集か……またアカリちゃんが歴史的な場所を巡ってリポートするのかな？」

「帰国すれば爵位継承の為のあれこれが待っている。」

ルイスは現実から目を逸らす様に、リサーナが最近お気に入り赤毛のアイドルの話を振るのだった。

## 終戦（後書き）

此処までお付き合い頂き有難う御座います。

お気に入り登録や評価、ご感想、誤字報告など、とても有り難く思っております。

本作を投稿し始めた当初は、この章で全ての決着をつけて終わりの予定でした。

ですが蓋を開けてみれば魔導書で祖国をあまり叩き潰していないタイトル詐欺な展開となってしまうました。

まさかこんな展開になるとは、作者も予想外で驚いております。――：

（、、、）：

今後は、次章が最終章『アリス編』その後エピローグを入れて完結の予定となっております。

長く続くに連れ、自身の実力不足を痛感させられる本作ですが、もう少しだけお付き合い頂けると嬉しいです。

次回の更新は7月7日水曜日を予定しております。

（、、、）ノシ



## 王都の人々

その噂は突然囁かれ始めた。

「帝国と戦争になるんですって」

「フリード殿下が攻め込んだそうだよ」

「条約はどうなったんだ？」

ハルドリア王国がユーティア帝国に攻め込んだと言う噂。

ハルドリア王国は数年前にユーティア帝国と激戦を繰り広げ、ようやく停戦協定を結び平和が訪れたはずなのだ。

国王であるブラート陛下は歴戦の強者だが、戦争で犠牲が出ない筈はない。

そして真つ先に死ぬのは平民の下級兵や地方貴族が強制的に徴兵した領民である。

「しかし妙だよな。普通、戦争に向かうなら王都で大々的にパレードを行う筈だよ？」

「そうだよな、何でもフリード殿下が地方で兵を起こして攻め込んだ様だよ」

「王様は関与してないって事か？そんな事有り得るのか？」

酒場で男達が首を捻り話していると、新たな男が酒場の扉を勢い良く開き飛び込んで来た。

同じ職場で働く男達を見つけると慌てて駆け寄ってくる。

「おい、お前ら！大変だ！ブラート王様が募兵しているらしい！」

「なに」

「やっぱり、戦争は王様の計画だったのか」

「食べ物とか買い溜めしておかないと、直ぐに値上がりするぞ」

「薬もだよな。うちの娘、体が弱いのに」

そんな会話が王都の至る所で交わされていた。

ブラート王が兵を率いて王都を出立してしばらく、戦地の情報は王都までは届いて居なかったが、食料や医薬品を中心に物価は高騰し、最低限の兵しか居ない王都の治安は少しずつ悪化していた。

その状況でも自らの利益を得ようと動く者もいる。

「兎に角、食料と医薬品、馬、飼葉、酒にタバコ、あらゆる物資を買い集めろ！」

「しかし商会長、これ以上は王都の物価が……」

「馬鹿者！地方から手当たり次第に買い集めるのだ！農民から直接買い叩き、王都の物価が上がり切った後、市場に流すんだ！」

「は、はい！」

「くつくつく、このチャンスを逃す物か！地方の物価が上がる前に商材を買い集めるのだ。」

そうすれば通常の数倍の値になる！」

彼のような商人は少数派では無い。

一部の善良な商人も居たが、直ぐに淘汰される事になる。

結果、強欲な者たちによって、戦時下の物価の高騰は加速して行き、王都の民の生活は真綿で首を絞める様に苦しくなっていく。

「やだ、また小麦の値が上がっているわ」

「奥さんも買って置かないと、また直ぐに値上がりするわよ」

「塩も油も値上がりしてるって」

「街道には盗賊も増えてるそうよ。この前も戦地に送る物資が強奪されたって」

「怖いわ。戦争なんて早く終わらないかしら？」

真に戦争を望んでいる民は少ない。

しかし、それでも国民は国の英雄である《雷神》ブライト・ハルドリアを信用していた。

ハルドリア王国が敗戦するなど、微塵も考えて居なかったのだ。

何処か楽観的だった国民が異変を感じたのは、地方貴族達が一斉に王都に集まり出した時だった。

今まで自らの領地を守って居た筈の貴族達、彼らが王城に次々と入って行ったのだ。

一体何が有ったのか、と民達が噂していると、突然数年前から南大陸に留学していた筈のアデル姫が女王として戴冠したと宣言したのだ。

## 王都の人々

「アデル姫様が戴冠したってどう言う事だ？」

「ブライト王様はどうなったんだ」

「まさか戦で？」

「馬鹿な！あの《雷神》だぞ」

「だがアデル様なら今の不景気をどうにか出来るんじゃないか？」

「ああ、アデル様は戦争反対派らしいからな」

至る所で交わされる民の会話が耳に入る度に腹立たしさが込み上げてくる。

偉大なるブライト王から王位を篡奪した小娘が評価されるのが我慢ならなかった。

ブライト王の忠実な臣下として、そして正当な後継者であるフリード王太子の後ろ盾となって来た。

仕事などはエリザベートに回して置けば全て上手く行っていたのだ。

それなのに……。

王国で大臣を務めていた男は頭を抱えてアデルに命じられた書類を仕上げて行く。

こんな仕事は本来、大臣である男の仕事では無い。

しかし、現在はアデルが連れて来た若い下級貴族の文官がこの部署を仕切っていた。

「ここ、計算が間違っていますよ。最初からやり直して下さい」

「っ」

目の前の机にさつき提出した書類を突き返された。

「貴様っ　黙って従っていれば良い気になりおって！私はこの国の大臣だぞ！それも侯爵家に繋がる者だ！貴様の様な木端貴族が：

…」

「おい、コイツを摘み出せ」

「はっ」

部屋の端に控えていた騎士に両腕を掴まれて引きずられて行く。

「放せ！無礼だぞ！」

「貴方の様な老害には消えてもらおう。アデル陛下のご意志だよ、元大臣殿」

王国の古い体制を急速に改革して行くアデルだったが、その恩恵が民に与えられるにはまだまだ時間が掛かる。

戦争が半年を超える頃には物資の枯渇は深刻になって来ていた。元々計画的な侵攻では無かった為、王都の食料が不足しており、アデルの支援策も追いつかなくなって来ていた。

中には食糧の掠奪や、商人や貴族による買い占めが発生し、家族を奴隷商に売る者も現れ始めた頃、アデルが軍を率いて戦争を終わらせる為に出陣して行った。

ハルドリア王国は今までブラート王の圧倒的な戦争センスで勝利を重ねて来た。

痛み分けに終わったユーティア帝国との戦争ですら民には大した影響は無かった。

つまり、ハルドリア王国の民の殆どは戦争による苦しみを初めて

味わったのだ。

故に戦争を終わらせると宣言したアデルの気は高まっており、奇襲で戦端を開いたフリード、それを肯定したブラートへの支持は急落していた。

それから数ヶ月、ハルドリア王国に敗戦の報が齎され、ユーティア帝国軍がアデルと共に王都へと乗り込んで来た。

「俺達……これからどうなるんだ？」

「さあな、でももう戦争は終わったんだよな」

「数年前は良かったよな。いつからこの国はこんな事になったんだろっ」

「前に王都を出て行った商人が言ってたんだ、エリザベート様が国の上の方で頑張っていたから王国は豊かだった、ってよ」

「エリザベート様ってアレだろ？国を売ろうとして王子様とシルビア様に成敗された売国奴だって噂の……」

「俺も最初は噂を信じてたけどよお、その噂も王子が流したんだって話だぜ。」

良く考えりやエリザベート様が居なくなってから国がおかしくなり始めたんじゃないか？」

「そんな……いや、確かに……失業する奴も増えたし、治安も悪くなったよな」

「大体、婚約者を追い出して直ぐに別の女と婚約するなんて不誠実なのは王子の方だろ」

「じゃあ、エリザベート様は無実なのか？」

「多分……なあ、俺、戦地に行った商人から聞いたんだけどさあ」

「何だよ」

「今回の戦争、帝国側にエリザベート様が居るのを見たって……」

「エリザベート様が帝国に……」

「本当、これからどうなるんだらうな」

噂話をしていた男達は、大通りを整然と並んで行進する帝国の国旗を翻す軍隊を見た。

噂が本当なら、あのエリザベートが王国と敵対していると言う事だ。

そして自分達はエリザベートを犯罪者だと思って侮蔑していた。

その報いをつけるのかと、男達は底知れぬ恐怖を感じるのだった。

## 地下牢

舗装された街道を馬車で進む私達の前にハルドリア王国の王都の門が見えて来た。

私が乗る馬車にはオーキスト殿下とアデル、ルーカス様が同乗していた。

此処まで来るまでに通った村や町の様子を見て来たが、何処も酷い物だった。

アデルが色々と手配した様だが、それでも王都に近い街では食糧の枯渇が深刻で、少数ではあるが貧困層では餓死者まで出ている程だった。

おそらくブライトは此処まで長期戦になるとは想定していなかったのだろう。

アデルの支援が無かったらもつと酷い事になっていたに違いない。

門に辿り着くと、先触れが出ていた為か、止められる事なくスムーズに王都に入った。

普段は活気のある筈のメインストリートだが、今は殆ど人が居らず、家々の木戸の隙間から此方を窺う視線を感じた。

「……………」

アデルは王都のその様子を見て思う所が有ったのか、何かを押し込める様な表情を浮かべている。

私達が向かっているのは王都の中心にある王城だ。



アデルに捕らえられたブラートやフリード、軍の上層部などは、王城で拘束されている。

私達が向かうのも、オーキスト殿下による簡易裁判や政権の委譲などの事務手続きを済ませる目的がある。

そしてブラートやフリード、簡易裁判で責任が大きいと判断された重臣は帝国に連れ帰り処断される事になっていた。

私達が王城に入ると、王城で働く者達総出で出迎えられた。

私の姿を見て驚く者達も多かったが、それを表に出す者は少ない。

「アデル姫！」

そんな私達の前に立ち塞がる者達が数名いた。

フリードの後ろ盾をしていた貴族が3人と、柄の悪そうな騎士が10名だ。

「貴様ら！ユーティア帝国皇太子殿下であらせられるオーキスト殿下の御前で無礼だぞ！」

アデルが殺気混じりに一括すると貴族達はひっ、と喉を鳴らし、後退りする。

だが背後の騎士達を見て気を取り直したのか、アデルを睨みつけた。

「ブラート陛下を卑劣な手段で投獄するなど許される事ではないぞ！」

「正統なる後継者であるフリード殿下を差し置いて王を名乗る痴れ者め！」

「その上、卑しい帝国に降る売国奴が！」

「……………貴様ら」

私は魔力を練り始めたアデルの肩を叩き前に出た。

コイツらはアデルの足を引つ張るだけの役立たずだろう。

私が出た頃も、どうにか自分達に有利な法案を通そうとしたり、横領を隠そうとして私の仕事を増やすだけの存在だった。

そもそも、ブライトとフリードの正統性を主張する癖に幽閉された奴らを命懸けで助けようとしてもしない。

アデル達の背後から姿を表した私を見た奴らは驚き目を見開いた。

「お、お前はエリザベート！」

「反逆者が何をしに来た！」

「この裏切り者め！」

喚き散らす男達を無視した私は【縮地】を使って背後の騎士達の中に踏み込み、【強欲の魔導書】からフリーユージェルを取り出し振るう。

10人居た騎士達が瞬時に肉塊に変わり、3人の貴族達の全身が血で真っ赤に染まる。

「……え？」「……」

「現在、ハルドリア王国はユーティア帝国の支配下に有るわ。皇太子殿下への反逆はその場で処刑される理由としては十分よ」

「ま、まで、びゃ」

手前に居た貴族の首を斬り捨てる。

「ひっ！あ、謝る！謝るからばっ」

次の貴族を上半身と下半身に分ける。

「や、止める、エリザベート!」

「エリザベート様」よ。私は公爵令嬢、貴方は子爵。身の程を弁えなさい」

最後の1人は細切れにしてフリユージェルをしまつ。

「片付けておきなさい」

隅で青い顔をしている衛兵や従僕達に命じた私は、アデルを促してオーキスト殿下を客間に案内した。

この日、私達は一旦部屋で休む事になった。

明日からはオーキスト殿下がアデルと共に忙しくする予定で、私とルーカス様もそれを手伝う事になる。

その夜、私はミレイだけを連れて地下牢に向かっていた。

数年前、私が入れられていた地下牢だ。

何年も過ごした城だ。

迷う事など無い。

地下牢に着いた私は、牢番を下がらせてミレイに魔法で灯りを点して貰う。

そして牢の中の2人に話しかける。

「久しぶりね。フリード、シルビア」

## 鉄格子を挟んで

「貴様！エリザベート！」

フリードが鉄格子を掴みながら叫んだ。

「あら殿下、そんなに唾を飛ばして叫んでははしたないですよ」

城に入った時に突っかかって来た愚か者共を斬った時にも思ったが、どうもハルドリア王国に帰って来てからと言う物、昔の口調に戻っている気がする。

商人として帝国で過ごす内に、大分砕けた喋り方になっていた筈だが、今は自然と貴族らしい言葉が出て来た。

まあ、嫌味を言うには都合が良いので構わないか。

「黙れ！貴様が……貴様が悪いのだろう！いつもいつも俺を馬鹿にしやがって！俺は王太子だぞ！この国で一番偉いのだぞ！」

「一番偉いのは国王陛下でしょう？ああ、今は皇帝陛下だったわね。その前はアデルよ。貴方が一番偉かった事実など無いわ」

「五月蠅い！さっさと此処から出せ！この俺にこんな事をして、タダで済むと思っているのか！」

「タダで済む筈はないでしょう？」

「そうだ！分かったらさっさと……」

「貴方には戦争責任を取って処刑されて貰わないといけないんだから」

「……だ……せ？戦争責任？」

私は大袈裟に驚いてみせる。

「あらあら！まさか理解していなかったのですか？

貴方は条約を破ってユーティア帝国に奇襲をしたのですよ。

そして軍人でもない無辜の民を虐殺した。

そんな人間を帝国が許す筈がないでしょう？

裁判はただただハルドリア王家は断絶するわ」

「だ、断絶……。ち、父上は？」

「一緒に処刑されるに決まっているでしょう。」

巻き込まれて処刑されるアデルが不憫でならないわ」

アデルはむしろ戦争を止めた側の人間だ。

しかし、その為に彼女は女王として即位する必要があった。

故に王族としての責任を取らなければならない。

コレを止めるのは難しい。

アデルを処刑する事は帝国に取ってメリットが有り、生かしているとデメリットが大きい。

私が今回の戦争と、戦後処理の功績を以て願えばもしかすると助命が叶うかも知れない。

だがアデルはそれを望んでいない。

アデルが生きている事で、元ハルドリア王国の民が帝国に反抗する可能性がある。

そうなれば今度は内乱だ。

アデルはそれを防ぐ為に自らの死を望んだ。

私には無い覚悟……。王族としての覚悟だ。

そして此処にもその覚悟が無い男が1人。

「ま、待てよ……。嘘だろ？この俺が……。王太子であるこの俺が処刑？」

「そうよ元王太子殿下。アデルは毒杯による安楽死になるでしょうけど、貴方とブラートは絞首刑か石打ち刑でしょうね」

「な……ん？」

フリードの言葉にならない言葉を無視して続ける。

「ギロチン刑は派手だけど痛みは一瞬だから、こう言う場合は先ず使わないでしょうね。」

首を吊られて晒されるか、死ぬまで石で打たれるか、よ」

フリードはようやく自分の立場と今後の展開を理解したのか、力無く崩れ落ちて涙を流し始めた。

「……………しは？」

「ん？」

「わ、わた……………私は……………ど、どうなるの？」

隣の牢で顔面蒼白になったシルビアが問い掛けて来た。

## シルビアの今後

シルビアは怯えた目で自身の扱いを私に尋ねる。

なので私も目の前で崩れ落ちて泣いているフリードから視線をずらしてシルビアを見る。

いつも男を侍らせていた美人だった筈だが、地下牢での生活で随分とやつれている。

どちらかと言うと精神的な負荷が大きいのだろう。

目の下にも大きな隈が出来ていた。

「貴女は関係無いわよ」

「え？」

「貴女はフリードの婚約者だけど、王太子妃では無いわ。王家の責任とは無関係よ」

「……本当に？」

「本当よ」

シルビアは気が抜けた様な顔で聞いてくる。

「貴女はフリードの婚約者だから拘束されているだけよ。簡易裁判で王国の侵攻に関与していないと認められれば解放されるわ」

私がそう説明してあげると、シルビアは少し精神的に余裕が出来たのか、蒼白だった顔にも赤みが戻り始めている。

「……ただし、ロックイート男爵家はもう存在しないわよ」

「え？」

「ロックワイト男爵はフリードと共に従軍していたわ。前線には出ずに王国内で物資の管理をしていたみただけど、私達が王都に向かっている時に捕縛しようとするやと逃走しようとしたから私が殺したわ」

「え？え？お、お父様が？」

「ええ、これも数日後、簡易裁判で正式に決まる予定だけど、ロックワイト男爵家は取り潰し、当主には戦争責任有りとしてロックワイト男爵家には賠償金の支払いが命じられる筈よ。」

「ロックワイト男爵夫人は故人だし、嫡男と次男は戦死、生き残りは貴女だけだから、賠償金の支払いは貴女に行く事になるわね」

「ロックワイト男爵家は取り潰しになっているので、その資産は王国に返還される。」

「私財はシルビアに相続されるけれど、ロックワイト男爵はフリードとシルビアが婚約した事で将来の繁栄を確信したのか、随分と散財した様で大した物は残っていない筈だ。」

「シルビアもそれを分かっているのだろう。」

「再び顔は青白く変わった。」

「そ、そんな……」

「それと、アデルが調べた情報によると貴女、フリードにねだって随分と貢がせた様ね」

「……………」

「フリードは王子の年間予算とは別に国庫にも手をつけていた様よ。その返金も求められるからそのつもりでね」

「そんな！アレはフリード様が勝手に……」

「でも、そのお金が国庫から出ている事を貴女は知っていたでしょう？アデルはちゃんと証拠も残しているわよ」

「そ、そんなお金……払えない……」

「そう、なら貴女は犯罪奴隷になるでしょうね」



「ど、奴隷!!」  
「『犯罪』奴隷よ」

私が言い直すとシルビアは動揺しながら足を震わせる。

「ど、どう違うの……」

「通常の奴隷はある程度の人権が保障されているわ。一応ね。犯罪奴隷は簡単に言ったら死んでも構わない奴隷って事よ。

多分、鉱山にでも送られるのでしょね。

勿論、罪の重さによって与えられる仕事の危険度は変わるわ」

「そ、そんな……う、嘘よ!そんな……あり得ない……」

「安心しなさい。貴女の罪の重さなら流石に毒ガスや落石の危険がある様な場所には送らないわ」

私は、もはや言葉も出ない様子のシルビアに笑顔を向ける。

「貴女は見目も良いから、鉱山で働いている重犯罪奴隷達の性処理係として使われると思うわ」

「犯罪奴隷の……性処理……係?……私が?」

「ええ、犯罪奴隷とは言え、その辺りを押さえ付けていると鉱山の治安が悪化するから、女性の若い犯罪奴隷は大体そんな用途に使われるわよ。」

まあ、20年位すれば流石に食事係や掃除係に回されるだろうから、それまで頑張つてね」

「い、い、いやああ!!!!嫌!嫌!嫌よ!た、助けて!助けて下さい!エリザベート様!お願いします!な、何でもします!何でもしますから!それだけは!」

「嫌なら賠償金を払いなさい」

「無理よ!無理無理無理!お願いします!助けて、助けて下さい!」

ついに地面に額を着けて謝り出したが、私の心は動かなかった。  
絶望したフリードと必死で助けを乞うシルビアを残して、私は地  
下牢を後にするのだった。

## 嵐の前夜

「では本日はこれで閉廷とする」

謁見の間に机を運び込み作られた簡易法廷で、裁判長役をしていたオーキスト殿下が告げる。

この簡易裁判は裁判と銘打ってはいるが、実際には事前会議で大体の処分内容は決まっている。

私も帝国に雇われた臨時文官として参加している。

義勇軍は終戦と共に解散となつているが、オーキスト殿下にハルドリア王国の内政に明るいと言う理由で雇われたのだ。

義勇軍を構成していた冒険者や傭兵達の一部はそのまま帝国に護衛として雇われてこのハルドリアまで同行している者もいた。

本日の裁判では戦争に参加していた貴族家に、その責任の度合いによつて賠償金を請求したのが殆どだ。

更には殆どの貴族家の当主が強制的に隠居させられ、次世代へと代替わりする事になる。

中にはフリードに従い、ユーティア帝国の都市での虐殺に関わつた者もあり、そんな者達は連座で家族纏めて処刑が決まつている。

そしてシルビアの裁判も今日終わった。

やはり、事前の予定通り多額の賠償金を請求される事になったが、シルビアの私財は殆どなく、犯罪奴隷となる事が決まつた。

明日には鉾山に向けて送られるそうだ。

簡易法廷でも泣き叫び許しを願っていたが、ゴメンで済んだら騎士団は要らない、と言う奴だ。

私に向かつて必死に許して、助けてと言って来たが、この裁判は別に私が報復としてやっている訳ではなく、犯した罪を裁かれているだけなのでどうする事も出来ない。

私に出来たのは帝国で1番規模が大きく、犯罪奴隷の数も多い鉱山に行く様に会議を誘導する事くらいだった。

ブライトとフリードはこの戦争の主犯なので、アデルを含めてユートピア帝国の帝都で皇帝陛下から沙汰をつける。

帝国から連れて来た代官に政務を引き継いだら、2人と將軍級の戦犯を帝国に移送する仕事が続いている。

フリードは兎も角、ブライトの移送にはかなりの戦力が必要となる。

アデルに捕らえられたブライトは随分と大人しくしているそうだが、本気になれば逃げ出す事も不可能では無い。

今も、帝国軍の精鋭やユウやエルザなどの腕利きが交代で見張りに付いている。

「ふう」

「お疲れだな」

王城のサロンで今日の裁判の結果の一覧を見ながらため息を吐き出していると、ルーカス様とオーキスト殿下が入ってきた。

「オーキスト殿下とルーカス様もお疲れ様です」

「やはり戦後処理は大変だ」

「そうですね、殿下。ですがエリー殿下のおかげで政務の引き継ぎは  
かなり進んでいますよ」

「そうだな。アデル殿も協力的だからな」

それから私達は幾つかの相談事を話し合った。

簡易裁判が終わった今、ようやく戦争のゴタゴタが終わろうとしていた。

この時、私達はそう思っていたのだ。

まさかこの翌日、私の運命を大きく変える事件が起こるとは、夢にも思わなかったのだ。

## 幽閉された雷神

その日、私は帝国に雇われてハルドリア王城の一室で見張りをしていた。

この部屋は特殊な構造らしく、中では魔法が極端に使いづらくなっている。

更には腕と両足、首に魔力を封じる枷をつけられた男がこの部屋に幽閉されている。

その上、Aランク冒険者である私、エリーの配下のバル、帝国軍の精鋭騎士5人の計7人が室内で監視している。

それでも目の前の男を相手にするとどうなるかは分からない。

男の名はブラート・ハルドリア。

この城の元主人であり、大陸でもトップクラスの实力者だ。

片腕を失った今でも本気で戦えば私達でも危ない。

「ちつ、とつとと残りの手足を切り落とせば良いじゃねえか。  
なあエルザの姉ちゃんよお」

バルがめんどくさそうにそう言った。

「そう言う訳にはいかないだろう。」

抵抗もしていない王族相手に下手な手傷を与えるのは帝國的に不味いのさ。

王族を裁くには皇帝陛下の沙汰を受けなければならない。

国際法やら条約やら、お貴族様には色々有るらしいからな」

「お嬢を裏切った奴なんてどうなっても良いだろ？逃げ出そうとして抵抗したって事にすれば良い」

「無茶を言うなよ。私は雇われの冒険者だぞ。」

君だってエリーには手をだすなど言われているんだろ？」

私が宥めるとバルは不機嫌そうにブラートを睨み付けた。

「お前ら、そう言う話は俺に聞こえない様にしろよ」

「ちっ！話しかけんなよクソ野郎。お嬢に止められて無かったらテメエを殴り殺してやるっつてのによお」

ソファに腰掛けたブラートが苦笑しながら言うと、バルの機嫌は更に悪くなった。

ブラートは捕らえられてからは大人しくこの部屋に幽閉されている。

その為、私達が監視しているのだが、噂の《雷神》にしては随分と大人しい。

「失礼するよ」

扉の外に居る兵から取り次ぎがあり、アデルが面会に訪れた。

アデルは監視付きではある物の、城内では自由に行動出来ている。腕には魔封じの枷が嵌められているが、そこまで強力な物ではなく、神器を使えなくする程度の物だ。

「アデルか」

「ご気分はどうですか、父上」

「悪くは無いな……………アデル、済まなかった」

「……………」

「俺は……………間違っていた。あの時、フリードの成長に期待して自由になどさせるべきではなかった。」

あの時、さっさとフリードを廃嫡して辺境に押し込めておけば良

かった。

あの時、フリードを捕らえて帝国に詫びるべきだった。

あの時……エリザベートに全てを押し付けるべきではなかった。

俺の……俺の不徳でお前まで巻き添えにしてしまった」

「今更ですね。父上」

「ああ、今更だな」

その後、しばらくアデルはブラートと何かを話していた。

チラリと鉄格子のハマった窓を見ると、もう昼を過ぎている。

たしか今日は裁判で有罪になった罪人が帝国に送られる日だったか。

数日後には皇太子殿下と共に私達もブラートやフリードを帝国に移送する仕事が続いている。

この長かった戦争もようやく終わりが見えて来たな。

「あああら、皆さんお揃いで」

「……」

「……」

不意に聞こえた聞き慣れない声に、反射的に剣を抜き構えた。

周りも同じ様な反応だ。

見れば部屋の隅、ちょうど影になった辺りにいつの間にか女が立っていた。

薄布を何枚も重ねた踊り子か娼婦の様な扇情的な服を身に付け、顔を黒いベールで隠した女だった。



## 謎の女

「何者だ！」

エルザの誰何の声上がるが、女は答えずクスクスと笑う。俺はエルザに目配せすると、2人で女の正面に立ち構えた。

「ふふふ、コレはなかなか面白い素材ね」

「「っ  
「」

俺は目を離したりしていない。

エルザだっけと同じだろう。

それなのにその声は背後から聞こえた。

目の前に居た女の姿は消えている。

慌てて振り返ると、女はブライトをベールで隠された顔で覗き込んでいる。

「な、何だお前は！」

「貴女は……ふうん、悪くは無いかど使いづらそうだね。要らないわね」

「アデル！」

女の手刀がアデルの首に振り下ろされる。

しかし、間一髪のタイミングでブライトがアデルの身体を蹴り飛ばした。

女の手刀はアデルに当たる事は無かったが、代わりにブライトの足を斬り落とした。

羽虫でも払うかの様に何気なく振るった様に見えた手刀で、魔力を封じられているとは言え、鍛え上げられたブラートの丸太の様な足を切断した。

明らかに普通の女ではない。

そもそも、どうやってこの部屋に入ったのか。

「構わねえ！殺せ！」

俺が叫び拳を振り上げながら飛びかかるのと同時に、エルザや騎士達も剣を向ける。

「ふう、面倒ね」

女が腕を振るう。

騎士の剣が砕け、頭が弾け飛ぶ。

血飛沫が舞う中、女の姿が霞む。

俺は反射的に腕を上げて魔力を全力で纏う。

同時に衝撃が走り、壁に叩き付けられ、魔力強化された素材で出ている筈の壁に大きな亀裂がはいった。

「ぐっ……」

不味い！

左腕は完全に折れている。

右腕と左足にも罅が入っているし、肋も何本かやられているな。

エルザは……。

俺が視線を巡らせると、頭から血を流して倒れているエルザの姿があった。

生死は分からない。

「あらあら、まだ生きているなんて、随分と強いわね」

女は俺達を見てそんな事を言いながら、ブラートの髪を掴み上げる。

「ぐっ、何だ貴様は！何が目的だ！」

「少し静かにして頂戴」

「ぐあー！！」

女がブラートを蹴り付けると、意識を失ったブラートは静かになる。

「ち……くしょう……」

瓦礫の中から立ち上がると、女は此方を見る事もなく、ブラートを片手で引きずって部屋の暗がりの闇に溶ける様に姿を消した。

「だ、誰か！急いで救護兵を呼べ！それから王城の周囲を搜索しろ！脱走だ！」

いち早く我に返ったアデルが廊下の外に叫んだ。

慌ただしく動き始める兵や従僕に指示を出すアデル。

「オーキスト殿下は何処だ」

「現在はサロンでエリー殿とルーカス殿と話し合っている頃かと……」

「直ぐに知らせろ！触媒や詠唱も無い転移だ。そう遠くには行つて

いない！王都の出入りを封鎖して……」

指示を出すアデルの横で、俺や目を覚ましたエルザは治療を受けていた。

騎士達は3人が死んで、2人は一命を取り留めたが再起は不能だ。

「ぐっ、あいつ……何者なんだ……」

「分からない。ブラートを連れ去るのが目的だったのかしら……」

その時、俺たちの体を押さえ付ける様な強大な魔力を感じた。

抵抗力の低い侍女や従僕の中には泡を吹いて気を失う者もいる。

「ぐあ、こ、これは……」

「……お嬢の魔力だ」

「エリー……姉様に、何か……」

お嬢の魔力は凍える様な冷気となり、水桶の中の水を凍りつかせた。

それから数分、お嬢の魔力が消えるまで俺達は動く事すら出来なかった。

## イーグレット

サロンでオーキスト殿下やルーカス様とブライトやフリード達の移送計画を話し合っていると、新たな人物がサロンに足を踏み入れて来た。

「やあ、エリー」

「イーグレット？何故此処に？」

イーグレットはレクセリン砦で契約が切れた後も、帝国軍付きの商人として同行を希望し、ハルドリア王国までついて来ていた。

将来的にハルドリア王国領まで手を伸ばしたいらしい。

オーキスト殿下の許可を得たイーグレットは、軍人を相手に酒や嗜好品などを売りながらハルドリア王国に来て、この地の商会や今後もある程度の地位を保障された下位貴族を中心に顔繋ぎをしていると聞いていた。

だがこの場には皇太子殿下であるオーキスト殿下や率いている帝国軍の中心的な人物であるルーカス様、あと一応、ハルドリア王国に詳しい臨時文官である私、と重要人物が揃っている。

イーグレットは、そんな所に何の前触れもなく訪れることの出来る地位ではない。

サロンの入り口には見張りの兵士もいた筈だが、入室の伺いも無かった。

不審な様子に私とルーカス様は立ち上がりオーキスト殿下を庇う様にイーグレットと向き合った。

「何の用かしら？事前に来訪の知らせは無かった筈よ」

「くっくっく、突然済まないなエリー。君に会いに来たんだよ」

「……………どうしたのイーグレット？貴方おかしいわよ。」

オーキスト殿下の御前で不敬でしょう？」

訝しげな視線を向けながらイーグレットに言うと、今までイーグレットの影に隠れていた小柄な人影が前に出て来た。

イーグレットと手を繋いでいるのは金色の髪にリボンを結んだ赤と青の瞳を持つ少女。

「ママ〜！」

「アリス　なんでイーグレットと？」

訳がわからない。

城の部屋で待っている筈のアリスが何故この場に？

今日はルノアとミーシャに用事を頼んだし、ミレイも私の補佐をする仕事があったのでアリスは1人だった。

だが信頼できる帝国の女騎士と侍女を付けていた筈だ。

彼女らが私の許可なくアリスを出歩かせるとは思えないし、勝手に抜け出す様な子では無い。

「エリー、君には感謝しているんだよ。」

失敗作だったコレに君が魔力を叩き込んでくれたおかげで漸く使い物になる個体が出来たのだからな。

やはり君には『イブ』の素質があったんだね」

「何を言っているの？……………イーグレット、アリスをこちらに返して」

「『返して』？コレは元々俺の所有物だよ。」

やっとの事で完成した人造精霊だ。

「手放す筈がないだろ？」

「人造……精霊？」

何を言っているんだ？

それではまるでイーグレットがアリスを創ったとも言っている様ではないか。

嫌な汗が背中を冷やす。

瞬間、私は【強欲の魔導書】からフリーユージェルを取り出して抜き放った。

「最後よ、イーグレット。アリスを離して」

「くっくっく、断る」

イーグレットの背後の空間に不自然な影が伸びると、そこから滲み出る様に娼婦か踊り子の様な薄着に黒いベールで顔を隠した女が姿を見せる。

更にその後が続く様にグレンとオウル、前にレクセリン砦で見たモンスターテイマーの女、百足と名乗る男が次々と現れる。

その上彼らの足下には気を失ったブライトとフリードが転がされていた。

「どつ言つ事？説明しなさいイーグレット！」

## 目的は

「説明ねえ？見てわからないかい？

君達は俺の手の上で随分と愉快に踊ってくれたからな。お別れの前にこうして挨拶に来たのさ」

笑いを堪えながら言うイーグレットにやれやれと言わんばかりのグレンが肩をすくませて前に出た。

そして兜を取って素顔を見せた。

「悪いな、エリー嬢。俺達には俺達の目的がある。

その為にアリスは貰って行く」

見覚えが有る。

サージヤス王国の一件でやけに練度の高い傭兵達を率いていた男だ。

「そう、最近の一件は貴方達が暗躍していたと言う事ね。

アリスは渡さないわ。死にたく無ければ直ぐにこちらに渡しなさい」

「マ、ママ？」

アリスは訳が分からないと言う表情で私とイーグレットの顔を見比べ、私の方に来ようとするが、イーグレットに腕を掴まれているので逃げ出せないでいる。

「あら、暴れたらダメよ」



ベールの女がアリスの顔に手をやると、アリスは全身の力が抜けた様に動かなくなった。

魔法で眠らせたのか。

ふざけた格好をしているが、無詠唱で事前の気配もなく魔法を使うとは、先程の転移と言い、相当な実力者である事は間違いない。

「アリスを連れて行ってどうする気？」

あとついでにそこに転がっている奴らも」

「目的はアリスだけだよ。」

これは人造精霊、女神の雛形だ。

俺はコレを使って天界門を開く。

この俺が！新たな女神を作り上げるのさ！」

イーグレットは普段の冷静さが嘘の様に興奮して捲し立てた。

人造精霊？

天界門？

何を言っているのか分からないが碌でもない事だとはわかる。

イーグレットは足下に転がるフリードの頭を踏みつける。

「コイツらはまあ、オマケだな。せつかくあの《雷神》とその息子が居たんだからちょっとイジってみようかなってさ」

「その2人はどうでも良いけどアリスはダメよ」

「それは無理な願いだな」

イーグレットは肩をすくませる。

「3ヶ月だ」

「……………」

「3ヶ月後、アリスを触媒にして天界門を開く。」

アリスの命を助けたいなら、ナイル王国に來い」

「随分と親切なのね。わざわざ居場所まで教えてくれるなんて」

「此方にも事情が有ってね」

「3ヶ月……ね。でもそれは今すぐでも良いのでしょうか？」

私は鋭く踏み込むとイーグレットの首を狙ってフリーユージェルを振るう。

しかし、完璧に捉えた筈の刃がイーグレットの首を素通りしてしまふ。

「幻影」

イーグレットの姿が霞んで消えると、別の場所から再び姿を見せる。

「じゃあ、そろそろ失礼するよ。また3ヶ月後に会おう」

「待ちなさい！」

直ぐ様斬りかかるが、ベールの女の足下から這い上がった影がイーグレット達を包み込み、その姿は消え失せたのだった。

ギリッ！

悔しさで私の奥歯が音を鳴らす。

「イーグレットおおお！！！！」

私の怒りに呼応する様に魔力が冷却となりハルドリアの王城を包み込んだのだった。

## 黒い光

アリスが、またアリスが拐われてしまった。  
今度は私の目の前で……。

冷静に対処しようとする自分と、怒りに塗りつぶされそうな自分。  
その2つがせめぎ合い、コントロールを失った魔力が暴しようとする。

「うう、く……」

「しっかりするんだ！」

ルーカス様が私の肩を掴む。

「だ、大丈夫よ」

深呼吸を数回繰り返し魔力を抑え込んだ。

その間にオーキスト殿下は部下を集めて周囲の搜索を命じていた。  
私もセイントバードを召喚して王都中に放った。

そこにアデル達も合流して。

エルザとバルが居たのにブライトの身柄を奪われるとは思わなかった。

エルザ達は責任を感じていた様だが、私も出し抜かれたのだから彼女達を責める訳にはいかない。

「ハルドリア王国からナイル王国まで、魔法陣や儀式も無しに一気に転移するなんて人間の魔力では不可能だわ。奴らはまだ王都にい

る可能性が高い」

「ああ、最大限の警戒をし」

草の根を分ける様な捜索を行ったのだが、3日たってもアリスは見つからなかった。

アリスが連れ去られたサロンでソファに腰掛けた私は、セイントバードの捜索範囲をナイル王国の方角に向けて徐々に伸ばす様を示をだしていた。

「エリー姉様、此処に居ましたか」

「あまり根を詰めるなよ。いざと言うときに動けなくなっではない」

アデルとルーカス様が声を掛けてくれる。

「ええ、分かっているわ。でも一刻も早くアリスを……」

そう言っってナイル王国の方角に目を向ける。

「なっ」

それは黒い光だった。

天に向かって空を切り裂く様に伸びる黒い光。

遙か空の上まで伸びた黒い光は、上空で真横に伸びており、まるで空間に巨大な亀裂が走った様な光景だった。

アデルやルーカス様もその非現実的な光景に目を丸くしていた。

「……………何が起こっているの？」

「あゝ、ティーダさん。あれ、何だと思っの〜?」

砂で作り上げた城のバルコニーで無気力に長椅子に寝そべったフラウが上空を見上げながら言った。

「わかんないツスよ。でも……」

隣の椅子に腰掛けたティーダもテーブルに頬杖を突きながら頭上の空間の亀裂から、空に立ち登る黒い光の柱、そしてその発生源であるナイル王国の王都へと順番に視線を巡らせる。

「悪魔共が無関係とは思えないツスよね。つまり邪悪な物に違いないツス」

視線の先のナイル王国王都は、全体が不気味な黒い光で包まれていた。

## 砂の城にて

ハルドリア王国でアリスが拐われる一月程前、ナイル王国に悪魔が出入りしている事に気付いたティータ達は、悪魔達の狙いを探る為、ナイル王国に近い場所に野営しながら様子を伺っていた。

「やっぱりおかしいツスね。悪魔の姿は見えませんが、人間の商人や冒険者の出入りが少な過ぎるツス」

ナイル王国からユーティア帝国やハルドリア王国に向かうには危険な荒野を抜ける必要が有るが、ナイル王国の街や近くの小国へは比較的安全なルートが有るので、それなりに人の動きがある筈なのだ。

「それって〜やっぱり〜……………まあ、良いや」

「いや、良くないツスよ！中で悪魔が何かやってるに違いないツス」

その後、ティータは冒険者ギルドの職員ジョンと共にフラウを説得し、ナイル王国の王都から少し離れた谷に隠す様に砂の城を作って貰い、腰を据えた監視を始めると共に、大神殿に聖騎士団の派遣を依頼していた。

その後も悪魔の動きを監視していたのだが、ある日、フラウと食事を摂っていると、地響きと共に強大な魔力の放出を感じた。

「な、なんツスカ」

「凄い魔力なの〜」

そこにジョンが飛び込んで来る。

「た、大変です！フラウ様！ティーダさん！」

「ジョンさん！」

「と、とにかく外へ！」

ジョンに促されたティーダは、フラウを引っ張ってバルコニーに出た。

そこで見た物は、黒い光に包まれるナイル王国の王都と、そこから伸びる黒い光の柱、空を引き裂く様な罅だった。

「あゝ取り敢えず！」

フラウは砂で長椅子や椅子、テーブルを作り出し、長椅子に寝そべった。

「紅茶ゝ淹れて！」

「フ、フラウ様！今はそれどころじゃ……！」

「私、砂糖は3つお願いするッス」

椅子に腰掛けたティーダも追隨する。

「ティーダさんまで！」

「まあ、落ち着いて下さいッスよ、ジョンさん。

これは最早慌てた所でどうにかなる様な物ではないッス」

一周回って落ち着いたティーダの様子に、ジョンも諦めた様に紅茶を用意するのだった。

## 1500年前の伝記

「何なの、アレは？」

空の亀裂を唾然と見上げる私達だったが、何処かこの光景に覚えが有る気がする。

何処かで見た……いや、読んだ物か？

「【傲慢の魔導書】」

もし何かの書物で読んだ物なら【傲慢の魔導書】に記録されている筈だ。

「エリー嬢？」

「オーキスト殿下、少々調べ物を致します」

「そうか……分かった、何か分かれば教えてくれ」

そう言っただけで静かにサロンを出て行くオーキスト殿下とルーカス様話したい事も有るだろうが、今は時間をくれるつもりの様だ。

「古代王朝時代の史記でもないか……」

【傲慢の魔導書】を閉じ、内容を別の書物に変えて再び開く。

ハルドリア王国の禁書庫の一冊だと思うのだが、詳しい内容は覚えていない。



【傲慢の魔導書】の発動条件は、【傲慢の魔導書】に触れながら記録したい書物の内容を視界に入れる事であり、私自身が全ての内容を覚えている訳ではない。

「ふう」

新たに一冊、古王国の歴史家の手記を読み終えた私は、深く息を吐き出した。

「エリー様、少しお休み下さい」

「ミレイ？」

いつの間にかサロンにやって来ていたミレイが私の前に珈琲を差し出した。

外に目を遣ると既に日は沈み始めていた。

もうこんな時間か。

随分と読み耽ってしまった様だ。

「何か分かりましたか？」

「いいえ、確かに読んだ事がある筈んですけど……」

「アリスの事は心配ですが、エリー様が無理をして体調崩してしまつてはいけませんよ」

「……そうね」

ミレイが用意してくれた珈琲と軽食を摂り、休息を挟んだ私は、再び古文書を漁り始めた。

そして、数冊目。

「あつた！」

それは1500年前に書かれた伝記の片隅に少しだけ触れられた物だった。

「コレは……………ミレイ!」

「は、はい!」

私が呼ぶと、隣の使用人用の控室に待機していたミレイがサロンの飛び込んで来る。

「ユウを呼んで頂戴」

「畏まりました」

## 精霊城

サロンから会議室に場所を移した私は、呼び出したユウと対面していた。

「ユウ、確か貴女は勇者ヒロシ・サイトーの事に詳しくあったわよね？」

「詳しいと言う程では有りませんが、大陸の人達よりは知っていると思いますよ？」

「じゃあ、魔神戦に関しては知っているのかしら？」

私が問うと、ユウは少し驚いた様な顔をしてから頷いた。

「ええ、知っています。」

エリーさんこそ、良く知っていましたね。

日ノ本列島王国の人でも簡単なさわりくらいしか知らない話ですよ」

「私もそう言う戦が有ったと言う事しか知らないわ。」

魔神戦には勇者ヒロシ・サイトーが関わっていて、魔神が最後にはこの世界とは別の場所にある精霊城に封印されたって事だけ」

「わたしが知っているのも大体同じですね。」

でも、何で今その話を？」

私が窓から見える空の亀裂に目を向けると、ユウは察してくれた。

「まさか あの亀裂が……」

「確信はないけど……当時の資料によると、あの亀裂の先に精霊城がある可能性が高いわ」

「では、このままでは魔神が復活してしまうのですか？」

「ええ、そして古王国の文献によると、精霊城の奥には天界に続く扉が有るらしいわ」

「天界に続く扉……イーグレットが言っていたと言う天界門の事でしょうか？」

「予想だけだね。それで、ユウを呼んだのは当時の伝承を何か知らないかと思ったのよ」

「そうですね。確か……当時、魔族王を倒した勇者ヒロシ・サイトーは、故郷を失った人々や迫害された魔族を率いて日ノ本列島王国を作った頃でした。」

その頃、魔王の残党が古の時代に封印された魔神を復活させたそうです。

勇者ヒロシ・サイトーは、当時妊娠していた妻を残し、魔神討伐の為に立ち上がったのです。

その時、共に戦った仲間が4人居ました。

精霊達の王、ユグドラシル。

魔王の娘、エルシア。

イブリス教の聖女、スーリス。

そして、若き悪魔、アルトロス」

「悪魔ですって」

「はい、魔神の力は強大で、魔界ですらその脅威を無視できなかつたそうです。」

そこで、若い悪魔の戦士が人間界に現れて勇者ヒロシ・サイトーと共に戦ったと伝わっています」

悪魔……アルトロス。

「アルトロス・イザリース」

私の脳裏にはあの紳士然とした悪魔の姿が浮かんでいた。

## アルトロス・イザリース

あの時の悪魔が1500年前の英雄。

「……………」

「どうしたのですか？」

考え込んだ私を不思議に思ったのか、ユウが小首を傾げたので、以前、ティーダ達と共に戦った悪魔の話伝える。

「伯爵二位、アルトロス・イザリースですか。」

確かにその特徴は言い伝えにある5人の英雄の1人と一致しますね」

「まあ、今はあの悪魔の話は置いておきましょう。」

それで、ユウ。イーグレットは3ヶ月後に天界門を開くと言ったわ。それに関しては心当たりはあるかしら？」

「そうですね……古い文献ですから定かでは有りませんが、精霊城はかつて精霊王が住んでいた居城らしいです。それを使って魔神を封印したのですが、本来精霊王は1年に1度、人間界に顕現してその力を以て自然界の均衡を保っていたと言われています。」

その為、精霊城の存在する領域は1年に1度、開こうとするのではないのでしょうか」

「それが3ヶ月後だと？」

「おそらく」

3ヶ月後、精霊城への道が開き魔神が解放される。

勇者の力を以てさえ、封印するのがやっとだった魔神だ。

紛れもなく大陸の危機だ。

「ナイル王国に向かうわ。」

魔神の封印解放を阻止してアリスを取り戻す」

「わたしも行きましょう」

ユウの言葉に頷き返した私は、ハルドリアを離れる為、今の雇い主であるオーキスト殿下へと面会を求めたのだった。

闇に包まれたナイル王国の王城、至る所に悪魔が闊歩するこの場は、まるで魔界の様だ。

そんな場所を堂々と歩くのは魔界で名を馳せる大悪魔、アルトロ・ス・イザリースだ。

サロンからバルコニーに出たアルトロスは、ナイル王国の王都を見下ろした。

ナイル王国の民はその殆どが悪魔召喚の生贄となり、魂まで捕食されて消滅している。

この国の王子が行った事だが、これだけの所業を目にしてもアルトロスにはどうでも良い事だった。

「あら、此処に居たのねアルトロス卿」

「……………貴様が、ラズリス」

いつの間にかアルトロスの側に立っていた娼婦や踊り子の様な扇

情的な衣服に黒いベールで顔を隠した女が立っていた。

「烏と呼んで欲しいわね」

「くだらぬ」

拗ねた様な声を出す烏を無視してアルトروسは王都から伸びる黒い光の先、空の上の亀裂を見つめる。

「もうすぐだ……もうすぐ会える、スーリス」

## ティータとの再会

案内の騎士に連れられ、城の廊下を進んだ私は、応接室の扉を開き無言で頭を下げる騎士の横を抜け、中で待っていた友人の姿を見て、僅かに笑みを浮かべた。

「久しぶりね、ティータ」

準備を終え、仲間と共にナイル王国へやって来た私達は、王都近くの渓谷に怪しい城を見つけ、イーグレット達と何か関係があると思い、様子を窺っていたのだが、砂で出来ているその城の中から現れた男が冒険者ギルドの制服を着ていた為、慎重に接触してみると、何と彼らはナイル王国の異常を発見し、監視していたのだと言う。

更に、この砂の城はSランク冒険者《王者》フラウの神器によって作られた物で、警備をしている騎士達もフラウの能力で作られた物だそうだ。

そして、ティータも彼らと共にいると聞いた私達は、情報の共有の為に会談を開く事を要請したのだった。

「久しぶりツスね、エリーさん。えつと……そちらは？」

ティータは私の隣に目をやって尋ねた。



エルザやユウ、ミレイの事は知っているだろうから、私はティータと面識の無い者を紹介する為に口を開いた。

「こちらはオーキスト・ユーティア殿下、ユーティア帝国の皇太子殿下よ。隣はアデル・ハルドリア、ハルドリア王国の女王」

「ぶうふう！」

ティータが驚きで変な音を出した。

そう、今回の戦いにオーキスト殿下やアデルも共に来ていたのだ。他にも私と親交のある冒険者やユーティア帝国やハルドリア王国の精鋭も連れて来ている。

ユウの従魔では数人が限界だが、アデルの魔法を使えば数十人単位の高速移動が可能だったのだ。

一応、私は止めた。

特にオーキスト殿下が前線に出るのは止めたのだが、魔神が復活すれば生き残っても意味が無いと言われ、共に連れてくる事になった。

アデルへの刑の執行も、オーキスト殿下の権限で延期されている。大陸の危機である今、アデルの力を使わない手は無いと言っ事らしい。

連れて来ていた戦力はルーカス様が統率し、城の一室で休ませて貰っている。

「な、何で皇太子殿下や女王陛下を連れてくるんツスカ」

アデルをハルドリアの女王と紹介しても、すんなりと受け入れた事から、一応、現在の大陸の情勢は知っているようだ。

「色々あったのよ。貴女こそ、何でSランク冒険者と行動しているの？」

ティータは隣でだらしなく長椅子に寄りかかっているハーフェルの少女に視線を向けた後、肩をすくめた。

「色々あったんツスよ」

その後、私達は卓を囲みお互いの情報を交換するのだった。

## オーキスト殿下の参戦

「そうツスか。アリスちゃんが……」

「ええ、それにこのままでは魔神が復活してしまうわ。早急に対処しないと」

ティードが頷く。

「もちろん、私も力を貸すツスよ！」

「頼りにさせて貰うわ」

そしてティードからもナイル王国王都の現状を聞いた。

現在は黒い光で包まれている王都だが、外から探った限りだと、中には悪魔しか居なかったそうだ。

王都の住人は皆、悪魔の犠牲になった物だと思われる。

更にはタイムされた魔物らしき存在も多数確認されている。

王都を襲撃するなら、それらへの対処法も考える必要が有る。

ティードの話では、王都以外のナイル王国の街村は無事で、王都と連絡が取れないなか各領主が民を纏めているそうだ。

ティードは従魔を使って西大陸の大神殿や各神殿と連絡を取っているそうで、王都に近い領地を持つナイル王国の領主達に神殿を通じて民の避難と警戒を呼びかけているそうだ。

「外に〜漏れた魔物や〜悪魔は〜あちしに〜任せるの〜」

「フラウさん？」

「王都の〜近くに〜城を作って〜出て来た〜奴を〜砂の騎士団で〜殲滅するの〜」

「それは助かりますが……1人ですか？」

「あちし〜Sランク〜。任せて安心〜」

どう見てもだらけ切ったハーフェルフだが、ティーダに視線を向けると頷きを返すので信用は出来るのだろう。

「フ、フラウ様が……フラウ様が自ら仕事を」

「いや、1番動かなくて良いポジションをキープしているだけだと思っスよ？」

何故か感涙するジョンにティーダが苦笑いでツツコミを入れた。

その光景を無視してオーキスト殿下が提案する。

「では明日1日を休養に当て、明後日ナイル王国王都に攻め込むか」

「そうですね。ですが……」

オーキスト殿下は此処に残るべきだ。

その言葉は差し出されたオーキスト殿下の手で止められた。

「俺も行くぞ。どうせ魔神が復活したら中央大陸は終わりなんだ。ならば前線で最善を尽くしたい」

「勤勉ツスね。流石、ユーティア帝国の皇太子殿下ツス」

「しかしオーキスト殿下、護衛を付けないとは行きませんよ。死罪が決まっているボクとは違って、オーキスト殿下には生き残って貰わないと」

「一応、自分の立場は理解している。私はアデル殿とルーカス辺境伯と共に騎士達を連れて城下町の悪魔や魔物を討伐するつもりだ」

なるほど、確かにオーキスト殿下が連れてきた騎士団は個人戦技に長けた精鋭とは言え、騎士の本分は集団戦。

王城の攻略よりも向いているか。

「殿下……ご自分の立場をご理解されているなら、安全な場所でご指示を出して頂けると宜しいのですが？」

「ソレはソレ、コレはコレだ」

オーキスト殿下の背後で護衛の近衛騎士が疲れた顔で言うが、オーキスト殿下は取り合わなかった。

完璧な貴公子と言うイメージだったが、意外とヤンチャな所があるのかも知れない。

まあ、コレをヤンチャで済ませて良いのかは分からないけどね。

## 前哨戦

ナイル王国の大門を目の前にして、私は周囲の者達に視線を向けた。

今回、私達は大きく3つの班に分かれている。

外に逃げ出した悪魔や魔物を狩るフラウト、王都の目の前に作り出された砂の城で待機する治癒魔導師や薬師達。

ユウの弟子であるリリも居る。

王都に蔓延った悪魔や魔物を倒し、生存者が居れば保護するオーキスト殿下やルーカス様、アデルと騎士達。

アデルの子飼いの2人もこの班になる。

そして私達がイーグレットが居ると思われる王城へと乗り込む班だ。

私達がナイル王国に来てからと言う物、挑発するかのようにイーグレットは何度か魔力を放っていたので、居場所は間違っていないだろう。

私は同じ班になっている者達の中でも一部に視線を向けた。

「本当に行くつもりなの？」

「はい、絶対に行きます！今度こそ私はアリス様を助けて見せます！」

「わ、私も戦います！」

そう言うのはミーシャとルノアの2人だ。

彼女達は帝都で待っていて貰う筈だったのだが、どうしても言  
って聞かなかった。

せめて砂の城でリリと共に残って欲しかったのだが、2人の決意  
は固い様だ。

「……………2人共、死ぬ事は許さないわよ。ミレイ、いざとなった  
ら2人を連れて離脱しなさい」  
「畏まりました」

2人は常に鍛錬を積んできた。

そこら辺の冒険者もどきのチンピラでは相手にもならない。  
だが、今回の相手はイーグレットだ。

あの男がどんな手を使ってくるかは不明だが、生半可な戦力では  
ないだろう。

2人とミレイには離脱用の【転移】のスクロールを渡してある。

私は腰のフリーユージェルや左腕の小手、腰に吊るした【暴食の魔導  
書】など装備を点検し、装備の確認を指示していたオーキスト殿下  
と視線を交わした。

オーキスト殿下は皆の確認が終わった事を認めると、号令を出し  
た。

「さて、行きましょうか」

遠く門の方から魔物の叫びや兵士たちの雄叫びが聞こえるナイル

王国の謁見の間で、王座に足を下ろした青年。

魔族やエルフ、獣人など、複数の種族の特徴をその身に宿した男、イーグレットが口の端をニヤリとあげる。

「思ったよりも早かったね、エリー」

イーグレットは目の前、数段下に膝を突く配下に声を掛ける。

「それで、蚕<sup>かいこ</sup>。アレはどうなった？」

蚕と呼ばれたのは老齡に差し掛かる魔族の男だった。

長命種族である魔族であり、見た目にも老人と呼ぶべき男は相当な年月を生きただろう。

色を失った白髪と枯れ木の様な手足をしている。

しかし、その瞳は狂気と愉悦を滲ませ、爛々と輝いていた。

「上々ですな。素質だけなら若が今まで持ち帰られた『土産』の中  
では群を抜いております。」

本人はただただ怠惰で愚かですが、その血に眠る力は本物でした。  
オマケに壊れかけとは言え、あの《雷神》まで持ち帰って頂いたの  
ですから、腕がなると言うものですじゃ」

「くつくつく、では早速使ってみるとするかな」



## 前哨戦

ナイル王国の門は外から見た通り、門兵も居らず我々を素通りさせた。

そのまま無人の大通りを広場まで進み、そこで騎士達を隊に分けて魔物と悪魔の排除を始める私達と、エリー嬢達に別れた。

私はこの広場を拠点に決め、10人編成の小隊に分けた騎士達を送り出した。

この場に残っているのは私とルーカス辺境伯、アデル陛下と、治癒魔法に長けた騎士が数人だけだ。

小隊が街に散らばると、戦闘音が響き始める。

「グルアアア！！」

「魔物か」

「はい、殿下はお退がり下さい」

「……まあ、仕方ないか」

此処は大人しく退がるべきだろう。

私はルーカスの指示に従い魔物から距離を取った。

私が今回の遠征に志願したのは、この戦いが大陸の命運を賭けた物だから。周りにはそう言っているが、その実、私はこう言った冒険に憧れていた。

勿論、大陸を、民を護りたいと言う気持ちが一番大きな物だ。

だがこの状況に興奮を覚えている事も事実だ。

しかし、自分の立場も理解しているので無理は言わない。  
大人しく守られるしか無いのだ。

現れた魔物は二足歩行の狼、ワーウルフだ。

残っている騎士達を私の護衛に回したルーカス辺境伯とアデル陛下が迎え撃つ。

鋭い爪と強力な牙で襲い掛かるワーウルフだが、ルーカス辺境伯は巧みな剣術で、アデル陛下は流麗な拳法で迎え撃つ。

ワーウルフの爪を剣で弾いたルーカス辺境伯は、素早く放った斬撃で両腕を斬り飛ばし、痛みで怯んだ所で首を斬り落とす。

アデル陛下は自らの喉を噛みちぎろうとするワーウルフの牙から身を引く事なく、逆にワーウルフの口に膝を叩き込む。

魔力を纏った肘打ちで牙を折られたワーウルフがタタラを踏むと、アデル陛下は素早く腕を取り、腰の上に乗せる様に投げ飛ばし全身の骨を砕いた。

「ふう、小隊の撃ち漏らしかな」

「そうだね。それにしてもルーカス殿は良い腕をしているね」

「はは、私は元々、下位貴族の生まれですからね。」

将来は騎士になるつもりだったので」

そんな会話をしている側、2人は更に3体のワーウルフを討伐していた。

「っ 殿下！」

護衛の声に振り返ると、背後の建物の影から8体のワーウルフが飛び出して来た。

「なるほど、前方の奴らは囷か」

私は剣を抜きながらこちらに戻ろうとするルーカス辺境伯とアデル陛下を手で制した。

「ふむ、自ら敵陣に乗り込む訳には行かない立場だが……向こうから来てくれるなら話が早い」

私は護衛の騎士の隙間を抜けた2体のワーウルフと対峙するのだった。

## 前哨戦

アデルやオーキスト殿下達と別れた私は、少数の精鋭を率いて王城を目指して駆けていた。

騎士も居るが。そのほとんどは冒険者だ。

これは、騎士より冒険者の方が優れていると言う訳ではなく、ナイル王国の王城内での遭遇戦を想定しているが故の編成だった。

行動範囲が制限され、物陰からの不意打ちも考えられる室内戦では、ダンジョン探索などの経験がある冒険者の方が一日の長がある。

王城の門の前には門番の様にアースドレイクが寝そべっていたが、接近する私達に気づき身体を起こそうと動き始めた頃には私が手にするフリーゲルによってその首は切り落とされていた。

門は鉄とエルダートレントの木材を組み合わせ、魔法を付与した頑丈な物だったが、私が魔法的な防御を解除し、ユウが数回、戦斧を叩きつけると一部が砕け、更に数回戦斧を打ち込むと、轟音を立てて門は半壊してしまった。

「っ  
」

私が手を挙げて止まる様に指示を出す。

門から王城までの間に見知った人影が有ったからだ。

「グレン、オウル」

「本名はグレナムだ。こっちら鼻」

「興味無いわね」

「そうかい」

「そこをどいて」

「嫌だと言ったら？」

「殺すわ」

私とグレナムが睨み合うが、フクロウが気にせずにはった。

「グレナム、殿下はアレを使うと言っていたよ」

「ああ、そうだったな」

「アレ？」

グレナムと梟が言う『アレ』とやらが何かは知らないが、碌なものでは無いだろう。

ユウやエルザとアイコンタクトを交わして畳み掛けようと足に魔力を通した時だった。

どこからともなく降って来た何かが、私とグレナム達の間で土煙を上げたのだ。

「な、何？」

「ああ、アレだよ」

グレナムが皮肉な笑みを浮かべて肩を含めた。

風が土煙を散らすに連れて、落ちて来た何かの姿が明らかになる。影の形だった輪郭が形を作り、土煙が晴れたその姿。

「エ、エエリザート、お、おおおれは……」

「……………フリード？」

私のかつての婚約者フリード・ハルドリアだった。

しかし、様子がおかしい。

私の事は認識している様だが、左右の目は別の方向に向けられており、口はニタニタと気持ちの悪い笑みを浮かべていた。

「感動の再会ってやつだな」

何故かグレナムの声が場違いな空気の中、良く響いていた。

## 前哨戦

「エエエエリザベーーーーー！オオオ！！！お、お、おま、おまお  
まおまお前の所為でえええええ！！！！」

唾を散らしながら吠えるフリードは、発狂した様に頭を掻きむしりながら私を睨みつける。

その目には理性の光が見て取れるが、それでいて自らの感情を全くコントロール出来ている様には見えない。

非常に不自然な状態だ。

おそらく、本来なら発狂してしまう様な精神状態を魔法で無理やり正常な状態に固定しているのだろう。

発狂すると言うのは、ある意味では自分の精神を守る為の防衛行動だ。

それが出来ないとなると、フリードは今、発狂する程の苦しみを正常な精神で受け続けていると言う事になる。

「まあ、別に良いのだけれどね。

そこを退きなさい、フリード」

「あが、いきいいい！！痛い痛い痛い痛い！！た、助けて！助けてくれ！アガがが……」

フリードはひとしきり苦しみ出すと、ふと、表情を落ち着かせて再び此方に睨みつける。

「おい！エリザベート！何をしている！早く俺を助ける！命令だ！」

「急に元気になったぞ？」

「多分、精神を固定されているのではなくて、一定以上のダメージ

を負つと回復するのではないのでしょうか？」

「うわ、エゲツねえな」

フリードの異変にすぐ後ろのユウ達が考察しているが、今は時間が惜しい。

フリードなどに構っている暇はないのだ。

私は縮地で踏み込むと同時に、フリーユージェルを振る。

フリードは全く抵抗する様子を見せず、その首を地面へと落とす。

「さて、何がしたかったのかは分からないけど、私の邪魔をするなら貴方達も殺すわよ」

私はフリードの死体を一瞥する事なくグレナムと梟を睨みつける。しかし、2人の表情は変わらない。

「エリーさん！！」

「っ」

ユウの声に、私は咄嗟にその場を飛び退いた。

すると、私が居た場所に首の無いフリードの身体が雷を纏った拳を振り下ろしていた。

「バカな アンデッド」

「ち、違うツス！アンデッドじゃないツスよ！」

切断されたフリードの首と身体の断面から触手の様な物が伸びて絡まると、落ちていた首が引き上げられて再び胴体とくっついてしまった。



「あばばばば！！エエエエリザベート！！！！」  
「どうなっているの」

私の問いに答えたのはグレナムだった。

「ウチの錬金術師の作品でな。

色々と混ぜられたそうだが」

「錬金術？キメラという事か」

私達が武器を構えてフリードを取り囲もうとすると、フリードの体が膨張し、悲鳴を上げながら歪な異形へと姿を変えた。

「これで正気を失う事も出来ないってんだから怖え話だよな」

グレナムは他人事の様に行った。

## 前哨戦

なんとか人の形の体を成してはいるが、見る者に生理的嫌悪感を抱かせるフリードのその姿は、正に異形と呼んで然るべき物だった。体躯が一回り程大きくなり、身に着けていた物は腰布以外が千切れ飛んでおり、そこだけギガンテスの物と付け替えたかのような左腕が、大きくなった筈の体躯を小さく見せる。

右腕は常に帯電しているのか、時折紫電を走らせながら自らの皮膚を焼き尽くし、焼けた端から回復していた。  
そして……。

「うう……な、なんでこんな事に……すまない……許してくれ……エリザベート……俺は、俺はどこで間違えたのだろうか……」

ずっと嘆きと後悔を口に行っているブラート。

そのブラートの顔が有るのがフリードの胸の辺りだ。

「な、なんだよ、アレ……」

「人間同士を合成したって事ツスカ。女神様に代わって神罰を下す必要があるツス」

その不気味な姿に息を呑むシスティアと、命を弄ぶ行為に怒りを見せるティータ。

「すまない……エリザベート、俺たちを殺してくれ」

「嫌だ！馬鹿な事を言うな！俺を元の姿に戻せ！早くしろ！エリザベート！」

「もう無理だ、フリード。諦める……あの蚕とか言う者が言ってい

た。もう元には戻れん。このまま苦痛を受け続けるくらいなら死んだ方がマシだ」

「だまれええええ!!!俺は王子だぞ!王太子だ!何故こんな目にあわなければがあああ!」

「うぐう……」

何かしらの痛みを感じたのか、フリードが悲鳴を上げ、ブライトが奥歯を噛んで堪える。

「はあはあはあ、エリザベート!お前の所為だ!お前が居なければこんな事にはああああ!!!」

「くっ、みつともないぞ、フリード。これしきの苦痛で悲鳴を上げるな!」

「黙れれれれれれれ!!!!!おおおおおまお前もだあああ!!お前が余計な事をしなければ帝国に勝てたんだ!」

「ぐぐお」

フリードは自らの胸に有る父の顔を全力で殴り付けた。

顔だけしか無いブライトは抵抗する事など出来る筈もなく、すぐに血塗れになってしまう。

しかし、ブライトの顔はブライトで有ると同時にフリードの胸でも有る。

帯電する拳で全力で殴り付けた事で、フリード自身が感電し、身体を傷つけて行く。

胸のブライトを散々殴り付けたフリードだったが、僅かに拳が止まると、まるで時を戻したかの様に傷が消えていった。

「くそ!くそ!くぞおお!!!」

地団駄を踏むフリードを冷たく見ながら私は言う。

「邪魔だから退きなさい。今は貴方達ごときに構っている暇は無いのよ」

「うるさい！早く助ける！そうだ！俺を助けたらお前を俺の妾にしてやる！子種も恵んでやろう！さあ、俺を助けるんだああ！！！！」

驚く程私にメリットの無い提案だった。

## 前哨戦

くだらない提案への返答は斬撃で返した。

スキルで刃を飛ばして斬りつけると、フリードは大きくタタラを踏んで態勢を崩した。

「えい！」

「はっ！」

「神威ツス！」

その隙にユウとエルザ、ティータが攻撃を加える。

ユウの戦斧がフリードの首を刎ね、エルザの剣が帯電する腕を斬り飛ばし、ティータの鉄杖がブラートの顔を叩き潰した。

しかし、その傷も瞬く間に回復してしまう。

「貴様らああ！！不敬だ！不敬だぞ！この俺に対してなんたる狼藉だ！死刑に処す！」

「フリード……諦めろ、もう俺たちは終わりだ。このまま殺して貰う方が良い」

「黙れえ！！！！！」

痛みと怒りで、癩癩を起こした子供の様に叫びながら暴れ回るフリードを見ながら仲間達と手早く意見を交わす。

「あの回復力は厄介ですね」

「ああ、およそ急所と思われる場所を破壊されても平然と回復したからな」

「でも痛みはあるみたいツスね。最悪、戦意を失うまでダメージを与えるツスよ」

ティードの意見にエルザは少し目を丸くする。

「なんだティード。命を弄ぶな、とか言っていたから奴らに同情していたのだと思っていただけだが、意外と辛辣なんだな」

「え？あんな奴らどうなっても良いツスよ。」

あいつらがやった事は聞いているツスから。

私が許せないのは命を弄ぶ行為そのものに対してツス」

私はそんな3人に声を掛ける。

「敵はフリードだけでは無いわよ」

そう言いながら左手の短剣で梟の短刀を受け止めた。

私達がフリードの対応をしていた間に、グレナムと梟は不意打ちを仕掛けたのだ。

グレナムのハルバードが死角からティードに向かうが、その一撃は横から割り込んだバルの手甲に阻まれる。

「へん！随分とペラペラ喋る様になったじゃねえか。」

「お前の相手は俺だぜ」

「ふん、チンピラ崩れが、調子に乗るなよ」

バルとグレナムが激しい攻防を始めた時、私と梟の間に入る者も居た。

「エリー様、ここは私達が」

「エリー会長はユウ様達とあちらの化け物をお願いします」

ミーシャとルノアだった。

「あなた達……」

「エリー様、私も出ますので、此方はお任せ下さい」

「……分かったわ、無理はしないで」

ミレイを含めた3人に梟の相手を頼んだ私は、まだブライトと罵り合いながら暴れ回っているフリードと対峙した。

フリードが大声で騒いでいたせいか、魔物まで集まって来ているが、そちらは騎士達に任せる事にする。

「さっさと倒してアリスの所に行かせて貰うわ」

## 前哨戦

私は愛用の短剣を構えてオウル……いや、梟の動きを観察していた。

今回、アリス様が拐われた時、私はルノア様とエリー様に与えられた仕事をこなす為、アリス様の元を離れていた。そう、また守る事が出来なかったのだ。

ルノア様と話し合った私は、アリス様奪還の為の遠征に無理を言っ  
て同行させて貰った。

そして今、アリス様を拐った者の1人が目の前にいるのだ。

あの日からわたしは考えた。  
色々な人達からアドバイスを受け、自分が何をすべきなのか、  
と。

私は間合いを開ける様にゆっくりと退がっていたルノア様と視線  
を交わす。

ルノア様がうなずくのを確認した私は、放たれた矢のように駆け  
出した。

「【風属性付与】」

ルノア様の魔法を受け、更に加速。

梟は急に速度が上がった私に、僅かに目を見開いた。

「はっ！」



その際に短剣を投擲する。

まさか、メインウエポンを手放すとは思っていなかった梟の反応が僅かに遅れ、私の接近を許す。

「【剛撃】」

放ったのはただの打撃。

しかし、獣人である私は、同年代の人族に比べればかなり力が強い上、スキルで筋力を一瞬底上げした一撃は、飛来した短剣を短刀を振り打ち払った梟の小柄な身体を吹き飛ばした。

拳を繰り出す為に足を止めた私をミレイ様が追い抜いて行く。何かの建物に叩きつけられた梟への追撃を与えるのだ。

ミレイ様が梟の喉を狙って短剣を突き出すが、梟は寸前の所で頭上にあつた建物の窓に手を掛け、逆上がりの要領でその身を窓まで引き上げると跳躍し、ミレイ様と私の間に降り立った。

私はルノア様から投げ渡された短剣を構え、ミレイ様と共に挟み込む様に梟の隙を窺った。

時折放たれる魔法はかなりの威力が有るが、打ち払えない程では無い。

背後のルノア様が上級魔法の詠唱を始めたので、私はガードする様に前面に陣取った。

梟は私達を無視してミレイ様に斬りかかるが、ミレイ様は余裕を持って梟の短刀を受け止めた。

そのまま短刀と短剣で鏝迫り合いをする梟とミレイ様。

偶然、全員の挙動が止まる。

少し離れた所ではエリー様達やバル様が戦っているが、私の周囲では戦いの最中にほんの僅かな静寂が生まれた。

そんな時だからだろう。

梟の呟きはその声量に反してしっかりと聞こえた。

「3人か。思っていたより釣れなかったね」

つれる……何を……？

「っ ミーシャ！ルノア！私から離れなさい！」

「遅いよ【リミットゲート限定転移】」

梟が魔法を使った瞬間、周囲の景色は一変してしまった。

## 前哨戦

俺が繰り出す拳をグレナムは長く取り回し辛いハルバートで器用にいなしていた。

「ちっ、お嬢がクソ王子の成れの果てを始末するまでに片付けなければいけねえつてのにちよこまかしてんじゃねえぞ！」  
「くっ！」

拳が当たる瞬間、僅かに速度を変える事でグレナムのハルバートをかち上げた。

これはスキルではなくテクニク。  
純粋な身体技能だ。

受け流しは正確さが求められるので、こうしてタイミングさえずらしてやれば、不完全では有るがダメージが入る。

だがグレナムは直ぐにそれに対応して来やがった。  
コイツの動きは天才のソレじゃねえな。  
努力を積み上げて来た奴の動きだ。

「テメエみたいな男がどうしてあんな奴に協力してんだ？  
イーグレットはこの大陸を滅ぼそうとしてんだぞ！」  
「分かってるさ」  
「なら……」  
「それでも！」

グレナムのハルバートが巻き起こした突風が刃となって俺の身体を切り刻む。

全力で魔力を纏った俺の身体は鋼の鎧を着込んでいる様な物だ。それを物ともせず切り裂くとは、以前に共闘した時は実力を隠していやがったって事か。

「イーグレット殿下がやるうとしていている事が危険な事だと分かっている。既にナイル王国の民にも多大な犠牲が出ているしな。

だが、それでも俺はイーグレット殿下に恩義が有る！

忠義がある！

例え大陸を滅ぼしても返さねばならない恩義とこの手を血に染めても貫かねばならない忠義がな！」

大振りに薙ぐハルバートを手甲で受けようとした瞬間、グレナムはハルバートを手放し腰から剣を抜いた。

（ちっ、武器や勝ち方には拘らねえって事か。コイツは武人じゃなくて戦士の戦い方だな）

ハルバートを払い除け、上段、中段、下段と連続で振るわれるグレナムの剣を捌く。

「ぐおおお！！」

しかし、全てを防ぐ事ができず、三箇所ほど剣を受けてしまい、特に左肩の傷は浅くなかった。

「もう良いだろ？拳を下ろせ。

魔神が復活したとしても、もしかしたら生き残れるかも知れないぞ」

「まるでこのまま戦っていたら俺が死ぬみてえな言い方じゃねえか」  
「そう言ったんだよ」

グレナムのその言葉に、俺は胸の前で構えていた拳を下ろした。  
勿論、諦めたわけでは無い。

肩から腕、胸から腰、腰から足へと順番に無駄な力を抜いてゆく。

その様子に警戒したのか、グレナムは俺から距離を取った。

正直ありがたい。

奴にはわざと隙を見せて誘っている様にみえるかも知れないが、  
真実今の俺は隙だらけなのだ。

こんな技、タイムンで使うなんて正気の沙汰では無いが、俺の覚  
悟が奴の忠義だか恩義だかに劣っている様に思われては敵わない。

俺は練り上げた魔力を丹田から全身へと広げて行き、スキルを発  
動する。

「舐めるなよ……【一鎧】……！！！」

## 前哨戦

脱力した体に急激に魔力を流す事で、身体能力を爆発的に向上させるスキル【一鎧】。

バアルの体の周りを可視化される程の魔力が渦巻く。

剣を鞘に収めたグレナムがハルバードを足で蹴り上げ再び手にすると、刃から生み出した風を背に受けて駆け出す。

だがバアルが鎧の様に纏った魔力は、風の魔力を纏ったグレナムのハルバードの刃を弾いた。

「くっ、神器か」

「そんな上等なもんじゃねえよ！」

グレナムは、スキルで底上げされたバアルの拳を完全に躲す事が出来ずに数発掠める。

ただそれだけで肉が裂け、血飛沫が飛んだ。

「厄介な技だ」

「死ねや！【二斧】」

全身を強化していた魔力を振り上げた右足に回したバアルは全身のバネを使って足を振り下ろす。

「ぐおおー！！！」

ハルバードで受け止めたグレナムだが、強力な魔法武器であるそれを以てしても、バアルの全力のスキルを受け止める事は出来なかった。

柄の中ほどから真つ二つに折れたハルバードを投げ捨てたグレナムは剣の柄に手を掛けながら飛び跳ねる様に背後に退がる。

「逃がすかよ！【三爪】」

足の魔力を今度は両手に集め、バアルは獣の様に姿勢を低くし、地面を滑る様に駆け出した。

「おらあ！！」

「ぐああ！！」

その一撃は正に魔獣とでも呼ぶべき物だった。

爪状の魔力が防御の為に掲げた剣ごと、グレナムの体を抉った。

「最後だぜ！【四拳】」

全ての魔力を両腕から右拳に集める。

その状態から繰り出すのは当然、拳による一撃。

腰を落とし、右腕を腰だめに構えたバアルは、一拍の間を置いてその拳を繰り出した。

「此処は……」

私は素早く周囲に目を向ける。

周りには何も無い。

岩と砂だけの空間だった。

「ミレイ様……此処は一体……」

近くにはミーシャとルノアの姿はある。

そして少し離れた所には梟の姿も。

さっきまですぐそばで刃を合わせていたはずなのに……。

「荒野に飛ばされたのでしょうか？」

「いえ……これは異空間ですね」

「え？」

「空間全てに奴の魔力を感じます。」

恐らく魔力によって作られた空間です」

「そんな……空間作成なんて、伝説の高等魔法ですよ！」

その通りだ。

こんな魔法、使える人間が居るはずがない。

「ふふふ、正解だよ」

そう言ってゆっくりと近づいてくる梟の姿が屋気楼の様に揺らぎ、その姿を変えた。

顔の作りや体付きは変わらない。

しかし、その頭の角と白黒が反転した特徴的な瞳は見間違える筈がない。

「悪魔だったのですね」



## 前哨戦

梟の拳が私の胸を打ち据え吹き飛ばす。

華奢な少年の様なその体の何処にそんな力が有るのか、私は数メートルを飛ばされて岩山に叩きつけられた。

「うう……」

霞む視界で梟の姿を捉えると、片手でルノアの首を掴み上げていた。

その足下にはミーシャが倒れている。

「ぐう……」

ダメだ……私は……2人の事を頼まれたのに……。

エリー様が用意してくれた【転移】のスクロールも、この異空間では使えなかった。

このままでは……。

『ねえ、貴女。行くところがないなら私のところに来なさい』

実家が没落し、王都の貧民街の隅で両足を抱えて蹲っていた私。声を掛けてくれたのは貧民街に似つかわしくない銀髪に青目の美

少女だった。

明らかに貴族の令嬢。

つい数日前まで私もそうだったが、没落寸前だった自分の家とはまるで違う。

その雰囲気から上位貴族の家に連なる者である事は明らかだった。

『私はエリザベートよ。貴女の名前は？』

『……………ミレイ』

エリザベート様の侍女見習いになって半年程、夜も遅くにエリザベート様は私を連れ出して屋敷の中をこっそりと歩いていた。

『あの、お嬢様どちらに？』

『良いから、こっちよ』

エリザベート様は、小さな妖精が装飾されたカンテラで廊下を照らしながら進む。

『ねえミレイ。妖精が持っているカンテラは秘密の抜け道を照らし出す事が出来るんだって』

『妖精物語ですね』

『ええ、ほら此処』

見ると廊下に飾られた絵画の一箇所がカンテラの光に照らされて不自然な影を作っていた。

『コレは……………』

『此処、変でしょ？実はね……………』

エリザベート様が絵画を弄ると、柱の隣に隠し通路が現れた。

『此処の仕掛けに鏡が使われているのよ。』

だから夜にカンテラで照らすと不自然な影ができるの。

ね、妖精のカンテラみたいでしょ？』

『そ、そうですね』

『ほら、行くわよ』

『あ、お嬢様！』

私の手を引いてエリザベート様は隠し通路に入っていった。

そして少し歩くと頭上の扉から外にでる。

そこは公爵家の屋敷の屋根の上だった。

『わあ……』

屋根の上から見上げる夜空は星々が際限なく輝いていて、更に視線を下げれば王都の街が遠くまで見えた。

『良い景色でしょ？私のお気に入りなのよ』

『何故……私に？』

『ふふ、ミレイは私の腹心だからよ』

『腹心……』

『ええ、これからもよろしくね。ミレイ』

これが走馬灯と言う物か……懐かしい。

私がエリー様に初めて腹心と呼んで頂いた日の思い出だ。

私はエリー様の腹心だ。

エリザベート様から名を変えようと、公爵家から出ようとそれは変わらない。

そのエリー様はまだ幼い2人の弟子を私に託したんだ。

「……………死ぬる訳ないでしょう！」

痛む全身に鞭を打ち立ち上がる。

喉の奥から込み上げてくる血を吐き捨てルノアの首に手をかける  
梟を睨みつける。

「あまり動くとすぐに死んでしまうよ？

大人しくしていて欲しいな。

こつちの2人を殺したら君も殺すからさ」

「……………私は死ねない。2人も殺させない」

「それが出来るのは力が有る者だけだよ。

ミレイさん。君程度に何が出来る？

ただの侍女にしては頑張ったと思うけどね」

「私は！！エリー様の腹心です！！！！！」

叫ぶと同時に全身から魔力が噴き出した。

私の実力では到底制御出来ない程の魔力。

その魔力が私の周囲に渦を巻く。

「……………まだそんな余力が有るとは恐れ入ったよ。ルノアさんを  
殺して直ぐに……………」

ルノアの首をへし折ろうと力を加えるが、梟の手は空を切った。

「げほ、げほ」

ルノアは私の腕の中で苦しそうに咳き込んでいる。

「うう」

私の足下にいるミーシャも目を覚ました。

離れた場所で空を切った自分の腕を不思議そうに見つめて悪魔が問う。

「……………何をした？」

話には聞いていましたが、なるほど。

魔力の隅々までまるで手足の様に知覚できる。  
体を巡る魔力が活性化する事で飛躍的に上昇した身体能力。

これが……………。

私が差し出した手に周囲の魔力が集まりだす。

爆発的な感情をトリガーに発現した力。

後は名前をつけ、存在を世界に刻みつけければ良い。

「神器【妖精のキャンテラ】」  
フェアリー・ライト

## 妖精のカンテラ

今は梟と呼ばれている悪魔オルオートはまだ200歳にも満たない若輩者でありながら子爵位を持っている。

その実力は確かな物で、そこそこの強さの人間が3人程度いたところで、問題なく殲滅出来ると確信していた。

梟をこの人間界に呼び出したのは娼婦の様な服装の女、烏であり、オルオートは烏との契約によって行動している。

今回の仕事は、ナイル王国に侵入して来たエリー以外の人間を始末する事。

どうと言う事はない、簡単な仕事のはずだった。

「ちっ！」

梟の拳が目の前ミレイに当たる瞬間、彼女が手にするカンテラ型の神器の炎が揺らめくと、ミレイの姿は陽炎の様に消えてしまう。そして……。

「ぐあー！」

死角に現れたミレイの一撃を、何とか急所を外して受ける。これを繰り返していた。

（あの神器の能力はなんだ？透明化……いや、幻影か）

ミレイに向けて魔法を放つがやはりその姿が消えて別の場所に現れる。

「【剛撃】」

「ぐああー!!」

不意に脇腹に打ち込まれた短剣による刺突。

着込んでいた鎖帷子と魔力による防御で突き刺さりはしていないが、衝撃は伝わる。

見れば猫の耳とりボンが巻かれた尻尾の少女。

「ちっ!」

咄嗟に身体を半回転させた回し蹴りを放つが、ミーシャはミレイと同じく姿が掻き消えてしまう。

(確かに実体が有った。つまりこれは幻影ではなく転移。それも自分以外にも使える)

再び近くに現れた気配に視線をやると、ルノアが杖を掲げていた。

「不味……………」

フレイド・テンベスト

「【万物を粉碎せし斬風】」

ほぼゼロ距離から放たれた上級魔法。

不完全とは言え、その威力は鎖帷子程度では防げない。

「くそっ!」

ルノアの姿はすぐに消え去り、梟の反撃は虚しく空を斬った。

「はおはあはあ」

視線の先には3人の人間の姿が有る。

距離にして20メートルと言ったところか。

一瞬で詰められない距離ではないが、先ほどからの転移速度からして、避けられてしまうのは明らかだ。

「何だ……何か条件やリスクがあるはずだ。」

神器とて何でも出来る訳ではない。

ノータイムの瞬間転移なんて、人間に使いこなせるレベルを超えている。

何かしらの秘密があるはずだ。

再びミレイのカンテラが揺らめく炎を見せる。

3人の姿は消えて背中に衝撃を受ける。

しかし、今度は予想して背中側の鎖帷子に多めに魔力を込めていた。

そして見えた。

「なるほど、影か」

奴のカンテラから揺らめく炎が見えた時、影が不自然に動いた。

おそらく影が転移の条件に係している筈だ。



## 妖精のカンテラ

「不思議な感覚ですね」

今日、初めて手にした私の神器。

しかし、その使い方は、初めから知っていたかのように理解できる。この【妖精のカンテラ】の効果は影を繋ぐ事。

一定の範囲内の影と影を自由に繋げて行き来出来ると言う物だ。

ルノアとミーシャは最低限の説明で上手く合わせてくれている。

あとは私の魔力が尽きる前に梟を倒せるかだけだ。

【妖精のカンテラ】に魔力を込めて能力を発動させる。

足下の影が揺らめき、一瞬で視界が切り替わる。

そこは梟のすぐ背後。

「っ  
」

梟はその優れた反射神経で突然視界から消えて背後に現れたミレイに、勢いの乗った裏拳を繰り出す。ミレイはすぐさま自分とミーシャの位置を入れ替えた。

梟の裏拳は、ミレイよりも頭2つ程背の低いミーシャの頭上を通り過ぎ、ミーシャの短剣は脇の下の鎖帷子が薄くなっている場所を狙って突き出される。

「……っ」

深傷ではないが、浅くもない。

そんな傷を時間を掛けて、しかし確実に、積み重ねてゆく。

「ふう、ふう、ふう」

梟は既に全身から流血し、意識も定まっていない事が分かる。

そして……。

梟の体がグラリと揺れ、その場へと倒れ込む。

すると、どこまでも荒野が続いている様に見えた空間に罅が入り始め、視界を覆う程に広がるとパリンと言う意外にも軽い音と共にミレイ達はナイル王国の王城の敷地内に戻っていた。

梟に意識が無い事を確認し、化け物と化したフリードやブライトと戦っている筈のエリーの方に目をやるうとする。

しかし、膝がいう事を聞かず、崩れ落ちそうになり、ミーシャに支えられた。

「大丈夫ですか！ミレイ様！」

「ミレイさん！」

「私は……大丈夫です。それよりエリー様は……？」

私はまだ戦闘音のする場所へと視線を移すのだった。

異形のフリード (前書き)

投稿出来ていませんでした。

申し訳ない。

( . . . )

## 異形のフリード

梟とグレナムをミレイ達が抑えてくれる間に、私達は異形と化したフリードと対峙していた。

一緒に行動していた冒険者や騎士の多くは城壁を越えて来た魔物の相手をして貰い、フリードと戦うのは私とティータ、システィアの3人だ。

ユウとエルザは近接戦が中心なので相性が悪い。

フリードの腕には紫電が走っており、胸のブライトもフリードも風属性の派生である雷属性に高い適性がある。

ブライトは言わずもがな、フリードも才能だけはあるのだ。

努力が大嫌いで最低限の鍛錬しかしていなかったため、王家の英才教育によって会得した神器も全く使いこなせておらず、宝の持ち腐れだった。

そのフリードが異形となった事でどれ程の強化が成されているのが問題だ。

「エリザベートオオオオ!!!」

巨大な左腕を振り上げながらフリードが距離を詰める。

見た目はドタドタと鈍臭そうに見えるが、錬金術によって強化された身体能力は私の知っているフリードとはまるで違う。

「ぎやあああ!!!」

だが、フリードは自分の上昇した身体能力についていけないのか、一歩踏み出すだけで、踏み出した足が砕け、骨が飛び出す。

しかし、フリードは異常な治癒能力を持っており、砕けた右足は、

左足を踏み出し砕けている間に治ってしまつ。

それを繰り返しながら激痛に叫びながら疾走するフリード。

私達が素早く飛び退く。

そこに振り下ろされた異形の巨腕は石畳を打ち砕く。

「うがああああ！！！」

フリードとブラートの絶叫が重なる。

力を全くセーブせずに振るわれた腕は血だらけになり、砕けた石畳が礫となり、フリード自身の身体を打ち据える。

鋭い石がフリードの肉体を抉り、片目を潰すが、これも直ぐに治癒する。

「動きは対応出来ない程ではないが、あの治癒能力は驚異だな。

眼球を瞬時に治癒出来るなんて普通ではないぞ」

「うげえ、キモいッス」

システィアは面倒な敵に顔を歪め、ティードは巻き戻す様な不自然な治癒にドン引きしている。

「【氷柱針】」

「がああ！！！」

試しに私の腕程有る鋭い氷を数本放つてみるが、全身から雷を放ち打ち落とされた。

「反応速度も悪くないわね」

これは少し厄介かも知れない。

アリスを助けに行かないといけないというのに、フリードなどに

構って時間を浪費したくはない。

「本気で潰すわ……」【暴食の魔導書】

## 異形のフリード

暴食の魔導書に記録されている数多くの魔法を雨霞と打ち出す。

反撃も回避も許さない怒濤の連撃を受けたフリードは身動きすら出来ずに悲鳴をあげる。

炎で肉が焼け、風で切り裂かれ、氷に貫かれる。

しかし、痛みで苦しむ反面、その傷は直ぐに治癒してしまう。

「損傷した箇所での治癒速度の違いは見られないわね」

「治癒能力が高い魔物は核を持っているのが定番なのだがな」

システィアの言う通り、上位種のスライムのような高い治癒能力を持つ魔物は、核から離れた部位ほど治癒速度が遅くなる。

そこから核の位置を特定するのが冒険者の定石らしい。

だが、フリードにはその特徴が無い。

魔物の治癒とは違う能力なのかも知れない。

「【泥槍】」

「ぐぐぼっお」

私の魔法が途切れたタイミングでシスティアがフリードの足下から鋭い泥の槍を突き出す。

システィアの複合魔法【泥槍】は【水槍】の鋭さと【土槍】の頑強さを併せ持つ強力な魔法だ。

それを腹に正面から受けたフリード。

胸に大きな風穴を開け、口から大量の血を吐き出す。

「【聖光】」

「ぎやあああ！！！！」

そのまま倒れこむ所に詠唱を完成させたティードの追撃が入る。天から降り注ぐ聖なる光がフリードを焼き尽くす。

目が眩む閃光が収まった後に遺されていたのは僅かな灰だけだった。

「流石にこれだけやれば再生出来ないツスね」

「ああ、生物である以上、これで生きている筈はないだろう」

「……バアルやミレイ達は？」

視線を向ければ少しふらついているバアルの姿が有った。

足下には血の海に倒れ伏すグレナム。

「バアル、無事の様ね」

「問題ねえ……と、言いたい所だが、正直かなりキツイ。

魔力が殆ど残ってねえ」

「そう、ミレイ達は？」

「妙な魔法で転移させられたみたいだぜ」

「え」

「心配はねえよ、かなり限定的な魔法に見えた。

ミレイの姐さんなら無事戻って来るだろう」

バアルがそう言うと、まるで計ったかの様に空間が歪みミレイ達が戻ってきた。

かなり消耗している様だが、3人とも大きな怪我は無い様に見える。



「ミレイ達はバアルと……っ」

私が3人にこの後の行動を指示しようとする、フリードだった灰から魔力が吹き出したのだった。

## 異形のフリード

突然吹き出した魔力に振り返ると、そこにはフリードだった灰の山があるだけだ。

しかし、その灰が魔力を放つと、次第に膨れ上がり人の形をなす。

「嘘だろ？」

システィアの呟きが、私達全員の心を代弁していた。

「ええええりりりいいざああべーとああお」

「完全に化け物ね」

「な、なんですかアレは」

「フリードとブラートよ。ミレイ達は退がっていて。バルル、ミレイ達を守って」

「あいよ」

私は再び再生したフリードに魔法を叩き込み、システィアもティダの力を借りて灰になるまで焼き尽くした。

しかし、それでもフリードは復活してしまう。

「どうしたもののツスカね？」

振り回される腕を跳び上がって回避しながら言うティダ。

それに答えるのは泥の壁を作り雷撃を受け止めるシスティアだった。

「どするって言ったて、灰になるまで焼き尽くしてダメだったんだぞ？」

「システィア！」

流石はAランク冒険者。

私の声を聞いて咄嗟に自分を泥で包んだシスティア。

そこに泥の壁を突き抜けてフリードの異形の腕が打ち据える。

数メールを吹き飛ばされたシスティアだったが、ダメージは無さそうだ。

「なんだか動きが良くなってないツスカ？」

「そうね。どちらかと言うとブラートの動きに近いわ」

先ほどからどんどんフリードのスピードが上がり、動きのキレが良くなっている。

まるで話に聞く若い頃のブラートのようだ。

「殺す……………許さない……………俺を馬鹿にしやがって……………全て、全て貴様の所為だ！エリザベート！！！」

逆恨みなのだが、その怒りでフリードは魔力を爆発させる。

同時にフリードの体がぶくぶくと膨れ上がり、フリードとブラートが悲鳴をあげる。

そして2人はほんの数秒で身の丈が3メートルを超え、全身に無数の口と目玉を持った化け物へと変貌を遂げた。

先程の姿など、まだまじだった。

フリードだとわかる状態だったし、一応人の形をなしてはいたのだ。

だがもうこれは人ではない。

未だに私への恨言を全身の口を使って吐き出している事から意識は有るのだろうか、これを人と定義する事を本能が拒否している。

醜い化け物は全身から異臭のする粘液を撒き散らしながら私へと飛びかかって来た。

風の魔法で横殴りに腕を吹き飛ばすが、悲鳴を上げるだけで効いている様には思えなかった。

私のそばを掠めた粘液だが、どうやら溶解効果が有るらしい。背後の木が倒壊したのだ。

「負けないッスけど……………これ、勝てるんッスかね？」

## 異形のフリード

醜い異形と化したフリードは溶解液を撒き散らしながら跳ね回る。フリードの溶解液は自身の体をも溶かしてしまう様で、その痛みで全身の口から叫び声を上げる。

私は【暴食の魔導書】を捲り、目的のページを開く。

「【岩牢】」

地面から飛び出した岩が格子状に組み合わさりフリードの動きを阻害する。

それに合わせる様にティータとシスティアが拘束魔法を重ね掛けする。

泥と光で更に身動きが制限されたフリードは、全身にできた目玉で私を睨む。

「たあああすうううけええええ」

「無理よ」

フリーゲルを抜いた私はフリードを12に分割する。

「【凍結】」

バラバラになったまま氷漬けになったフリードだが、直ぐに氷を砕いて再生してしまった。

「これでもダメか」

「もう嫌になって来たッス」



フリードに埋め込まれた力は世界のルールに反する物。

1500年前、勇者に倒された悪魔王が残した伝説の遺産、旧神の心臓の可能性がある。

そんな御伽話の中の産物が実在するとは驚きだが、それが1番しっくり来る答えだった。

「【強欲の魔導書】」

神器から取り出したのは魔法陣が刻まれた布だ。

この布に刻まれているのは魔封じの枷を作る時に使用する物である。

それも、古文書を解読し古王国のマジックアイテムを再現する過程で生まれた封印術が記されている。

ティータの魔力を受けて元の姿に戻ったフリードに封印術を撃ち込んだ。

これでフリードは魔力を魔法に変換できない筈だ。

だが、体内に作用する再生能力を封じることが叶わない。

「はあ、はあ、エ…リザ……」

両腕をついて私を見上げるフリードの顔を蹴り飛ばす。

「おごっ」

「大人しくしていなさい。

貴方に構っている時間が勿体無いのよ」

「貴様！ごふっ」

口答えしようとするフリードをもう1度蹴る。

ブライトの方はもう反抗する気力も無いのか、痛みに呻くだけで何も言わない。

【暴食の魔導書】を取り出した私に怯えた目でフリードは声を上げる。

「ま、待て！待ってくれ！」

【石棺】

「まっ……………」

分厚い石の棺がフリードを閉じ込めた。

「システィア！」

「いいんだな？」

「ええ、やって頂戴」

【泥沼】

システィアが地面に手をつくると、フリードが入った石の棺が泥と化した地面の中へと飲み込まれていった。

魔法が使えないフリードは脱出する事は出来ないだろう。

フリードとブライトは、これからずっと地下深くで永遠に生き続ける事になるだろう。

窒息死や餓死する度に、発狂する度に、元の状態に再生しながら永遠の時を過ごすのだ。



## 異形のフリード

あの女……クリスの仲間の烏と名乗った女に地下牢から連れ出された俺は、同じく幽閉されていた場所から連れ出された父上と共に転移魔法で逃げ出す事に成功した。

「ぐっ」

硬い石畳に投げ捨てられた俺は、烏を睨みつけた。

「貴様！丁重に扱わないか！不敬だぞ！」

「……………まだ自分の立場が分かっていないのね」

「はっはっは、それが分かる程度の知恵があればエリーを手放したりしないだろう」

そう言ったのはエリザベートと何度か話しているのを見た事が有る男だ。

片方だけの魔族の角に、エルフの様な耳、狼の尾など、複数の種族の特徴が見て取れる。

「ふん！汚らわしい混ざり物如きが許可もなくこの俺の前で口を開くな」

俺がそう言ってやった瞬間、周囲の空気が冷たく変わった気がした。

「いっへっ…」

瞬間、俺の首がねじ切れるかと思う程の衝撃を受けた。

見れば顔に大きな傷を持つ大男が冷たい目で俺を見下ろして来た。

「貴様如きが、イーグレット殿下に対して舐めた口を聞いて良いとでも思っているのか？」

「貴様……」

俺は大男を睨み返すが、明らかに幾つもの死線を超えて来た大男が発する殺気に腰が引ける。

「まあまあ、構わないよ、グレナム」

「しかし……」

「君は家畜に吠えられて激怒するのかい？しないだろう？」

同じ事だよ。好きに吠えれば良い。どうせ蚕への土産に持ってきただけの男だ」

「はっ！」

蚕？土産？何を言っているのだ？

こいつらは俺を助ける為に行動したのではないのか？

その後、俺が何を問いかけても誰も何も答えなかった。

まるで家畜を扱う様に、俺と父上はある男の前へと連れて行かれた。

その男は年老いた忌まわしき魔族だった。

蚕と名乗った男は、俺や父上を使って身の毛もよだつ邪悪な実験を行った。

何度も何度も体を切り刻まれ、怪しい薬を飲まされた。

あの父上でさえ、殺してくれと嘆願するほどの責め苦を味合わせられたのだ。

俺は何度も何度も心臓が止まった。

発狂した事も1度や2度では無い。

だが、そのたびに魔法で無傷の体に、正常な精神に戻されるのだ。

そんな毎日が続いたある日。

俺はどうしてこんな目に合っているのかと考えていた。

そうだ、エリザベートのせいだ。

あの女さえいなければ、俺は今頃シルビィと共に贅沢な暮らしを満喫していた筈なのだ。

俺は王となり、シルビィは王妃だ。

全ての者が俺に傅き、俺の命令を聞く。

そんな素晴らしい未来が待っていた筈なのに。

俺がエリザベートへの恨みを積み上げている時、蚕があのイーグレットを連れて現れた。

「殿下、本当によろしいので？」

「ああ、どうやらエリーが来てくれた様だからね。歓迎の用意をしない」と

そう言ってイーグレットは俺を見下ろしてニヤリと笑った。

## 異形のフリード

蚕に牢から引き摺り出された俺は、奴が実験室と呼ぶ部屋に連れていかれた。

そこは何度も俺の体をいじくり回された部屋。

当然、道中は必死に抵抗したが、その度に気絶しないギリギリの痛みを与えられる。

それが3回も続けばもはや抵抗する気力など残ってはいなかった。実験室に押し込まれた俺の目に、昨日から牢に戻っていなかった父上の姿が入って来た。

「う　うげえええ！！」

胃の中身、大した物は与えられていないのでほとんど胃液だけだったが、それを吐き出した。

台の上に寝かされた父上は、両手足が無く、腹には大きな穴が開けられ、蠢く内臓が露出し、いじられている途中だったのか、よく分からない器具が乱雑に内臓の中に突っ込まれている格好だった。

「うう……フ……リー……」

父上は空な目で俺を見ると小さく呟く。

あの様な状態になってさえ、意識があるのかと、俺は戦慄を覚えた。

「さて、始めようか」

蚕がそう言うと、兵士の格好をした男達が俺を父上の隣へと拘束

した。

「い、嫌だ！やめ、やめてくれ！お願いします！お願いします！」

いくら懇願しても無駄だとわかっていた。

こいつらは俺をただの実験動物としか見ていない。

それから俺は意識を失う事すら許されず、奇妙な心臓の様な物体を体に埋め込まれ、更に父上の体の一部と頭をくっつけられたのだ。全身には力がみなぎっている。

だが、それと同時に激痛と不快感が常につきまとい、発狂しては元に戻されるのを繰り返していた。

イーグレットの仲間の命令に逆らう事は出来ず、エリザベートの前に連れて行かれた俺は、彼女に対する怒りと助けて欲しいと言う願い、嫉妬や絶望、苦しみなどの感情が混ざり合う。

そして俺の意思とは関係なく、エリザベートとその仲間と戦い始めた。

俺の体は少し動くだけで経験したことのない程の激痛が走り、すぐに治癒する。

例え殺されたとしても、直ぐに再生する地獄の様な体になってしまっていた。

最後にはエリザベートの魔法で俺の魔力を封じられた。

これで漸く解放されるのかと安堵したのだが、エリザベートは俺を殺す事を諦め、石の棺に閉じ込めて地下深くへと封印してしまっただのだ。

あれからどれくらい年月が経っただろうか。

俺は死ぬ事も発狂する事も出来ず、酸欠と飢餓、脱水で死ぬ度に再生し、時たま思い出した様に胸の父上の顔と罵り合いながら永遠の時間を過ごすのだった。

## 異形のフリード（後書き）

勝手ながら1週間程更新をお休みさせていただきます。

— : ( , , ( ) :

## 王座の間

フリードを地下深くに沈めた後、負傷した冒険者や騎士、魔力が切れたバル、ミレイ、ルノア、ミーシャ達に護衛として数人付けて砂の城に帰還する様に指示を出した。

ルノアやミーシャは渋ったが、バルやミレイが足手纏いになると言って説得した。

更に残っている冒険者と騎士の半数を魔物からの防衛にこの場に残した。

ようやく城の中に入った私達は、王座の間を目指して走っていた。イーグレットは自分の居場所を隠すつもりは無いらしく、城に入った瞬間からイーグレットの魔力を感じていた。

その場所は、城の構造から考えて王座の間だと考えられる。

時折現れるレッサーデーモンを一蹴し、また騎士や冒険者を足止めに残して走った。

そして見えてきたのは私の背丈の2倍は有る巨大な扉だ。

基本的には王座の間の扉は臣下や異国の客人に王家の威光を知らしめる為、巨大で豪華な造りになっている。

それと同時に王が多く時間を過ごす場所である故、非常に頑丈で、物理、魔法に対しても耐性を持つ建材で造られている物だ。

これを無理やり破るとなると、かなりの労力を必要とするのだが、今回はそんな必要はなさそうだ。

ユウは視線を鋭くして言う。

「誘われているみたいですね」

「そうね」

王座の間の大扉は、私達がこの場に到着する前から開かれていたのだ。

「行くか？」

「ええ」

残った者達を見回した後、私は王座の間に足を踏み入れた。

そして私達に王座に腰掛けた男が声を掛ける。

「やあ、よく来てくれたね。嬉しいよ、エリー」

そう言ってイーグレットは満面の笑みを浮かべた。



## 王座の間（後書き）

新連載『探偵令嬢シャーロット・ホームズの事件簿』を始めました。  
もし気になりましたら覗いてやって下さい。

— ( ∙ ) —

## 凶刃

イーグレットの周りは娼婦の様な女と蠍が堅めていた。

更にはその背後、壁に背を預ける様に立つ男にも見覚えがあった。

「あいつ……！」

あの時、以前アリスが誘拐された時に戦った伯爵二位の悪魔、アルトロス・イザードだ。

イーグレットと繋がっていたのか。

私達が戦闘態勢を取ると、向こうも動き出す。

蠍が踏み込み、私の首を狙って来たが、その攻撃はエルザに受け止められる。

「いきなり大将首を狙う物ではないぞ」

「あら、初めて聞く言葉ね」

エルザが拳を振るう。

蠍はガードするが、バルコニーのガラスを突き破り、中庭へと落ちて行く。

奴は召喚魔法を使えるモンスターティマー。

見えない場所に放置するのは悪手ね。

エルザも同様に考えたのか、迷う事なく蠍を追ってバルコニーから飛び降りて行った。

「神器【神の恵みを刈り取る刃】」

刀身から柄まで真白な大鎌を作り出すと、肩に担ぎ上げた。

「あの悪魔は私が相手をするツス」

「ほう？貴様は確かあの時の女だな。

良いだろう。私の目的を遂げる為にもお前たちを排除する必要があるからな」

「アルトロス卿が協力してくれるとは有り難いな。俺の大望も後少しだ」

「黙れ、イーグレット。私は貴様の大望とやらには興味は無い。さっさと計画を進めろ」

アルトロスはイーグレットを睨む様に言った。

彼らの目的は一致していないのか？

「では私の相手はそちらのセクシーなお姉さんですね」

「ふふ、烏と呼んで頂戴な、漆黒のユウさん」

ユウが烏を牽制している間に、ティードがアルロトスと剣と大鎌を打ち合わせながら場所を移す。

「俺は君をずっと求めていたんだ。君の『イブ』の力をね」

「イブ？何を言っているのかわからないけど……死ぬ前にアリスを返しなさい」

「ん？ああ、良いぞ」

「え？」

イーグレットが指を鳴らすと召喚の魔法陣に似た光の中からアリスが現れた。

「アリス」

「マ……ママ……あぐっ？」

「っ」

光が消えると同時に、イーグレットの神器であるシャムシールの刃がアリスの胸を貫いた。

## エルザの剣

side エルザ

中庭に飛び降りると、そこで蠍は大量の魔物を召喚して待ち構えていた。

「随分とお仲間を呼んだ物だな」

「不死鳥のエルザが相手なのだから当然でしょ」

蠍はそう言っつて肩を竦めて見せた。

その周りには4体の竜種が守護する様に身を置いており、更にはホブゴブリンやグレートウルフなどの中に、1体、明かに格の違う魔物の姿が見て取れた。

それは獅子の頭と体、蝙蝠の羽、蠍の尾を持った魔物だ。

「マンティコアか」

マンティコアは冒険者ギルドが定めた魔物の分類によると、A+ランクに指定されている。

これはAランクパーティが討伐出来るかどうかと言うレベルの魔物だ。

強靱な獅子の体を持ち、蝙蝠の羽で空を飛び、尾の毒は一滴で人の命を奪うと言われている。

それに加えて多くの魔物の集団だ。

「コレは……ピンチね。今までで1番かも知れないな」

「ふふ、貴女の冒険譚はここでおしまいよ」

「それはどうかな？私は今までで1番の危機を何度も乗り越えて来た」

私は自身の内に眠る力を呼び覚ます。

溢れ出した魔力を完全にコントロールする事で、私の手の内に大剣と成って形作られる。

「神器【不屈の大剣】」

「その神器の事も聞いているわ。自身の身の危険に比例して身体能力を上昇させる」

「おや、私も有名になった物だな」

蠍は複雑な形の短剣を取り出した。

魔法武器の様に見えるが、効果は不明。

私は、ビリビリとした緊張と身に降り注ぐ殺気に、ニヤリと口角を上げるのだった。

## エルザの剣

次々に襲い掛かる魔物を【不屈の大剣】で切り捨てて行く。  
敵の攻撃が苛烈になればなる程、私の神器の斬れ味は増し、体は軽く、力は強くなって行く。

「【扇空斬】」

スキルも惜しみ無く使う。  
扇状に放たれた魔力の斬撃がホブゴブリンの群れを纏めて斬り捨てる。

背後に回ったオークがその身の丈に見合った巨大な戦鎚を振り下ろすのを片手で受け止め、逆袈裟に斬りあげ、返す刀で槍を突き出したコボルトの首を刎ねる。

「ふふ、此処までの強化は初めてだな」

それなりの重量が有る筈の【不屈の大剣】がまるで羽根の様に軽い。

「【縮地：連斬】」

時間が凝縮された世界で私を囲んでいる魔物を斬り裂きながら蠍に迫る。

「っ  
」

驚いた表情の蠍に向かって振り下ろされた【不屈の大剣】だが、

間に飛び込んで来た竜種によって蠍には届かない。

しかし、刃を受けた竜種の鱗は熱したナイフでバターを切るかの如く、易々と斬り裂かれ、一太刀でその体を両断される。

ふむ、先に周りの魔物から倒すべきか。

竜種の半身を蠍の方に蹴り飛ばし、もう一体の竜種に斬りかかる。

「ぐっ  
」

殺気を感じ、反射的に【不屈の大剣】を掲げる。

その刃に突き立ったのはマンティコアの尾。

切り返して切断しようとするが、空を切る。

「ゲルオオオオオ！！！！」

飛び掛かって来るマンティコア。

鋭い爪で目の前のオーガごと私を引き裂こうとする。

剣で受けるが、その衝撃は凄まじく、軽々と弾き飛ばされてしま  
う。

「ぐっ……やはり、マンティコアは一筋縄では行かないな」

ここは奥の手を使うしかないか。

痛む体に鞭を打ち、【不屈の大剣】を構えた。



## エルザの剣

構えた【不屈の大剣】に魔力を注ぐ。

この身の危機に増幅された神器に蓄えられた魔力に、更に追加で魔力を加えていく。

「む マンティコア！」

私の行動を不審に思ったのが、蠍はマンティコアに命令を出した。

「グル！」

マンティコアの毒尾が目にも止まらぬ速さで私に迫り、その鋭い毒針で私の肩を貫いた。

「がっは」

刺された肩が燃える様な熱を持ったと思った瞬間、胃の奥から血が込み上げ、その場に吐き出した。

「ははは、何がしたかったのか知らないが無駄だった様ね」

「うほ……ふ、そんな事はないさ。【不死鳥の焰】」

【不屈の大剣】から青い炎が燃え上がり、私の体を包み込んだ。

「ちっ、何を」

蠍は手にしていた短剣を振るう。

すると短剣は刀身が伸び、鞭の様にしなつて私の胸を両断した。  
更にマンティコアが獅子の前脚で私の頭を叩き潰した。

「Aランク冒険者と言っても1人ではこの程度か……」

蠍が呟いて踵を返した時、マンティコアの足の下で燻っていた青い炎が一気に燃え上がり、その中から飛び出した腕がマンティコアの毒尾を鷲掴みにする。

そして青い炎の中から現れた無傷の私は、2回り小さくなり、大剣から長剣サイズになった【不屈の大剣】を一振りしマンティコアの尾を切断した。

「馬鹿な　マンティコアの毒を受けた上、頭を潰したのよ！」

「ああ、なかなかの治癒力だろ？」

「治癒……何を言っているの？そんなのはもう治癒を超えているわ」

「はは、そうだな。今の私は不死身ってやつさ」

## エルザの剣

【不死鳥の焔】は、本来なら身に纏い体を強化する【不屈の大剣】で増幅された魔力を、再び体内に取り込む事で人外の自己治癒能力、身体強化能力を得る技だ。

当然、そんな膨大な魔力を体内に入れるのは相当なリスクを負う事になるが、この状況を切り抜ける為なら、この程度のリスクは飲み込む必要が有るだろう。

溜め込んだ魔力を放出した【不屈の大剣】をカバーする為に魔力密度を高めて長剣サイズに凝縮する。

「グウウウ!!!」

尾を切断されてのたうち回っているマンティコアへの追撃を遮る様に竜種が割って入る。

更にもう一体の竜種が蠍を背に乗せて私の頭上をとった。

「ふっ!」

ブレスを吐こうとする竜種の下顎を斬り落とし、口内から頭に向けて剣を突き出し、息の根を止めるのと同時に、頭上の竜種から高熱のブレスが降り注ぎ、私の身を焼き尽くした。

しかし、青い炎となった私は、ブレスを駆け上り蠍の姿が見えた場所で体を再生する。

「この化け物め!」

蠍が魔法武器を突き出すと、勢い良く飛び出した刃が私の胸を貫

くが、そんな物は意に介さず竜種に斬撃を与え、更に腹に刺さった刃を掴み思いつき引き寄せた。

「くそ！」

蠍は咄嗟に魔法武器を手放すが、その身は宙に投げ出される。

「貰った！」

真つ二つにするつもりで剣を振る。

「マンティコア！」

「グル！」

剣が蠍に届く寸前、マンティコアが爪を振り下ろし、私を弾き飛ばした。

その威力と鋭い爪で私の体はバラバラに四散するが、次の瞬間には炎の中から復活する。

「【不死鳥の矢羽】」

再生の炎を矢に変えて放つ。

魔力の塊で有るこの矢は大きさに見合わぬ威力を持つ。

コレを全身に浴びたマンティコアは大きく態勢を崩した。

「【不死鳥の炎槍】」

そこに炎を纏わせた【不屈の大剣】を投擲する。

流石のマンティコアも、避ける事は叶わず、胴を貫かれ地面に縫い止められる。

「今だ！殺れ！」

武器を手放したのを隙と見たのか、蠍は最後の竜種をけしかける。だが、迫る竜種の牙を掴み止めた私は、その牙をへし折り手刀を叩き付け、蹴りで脳天を蹴り砕く。

「バカな！竜種を素手で」

着地した私は、マンティコアの体から剣を抜き、首を落とした。

「くっ」

蠍は短剣を取り出したが、その腕を瞬時に斬り落とした。

「ん？ああ、魔導義手が」

斬り落とした腕から血の一滴も流れないのでおかしいと思ったが、義手だったようだ。

そう言えば以前ティータの神器で腕を斬り落とされたのだったか。

「さて、コレでおわりだな」

「ま、まで！」

蠍の言葉に止まる筈もない。私は黙って剣を振り抜いた。

## 風と炎 (前書き)

お久しぶりです。

ご報告も無い長期休載でご心配をおかけしました。

m ( | | ) m

少々スランプ気味で筆が止まっていたましたが、本日より不定期ながら更新を再開していきたいと思えます。

また、皆様の応援のおかげで本作は【HJ小説大賞2021前期】を受賞させて頂く事が出来ました。

これからも応援よろしく願います。

## 風と炎

エリー姉様と分かれたボクは、オーキスト殿下やルーカス辺境伯が率いる帝国の騎士団や少数の子飼いの手勢と共に、ナイル王国の王都に溢れる悪魔や魔物を排除していた。

「ふっ！」

風を纏ったボクの拳が鎧を身に着けた下級悪魔を吹き飛ばす。

爵位も無いこの程度の下級悪魔や使役されるレッサーデーモン程度では苦戦することなく討伐を進めていた。

ボクの部下は少ないが、帝国騎士と比べても負けない活躍をしている。

ボクが居なくなつた後の事を考えると、此处で使える所を見せておく事が彼らの為になるだろう。

「ちっ、人間どもが！」

「【風刃掌】」

破れかぶれになつて突っ込んで来る悪魔を周囲のレッサーデーモンごと引き裂いたボクに、ルーカス辺境伯が声を掛けた。

「アデル陛下、敵影が濃くなっています。

包囲される前に一度、離脱しましょう。」

「分かりました。オーキスト殿下は？」

「騎士を率いて離脱中です。」

視線を向けると自ら剣を手に、包囲を突破しようとしている姿が

有った。

大陸を二分する……いや、王国が滅亡するのだから大陸のトップに君臨する、か。

そんな大国の皇太子が自ら危険な最前線に立つとは、まあ、ボクも似たようなものか。

「ボクはオーキスト殿下の離脱を援護します。ルーカス卿はボクの手勢と離脱を」

そう提案したが返って来た答えは否だった。

「そう言う訳にはいきませんね」

「危険ですよ」

「はは、仕方ないでしょう。それにアデル陛下の騎士達も退がる気などは到底無さそうですね」

ルーカス辺境伯の言葉を肯定する様に選抜して連れて来た精鋭達が肯く。

彼らの先頭に立ったオルトがそのオオカミの耳をピンと立てて、代表する。

「アデル陛下が戦うと言うならそこが俺たちの戦場だ」

彼は背後から襲い掛かるつとした魔物を視線を向ける事も無く、手にした槍で貫いた。

「良い配下をお持ちですね」

「……………ええ、本当に」

「ではお付き合い致しましょう」

「ルーカス卿も苦勞する性格をしていますね」



「……自覚はありますよ。特にエリー殿と出会ってから」

「ふふ、エリー姉様は昔、お淑やかで淑女の見本なんて言われていたんですよ？」

「想像できませんね。私が大使になってそうしない内にあの事件が起きましたもので」

「まったく、バカな兄がやらかさえしなれば……今更ですが」

ボクとルーカス卿はお互いの諧謔に頬を緩めたのも一瞬に、魔力を凝縮して神器を手にするのだった。

## 風と炎

俺は手にしたフランベルジュ型の神器【鋭き火種】を手にアデル陛下や騎士達と共にオーキスト殿下達に群がる魔物の群れに切り込んだ。

【鋭き火種】は神器としてはスタンダードな物だ。

貴族が一族に伝わる秘伝で会得する神器は、画一的な効果になりやすい。

Aランク冒険者のエルザやエリー殿の様な特殊な効果を持つ神器とは違い、身体能力の上昇と魔法適性が有る属性を強化する様な効果を得ることが多いのだ。

俺の神器も例に漏れず、炎の強化と操作、身体能力の上昇の効果を持つ。

だが、それがエリー殿の神器に劣るのかと言うとそんな事はない。要は神器をどれ程使いこなせるかの問題なのだ。

貴族の多くは神器を習得したと言う看板を得たらもう修練なんてしない。

身を護るのは護衛の仕事なのだから貴族本人が強くなる必要など無いと言う考えだ。

勿論、それは間違いなどでは無い。

だが、俺は常に修練を続けた。

木っ端貴族でしかなかった俺が栄達する道は武勲を上げるのが一番可能性が高い。

ハルドリア王国との国境の領地を任される様になってからは尚更鍛錬を積んだ。

その努力は決して俺を裏切らない。

【鋭き火種】の波打つ刃から立ち上る炎が剣を振り抜く度に剣線に乗って魔物を焼いていく。

更にアデル陛下が拳を放つと暴風の様な風が魔物を吹き飛ばす。そしてその風を受けて俺の炎が更に勢いを増し、火災旋風となり魔物の群れを焼き尽くした。

「はっ！」

硬い攻殻を纏った魔物を焼き切った時、建物の影から不意に飛び出してきた悪魔の剣が迫る。

「む」

咄嗟に【鋭き火種】の柄を上げて剣を弾き、刃を翻して上段から振り下ろす。

しかし、悪魔は身を捻り燃え盛る波刃を躲す。

「レッサーデーモンではないな」

「我は子爵一位、モリス・バルトだ」

「エリー殿が言っていた爵位持ちの悪魔か」

視線だけを向けると、アデル陛下や騎士達の多くも爵位持ちらしき悪魔と対峙している。

オーキスト殿下は距離を取れた様だが、俺たちは悪魔達に囲まれてしまった。

俺はアデル陛下と背中を合わせて構える。

「なかなか危険な展開になってきましたね」

「ふふ、ボクは少し楽しいかな」

アデル陛下は楽しげに笑う。

まあ、その気持ちも分からないではない。

俺はアデル陛下と同時に動き出し、目の前の悪魔へと剣を振り下ろした。

## 風と炎

モーリスと名乗った悪魔は爵位持ちと言つのに相応しい実力者だった。

鋼をも焼き切る俺の【鋭き火種】を最小限の動きで躲し、僅かな隙をも逃さず剣撃を繰り出して来る。

俺たちは周囲の魔物やレッサーデーモンを巻き込みながら斬り結ぶ。

モーリスを援護する様に飛び掛かるレッサーデーモンを斬りつけ、業火で燃やしながらモーリスに向かって蹴り飛ばす。

「むっ！」

モーリスは迫る炎の塊を斬り払うのではなく、身をかがめて躲す事を選んだ。

武器を振る事で隙が出来るのを嫌つたのだろう。

しかし、それ故にその動きを予測するのは簡単な事だった。

【鋭き火種】を下薙にし、石畳みを削る。

斬り裂かれた石畳みから噴き出す様に炎が走る。姿勢を落として逃げ道が無いモーリスが無理やり体を捻るが、左腕を焼き斬り、傷口を高温で炭化させる。

「ぐう」

「終わりだ」

高温で周囲の空間を揺らめかせる神器を振り上げた俺は、地に転がる悪魔の背に振り下ろした。

しかし、俺の斬撃は空を斬り、打ち付けた石畳をドロドロに溶か

した。

何処へ行った

素早く目線を動かすが、モーリスの姿は見えない。

それどころか、アデル陛下や騎士達が対峙していた悪魔や魔物の姿も消えていた。

辺りを見回してもあれだけ居た魔物や悪魔が影も形も無い。居るのは突然戦闘相手が消えて戸惑う騎士達ばかりだった。

「何だい？ どうなってるのかな？」

「アデル陛下！」

「ルーカス卿、魔物や悪魔が突然消えて……」

「こちらもです。とにかく、今の内に隊を立て直しましょう」

俺とアデル陛下はこの不気味な現象に戸惑いながら負傷者の治療と陣形の再構築を指示する。

同時の周囲の気配を探ってみるが、静まり返って街並みが続くだけだった。

「アデル陛下、こちらの部隊は大丈夫です」

「ルーカス閣下、こちらにも再編成完了致しました」

アデル陛下の配下であるエルフの弓騎士と俺の部下の騎士がそう報告してきた。

「さて、騎士達はこれで良いですが……どうしますか？」

「どうしようか？」

アデル陛下と顔を見合わせて眉根を寄せる。

戦える状態になったが、戦う相手が居なくなったのだ。

「オーキスト殿下からも伝令が有りました。向こうの敵も消えたそうです。」

殿下はそのまま一旦離脱してナイル王都の周囲から魔物と悪魔を排除に動くそうです。」

「うん、僕達も離脱するべきか、それともこのままもつと深くまで食い込むか」

今後の動きをアデル陛下と相談していると、不意に強力な魔力を感じ、2人同時に飛びすさり構えを取る。

「おやおやおやおや、なかなか良い反応をされますなあ」

そう言ったのは民家の屋根の上にかがみ込んだ魔族の老人だった。白衣を纏った枯れ木の様な老人は何が楽しいのか楽しそうに笑っていた。

「何者だ」

「ワシの事は蚕とでも呼んでくれれば良いぞい」

「蚕？ふざけてるのかい？」

「いやいやいやいや、ふざけてなんか居ないよお嬢さん。本名なんてもう忘れてしまったのさ」

楽しそうに話す老人は軽く手を振ると、その手に片腕のない悪魔を召喚して見せた。

「アレはモリス」

「ふふふふふ、良いだろう？生きた爵位持ちの悪魔なんて滅多にない素材だろ？」

蚕はモーリスの襟首を掴み、もう片手を掲げて空中に魔法陣を描いて見せた。

その魔法陣からは強大な魔力が感じられる。

「分かるかい？感じるかい？この強大な魔力を。この場に集められた魔物や悪魔の魂を使って作ったんだよ」

ニタニタと笑みを浮かべた蚕は老人とは思えない機敏な動きで気絶しているモーリスを魔法陣に向かって放り投げた。

「さあ、実験を始めよう」



風と炎 (前書き)

お久しぶりです。 | : ( , 「 ) :

## 風と炎

モーリスを飲み込んだ魔法陣が黒い光を放つと、魔力が集まり魔物と人間を混ぜた様な化け物が現れる。

モーリスだったソレは、獣の様な両腕に元の角よりも遥かに大きく禍々しい角、真っ赤に染まった目、真黒に染まった皮膚を持っており、大きく裂けた口からは肉食獣の様な牙が覗き涎がダラダラと流れ出ていた。

その醜悪な姿を見た蚕は感極まった様に涙を浮かべて誰に共なく語る。

「クヒクヒクヒイ、どうだい？ どうだい？ すつばらしいだろう？ 爵位持ちの悪魔を核に神器の顕現過程を参考にした魔力凝縮法で魔力を過剰凝縮したんだ。そこに魔物の魔力が加わるとどうなると思う？」

「これがこたえだよおお！」  
「狂ってるね」

「アデル陛下の一言がこの老魔族を的確に表していた。」

「さあ！ さあさあさあ！ その力をみせてくれえ！ 実践実験の開始だよお」

蚕の命令に従ったのかどうかは分からないが、化物と化したモーリスは俺とアデル陛下へと襲い掛かってきた。

私とアデル陛下は同時に左右へと身を躲す。

そしてアデル陛下はすぐさま轉身して風と魔力を纏った拳を黒く染まったモーリスの胸に叩き込んだ。

「【風華：嵐】」

暴風を伴う打撃を受けてもモーリスは一步も退がる事も無くアデル陛下に鋭い爪を持つ獣の腕を振り下ろした。

一陣の風と共にその場から消えた様に見える程の速さで爪を躲したアデル陛下は、モーリスの背後に回り込み大きく振り上げた足を振り下ろした。

「【風華：断風】」

「真紅の輝きを以てその罪を焼き尽くせ【紅蓮の業火】」

アデル陛下の攻撃に合わせて【鋭き火種】を振るい魔法を放つ。

神器の力で強化された炎属性魔法は通常時を遥かに超える高温でモーリスを飲み込んだ。

「ルーカス卿！」

アデル陛下の声に、反射的にその場を飛び退いた。

俺が立っていた場所には【紅蓮の業火】で燃えながら暴れ回る狼型の魔物の姿が有った。

「何処から現れた？」

「あのモーリスとか言う悪魔から飛び出した様に見えたけど……」

炎に包まれて言葉にならない雄叫びを上げるモーリスから次々に魔物が飛び出して来る。

それも明らかにこの街に溢れていた魔物よりも強化されている。

「グロオオオオ！」

モーリスの慟哭が空気を揺らす。獣の豪腕を振るい炎を振り払う。その体には焼け目一つ付いていなかった。

「あれだけの炎で無傷か……僕の攻撃も効いている様には思えないね」

「ええ、防御力が高いのか、或いはとんでもない回復力が有るのか」  
「もしくはその両方だね」

「それは勘弁して貰いたいですね」

アデル陛下と軽口を交わしている間にもモーリスが生み出した魔物が距離を詰めて来る。

家の高さを超えるジャイアントスケルトンや2つの頭を持つオルトロスの様な強力な魔物、更には鎧の様な鱗に包まれた狼や無数の腕を生やしたムカデの様なアンデッドなど、見た事の無い魔物まで混ざっている。

蚕とか言う老魔族は民家の屋根の上で歓喜の声を上げていた。

「すつつつばらしいいいい！ 幾つもの魔物の魔力を統合し上位種だけでなく新種の魔物まで

作り出すとは マアアアベラッス！」

「マッドアルケミストと言うやつか」

「僕、あいつ嫌いだな」

こちらの事など眼中に無いかの様に悍しい姿のモーリスをキラキラした目で見る蚕、それを睨み付ける俺達に振り下ろされたジャイアントスケルトンの拳をアデル陛下の部下の獣人が両手の槍で打ち砕いた。

エルフの弓兵の放った矢がオルトロスの4つ有る目の3つを潰し、俺の配下の騎士達も剣を抜いて魔物を迎え撃つ。

「陛下、ルーカス殿！ 魔物共は我々が押さえます！」  
「今のうちにあの悪魔を！」  
「と言う訳で僕達はアレの相手だね。ルーカス卿」  
「その様ですね。アデル陛下」

## 風と炎

部下達が魔物と切り結ぶ中を俺とアデル陛下は駆け抜ける。時折り抜けて来る魔物を一蹴し、モーリスに肉薄する。

しかし、今のモーリスは物理も魔法もほとんど効いていなかった。すれ違い様に【鋭き火種】を振るいモーリスの黒い肌を斬りつけるが、まるでミスリルでも斬っているかの様な感触だった。

「……硬いな」

入れ違いになる様に飛び込んだアデル陛下はそつとモーリスに触れる。

「【風華：木枯し】」

アデル陛下の触れた場所に強い衝撃波の様な物が放たれた。アレは確か南大陸の体術の一種だっただろうか。

体内で圧縮した魔力を撃ち出す技があると聞いたことがある。周囲の建物や石畳を砕く程の衝撃だが、モーリスにはその巨体を僅かに揺らしただけであまり効いている様には見えない。

「硬いと言うのは違うね。まるで中身が詰まった砂袋を攻撃したみたいな感触だ。重いつて言うのかな？」

アデル陛下の言わんとしている事は何となくだが理解できる。

「蚕は、あのモーリスの成れの果ては神器を生成する際の魔力の凝縮過程を利用して作られたと言っていた。」

つまり生物の様に見えるが、その性質は神器に近いのかも知れませんが」

「どう言う事だい？」

「神器は魔力を扱う者の到達点です。その強度や性質は魔法と同じく術者の精神力に依存します。」

同等の練度の術師同士の神器を単純に比較すると、より精神力の高い術者の神器の方が強靱になると論文で読んだ事があります。つまり、あの体表の魔力構成は……」

「長い！ もつと簡単に！」

「奴を形作っている魔力より強い魔力で攻撃すればダメージを与えられるかも知れません」

「わかった！」

俺の推論を聞き、アデル陛下は突風で地面を巻き上げてモーリスの視界を遮った。

「グオオオオオオ！」

モーリスが滅茶苦茶に腕や足を振りまわし暴れ回るが、俺とアデル陛下は既に距離を取っているので、当たる事は無い。

「焼き尽くす猛火 真紅の吐息 命を飲み込む溶撃の熱波 炎熱纏

いし我が名は火蜥蜴【灼熱の息吹】」

「打ち砕く疾風 斬り裂く吐息 命を飲み込む破撃の突風 旋風纏  
いし我が名は嵐鳥【暴風の息吹】」

俺とアデル陛下は土埃が晴れると同時にモーリスを挟み込む様に  
上級魔法を放った。

真っ赤な炎と荒れ狂う暴風を受けてモーリスの黒い表皮は融解し、  
斬り刻まれる。

「効いてる！ ルーカス卿、このまま畳みかけるよ」

「お供しますとも、アデル陛下」

貴族として、領主として生きてきた俺だが、今はまるで冒険者の冒険譚の様だ。

仲間と共に強大な敵に立ち向かう。

不謹慎だが、俺はアデル陛下と共闘するこの瞬間を楽しんでいると感じていた。



風と炎 (後書き)

お久しぶりです。

ゆっくりですが、活動を再開したいと思います。  
よろしくお願いします。

— : ( , ' ( ) :

## 風と炎

モーリスの傷口を開いていく様に攻撃し、少しずつ削ってゆく。その最中、相変わらず屋根の上でこちらを観察している蚕の様子を窺い見るが、モーリスが劣勢になるうとも加勢したり、逃走したりする事もなく目を不気味に輝かせていた。

「む  
」

怒濤の攻撃に晒されたモーリスだったが、急にダメージが減った。アデル陛下もそれに気がついたのか、こちらに寄って来た。

「ルーカス卿、どう思う？」

「ダメージが通っていないと言うより回復力が上がった様に見えるですね」

「回復力か。能力のリソースが回復力に回されたのかな？」

「そんな事が可能なのでしょうか？」

「あの化け物が神器と同じ原理なら可能だと思う。どう見ても理性なんて残っていないだろうから、本能的な物だろうね」

「では対処法は一つですね」

「うん。より強い技を叩き込む。僕に良い考えがある」

アデル陛下の提案を聞いた俺は難色を示した。

「危険です。失敗したらアデル陛下はただでは済まない」

「構わないよ。どうせ毒杯を賜る身だからね。なら最後に武人として自身の限界を試してみるのも悪くは無いさ」

「……………」

自棄になっている訳では無いのだろう。

アデル陛下の目には不思議な開放感が満ちていた。

王族の重圧や責任をその小さな肩に請け負って生きて来たのだ。

俺やエリザベート嬢の様な貴族とは違う。

王家と言う立場に生まれたが故の苦しみがあったのだろう。

「分かりました。やりましょう」

そう答えるしかなかった。

俺は【鋭き火種】を掲げる。

波打つ刃から炎立ち昇る。

「【紅蓮斬】」

放たれた猛火の斬撃はモーリス……ではなくアデル陛下へと迫る。

緊張と高揚を混ぜ込んだアデル陛下の笑顔は美しかった。

俺の炎がアデル陛下を包み込む。

もし失敗すればアデル陛下の命は無い。

「グルルウ！」

炎の柱に気を惹かれたのか、モーリスが迫り腕を振り上げる。

傷は既にほとんど回復していた。

「ギエエエ」

モーリスが身を竦める程の叫びを上げる。

見れば振り上げた腕が焼き切れていた。

「うん。なかなか悪くないね」

炎の中からアデル陛下の声が聞こえた。ゆっくりと炎の中から歩み出てきたアデル陛下は、燃え盛る羽織りを身に纏っている。

俺の炎の魔力を自らの神器に取り込み、自身の風の魔力を加える事で更に強力な力に変えている。

他人の魔力を取り込む魔法。これは中央大陸には無い南大陸の魔法技術だ。

「【風華：炎帝】とでも名付けようかな」  
「グルルウ！」

モーリスが残った腕を引き絞りアデル陛下に向かうが、アデル陛下は軽く腕を振るい猛火がモーリスを飲み込む。全身を焦がしたモーリスに旋風を纏ったアデル陛下の拳が突き刺さり、内部から炎で焼き尽くす。

「アガアアア！」

圧倒的な魔力でモーリスをチリも残さず燃やし、それと同時にモーリスが生み出した魔物も崩れて去った。

アデル陛下は神器を消すと膝を突く。

「アデル陛下！」

慌てて駆け寄り抱き起こす。

「大丈夫だよ……ルーカス卿の魔力を無理やり取り込んだ反動だ」  
「今は安静に」

アデル陛下を抱えながら残った敵、蚕の方を見遣る。

「くふふふ、残念、残念、残念。でも良いのですよ。私は失敗したのでは有りません。」

次の成功の為の布石を打ったのです」

「次など無い！」

残った魔力は僅かだ。小さな【火球】を放つのが精一杯。

俺の魔法は蚕の防御魔法で簡単に弾かれてしまう。

「きひひ」

蚕は不気味に笑いながらスクロールを取り出す。

「逃がすか！」

アデル陛下の配下のエルフの女性が矢を放ち、獣人の槍使いが蚕に飛びかかるが、僅かな差で蚕は転移してしまった。

「逃がしたか」

「アデル陛下！」

「大丈夫、気を失っているだけだ」

俺は残っている自分とアデル陛下の配下をまとめ、この場を離脱する様に指示を出し、自らもアデル陛下を抱き上げて撤退を開始した。

## 黒き戦斧

side ユウ

「アリスちゃん」

あのイーグレットと言う男が手にしていたシヤムシールの切っ先がアリスちゃんの胸から鮮血を滴らせながら生えています。

不味いですね。アレは致命傷です。

わたしはとつさに腰の魔法薬に手を伸ばしました。

この魔法薬ならまだ間に合います。

「ああああ、敵を前によそ見をするなんて。一流の冒険者失格よ」

ほんの直ぐ近く。少し手を伸ばせば触れる程の距離から鳥の声がありました。

ゾワリと背筋を冷やす感覚に従い戦斧を振り上げると、鳥はいつの間にか手にしていたタルワールで受け止めてました。

更にわたしが無理やり振り抜こうと力を込めたタイミングに合わせてタルワールを手放し掌底を繰り出してきました。それを片手で掴み止めると、掴んだわたしの腕を巻き込む様に身を反転させ、わたしを投げ飛ばしました。

「くっ！」

強いですね。しかし、どうにかアリスちゃんの所に行かないと！

「向こうが気になるなら此処から離れましょうか？」

わたしの肩を抱く様にしながら鳥が言います。

速い？ いえ、有り得ません。いくら何でもわたしが知覚出来ない程の速さ何て……まさか

「しまっ  
」

「【転移】」

一瞬の視界の揺らぎの後、わたしと鳥は街中の広場に投げ出されました。

「空間転移魔法ですか」

異空間に閉じ込めるタイプではなく現実の場所を移動させる魔法ですね。

視界の隅にさっきまでいた王宮が見えます。最悪です。

物理的に距離を離れてしまいました。これではアリスちゃんの治療に間に合いません。

「今すぐわたしを王宮に戻して下さい！」

「くすくす。嫌だと言ったら？」

「時間が有りません。力尽くでも戻して貰います。神器【終結の戦斧】」

魔力が凝縮され、わたしの身の丈をも超える漆黒の戦斧となりま

す。王宮まで走ったとしてもまた【転移】で戻されてしまっ

ては意味が有りません。この場で鳥を倒してアリスちゃんの治療に向かわないといー！

「出し惜しみはしませんよ」

「面白いじゃない」

烏は娼婦か踊り子の様な扇情的な服装に顔を隠すベールと言う奇妙な格好をしています。

しかし、突然そのベールに手をかけ投げ捨てたのです。

その下から現れたのは実に妖艶で美しい顔でした。黒い眼球に白い瞳、側頭部から生えた巻き角。

「貴女も悪魔でしたか」

「ふふふ、伯爵一位スカレット・アマリリス。烏と名乗る前はそう呼ばれていたわ」



## 黒き戦斧

伯爵一位。悪魔の階級を示すものですが、伯爵一位はかなりの高位悪魔です。

悪魔の爵位は生まれや血縁で決まる物では無いと聞きます。

力で奪い奪われるその爵位が示すのは、目の前の悪魔の実力と言う事ですね。

「ふふふ、【転移】」

烏……いや、悪魔スカーレットが再び【転移】の魔法を唱えました。

逃げる気かと思いましたが、わたしは直ぐに思い違いに気付きました。

「っ  
」

突然影が差したかと思うと、上空から石造りの建物が降ってきたのです。

スカーレットは空間転移魔法で建物を私の頭上に転移させたのです。

「【月刃】」

わたしは咄嗟に【終結の戦斧】トオクセを振り抜き、魔力を刃に変えるスキルを放ち大きな石造りの建物を両断しました。

「凄いわね。一振りで見つ二つにしてしまうなんて」

「くっ  
」

直ぐ後ろからスカーレットの声が聞こえました。  
転移で私の背後を取ったのでしよう。

振り向き様に【終結の戦斧】の刃が漆黒の軌跡になってスカーレットの首を刎ねようとはしますが、直前でスカーレットの姿が掻き消えてしまいます。

「ふふふ、怖いわあ」

離れた場所に有る瓦礫に腰を掛けたスカーレットがわたしを挑発するようにニヤニヤと笑います。

転移魔法、本来ならとても高度な魔法で、こんな風に詠唱や魔法陣も無しに連続で使えるものでは有りません。それをなすスカーレットは流石、高位悪魔と言えるでしょう。

「ふう！」

わたしは【終結の戦斧】の端を握り、大きく振り回してスカーレットに向かって投げつけました。

魔力を込めた神器の一撃は投げつけただけでもかなりの破壊力があります。

轟音を上げて破壊を撒き散らしたわたしの神器ですが、スカーレットは既に転移でわたしの背後に迫っていました。

「あら？ 自棄になっちゃったの？ 自分の武器を手放すなんて」  
「そんな訳がないでしょう」

振り向いたわたしの両腕には赤い刃と青い刃の斧が握られています。

マジックバッグに収納していた斧です。

【終結の戦斧】の3分の1程の長さですが、近接戦ではこの位の長さの方が良いのです。

「燃え尽きて下さい」

赤い刃の斧をスカーレットに叩きつけます。

扇で受け止めようとしたスカーレットですが、わたしに斧から放たれた炎がその身を包み込みました。

炎の中から飛び出してわたしから距離を取ろうとするスカーレットに、今度は青い刃の斧を地面に叩きつけました。地面を走った魔力はスカーレットの足下から吹き上がり、瞬時に氷の刃を生み出しました。

この双斧は《シンデレラ灰被り》と《スノーホワイト白雪姫》。炎と氷を生み出す魔法武器です。

「【転移】」

スカーレットは間一髪、少し後ろに転移して躲します。しかし、咄嗟の転移だったからか、現れたのは地面の少し上です。

わたしはスカーレットが着地するわずかな時間を狙い、マジックバッグから取り出した黒い刃の短刀を投擲しました。

短刀の狙いはスカーレットの急所……ではなく、彼女の影です。

「神器【終結の戦斧】」

投げつけた神器を一度消して再び生成します。

魔力の消費は激しいですが、わざわざ拾いに行く暇はないので仕方ありません。

「ちっ  
」

【終結の戦斧】を振り上げたわたしから身を躲そうと、咄嗟に体を翻そうとしたスカーレットでしたが、体が動かない様です。わたしが投擲した短刀《影縫の刃》ヤタガラスは影に突き刺す事で相手の動きを止める魔法武器です。

「貴女はわたしを舐めすぎです」

動けないスカーレットに、渾身の斬撃をお見舞いするのです。

## 黒き戦斧

わたしの渾身の一撃は周囲の建物を倒壊させた上、地面には大きなクレーターを作りました。

「仕留め損ないましたか」

魔力を感じる方に振り向くとギリギリで躲したスカーレットが立っています。

しかし、無傷と言う訳では有りません。

左肩から深い裂傷が走り、鮮血を撒き散らしていました。

「謝るわ。確かに私は貴女を侮っていた」

スカーレットの傷口から噴き出る血の勢いが弱くなりました。

治癒魔法では有りませんね。おそらく魔力で傷口を覆った応急処置でしょう。

その姿は満身創痍。ですが、先程までの戦いを楽しむ雰囲気は消え去っており、優雅さや妖艶さが成りを潜め戦士として一分の隙もなく構えています。

「さっきので仕留められなかったのは痛いですね」

これは叩きのめして【転移】を使わせると言うのは無理そうです。スカーレットの顔は覚悟を決めた者の顔です。わたし達の何方かの命が尽きるまで戦う気でしよう。

わたしはスカーレットから目を離さない様にしながら、足下に転がっていた《影縫の刃》を蹴り上げて左手に取ると、そのままマジ

ツクバグにしまい、別の武器を取り出しました。

その武器は鮮やかな翠の刃を持つ鉞です。

これも当然魔法武器で銘は《雷鳴の鉞》。

左手では《雷鳴の鉞》を逆手に、右手では【終結の戦斧】を短めに持って肩に担ぐ様に構えます。

「しっ！」

身を低くしたスカーレットが、地面を滑る様に間合いを詰めます。スキルの【縮地】とは違う奇妙な歩法です。

《雷鳴の鉞》から放たれた紫電が走り、スカーレットを迎え撃とうとしますが、あの妙な歩法は何と雷を全くスピードを落とす事なく避けたのです。

肩に担いでいた【終結の戦斧】をクルリと回して地面を削る様に振るいます。

砕けた石畳が礫となってスカーレットに向かいます。

攻撃速度でダメなら面制圧です。

「【転移】」

スカーレットが転移魔法を唱えました。

また背後に回るつもりか！と振り向きそうになりましたが、スカーレットが転移したのは自分の１メートル前方。瓦礫の礫を飛び越える様に転移したのです。

「このー！」

横薙に振るった【終結の戦斧】。完全に捉えたと思いましたが、しかし……。

「【転移】」

今度はわたしの攻撃をすり抜ける様に一瞬の転移を行ったのです。

「死ね」

スカレットのタルワールがわたしの首を刈り取ろうと振るわれますが、そう簡単にわたしの首はあげられません。

【終結の戦斧】を消し、間を置かず直ぐさま再生成。

タルワールを受け止めたわたしは、カウンターで《雷鳴の鉦》を振るいますが、身を翻して躲し、同時に蹴りを放って来ますが、これはわたしも蹴りで受け止めました。

お互いに跳び退がり再び睨み合いの格好になります。

あの攻撃をすり抜ける様な短距離転移は厄介ですね。コスパも良さそうですし。

仕方ありませんね。奥の手を使うしか無さそうです。

《雷鳴の鉦》を手離したわたしは、マジックバッグから1本の薬を取り出しました。

「すみません、エリーさん。わたしは此处でリタイアです」

アリスちゃんの事はエリーさんが如何にかしてくれると信じるしか有りません。

わたしは、取り出した薬瓶の蓋を指で弾き開け、一息で飲み干しました。

## 黒き戦斧

空になった薬瓶を投げ捨てた私に、スカーレットが迫り、後一步で【終結の戦斧】の間合いに入ると言うところで、予備動作もなく背後に転移しました。

しかし、わたしはスカーレットが背後に現れた瞬間に反応し【終結の戦斧】の柄を胴に叩き込みました。

「がっは！」

怯んだスカーレットの腕を掴み、片手で振り回して瓦礫や石畳に叩きつけます。

「ぐっ！ 【転移】」

掴んでいた感触が消えた瞬間に駆け出し、転移先で体勢を立て直す前に追撃を叩き込むのです。

「何っ」

わたしの速度に驚くスカーレットを逃がさない様に踏みつけ、【終結の戦斧】を振り上げて魔力を込めます。

「【遍断ち】」

わたしの最大威力のスキルです。いくら伯爵一位の悪魔でもまともに受ければ只では済まない一撃です。

ですからコレに耐えられたのは意外でした。わたしはまだ僅かに



息が有るスカーレットが反撃の為か、はたまた逃走の為か、魔法を使う気配が有ったので妨害する様に蹴り飛ばすと、近くの建物にめり込み止まりました。

「がっ…………ば、化物め…………」

「悪魔に言われたく無いですね」

「何を…………した？ その力は、ごほっ…………人間の範疇を、超えてい…………る」

「ドーピングの様な物ですよ」

わたしは先程飲み干した薬と同じ物を取り出して揺らしました。この薬は一時的に身体能力を爆発的に上昇させる霊薬《神薬》です。

わたしの魔力に合わせて作った物ですから他人には使えませんし、副作用が強いので使い辛いのです。

「ふふふ…………『漆黑』か…………いずれ、Sランクに…………到達すると、言われる…………訳ね」

「わたしを元の場所に転移させるなら治癒のポーションを差し上げましょう」

「…………殺しなさい」

「そうですね」

【終結の戦斧】を一難してトドメを刺したわたしは、王宮の方に足を向けたのですが、駆け出す前に全身から力が抜けて倒れ込んでしまいました。

「じ…………かん切れです…………か」

舌も痺れて来ましたね。

《神薬》の副作用です。半日はまともに動けませんし、動ける様になっても戦闘は無理です。

やはりわたしは此处でリタイアですね。

あの悪魔の目的は不明ですが、高位の悪魔が命懸けで動いているのですから、何か大変な事が起ころうとしているのかも知れません。

黒き戦斧（後書き）

宣伝

新作『これが私の生存戦略』

公爵家に引き取られた庶子の少女リリアの激動の人生（予定）

襲いくる貴族の魔の手（誇張）

リリアの生き残りを賭けた貴族生活が始まる（多分）

見切り発車で連載中。

## 女神の代行者

大鎌と剣。一撃一閃がお互いの命を奪うのに十分な力を持つ攻撃の応酬を交わしながら王宮の中庭まで直進して来た。道中の壁やら柱やらを斬り裂きながら走ったので少し倒壊してしまったけど仕方ないツスよね。

悪いのは全部アルトロスって事でオツケーツス。

「私は伯爵二位アルトロス・イザリース。女、以前は名を聞いていなかったな」

「……イブリス教枢機卿ティルダニア・ノーチラス」

「ティルダニア。お前は何故戦う」

「はあ？ こんなあからさまな悪事を見逃す訳ないじゃないツスカ」「悪事か……私は私の目的の為に行動している。その為に悪事を為さねばならないなら迷いはしない」

「目的ツスカ。《冥界の夜明け》の目的なんて人間界の支配だったツスね」

「《冥界の夜明け》など人間界に来る為に利用したに過ぎない」

「別の目的が有ると言うんツスカ」

「ああ、私の目的は魔神を封印する為に残ったスーリスを取り戻す事だ」

「スーリス？ イブリス教の聖女スーリスの事ツスカ」

「そうだ」

「1500年前の人物ツスよ。とつくに死んでるツスよ」

「精霊城は時の流れの外に有る。生きている可能性は十分に有るさ」

「でもそれをすれば魔神が復活するんツスよね」

「彼女を取り戻せるならその様な事は些事だ」

ああ、コレはダメツスね。

絶対に譲らない目をしているツス。

私だって悪魔にも友好的な存在が居る事は知っている。

以前、問答無用で攻撃したのはアルトロスが《冥界の夜明け》のメンバーだと思ったからだ。

《冥界の夜明け》ではないなら和解も視野に入れるつもりだったが、無理そうツス。

イブリス教の聖女と悪魔がどんな関係なのかは置いておくとして、諦めて魔界に帰ってくれないものツスカね？

「まあ、無理っぽいツスね」

「私は退くつもりは無いさ」

私は大鎌を、アルトロスは剣を構え、睨み合う。

少しの間静寂が流れ、瓦礫が落ちる音を合図に大鎌と剣が撃ち合う音が再び鳴り始めた。

## 女神の代行者

私の神器【神の恵みを刈り取る刃】の能力は斬り殺した相手の魔力を吸収すると言う物。

多くの敵を相手にする場合には強力だけど、一対一の戦いではただの鋭く頑丈な大鎌になってしまうツス。

それに対してアルトロスの剣はおそらく自身の魔力を適性属性以外の魔法に変換出来る能力を持つ魔法武器でしょう。実に卑怯ツス。アルトロスが剣を振る度に炎の刃や風の刃、地面に剣を突き刺せば岩の棘や氷の刃が繰り出される。

それを【神の恵みを刈り取る刃】で打ち払えば多少の魔力を吸収出来るんツスけど、この程度では身体強化や自己治癒の足しにもならない。

「伯爵二位って嘘ツスよね？ 前に侯爵二位の悪魔と戦った事が有るツスけど、あんたは明かにあの悪魔よりも強いツスよ」

正確に言うと私は遠くから援護していただけで、侯爵二位の悪魔と直接戦ったのは私の師匠であり、先代の枢機卿の一人ツス。

「私は爵位に興味など無いからな。目的を果たすには伯爵二位の爵位が有れば十分だ」

「そーツスカ！」

大鎌を大振りに振るい少し距離を開ける。

「【聖槍】」

聖なる光を槍として放つ魔法だ。低級悪魔なら掠っただけで消し炭に出来る魔法だが、アルトروسは黒い霧を纏わせた剣の一振り打ち払ってしまった。

「【闇】」

剣の切っ先を私に向けると、黒く鋭い魔力が放たれる。

「【聖壁】」

咄嗟に防御魔法を使うが、アルトروسの黒い魔力の刃は聖なる光の壁を切り裂く。

「深淵属性魔法ツスか」

深淵属性は闇属性の派生属性。風属性の派生属性が雷属性である様に、基礎属性の闇の派生属性だが深淵属性は人間には扱えない属性ツス。対照的に光属性の派生である聖属性は悪魔には使えない。でも浄化や治癒に強い力を発揮する聖属性と違い、深淵属性は破壊のみに特化した属性ツス。  
正面からぶつかり合うには分が悪い。

アルトروسは私の僅かな意識の隙間を縫う様に間合いを詰める。

「っ」

「【炎】」

燃え盛る炎を纏った剣を上段から振り下ろし、私を両断しようとするアルトروسだったが、なんとか反応できた私は、純白の大鎌の柄を間に滑り込ませ受け流す。

「ぐっ」

しかし、反撃は許されず蹴り飛ばされてしまう。

崩れた王宮が瓦礫の様になっていいる中に叩きつけられた。

魔力で強化してなかったら死んでたツスよ。

「……やはり、私の神器ではタイムンはキツイツスね」

「ならそこで大人しくしている。邪魔をしないならわざわざお前の命を奪うつもりは無い」

「いやいや、魅力的な話ツスけど、そう言う訳には行かないツスよ」

瓦礫の山から這い出た私は、ボロボロになってしまった修道服の袖を千切り捨てる。

「むっ　その腕は……まさか、お前は……」

アルトروسは私の左腕の痣を見て驚いた様に見開いた。コレを知っているって事ツスか。

「そう言えば聖女スーリスも私と同じだったって言い伝えがあるツスけど、本当ツスか？」

「……ああ」

「そうツスか」

なる程、言い伝えは本当だったんツスね。1500年前、聖女スーリスと共に魔神と戦ったのならアルトروسが知っていても不思議は無いツス。

私は自身の左腕の痣、聖女スーリスと同じ女神の代行者の証《聖痕》へと指を這わせる。



「主よ、代行者たる我に御力をお貸しください」

## 女神の代行者

左腕の痣が半身にまで広がり、引き出された女神の力の片鱗が魔力となり、凝縮し私の背中で二対四枚の白い翼となり、更に余剰魔力が頭上で光り輝く輪となって浮遊する。

「お待たせしたツスね。さあ、戦いを再開するのでしょうか」

「ああ、二対の翼に加えて聖輪まで顕現させるか。スーリスでさえ魔神との決戦で力を振り絞り可能だった事を、こともなげになすとは、私は貴殿を少々甘く見ていたようだ」

「いやいや、女神様の力は矮小な人の身には余る物ツス。私もこの状態はあまり長くは持たないので油断していてくれて良いツスよ」

私の諧謔を無視してアルトروسはその姿をかき消す様に背後に回り込み、魔法武器《全一》を振り下ろす。

しかし、その剣は金属の様な音を立てて翼で受け止めた。

この翼は女神様より与えられた莫大な魔力でできているので、あの意味では神器の様な物だ。そう簡単には斬り裂く事は出来ない。

私は翼を震わせると、無数の羽根を雨の様に飛ばす。

「くっ  
」

アルトروسは腕を交差させて急所を守るが、この物量を全て防御する事など不可能。

その上、この羽根一つ一つが聖属性の中級魔法並みの威力が有る。

私は【<sup>ハーベスト</sup>神の恵みを刈り取る刃】を手に翼をはためかせ、アルト

ロスの方に突進した。アルトروسは咄嗟に地面を砕き上空に跳び上がるが、私も翼を翻して羽ばたき後を追う。

アルトロスと交差する際に大鎌を振るい、奴の脇腹を斬る。

胸を真つ二つにしてやるつもりだったツスけど、流石の反射神経ツスね。

アルトロスは自身で治癒魔法を施しているが、どうやら彼の本来の適正属性は闇属性らしく、治癒力は大した事はない。

アルトロスが回復している間に攻撃するべきか悩むが、あまり時間もないので此処は一気に畳み掛けるツスカ。

私は【神の恵みを刈り取る刃】を振るい、私の周囲に舞う羽根を斬り裂いて行く。

強力な魔力が込められた私の羽根から神器に大量の魔力が流れ込んできて、大鎌に蓄えられている魔力が限界を迎えた。

それでも羽根から魔力を吸収すると、私の真つ白い大鎌が黒く染まる。そして全体が真つ黒に染まった大鎌を数回振り回して感触を確かめる。

これを使うのは久しぶりツス。

私の白い大鎌の神器は不完全な物。完全な状態にするには私の魔力が足りないのだ。

故にあの神器は他者の魔力を吸収する能力をもっていた。

だが女神様の力を借り受けた今、こうして真の力を使う事が出来る。

「神器【ハーベスト・カーニバル神に供物を捧げし刃】」

## 女神の代行者（後書き）

お気に召して頂けたら評価、コメントなど貰えると、作者のモチベーションが10ポイントくらい上がります。

他の作品も宜しくお願いします。――、（）、（）：

『これが私の生存戦略』

『薬師のユウさん』

新作短編『手の平の上の婚約破棄』New

## 女神の代行者

【神に供物を捧げ得る刃】はその黒い刃に込められた膨大な魔力を攻撃力に変換する。

一振りすれば衝撃波となり王宮を斬り裂き、翼の羽ばたきと同時に距離を詰めて振るえば、剣で受け止めたアルトロスを引き飛ばし、無事だった王宮の塔の一つを瓦礫に変える。

「【炎】」

瓦礫の山となった場所から飛び出したアルトロスが切っ先をこちらに向けて炎を放つが、翼の一振りで掻き消す。

「良い加減に沈むツスよ」

大鎌の柄を振り上げ、刃の袈裟懸け、横薙ぎ、逆袈裟、そして全身を回転させて再び横に大きく薙ぐ。

「ぐおおおお！」

アルトロスは剣を盾に私の大鎌を受けたが、この大鎌は魔力を破壊力に変換する。

強力な魔法武器で有ろうと、女神様の力を借り受けたことで、文字通り人外の領域に達した私の攻撃を受け続けることは出来なかった。

刃が砕けた剣を投げ捨てたアルトロスは、全身に魔力を巡らせ身体能力を強化すると、防御を捨てて捨て身で私の懐に飛び込んで来た。

これらの動きはちょっと予想外だったツスね。

「私は！ こんな所で終わる訳には行かない！」

「うぐっ」

アルトロスの渾身の一撃は、反射的に放った羽根の攻撃を受けながらも私の胸に突き刺さる。

彼が聖女スーリスの為に戦っているのは理解出来るツスけど、その為に世界を危険に晒す事は出来ないツス。

私の頭上の聖輪は余剰魔力を使って身体能力を上昇させ、受けた傷を治癒する効果がある。

その防御力を貫通してダメージを受けるなんて、まともに食らっていたら死んでいたかも知れないツス。

しかし、私もタダではやられないツスよ。

攻撃を受けた時に大鎌の刃をアルトロスの腕に添え、斬り落とすていた。

大鎌を再び担ぐ様に構えた私と、斬り落とした腕から流れる血を無視して拳を握るアルトロスが対峙する。

向こうのダメージは大きい。

私のダメージは聖輪により徐々に回復している。

この差は大きいツス。

張り詰めた空気が限界を迎え、お互いに踏み込もうとした瞬間、強大な魔力の噴出に私とアルトロスは同時に身を竦める。

反射的に魔力の方に目を向ける。

戦闘中に悪手だが、アルトロスも同じ方向に顔を向けていた。さつきまで私達がいた王宮から異常な魔力が立ち昇っている。

この魔力は……。

「エリーさん？」

## 人造精霊アリス

イーグレットが手にするシャムシールがアリスの胸を貫いた。

心臓の位置だ。どうみても致命傷。今すぐ強力なポーションで治療しなければ間に合わない。

【縮地】で踏み込み、イーグレットの首を落とす様にフリーユージェルを振るうが、足の力を抜き倒れ込み様に躲される。カウンターとして繰り出された突きを避ける為に顔を逸らすが頬を僅かに斬られてしまう。

反撃されるのは想定外だったが、この攻撃で殺せるとは思っていない。

体勢を崩したイーグレットの腕からアリスの胸を抱える様に奪い、再び【縮地】で元の位置まで退がる。

「ははは、そんなに慌てなくても返してあげるさ」

何が楽しいのかイーグレットが私を見て笑うが、今はそんな事に構ってられない。

私がイーグレットから視線を外すと同時にシスティアが私とイーグレットの間に立ち警戒する。

「アリス！」

「ま……ま？」

早くポーションを！

アリスの服を捲り傷口を確認する。

「な、何？ これはどう言う事なの」

アリスの傷口には僅かな血が着いているものの、そこから溢れているのは血では無く魔力だった。

明らかに致命傷の筈だが、アリスからは僅かな出血しかない。これならまだ保つかも知れない。

私は急いでポーションを半分傷口に掛け、残りの半分を口に含んでアリスに口移しで飲ませる。

これによってアリスの傷は塞がったが、魔力の流失が止まらない。取り敢えず私の魔力でアリスの魔力を抑え込む様に包んでみるが、勢いが弱まるだけで流れ出る魔力を止めることは出来ない。

「くくく、どうだ？ 完璧だろ？」

「どう言う意味？」

イーグレットを睨み付ける。イーグレットはアリスを抱き抱えた私を嬉しそうに見つめ返してきた。

「言っただろ？ アリスは人間じゃない。いや、人間じゃなくなつたと言つべきだな。」

アリスは人造精霊だ。子供に俺の魔力を植え付け、高ランクの魔力の体内で強力な魔力に晒す事で精霊化させる。しかし、これは未完成で今までの実験体は魔力に適応出来ずに死んだ。

だが、エリー。キミのお陰でアリスは完成した。おそらくキミの魔力を大量に浴びたのだろう。」

その言葉に、アリスと出会った時の事を思い出す。

あの時、変異種の魔物を倒す為に、私はブライトに神器をコピーして強力な雷の魔法を使った。

あれは確かに私の魔力だ。



「私の魔力が……」

「正確にはキミの魔力に宿る『イブ』の力さ」

「『イブ』？」

「ああ。現在、天界を治める女神。かつてイブと呼ばれた者の力だ」

人造精霊アリス（後書き）

他の作品も宜しくお願いします。――、、（）：

『これが私の生存戦略』

『薬師のユウさん』

## 失われた神話

それは一冊の本だった。

ナイル王国の書庫の奥、最早誰も足を踏み入れない様な古い記録が整理される事もなく乱雑に積み上げられている場所で、一人の少年が一冊の本を夢中になって読んでいた。

魔族の角にエルフの耳、獣人の尾を持つその少年はこの国の王家の末っ子として生を受けたのだが、その生活は不幸では無いが、幸福とも言えない物だった。

王族としての地位と高い魔力を持つ為、冷遇されている訳ではなく、また両親や兄妹からも愛情は受けているが、そこには目には見えない壁があった。

混合種で有る少年は、どの種族にも属さないが故に孤独であった。そんな少年が手にしているのは既に神話と呼ばれる様になって久しい歴史の記録。

遙か昔、『イブ』と言う一人の少女が居た。

慈愛に満ちた少女は人々の為に身を粉にして働き、人々もそんな少女を愛した。

ある日、大きな災害が起きて大地に異常な魔力が溢れた時、少女は自らの身を器にその魔力を抑え込んだ。

その結果、少女は精霊となった。

そして死後、今はその名も忘れられた古の神々により天界に招かれた少女は、この世界から旅立つ神々に代わり、この世界を見守る役目を与えられ女神となったので有る。

そして、少女が神となった時。

存在が変質する時にこぼれ落ちた力は幾つかのカケラになって少

女が愛した人々の魂へと宿った。

それが『イブ』の力。

『イブ』の力は世代を超えて人々の魂を渡り歩き、様々な恩恵を与えた。

世界の歴史に稀にあらわれる希代の天才や英雄として、あるいは世界に危機を齎す脅威として時たま歴史に顔を出す。

本を閉じた少年はその目を輝かせる。

少女の生き方に感動し、その愛に心を震わせ、世界の命運を左右する力に畏れ慄いた。

幼き日の憧憬は次第に歪んだ憧れとなり、人の身でありながら天界へと至ると言う目標を抱く様になる。

自らもまた『イブ』の力を宿す少年は、天界と人間界の間に存在する精霊城に封じられた魔神の復活を目論む悪魔と、倫理観を持たない知識の探求者で有る魔族の錬金術師と出会う事で、その目標に向う速度を上げる事になった。

そして今、青年となった彼はその目標に手を掛ける所まで来ていた。

距離は有った物の、確かに愛してくれた家族や生まれ育った国、守るべき民を犠牲にして天界へと繋がる道を開いた。

目的は違うが、同じ道を目指す強大な悪魔の英雄の力も利用し、ここ迄来た。

目の前で魔力を吐き出す自らが作り上げた人造精霊。

そして青年と同じ……いや、更に大きな『イブ』の力を宿す女。

あと一歩。

あと一歩なのだ。

夢の実現を目前にした青年は心の底から湧き上がる歓喜を笑みで表して足を踏み出す。

「さあ、これで仕上げだよ、エリー。キミの『イブ』の力を頂く…  
…俺の為に死んでくれ。神器【クレセント・ムーン三日月の夜】」

イーグレットが神器であるシャムシールを生成した。両手にシャムシールを構えたイーグレットは私を殺すと宣言した。それと同時にアリスを中心に黒い魔法陣が発現した。

「これは……」

あの空へと伸びる黒い光と同じ光だ。

「この魔法陣は精霊城への扉を開く物だ。後はエリーの血を加えれば完成する。」

アリスは命と引き換えに新たな神になるんだ！」

「ふざけた事を！」

怒りを吐きながらも頭の一部では冷静に冷静に周囲の魔法陣を観察する。

どうやらこの魔法陣はアリスの魔力を起点にイーグレット自身が展開しているみたいだ。

詳しく調べる余裕は無いが、魔力の強制吸収と私の知らない未知の魔法が発動している。

未知の方はおそらく奴が言っている精霊城とやらへの扉を開く魔法だ。そして強制吸収がアリスの魔力を吸い取っている魔法だろう。ならば……魔法陣を制御しているイーグレットを倒せばこの魔力吸収は止まると言う事だ。

「システィア、依頼よ。アリスを守って」

「……私は高いぞ。必ず生きて払え」

「ええ」

アリスをシスティアに預けた私は、フリーユゲルを手に前にお出て、左手に魔力を集める。

「神器【暴食の魔導書】」

私と対峙したイーグレットは嬉しそうに両手のシャムシールを交差させて踏み出す。

「はっはっは！」

「【炎壁】」

私とイーグレットの間を業火の障壁が遮るが、イーグレットは一切速度を落とす事なく炎の中に飛び込み、一刀で炎を切り裂きながら突き抜けた。

「【暴風】【雷撃】」

続いて放った魔法もイーグレットの神器で斬り払われる。

「魔法の切断……違うわね。魔法を構成している魔力自体を斬っている！」

魔法により引き起こされた現象ではなく実体がない魔力を斬っていると言っことはそれがあの神器の能力か。

「神器【強欲の魔導書】」

魔力を斬れるなら暴食の魔導書は相性が悪い。

私は強欲の魔導書に収納している物の中から剣を取り出す。

魔法武器では無いが、非常に上質な剣だ。それを斜めに構えて右手のシャムシールを受け流し、流れる様に繰り出される神器による二撃目を屈んで躲し、フリーユージェルで脚を払う。

イーグレットがフリーユージェルの刃を砕く様にシャムシールを突き下ろしたので、フリーユージェルを止めて体を反転、その場で転がる様に立て斬りに切り替える。

【縮地】で後退したイーグレットは神器を掲げる。

「神器【弓張月の夜】」

シャムシール型だったイーグレットの神器が形を変えて弓となる。

「二つ目の神器」

いや、私の【七つの魔導書】と同じ複数の形態を持つ神器か！

イーグレットは矢を番える事なく弦を引く。すると周囲の魔力が光の矢となり放たれた。



## 月と魔導書

イーグレットが放った光の矢は通常の矢とは比べ物にならない速度で飛来する。

ただの矢ではなく神器の効果によって生成された物。性質が不明である以上、斬り払うのはリスクが高い。

【強欲の魔導書】を【暴食の魔導書】に切り替える。

「【疾風強化】」

風属性の身体強化魔法を使う。無属性の魔法より速度に特化した身体強化魔法を使った上に【縮地】でその場を離れる。

すると直前まで私が居た場所が炎に包まれる。

やはりただの矢ではなかったか。

イーグレットの魔法適性は炎属性、おそらくヒルデの【泡沫の蝶】の様に魔法を込める事で効果を高めるタイプの神器だろう。

イーグレットは回避した先の私に再び光の矢を放つ。

今度は複数。連射も出来るのか。

雨の様に撃ち出される矢を【縮地】と体術を織り混ぜながら躲し、避けられない物だけを同属性の魔法をぶつけて込められた魔法が発動しない様に打ち消す。

「同量、同属性の魔力で魔法の構成を崩壊させたのか。器用な事をするね」

楽しげなイーグレットは更に矢の数を増やす。

アリスやシスティアに流れ矢が行かない様に気にすると如何しても行動範囲を制限されてしまう。

イーグレットもそれはわかっているのか、次第に逃げ道を塞がれてしまう。

「キミのその神器。実に素晴らしいね。だが、その性能には限界がある。

【暴食の魔導書】と言ったかな？ 能力は他人の魔法をコピーする。それも適性のない属性の魔法までコピー元の術師と全く同じ性能で使え、連射も可能。

強力な能力だが……その神器は魔法を連続で放つ時にタイムラグが有る。

見た目に派手な魔法や、攻撃範囲の広い魔法で上手く誤魔化している様だが、実際には完全な連射では無く、魔法と魔法の間に約5秒の間隔が空くのだろうか？」

バレている。

【暴食の魔導書】の欠点。今のようなギリギリの戦いの中ではこの数秒は大きな隙になる。

イーグレットが弓を引き絞り、面制圧する様に私の逃げ道を塞いだ。

……ダメだ。間に合わない。

「【氷壁】」

仕方なく分厚い氷の壁を作るが、突き立った矢が次々に爆発して碎かれる。

「うぐっ！」

爆風で飛ばされ壁に叩き付けられた肺の空気が吐き出されて一瞬動きが止まる。

今度は炎魔法ではなく爆発魔法か。  
地面を転がる様に追撃の矢を躲す。

もう、魔法を打ち消す余裕は潰されてしまった。

その上、私が攻撃として放った魔法を今度はイーグレットが発動時の構成の甘いタイミングで射抜き破壊する。魔法発動の順番を見切られている様だ。

「ほらほら、どうするエリー？」

「……こうするわ！」

そう言うイーグレットに向かって【暴食の魔導書】のページ2枚を破り取って飛ばす。

「【蒐集開放：白炎】 【蒐集開放：岩棘】

月と魔導書（前書き）

書籍版ブチ切れ令嬢、h jノベルス様より、本日発売です。  
（．．．）ノシ

## 月と魔導書

炎と岩が同時にイーグレットに襲い掛かる。

【蒐集開放】は【暴食の魔導書】の奥の手だ。

魔導書のページを破り取る事で私の神器に記録されている魔法を発動させる。

この方法なら複数の魔法を完全に同時に発動出来る。加えて、魔法を発動する為の魔力も消費しないと言うオマケ付きだ。

ただし、一度【蒐集開放】した魔法は魔導書の記録から削除されてしまう。

「【蒐集開放：風刃】 【蒐集開放：炎刃】 【蒐集開放：雷刃】 【蒐集開放：岩刃】」

「ちっ！ 【三日月の夜】」

四方から放たれる各属性の刃の同時攻撃を神器を切り替え、【炎刃】を斬り払う事で躲す。

「厄介だね、その能力はおそらくコピーした魔法を消去する代わりに発動時の連射の制約を無視できるってところかい？」

「黙りなさい」

「っ」

イーグレットは足下に落ちている紙切れに気づく。私の【暴食の魔導書】の1ページだ。

「【蒐集開放：神の雷】」

「ぐううう」

「加えて破り取ってから発動のタイミングは私の自由よ」

雷を受けて動きを止めたイーグレットの懐に踏み込み、肘を打ち、掌底で顎を狙うが、顔を逸らして避けて反撃にと蹴りを受ける。弾き飛ばされた私だが、受け身を取り直ぐに体勢を立て直して【縮地】でその場を離れる。すると間髪を入れず私が立っていた場所の床が砕け散る。

見ればイーグレットが地面に叩きつけたハルバードを振り上げた。また別の能力か。おそらくユウと同系統の能力。純粹に破壊力の高いタイプだろう。

「はっは！」

イーグレットはニタリと笑みを浮かべて砕けた床石を蹴り上げ、手にしたハルバード型の神器で砕き、無数の礫を飛ばす。

私への射線を塞ぐ様に氷柱を造り礫を防ぐが、イーグレットは放った礫を追う様に駆け、鉄を上回る硬度の私の氷を神器の一振りで砕いた。

不味い！ 間合いに入られた。この距離では魔法より武器の方が早い。

神器を持つイーグレットの腕が掠れるのを目にして、体は反射的に防御に動く。だが、今は防御に使える様な剣を手にしていない。それ故の失敗。他に方法が無かったとは言え、私は判断を間違えた。「これは悪手だわ」

私が咄嗟に掲げた【暴食の魔導書】にイーグレットのハルバードの刃が突き刺さっていた。

## 月と魔導書

私は【暴食の魔導書】に魔力を込めてみるが、発動しない。

神器は魔導具とは違い、使用者の魔力によつて具現化されているので、多少傷がつこうとも効果が発動しないなどと言う事はなく、一度消して再び生成すれば破損は修復される。しかし、【暴食の魔導書】は発動しない。ならばこれは……。

「……魔力の阻害効果」

「正解だ。俺の【半月の夜】の効果は斬り付けた物の魔力の流れを阻害する。魔導具を斬れば破壊し、人間を斬れば魔法を封じ、そして神器を斬れば効果を阻害する」

イーグレットは得意げに自身の神器の効果を語る。敵に自らの手の内を明かす悪手に見えるが、相手はイーグレットだ。一見すると理性を保っているのかと疑いたくなる今の彼だが、全ては私を倒す為の布石である可能性を捨て切れない。人間を斬った時の効果が魔法を封じると言っているが、最悪、魔力自体が操れなくなるかも知れない。そうなれば神器の生成どころか、身体強化も使えなくなる。あの神器は危険だ。

私は【暴食の魔導書】を魔力に戻して霧散させ、魔法で作り出した二振りの氷の剣を両手に構えた。

あの神器の効果の及ぶ範囲も不明だ。もう一度神器を生成して効果が発動出来るのか？ 別の魔導書も効果を封じられているのか？ 検証している暇も余裕も今はない。

「あつはつはつは！」

呵呵大笑の声を上げるイーグレットは、ハルバードを振り上げながら私との間合いを詰める。牽制で放つ氷の矢は急所に当たる物だけを斬り払い、瞬間間に肉薄したイーグレットが頭上高く掲げた刃を振り下ろした。その刃は咄嗟に交差させた氷の剣を最も容易く打ち砕き、私の肩から腹に掛けての肉を抉った。

「エリー！」

今まで意識の外に置いていたシスティアの叫ぶ声が聞こえる。不味い。集中が切れたか。

自身から流れ出る血で赤く染められた床にひざを突く。体が急に重くなり、背骨の代わりに氷柱を入れたかのような気がして、全身が凍える様に寒い。

私の前に立つたイーグレットがいつの間にかハルバードの神器からシャムシールの神器に持ち替えており、それを満面の笑みで振り翳していた。

その刃の光とイーグレットの瞳の狂気が私に与えた感情は恐怖だった。

ブライトとの戦いやフリードの成れの果てを相手にした時にも感じなかった感情だ。コレが、自らの復讐に多くの民の犠牲を厭わなかった私への罰と言う物なのだろうか？

そうしてシャムシールは私の首へと振るわれた。



月と魔導書 (前書き)

お久しぶりです。仕事が落ち着いたので活動を再開します。  
” ( ) ”

私の首に振り下ろされたシャムシールだが、その刃が私の首を落とす事はなかった。直前で割り込んだ水の球が水蒸気となって私とイーグレットを分断した。驚き視線を遣ると、システィアに支えられたアリスがこちらに向かって手を差し向けていた。

「アリス！」

「マ…… ママ……」

「ちっ」

怯んだイーグレットに向かって氷の礫を放つが、それを意に介さず再びシャムシールを一閃する。私はその斬撃により肩を深く斬りつけられるが、何とか致命傷は免れる。

剣も魔法も使う余裕が残っていない私は、握りしめた拳をイーグレットの頬に全力で打ち込んだ。

「つく！ 往生際が悪いぞ！」

「当然よ」

振り下ろされるシャムシールの柄を握るイーグレットの腕を片腕で受け止め密着する様に間合いを詰め、襟首を掴み胸を腰に乗せる様に投げ飛ばす。

「ぐっ！」

地面に叩き付けられたイーグレットはその勢いを殺さずに、寧ろ勢いを付ける様に跳ね私から距離を取る。

「【縮地】」

足に込めた魔力を爆発させる様に地を蹴りイーグレットを追い、体を回転させる事で遠心力を加えた拳を打ち下ろす。

「【新月の夜】」

イーグレットは神器を盾に変えるが、私は拳が当たる前に止めて代わりに蹴りを食らわせる。どの様な能力が隠されているかわから

ないので、盾には触れないよう襟首と左腕を掴み地面へと叩きつけた。

「【暴食の魔導書】」

私の左手の神器が生成され、その中から素早く数ページを破り取り投げ捨てると同時にその場を離れる。

「【蒐集開放：新緑の縛鎖】 【蒐集開放：封魔の枷】 【蒐集開放：極光檻】」

地面から伸びたイバラがイーグレットの全身を巻き取られ、魔力を封じる呪いを受けて神器が消失、物理的な攻撃に強い光の檻で閉じ込めた。【暴食の魔導書】に記録されている中でも最高位の拘束魔法だ。どの魔法も発動までにタイムラグがあるので普通に使っても避けられるだけだが、格闘戦で作った僅かな隙に捕えることが出来た。魔力を封じた上で拘束し堅牢な檻に閉じ込めたのつで自力での脱出は不可能だろう。本来なら即座にトドメを刺すべきなのだが、今は無駄な魔力を使う事は出来ない。

「アリス！」

私はシスティアに支えられてぐったりとしているアリスの下に駆け寄った。

イーグレットの魔力を封じた事でアリスの魔力を吸い取っていた魔法陣は消えているが、重傷を負い魔力を奪われている状態で私を助ける為に魔法を使った為か、既にアリスの魔力はほとんどなくなっていた。

イーグレットはアリスが人工的に作られた精霊だと言った。精霊とは意識を持った魔力とでも言える存在だ。そんなアリスがすべての魔力を使ってしまったのなら、その先に有る運命は考える間でもない。

システィアからアリスの体を受け取るが、まるで重さを感じない。

「マ……ママ……」

「アリス！ しっかりして。今魔力を」

私は魔力を送るが、アリスは魔力を吸収することが出来ず、送っ

た魔力は霧散する。

「……………」

最早言葉を話す事も出来ないアリスを抱えた私にシスティアが苦痛を堪える様な顔を向ける。もう無理だと、どの様に伝えるかと悩んでいる顔なのだろう。

そんな事は言わせない。

私は認めない。

残り少なくなった魔力を振り絞り、凝縮させる。

「神器【憤怒の魔導書】」

## 壊れた魂

【憤怒の魔導書】は私の神器【七つの魔導書】の一つだ。能力は世界改竄の記録。世界の理を書き換える能力。

通常、神器は習得すると自然とその能力を理解するものだ。しかし、この【憤怒の魔導書】の能力を完全に理解する事は出来なかった。そもそも世界を改竄するなど、人間の身に許される領分を超える行為だ。失われて行くアリスの命を繋ぎ止めるのに、どれ程の代償が必要か、私の全てを支払っても足りないかも知れない。それでも……。

私は最早重さを感じないアリスの体を抱き締めながらありつただけの魔力を魔導書に込める。

視界がだんだんと曖昧になり、私の意識は真っ白に染まった。

どのくらいの時間そうしていたのだろう。気がつくと私は一人、一面真っ白な空間に立っていた。

「此処は……？」

『此処は人界と神界の境界です』

不意に聞こえた声に振り返ると神々しい光を纏った女性が立っていた。

「貴女は……」

彼女が何者なのかを尋ねようとしたが、途中で言葉を止めた。答えを聞くまでもなく理解したのだ。私はその場に膝き頭を垂れた。

『面を上げなさい。エリザベート』

「はい」

許しを得て顔を上げる。目の前の女性は明らかに人間では無い。人間の姿をしているが、その全身から発せられる神々しい気配は女性の正体を否応なく理解させられる。

## 女神

その存在を信じていなかった訳ではない。天界や魔界など、この世界とは違う世界が存在している事は知っているし、私自身も一応女神様を信仰するイブリス教の信者だ。しかし、まさかこうして女神様本人と相對する事になるとは思っていなかった。

「女神様……一体どうなっているのでしょうか？ 私は娘を助ける為に神器を使つたはず……」

『はい。その件で貴女を此処に招いたのです。取り敢えずお座りなさい』

女神様がそう言うのと同時に私の目にテーブルと椅子が現れ、次の瞬間には湯気を立てる紅茶と焼きたてのクッキーが並べられた皿がテーブルの上に置かれていた。ほんの少し警戒したが、この様な超常の力を持つ神を相手にその様な事は意味がないと理解して椅子に腰を下ろした。

そして私は気になっていた事を尋ねた。

「私は死んだのでしょうか？」

『いいえ、貴女がこの世界の理を改変しようとしていたので時間を止めてこの世界に招きました』

「それはつまり、女神様に置かれましては私が娘を助ける事を許容出来ないと言う事でしょうか？」

女神様の返答によつては私は到底勝ち目などない戦いを挑まなければいけない。

『確かに不用意に世界の理を変える事は許されません。ですが一人の蘇生くらいでは世界が壊れる事はないでしょう』

「では！」

『しかし、貴女の力ではアリスの蘇生は叶わないでしょう』

「そんな」

『これを見なさい』

女神様が手のひらを差し出すとその上に浮かぶ小さな光の球があった。

『これはアリスの魂です』

「え」

私は背筋が冷たくなった。アリスの魂はひび割れ、今にも消えそうなほど弱々しい光しか放っていないかった。

『普通なら人間の魂がこれ程傷つく事は有りません。しかし、アリスはその存在を精霊に変えられてしまった事で魂に大きな負担を受けていたのです。貴女の【憤怒の魔導書】と言う力は自身の魂の力を消費して世界を作り変える力。本来、人間に扱える力ではありませんが、貴女はイブのカケラを持つ者。故にその力が目覚めたのでしよう』

「イーグレットも言っていました。そのイブのカケラとは何なのでしょうか？」

『イブのカケラとは私の魂の破片。人の身から精霊に、そして古の神々のお導きにより天界へと招かれた私の魂からこぼれ落ちた力の一端です。力は輪廻の輪に宿り、適合する人間の魂と融合して巡っていました。貴女の魂にはその力が宿っているのです。それも多くのカケラの中でも特に大きなカケラです』

「女神様の力が私の中に……その力を使ってもアリスの蘇生は叶わないのでしょうか？」

『既に貴女の魂はソレが叶わない程に濁り傷ついているのです』

「わ、私の魂が……」

『ええ、一度その目で見た方が理解できでしょう』

女神様が手を向けると、私の胸の内からアリスの物よりも一回り大きな光の球が現れた。しかし、その球は欠けており、光は一部が黒く濁っていた。

## 選択肢

「これが……わ、私の魂……」

「そうです。生来の貴女は穏やかで心優しい人間だったのでしよう。しかし、復讐に囚われた貴女は本来の自分を見失ってしまった。復讐の過程で無関係の罪の無い者を巻き込む度に、貴女は自分で自分の魂に傷をつけ、濁らせていったのです」

「わ、私は……そんな事は……」

「アリスの様に魂を他者に傷つけられる事は普通あり得ません。本来、魂は何者にも傷つけられない。魂を傷つけ汚す事ができるのは自分だけなのです。本当に人々を巻き込んだ事を後悔した事は有りませんか？ 罪悪感を感じたことは有りませんか？」

「……」

「そうして傷つき濁った魂は次第に精神に影響を及ぼしました。その結果、更に多くの血が流れ、貴女はますます魂を傷つける。アリスと出会った事で緩和されていなくなったら魂はとづくに限界を迎え、貴女の場合は崩壊してしまいました。そうなれば良くて廃人、悪くすれば周囲に死を振りまく狂人となっていた事でしょう」

「私が……」

「貴女はその傷ついた魂では世界の改変に耐えられないでしょう」

「そんな……何か方法はないのですか」

女神様は少しだけ瞑目した後、口を開いた。

「一つだけ方法はあります。しかし、私はそれをおすすめしません。傷付いた貴女の魂でこの方法をとるのはリスクが大きい。それならば今後の人生を静かに過ごして死後、魂を癒し輪廻の輪に戻る方が貴女の為です」

「……アリスも輪廻に戻れるのですか？」



「いいえ。アリスの魂はただ傷ついているのでは有りません。人の魂から精霊の魂へと変質し掛けている状態です。そこまでは私と同じなのですが、アリスの魂では完全に精霊になる事は出来ません。アリスの魂はこのまま碎けて消え去る事になるでしょう」

それでは意味がない。だが女神様は方法は有ると言った。

「ではそのおすすめしない方法というのを教えて頂けませんか？」

「……貴女の魂とアリスの魂を融合させるのです。貴女はイブの力ケラの持ち主です。二人分の精神を維持する事は可能です。ですがその為には精霊へと変化したアリスの魂に合わせて貴女の魂も変質させなければいけません。そんな事をすれば貴女もまた、輪廻の輪を外れ自らの罪に苦しみながらその傷ついた魂で永劫の時を生きる事になります。死によって解放される事も有りません。それでもアリスを救うために自らの魂を差し出すのですか？」

「勿論です」

悩む事なく答えた私に女神様は苦笑を浮かべた。

「分かりました。ではお行きなさい。願わくば貴女の終わりなき旅路が幸福な物で有ります様に」

女神様の言葉を聞き、私の意識は遠のいて行った。

罪の幻影（前書き）

ブチ切れ令嬢2巻、HJノベルス 様より本日発売です。  
”（ ）”

## 罪の幻影

「うう……」

重たい泥の中から浮かび上がる様に意識を取り戻した。

「エリー！」

「気がついたか！」

ボヤけた視界が正常になるにつれて床に寝かされた私を覗き込む人達の顔を理解できた。エルザ、ティーダ、ユウ、システィア。皆、怪我をして疲れている様だが無事の様だ。

「はっ！ アリスは」

慌てて周囲を伺うと隣で横たわるアリスの姿があった。

「アリス！」

私が駆け寄り抱き起こすと、アリスは小さく息をしていた。

「大丈夫だ。エリーが神器を使って意識を無くした後、アリスの魔力の放出が止まって安定したんだ」

「……そう。良かった」

では女神様が言っていた私とアリスの魂の共有は成功したという事か。アリスをそっと抱き上げてみんなを振り返る。

「みんなの方は大丈夫だった」

「ああ、問題ない」

「正体が悪魔だった事には驚きましたがちゃんと始末しましたよ」  
エルザとユウは無事倒したようだ。しかし、ティーダは私からそっと視線を外した。

「わ、私は方は……まあ、判定勝ちってところツスカね」

「ティーダは逃げられたそうだ」

「ち、違うツスよ！ アレは……そう！ 見逃してやったんツスよ」  
ティーダによるとあのアルトロスと名乗る悪魔は、アリスの魔力によって作られた黒い魔法陣が消えた瞬間、もうこの場には用はな

いと言って去っていったそうだ。危険な存在だが今はあいつを追う余力はない。

私達はナイル王国の王都を包囲している者達と合流する為にゆっくりと足を踏み出した。

あの戦いから一ヶ月が過ぎた。

帝都に帰還後しばらく動けないくらいのダメージを負っていたが、ようやく回復してベッドから起き上がる事ができる様になった。ベッドから身を起こして水差しからグラスに水を注ぎ飲んでみると、私の私室のドアが開いて小さな人影が部屋に飛び込んで来た。

「ママ！」

アリスを抱きとめた。アリスは問題なく目を覚ました。流石に衰弱はしていたが、直ぐに回復して元気になって安心した。今のアリスの精神は私の魂の一部によって守られている。女神様は出来ると言っていたが魂の共有によってどんな弊害があるか不安だったのだが、アリスには何の後遺症も残らなかった。

「ママ。ミレイお姉ちゃんがご飯だから呼んで来てって！」

「そう。ありがとう。直ぐに行くからアリスは先に行っててね」「うん」

部屋を出ていくアリスの背を見送りながら私は立ち上がる。そんな私をベッドに……いや、その更に下に引き戻そうとする腕が有る。私の肩を、腰を、腕を掴む血まみれの腕。

『許さない……許さない……』

『私の子供を返して！』

『人殺し！』

『痛いよお！お母さん！』

報復の犠牲にした者達の怨嗟の音が耳の奥から聞こえる。王国は滅びた。これからは帝国に組み込まれる事になるだろうが、政治が

安定するまで、更に犠牲は増えるだろう。

私はアリスと魂を共有させる時、自身の壊れ掛けの魂の綺麗な部分を使ってアリスの精神を保護した。その結果、私の精神を包む魂は穢れ傷ついた物となった。女神様が言っていたアリスに出会わずに魂が完全に壊れた状態に近いのだろう。

「……ごめんなさい」

私は意識をズラし亡者の幻覚を振り払い、アリスの後を追うのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n6981gn/>

---

【web版】ブチ切れ令嬢は報復を誓いました。～魔導書の力で祖国を叩き潰します～

2023年2月7日20時53分発行